收容書目

日本經濟叢書

卷十一

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷十一目次

目次終

解題

考工記管篇

本書は支那周代の官制を記したる周官（太古の最も完備したる政治經濟書）の闕篇、冬官の代りに充てらるゝ、有名の工業書なる考工記の解釋にして、原名は三禮名物解と題するものなり、著者上野義剛、延享年間に稿を脫せずして歿したるを、其友人井口文炳なるもの、之を訂補して出板したるものなり、寬延二年、井口氏の撰みたる序文あれども、其後四年を經て、寶曆二年に出板發行したるものにて、其の今名に更めたる理由は、井口氏の序文に記せり、今著者の原名に就て之を推察するに、本書は上野氏の大著作の一部分にして、氏は單に考工記の解釋のみに止めず、周官全部、若くは又進んで三禮中の名物を、悉く解釋する目的なりしことは、此の書名に據て自ら明なりと云べし

著者上野義剛、通稱は喜右衛門、海門と號す、紀州和歌山の人にて賣藥を業とし、頗る篤學の聞あり、延享元年歿す、年五十九

本書は坊間希覯の書にして、南葵文庫に寫本一部を收藏せらるゝ外、他に多く見聞せざる所なり、本叢書に收載の原本は寶暦壬申（二年）八月に成れる、井口氏匪石齋の藏板本なり

歴代戸口攷

本書は專ら支那歴代の戸口即三代より明に至る迄の戸數及人口を諸書より拔抄して、間々著者の考証を附し、最後に外國の事を附記したるものなり、著者山本格安は、伊兵衛又武平と稱し、寛齋と號す、尾張の雜學者なり、寶暦中に歿したるも、其の生年を詳にせず、著す所は、本書の外に、說文講餘、燕石雜錄、齊東野談等數十種あり

郷遂井田圖說

本書は上中下の三卷（明和年間の著作、享和三年の出板）にて、上中の二卷は漢文にて周官にある郷遂井田の制を詳に圖解し、下卷は之を日本の里法に適用し、假名文にて、彼我對照したるものにして、井田の制度と軍賦の關係等を親切丁寧に論述したるは、此の書の右に出づるものなしと云ふも過言にあらず、然れども支那にすら實行されたるや否疑問に屬する井田法を我日本の封建制度に强ひて當てはめんとして、日本郷遂の圖、日本百里千乘萬乘の圖、日本諸侯伯諸子男封國の圖等を掲げて、之を論述するが如きは、全く空想にして、而かも殆んど附會の說たるを免かれざるの嫌なきにあらず、之を要するに本書は、單に井田の學說を解說したるものとして、最も完備したるものとして、熟讀の價値あるものといふべし

著者齋藤高壽は通稱權之助、芝山と號す、肥後熊本藩の人なり、夙に徂徠の

學を修め、六經皆な注釋あり、殊に三禮に精通し、著す所本書の外に、復古周官十三卷、學校圖說三卷あり、嘗て我國の古禮犬追物の久しく世に行はれざるを概し、犬射儀一卷を著はし、又之を實行に試みて、古禮を復興したる事、天聽に達して、勅賞を賜はるに至れりと云ふ、年五十二高橋の市尹に擢でられ、循吏の聲あり、遂に進んで留守物頭となる、文化五年年六十六にして歿す

倚儉撮要

著者戶田養恬、字は子和、琴山と號す、伊豫大洲の人なり、今其の傳を詳にせずと雖も、蓋藩吏なるべし、本書は其の序文に云へる如く、「人欲無窮、財產有限、以有限財產而徇無窮人欲、苟不節之以制度、則必傷財、財之豐歉、是家之盛衰、俗之貪廉、兵之强弱、世之治亂繫焉、可不愼歟云々」の主意を述べたるものにして、原本は明和七年、著者の嗣子、居正が出板したるものなれども、原版火災に罹り、多く世に傳らざるを以て、天和七年に至り、

源照明なるものが、再版發行したるものなり

算家或問

本書の著者會田安明は、有名なる數學者なり、安明字は子貫通稱は算左衛門、自在亭と號す、出羽最上の人なり、或人云ふ初め關流本多利明の門人なりしが、後關流を非なりとし、更に獨學勉勵して、最上流なる一派を起して、其開祖となり、盛に子弟を教育せりと云ふ、文化十四年、年七十一にして歿す、東京淺草金龍山畔に、一碑あり、題して算士塚と稱す、碩儒龜田鵬齋、文を撰んで碑面に刻す、是れ其門人の建設する所なり、安明算學に關する著述頗る多く、本書の外に算法古今通覽五卷、天生法指南五卷、算法千里獨行二卷等數百部ありと云ふ

本書は名は算家或問なれども、後記數度脊談と同じく、經濟上に於ける種々の事實を記述しあり、殊に貨幣に關する重要の記事少なからざれば、一讀の

價値あるものなり

數度宵談

本書は寶曆十一年に數學夜話と題して、出板したるものを、安永七年に至り、更に今名に改題し、皆川淇園の序文を附して、再板したるものなり、內容は數の濫觴、數學と算學と異なる所以等より、貨幣、度量衡、田法等に至る迄、種々の雜話を問答體に記述したるものにて、就中貨幣を以て、賣買交易を始めたる歷史上の事實の如きは、最も詳に之を記述せり、本書は再板の數度宵談を底本としたれども、編者が別に收藏せる數學夜話の原板本と對照して、精確に校正したるものなり

著者西村遠里は、京都の和學者にして、初め近藤遠里と稱し、池邊淸眞の門に入り、天文曆數の學を兼修す、博識にして和漢の學に長じ、著す所本書の外に、雨中問答五卷、居行子前後十卷あり、何れも和漢に於ける、種々考證

的の事實を書き集めたる隨筆なり、著者の生死年月は詳ならざれども、安永の頃まで生存し居たる人なりと云ふ

不盡言

本書は主として支那の文法、言語、及我國の和歌等を論じたるものにて、直接に經濟上に何等の關係をも有せざるものなり、然れども人欲の絶對に抑制すべからざる事を論じ、又樂の必要、歌の効用を説けるなどは、經濟學を研究するもの丶、心得置かざる可らざることなり、殊に「淮南子に擧大木者の「呼邪許」といへるを擧重勸力之歌也といへる、春つく時の相歌も、大木をひく時の木やり歌も、古よりあることと自然のことなり」と云へるなど、俗謠の經濟的活動に影響あることを、暗示するものと云つて可なるべしと思はる、乃ち本書を茲に收容する所以なり

著者堀景山、名は正超、字は君燕、通稱は禎助と云ふ、景山は其號なり、藝

州廣島の人にして、儒學に長じ、世々藩侯の儒官となる、寶暦七年歿す、著す所、景山筆記六卷、景山文集十卷、幣の錦一卷等あり

社倉考

本書は著者が雲州松江侯に仕へし時、同藩の爲めに著述したるものにて、「社倉の法」と「社倉取扱心得の事」との二項に分つて、社倉の必要を略說したるものなり

著者宇佐美灊水は、上總夷隅郡の人にして、通稱惠助、子廸と字す、少くして江戸に出でゝ、荻生徂徠の門に入る、徂徠の歿後、蘐園社友と研鑽刻苦して、遂に大儒となる、晩年出でゝ雲州侯に仕ふ、安永五年六十七にして歿す、著す所は、本書及下記事務談の外に、論語考六卷、辨道考、辨名考各一卷、輔儲篇四卷、其他數部あり

事務談

本書は著者が雲藩の國老小田切備中、同大野舍人、及朝日丹波へ宛て、藩世子の教育及一般國政に關する意見等を開陳したる書面、及諮問の答案を拾集したるものなり、著者の意見の大要は、例の如く儉約を專一として、奢侈を戒むるに過ぎざるも、和漢の諸書を引證して、少しも忌憚なく、思ひの儘に所見を披瀝したるは、頗る痛快なりと云ふべし、本書所藏の文書は、皆寶曆明和年間の作なり

著者宇佐美灊水の略傳は上記「社倉考」の下にあり

價原

數年前、河上博士(肇氏)が初めて本書を學界に紹介せられしより、日本に三浦梅園なる卓識の經濟學者あり、「價原」なる比較的完備したる經濟書あること

は、今や斯學に志ある者の、一般に認識する所となれり、本書の內容は、著者の序引に依て之を推察すれば、全く一ツの賃銀論の如くなれども、其の實廣く貨幣及物價を論じたるものにして、書中往々歐米の正統派經濟學書の中に云へるが如き學說の散見するあるは、又頗る珍とするに足る、例へば「金銀は諸貨に易へて用るを以て、其用とする………其用、舟車に近きもの也」と云ひて、金銀貨の本能を明にし、又「金銀多ければ物價貴し、金銀少ければ物價賤し、物價賤きは金銀の貴なり、物價貴きは金銀の賤きなり」と云ひて、粗笨なる貨幣數量說を唱へ、又夫の有名なるグレシャム法と、同一の理法を說きて「悪幣盛に世に行はるれば、精金皆隱る」と云へるが如きは、兎に角我國維新以前の學者に在ては、稀れに見る所の卓說と云ふべし

著者三浦梅園、名は安貞、又は晋と云ふ、梅園は其號にして、別に洞仙、攣山、二子山人等の號あり、享保八年、豐後杵築に生れ、寛政元年歿す、年六十七、室鳩巢の高弟、綾部絅齋に從遊して、諸子百家の學を修め、旁ら地理天

文を研究して、大に得る所あり、天明中藩侯の國事諮問に應じて、大に優遇せられたるも深く自ら蹈晦して終身仕へざりしと云ふ、著す所は、本書の外に、敢語、贅語、玄語十數卷、養生錄一卷、歸山錄一卷、其の他詩文集等數部あり

春秋社日醮儀

本書は本朝漢土農業の始り、并に保食神の由來。五穀御祖神、土御祖神、飯生大明神の由來等。二十ケ條に分ちて、我が神祇の稼穡に大功あることを詳述したるものにて、天明元年に於ける著者の自序あり、蓋其頃の作なるべし著者大江匡弼は、文坡又菊丘と號し、京師の人にして、寛政七年歿す、年六十八、小說家を以て知らる

經濟問答

本書は、政治經濟上種々の問題を設けて、之に答へたるものにて、其經濟上に關する箇條は、世間驕奢に流れて、士風亂れ、農民窮するに至りたる惡弊を矯正すること、農民業を疎んじ、都會に集つて、田地を荒廢に歸せしむるを匡救すること、貧民を救助するに就ての方法等を簡單に述べたるものなり著者は何人なるや詳ならず、本書の原本は京都同志社大學圖書館に收藏しある古寫本にして、それには熊澤了海の署名あれども、熊澤氏の著作にあらざる證據には、文中に「近來荻生氏の著すと云ふ、政談といふ書を見たり」云云とあり、徂徠の政談は、享保六七年頃の作にして、熊澤了海はそれより凡三十年前、卽ち元祿四年に死したる人なれば、此の人の著作にあらざること明白なり、但編者の記憶する所にては、大館氏晴と云ふ人の著述に同名の書あり、或は此書にあらざるかとも思へども、確かならず

利權論

本書は商人が諸侯士大夫に金銀を貸付けて、利權を專占する事を非なりとし、之を救治するの方法として、諸侯士大夫に對して一切官府より低利の貸付けを爲して、商人の私貸を禁ずべしと云ふの主意にて、之を實行するには、先づ下士に對する貸出より始めて、漸々中士上士に及ぼし、遂に卿大夫諸侯にまで、官金を貸出すの方法に依るべしと論じ、又貧農を救濟するにも、私貸を禁じて、官金を低利に貸付くべしとの主意にて、其の目的たるや頗る是なりと雖も、上下共に窮迫を訴へつゝありし德川時代に、斯る貸付法は、果して實行の出來ることとなりしや否、疑問なりと云ふべし

本書に「君の衣食の類、及臣下に賜らする物は、各々其所の土產を貢せしめて、之を用ふる時は、萬物其本より買ふの理なれば、價賤して品物能く……且國體もよかるべし」など云へるは、今日の國產獎勵の主意に吻合するものならん

著者遠山景賢は納府吏とあれば、勘定方の輩なるべきか、其の傳未だ詳なら

ず。本書の著作は、寛政五年三月なり

貨殖論

本書は標題の如く、貨殖の道を論じたるものにて、著者の知れる富豪が、一體貨殖の事は、學問する人々は、如何に沙汰するやの尋ねに、著者の心得居る廉々を、詳細に答へたる意見書なり。初めに大禹謨、及易の繫辭等を引きて、貨財は聖人が天下を治むるに重要のものなる事を述べ、それより利と云ふ事に論及して「後世利を取ることを賤め候は、孟子の僻見より始り、いかにも手段よくすら〳〵と、金銀の利廻りを出し候て、其餘分を以て、人を養ふ事願くはほしき事に候、但易に申す利と、聖人の利用厚生と申事は、當世の利足を取る事には之なく、人の勝手をよくして、世を直す計なり、夫れより轉じて利足を取て人を養ふも、大聖人の周公旦の泉府を立て、民に錢を貸して、利を取しに始り申候、やはり聖人の法にて候」と、說き出して、漢儒に多く見

ざる所の貨殖論をなし、尚進んで富を造るには、時と命とを知るの必要を詳述する等、種々の心得方を、支那太古の事實に據て、親切丁寧に說明したるは、頗る面白き談柄なるが、就中漢儒に不似合なる奇抜の說は、宛孔氏の貨殖法にて、それは或る場合には、大に門戸を張て、其の邸宅車馬を壯にし、以て大名などと交際を爲して、豪奢を極むるも、結局之が爲めに利を得ること、しみたれたる悋き者より、比較的多大なる事を述ぶるが如き、又金持を騎虎の勢に比し「金銀は虎の如くにて候、夫にのりて勢を振ひし者の、一旦夫を下て候へば、忽ち喰れ候樣になりて、勢ひ悪しく、評判も下るもの也――一度名を發し候人は、其の名を下げ申す事悪しく候、名を下げ、身を引候はゞ、下りて虎に喰れ候樣にて、段々身の上悪しくなる者に候」と述べ、又戰國策にある、兎三窟を掘ると云ふ事を引き、金持は兎が狩人に逢ふて、逃場を失つた時の用意に、隱窟を掘つて置く樣に、平生豫め非常の場合の準備なかるべからざることを說き、「金持は必大損か、災に逢ふもの也、今の通りの

繰合にて、いつ迄もよかるべしと思ふは、油斷にて候。夫故兼て六ツかしき時の逃場を、あまた拵置也。其窟の掘樣、遁れ場の鹽梅は、其人の器と、身代の大小に由り申候」と云ふが如きは、皆大に興味ある話說と云ふべし、其他金持になるには先づ第一に人を知らざるべからざることを述べ、世に名高き者、才ある者、勢ある者の三者とは、必交際を厚うせざる可からざる事を論ずるが如きは、何れも儒者の貨殖論としては、一風變つたる奇說なり

著者畑中太冲は、名は盛雄、字は冲卿、荷澤と號す、仙臺の儒なり、爲人傲慢にして、奇行多し、嘗て江戸に來り、當時の大儒、井上金峨を訪ふ、金峨適ゝ門生を會して、經を講ず、太冲隣室に在つて、講義を聽きながら、時々大聲を發し、「先生誤れり」と叫んで、一座を驚かしたることあり、又一日、蒲生君平來り、刺を通じて來意を述べ、曰く、小子夙に先生の大名を聞く、願くは一たび拜顏の榮を賜はらば幸甚なりと、太冲乃ち儼然威儀を整へ、出でゝ上席に端坐して、君平を引き、一語を發せず、仰て煙管を吹く數次、謂て曰く、

汝吾が面貌を觀んが爲めに來ると云へり、吾旣に汝をして縱觀を得せしめ了す、汝當さに疾く歸るべしと、云ひつゝ起つて內に入る、君平茫然自失して去れり、又林子平、海國兵談を著して、得意の色あり、太冲に就きて、序文を乞ふ、太冲曰く、是れ謗書なり、我れ吾が文を汚がすに忍びずと斷じて筆を執らざりしと云ふ、從來太冲の名は學者間に多く知られずと雖も、其の當時に重ぜられたること、如上の事實に徵して推知すべし、享保十九年生れ、寬政九年歿す、年六十四、著す所本書の外に源氏藁筆、及藁言數十卷、詩文和歌集若干卷あり

正享問答

本書は田制、貢納、其外治民に關する事を、詳細に論述したるものにて、正德年間、篠山侯が京尹たりし時、諮問せられたるに答へたる事柄、及其後十數年の後に、小濱侯が同じく京尹となつて就職せられたる時に、同樣の事柄

を尋ねられたるに付、答申したる件々を筆錄したるものなり、著者の序文には、享保十六年とあれば、本書は其頃に成りしものなるべし

本書は治民に關する此種の論文中、最も見るべきものなれども、原寫本甚だ不完全にして、誤字脫文尠なからず、往々全く通讀し難き所あり、依て一二他の寫本、及日本文庫本等を、對照校訂したれども、猶ほ不完全を免れざるは、編者の遺憾とする所なり

著者三輪執齋の傳は、本叢書第六卷救餓大意の下にあり

大正四年四月　　瀧本誠一

解題終

考工記管籥

上野義剛著

考工記管籥

原夫今冬官、非眞冬官、其亡既久矣、秦燔之後、不可復見焉、漢興挾書律除、獻書路開、而山巖屋壁之隱藏悉出、武帝時河間獻王好古愛學、以金帛募書得周官、獨闕冬官一篇、王購以千金而不得、遂取考工記以補之、合成六篇奏之云、周官之出最後者、以其亂龍特甚之故也、河間所獻、一入祕府不傳人間、雖禮家之儒、莫得見焉、逮成帝時、書頗亡散簡脫文缺、使謁者陳農、求遺書於天下、詔光祿大夫劉向及子歆、校理祕書、始得列序、著于錄略、當時衆儒、共排周官以爲非是、而劉歆獨不信其說、後鄭玄撰斥衆家之論難、而爲之訓詁、於是乎周官不復亡、傳於今世矣、周官蓋雖非姬公之官政、能識古制者所錄、使數千載之下獲覽古先聖王之典法、實劉鄭之力也、余謂、考工記殆邃古之書、而周人輯之歟、非特周制而已、雖虞夏商可推考矣、以何言之、夫陶人旊人所爲、甗甑鬲庾簋豆之屬、皆埏埴之器、有虞氏尙陶、乃河濱之物耳、匠人以世室重屋明堂對言、三代之制度乃在斯也、其文辭雄健、高雅踰于五官、以反爲眞、大巧若拙、蓋出乎齊人之手、徵諸方言、終古之爲常、終葵之爲椎、可一以徵百矣、昔者吾友上野翁、居恒言古今名物之異也、苟不明察、則毋以言、余服膺其言也尙矣、翁之爲人、溫柔寛容、淸廉不羈、好學之篤、言餘足尊、未嘗受教於世、所謂先生者、凡經史諸子百家之書、莫弗盡講、而理彩緝

レ光、曾懐ニ二酉一、而如レ不レ識ニ一丁一、可レ謂ニ君子之人一也矣、延享年間下レ世後、得ニ茲書於其篋中一、題曰ニ三禮名物解一、竊意起ニ稿於冬官一、未レ幾罹レ疾、絕毫玉人而廢レ志者也、余妄以レ蒙ニ錯愛之誼一、不レ忍レ令下與ニ艸木一同腐上考ニ訂之一以上木、間亦私加ニ臆見一、恐猶レ鼓レ琴也、有ニ不レ覂レ宮則失下商、習而不レ揮、自全ニ五音之愈一已矣、考工奇古、往往下レ鑽、豈獲レ不ニ搏レ鍵而輙排上之耶、故今更名曰ニ管籥一云

寬延己巳二月

弱山井口文炳仲虎氏撰ニ於所居之匪石精舍一

考工記管籥卷上

南紀　上野義剛著

友弟　井口文炳補

兵庫六等之數

文炳按ズルニ、兵車ハ戎車ナリ、大小ノ別アリ、詩六月ニ云、「元戎十乘、以先啓行、」元ハ大也ト訓ズ、大戎ハ軍前ニアリテ、敵陣ヲ啓突スル車ナリ、伯也執殳、爲レ王前驅スト云卽チ是ナリ、小戎ハ大戎ノ後

ニ従行車ナリ、故ニ鄭康成云、「小戎群臣之兵車、孔穎達曰、言ニ群臣在ニ元戎之後一故也」一然ルニ兵車大小ノ制所見ナシ、車人ノ大車ハ兵車ニ非ズ、載任ノ車也、司馬法ニ云、「夏后氏曰鉤車、殷曰寅車、周曰元戎」トアリ、然レバ元戎ハ天子ノ兵車ニテ、小戎ハ諸侯ノ兵車ナルベシ、「元戎十乘以先啓行」ハ、周ノ宣王北伐ノ詩ナリ、小戎俴收五楘梁輈ハ、秦ノ襄公西討ノ詩ナリ、徵トスベシ

一　車軫四尺トハ、地上ヨリ軫ノ上面マデ四尺也、軹ノ崇サ三尺三寸ニ、軫ト轐トノ七寸ヲ加ヘタル也、下ニ詳ナリ、既建而迤、コノ一句戈ヲ云、迤ハ斜ニヨセ立ルナリ

一　軫ハ輿後ノ横木ナリ、輿ハ車中ニ物ヲ載スル處ナリ、總名也、軫ハ横ナリ、輿ノ下ニアリ

一　戈殳戟矛皆插ニ車輢一」ト鄭注ニ云ヘリ、輢ハ輿ノ左右ニアリ、疏ニ、「置ニ於輢之上下一」ト云リ、左ニモ右ニモ、各上下アルベシ、カタヘニノミ置ベキニ非ズ、分チテ左右ニヲクナルベシ、經ニハ崇キコトノミヲ述タリ、左右ノコトヲ不レ云、今別ニ圖ヲ出スモ、崇サヲ見ルバカリノ圖ト知ルベシ

一　輪ハ總名也、軹ハ地上ヨリ轂ノ中心マデ、三尺三寸アリ、コノ所ヲ軹ト云、故ニ注ニ轂末也ト云リ、注ニ軹轊也ト、字書轊ノ字ヲ注シテ轊ニ同ジト云ヘリ、轊音位轂末軸頭ト云ヘリ、轊ハ軎ト同字ナルベシ、軫ハ後ニアリ、轐ハ軸ヲ貫ヌク木ナリ、輿下ニアリ、軸ノ端ハ轂中ニ入ナリ

一　加ニ軫與一レ轐焉四尺也」トハ、軹三尺三寸ニ七寸ヲ加フ、此七寸軫轐二物ノ崇サ也、軫幾寸轐幾寸ト分チ考フベシ

文炳考フルニ、軫ハ輿下ニアリ、闊一尺一寸ニテ、方面二寸七分五也、轐ハ軫ヨリ下ニ附ケリ、其尺寸經ニモ注ニモ見ル所ナシ、然レドモ軫轐二物ノ崇サ七寸ノ內、軫ノ崇サ二寸七分五ヲ除ケバ、餘四寸二分五轐ノ崇サ也ト知ルベシ、轐ハ軸ヲ背ク木ナリト云ヘドモ、軸ヲ全ク含ムモノニ非ズ、軸圍ノ半分ヲ含ムナルベシ、軸ノ圍ハ一尺三寸二分ニテ、徑四寸四分也、轐ノ一名伏兎ト云、疏ニ伏兎尾後上載ニ車軫ニト云ヘルハ誤ナルヘシ、下ニ詳ラカナリ

輪人

一　轂ハ輪ノ心ナリ、輻ハ輪ノ骨也、三十箇アリ、牙ハ輪ノフチニテ輻ヲ持ツモノ也、是輪ノ總カマヘナリ、一木ヲ揉デ作ル

一　幬ハ幔轂之革也ト注セリ、轂ヲ外ヨリ卷テ蓋フナリ

一　綆ハ輪箄也、牙ノ外邊ヘ添テ、牙ノ損セザル爲ニスル也、輻ノ端牙中ニ入ル故、其穴ノ損ゼザルヤウニ防グ也、木トモ竹トモナシ、寸法ハ三分寸之二ト下經ニアリ、雙輪トモ外邊ニアルベシ

一　蚤ハ輻ノ端ノ牙ニ入ル處、菑ハ輻ノ端ノ轂ニ入ル處ナリ、不匡ハ子ヂレヌ也

一　轂長サ三尺二寸也、是ヲマワリニシテ、徑一尺六分六六有奇ヲ轂ノ徑トス、此三尺二寸ハ輪ノ面漆ヲヌリタル所、六尺四寸ノ二ツ割也、一輪ニ上ニ一寸下ニ一寸漆セザル故、是ヲ加ヘ見レバ、モトノ六尺六寸ニナル、牙厚ヲ一寸三分寸之二ト見テノツモリ也、牙ノ厚サハ即チ輪ノ厚サ也、此寸法ニテハ輪ノ厚サコトノ外ウスク、兵車ニハナルマジキコト也、疑ベシ

一 牙圍一尺一寸、コレ輪ノ崇サ六尺六寸ノ六分一也、此一尺一寸ヲ三分ニシテ、一分ハ漆セズ、二分ヲ漆ニテヌル也、一分ハ三寸六分六六奇ナリ

一 牙厚一寸三分之二ト注ニアリ、此一寸六分六六ト、内面一寸外面一寸トニ漆セズ

一 以二其圍之防一揹二其藪一トハ、其圍トハ轂圍三尺二寸也、コノ圍ヘ幅ヲ入レ孔ヲ穿ツベシ、此孔ノ數三十アリ、三十孔ヲ三尺二寸ヘホドヨク割合セテ穿ツユヘ、防ト云孔ト孔トノ間ノスキアリ、故ニ孔ノ寸法ヲ不レ言、藪トハ其三十孔ヲ云也、三尺二寸ノ内孔トナル所ト、其間ノスキトヲ程ヨク割合セテ藪ヲ作ルベシト也、揹ハ除也ト注セリ、三十孔ヲ穿ツニ、轂ノ木ヲホリ除ク也、注ニ藪徑三寸九分寸之五トアリ、藪徑トハ孔ノ上ハ口ヲ云ニ似タリ、然レバ三十孔ニテ一丈五寸也、轂圍三尺二寸ニ一丈五寸ノ孔アルベキ理ナシ、故ニ疏ニ轂徑一尺六分六六ノ内ヨリ、三寸五分ヲ積リ出セリ、然レバ此徑ノ字ハ三十孔ノ方ヨリ見レバ、上ハ口ニハ非ズ深サ也、轂ノ全體ヨリ見レバ、徑一尺六分六六ノ内也、轂徑ノ内ニ藪アリ、故ニ藪徑ト云ヘリ、畢竟轂徑一尺六分六六ノ内ニテ、徑三寸五分ハ藪ノ深サニナルト云コト也、サテ此孔ハ四邊ヨリ穿ツナレバ、左右ニテ三寸五分ナレバ、一邊ヨリ見レバ、一寸七分五厘ノ深サ也、モシ一邊ヲ三寸五分ノ深サト見レバ、左右ニテ七寸也、イヅレナラン再考スベシ

文朝考フルニ、以二其圍之防一トハ、轂圍三尺二寸ノ三分一、壹尺六分六六ノコト也、揹二其藪一トハ右ノ一尺六分六六ヲ、幅三十ノ孔ヒロトシテ除ケヨト云コト也、除二分ノ蓋ハ幅ト幅トノ間ニスル也、幅ノ厚サコレニテ知レタリ、幅ノ藪ニ入ル所、厚サ凡二分

半也、甚ウスキモノ也、如レ此ニアラザレバ、孔底ノ輻端聚マリタル處ニテ、輻ト輻トノ間スキナキ也、然レドモ輻ノ廣サ、轂ノ方ニテハ三寸ノ餘アルナレバ、厚サハ三分半ホドニテモヨキナルベシ、輻ノ廣サハ鑿ノ深サニ應ジテ三寸零五ナルヲ以テ、置二其輻一ノ注ニ輻廣三寸半トアルハ、實寸ニアラズ、下ニ詳ナリ、藪徑三寸零五ナルヲ、鄭氏三寸九分寸之五トツモリ出セルコトハ、其圍之阞ハ轂圍ノ三分一ニテ、一尺六分六六ナレバ、輻孔ニスベキ寸法ニ非ザル故、轂圍三尺二寸ノ徑一尺六分六六ノ三分一ヲ以テ、三寸九分寸之五ト注セリ、是鄭氏ノ過謬也、孔ノ深サ三寸五分五トスレバ、左右ニテ七寸一分ナリ、コレヲ轂徑ノ一尺六分六六ノ内ニテ除ケバ、餘三寸五分六六アリ、徑四寸四分ノ軸ヲ貫クベキ處ナシ、藪徑ハ廣サモ深サモ三寸零五ナルコト明ナリ

一　賢軹是ハ轂ノ本末ニ付テ云ナリ、轂ノ内ヲ穿テ、軸ヲ入レテ轉ズル也、本ノ方ヲ大穿ト云、是賢也、末ノ方ヲ小穿ト云、是軹也

一　賢軹ノ寸法、經文簡古ニテ、註疏トモニ又委シカラヌ故、見マガフコトアリ、先經文ヲ說テ明サン、五分其轂之長、去レ一以爲レ賢、コノ長ノ字ニ徑ノ字ヲソヘテ見ルベシ、其轂ノ長ヲ五分ニシテ、一分ヲ去テ餘四分アルヲ賢ノ長トシ轂ノ徑ヲ五分ニシテ、一分ヲ去リ、殘リ四分アルヲ賢ノ徑トスト云コト也、故ニ長ノ字ニ徑ノ字ヲ添テ見ルベキ也、コレ長トバカリアルハ、經文ノ簡古ナル也、「去レ三以爲レ軹」トハ、轂ノ長ヲ五分ニシ、三分ヲ去リ、殘リ二分アルヲ軹ノ長トシ、轂ノ徑ヲ五分シ、三分ヲ去リ、殘リ二分アルヲ軹ノ徑トスト云コト也、一分ヲ去ルヲ、注ニ二分トナスベシト云ヘリ、サテ賢軹トモニ徑モアルベシ、然ルニ爲レ賢、徑長爲レ軹、徑長ト不レ云、爲レ賢爲レ軹トバカリ云ヘルハ、元來賢軹ハ一孔ナリ、一孔ノ内ニテ本ノ方ヲ賢トシ、末ノ方ヲ軹ト名ヲ分タルモノ故、コノ賢軹ノ長ハ、

轂ノ長ニ應ジタルモノナリ、長何ホドト云ベキモノニ非ズ、賢軹ノ徑ハ、兩端ユヘ、何ホドト云テモ然ルベキナレドモ、是モ轂ノ徑ニ應ジタルモノ故、一ツニ見セタルモノニテ、徑モ何ホドト云ハヌ也、注ニ大穿徑八寸十五分寸之八ト云ハ、轂徑一尺六分六六ヲ五分シテ徑ノ內ニテ一分ヲ去リ、餘四分ノ寸法也、小穿徑四寸十五分寸之四ト云ハ、轂徑ヲ五分シテ、三分ヲ去リ、餘二分ノ寸法也、是ハ經文ニ、徑ノ字ハナケレドモ、添テ見タルモノ也、康成ハ能々經文ヲ明ラメタルモノ故如レ此也、サテ轂徑五分ノ一ヲ去リ、賢徑トシテハ、甚大キクテ惡シク、相應セズト見テ、轂徑五分ノ二ヲ去リ、六寸五分寸之二ニテヨシト、下ニ云ヘル也、然レバ注文五分轂長去レ二也ト云ヘルハ五分轂徑トアルベキヲ傳寫誤リテ、五分轂長トアリ、長ノ字ハ徑ノ字ノ誤リト見ヘタリ、疏モ此意ヲ以、詳細ニ明カスベキヲアラク云タルモノ故、何ノ分明ナルコトナクテ、經文ノ意見ヘカネタリ、注金厚一寸左右ニテ二寸ト見テ、賢徑ヨリ二寸ヲ除キタルモノ也、但シ此金ヲ川ユルハ、轂ノサケヌ爲ノ防ト見ヘタレバ、一寸ナリトモ宜シカラン、然ルニ鄭氏ハ今金厚一寸ト云ヘレバ、眼前ニ見テノコトナレバ、一寸ニテ宜シキナルベシ、右賢軹ノ寸法左方ニ出ス

一　轂徑一尺六分六六ヲ五分ニシテ、二寸一分三三也、轂徑ノ內ニテ去リ、餘四分ノ數八寸五分三三、是賢徑也、注ニ從ヘバ、四寸二分六六ヲ去リ、餘三分ノ數、六寸四分是賢徑也、轂長三尺二寸ヲ五分ニシテ六寸四分也、轂長ノ內ニテ去リ、餘四分ノ數二尺五寸六分是賢長也、注ニ從ヘバ一尺二寸八

分ヲ去リ、餘一尺九寸二分、是賢長也、輈ノ寸法是ニ準ヘ知ルベシ、輈徑四寸三分六六、長一尺二寸八分也、右ノ如ニシテ賢長二尺五寸六分經文ノ說、又一尺九寸二分鄭注ノ說、輈長一尺二寸八分ヲ合セ見レバ、長二尺八寸四分經文、又三尺二寸鄭注、是ヲ以テ考フレバ、經文去レ一ノ字ハ、去レ二ノ字ノ誤ニテ鄭注ニ從フベキコト明ラカ也、元來轂長三尺二寸ナルユヘ、此内ヲ孔ニシテ、賢輈ト名ヅケタルモノ故、三尺二寸孔ニアルベキコト也、六寸四分長カルベキイハレナシ

一　「容レ轂必直」ヨリ以下五句ハ、先轂ノ形容ヲナシ、刻ミ彫リタル所ナド必直ニス、此所ヲ筋ニテ卷、膠ニテ固ムベシ、又其轂約ニハ篆アルベシ、篆ハホリモノナドスル也、其後革ニテ包ムナルベシ、革ノ下ハ木ニテ質ヲナシ、輈ヲ覆ヒタルモノ故、容轂ト云也、又上ニ云ヘル如ク、轂園ノ所ヘモ、筋ニテ卷ベキ所ヲ刻ヱリコムモ容ナリ、又輈ヲ覆ヒタル外面其外ヘモ篆アルベシ、是ヲ陳篆ト云

一　以置二其輻一ノ注ニ、輻廣三寸半トアリ、此三寸半ト云ハ、輪成就ノ後、外面ヨリ見ユル所ヲ云ニ非ズ、其トキハ内ヘ見コムベキ所也、イマダ轂ヘササヌウチ、下ニオキテ見ルトキノ廣サ也、成就ノ後、外面ヨリ見ユル所ハ輻ノ厚サ也、廣サニハ非ズ、下ノ經文輻廣ト云ヘルモノ、皆コノ意ニテ解スベシ

文炳案ズルニ經文參二分其轂一長二在レ外、一在レ内、以置二其輻一トハ、轂長ト云ハ、轂ノ本ヨリ末マデノ長サ也、コノ本末三尺二寸ノ間ニテ、輻ノ廣サ凡ソ三寸半トシテ去リ、餘二尺八寸半ナ三分シ、一分ノ九寸五分ハ、輻ヨリ内轂本ノ方トシ、二分ノ一尺九寸ハ、輻

ヨリ外實木ノ方ニセヨト云、輻法ノ實也、輻ノツケ所、實木ノ方ヘヨリ寄レバ、轂ノ當ル所内ノ全ニリマフエヘ、轂ト一ナ長サノ三分一ヲ除キ、輻ヲツクル也、轂ノ廣サハ三寸有奇ナレナ、三寸半トミルハ、轂内轂外ニスベキ仕方ヲ見セン□、大概三寸半ト寸法ヲ立タルナリ、故ニ「轂長三尺二寸者、令二轂廣三寸半一、則轂内九寸半、轂外一尺九寸」ト、鄭氏注セリ

一 參二分其輻之長一、而殺二其一一」トハ、總ジテ輪ハ牙ニ近キ所ヲ薄クスル也、牙ノ極邊下面地ヲ踐ム所ハ二厚サ一寸六分六六ニナル、輻ノ長ヲ三分ニ分ケ、其一分牙ニ近キ處ヲ、次第ニソギテ、轂ニ近キ處二分ハソガヌ也、如レ此ナレバ深泥ノ害ナシト也、モツトモナルコト也、下經ノ服轂ノコト、上ノ如ク、輪ノ總體、轂ニ近キ所ハ厚ク牙ニ近キ所ハ薄キ故、輻モ是ニ隨トシルベシ、アシク見レバ誤ルコトアリ、イカントナレバ、牙ノ圍ハ大ニシテ、轂ノ圍ハ小サキユヘ、輻モウチ見タル所ハ、轂ニ近キ所ホド、小サキヤウ也、牙ニ近キホド大キナルヤウ也、是ハ輻ニテハ厚サナリ、廣ニ非ズ、輻ハ牙ニ近ホドセマクナル、轂ニ近キ所ハヒロクナル、輪ノ厚薄ニ隨フ故也

一 揉レ輻必齊揉ニハタムル也、火ニテタムル、牙ヲタムルハ直木ヲタメテ曲ラスル也、輻ヲタムルハ曲ヲタメテ直ニスル也、イヅレニモ揉ヲ云也、タムルト云和訓タハムルノ略也、タハ手也、手ニテヨハメテ曲ニモ直ニモスル也、タヨハムルヲ略シテタハムルト云ナリ

一 謂二之輪之固一、注ニ「出二於輻股鑿之數一也」、此股ノ字、骹ノ字傳寫ノ誤ナルベシ、綆ハ牙ノ外面ヲ固クスルモノ也、骹鑿ニテ牙ヨハクナル故、綆ニテ防グ也、然レバ綆ノ寸法ヲ骹鑿ト應ジテ作ルベシ、

股ノ字ニテハキコヘガタシ、疏ノ説アシカルベシ

一　蓋ハ車ノカサ也、雨ヲ防ギ日ヲ避ルモノ也、雨ヲ避クルハ蓋弓ノ霤ヲハラフ制度アル故、經文ニ見ユ、日ヲ避ルコトハ云ニ及バザルコト故、經文ニナキ也トシルベシ、車ノ上ヲノコラズ覆フ故、張リタルトキハ廣大ナルモノ也、故ニ旌旗ヲ建レバ蓋ハナシ、用ユルトキハ張リ、用ヒザルトキハイクツニモ取分チテ、小クタヽミ置ナリ、部ハ部弓ハ弓ト分ケ、桯モ二ツニ分置テ、用ユルトキハツグ也、達常ハ部ヘツヾキテ一ツノモノ也、カヤウニソレゾレタヽミオク也、コノ取オキニスルト云コトハ、經文ヲトクト考レバ分明ニ見ユル也、トリオキノコトヲ知ラザレバ、經文一向ニスマヌナリ、故ニ先大ガイヲコヽニ記ス

一　部ハ蓋ノ頂キ也、達常ハ部ノ柄也、達常ト部トハ、取オキノ時モ離レヌモノナルベシ、故ニ部ノ柄也ト云ナリ、徑一寸圍三寸長二尺ナリ、此二尺ノ外ニ、上下ニホゾアルベシ、上ノホゾハ部ニ入テ堅メヌケヌヤウニシ、下ノホゾハ長クシテ桯中ニ入レ、取オキノトキヌク也

一　部長二尺ノ注ニ、「謂二斗柄達常一也」トアリ、達常ヲ部ト云コトハ、達常ハ部ノ中ヘホゾヲ入カタメタルモノニテ離レヌ部ノ柄ナル故、部ト云タルナリ

一　「桯長倍レ之四尺者二」トハ、桯ハ八尺ナルヲ八尺ト云ズシテ、四尺者二ト云ハ、四尺ヅヽニテツク也、ツキ柱ニスルナリ、四尺ノ外ニツギテノホゾアルベシ

一　部尊一枚トハ、部ノ頂ハ四邊ヨリ一分高クスベシトナリ、弓鑿廣四枚トハ、四分四方也、鑿上二枚トハ、鑿ヨリ上二分ナリ、鑿下四枚トハ、鑿ヨリ下四分ナリ、是ニテ部ノ厚一寸見ヘタリ、見ツケ一寸ナレドモ、頂ハ一分高クスル故、頂ニテハ一寸一分アルコトアリ、弓ハ傘骨也

一　鑿深二寸有半トハ、鑿ハ弓ヲサシコム孔ヲ部ニホリタル也、コノ孔ノ深サ二寸五分也、左右トモ二寸五分ナル故、合テ五寸也、部徑六寸ニテ、左右ヨリ此孔ヲホルトキ、一寸ノコルナリ、コノ一寸ハ下ヨリ達常ヲサシスル所也、達常ノ徑ハ一寸ナリ、部ヘサシ入レ、左右ヨリ弓ヲサシ入、イヅレモシツクリト、グアヒヨクスルユヘ「鑿深對爲㆓五寸㆒、是以不㆑傷㆓達常㆒也」ト注ニ云ヘリ、サテ取オクトキハ、此弓二十八本ハ、殘ラズキテ片ヅクル也、下直二枚トハ、弓孔ノ上口ハ四分四方也、底ニテハホリヤウアリ、其コトヲ云也、底ニテハ下ヘツキタル方二分ハ斜ナラズ、眞スグニホリコムベシト也、底ニテ上ヘツキタル方ハ、斜ニホリテ二分ノコスベシト也、上斜二分ト補ヒ見ルベシ、下直二枚ト云ヌレバ、上斜二枚ハ知レタルコトナル故、經文ニナキ也、故ニ注ニ「鑿空下正、而上低二分也」ト云ヘリ、此孔ノ底ノ下ニテハ眞直ニホリ、上ノ方ハ斜ニ二分ヲノコセト云コト也ト注セルナリ、鑿端一枚トハ、鑿端ハ孔中ノ左右也、上下左右ハ皆端ト云ベキコトナレドモ、上下ノコトハ上ノ句ニ云タルユヘ、此端ト云ハ孔中ノ左右也、コノ孔ノ上口ハ四方四分也、底ニ至リテハ上下ハ上ニ云ヘル如ク也、左右ハ又セマク、唯一分ニホルト云コト也、部ハ圍一尺八寸ナレドモ、深サ二寸五分ノ孔ヲ、八方ヨ

一　輿ノ四邊ヲ革ニテツヽムハ飾車也、革ナキハ棧車也、疏ニ詳也棧ハ馬ノシキ板ナリ、馬棧ニ似タル故、棧車ト云ナルベシ

輈人

一　輈人爲レ輈」ノ註ニ、詩ノ五楘梁輈ヲ引ク、疏ニ、梁輈上句衡也トハ、梁ト云ハ輈ノ端シ頸ノ處ヲ云、コノ梁ニ頸ヲ加ヘ、頸ニテ衡ヲモタスル也、頸ト衡トハ重リアル也、繩ニテ結カタムルナルベシ、楘ノ字ヲ解スルニ、一輈五束トアリ、一輈ノ長サ一丈四尺四寸ノ内ニ五束ナレバ、二尺八九寸ニ一束アルト云ナルベシ、然ルニ「下經輈欲二頎典一」ノ註ニ、「輹犂尺所二一縛一」トアリ、一縛ハ一束也、是ハ一尺ヅヽニテ一束也、甚ダ相違ナラズヤ、按ズルニ、詩ノ五楘ハ、輹ノ前ノ方一丈ノ所ニ五束アリ、是ハ常ニ見ユル所ナルユヘ、見ユル所ヲ擧テ五楘ト云シナルベシ、然レバ一輈五束モ見ヘタル所、一丈ニテ五束也、一丈四尺四寸ニテ五束ト云ニハ非ズ、一丈ニ五束ナルユヘ、一束ノ間二尺也、二尺ノ内一尺ハ束ネシ所、一尺ハ束ネザル所、段々五段ニナル故、五束ニテ一丈ニナル、是ニテ尺所一縛ナルベシ、又輹ノ輿下ニアルモノ四尺四寸、コノ所ノ束ネヤウ下ニ見ヘタリ、凡束ヌル所ハ筋ニテマトヒ、膠ニテカタメ、漆ニテヌルナルベシ、環灂是ナリ

一　國馬之輈深四尺有七寸」ノ註ニ、馬高八尺トハ、馬頸ヨリ蹄マデノ高サ也、頸尾ノ間ヲ云ニ非ズ、

衡ノ高サ八尺七寸ノ內、コノ八尺ノ馬高ヲ除テ、餘七寸ヲ衡頸ノ間ト云リ、衡ト頸トノ間ニ、七寸ノアキタルアリト云ニハ非ズ、衡ハ頸ヘヒタト着タルモノ也、スキマナシ、其所七寸アルベシト云コト也、衡圍一尺三寸二分ニテ、徑四寸四分也、頸圍九寸六分ニテ、徑三寸二分也、四寸四分ト三寸二分ヲ合テ、七寸六分アリ、スキ間ヲ云ニアラザルコト可レ見

一 策半レ之」トハ、策長五尺ナリ、車上ヨリ馬ヲ使フナレバ、五尺ナクテハ益ナカルベシ、輿深四尺四寸ノ內、三分一ハ式ノ前ニナル、策五尺ニテモ、馬腹ニ及バザルナリ

一 註ニ「鄭司農云、軌謂二式前一也」トアリ、式前ト云ハヨシ、軌軓ノ字ノ分レヲ云ハザルハ非ナリ、故ニ鄭氏書或作レ軓ノ四字ニテ、字ノカハリヲ辨ゼリ、其下玄謂トハ、司農ガ非ヲ正サントスル故、更端ノ辨ナリ、軌是軌法也トハ、軌法ノ字ナル故、軾前ノ軌ニハ非ズト云也、軾前ノ軌ハ軌法ノコトニハアラズ、實ニ軌ト云任正ノ木、輿下ニアル也、下ニ云トコロ是也、コノ所疏ノ說明ナラズ、故ニ詳ニ云ナリ

文炳按ズルニ、軌謂二式前一也書或作レ軓」ト云マデ司農ノ說ナリ、「玄謂、軌是軌法也」トハ、軌ハ輿ト三面ノ材、即チ任正ノコトニテ、輿下ノ前ト左右トノ三邊ニアリ、後ニハ軫アリ、是車輿ノ根基ニテ、總カマヘナレバ、範圍範則ノ意アル故、「鄭氏軌是軌法也、謂二輿下三面之材一、輢式之所二尌持一車正也」ト云ヘリ、軌ト範古通用ス、「少儀曰、祭二左右軌範一、鄭注範與レ軌聲同、謂二式前一也」トアリ、「大馭曰、祭二兩軹一祭レ軌、杜子春云、軌當レ爲レ範、謂二車軾前一也ト云ヘリ、軌前十尺トハ、前軓ヨリ轅端マデノ長サナリ

一 軌ハ輿下ニアリ、是輿前ノ横木也、輿後ノ軫ト對セリ、軫ノ下ニハ踵アリ、軏ノ下ニハ有無見ヘ

ズ、軛ノ圍ハ輹ノ長サヨリ、ツモリ出スコト下ニアリ、輹ノ大サ何ホドト云コト見ヘズ、軛ノ上ハ輿板ナリ、輿ノ兩傍ニ輢アリ、軛ト輿板ヲヘダテ、對セリ、此輢ニ式ヲツケタルモノ也、較ハ又式ヨリ上ニアリ

一　謂ニ之無任一ノ註中ニ、「衡任者謂ニ兩軶之間一也」トハ、軶ハ即チ衡也、衡ハ六尺六寸ニテ一ツ也、兩ト云ベカラズ、服馬二ヒキナル故、兩ト云ナリ

一　當兎ハ即チ伏兎也、是ハ軸ヲ含ム木也、轐ノコト也、輿深四尺深四尺四寸ノ正中、二尺二寸ノ所ニ着ル也、經文ニハ見ヘザレドモ、下ノ注ニテ知レタリ

一　輈欲ニ傾典一、コノ一句ノ義詳ナラズ、「傾典堅刄貌」ト鄭氏注セリ、然ルニイカナル所ヲ堅刄ニスルトモ見定ガタシ、故ニ「駟馬之輹、率尺所ニ一縛一」コノ所ヲ云ナラントト云ヘリ、是ヲ上下ノ文ニ考フルニ、尺所一縛ノ意ナシ、誠ニ分明ナラザルコト也、愚ヒソカニ謂ク「傾典堅刄貌」、然ラバ輈ノ材ヲ撰デ、至極堅刄ナル木ヲ用ベシト云ナルベシ、上文ニ輈ノ直ニテ撓ナキノ害ヲ云ノベタルユヘ、輈ハ撓マスベキモノ也、コノ故ニ傾典堅刄ナル材ナラデハ、心ノ如ク撓シガタキニヨリ、「是故輈欲ニ傾典一」ト云也、是故ノ字カクノ如トキテ能クキコユル也、尺所一縛ノコトハ、下文ニ良輈環灂ト云ニテ聞ヘタリ

一　良輈環灂ヨリ以下ハ、註ハ簡省ニテ見ガタク、疏モ分明ナル解説モナクテ、何トモ解シガタキニ似タリ、ヒソカニ愚意ヲ以コレヲ明ス、上ノ文ニハ國工ノ輈ヲ云、此一節ハ輈ノ丁寧ニ念ノ入タルコ

トヲ云、國工トハ上手ノ方ヲ云、上ノ經ニ「戰敵曲驗不ㇾ傺、謂ニ之國工ニ」トアリ、是上手ノ工ヲホメタルユヘ國蓋ト云ハズシテ、國工ト云、コノ經ハ上ニ國工ノ上手ヲ云ツクシ、此一節ニ至テハ、念ノ入タルコトヲ兼テトキタル故、國工ト云ズシテ國輈ト云、國輈トハ念ヲ入タル輈ト云コト也、環灂ハ筋ヲ纏ニシ、膠ヲモ用ヒ、輈ノ所々ヲ卷キ、其上ヲ漆ニテヌル、詩ノ五楘梁輈、并ニ前ノ注尺所一縛トアリシハ是也、漆ヲ用タル所ト、漆ナキ所ト段々交リ次第ヲナセリ、然レバ漆ヲ用タル所ハ、輪ヲナシテ環ノ形ノ如ナルヲ環ト云、灂ハ漆ヲ用タルヲ云、環ノ形ヲナシテ漆ナキ所ト、サカヒメ分リテ見ゴトナルヲ灂ト云、注ニ沂鄂ト云ハサカイメ也、漆アルト漆ナキ所トサカヒメ分リ、漆アル所ノ形ハ、環ノ如シト云コト也

一　伏兎ハ輈ヲ含ム木也、輿深四尺四寸ノ内ニテ、イヅレノ所ニアルト云コト經文ニ見ヘズ、シカト鄭氏モ知ラザレドモ、理ヲ以テ考ヲ注セリ、故ニ註ニ「伏兎至ニ軏蓋ニ如ニ式深ニ」ト云ヘリ、式深ハ一尺四寸六六奇ナリ、軏ハ圍一尺四寸四分也、コノ徑ハ四寸八分ナルベシ、然レバ式深一尺四寸六六奇ノ内前ニテ、四寸八分ノ軏徑ヲ去リ、後ヘ式深ノ一尺四寸六六ホド間ヲ置テ、伏兎ヲ付ルナルベシ、是ニテ、「伏兎至ニ軏所ニノ寸法一尺四寸六六ニナリテ、如ニ式深ニナル也、輿深四尺四寸ナルユヘ、正中ノ所ハ二尺二寸也、上ノ如ニ推考フレバ、伏兎ハ輿深正ノ中二尺二寸ノ所ニアル也、軏徑四寸八分、其次後ヘ一尺四寸六六奇也、コレヲ加ヘ、其次伏兎ノ徑四寸八分ノ半分二寸四分ヲ加ヘ見レバ、二尺一寸八分六

六奇也、コレ伏兎ハ輿深ノ正中ニアル也、此伏兎ト軌トノ間ハ、式深一尺四寸六六ナルヲ後ヨリ前ヘ向テ七寸ノ處ハ、漆ヲ用ヒ、其次七寸ハ漆ヲ用ザル故ニ、「自二伏兎一不レ至レ軌七寸」ト云也、伏兎カラ軌ニ至ラヌ所七寸、漆ヲ用ユルト云コト也然レバ其外七寸ノ所ハ漆ヲ用ザルコト分明也、コノ漆ヲ用ヒタル七寸ノ處環濟ナリ、註「半有レ濟也」ト云ハ、一尺四寸六六奇ノ內、上ノ如ク後七寸ニ漆ナキ故、「半有レ濟也」ト云也、「軌中有レ濟」トハ、軌徑四寸八分コノ所ニアタル輈ヲモ漆ヲ用ユル也、軌中トハ軌ノ所ト云コトバ也「有二環濟一」ト云ベキヲ、環ノ字ヲ省キテ云ハザル也、軌ハヨコ輈ハタテナル故、十文字ニナル、然レバ此所ニテハスヂカイニ、環トナル也、十字ノ所ヲスヂカイニ、二環タスキニカヽル也、コレラノ所ハイヅレモ輿下ニアリテ、外ヨリ見ヘガタキ所ナルヲ、カクノ如念ヲ入テ濟ヲスル也、是ハ至極ノコトニテ、此上ニ念ノ入タル輈ハナキコト故、「謂二之國輈一」ト也、外ヨリ見ユル所ニ念ヲ入テ、見ヘヌ所ニテ手ヲヌクハ、國輈ニテハアラヌ也

一 註ニ輈有二筋膠之被一用レ力均者則濟遠」トハ、輈ノ輿下ニナリタル所モ、又軌ノ前ヨリ頸マデノ外ヘ見ヘタル所モ、骨ヲ折テ重任ニ力ヲ用ルハ均キコトユヘ、輿下ノ所トテモ手ヲヌキ、ソサウニスベキイハレナシ、故ニ伏兎ヨリ前ヘ七寸漆ヲ用ユルト也、七寸ハ遠キ也、二三寸ニテ止ムハ近キ也、漆ノ間ヲ長ク七寸ニスト也、遠ノ字ハ長ノ字ニ心得ベシ、長ハ俗語ニキコヘ、遠ハ雅語ナルユヘ遠ト云也、サテ軌前ヨリ頸マデ一丈ノ所ハ、環濟ヲ五ツスルト見ヘタリ、秦風ノ五楘是也、コノ所ハイヅ方ヨリモ

ヨク見ユル所ナレバ、イヅレノ灂モ見ゴトニ環灂スル故、國ノ論ニ及バザル也、前ノ註ニ尺所一縛ト云ハ、大縶ヲ云ナルベシ、環灂ノ所一尺、環轉ナキ所一尺、カクノ如段々ニスレバ、一丈ノ内ニテ環輔五ッ、環灂ナキ所五ツニテ、尺所一縛ニ合フ也、秦風ハ外ヨリ見ヘタル所ノヿヲ云テ、輿下ノ所ノヿヲバ云ザル也、サテ軫ヨリ伏兎ノ徑中マデ、二尺二寸ノ環轉ハアリヤナシヤト云コト、經文ニナシ、今理ヲ以テコレヲ考ルニ、輿後ニテ輈ト軫ノ接スル所、外ヨリヨク見ユル所也、國輈ナラズトモ必ズ漆ヲ用ベキ所ナル故經ニ云ヌ也、云ニ及バヌコト也、其前ハ前後ノ漆ヲ用タル所ノ間ナッ故、漆ヲ用ザルナルベシ、此漆ヲ用ザル所ノ寸法モ、大縶ミヘタルコトナレドモ、經ニモ註ニモ云ザルコト故、筆ヲ閣ク也

交輈接ズルニ、輈徑幷ニ軫徑ヲ云ニ、圍徑ノ寸法ヲ用ユルハ非也　輈ハ任正也、圍一尺四寸四分ナレバ、方徑三寸六分ナリ、輿下ノ前ト左右トニアル故ニ、註三面之材ト云ヘリ、然ルニ議ニ任正ハ輿下ニアリテ、一面ハ輿板ニ託賓シ、三面見ユル故三面ノ材ト云トアルハ非ナルベシ

註意ヲ考フルニ、伏兎ヨリ軌ニ至ルコト式深ノ如ナレバ、一尺四寸六分也、是輿前ヨリ伏兎マデノ間ナルベシト也、然ルニ伏兎ノヿ、長圍トモ經ニモ註ニモ見ヘズ、今ヨリ考ヘガタシ、當兎ハ伏兎ノコトニ非ズ、其長今臆ヲ以テ考フルニ、是モ式深ノ如一尺四寸六分六六ニテ、輿下ニテ前後ヘ輿深ノ正中ニ着ヘシ、然レバ輿後ノ軫ヨリモ伏兎マデノ間一尺四寸六分六六ニテ、前後トモ同寸法ニナリテ軸ヲ含ム所輿深ク正中ニアタル也、良輈環灂自二伏兎一不レ至レ軌七寸、軌中有レ灂謂二之國輈一トハ、念ヲ入タル輈モ、環灂ハ伏兎ヨリ軌ニ至ル所ニテ七寸ニハナシ、軌ノ所マデ均ク環灂アルハ、是至極念ノ入タル次也ト云フコトヲ國輈ト云ナルベシ、カクノ如見テ、鄭註モヨクスム也

一　龍旂ノ帛ハ、絳色ナリト云ヘリ、又諸侯九旒ノ旂ハ、交龍ヲ縿ニ畫ク、全羽析羽ノハタハ縿旒ナシ、旄バカリ也

文炳云、全羽析羽ハ五色ノ鳥羽ヲ竿頭ニ係ク、即チ鍾氏染ル所ノ羽ナリ、又旄ヲモ係ル也、司常ノ注ニ見ユ、全トハ其翅ヲ全クトリ用ル故ニ全ヅク、析トハ其翮ヲ析チ取レル故ノ名也、定四年左傳ノ疏ニ見ヘタリ、龍旂ヨリ以下ノ旌旗、疏ニ云如ク、皆天子ノ建ル所ヲ云ナルベシ、司常ニ云ヘル如ク見ルベカラズ、龍旂ハ青龍ナリ、鳥旟ハ朱鳥ナリ、熊旗ハ白虎ナリ、熊虎寫レ旗ト司常ニ云ヘリ、龜蛇ハ玄武ナリ、然レバ四方ノ旗ニシテ、曲禮ノ「行前ニ朱雀一而後ニ玄武一左ニ青龍一而右ニ白虎一」即是ナルベシ

築氏

一　削ハ今ノ小刀ノ類ニテ、反リタルモノナルベシ、合六成規トアレバ、反ノ高キモノ也、竹簡ニ文字ヲ彫ルニ用ユ、故ニ書刀ト註セリ、簡ハ火ニアブリ、其後此刀ニテ文字ヲ刻ム也、シカレバ常ノ小刀ニハ非ズ、切出シト云ヘル小刀ナルベシ、キツサキニテ文字ヲホルベシ、下ノ方ノ刃ハ用ザル也、經文ハ切出シノ小刀ト見テ能キコユル也、二鄭ノ注モ大ヤウ切出ノコトヽ見ユレドモ、「欲レ新而無レ窮」ノ註ニ、「謂ニ其利一也」トアリ、此四字ハ切出シ小刀ヲ解ト見テハアラクシテ、親切ナラザルニ似タリ、豈康成氏モ切出シ小刀ト云コトニクラカリシニヤ、註ノ鋒鍔ハ鋒ハキッサキ也、鍔ハ刃ガタ也、不ニ偏索一ノ索ハ、切レノ止ムコト也、其金如レ一トハ、刃カタモムネカタモ、共ニキタヒノヒトシキ金ヲ用ニト也、イヅレモ切出シ小刀ニテ能合フ也

文炳按ズルニ、切出シ小刀ノ製様ニモ非ズ、圖ヲ見テ知ベシ

冶氏

一　殺矢ハ田獵ニ用ユト云ヘリ、鏃ハ矢ノナカゴ也、然ルニ他書業鎔ノ鏃ナドハ、利劍ノコト、見ユ、鹽鐵論ニ佩テ堂ニ上ルコトアル也、是モ劍ナリ、一樣ナラズトシルベシ、垸ノ字康成ノ時サヘ分明ナラズト見ヘタレバ、今日ヨリイカニト云ベキニ非ズ、然レドモ「列子五六月纍垸注謂纍丸於竿頭」トアリ、司農ノ注ニ讀爲丸トアルハ是ナランカ、然レバ三垸ハ三丸也ト見ルベシ、列子ノ丸ハ彈丸也、古人ノ彈丸ハ大カタ大小ノ節アリテ、丸トサヘ云ヘバ、大サモ重サモ知レタルコトナルベシ、次ニ三垸ト云テ重サヲ知ラセタルモノナルベシ

文炳按ズルニ、方氏ノ通雅ニ云、「列子纍垸五而不墜、與纍丸同、淮南、圜而不垸即丸也、考工重三垸、亦以其丸之重爲權也」ト云ヘリ、翁ノ説ト符合ス

一　注ニ垸量名ト云コト、量ハ斗斛ノコトナレドモ輕重ヲハカルヲモ量ト云コト説文ニアリ、司農ノ過謬ニアラズ、殺矢ハ毒ヲヌリテ射ルト云説アリ、禽獸ヲ射ルハサモアランカ

文炳按ズルニ、迹人ニ云、「凡田獵者受令焉、禁麛卵者與其毒矢射者」トアリ、王公ノ田獵禽獸ニテハ、毒箭ニテハ射ベカラズ

一　戈ハ勾兵也　勾トハ胡ニカケテ、前ヘ勾引スル也、故ニ經ニ專ラ胡ヲ主トシテトキタリ、援ヨリ柲ヲ合テ八尺也、是人ノ長ニ應ゼリ、車上ニテ戈ヲ用ルニ、前ニハ四馬アリ、八尺ノ戈ハ短テ用ガタシ、左右ニ輪ノ崇サ六尺六寸ニテ、輿ハ四尺ノ所ニアタレリ、八尺ノ戈ハ短テ不便ナルベシ、然レバ車上ニ

テ戈ヲ用ユベキハ、後ヘノ方バカリト見ヘタリ、車後ヨリ間チカク進ム敵ヲ、胡ニカケテ引倒スハ宜シカルベシ、戈ノ一名ヲ擁頸ト云フコト注ニ見ヘタリ、擁頸トハ、胡ヲ敵ノ頸ニウチカケテ引倒スヲ戈ノ用ノ第一トスル故ノ名ニヤ、又雞鳴ト云ハ、雞ノ頸ヲノベテ鳴トキノ形チ、戈ノ援ト胡ニ似ヨリタルト云名ニヤ、又直刄ヲ援ト云ハ戈ハ胡ノ用ヲ重ンズルニヨリ、胡ヲ主トシタル者ナレバ、直刄ノ所ハ、胡ノタスケニテ、專用ノ所ニ非ザル意ニテ直刀ヲ援ト云ニヤ、援ハ援兵ノ援ニテタスケ也、上ノ如ナレバ、車上ニテハ戈ノ用スクナシ、古ヨリ干戈ト云ヘバ、兵器武事ノ總名ニナルヲ見レバ、戈ノ用甚多ク、甚重キコトト知レタリ、然レバ歩卒ニアリテノ用甚宜キト見ヘタリ、敵味方タガヒニ近クナリ、兵卒皆々戈ヲトリテ、敵ニウチカケ引倒シ、或ハ上ヨリ援ニテタヽキスヘ、後世ノ狼筅ヲ用ユルガ如シ、是戈ノ用ノ第一ナルベシ

一　己倨則不レ入」コレヨリ下皆胡ノコトヲ云ヘリ、倨トハ直ナルコト也、勾トハ曲レルヲ云也、サレドモ倨勾ト云テ、曲直ト云ザルハ、倨勾ハマガネニアラザルヲ云也、曲直ト云ヘバマガネニナル也、又長キ方ヲ倨ト云ヒ、短キ方ヲ勾ト云ト見ヘタリ、己倨トハ甚ナマガネニ胡ヲツケタルハアシキ也、是ハ胡ノ下ヘ向ヒ過タルハアシキ也ト云コト也、ウチカケタルトキ物ニタタス也、故ニ不入ト云、注「微直而邪多也」ト云リ、微直ハ直スクナキナリ、邪多ハ下ヘ向テ斜ニナリ過タル也、倨ハナマガネニテ末ノヒラキタルモノ也、然レバ下ノ字ヲ用ルニ及バズ、下ヘ向フコトハ倨ノ字ニテ知レタルコト也、啄レ人トハ人ニ戈ヲウチカケタルハ、鳥ノ喙ニテ啄スル形ナル故啄ト云、啄ノ字ニテ戈ノ使ヒヤウ知レタ

リ、已勾トハ胡ノ刄マスグニツケタル也、マガネニスルハアシキ也、ウチカケタルトキ、劍ガヒラカヌ也、故ニ不決ト云、注ニ「胡曲多也」ト云ヘリ、援ト胡トノ曲リノ所、マガネニナリタルハ、胡曲多キナリ、是ハアシキ也、注コノ下ニ胡ノシカタノ宜キヤウヲ述タリ、鋒本必橫トハ、鋒ハ胡ノキツサキ也、本ハ胡ノ本ノ方ニテ、援トツヾク所ヲ云也、必橫トハ胡ノ本ノ方ニテハ援ト平カニマガネニスルト云コト也、サテ胡ノ上ヅラ下ヅラニノリヲツケテ、マガネニナラヌヤウニスルコトヲ下ニ云ヘリ「取₋圜於磬折₋」トハ、マガネニナラヌヤウニノリヲツクルコト、磬ノ倨勾ノ折タルホドノコトニスル也、然レバ胡ノ本ハ二寸ニ少シ餘ルホドニスル也、總タイハ平カニシテ、內外ニノリヲ付ル也、內ハ下ヅラ外ハ上ヅラ也、カクノ如ニスレバ、磬折ニナル也、「長內則折前」トハ、胡ノツケ所上リ過レバ、內四寸ヨリ長クナリ、援八寸ヨリ短クナリテ、援ヲ折タルニナル也、援ノ用アシクナル也、「短內則不₋疾」トハ、胡ノツケ所下リ過レバ、內四寸ヨリ短クナリ援八寸ヨリ長クナリテ、胡ノ用遲クナルナリ

一　重三鋝注ニ、東萊稱或以₋大半兩₋爲₋鈞、十鈞爲₋環₋トアリ、稱トハハカリ也、チギ也、鈞ハ稱ノ錘ナリ、大半兩ハ其重サ也、又十鈞ノ重サニ作リタルヲ環ト云、環ハ內孔若₋一ナル玉也、其形ニハカリノ重モリヲ作ル也、鈞ノ形チモ疑ラクハ鈞ノ如ナラン、古ノ稱錘ハ形ヲ環ニ作ルコト、漢書ニ見ヘタリ、鋝ト環ハ同字ナリ、故ニ鍰鐶モ同字ナリ

文料按ズルニ、古ノ權量ハ銖兩斤鈞石ノ五ニテ、鈞ノ重サハ三十斤也、鄭氏ノ註東萊ノ稱大半兩ヲ鈞ト云ユヘ、「今東萊稱或以₋大半

兩ニ爲ㇾ鈞ㇾト云ナリ、大半兩ハ一兩ヲ三分シテノ二也、程氏術考ニ重三鋝、鍰法一斤四兩トス、今ノ五十九錢二分ニ當ル、吾邦今ノ檜ト異ナリヤト云、然ルニ戈戟ノ寸法形狀ヲ考ルニ、一斤四兩ノ物ニアラズ、說文ニ云 鋝十銖二十五分之十三也、周禮曰、重三鋝、北方以二十兩ㇾ爲ㇾ鋝トアリ、一鋝二十兩トスレバ、三鋝ハ三斤十二兩也、上制ノ劍ト重サ同ジ、凡今ノ百七十七錢餘ニアタル、今ノ偃月刀ト異ナラズ、然ルニ桃氏上制ノ劍重サ九鋝二十兩、一鋝トシテハ甚ダ重シ、六兩一鋝トシテ相應セリ、一書ノ中カクノ如ク意義不同アルベキコトニアラズ、疑ベシ

一 戟モ勾兵也、舊圖ハ左右ノ支上ニ向ヒ、山ノ字ノ形ヲナセリ、今經文ヲ考ルニ、今ノ十文字ノ鎗ノ如ナルベシ、疏ノ意ハ山ノ形ニモ非ズ、一支ハ上ニ向ヒ、一支ハ下ニ向ニ似タリ、戟ヲ解セル疏文大ニ誤タル所多シ、用ルニタラヌ也、鄭氏戟ハ今ノ三鋒戟ト云ルニヨリ、山字ノ形トナセルナラン、三鋒トハ鋒刃三ツアルコト也、一鋒ハ援ニテ上ニ向ヒ、二鋒ハ胡也、援ヲ貫キ左右ニ出ル是十文字也援七寸五分胡六寸トアリ、又戟胡横貫ㇾ之トアリ、コノ寸法ニテ、山字ニナルベキニアラズ、横貫ト云ヘバ、十文字分明ナリ

一 倨勾中矩トハ、ナマガネノ所アリ、マガネノ所アリト云コト也、詳ニ云ヘバ援ノ左右ニノリヲ付テ、胡ト倨勾ニテナマガネナルヲ倨勾ト云、胡ハ横ニマガネニスル故、是ヲ中矩ト云也、戈ノ援ハマガネニ胡ニノリヲ付テ、倨勾ニテナマガネニナル、戈戟ノシカタウラハラ也、イカナルコトニテカクノ如ク反スルゾト云ニ、總ジテ直刃バカリノ矛ハ刺兵ナリ、胡アルハ皆勾兵也、故ニ戈戟トモニ勾兵ト云、其中ニテ又分ツニハ、戈ハ專ラ勾兵也、故ニ胡一方ニアリテ六寸也、戟ハ勾兵ノ中ノ制兵ナリ、

故ニ援ハ七寸半ニテ、長ク胡ハ六寸ナレドモ、左右ニナルユヘ、一方三寸ニテ短カシ、戈ハ胡ヲ主トシテ胡ニノリヲ付タル也、戟ハ刺ノ用ヲ主トシテ、援ニノリヲ付タル也

一 「與刺重三鋝」トハ、廬人ニ「參分其晉圍去レ一以爲ニ刺圍ニ」ト云ヘリ、此刺ノ事也、柄ノ下ニ金ヲハリ地ニツキ立ル用トスルハ石突也、石突ノ如ニシテ、柄ノ刄ヲ指コム所ヲ卷ハ刺也、是モ金ニテ作ル、此卷タル金ト上ノ胡援等ノ金トヲ合セテ、重三鋝ニスルト云事也、此刺ハ戈ニモ心有ベキナレ共、戈ハ短キ兵器ナル故、刺ノ金ヲ除キテ胡援等計ニテ三鋝也、故ニ刺ヲ云ハザル也、戟ハ長兵ナル故、重キヲ嫌ヒ、胡援等ニテハ三鋝ヨリ輕クシ刺ヲ加テ三鋝ニスル也、故ニ戈ハ廣サ二寸、戟ハ廣サ一寸五分也

一 刺謂レ援也、コノ司農ノ說解難シ、廬人ノ注ニ「司農云、晉謂ニ矛戟下銅鐏一也、刺謂ニ矛刄胷一也」トアリ、是ヲ見レバ刺ノ事司農能知レリ、此ニ刺謂レ援也ト云ハ、廬人下ノ注意ヲ省略ニ云シ故解難キ也、晉モ刺モ柄ノ中ニ有名也、下ヲ晉ト云ヒ上ヲ刺ト云、刺ハ柄ノ中ニテ、援ノ所ヲ云ト注セル也、援ハ即刺ト云ニ非ズ、刺ノ事ハ廬人ニ明カニ見ヘタル故、此ニ詳ニ云ニ及バズ事カクノ如ク省略ニ云シ也、疏ニハ廬人ニ刺アルコトヲ忘レタル故、刺ノコトヲ知ラズシテ、色々トキタリ、皆誤ナリ

一 玄謂刺者著柲直前如レ鐏者也」コノ注ニテ刺ノ事分明也、司農ノ注、省略ニテ知ラザル者迷ソ故詳ニ解メル也、著柲トハ此刺ハ柄ニツケタル物ゾト也、直前トハ刺ノツケ所、前ニアタルト云事也、柲ノ上端ナリ、如レ鐏トハ刺ノ形ヲ云タル也、畢竟戟ノナカゴ柲ニ入ル故、其所ヲ金ニテ卷タル也

一　戟胡横貫レ之、一コレ六寸ノ胡ヲ三寸ヅヽ兩方ヘ出ス也、其刄ハマガネニスル也、言二正方一也ト云モマガネニスルコト也

一　援之外勾磬打與一コレ援ニノリヲ付テ、胡ノマガネト倨勾磬折ニナルコトヲ云シ也

一　戈ハ刄ヨリ柄ノ末マデニテ、八尺ノ兵器也、コノ戟ハ柄ノ長サ常也、常ハ一丈六尺也、コレニ援七寸半胡ノ廣サ一寸半、内四寸半合セテ一尺三寸五分ヲ加ヘテ、一丈七尺三寸五分ノ兵器也、是柄ノ一丈六尺ハ、人長八尺ノ倍ニ應ジタル也、戈ハ衆人ノ用ル所、戟ハ强力人ノ用ル所、又其中ニ傑特ナル强力ノ人ハ、酋矛夷矛ヲ用ユ此戟車上ニテハ左右ト後ロノ方ヨリ進ム敵ヲ防グベシ、前ヘハ尙短クテ不便ナルベシ、二矛ハ車前ノ敵ヲモフセグベシ、因テ車上ニ長端ノ兵器ヲ備ヘ建ルコトヽ知ベシ

文炳按ズルニ、「曲禮進レ戈者前二其鐏一」孔疏ニ、戈勾孑戟也、如レ戟而横安レ刄、但頭不レ嚮レ上爲レ鈎也、用以レ鈎害レ人也」ト云ヘリ、然レバ戟ノ刄ハ上ニ向シモノト思ハル、然ルニ其下「進二矛戟一者前二其鐓一」ト云、疏ニ「矛如レ鋌而三廉也、戟今之戟也、古作レ戟兩邊皆安二横刄一」トアリ、此上下ノ文ヲ考ルニ、上ノ如レ戟ト云モ、孔氏ノ時ノ戟ヲ以テ言タル也、車戰スタレテヨリ、戈戟矛ナドモ次第ニ廢シ、或ハ制造甚ダ違タリト見ユ、孔氏ノ時サヘ如レ戟如レ鋌ナドト云テ、當時ノ似ヨリタル物ヲ取テ論ス、戟ハ孔氏ノ時ニモ專ラアレドモ三鋒山字ノ形ヲナセリト見ユ、故ニ今之戟也ト云テ、次ニ古ノ戟ノ同ジカラザルコトヲ述タリ、皆翁ノ説ト符合ス

考工記管籥卷上終

考工記管籥 巻下

桃氏

一　桃ハ其人ノ氏也、世々劍ヲ造リ、上手ナル故、氏ヲ以テ世ニ稱セラルヽ、故桃氏ト云、鳧氏鍾ヲ作ルモ此類也、後世ノ說ニ、桃ハ不祥ヲ辟ル故、劍ヲ作ル工ヲ桃氏ト云、鳧ハ水ニ浮ブ故、鍾モ虚浮ノ義ヲ取テ、鍾工ヲ鳧氏ト云ト云ヘルハ誤ナルベシ

一　臘廣二寸有半寸トハ、兩刄ニ作ルヲ臘ト云、劍表裡ニ脊アリ、脊ヨリ左右各一寸二分半、是ヲ兩從ト云、上下ハ脊也、兩端ハ鍔也、鍔ヨリ鍔マデ二寸五分ヲ臘ト云、脊ヨリ鍔マデ一寸二分半ヲ從ト云、表ニモ兩從、裡ニモ兩從也、鍔ハ旁刄也、臘ノ名義詳ナラズ、從トハ脊ニソフテ、次第ニソギノ鍔ニ至ル故從ト云ナルベシ、從ハシタガヒソフ也

一　莖ハナカゴ也、莖ノマワリ二寸五分也、臘ノ廣ト同ジ、其長ハ五寸注ノ劍夾ハ柄ナリ、莖ハ夾ノ中ニ入ユヘ、司農ハ大概ニテ注セリ、鐔ハツカガシラ也、劍鼻也、鐔ノ字疏ノ說キコヘズ

一　中其莖設其後ニコノ經ヲ司農ノ說ハ柄形ノコトヽセリ、是大概ナリ、柄形ヲ以テ中ゴモ下ヲ

フトムルコトヲ知セタルナリ、康成ハ直ニ中ゴノコト、セリ、是正義ナリ、カクノ如ク莖ノシリヲ太クスルコト誠ニヨロシカルベシ、子細ハナカゴノ後リフトケレバ重シ、太ク重ケレバ、ツタニモ切ニモ、手ノ内重リテ定リ易シ、注ニ易制ト云ハ是也、倭刀モ此意ニテ造リヤウアルベキコト也、莖トハ草木ノ莖ノ如シ

一　首ハ莖ノ刄ト隣ニナル所ナリ、臘廣二寸五分ト云ハ、片面ノコト也、首廣ハ其三分ノ二ニテ、一寸六分六六奇ヲ徑トスル也、首ノ形チ橢圓ナルベシ、故ニ注ニ其徑一寸三分寸之二ト云リ、コレ表裡ノ脊ト兩刄トノ廉ヲツブシタル形チ也、經ニ圜レ之ト云ハ、圜ニスルコトニ非ズ、橢圓ニスルコト也、モシ圜ニスルコトナラバ、「以爲二首圍一」ト四字ニテスムコト也、然ルヲ「以爲レ首、廣而圍レ之」ト文法ヲカヘタルニテ、橢圓ニスルコト見ヘタリ、一寸六分六六奇ヲ首徑ノ廣ト定テ、ソレニ應ジテ圍ヲツクルト云コト也、廬人ニモ此文法アリ、上ニ云シ莖後ヲフトクスルコト、此首ト同ジホドナルベシ、首ノ徑一寸六分奇ニテ知レタル故、上ニハフトクスルコトバカリヲ云テ、寸法ヲ云ハザル也、サテカクノ如ク莖ノ上下ヲ太ク中ヲ細メテ作レバ、ツリ合ヨキ故、ツバハ小サクテスム也、故ニ劒ノツバハ小サシ、倭人ノ刀ハ長短トモニ莖ニ此シカケナキ故、ツバノ重ミヲカル故、大キナルツバヲ用ユルナルベシ

一　上制ノ劒身ノ長二尺五寸也、身ト莖トハ離レヌモノ故、重九鋝ト云ヘルハ、身バカリノコトニ非

ズ、莖トモニ九鋝也、莖モ其中ニコモレル故、注ニ、上制長三尺ト東成ノ云ヘル也、コレ莖トモニ三尺也、然ルニ周氏ガ說ニ鄭注上制三尺ト云ハ、五其莖長ト經ニ有ルニアタラズシテ、經ノ文義コノ注ニテハトキガタシト云ハ、甚ダ文法ニ暗ク鄭意ヲ知ラズ、ヒトヘニ囈語也、華人サヘカクノ如ナルコト眞ニ可レ怪可レ笑コトナリ

一　又徐昭慶ハ「莖長一尺、上制之劍身長五倍五尺、中制四尺、下制三尺」ト云ヘリ、コレハ經ニ「以二其臘廣一爲二之莖圍一、長倍レ之」トアルヲ見誤リテ、臘廣兩面ニテ五寸ナレバ、莖圍五寸、コレニ倍シテ莖長一尺ト見タル也、是元來劍ノ用ヲシラザルヨリ起レリ、三代ノ戰法亡ビテ、後世ノ合戰ニハ倭人ノ刀ヲ用ユル如ク、劍ニテ切アフコトニナリシ故、身二尺五寸ニテハ短カシ、マシテ下制ノ身一尺五寸ニテハ、戰場ノ益ナシト思フ疑アルヨリ、カクノ如ク誤ル也、ソレ三代ノ戰法ハ專ラ戈戟ヲ用ユ、ソレヨリ遠ハ酋矛夷矛ヲ用ユ、サテ戰場ニテモ、平生ニテモ手ヅメニナリタルトキ劍ニテツク也、後世ハ此戰法ニ非ズ、又倭人ハ平日ノケンクワノ類ニ刀ニテ切アフ、是間遠クタシカナラヌ勝負ナリ、上代ノ風ハ飛コンデ、左手ニテ敵ヲトリヒシギ、右手ノ劍ニテ其マヽツキコム故勝負タシカ也、誠ニ身ヲ捨ケナゲナルハタラキ也、然レバ劍ハ右手バカリニテモツユヘ、其柄短カキ筈也、是莖長五寸ノイツレ也、五尺ノ劍ニテ人ヲツクニ宜シカランヤ、人ヲツクニ非ンバ、何トテ兩刃ニスベケンヤ、反モナクマスグニ作ルベケンヤ、又中華今ノ世ノ金鐵ニフク倭人ノ利刄ニ及バズト云ヘリ、三代ノ時モ然ル

ナラバ、イヨイヨ切ル方ヨリツク方然ルベキ故、劍ノ制度出來タルコトモアルベシ、切狢一寸ツキ狢一寸ニテハ、ツキ狢ノ方甚ダ敵ノヨハリニナルベキハ勿論ナリ、又戰場ニテハ急ナルコト多キニヨリツクヨリハ切ルヲセンニセシコトナル故、倭人ノ刀ハコノ爲ナリ、又大辟要斬ノ刑ハ鑕ニフサセテ、大マサカリニテ腰ヲヨコニ切絶ツコト也、是モ劍ハツク爲ニテ、要斬ノ時用ユベカラヌ故也、サレバ戰場ニテハ戈アリ戟アリ、脅矛アリ夷矛アリテ、ハタラキ手ツメニナリテハ劍ニテツク、此兵器皆ツク也、カケタヲス也トカク、ツクヲ第一トセリ、又モノアイ近クナリテハ、戈ニテカケ倒シヒキ倒シスルコト第一也、前ニ云ヘルガ如シ

物氏度考云、身長上制二尺五寸、當二今一尺八寸弱一、併二其莖一爲二三尺一、高祖所レ謂吾提二三尺劍一取二天下一是也、中制二尺當今一尺四寸四分弱、併二其莖一爲二二尺五寸一、下制一尺五寸、當今一尺零八分弱、併二其莖一爲二二尺一匕首也、古以二擊劍一爲二小人レ大之術一、見史記司馬相如傳一、注共用一尺八寸、與二吾邦戸田流劍術一道同ト云ヘリ

又衡考云、三斤十二兩、當二今百七十七錢七分一、二斤十四兩三分兩之二、當二今百三十八錢二分一、二斤一兩三分兩之一、當二今九十八錢七分一、與二吾邦今刀一不レ異ト云ヘリ

鳬氏

一　鳬氏ハ鍾工也、銑ハ鍾口ノ兩角也、銑ト云ハ鍾ヲ作ルニハ、先口ノ寸法ヲキハメ、是ヨリ段々外ノ所々ノ寸法ハ割出シタルモノ也、故ニ先コノ銑ノ所ヲキハムルコト也、銑ノ名ココニ起レリ

一 于ハ銑ヨリ銑マデノ間ナリ、鍾口ニアリ、于ハ脣也、コノ于ハ口ノ邊ニテ一尺六寸、鼓ノ邊ニテ一尺二寸八分也、注ニ、脣之上袪ト云ヘリ、袪ハ袖ノ口也、今ノ于モ袪ノ如シ、是ヲ于ト名ヅクルコト「說文、于於也、象ニ氣之舒一、从レ丂从レ一、一者其氣平レ之也」ト云ヘリ、舞ハ回翔ノ名聲、氣舞ノ處ニテ行ツマリ回舞スル故舞ノ名アリ、于ノ所ヨリ徐々ニ出去ル故于ト云、鼓ハウツベキ所、鉦ハ鍾ノ正シキ身也、名義イヅレモ分明也

一 十ニ分其銑一トハ、銑ヨリ銑マデ一尺六寸、是ヲ十分ニシテ一寸六分也、去レ二トハ、一尺六寸ニテ三寸二分ヲ去ル也、一尺二寸八分ニナル、以爲レ鉦トハ、此一尺二寸八分ヲ鉦ノタテニスル也

一 鉦間ハ鉦ノタテ一尺二寸八分ヲ下ノ銑間トスル也、銑間トハ、前ニ銑間謂ニ之于一トアリ、然レバ銑間ハ于ノ上邊、鼓トノサカヒメ也、故ニ是ハヨコ也、鼓間ハ鉦ノタテ一尺二寸八分ノ内ニテ、又三寸二分ヲ去レバ九寸六分ニナル、此九寸六分ヲ鼓間ニスル也、鼓ノ上邊鉦トノサカヒメ也、是モヨコ也、凡テ間ノ字ノアル所ハ皆ヨコ也、舞脩ハ鼓間ノ九寸六分ヲ、舞ノ下邊鉦トノサカヒメノ寸ニスル也、舞ノ上邊ハ短カシ、下邊ハ長シ、故ニ舞脩ト云、是モヨコ也、舞廣ハ舞脩ノ九寸六分ニテ 又三寸二分ヲ去テ舞ノ廣ニス、是六寸四分也、是ハタテ也

一 註ニ、「此言ニ鉦之徑、居ニ銑徑之八一」トハ、鉦ノ徑ハ鉦ノタテ也、一尺二寸八分也、銑徑ハ鍾口ノ所ニテ一尺六寸也、是ハヨコ也、コノ一尺六寸ヲ十分ニシテ一寸六分、又八ヲ合セテ一尺二寸八分也、

是ヲ鉦徑ト云、長キ方ヲ徑トセル故、鉦徑ハタテ銑徑ハヨコ也、「而銑間與二鉦之徑一相應」トハ、銑間トハ、于ノ上邊鼓トノサカヒメ也、鉦ノ徑一尺二寸八分ト應ジテ、同ク一尺二寸八分也、「鼓間又居二銑徑之六一」トハ、鼓間ハ鼓ノ上邊鉦トノサカヒメ也、是モヨコ也、銑徑一尺六寸ヲ十分ニシテ、一寸六分ヲ六ツ合セタル也、是レ九寸六分也、「與二舞脩一相應」トハ、鼓間九寸六分ト應ジテ、舞脩ヲモ九寸六分ニスル也、舞脩ハヨコ也、舞ノ下邊ニテ、鉦ノ上邊ノサカヒメ也、コレヲ舞脩ト云、義下ニアリ、「舞脩舞徑也」トハ、長キ方ヲ徑ニトル也、故ニ舞ノ上邊ハ短カシ、下邊ハ長シ、コノ長ヲ徑トセル也、此徑ハヨコ也、「舞上下促、以レ横爲レ脩」トハ、上下ハ六寸四分也、上下トハタテ也、故ニ横ノ長キ方ヲ徑トシタル也、鍾ニテノヨコ、舞ニテノ長キ所也、「從爲レ廣」トハ從ハタテ也、鍾ニテタテ也、舞ニテノ廣サ也、即チ上ニ云シ上下也、「舞廣四分」トハ、コノ舞廣ハ銑徑一尺六寸ノ十分一、一寸六分ヲ四ツ合セルニテ、銑經十分ノ四分也ト云ナリ、即チ六寸四分也、「今亦去二徑之二分一以爲二舞間一」トハ、舞間ト云ハ、舞ノ上邊鍾體ノ終リ也、此所ノ寸法何ホドトモ徑ニ見ヘザルヲ、鄭氏ノ推テノブル故ニ、今亦ト云也、徑ハ舞徑也、九寸六分也、是ニテ三寸二分ヲ去ル、三寸二分ハ銑徑一尺六寸ヲ十分ノ二分也、六寸四分ヲ舞間トスル也、經文ニ銑間ト云ヒ、鼓間ト云ヒ、スベテ間ト云ハサカヒメ也、鍾體上ニテハ舞ニ終リサカヒメハナシ、然ルヲ注ニ舞間ト云ハ、舞ノ上邊モ鍾柄ノ甬トサカヒヲナス故、舞間ト云シ也、則「舞間之方、恒居二銑之四一也」トハ舞間ハ上邊ハ六寸四分、下邊ハ九寸六分ニテ方ナラズ、カリニ方ニ見

ル也、銑之四ハ六寸四分也、舞ノ中ニカリニ方ヲ立テ見セタル也、經ニ、タテノ六寸四分ハ見ヘテ、ヨコノ上邊舞間ノ寸法見ヘザルヲ、鄭氏推出シテ舞ノタテト同ク、ヨコノ上邊モ六寸四分也トスル故、カリニ方ト云シ也、經文ニナキ所ノ寸法ヲ推テ鍾ノ全體ノ寸尺ヲ知ラセン爲ニカクノ如ク云也、「舞間方四、則鼓間六亦其方也」トハ、舞ハ鼓ニ應ジテ出タル寸法ナル故、今舞ニ銑四ノ寸法アル故、サテハ鼓間ニ銑六ノアルモ知レタルト云也、是ハ經ニ鼓ノヨコノ寸法ハアレドモ、タテノ寸法見ヘヌ故、カクノ如ク推出セル也、「鼓六鉦六舞四」トハ、鼓六ハ上ニ云シ鼓ニ、銑徑ノ六ツノコト也、舞四ハ上ニ云シ銑徑ノ四ノコト也、此鼓舞ハ方ヲ推出シテ云シコト上ノ如シ、鉦六トハ鉦ハタテ一尺二寸八分、ヨコ九寸六分ナル故方ヲ立ベカラズ、故ニ方ノコトナシ、タテノコトヲ云ハズヨコニテ云ユヘ、鉦六ト云銑徑ノ六アル也、鉦六ハヨコヲ云ユヘ、鼓六舞四皆ヨコヲ云タル也、鍾口ハヨコナル故、鼓鉦舞皆ヨコヲ云ツラネテ、鍾體ノヨコヲ見セントノコト也、此鍾口寸者其長十六也トバカリニ、一鍾ノ寸法ヲ立テ云トキ、口徑一寸ノ鍾ニハ其長一尺六寸ト立テ、夫ヨリ鼓鉦舞ヲ皆々推出ス也、其長トハ、口ノ長ヲ云也、口ノハバ一寸、長一尺六寸、鍾底ノ中ニアリ、此十六ハ鼓六鉦六舞四ニテ、タマタマ十六ナル故、鍾體ノ長サト思フベカラズ、鍾體ノ長サヲ云ナラバ、「鼓六鉦八舞四」ト云ベキナリ、「鐘之大數、以律爲度、廣長與圜徑假設之耳、其鑄之則各隨鐘之制、爲長短大小也」トハ、上ニ鍾口ノ徑一寸、又口ノ長十六ト云ハ、假ニ設ケタル寸法ニテ、實ハ律ヲ以テ法度トナシ、廣長圜徑ヲモリ出

ストハ云コト也、圓徑ハ匾圓ノ鍾體ヲ云也、環ノ如キニハアラズ、「假設レ之耳」ト云ハ、上ノ口寸長十六ノコト也、「鉦間亦當レ六」トハ、鉦間ハ、鉦ノ上邊舞トサカヒセル所也、是ヲ經ニハ舞脩ト云、鉦間ノ名見ヘズ、故ニ九寸六分ニテ銑徑ノ六ナルコトヲ知ラセン爲、亦當レ六ト云也、サテ上ニ假設シテ口寸長十六ヲ云フニ、一ハ數ノ始ナレバ、口ヲ一寸トツモリ出セル也、是ツモリノ初メ也、故ニ一寸ヨリ云シ也、此口ハ即チ銑ノ端ナル故、銑ノ名アル也、銑トハ先也、十六ト云テ、十七トモ十五トモ云ハズ必十六ト云タルハ、鼓六鉦六舞四トヨコ三段ニテ十六ナル故、此ヨコ三段ヲ出サン爲ニ十六ト云也、然レバ應律ノ鍾ヲ鑄ルトキ、タトヘバ口ノ徑八分ノトキハ、長サ一尺二寸八分也、此一尺二寸八分ヲ十六ニ割リ、ヨコ三段ノ寸法ニモリ付ル也、故ニ口寸長一尺六寸ト云ハズ、長十六ト云也、「今時鍾或無二鉦間一」トハ、鉦舞ノサカヒメニヨコノ帶篆ナキモアルト也、鉦間ノ寸法九寸六分ナシト云ニハ非ズ、是ハ經ニ舞脩ノ名アリテ、鉦間ノ名見ヘザル故鉦ト舞ノサカヒメニ帶篆ハナキコトトシテ、帶篆ヲセヌ也、是篆ハ元來鍾ノカザリナル故、コノ所ニ帶篆ナクテモ、聲ノ宮商ニ富ナキ故、イヅレニテモ可ナルベシ、サレドモ實ハ帶篆アルベキコト經文ノ正意也

文炳按ズルニ、上野翁コノ所ノ鄭注ヲ解スルニ、「凡言レ間者亦爲レ從、篆以介レ之」トアルヲ解セズ、愚ヒソカニ此注意ヲ考ルニ、此經文凡ソ間ト云ハ、皆ヨコノコトナレドモ、上ノ「篆間謂二之枚一」ノ間ナドハタテナレバ、亦從トモスト云コト也、「篆以介レ之」トハ、篆ハ鍾帶ナリ、介ハ「介ニ居二大國之間一」ノ介ノ如シ、鼓鉦舞甬ノサカヒメニ、各帶篆アリテ介マル、篆ヨリ篆マデ即チ篆間ナレバ、從チモ間ト云コトヲ知ラセン爲ニカク注セリ、可レ觀古文簡奧味有レ餘

一以二其鉦之長一爲二之甬長一」ヨリ以下甬衡ヲ云ヘリ、鉦ノ長ハ一尺二寸八分也、是ヲ甬ノ長ニスル也、甬ノ中ニ衡アリ、甬ト云ハ　大名ナリ、其中ニテ下ヲ甬ト云ヒ、上ヲ衡ト云、故ニ此甬長ト云ヘルニハ、衡ヲモ含デ云也、注ニ、「並二衡數一也」ト云ハ是也、此甬長一尺二寸八分ヲ以テ、スグニ甬ノ圍トスル也、圍ノ一面六寸四分也、匾圓ナル故六寸四分ノ一面ニナル也、徑一圍三ノ圓ニハ非ズ、表裡二面ニテ一尺二寸八分也、是ヲ三分シテ一ヲ去レバ八寸五分三三也、此八寸五分三三ヲ衡ノ圍トスル也、衡ノ圍ト云モ、甬ノ圍ト同ジ匾圓ナリ、故ニ一面四寸二六六也、表裡ニテ八寸五分三三也、カクノ如ク甬衡ヲ作レバ、甬ノ舞ト接スル所ハ皆六寸四分也、甬ハ舞ノ上ニアリテ鍾ノ柄ナル故、甬ノ舞ニ接スル所、舞ヨリ小サクスベキコトナルベキヲ、カクノ如ク同寸法ニスルハ、形狀見ニクカルベシトノ疑アリ、然ルニ鄭注ニ、「衡居二甬上一又小」トアリ、是衡ハ甬ヨリ小サキコトヲ云ヘル也、甬ハ舞ヨリ小サキナラバ、其コトヲモ注スベキニ、甬ノ舞ヨリ小サキコトヲ云ハズ、是舞甬同寸法ノ一證也、又前ノ鍾帶ノ注ニ、「介二在于鼓鉦舞甬衡之間一凡四」ト云ヘリ、是モ舞甬同寸法ナル故、其間ニ帶篆アル也、一尺二寸八分ノ甬長ヲ三分シテ、二ハ下ニアリ是甬也、一ハ上ニアリ是衡也、然ルニ旋ヲ設ルハ、甬ノ中央ニ孔ヲ穿ツベシ、此孔ヨリ見レバ、甬長一尺二寸八分ヲ三分シテ、二ハ上ニアリ、一ハ下ニアル也、故ニ經ニ、「參二分其甬長一、二在レ上、一在レ下、以設二其旋一」ト云也、此句ハ甬衡ノ長短ヲ云ニ非ズ、旋ヲ設ル孔ノ高下ヲ云也、注モ此意ニテ見レバヨクスム也、三分ノ内甬二分衡一分合セテ三分也、故

ニ「令㆔衡居㆓一分㆒則三分」ト云、衡一分ト云コト經ニハ見ヘザルヲ、鄭氏目見ニテ定メタル注ナルベシ、然ルニカクノ如ク旋ヲ設ケンニハ、衡ハナクテモアリナン、何ノ爲ニ衡ヲ作レルヤ、又而衡合セテ一尺二寸八分、是ハ長キニ過ザルヤ、或ハ筍虡ニカクルニ旋ヲ施シテノ後、此寸法制作ニテ旋ヲカカヘザレバ、鍾フリユルギテ撃ガタキ故ナルベシ

一 侈ハ鍾ノ形チ内ニテシマリタル也、弇ハ内ノヒロキ也、侈ハ口ニテヒロキ故、聲ヲ早ク吐シマフ也、故ニ下ニ侈則柞ト云、柞ハ筰迫也、セマリテシメ出スガ如ク早ク聲ノ盡ル也、聲大外也ト注ニ云ヘルハ、大ニ外ヘ出去ルト云義也、弇ハ口セマキユヘ、聲欝々トシテ内ニコモリテノピズ

一 大鍾小鍾ノ厚サノコト、鼓間ハ鼓ト鉦トノサカヒ也、鉦間ハ鉦ト舞トノサカヒ也、前ニ舞脩ト云タル所也、是皆九寸六分也、一尺六寸ヲ十分ノ六分ナル故、注ニ同方六ト云、而今宜㆑異トハ、鐘ニ大小アレバ厚薄モ不同ナルベキト也、然ルニ經ニ、同方六ノ所ニテ、大小鍾トモニ十分一ト云ヘルハ厚薄ナキ也、是通ジガタキト也、注ニ、「又十分之一猶㆓大厚㆒」トハ、大小鍾ノ厚薄ナキハ不可ナルニ、又十分一ニテハ厚キニ過タリト也、故ニ經文ノ鼓間鉦間ヲ鼓外鉦外ト改テ見ベキコトヲ下ニ云也、經ニ鉦間ノコトヲ舞脩ト前ニ云タリ、ココニテモ舞脩ト云ベキニ、鉦間トアルモイブカシ、誠ニ鄭氏ニ從フベシ、注ニ、「鼓外二鉦外一」ト云ハ、鼓ニテハ下ヲ外ト云、鉦ニテハ上ヲ外ト云也、鼓外二トハ鼓間九寸六分、其下ニ銑間一尺二寸八分アリ、又其下ニ銑徑一尺六寸アリ、是鼓外ニハ二段ノ寸法アリ、

一尺六寸ニテ鼓間ノ九寸六分ヲ去リテ六寸四分アリ、是ヲ十分シテ六分四釐、大鍾ノ厚サ也、鉦外ニハ鉦間九寸六分ノ外ニ、六寸四分ノ寸法一段ノミ也、鉦外一トハ是ヲ云、九寸六分ノ內ニテ六寸四分ヲ去リテ三寸二分、又此三寸二分ヲ十分シテ三分二釐、小鍾ノ厚サナリ、經文ニテハ大鍾小鍾ヒトシク厚サ九分六釐也、鄭氏ノ說ハ大鍾ノ厚サ六分四釐、小鍾ノ厚サ三分二釐也、此所ノ疏文明ナラズ、故ニ愚意ヲ以テトクコトカクノ如シ、旋ノ寸法經ニ見ヘズ、隧ノコトハ　ルヽコトナシ、後ニ圖ヲ出ス

㮚氏

一　量ノコト經文明ラカ也、云ベキコトナシ、先金錫ヲヨクヨクキタヒ、其後カケ分ケ、其後平正ニシ大小ヲトヽノヘ、其後イカタノ中ヘ鑄コム、是ニテ量成ル、論語ニ、「謹ニ權量ニ」ト云ヘルハ是也、內ハ一尺六面ニテ外ハ圜シ、圜天方地ノ義、天包地外ノ形ナリ、其實ハ外ニカクノ如ク圓脣ヲカマユレバ概ヲ用ユルニ宜シ、徒ニ法象ノミヲ取ニハ非ズ、注ニ、四升曰ㇾ豆、豆ハ中人一日ノ食也、日本ノ一人扶持也、四豆ハ區ト云、四區ハ鬴ト云、是皆四陪也、何ヲ以テカ四陪ニテカゾフルゾト云ニ、一尺六面ノ量ニテ、量面ニ十字ヲ引テ見レバ、四ツニ分レテ一分ハ一區也、一區ノ量四方五寸ニ深サ一尺也、又四ツニ分レハ四方二寸五分、深サ一尺ニテ一豆ナリ、此二量ハ小サキマス也、奇零ヲハカル爲ニ小サキマスヲコシラフル也、是今ノ世ニ二合半ノマスヲ用ユルト同意也、故ニ鬴ヨリ下ハ四分一ノ

割ヲ用ユル也、鬴ハ今ノ一升マスヲ用ユルト同意也、故ニ鬴ヨリ上ハ一鬴二鬴トカゾヘテ十鬴ヲ鍾ト云、コノ故ニ四倍ト十倍ノ數ハ出タリ、然レバ鬴ハ何レノ國ニテモ、大抵民間通用ノマス也、今ノ一升ノマスヲ四方共ニ用ユルガ如シ、左傳ニ、晏子ガ齊舊四量ト云ハ、他國ノ人ニ對シテ云タル辭也、齊ニ限リテ此四量ヲ用ユルト云ニハアラズ、故ニ此經ノ量モ鬴也、諸國通用ノマスナルコト見ルベシ、其臀ノ實一豆兩耳各一升、コレハ少シノコトナル故、概ヲ用ルニ及バザル故臀ト耳トニ設クル也

文炳按ズルニ、鬴ノ形チ外ヲ圜ニシ內ヲ方ニス、方ト圜トノ間粟米ヲ容受セザル處是㡿也、方尺ノ內ニ鬴六斗四升ヲ受ルヨリ、此量ヲ即チ鬴ト名ヅク、故ニ「鄭氏以ニ其容一名レ之也、其數必容レ鬴此言三內方耳圜ニ其外一者、謂ニ之㡿二」ト云ヘリ、或人ノ量考ニ、漢志ノ「方尺而圜ニ其外一旁有レ庣」ト云ヨリ說ヲ起シテ、周禮ノ文ヲ味レバ、一量ニ方圓ヲ具テ、方ハ米圓ハ粟庣コノ限ヲナス、鄭注ノ㡿ノ字、庣ノ字ノ誤ナルベシ、庣ハ量內ニ銅板ヲ以テ方箱ノ底ナキガ如キ物ヲ設ク、隅徑九厘五毫是ヲ庣ト云、米ヲ量ルニハ庣內ヲ用ヒ、粟ヲ量ルトキハ庣ノ內外ニ滿シム、一量ニ粟米ノ法ヲ用フル也ト云ヘリ、漢量ハ一斛ヲ受ル也、方尺ノ內ヘ一斛ヲ受ベキ理ナシ、方一尺一分三厘四ニヲ容ル、圓內ナラデハ、一斛ヲ容受セザレバ、漢志ノ量ハ其說ノ如ナルベシ、粟氏ノ量ハ其實一鬴トアレバ、方尺ノ內バカリ也ト知ルベシ、㡿ノ字ヲ改ムベキコトニ非ズ、鄭注ニ、「於レ今粟米法、少ニ二升八十一分升之二十二二」ト云ヘルハ、周ノ六斗四升ハ漢ノ六斗一升七合二勺八撮ニテ、二升二合七勺二撮少シト知セタル也、粟氏ノ鑄ル量ハ、民間常用ノ量ニ非ズ、官司ニ置テ通用ノ量ノ法則トスル爲也、故ニ玆器維則ノ銘文アリ、天下通行ノ量ハ木制ナルベシ、量ノ重サ三十斤ニ六斗四升ノ實ヲ加ヘテハ、重クシテ日用ニハ不便ナルベシ

物氏量考云、「一升今八勺九撮有奇、四升爲ニ一豆一、今三合五勺九撮有奇、四豆曰レ區、則一斗六升、今一斗四合三勺七撮有奇、釜或作レ鬴六斗四升、今五升七合四勺八撮」ト云ヘリ

一 甲ノ大概ハ經文ニ明ラカ也、其細詳ハ考ガタシ

函人

鮑人

一 經文ヲ按ズルニ、此工ハ甲札ヲ作ルコト第一ナルベシ、詳ニハ考ガタシ、注ニ、蒼頡篇ヲ引、是秦ノ李斯著セリト云ヘリ、鞄ノ字字書鞄ト同ジ、「乳兗切、音軟、柔皮革也、六書正譌治ニ皮革ヲ者、以レ瓦爲レ竈、而反覆熏ニ揉之ヲ、故从レ四从レ瓦从レ北、北者反覆之狀、會意」ト云ヘリ、未ダ毛ヲ去ザルハ皮也、毛ヲ去ヲ革ト云、柔カニナリシヲ韋ト云

文炳云、鮑人爲某ト云ハズシテ、之事ト云ハ此バラナル所ナクシテ、凡皮革ノ細工スルモノヲ云ト云説アリ、サモアルベシ、久平賓則禮注曰、「言レ氏者世ニ其官ヲ、言レ人者終ニ其身ヲ也」ト、楊升庵集ニ見ヘタリ

人

一 三鼓ノ寸法鄭注ニ詳カ也、鼖鼓モ上三正ナルベシ、晋鼓ニ上三正トアルヲ承テ、ココニハ云ハザル也、下ニ皐鼓ニテ倨句磬折ト云ヲ見レバ、鼖鼓ハ上三正ナルコト見ツベシ、又注ニ、鼓人ノ文ヲ載テ「以ニ鼖鼓ヲ鼓ス軍事ヲ」ト云ヘリ、然ルニ兵車ノ輿六尺六寸、其深四尺四寸、何レノ處ニ長八尺面四尺ノ

鼖鼓ヲ載スベケンヤ、是ヲ以テ見レバ、「將在二鼓下一」ト云ヘル、鼓ハ此鼖鼓ノコトニテハ非ザルベシ、或ハ別ニ鼖鼓ヲ載スル車アリテ、大將ノ鼓鳴ルヲ聞テ、鼖鼓ヲ鳴シ三軍ヘ傳フルナルベシ

一　良鼓瑕如二積環一」トハ、鼓面ヲ云ナルベシ、故ニ注ニ、革調急ト云ヘリ、ハリツメテ革ノ文理見ユル也、積環トハ環ヲ積タル貌也、半環ノ如クナルベシ、或ハ波浪ノ立カサナリタルニ似タルナルベシ、經ニモ注ニモ、漆ノコトヲ云ハズ、疏ニ、「瑕與レ環皆謂二漆之文理一」ト云ハイカニゾヤ、前ノ鞹人ノ環灂ニテカクノ如ク云ニヤ、環灂トハ一向殊ナルコトナルベシ

一　鼓大而短」ヨリ下疏ニ「鼓之病」ト云ヘルハイカニゾヤ、三鼓共ニ面四尺ニテ、其長ハ六尺六寸、八尺、一丈二尺ト三等ノ不同アリ、此經ヲ以テ鼓病ヲ説トセバ、六尺六寸ト一丈二尺ノ鼓ハ病鼓ナルベシ、イカニトナレバ三鼓皆面四尺ナルユヘ也、然レバ此經ヲ鼓ノ病ヲ説トハ云ガタシ、聲疾而短聞ナルヲ欲スル時モアリ、舒而遠聞ナルヲ好ム時モアル故、或ハ大ニテ短ナル鼓制モアリ、小ニテ長ナル鼓制モアリト云義ナルベシ、前ニ鍾ノ制ヲ説タル文ハ、鍾ハ長短ニ隨テ經ノ大小モ替リアル故、鍾ノ病ヲ説タルトモ云ベシ、三鼓ハ面皆四尺ナレバ、同文ニテモ同義トハ云ガタシ、疏ノ説ハ同文ニ泥デ見タルモノ也

畫繢

一　畫繢之事經文明ラカ也、赤ハ从レ土从レ火、南方ノ正色ニテ土ニ生ズ、自然ノ色、紅ハ从レ糸从レ工

人工ニ成ル、古ヘ朱ヲ貴ンデ紅ヲイヤシム、是自然ヲ貴ブ也ト或人予ニカタル

鍾氏

一 染羽ノコト染色ノ名詳カニシガタキ所也、經文ノ意ヲ玩スルニ、先丹秫ニ朱ヲヒタシ置コト三月ソノ後コレヲムスナリ、熾トハムス也、サテ其甑ノ湯ヲ汲トリテ、是ヲ甑中ノ朱丹秫ニソソグ也、コノ時丹秫ノ間ヘ染ベキ羽ヲマジヘ置ナリ、カクノ如シテ上ヨリハ湯ヲ下シ、下ヨリハ火ヲ熾ンニシテムス也、ヨキコロニ取出ス、是一入ナリ、再入三入イヅレモカクノ如クナルベシ、朱丹秫ヲ煮イダシ、其汁ヲ羽ニソソギテ染ルトバカリニハ非ザルベシ、是誠ニ臆見ナリ、當否ヲ知ラズ、鄭注ニ「以ニ炊下湯沃ニ其熾ニ蒸之一、以漬レ羽、漬猶レ染也」ト云ヘル文モ、愚意ニヒトシキニ似タリ、シカラズンバ「以ニ炊下湯沃ニ熾一蒸之一」トハ云マジキ也、「以レ汁沃レ羽」ト四字ニテスムベキ也、又疏ノ說ハ、鄭注ノ蒸之ノ二字ニヅラキ也、經ニ熾ト云ヒ、注ニ炊ト云ヒ蒸ト云、皆ムスコトナリ

慌氏

一 慌氏ノコト今明カニ知ガタシ、其文義バカリハ鄭注ニテタヤスク見ユ、大抵湅絲一法、湅帛一法、

皆水湅ト云ヽ水ハ灰水ナリヽ然ルニ疏ニヽ水湅灰湅二法アリテヽ絲帛トモニ此二法アルベシト云ハヽ經ニモ注ニモヽ何レノ所ニカ二法ヲ見シヤヽ誤リノ甚シキナリヽ練絲水漚七日ヽ暴七日ヽ十四日ニテ成ルヽ湅帛渥淳ヨリ沃盝ノ功七日ヽ暴七日ヽ又十四日ニテ成ルヽ鄭ノ解甚ダ明ラカ也ヽ理ニオイテモ然ルベキ也

玉人

一 三代ノ時玉ト云ヘルハイカナル玉ニヤヽ今ノ水晶ノ類ナルニヤヽ其種品多カルベシヽ是ヲ器ニ用テ飾リトスルニ付テハイヨイヨ名類多クナル故ヽ說文以下字書ニ玉ニ从ブ字甚多シヽ天地ノ物ヲ生ズルコトヽ時有テハ盛衰スベケレドモヽ大抵ハ大ニ異同アルベキニ非ズヽ古ハ宗廟禮樂ノ器玉ヲ以テ飾ルヽ又天子以下各等差分明ニテヽ上下ノ間僭亂ナシヽ故ニ妄リニ玉ヲ費スコトナケレバヽ玉ニ不足ト云コトナシヽ後世ハ僭奢ニ至リヽ且ツ民間ニモ富豪ノモノハヽ妄ニ玉ヲ用テ玩器ヲ飾ル故ヽ玉ノ用甚廣クナリテヽ甚ダ得ガタキモノニナレリヽソレニヨリ知ラザルモノハヽ三代ハ玉多クヽ後世ハ玉少ナキト思ヘリ

一 鎭圭尺二寸ハ長ヲ云也ヽ博ト厚トヲ云ハズヽ今ヨリハカリガタシヽ然ルニ鎭圭命圭皆手ニ持モノナレバヽ大抵厚博ノホドアルベシヽ今臆ヲ以テコレヲ云バヽ博ハ四寸ヽ厚ハ一二寸ノ間ナランカヽ其

形狀ハ上ニテ山形ノ如ク削リ成テ、下ハ直ナリト見ヘタリ、此削ル所ハ一尺二寸ノ内、上一寸五分ノ所ヲ削ルナルベシ、下ノ冒ヲ四寸ト云ハ此所ヲ冒スルナルベシ、サテ玉ハ古ノ上幣ナレバ、今日本ノ黄金ノ大判ト云モノヲ用テ、王公ノ幣トスルト同意ナルベシ、故ニ天子諸侯守レ之ト云テ、其下ニハ通ゼヌ也、今ノ世小判ト云モノ、民間マデ萬貨交易ノ用トナスモノニテ、彼大判ハ小判ヨリ出タル形狀ノモノナレバ、上幣ナレドモ其品賤シキニ類セル故、王公自カラ是ヲ執テ禮ヲ行フコトナシ、三代ハ玉ノ徳ヲ君子ノ徳ニ比スルト云義ヲ立ルニヨリ、王公コレヲ執テ禮ヲ行フヲ賤シトセズ、又瑞信トナス、用ヲ加ヘテ用ル故、イヨイヨコレヲ重ンズルヤウニ成タル也、瑞信トナスト云ハ、後世印璽ヲ用ユルト同意也、コノ二義アル故ニ、天子以下守レ之ト云コトアル也、鎮圭ト名ヅクルモ此義ヨリ起レル名也、コレ制度ノカハリ也、迂濶ナルコトニハ非ズ、天子ハ則天ノ義ニテ、一歳十二月ナレバ一尺二寸ナルガ、然ラバ博四寸ニテ四時ニカタドリ、厚三寸ニテ一月三十日ニカタドリ作レリトモ云ベシ、九ハ數ノ究マリナレバ、公ハ人臣ノ第一ニテ九寸ニ作レルカ、其次ハ降殺以二ナル故七寸カ、此厚博ハ九寸七寸ニ應ジテ作リ出ス古法アルベシ、是ヲ命圭ト名ヅクルハ天子ヨリ此人ヲ命ジテ公トシ、侯伯トシ、土地ヲ錫ハルハ大ナル恩澤ナレバ、尚又其祝儀トシテ上幣ヲ錫ハル也、公侯伯コレヲ錫ハリテ、ヤガテソレヲ瑞信トシテ、後來朝覲ノ時親カラ捧ゲ持テ獻上スル也、是贄ノ第一也、天子冒ヲ以テカノ圭ニ合セテ詐僞ナキヲ知リ、其後再タビカヘシ下サル、公侯伯天子ノ恩澤ヲ以テ世々封疆ヲ守

ル義ヲ表シ、天子ハイヨイヨ此封疆ヲ永永ニ傳ヘヨトノタマフ義ヲ以テカヘシ下サルル也、義ハカクノ如クナレドモ、カヤウニ義ヲ行フテ、其實ハ上下トモニ財幣ヲ費スコトナク、儉約ニテ奢侈ナキ制度也、士ノ相見ニ雉ヲ贄トシ、是ヲ執テ相見ノ禮ヲ行フニ、受タル人又右ノ雉ヲ執テ來意ヲ謝シ、此贄ヲ其ママ受ベキハ憚カリアリトノベテ雉ヲカヘス也、是禮ヲ行フナレドモ、其實ハタガヒニ財ヲ費サズ、儉約ニ歸スル也、儉ナラザレバ禮儀長ク行ハレザル故、禮ノ本ハ儉ナリト知ルベシ

文炳按ズルニ、圭ノ厚博ハ、博三寸ニテ厚サ五分也、上左右ヲ剡ルハ一寸五分也、天子モ諸侯モ皆厚博ハ同クテ、唯命數ニ依テ長短アルノミ也、雜記邦ニ聘禮ニ見ヘタリ、上野翁遺忘セルナルベシ

圭ノ名ノコト、鎭圭トハ、鎭ハ安也、四方ヲ安鎭スルニ本ヅク、四鎭ノ山ヲ琢飾ス、故ニ鎭圭ト云、四鎭ノ山ハ楊州ノ會稽、靑州ノ沂山、幽州ノ醫無閭、冀州ノ霍山也ト云ヘリ、桓圭トハ、桓ハ楹ナリ、諸侯ハ屋下ノ桓楹ノ如ク上ヲ安ズルノ義ニテ、執ル所ノ圭ニ雙植ノ桓ヲ琢飾ス、故ニ桓圭ト云、信圭躬圭ハ、皆人形ヲ琢飾ス、唯其文ノ麁縟アルバカリ也、鄭康成信圭ノ信ハ、身ノ誤トス、身圭躬圭ハ其行ヲ愼デ身ヲ保ンコトヲ欲スルノ義ニテ、人形ヲ琢飾スル也ト云ヘリ、大宗伯ノ鄭注ニ見ヘタリ

一　冒ハ疏ニ、顧命ノ孔傳ヲ引テ方四寸ト云ヘリ、是ハ形狀ナリ、鄭氏ハ其義ヲ云ヘリ、筆管ノサヤノ如ク、上ヨリオヲヒサスナルベシ、命圭ハ印璽ノ用ヲ乘タルモノ故、コノ冒ニ合セテ、後世ノ符ヲ合スルヤウノ制度アリテ詐僞ヲ防グベシ、詐僞ヲ防グウヘバ瑞信ヲ齊フスルト、孔傳ニ云ヘルハ知レタルコト也

一　全龍瓚將ノコト、上ノ文ヲ承テ圭ヲ作ルニ、天子ハ全ク玉ヲ用ヒ、公侯伯次第ニ石ノマジリタル

玉ヲ用ルコトヲ云ト鄭注ニ云ヘリ、後世ノ説ニハ裸器ヲ説タル文ナリト云ヘリ、龍瓚將ノ字ニ依テ見ンニハ、後世ノ説誠ニ分明也、サレドモ上下ノ文ニヨレバ、此一節ニハカニ裸器ヲトカンコト連續ニ非ズ、故ニ鄭氏ハ龍ノ字ヲ尨ニ作カヘタル司農ノ説ヲ引、又龍瓚將ノ三字ヲ皆玉ニツキテノ玉石マジハル名ト云ヘリ、又タトヒ何レノ説ニ從フトモ、下ノ文繼「子男執ニ皮帛ニ」ト云ニ連續セザルニ似タリ、闕文多キト見ヘタリ

一　中必ノコト、天子ト二字ヲ置テ見レバ、天子ノ圭ノミ中必アリテ、其餘ハ中必ナキナルベキカ、凡ソ圭ニハ繅藉アリ、繅藉ニハ絇組アリ、此絇組ハ藉ニツキタルヒボニテ、圭ヲ藉ニノセ絇組ニテ結ビテ墜ザルヤウニスル也、是ハ尊者ヘ奉ルトキノコトニテ、今ノ人ノ臺ト云モノニスユルコトアルニヒトシ、然レバ天子自カラ圭ヲ執ルニ何ゾ藉ヲ用ヒン、藉ナキ故ニ別ニ圭ノ中央ヲ約スル組アリテ、天子是ヲ圭ニ取ソヘテ持タマフナルベシ、是ヲ中必ト云ナルベシ、下ニ置タマフトキハ藉アルベシ、疏ニ、繅絇組ヲ一物トセルハ相違ナランカ、又鄭注ニ、以レ組約ト云ヲ、後世ノ注ニ穿鑿圭中ト云ヘルモ誤ナルベシ、圭ノ形ハ長キ故イカヤウニモ約スルニ足ルベシ、又其博三寸ニ過ザル故、中央ヲウカチテ孔ヲセバ折レヤスカルベシ、故ニ鄭氏ハ約ト云テ穿鑿トハ云ハズ、子男ノ璧ハ形狀圓カナル故、組ヲ以テ約スルコトアシキ故、中央ニ孔アリテ組ヲ以テ貫ヌキ結ト見ヘタリ、是ニ因テ圭ニハ孔アルコトヲキカズ

文炳按ズルニ、繅藉ハ玉ヲ載スルモノ也、長廣サダマリタルモノニアラズ、玉ノ大小ニ隨テ、玉ホドノ大キサニスルナリ、木板ニテ質ヲ造リ韋ニテ包ミ、其上ニ采色ニテ水草ヲ畫ク也、故ニ繅或ハ藻ニ作レリ、此藻ヲ畫クニモ尊卑ノ別アリ、天子ハ五采五就トテ、五色ヲ以テ一色ニテ二行ヅツ畫テ十行也、諸侯ヨリ天子ヘ奉ル繅ハ朱白蒼ノ三采ニテ、六等ニ畫クナリ、諸侯タガヒノ聘問ニハ、朱綠ノ二采ニテ四行ニ畫ガクコト也、又絢組ハ玉ヲ繫グ五采ノ組也、垂タル時玄ハ上ニナリ、纁ハ下ニナル也、其長ハ一尺ニテ尊卑ノ別ナシ、總テ圭璧ノ類用ヒザル時ハ櫝ニ入レオキ絢組ヲ玉ニ繫テ飾トシ、用ユル時ハ繅藉ニノセ失墜ナキヤウニ絢組ニテ結ブ也、常ニ藻藉ニツケオクモノニハ非ズ、聘禮並ニ大行人ニ見ユ

一　四圭尺有二寸トアレドモ、其詳ナルコトハ疏ニ「禮既無レ文」ト云ヘレバ、イカニトモ云ガタシ、臆ヲ以テ云ニ、此圭ニテ天ヲ祀ルニハ、必繅藉ノ類アリテ載スベシ、又組ヲ以テ約スベシ、中央ニ孔アル璧ノ形ヲ以テシ、四方ニ皆圭アルコトハ、組ニテ約スル爲ナルベシ、然レバ一尺二寸ハ中央ノ璧九寸バカリモ有テ、四圭各一寸五分バカリナルベキト思ハル、凡璧ト云ハ、孔三寸ニテ兩邊モ三寸ヅツアリ、合セテ九寸ナル故、四圭ヲモ推知テカクイヘリ

文炳按ズルニ、四圭有邸ノコト、典瑞ノ鄭注ニ云、「於二中央一爲レ璧、圭著二其四面一、一玉俱成」賈疏ニ云、「璧之大小、圭之長短無レ文、天子以二十二一爲レ節、蓋四廟圭各尺二寸、與二鎭圭一同、閒其璧爲レ邸、蓋徑六寸摠三尺、與二大圭長三尺一又等、故云二一玉俱成一也」ト云ヘリ、天ヲ祀ル圭ナレバサモアランカ、圭璧トモニ一尺二寸トスレバ、地ヲ祀ル兩圭五寸、有邸モ圭邸トモニ五寸ナルベシ、公ノ命圭九寸ナルニ、地ヲ祀玉五寸ナルベキヤウナシ、賈氏ノ說ノ如ナルベシ、然レバ兩圭有邸モ一圭各五寸ナルベシ、此邸ハ琮ナルベシ、琮ハ八角ノ玉ナリ、地ヲ祀ルニ用ユ、大宗伯ニ見ヘタリ

一　大圭ハ長三尺ニ作ル、長大ノ圭ナル故大圭ト云、是モ厚ト博トヲ云ハズ、一ニハ珽ト名ヅク、珽

ハ六寸ト云ヘリ、上ニテ六寸ノ所ヨリ下ヲ兩邊ヨリソギ去ル故、ソガザル所六寸ハ椎ノ形ヲナスト云ヘリ、又椎ヲ終葵ト云、杼ハ稠削也ト云ヘリ、天子服レ之トハ、此大圭ヲ大帶ニ搢ムモノナル故服スト云也、サレド右ニ搢ムカ、左カ、又コレヲ服シテ何ノ用ニスルト云コトモ見ヘズ、疏ニ、注ノ明白炤スト云ヲ釋シテ、「君子於レ玉比レ徳焉」ト云ヘリ、是ハ玉ヲ以テ作リタル義ハサモアルベシ、サレドモ是ヲ服シテ何ノ用ヲナスニヤ、按ズルニ、疏ニ、玉藻ヲ引テ釋セリ、凡諸臣ノ笏ヲ搢ムハ、君上ノ前ニ云ベキコトヲ、兼テヨリ笏ニ誌シテ遺忘ノ備ヘニスル也、天子モ命令スベキ品々ヲ、此大圭ニ誌サルルナルベシ、又笏ヲ搢ムハ敬事奉上ノ義ナレバ、天子モソノ義ニヨリテ大圭ヲ搢ンデ日ニ朝セラル、典瑞ニ云ガ如シ、杼レ上終葵首ニ作ルコトハ、上ヲ杼ルハ、搢ムトキ大帶ニアタル所ヲソギテ細クスレバ搢ムニ便ナル故也、終葵首ハ、此終葵ノ故ニ下ヘヌケヌ也、椎ヲ作ラザレバ玉質精潤滑澤ナル故スベリテ落ル也、鎮圭ハ手ニトルモノナルユヘ杼上ニ及バズ、大圭ハ帶ニ搢ムユヘ杼上ニセザレバ、腰ニ便ナラズト知ルベシ、又厚ト博トハ鎮圭ニ準ズベシ、長三尺ニ應ジテ厚ク博ク作ランハ、甚ダ重クテアシカルベシ、玉ハ石ヨリ重キモノ也ト云ヘリ、前ニ劍ノ上制ヲ三尺ト云ヘリ、然レバ王者ノ躬ノ長短ニヨリテ大圭ヲ短クモ作ルベシ、三尺ヲ長キノ極ト心得ベシ、終葵首ノ所ハ劍柄アルガ如シ

一　土圭裸圭注疏明ラカ也、琬圭ハ使者ノ執ルモノナル故繅藉アリ、下ノ琰圭ニ繅藉ヲ云ハザルハ文ノ省ケル也、厚博ハ大概命圭ニ準ズベシ、其形狀ハ今ノ小判ノ如シ

一　琰圭ノ琰直チニ剡ノ字ニ讀タリ、上ニ祼ヲ灌ノ義トシ、琬ヲ圜トシ、ココニ琰ヲ剡ニヨム、皆古人ノ字學ニ明ラカナル故也

一　璧羨ハ此物ノ名也、度尺ハ尺ヲ度ルトヨムベシ、縱横九寸ノ璧ヲ、横一寸減ジ縱ヲ一寸加ヘテ尺トスルヲ云也、孔ハ三寸ト云ハ、縱横九尺ノ璧ハ、元來孔三寸アルヲ其ママノ寸法ニテオクナリ

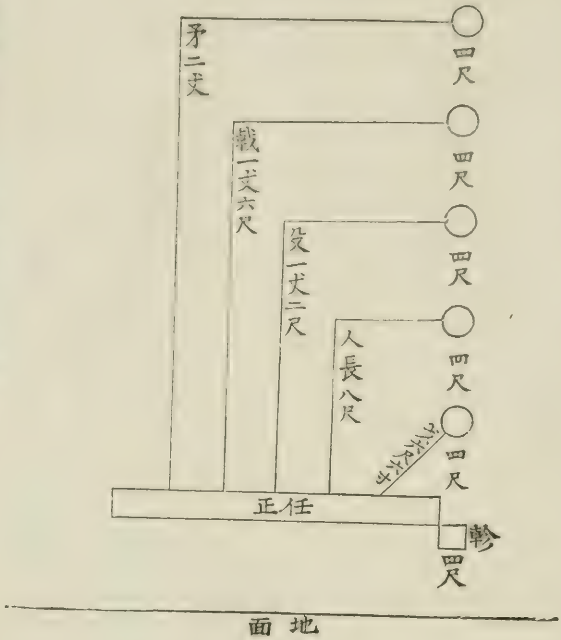
一　圭璧五寸、コノ五ノ字恐ラクハ九ニ作ルベシ、天子ノ鎭圭一尺二寸、公ノ桓圭九寸ヲ以テ推スニ既ニ天ヲ祀ル四圭一尺二寸ト上ニアル故、今日月星辰ヲ祀ル圭璧ナレバ、一尺二寸ヲ降シテ九寸ナルベキコト明ラカ也、何ゾ遽ニ五寸ニセンヤ、五寸ノ内一寸ハ圭トナシテハ璧邸四寸アルノミ、モシ九寸トナサバ、一寸五分ハ圭トナシ、七寸五分ハ璧ノ體ニテ、兩畔ト孔ト各二寸五分ニテ然ルベキニアラズヤ、明ノ徐昭慶ガ説ニ、璧五寸圭一寸ニテ、共ニ六寸ト云ヘルハアタル所ナシ

文炳按ズルニ、天ヲ祀ル四圭有邸ヲ三尺トシ、地ヲ祀ル兩圭有邸ヲ一尺五寸トスレバ、此玉モ圭五寸璧五寸ニテ總テ一尺ナルベキカ

一　璧琮九寸方ヲ琮ト云ト云ヘリ、方ナル故繅藉ニ載スルニ穴ヲカラザル故ニ、琮ハ孔ナシ

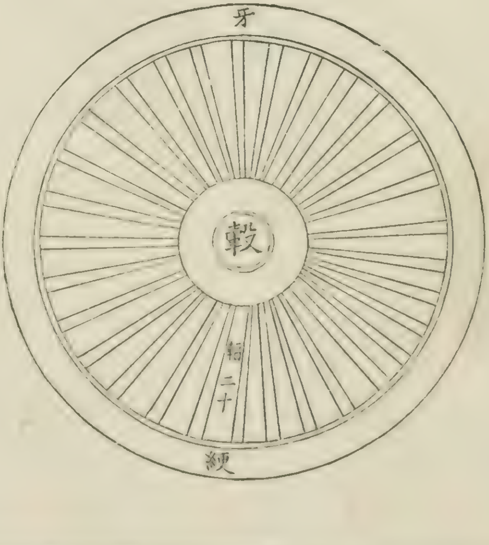
一　穀圭ハ七寸ノ命圭ト形狀ハヒトシクシテ、穀文ヲ雕刻セルナルベシ

兵車六等之圖

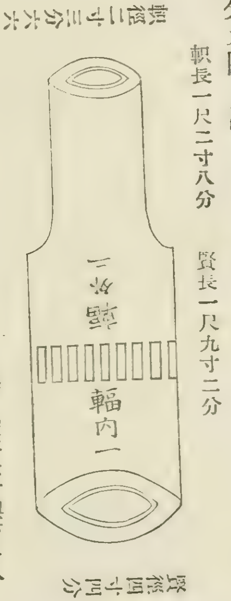


文炳按少儀曰乘兵車出先刃入後刃注不以刃嚮國也

輪崇六尺六寸



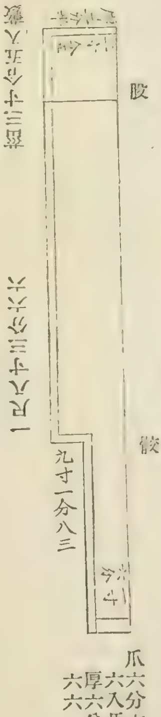
文炳云右輪ノ圖ハ成就ノ圖也是ヨリ下轂輻牙ノ三材ヲ一物ヅツ取分テ圖ヲ出ス



轂圍
長三尺二寸
轂圍三尺二寸
徑一尺六分六六

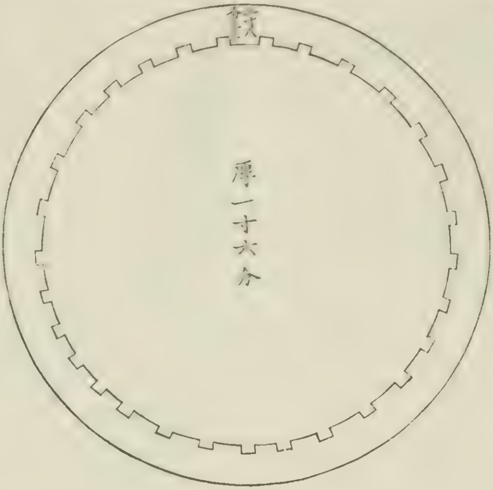
輻長二尺七寸五分五

文炳云輻ノ長短厚博明文ナシ誠ニ考難シ今左ノ經注ヲ考ヘテ圖ヲ出ス
以其圍之防梢其藪量其鑿深以爲輻廣竝其輻廣以爲之弱參分其輻之長而殺其一參分其股圍去一以爲骹圍綆參分寸之二出於輻骹鑿之數

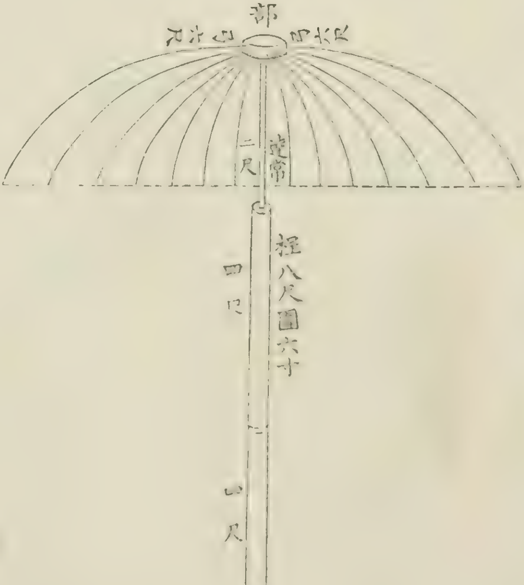


牙

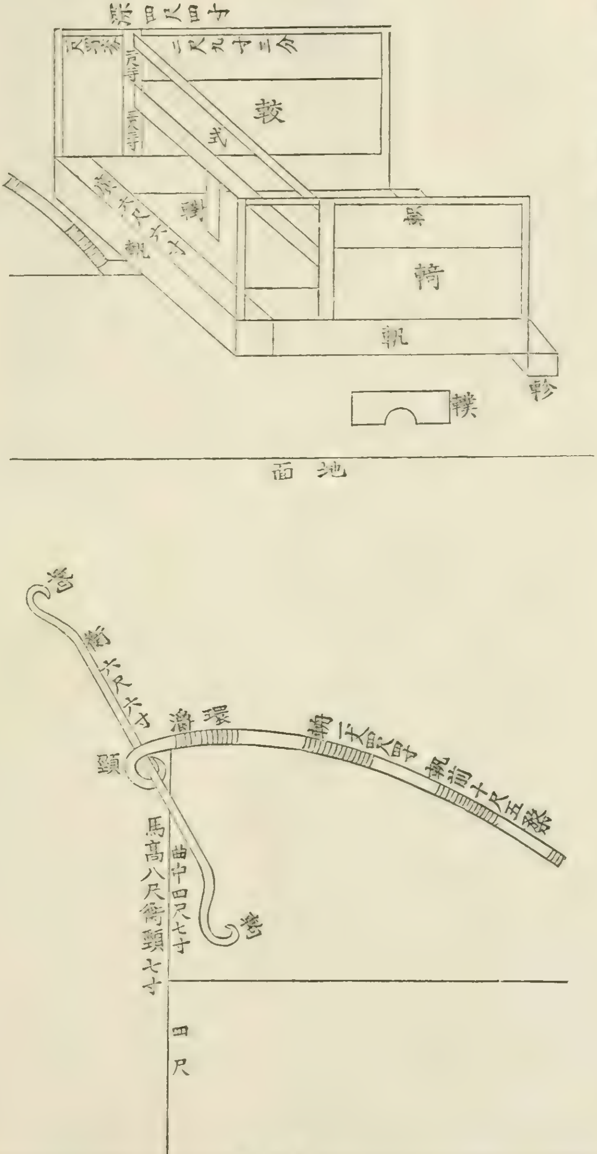
文灼云牙ハ圖ノ如ク輻端ノ爪ヲサシコム孔ヲホリ爪ヲサシコミテ後其上ヲ綆ニテ堅ムベシ故ニ經文既其綆欲其蚤之正也ト云ヘリ牙ト名ヅクルコトモカクノ如ナル故ノ名ニヤ



蓋　部徑六寸厚一寸弓二十八



輿軒　文炳大略ヲ圖ス尺寸ヲ見ルバカリノ圖ト知ベシ

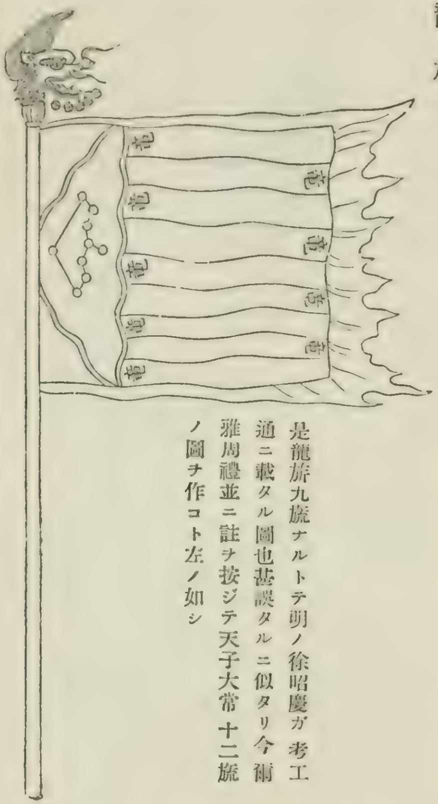


文柄按ズルニ、輈端ノ横木ヲ衡ト云、即チ軛也、釋名ニ、衡横也、横馬頸上也ト云ヘリ、此衡ノ兩端勾レル處ヲ軥ト云、左傳ニ、庾公差衛ノ獻公ヲ追テ、兩軥ヲ射テ還ルト云、即チ是也、コノ軥ニテ服馬ノ頸ヲ厄スル故軛ノ名アリ、一衡ニ服馬二ヒキヲ容ル也、驂馬ハ服馬ノ左右ニアリテ、服馬ト首ヲヒトシフセズ、軥軛別ニアリ、鄭風ニ、兩服齊首ト云ヒ、兩驂雁行スト云ヘリ

輈ノ長輿前十尺、輿下四尺四寸、通計一丈四尺四寸、輈ノ圍伏兎ニ當ル所當兎ト云、圍一尺四寸四分衡ヲ持ツ所頸ト云、圍九寸六分、軫ヲ承ル所踵ト云、圍七寸六分八也

轐ノ一名伏兎ト云、又車屐ト云、後世ノ注家、當兎ハ即チ伏兎也ト云ヘルハ非ナリ、輈人ノ文ニ、「十二分其輈之長一以二其一一爲二之當兎之圍二」トアルハ、伏兎ノ圍ノコトニアラズ、輈ノ長サノ十分一ヲ以テ、輈ノ伏兎ニ當ル所ノ圍ニスルト云コト也、故ニ「鄭氏輈當二伏兎一者也」ト注セリ、其下ノ經文ヘ頸踵ノ圍ノコトヲ述タリ、頸踵ハ輈ノ前後兩端ノ名也、當兎ハ伏兎ニアラザルコト明ラカ也、釋名ノ釋車ニ「屐似二人屐一也、又曰、伏兎似レ之也」ト云ヘリ、輿下軸上ニアリテ短小ナルモノ故、伏兎ノ名アルニヤ、外ヨリ見ユルモノニ非ズ、細詳ハ考ル所ナシ

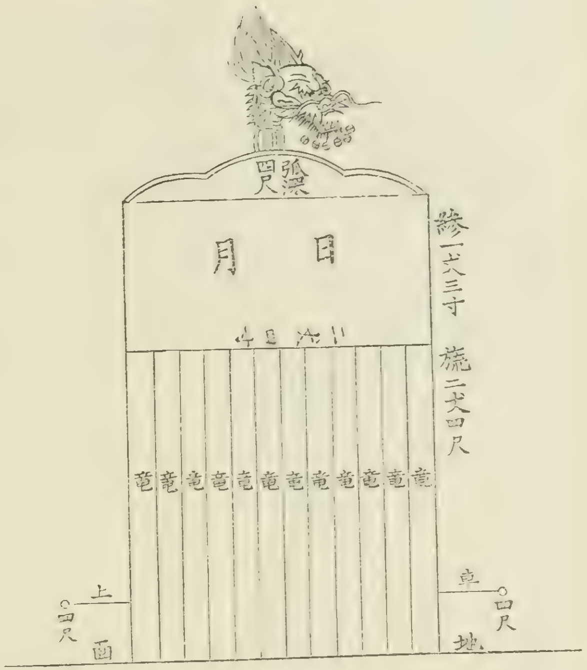
龍旂



是龍旂九旒ナルトテ明ノ徐昭慶ガ考工通ニ載タル圖也甚誤タルニ似タリ今爾雅周禮並ニ註ヲ按ジテ天子大常十二旒ノ圖ヲ作コト左ノ如シ

一 按ズルニ、杠ハハタザホ也、天子ノ杠九仞、爾雅ノ疏ニ、廣雅ヲ引クリ、四尺曰レ仞爾雅ノ文也、九仞ハ三丈六尺也、此杠素錦ニテ

大常十二旒



杠高三丈六尺

卷クコト爾雅ニ見ユ、竿頭ニ鈴ヲカクル、爾雅ノ注ニアリ、玉路ニ、此旂ヲ建ルコト巾車職ニ見ユ、竿頭龍首ヲ置コトイブカシ、姑ラク徐氏ガ圖ニ從フ

一　布帛ノ幅二尺二寸ヲ、二寸ハ縫シロニ除キ二尺也、此書ノ疏ニ見ユ、縿ノ廣狹考ヘガタシ、然ルニ十二旒皆此縿ニ屬スベシ、旒ハ全幅ナルベキ故、十二旒二丈四尺ナレバ、縿モ二丈四尺ナルベシ、下ヘノ長サモ考ヘガタシ、今一丈二尺トスルハ杠ノ三分一也、旒ハ縿ニ續キテ下ニ着ベシ、毎旒長二丈四尺也、縿ヲ加ヘテ三丈六尺也、毎旒綦組ヲ以テ兩邊ヲカザルコト爾雅ニ見ユ、綦組ハクミイト也、此旒二ツヲ一ツニ縷ヲ以テ綴連シテ、六人ニテ持テ地ヲ曳カヌヤウニスルコト夏官節服氏ニアリ、是一人ニ二旒ヅツ、左三人右三人也、玉路ニ建ルニ杠三丈六尺ト、地面ヨリ輿マデ四尺ト四丈也、縿旒

合セテ三丈六尺、弧曲ノ深四尺ニテ四丈ニナル、是ニテ旒地ヲ曳ク也、天子旌曳レ地ト節服氏ノ注ニ見ユ、地ヲ曳テハ旒ケガルル故、上ノ如ク六人ニテ持也、此旒ニ蛟龍ヲ畫ク、爾雅ノ注ニ見ユ、旌旗ノ類皆弧アルコト此經ノ注ニ見ユ、此弧ニテ縿ヲ張ル、弧ノ曲深ハ考ヘガタシ、今縿旒ヲ杠ノ長サニシテ、輿ヨリ地面マデノ四尺ヲ以テ弧ノ曲深ヲ四尺トシ、旒末地ニ至ルヤウニ積リシ臆見也、旒ニ蛟龍ヲ畫ク故、縿ナラデ日月ヲ畫クベキ所ナシ、又弧ニ韣アリ、コレハ弧ヲ卷テ縿ト續クベシ、此處ニ枉矢ヲ畫クナルベシ

文穎按ズルニ、布幅ノコト此書ノ疏ニ見ヘズ、儀禮士喪禮鄭註終幅二尺ノ疏中ニ見ヘタリ

大常ヨリ以下九旗トモ、竿頭ニ羽旄ヲ係ルコト詩ノ干旄ノ疏、並ニ司常ノ疏ニ見ユ

弧ハ竹ニテ作ルト明堂位ノ疏ニ見ユレドモイブカシ、繫辭ニ、弦木爲レ弧ト云文アリ、弧ハ木弓ノ名也、緣幅ヲ張ル弓モ木ニテ造レル故、弧ト云ナルベシ

王ノ大常ニ、有功ノ者ヲ銘書シテ、其人ト其功トヲ識ラシムルコト、夏官司勳職ニ見ヘタリ

諸侯ノ建ル龍旂ハ旂ニ交龍ヲ畫ク、一升一降ナリ、升ハ天子ニ朝スルニ象ドリ、降ハ國ニ還ルニ象レリト、司常職ノ注疏ニ見ヘタリ

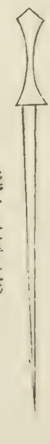
旌旗ノ長サ、天子ハ九仞、諸侯ハ七仞、大夫ハ五仞ニテ、杠ノ高サモ旗長ト同ジ、天子十二旒至レ地、諸侯九旒至レ軫、卿大夫七旒至レ軹、士三旒至レ肩ト、釋天ノ疏、節服氏ノ疏ニ、禮緯廣雅ヲ引テ述ルコト如レ此

削

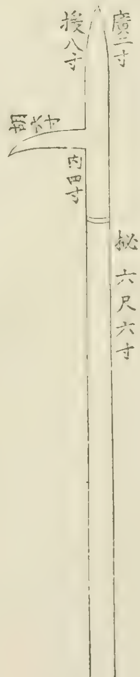
文炳云書刀ノコト經注ヲ考ルニ今ノ髮刀ノ如ク磨減シテ盡ルニ至ルマデ用ラル、コトヲ云ナルベシ疏ニ馬氏諸家僞偃曲却刃ト云ヘリ按ズルニ凡諸刀ノ刄ハ反曲ニ從テ外ヅラヘ刄ヲツクルコトナルニ削ノ刄ハ內ヅラヘツクル故偃曲却刄ト云ナルベシ博古圖ニ漢ノ書刀ノ圖アリ今減小シテコ、ニ出ス



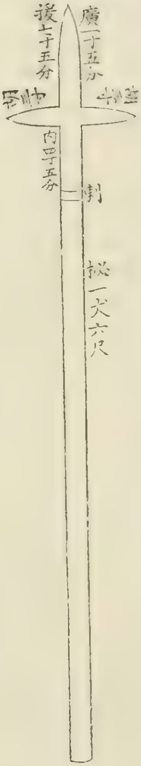
殺矢



戈



戟



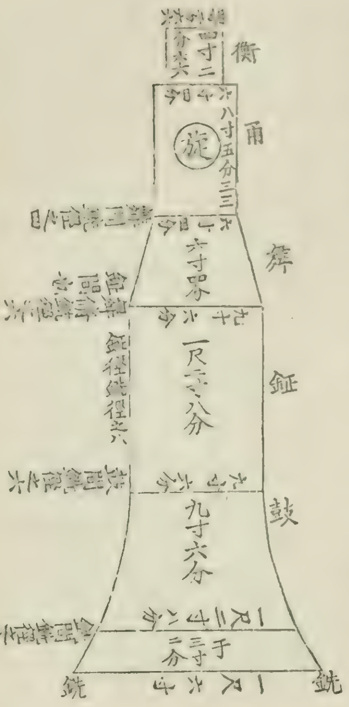
劍身長

上制二尺五寸
中制二尺
下制一尺五寸



一　鍾ノ形チ上ハセマク下ハヒロキ也、是ハ知レタルコトニテ、其中ノ或ハ于ト云鼓ト云、鉦舞ト云此所々タテヨコノ寸法經文ト鄭注ニ考ヘ、疏ヲ併セテ助トシ、左ニ圖ヲ作リ出ス、圖成テ其形チヲ見ルニ、甚タテ長クヨコ短クシテ疑ベキニ似タリ、然ルニ疏ニ、周語ノ度律均鍾ヲトクニ、黄鍾ノ律長九寸ニテ、鍾身ハ倍半也、倍半ハ二尺二寸半ト云ヘリ、是左ノ圖ト符合セリ、是ヲ以テ觀レバ、鍾形モトヨリカクノ如ト知ラレタリ、又表裡アリテ平ラメナル形ナルコトハ、鄭注ニ、鍾口寸ト云コトアリ、今ノ釣鍾ノ如ク圓キナラバ、寸トハ云ベカラズ、又疏ニ、「鍾狀如ニ今之鈴ニ不レ圜、故有ニ兩角ニ也」ト云ヲ見レバ、ナルホド平ラメナルモノニテ、其平ラメナル所ハ今ノ鰐口ト云モノノ如クナルベシ、今ノ鈴ハ圓也、賈氏ノ時ノ鈴ハ是モ今ノ鰐口ノ如ク平メ也ト見ヘタリ、故ニ如ニ今之鈴ニトハ云ナルベシ、元來注疏ニ圖アリシヲ、今ノ疏ニハ圖ナシ、故ニ見ヘカネタル所多シ

鍾



一　口ノ徑一寸、銑ヨリ銑マデ長一尺六寸、于ノ上邊鼓トノサカヒメ一尺二寸八分、是銑間也、コレヲ倍シテ二尺五寸六分、又一尺二寸八分ノ半六寸四分ヲ加ヘテ三尺二寸也、是鍾ノ身ノ長

サ也、舞鉦鼓于ヲ合セテ三尺二寸、是周語ノ疏ニ符合セリ

文炳考ルニ、鍾體ノ銑ヨリ始テ上舞ニ終ル、此舞ト云所ハ鍾ノ頂ニテ平ラカナル處也、鍾ノ形扁圓ナル故、經ニ、舞脩舞廣ト云ヘリ、舞脩ハ舞ノサシ渡シノ長キ方ヲ云也、即チ舞ノ横ナリ、舞廣ハサシ渡シノ短キ方ヲ云、即チ舞ノ縱也、舞間ハ舞ノ甬トツヾク處ニテ、甬ノ圍ノ半分六寸四分ノ間ヲ云也、此所ニモ篆アル也、注ニ、舞上下促ト云ハ、舞ノ上ニハ甬アリ、下ハ直ニ鉦間ニテ迫レル故也、注ニ、鍾口寸者其長十六也ト云ヘリ、舞ノサシ渡シ六寸四分ナルニ、口ノ徑一寸ナルベキヤウナシ、博古圖等ニ周漢ノ鍾ノ寸法ヲ載タルヲ考ルニ、鍾口一尺、横長一尺六寸ノツモリモ有、一尺五寸ノツモリモ有、イロイロ不同アリ、是ヲ以見レバ、鍾口寸ハ鍾口十ノ誤ナルベキカ、今試ニ舞廣六寸四分ニ十六ヲ乘ズレバ一尺二分四厘、コレ舞脩ノ寸法也、銑六ヲ舞脩トスルヨリハ六分四厘長シ、鄭注ニ云ヘル如ク、大數ノ寸法律ニヨリテ假リニ設ケタルコトニテ、其鍾ヲ鑄ルトキハ、制ニ隨テ大小長短ヲナスコト也ト知ルベシ

又鍾身ハ扁圓ナレドモ、甬衡ハ扁圓ナラズ、經文鍾身ノコトヲ云ニハ、間廣ト云テ圍ト云ハズ、鍾柄ノコトヲ云ニハ、長圍ヲ以テノベタリ、是衡甬ハ扁圓ナラズ、正圓ナル故也、甬ノ圍一尺二寸八分ナレバ、徑四寸二分六六、衡ノ圍八寸五分三三ナレバ、徑二寸八分四四也

又旋ハ甬ノ中央ニアタリテ甬ヲ圍メル鐶ナリ、鼻鈕アリテ是ニテ筍簴ヘ懸ル也、此所ヲ蟲獸ノ象ヲナシテ飾ルユヘ、旋蟲ノ名アリ、注ニ、「旋以レ蟲爲レ飾也」ト云ヘリ、其下ニ「玄謂、今時旋有二蹲熊盤龍辟邪一」ト漢法ヲ擧テ、古モカクアルベシト云ル意ナリ

鍾乳ノコト、枚謂之景ノ注ニ、「鐘乳俠鼓與レ舞、毎處有二九面三十六一」ト云ヘリ、「俠鼓與レ舞」トハ、鼓ヨリ舞マデノ間ニ、鍾乳ハサマレテアリト云コト也、鼓ト舞トヲハサンデ乳アリト云ニハアラズ、「毎處

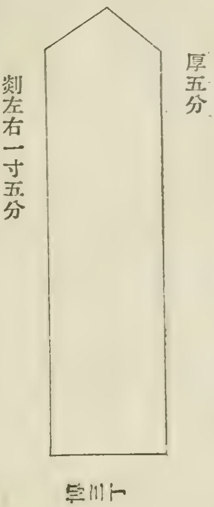
有ニ九面三十六一」トハ、毎處ハ鍾ノ兩面ニテ四處ノコト也、一處ニ乳九ツアリ、兩面ニテ三十六アル也

鍾面通計三十六ナルヲ、文ヲ省キテ面三十六ト云タル也、疏ニ、一面三十六ト云ヘルハ見誤リタル也、コノ所ノ疏文大ニ誤レリ、博古圖ヲ見テ知ルベシ、此書ハ宋ノ徽宗ノ時、宣和殿其外所藏ノ古器ヲ、王楚集圖錄シテ傳ヘシモノ也、周漢ノ大小鍾數多アルニ、乳皆三十六ト記シテ、一面ニハ十八アリ、此書モ古器ノ款識ヲ釋シタルニハ、過謬多ク笑ベキコトアリト洪容齋云ヘレドモ、圖ノコトハ評論ナシ、「林希逸云、艾軒曰、博古圖起ニ於宣和間一、漢晉時無レ有也、由ニ歴代一以來、掘ニ得古器於宣和間一、始爲レ圖ニ載之一、以示ニ後世一、漢晉諸儒不ニ曾見一、此無レ怪乎、其不レ知也、是以聶崇義所レ作三禮圖、全無ニ來歴一、穀璧即畫レ穀、蒲璧即畫レ蒲、皆以レ意爲レ之也、不レ知下穀璧只如ニ今腰帶一、夸上粟文、觀ニ博古圖一可レ見レ使下當時掘ニ得古器一藏上レ之、上方不レ載之圖、今人何緣知レ之、此圖至ニ金人犯一レ闕後、皆無ニ此本一、及ニ見少輩使一レ虜見上レ之、遂市以歸、尚有ニ十數面一不レ全」ト云ヘリ、林氏ハ紹定ノ進士ニテ、宣和ヨリ甚遠カラヌ人也、艾軒ハ林氏ヨリ先輩ナルベケレバ、此文イヨイヨ虛語アルマジキ也、明刻ノ博古圖ハ正カラズ、今宋板ノ本ニ依テ愚意ヲ圖ス、圖成テ鍾體ノ長サ倍半ノ寸法ヲ求ルニ、鉦間九寸六分、此倍半二尺四寸也、鉦ノ長一尺二寸八分、鼓ノ長九寸六分、于一寸六分ニテ合テ二尺四寸、鍾身ノ長サ倍半ノ尺寸也

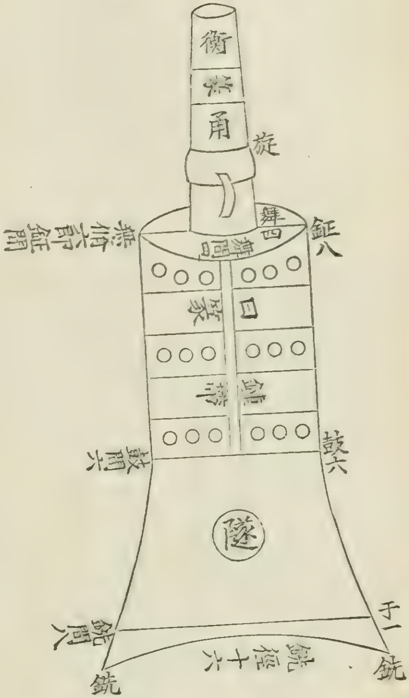
鎮圭尺二寸

命圭

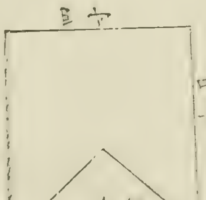
公九寸 侯伯七寸



鐘新圖

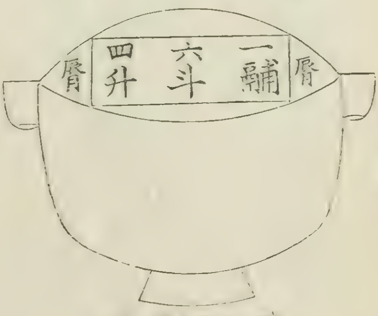


冒四寸



量

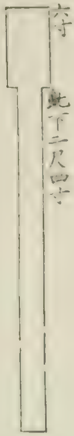
內方尺圓其外深尺重一鈞



耳三寸覆之實一升

臀一寸覆之實一豆

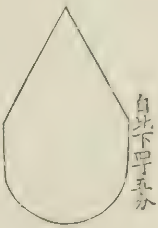
大圭三尺



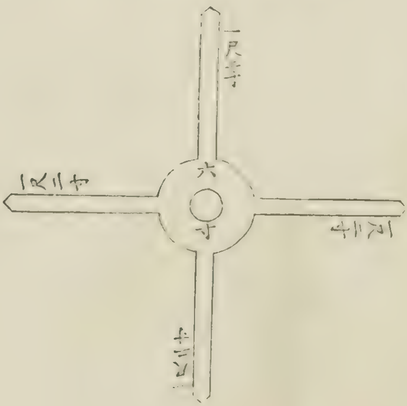
四圭尺二寸



琰圭九寸

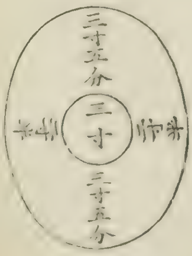


四圭尺二寸

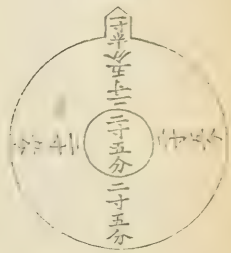


文炳賈氏ノ意ヲ圖ス

璧羨度尺

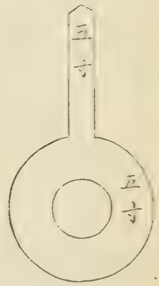


圭璧九寸



圭璧五寸

文炳愚意ヲ圖ス



兩圭五寸有邸



考工記管籥卷下終

寶暦壬申秋八月仝刻

平安書肆

伏見屋藤右衛門
唐本屋吉左衛門

歴代戸口攷

山本格安著

歷代戶口攷

山本格安武平編

三代

夏　吏部尙書李琪上疏曰、臣聞、云云、軒轅已前不可詳記、自堯遭洪水、禹作司空、於是辨九等之田、收什一之稅、其時戶口一千三百餘萬、定墾田約九百二十萬頃、爲太平之盛云云、文獻田賦考○禹平水土、爲九州、人口千三百萬云云、山堂群書考索○古今戶口、登耗不同、大抵易代之初常耗、而承平日久則登矣、禹分九州時、民戶一千三百五十五萬三千九百二十三、民口三千九百二十二萬駒陰冗記（二十、考索作三十二）△格安按、通考戶口、考索人口者、卽冗記謂戶數者也、冗記別擧口數、則二書所擧者、恐非口數也

殷

周　東坡策別、均戶口、曰、當成康刑措之後、其民極盛之時、九州之籍、不過千三萬四千有餘、夫地以十部、而民居其一、按、晉書地理志、民口千三百七十一萬四千九百三十三、蓋周之盛也、注見帝王

世紀ハ、困學紀聞二十（考索無ニ一字ニ、三十作ニ三十二ニ）○附錄黃氏曰、三代以上、戶口莫レ盛ニ於成王之時ハ、凡一千七百三十萬四千九百二十有奇（博物典彙二十）○周公相ニ成王ニ時、民戶一千三百七十一萬四千九百二十三、民口四千九百二十三萬二千一百五十一（駒陰冗記（民戶考索及紀聞作ニ人口ハ、亦缺ニ口數ニ））○當ニ成康之時ハ、比ニ堯舜之朝ハ、戶口更增ニ二十餘萬ニ（文獻田賦考）

△格安按、紀聞及典彙、所レ舉據ニ冗記ハ、則是皆戶數、而非ニ口數ニ也、蓋冗記之說是也

春秋　平王東遷三十餘年、莊王十三年、齊桓公二年、五千里外、非ニ天子之御ハ、自ニ太子公侯ニ以下、至ニ于庶人ハ、凡千一百九十四萬一千九百二十三人（杜氏通典）○春秋時、民口一千一百八十四萬七千（駒陰冗記）

戰國　戰國之時、考ニ蘇張之說ハ、計ニ秦及山東六國戎卒ハ、尙餘ニ五百餘萬ハ、推ニ人口數ニ尙當ニ千餘萬ニ（通典、山堂考索）（戎、考索作レ戍、）

秦

秦兼ニ諸侯ニ所レ殺三分者一、猶以ニ餘力ハ、北築ニ長城ニ四十餘萬、南戍ニ五嶺ニ五十餘萬、阿房驪山七十萬、三十年間、百姓死歿、相ニ踵于路ハ、陳項又肆ニ其酷烈ハ、新安之坑ニ二十餘萬ハ、彭城之戰、睢水不レ流（通典）○及ニ秦漢ニ云云、此時戶口尙有ニ一千二百餘萬ハ、墾土亦一千八百萬餘頃（文獻田賦考）

漢

西　漢高帝定ニ天下一、人々死傷亦數百萬、是以平城之卒、不レ過ニ三十萬一、方ニ之六國一、十分無レ三（通典）
平帝時、民戶一千二百二十三萬三千六十二、民口五千九百五十九萬四千九百七十八、此漢之極盛也
（漢書地理志○隋志載レ之、脫ニ二百二字一、恐誤）○古今戶口之數、三代以前姑勿レ論、史所レ載西漢極盛之數、爲ニ孝平元始二年一、人口
千一百二十三萬三千（文獻田賦考）

東　光武中元二年、民戶四百二十七萬九千六百三十四、民口二千一百萬七千八百二十（後漢書郡國志、下並同）
明帝永平十八年、戶五百八十六萬五百七十三、口三千四百一十二萬五千二十一
章帝章和二年、戶七百四十五萬六千七百八十四、口四千三百三十五萬六千三百六十七
和帝永興(カ)（永元カ）（元興カ）元年、戶九百二十三萬七千一百一十二、口五千三百二十五萬六千二百二十九
安帝延光四年、戶九百六十四萬七千八百三十八、口四千八百六十九萬七百八十九
順帝建康元年、戶九百九十四萬六千九百一十九口四千九、百七十三萬五百五十（注）應劭漢官儀曰、至ニ于孝順一、民戶九百六十九萬八千六百三十、口四千九百一十五萬二百二十、帝王世紀曰、永和中戶至ニ千七十八萬、口五千三百八十六萬九千五百八十八一
冲帝永嘉元年、戶九百九十三萬七千六百八十、口四千九百五十二萬四千一百八十三（注）永嘉二年戶、則多九十七萬八千七百七十一、口七百二十一萬六千六百三十六、應レ載ニ極盛之時一、而所レ殊甚衆、舍ニ永嘉多一、取ニ永和少一、良不レ可レ解

質帝本初元年、戶九百三十四萬八千二百二十七、口四千七百五十六萬六千七百七十二

桓帝永壽三年、戶一千六百七十萬九百六十、口五千六萬六千八百五十六○至ニ桓帝永壽三年一、戶千六十七萬七千九百六十、口五千六百四十八萬六千八百五十六(晉書地理志)○東漢極盛之時、爲ニ桓帝永壽三年一、戶千六十七萬七千九百六十(注)此通典所レ載之數、據ニ東漢書郡國志一、計戶一千八百七萬九百六、則多ニ通典一五百八十三萬有奇、是及レ盛ニ於前漢一矣(文獻田賦考)○戶千六百七萬七千九百六十(困學紀聞○皇朝類苑無ニ七十二字一)

三國

蜀　劉備章武元年、其戶二十萬、〔脫〕男女口九十萬(晉書地理志)○蜀亡時、戶二十八萬、口九十四萬、帶甲將士十萬二千、吏四萬(文獻戶口考)蓋蜀之亡也、爲ニ戶二十四萬一(同上)

魏　魏氏戶六十六萬三千四百二十三、口四百四十三萬二千八百八十一、(文獻戶口考)○劉昭補注後漢郡國志注曰、魏景元四年、與レ蜀通計、民戶九十四萬三千四百二十三、口五百三十七萬二千八百九十一(同上低書)

吳　孫權赤烏五年、其戶五十二萬三千、男女口二百四十萬(晉書地理志)吏三萬二千、兵二十三萬、男女口二百三十萬(同上武紀)○吳赤烏三年、戶五十二萬、男女口二百三十萬、吳亡時、戶五十三萬、吏三萬二千、兵二十三萬、口二百三十萬、後宮五千餘人(文獻戶口考)又按、正始五年、揚威將軍朱照日所レ上、吳之所レ領兵戶、凡十三萬二千、推ニ其民數一、不レ能レ多レ蜀矣(同上低書)(五十三萬、通鑑綱目作ニ五十二萬三千一)

三國鼎峙之時、合二其戶數一不レ滿二百二十萬一昔人以爲、纔及二盛漢時、南陽汝南兩郡之數一蓋戰爭分裂、戶口虛耗、十不レ存レ一、固宜二其然一（文獻田賦考）○蓋蜀之亡也、爲二戶二十四萬一吳之亡也、爲二戶五十餘萬一而魏不レ能二百萬一而已舉二天下之大一不レ當二全漢數郡之衆一然則因二民之衆寡一爲二國之强弱一自レ古而然矣（同戶口考）○至二三國鼎立之時一通計戶一百四十七萬三千四百三十三、口七百六十七萬二千八百八十一（駒陰冗記）

晉

晉太康之後、文軌方同、大抵編戶二百六十餘萬（隋書地理志）○晉武帝、太康元年、平レ吳之後、九州攸レ同、太抵編戶二百四十五萬九千八百四、口千六百一十六萬三千八百六十三、此晉之極盛也（文獻戶口考、山堂考索○駒陰冗記、寄爲二四十一、皇朝類苑無レ寄、止二八百一）

僞代

後趙石勒據二有河北一初文武官上疏、請依二劉備在レ蜀、魏王在レ鄴故事一以二河內魏絳等十一郡一幷二前趙一國合二十四、戶二十九萬爲二趙國一前秦苻堅、滅二前燕慕容暐一入レ鄴、閱二其名籍一戶二百四十五萬八千九百六十九、口九千九百九十八萬七千九百三十五、徙二關東豪傑及諸雜夷十萬口于關中一平レ燕定レ蜀之後、僞代之盛也（文獻戶口考○按、口數不レ應三與二戶數一蓋雖二前代一幾ッ世ニ未レ有レ如レ此多一也、恐衍二九千二字一）

六朝

宋　孝武大明八年、戶九十萬六千八百七十、口四百六十八萬五千五百一（宋書）○宋文帝元嘉以後、戶九十萬六千八百有奇（文獻田賦考）

陳　陳武帝云云、閲二其本史一、戶六十萬、而末年窮レ兵黷レ武云云、至二後主亡時一、隋家所レ收、戶五十萬、口二百萬（文獻戶口考）

齊　齊神武秉レ政、乃命二孫騰一高二崇之一、分二責無籍之戶一、得二六十餘萬一（同上）○後齊承二魏末喪亂一云云、戶三百三萬（隋志）○齊諸行臺州鎮悉降、關東平、戶三百三十萬二千五百二十八、口二千萬六千六百八十六（後周書武帝紀建德六年○文獻通考云、北齊至二崇化二年一、爲レ周所レ滅云云、安按、崇當レ作レ隆、又三十萬作二三萬一、六百八十六作二八百八十一、並恐誤矣）

周　按、大象中有二戶三百五十九萬一、口九百萬九千六百四（文獻戶口考）

魏　孝文遷レ洛之後、戶五百餘萬、則混二南北一言レ之、纔六百萬（同田賦考）

隋

隋高祖云云、戶八百九十萬七千五百四十六、口四千六百一萬九千九百五十六（隋書地理志○七千、皇朝類苑作二九千一○四十一、唐志作二三十一、考索同）隨混一之後、至二大業二年一、戶八百九十一萬七千有奇（文獻田賦考）○隋文開皇中戶八百七十萬（困學紀聞二十）

唐

高祖　至㆓唐高祖武德初㆒、戶止二百餘萬（困學紀聞二十）
太宗　貞觀戶不㆑滿㆓三百萬㆒云云（文獻戶口考下並同）
高宗　永徽元年、戶部奏、去年進戶一十五萬、通㆓天下戶㆒三百八十萬
武后　神龍元年、戶六百三十五萬六千一百四十一（通鑑神龍元年、戶六百一十五萬、口三千七百一十四萬有奇）
玄宗　開元十四年、戶七百六萬九千五百六十五○開元二十八年、戶部帳云云、戶八百四十一萬二千八百七十一、口四千八百一十四萬三千六百九（唐書地理志）（通鑑口四千一百四十一萬九千七百十二、戶如㆓元文㆒）○唐天寶之初、戶八百三十四萬八千有奇、隋唐土地、不㆑殊㆓兩漢㆒、而戶口極盛之時、纔及㆓其三之二㆒、何也、蓋兩漢時戶賦輕、故當時郡國所㆑上、戶口版籍、其數必實、自㆓魏晉㆒以來、戶口之賦頓重、則版籍容有㆓隱漏㆒不㆑實固其勢也、南北分裂之時、版籍尤爲㆑不㆑明、或稱㆓僑寄㆒、或冒㆓勳閥㆒、或以㆓三五十戶㆒爲㆓一戶㆒、苟避㆓科役㆒、是以戶數彌少、隋唐混一之後、生齒宜日富、休養生息、莫㆑如㆓開皇貞觀之間㆒、考㆓竅之㆒、詳莫㆑如㆓天寶㆒、而戶數終不㆑能㆓大盛㆒、且天寶十四載所㆑上、戶總八百九十一萬四千七百九、而不課戶、至㆑有㆓三百五十六萬五千五百㆒云云（文獻田賦考）○天寶十三載、戶九百六萬九千一百五十四（通鑑、天寶十三年、戶九百六十一萬九千二百五十四口、五千二百八十八萬四百八十八）通典天寶十四載、管戶總八百九十一萬九千三百九（八百、典彙作㆓九百㆒）應不課戶三百五十六萬五千五百、應㆑課戶五百二

十四萬九千二百八、管田總五千二百九十一萬九千三百九、不レ課口四千四百七十萬九百八十八、課口八百二十萬八千三百二十一、唐之極盛也（同戸口考）○天寶末、戸八百九十一萬四千七百九（困學紀聞、山堂考索、駒陰冗記）○口五千二百九十一萬九千三百九、此唐之極盛也（駒陰冗記○三百九、考索作二三百九十一一、○九十一萬云云、皇朝類苑作二八十餘萬一）○自二貞觀一至二于開元一、將レ及二九百萬戸、五千三百萬口、墾田一千四百萬頃一、比二之近古一、又多增加（文獻田賦考）

肅宗　至德元年、戸八百一萬八千七百、乾元三年、戸一百九十三萬三千一百二十五（同上戸口考○二十五、通典作二卅四一）○初乾元末、天下上計百六十九州、戸百九十三萬一百二十四、不レ課者百一十七萬四千五百九十二、口千六百九十九萬三百八十六、不レ課者千四百六十一萬九千五百八十七、減二天寶一、戸五百九十八萬二千五百八十四、口三千五百九十二萬八千七百二十三（唐食貨志）

代宗　廣德二年、戸二百九十三萬三千一百二十五、（文獻戸口考○按、此數增二上肅宗乾元一、一百萬整、故却疑二共奇零之等一、恐有二傳寫之誤一也）○廣德二年、口一千六百九十餘萬、較二之天寶一、不レ能二三分之一一（皇朝類苑）○至二大曆中一、戸纔一百三十萬、此古今最耗者（駒陰冗記）

德宗　建中元年定二天下一、兩稅戸凡三百八十萬五千七十六、通典主戸百八十餘萬、客戸百三十餘萬（文獻戸口）

憲宗　元和中供二歲賦一者、浙西、浙東、宣歙、淮南、江西、鄂岳、福建、湖南、八道戸百四十四萬、比二天寶德元一、四分之一、兵二食於官一者八十三萬、加二天寶三一之一、通以二二戸一養二一兵一、京西北、河北以二屯兵廣一無二上供一（唐食貨志）○元和時、戸二百四十七萬三千九百六十三（文獻戸口考）史官李吉甫、撰二元和國計簿十卷一云云、見二定戸二百四十四萬二百五十四一（同上、低書）○憲宗元和時、戸二百四十七萬三千、胡寅曰、天寶初、戸幾一千萬、

元和戸僅二百四十七萬、是十失其八也（博物典彙十三）

穆宗　至長慶、戸三百三十五萬、而兵九十九萬、率三戸以奉一兵（唐食貨志）○長慶時、戸三百九十四萬四千五百九十五（文獻戸口考、下並同、）

敬宗　寶暦時、戸三百九十七萬八千九百八十二

文宗　開成四年、戸四百九十九萬六千七百五十二

武宗　至武宗即位、戸二百一十一萬四千九百六十、會昌末戸增、至四百九十五萬五千一百五十一（通鑑爲會昌五年之事）（唐書食貨志○按、長慶寶暦戸數相同、而至開成增一百萬、至武宗即位減於開成殆二百萬、至會昌復增三百萬、未有古今之戸數、如此遽登耗之多者也、然又不可考焉）

宋

太祖　太祖定天下、戸三百九萬五百四（駒陰冗記、山堂考索○考索爲開寶九年）○太祖朝二百五十萬八千九百六十五（皇朝類苑）

太宗　天下主客戸、自至道末四百一十三萬一千五百七十六（宋地理志注）○至道三年、戸四百一十三萬二千五百七十六（山堂考索○按、此數與志注同、但差一千、未知孰是也）

眞宗　天下戸九百五萬五千七百二十九、口二千一百九十七萬六千九百六十五（本紀八）○至眞宗時、戸七百四十一萬七千五百七、口一千六百二十八萬二百五十四（駒陰冗記）○大中祥符七年、戸九百五萬有奇、口三千一百九十七萬有奇（皇朝類苑）○天禧五年、戸八百六十七萬七千六百七十七（山堂考索）○天禧五年、主戸六百三萬

九千二百三十一、客戸不レ預焉（宋志細注）

仁宗　天聖七年、戸一千一十六萬二千六百八十九（考索）○慶曆間、戸至二一千九十萬四千四百三十四一（五雜組）○嘉祐八年、戸一千二百四十六萬二千三百一十一（山堂考索）○嘉祐八年、主戸二千二百四十六萬二千五百三十一、口二千六百四十二萬一千六百五十一（宋志細注○按、宋志細注、戸口不二相應一、依二考索一、戸數減二一千萬一而可）

英宗　治平三年、戸一千二百九十一萬七千二百二十一（山堂考索）○治平三年、天下主客戸一千四百一十八萬一千四百八十六、口二千五十萬六千九百八十（宋志細注）

神宗　熙寧十年、戸一千四百二十四萬五千二百七十、口三千八十萬七千二百十一（宋志細注○戸數、考索同）○神宗時、戸一千七百二十一萬一千七百一十三、口二千四百九十六萬九千三百、（駒陰冗記）○宋之戸口、莫レ盛二於神宗一、凡一千三百九十一萬有奇（博物典彙○考索、此數爲二元豐三年一）

哲宗　元祐元年、戸一千七百九十五萬七千九十二、口四千七萬二千六百六（宋志細注）○元祐三年、天下上戸部主戸二百一十三萬四千七百三十三、丁二千八百五十三萬三千九百三十四、客戸六百一十五萬四千六百五十二、丁三百六十二萬九千八十三（本紀十七）○紹聖元年、戸一千九百一十一萬九百二十一、口四千二百五十六萬六千二百四十三（宋志細注）○紹聖四年、戸部主戸一千三百六萬八千七百四十一、丁三千三十四萬四千二百七十四、客戸六百三十六萬六千八百二十九、丁三百六萬七千三百三十二（本紀十八）○元符三年、戸一千九百九十六萬八百一十二、口四千四百九十一萬四千九百九十一（宋志細注）

徽宗　崇寧元年、戶二千二十六萬四千三百七、口四千五百三十二萬四千一百五十四、各府州下戶口、與ニ總數一少異、姑兩存[宋志細注]○大觀四年云云、當ニ此時ニ天下有ニ戶二千八十八萬二千二百五十八、口四千六百七十三萬四千七百八十四[宋史地理志一○右書ニ宋志細注一者、皆所レ注ニ此條一者也、然所レ記之年、皆先レ是者也、故隨レ年序一却先ニ注文一以ニ原文一爲レ後耳、○按、駒陵元紀、以ニ此戶口一爲ニ宣和中事一恐誤也、通鑑元紀發明亦爲ニ宣和四年之戶口一]

理宗　端平元年十二月甲辰、詔刪修勅令、是歲兩浙路戶一百九十七萬五千九百九十六、口二百八十二萬二千三百三十二、福建路戶一百七十萬四千一百八十六、口二百五十五萬三千七百七十九[本紀四十一]

度宗　景定五年十二月云云、是歲兩浙江、東西、湖南北、廣東西、福建、成都、京西、潼川、夔利路、戶五百六十九萬六千九百八十九、口一千三百二萬六千五百三十二[本紀四十六]

元

世祖　中統二年、天下戶一百四十一萬八千四百九十有九[本紀四]○至元元年、戶一百五十八萬八千一百九十五[本紀五]○六年、天下戶一百六十八萬四千一百五十七[本紀六]○九年、天下戶一百九十五萬五千八百八十七[本紀七]○十二年、天下戶四百七十六萬四千七十七[本紀八]○十三年、戶九百三十七萬四百七十二、口千九百七十二萬一千一十五[本紀九]○至元十三年、平レ宋全有ニ版圖ニ、二十七年、又籍レ之得ニ戶一千一百八十四萬八百有奇一ク[缺]是南北之戶、總書ニ于策一者、一千三百一十九萬六千二百有六、口五千八百八十三萬

四千七百一十有一（元地理志一）○二十八年、天下戸數、內郡百九十九萬九千四百四十四、江淮四川一千一百四十三萬八百七十八、口五千九百八十四萬八千九百六十四、游食者四十二萬九千一百一十八（本紀十六）○三十年戸一千四百萬二千七百六十（本紀十七○按、駒陰冗記、爲二世祖混一之初戸口數一者、即與二二十七年之數一全同、爲二末年之口數一者、即二十八年之數也）

文宗　至順元年、戸部糧戸數一千三百四十萬六百九十九（元地理志一）

明

太祖　洪武十四年、天下戸一千六十五萬有奇、口五千九百八十七萬有奇（續文獻通考）

憲宗　成化年、天下戸數一千六十五萬二千八百七十、口數六千五十四萬五千八百二十四（大明一統賦）

孝宗　弘治十五年、口五千三百八萬有奇（古今鑑記）

世宗　我朝洪武之興、當二元亂殘毀之後一、戸口尙耗、至二嘉靖中一、戸九百三十五萬一千九百七、口五千八百五十五萬七千七百三十八、亦可レ謂レ盛矣、然今制軍匠等戸不二分析一、民間二口之入レ籍者一、十漏二六七一、況自レ茲以往、日丁盈成之運、將來戸口之登、豈止漢唐宋元之所レ謂盛者而已哉（駒陰冗記）○國朝嘉靖隆慶之時、戸共一千一百一十三萬四千、口五千五百七十八萬三千（五雜俎）

△格安按、所レ擧之口數、洪武至二成化一、登七十萬、至二弘治一、耗二於成化一七百數十萬、此間非レ有二亂日一、而其耗減之多、可レ疑焉、又冗記與二五雜俎一似二齟齬一今由二成化弘治一則戸數者以二五雜俎一爲レ是、然

並不㆑可㆑考焉

戸一千零六十二萬一千四百三十六、口六千零六十九萬二千八百五十六、（事言要玄○此不㆑知㆓誰朝之舊㆒、疑成化年之戸口也）

北直隸八府、戸四十一萬八千七百八十九、口三百四十一萬三千二百五十四人、南直隸十四府、戸一百九十六萬二千八百一十八、口九百九十六萬七千四百三十九人（大明一統便覽、此亦不㆑知㆓何時㆒也）

戸口當率

朝野雜記曰、西漢戸口至盛之時、率以㆓十戸㆒爲㆓四十八口有奇㆒、東漢戸口、率以㆓十戸㆒爲㆓五十二口㆒、可㆑準㆓周之下農夫㆒、唐人戸口至盛之時、率以㆓十戸㆒爲㆓五十八口有奇㆒、可㆑準㆓周之中次㆒（注）其說本㆓程沙隨㆒（困學紀聞二十四）

○格安按、毎戸率爲㆓口五六㆒、然又有㆓大不㆑然者㆒、今姑因㆓上所㆑記之戸口數㆒計、列㆑之如㆑左

夏率以㆓十戸㆒爲㆓二十九口㆒

周率以㆓十戸㆒爲㆓三十六口㆒

東漢光武時、率以㆓十戸㆒爲㆓四十九口㆒、明帝時、以㆓十戸㆒爲㆓五十八口㆒（章帝和帝同㆑之、安順沖質四帝時、率五十口、朝野雜記所㆑舉東漢之數、即桓帝時也、）

三國率以㆓十戸㆒爲㆓五十二口㆒

晉率以㆓十戸㆒爲㆓六十五口有奇㆒

僞代率以十戶爲四十口有奇（此即文獻通考所記、而降一位也、如通考、則十戶爲四百餘口、豈有如此多者邪、故降位爲相中也、）

劉宋率以十戶爲五十一口有奇、陳爲四十口、齊爲六十八口（此即通考之口數、陞二位而算之、）周爲二十五口有奇

隋率以十戶爲五十一口有奇

宋眞宗時、率以十戶爲二十二口、神宗時以十戶爲十四口奇、徽宗時以十戶爲二十一口奇

元率以十戶爲四十四口奇（此至元二十七）又以十戶爲五十口（此二十八年）

明洪武成化、俱率以十戶爲五十六口、嘉靖年從駒陰冗記、則爲六十二口、從五雜俎、則爲五十口

○右所擧歷代之數、太率戶不過四五六口、而以五爲定、以其內外爲過不及、今觀件、其過者以十戶爲六十餘口者爲極、其不及者、如宋時可疑、其戶爲二者、尙不爲當焉、然有二戶不當三口者、是世有鰥寡過半而然歟、姑識之備考索云

○三代以來戶數之多、莫多於宋大觀中、口數之多、莫多於明成化年、其少莫少於三國時、比之明成化殆八分之一耳、蓋多少皆有數、其多者大抵不過六千萬之口數、是自如有常數也、戶數即從口數也、然有否者、則亦自有數已矣

附外國

大月氏國、去長安萬一千六百里、戶十萬、口四十萬、勝兵十萬人（漢書西域傳下並同）

唐居國、去長安萬二千三百里、戶十二萬、口六千萬、勝兵十二萬人

大宛國、去長安萬二千五百五十里、戶六萬、口三十萬、勝兵六萬人

烏孫國、去長安八千九百里、戶十二萬、口六十三萬、勝兵十八萬八千八百人

龜茲國、去長安七千四百八十里、戶六千九百七十、口八萬一千三百一十七、勝兵二萬一千七十六人、

此餘始羌樓蘭等四十餘國、雖載戶口數、以小國戶口甚少故、闕之、

建武二十七年、賢栗等遂率種人戶二千七百七十、口萬七千六百五十九、詣越嶲太守鄭鴻、降求內屬○永平十二年、哀牢王柳貌、遣子率種人內屬、其稱邑王者七十七人、戶五萬一千八百九十、口五十五萬三千七百一十一、西南去洛陽七千里○安帝元初三年、郡徼外夷大羊等八種、戶三萬一千、口十六萬七千六百二十、慕義內屬○自汶山以西、前世所不至、正朔所未加、白狼、槃木、唐菆等百餘國、戶百三十餘萬、口六百萬以上、舉種奉貢○和帝永元十二年、旄牛徼外、白狼、樓薄蠻夷王唐繒等、遂率種人十七萬口、歸義內屬○永初二年○青衣道夷邑長令田、與徼外三種夷三十一萬口、齎黃金旄牛毦、舉土內屬 後漢書西南夷傳

至和帝永元六年、蜀郡徼外大牂夷種羌豪造頭等、率種人五十餘萬口內屬○安帝永初元年、蜀郡徼外羌龍橋等、六種萬七千二百八十口內屬、明年蜀郡徼外羌薄申等、八種三萬六千九百口、復舉土內屬 同西羌傳○小皆闕之

扞彌國　漢書、戶三千三百、口二萬四千、勝兵三千五百四十○後漢書、戶二千一百七十三、口七千二百五十一、勝兵千七百六十人　○于闐國　前書、戶三千三百、口萬九千三百、勝兵二千四百八○後書、戶三萬二千、口八萬三千、勝兵三萬餘人　○疏勒國　前書、戶千五百一十、口萬八千六百四十七、勝兵二千人○後書、戶二萬一千、勝兵三萬餘人　○焉耆國　前書、戶四千、口三萬二千一百、勝兵六千人、後書、戶萬五千、口五萬二千、勝兵二萬餘人▲有所擧西域戶口、兩漢相異者也、如于闐疏勒戶數、後十倍於前、同小國之戶口、不足數、然以此觀彼、則有時增減者、故擧此四國、備見盛衰之考云

兀良哈在烏龍江南漁陽塞北、春秋時山戎地、元爲大寧路、戶四萬六千、口四十四萬八千（吾學編四夷考）

交南平、得府十五、州四十一、縣二百八、戶三百一十二萬、時永樂五年丁亥夏五月丙子也、（鴻猷錄）

歷代戶口攷　終

鄉遂井田圖說

齋藤高壽著

鄉遂井田圖說序

予生而二十有四、始志于學、循仲尼之敎、而先修詩書、既而及尚書之周官篇、故將修周禮以正其義、於是乎旁求其說、以得僉庭椿復古篇之說、而正其義、定其錯簡、以著復古周官十三卷、遂及鄉遂井田軍賦之制、乃作鄉遂井田圖說二卷、同國字圖說一卷、庶幾明尚書之周官之義、以有小補當今之治教政令已、嗚呼齊桓晉文之世、周室雖衰微哉、未悉陵遲、故典籍咸藏諸官府、而未降于民間、於是乎如管敬仲、亦弗得窺其典禮者已、維以相齊公、而制其國鄙也、稱先王之禮、以參其國、伍其鄙、出軍旅、雖則云然、國非其國、鄙非其鄙、軍旅非其數、皆敬仲氏僞作已、矧曰自時厥後乎、鄉遂軍旅之禮、人々唯傳聞其名、而旨無見其制、左國所載、可見也、仲尼之學、雖集成其禮、至於孟軻氏之時、乃謂周室班爵祿之制、其詳不得而聞、則典籍不降于民間、可見也、至于戰國、則文武之道、既墜于地、則諸侯以稱王、天子以稱君、禮樂陵遲、天下蕩々、無紀綱文章、於是乎典禮亦降于民間、故儒士得窺其一二、如逸周書載職方氏、太戴之傳典命司儀、小戴之傳庶子、可見也、至於秦滅先代典籍、志士藏之乎山巖屋壁矣、逮乎漢文除挾書律而出之、於是乎郁々乎周典、再顯于世、夫然後七十子以後、紕繆悉見矣、嗚呼生于今世、自匪先王典籍存、曷知三千年紕繆乎、夏書曰、聖有

憲訓一、明徵定保、商書曰、學二于古訓一、乃有レ獲、又曰、監二于先王成憲一、其永無レ愆、周書曰、不レ由二古訓一、于レ何其訓、豈其不レ然乎哉

日本明和四年二月十八日

肥後藩士　齋藤高壽撰

鄉遂井田圖說目次

卷之上

卷之中

鄕遂井田圖說卷上

日本肥後　齋藤高壽著

鄕黨軍旅諸侯三則

在昔陶唐氏有天下也、洪水滔天、浩浩懷山襄陵、而下民昏墊其咨、帝憂患之、俾崇伯鯀乂之、至于九載、績用弗成、帝七十年、登庸虞舜、歷試諸難、舜底可績既三年、於是乎、俾舜攝位者百官統諸侯、舜受命于文祖、而賓于四門、殛鯀羽之郊、巡侯甸撫萬邦、以肇十二州、封十二山、

建十二牧、而濬川而后二十八年、帝堯既沒虞、舜卽位、四年正月元日、格于文祖、而卽政、詢咨四岳、以命二十二臣、恭己正南面而已矣、夫虞帝既雖肇十二州、封十二山、濬川、洚水未平、而儆帝、於是乎、俾伯禹爲司空、平水土、以分九州、奠九山九川、建九牧、俾棄爲后稷、播時百穀、夫然後水火木金土穀惟修、」使契爲司徒、敷五典、俾皋陶爲司寇、明于五刑、以弼五敎、而後民正其德也、」俾垂作共工、而後民利其用也、」俾伯益作虞、而後上下草木鳥獸、厚其生也、使伯夷后夔敎禮樂、而後民厚其生也、俾龍出納王命、而後百官厚其生也、」於是乎、九功惟叙、六府三事允治、萬世永賴帝之德、記曰、後世雖有作者、虞帝弗可及也已矣、其此之謂也、」大禹既受命、乘四載、隨山刊木、使伯益掌火、烈山澤而焚之、使民鮮食、禹既決九川、距四海、濬畎澮距川、使棄播時百穀、以奏民艱食以鮮食者、懋遷有無、而化居、然後烝民乃粒、而萬邦作乂、遂弼成五服、至于五千里、以別九州、每州置十有二師、外薄四海、咸建五國之長、各迪有功、於是乎、東漸于海、西被流沙、朔南曁聲敎、訖于四海、莫弗率俾、

陶唐有虞、既建皇極、有夏有殷、奉承之、以建其有極、周文公、相武王成王、而制作禮樂、亦纘厥舊服、以辨方正位、體國經野、設官分職、以爲民極、乃刑于天地四時、以設百官、安擾萬邦、命司徒及司空、以均土地、造鄕黨縣鄙形體之法、以體國經野、以稽其人民、而周知其數也、」不易之地、家百畝、當日本三町四段八畝、高則三十石、一易之地、家二百畝、再易之地、家三百畝、」上地家七人、食者三之二、其民可

用者、家三人、中地家六人、食者半、其民可任者、二家五人、下地家五人、食者三之一、其民可用者、家二人、凡起徒役、則拼過家一人、故一鄉之賦、一軍、戎車百有二十五乘也、以其餘為羨、唯田與追胥竭作焉、此先王起徒役、不易之法也

乃命大司徒、造鄉黨、令五家為比、使之相保、其長下士、其賦伍、五比為閭、使之相受、其長中士、其賦兩、馬一匹、故閭胥於軍旅、曰兩司馬也、四閭為族、使之相葬、其長上士、其賦卒、故伍長下士十人、馬四匹、故司馬中士四人、步卒七十五人、甲士三人乎、戎車一乘、其長載之、故族師於軍旅曰卒師也、故書序曰、戎車三百兩、虎賁三百人、虎賁謂卒師也、是以族之賦備一乘、其田萬畝也、故以一千萬畝曰千乘之國、封上公也、五族為黨、使之相救、其長下大夫、其賦旅、故於軍旅曰旅師也、馬二十匹、戎車五乘也、五黨為州、使之相賙、其長中大夫、其賦師、故於軍旅曰師帥也、馬百匹、戎車二十有五乘也、五州為鄉、使之相賓、其長卿、其賦軍、故於軍旅曰軍將也、凡一軍、步卒萬二千五百人、伍長下士七百五十人、馬五百匹、故一軍之兩司馬五百人、戎車百有二十五乘也、故一軍之卒師、百有二十五人也、旅師下大夫二十有五人、師帥中大夫五人也、凡軍帥不特置、選於六官六鄉之吏、自卿以下、使兼官焉、故大司馬曰、凡制軍萬有二千五百人為軍、王六軍、大國三軍、次國二軍、小國一軍、軍將皆命卿、是之謂也、凡一鄉之地、百有二十五萬家也、子男一鄉、故一卿一軍也、中國二鄉、故二卿二軍也、大國三鄉、故三卿三軍也、王六鄉、故六卿六軍也、凡無事則大司徒掌之、師之、有

事則大司馬帥之政之、惟先王起軍旅不易之教也

凡以六鄕爲國中也、鄕士曰、掌國中各掌其鄕之民數、冢宰曰、邦中之賦、大府曰、邦中之賦、以待賓客、司書曰、邦中之版、小司徒曰、國中、鄕大夫曰、國中自七尺、閭師曰、掌國中、司救曰、巡國中、泉府曰、國人、比長曰、徙于國中、士師曰、干國及郊野之類、皆謂六鄕之地也、後世諸侯之國、亦有以鄕內爲國、如管仲之參其國、孟軻之國中什一之類、皆以鄕內爲國也

遂縣軍旅諸侯三則

夫聖人之制地域也、距王城坼方百里之內、以爲六鄕、溝樹之以設國門、大司徒統掌之、其外畿方百里之內、經田野、造縣鄙形體之法、以設郊門、大司空統掌之、其頒田里者、如鄕黨之法也、上地夫一廛、田百晦、萊五十晦、餘夫亦如之、中地夫一廛、田百晦、萊百晦、餘夫亦如之、下地夫一廛、田百晦、萊二百晦、餘夫亦如之、凡五家爲鄰、有長、其賦伍、五鄰爲里、其長下士、其賦兩、馬一匹、故里長於軍旅、亦曰兩司馬也、四里爲鄼、其長中士、其賦卒、戎車一乘、其田萬畝也、故鄼亦稱一乘也、其餘皆與鄕同、唯爵降一等、以上士爲中士類耳、五鄼爲鄙、其長上士、其賦旅、馬二十匹、戎車五乘也、五鄙爲縣、其長下大夫、其賦師、馬百匹、戎車二十有五乘也、五縣爲遂、其長中大夫、其賦軍、馬五百匹、戎車百有二十五乘、其田百有二十五萬畝也、凡夫間有遂、遂上有徑、十夫有溝、溝上有

レ畛、百夫有レ洫、洫上有レ涂、千夫有レ澮、澮上有レ道、萬夫有レ川、川上有レ路、以達二于畿一也、凡小國一遂、中國二遂、大國三遂、天子六遂也、諸侯以二遂之地一食二卿大夫士一、天子以二都鄙之地一食二公卿大夫士一、此天子之與二諸侯一之別也、如二其軍旅一、則以爲二副軍一、竭二出鄕軍一、而不レ足則徵レ之

凡有下以二六遂一爲上郊也、遂士曰、掌二四郊一、各掌二其遂之民數一、又曰、就レ郊而刑殺、各於二其遂一肆レ之三日、冢宰曰、四郊之賦、大府曰、四郊之賦、以待二稍秣一、小司徒曰、國及四郊、又曰、六鄕四郊之吏、小宗伯曰、兆二五帝於四郊一、閭師曰、掌二國中及四郊之人民一、司救曰、巡二國及郊野一、泉府曰、國人郊人從二其有司一、比長曰、從二于國及郊一、大司馬曰、郊野載レ旐、孝經曰、郊二祀后稷一、書曰、命二汝尹一茲東郊一之類、皆謂二六遂之地一也、諸侯之國、亦以レ遂爲レ郊也、故書曰、魯人三郊三遂、此謂二三郊之三遂一也、又爾雅曰、邑外曰レ郊、此謂二邑外則鄕外一也、司馬法曰、百里爲レ郊、或曰、郊外曰レ遂、皆非二先王之法一也

又有下以二六遂一爲中近郊上也、載師曰、以二宅田士田賈田一任二近郊之地一、是也、又曰、以二場圃一任二園地一、此則謂二六遂之餘地一也、皆謂二二百里之內一也、非レ謂二都鄙之地一也

又有下以二六遂之地一爲上野也、小司空職曰、掌二邦之野一、又曰、治レ野、野役、野民、野牲、野職、野道、遂師曰、凡入二野職賦于玉府一、又曰、共二其野牲一、野役、野民、士師曰、野禁、鄕師曰、巡二國及野一、鄕大夫曰、野自二六尺一以及二六十有五一、委人曰、掌レ斂二野之賦一、旅師曰、掌レ聚二野之耡粟一、司隸曰、掌レ巡二邦野之稼一之類、是也、諸侯之國、亦以二國外一爲レ野也、故孟子曰、請野九之一而助、國中什一使二自賦一、是也、學者當レ知二是

義、而後讀周官也

井田都鄙十則

夫王圻方千里、距王城規方百里之內、以爲六鄉及廛里、謂之國中也、大司徒掌之、其外至于二百里、爲六遂及場圃宅田士田賈田、謂之野及四郊之地也、大司空掌之、又其外至于五百里、經土地、井牧其田野、以爲邑丘甸稍縣都、以爲官田牛田賞田牧田、謂之都鄙遠郊之地也、大司空又掌之、此則王者之制、而非諸侯所得有也。其法亦與鄉遂異焉、大司空掌其法而制之、九夫爲井、以爲下士之采地也、四井爲邑、以爲中士之采地也、四邑爲丘、以爲上士之采地也、四丘爲甸、以爲公邑之田、下大夫食之、四甸以爲稍、以爲家邑之田、中大夫食之、四稍爲縣、以爲小都之田、三孤六卿食之、四縣爲都、以爲大都之田、又謂之畺地也、三公食之、以任地事、而令貢賦、凡稅斂之事、乃分地域、而辨其守、施其職、而平其政、凡井邑丘甸稍縣都之地、雖公卿大夫士采地、天子之吏掌其政、故如其國治、則冢宰掌之、故有都大夫、都則也、其祭祀、則宗伯掌之、故有都宗人家宗人也、其軍旅田役、則司馬掌之、故有都司馬、家司馬也、其刑罰禁令、則司寇掌之、故有都士、家士、方士也、其稅斂之事、則司空掌之、故有載師、縣師、稍人也、諸侯之國、雖五十里乎、天子之吏不得與焉

凡有以甸稍縣都爲都鄙也、泉府曰、都鄙從其主、掌節曰、守都鄙者、用角節、司民曰、辨其國中、與其都鄙、縣師曰、掌邦國都鄙稍甸、其餘稱都鄙者、皆謂公卿大夫士采地也

又或以甸稍縣都稱遠郊之地也、載師曰、以官田牛田賞田牧田任遠郊之地、又曰、遠郊二十而三之類、是也

又或稱邦縣邦都、及都家之國也、家宰曰、邦縣之賦、又曰、邦都之賦、大府曰、邦縣之賦、以待幣帛、邦都之賦、以待祭祀、都大夫曰、每國上士二人、其職曰、掌其都家之國治之類、是也

又或以縣稱野也、縣士曰、掌野、各掌其縣之民數、朝士曰、野三旬、質人曰、野二旬、野廬氏曰、比國郊、及野之道路、士師曰、憲禁令及郊野之類、是也

又或以甸稱郊也、家宰曰、邦甸之賦、大府曰、郊田之賦、以待工事之類、是也

又或以稍稱家也、家宰曰、家削之賦、大府曰、家削之賦、以待匪頒、載師曰、以家邑之田任稍地之類、是也

又或以縣爲小都、以畺地爲大都也、載師曰、以小都之田任縣地、以大都之田任畺地之類、是也

凡王之三公八命、其卿六命、其大夫四命、及其出封也、皆加一等、故王之三公、有大功、而及其出封、則九命爲公、卿有大功、而及其出封、則七命以爲侯伯、大夫有大功、而及其出封、則五命爲子男

也、若無顯其功、則食都鄙而已、故其采地之大者、不過四千九十六井六十四里、此則大都之田也、

其都城無過百雉、傳曰、都城不過百雉、此之謂也

凡國有大事、則徵師旅于都鄙之法、雖弗明之、仲尼論井田、曰、鰥寡孤疾老者、軍旅之出則徵之、由是觀之、則都鄙亦竭家而出之、可以知也、天子之國竭出此都鄙之賦、及六鄉六遂之賦、而萬乘備矣、如國有大事而徵此賦、則縣師稍人受法于司馬、以作其衆庶、都司馬、家司馬、掌其戒令、凡出都鄙之賦法、邑出馬一匹、師二十五人也、故丘則出馬四匹、兵車一乘、師一卒也、故稍人曰掌丘乘之政、此則上士之采地也、丘既出一乘、則甸出四乘也、此則下大夫之采地也、甸既出四乘、則削出十六乘、此則中大夫之采地也、削既出十六乘、則縣出六十四乘、此則九卿之采地也、縣既出六十四乘、則都出二百有五十六乘也、此則三公之采地也、都既出二百有五十六乘、則其師二萬五千六百人也、凡天子諸侯之軍賦、皆出其半、則三公之國、亦當出萬二千五百人、革車百二十五乘也、故以天子之三公稱百乘之家、職是之由、非諸侯卿稱也、猶侯伯子男之國、雖無千乘之賦、並稱千乘之國也、乃以三公之法、推卿大夫之賦、則六卿當出革車三十乘、師三千人也、中大夫、當出革車七乘、師七百人也、下大夫、當出革車一乘、師百人也、此則都鄙定出賦之法也、漢書以爲、丘戎馬一匹、甸戎馬四匹、兵車一乘、此其誤也、鄉黨出賦、則上士掌一車之政、斯則六鄉出賦之法也、與都鄙之法異焉、其至于諸侯之卿大夫士、則不得與天子之吏同也、公侯之卿其田二黨、其賦十乘、其

定出賦五乘也、次國之卿、七旅、其賦七乘、其定出賦三乘也、其法不得與天子之卿同也、故叔向曰、大國之卿、一旅之田、（田猶賦也、故曰旅卒）上大夫三卒之田、（一故、作一、字之誤也、荀子之言可見）荀卿曰、有五乘之地者、事三世、有三乘之地者事二世、此之謂也、豈得大國之卿有百乘乎、故稱百乘之家者、天子之公卿而已、豈不不知斯義、而論井田百乘千乘、其猶辨聾者以白黑也、秦漢以來二千年于今、混而論之、豈不過哉

鄕遂百里千乘四則

夫有周氏之制土田、溝樹其地域也、以八尺爲步、（相當日本五尺四寸四分八釐也）四步百爲畝、畝百爲一家之田也、五家爲比、而置其邑、故鄕長職曰、邑中之政、相贊、二比爲里、故旅師職曰、五家爲比、十家爲聯、五人爲伍、十人爲聯、四閭爲族、八閭爲聯、小司空曰、十夫有溝、百夫有洫、千夫有澮、萬夫有川、由是觀之、一里者十家之田也、仲尼曰、十室之邑、有忠信如丘者、又曰、千室之邑、百乘之家、未嘗聞井田之外以九聯之也、故一里者、爲十家之田也明矣、十家之田、其稅什之一、故載師曰、近郊十一、遠郊二十而三、孔子曰、古明王十一而稅、孟子曰、周人百畝而徹、其實皆什一也、故以一家出十畝之稅、以十家出百畝之稅、則猶九夫也、故王制誤之曰、方一里者、爲田九百畝、包咸依之、曰、方里爲井、十井爲乘、此皆不知十家之田、十而稅、且井比之別、及以鄕遂封諸侯之道、豈不惜哉、旣

以十家之田、爲方一里、故方十里者、爲方一里者百、爲田十萬畝也、故十里千家之田、（以三十石積之、則三萬石也、）其賦十乘、其稅猶萬畝、故九萬畝、猶私田也、是以王制誤之、曰、方十里者、爲方一里者百、爲田九萬畝、豈不誤哉、方百里者、爲方十里者百、爲田一千萬畝、故百里者、十萬家之田、（以三萬石積之、則三百萬石、）其賦千乘、故以百里曰千乘之國也、其稅猶一百萬畝也、故九十億畝猶私田也、是以王制誤之、曰、方百里者、爲方十里者百、爲田九十億畝、豈不誤哉、方千里者、爲方百里者百、爲田十萬億畝、故千里者、百萬家之田、（以三百萬石積之、則三千萬石、）其賦萬乘、故以方千里曰萬乘之國也、其稅猶一億畝也、故九萬億畝、猶私田也、故王制誤之、曰、方千里者、爲方百里者百、爲田九萬億畝、豈不誤哉、夫周道衰微、而禮樂陵遲、鄉遂之制亡、而後不知井比之別、徒雖知鄉黨之名、不知所以建之者、一一千年于今、豈不悲哉

夫千乘之國、其田雖一千萬畝也、去其山陵林麓川澤溝瀆城郭塗巷之地、則七十五億畝、此則三鄉三遂之田也、故其賦竭作、則足以出六軍七百有五十乘也、雖然、其定出賦、三軍三百七十五乘也、此則三鄉之賦也、大司馬序曰、大國三軍、此之謂也、此千乘三軍之別也、君子當明之以論先王之道也、如國有大事、則竭三遂之賦而出之、書曰、魯人三郊三遂、此之謂也

夫天子之公卿大夫士之采地、於都鄙之地食之、諸侯之卿大夫士之采地、於三遂之地食之、此則天子之與諸侯之別也、管敬仲制士地也、以國鄙分之、職是之由、諸侯既竭出三鄉三遂之賦、而不

足、則竭微餘子及鰥寡孤疾老者、如不足、則諸子帥國子、而致於太子、惟所用之、且加之以山川城郭宮室塗巷之賦、則有千乘備矣、故以方百里之地、稱千乘之國、職是之由、萬乘之義亦復然、六鄉六遂之賦、合一萬五千乘、加之以都鄙之賦、餘夫、國子及山川宮室塗巷之賦、則有萬乘備矣、故以方千里之地、稱萬乘之國、職是之由、此則聖帝明王所以建邦國、以司牧惟民、以作田役、起軍旅之道也、學者知是道、而後治國之義、可得而論已、自洙泗之道散、而大義乖以降、三千年于是、比鄉井田之差、國都都鄙之分、萬乘千乘之別、十乘百乘之義、六軍三軍之賦、二軍一軍之制、寔寔乎無得聞焉、自非典策存、孰知三千年之謬乎、夏書有之、聖有謨訓、明徵定保、商書曰、監于先王成憲、其永無愆、豈其不然哉

書序曰、武王、戎車三百兩、虎賁三百人、泰誓曰、予有臣三千、則以武王之富、出兵車三百乘、有臣三千、則雖大國、不得出三軍、矧於千乘乎、春秋襄公十一年、春王正月、魯作三軍、孔子以譏之、穆叔亦難之、夫魯者、上公之國、千乘之地也、禮記曰、成王、以周公爲有勳勞於天下、是以封周公於曲阜、地方七百里、革車千乘、由是觀之、則魯既監七百里之地、又至乎襄公、伐蠻夷而有其地、則殆千里、故論語曰、季子富於周公、而作三軍、穆叔難之、孔子譏之、則雖監七百里之地、不得出三軍、矧於千乘乎、君子徵諸先王謨訓、以實其事實、則浮辭自壞矣、豈待論說乎

春秋左氏傳曰、莊公十六年、王使虢公命曲沃伯、以一軍爲晉侯、閔公元年、晉作二軍、僖公二十七

年、晉又作三軍、同三十一年、晉蒐清原作五軍、又文公六年、春蒐于夷、舍二軍、成公三年、二月甲寅、晉又作六軍、又僖二十八年曰、晉車七百乘、又文公十四年、晉師八百乘、又成公二年、臧宣如晉乞師、許七百乘、又曰、許八百乘、昭公十三年七月、晉治兵于邾南、甲車四千乘、其軍車多如此、雖然、管敬仲相齊公而制國、以爲二十一鄕、以二千家爲鄕、則二十一鄕、凡四萬二千家也、五家爲軌、故五人爲伍、軌長帥之、十軌爲里、故五十人爲小戎、出戎車一乘、里有司帥之、四里爲連、故二百人爲卒、出戎車四乘、連長帥之、十連爲鄕、故二千人爲旅、出戎車四十乘、鄕良人帥之、五鄕一帥、故萬人爲一軍、出戎車二百乘、五鄕之帥帥之、工商之鄕六、不出其賦、唯士之鄕十五、出其賦、故三軍、革車六百乘、以方行於天下、以誅無道、以屏周室、平天下、大國之君、莫之能禦、終霸於諸侯也、又吳夫差、陳士卒百人、以爲徹行、百行則萬人、萬人爲方陳、爲帶甲三萬、分之爲三軍、又越勾踐、軍於江南、乃中分其師、以爲左右軍、以其私卒君子六千人爲中軍、則三軍凡一萬六千人也、由是觀之、則齊吳越皆盟主于諸侯、而其軍數不同如之、雖然大率不過三軍三萬人、一車五十人也、齊又制鄙、以爲五屬、凡三家爲邑、國語作三十家爲邑、十字衍文、故上文曰、井田疇均、則民不憾 十邑爲卒、十卒爲鄕、三鄕爲縣、十縣爲屬、鄙則五屬、四萬五千家、國鄙合八萬七千家、而士之鄕唯出三萬人而已、晉纉齊之緒、則其軍車、當從之出一軍一萬、一車五十人也、副貳之車、不過十人、百兩必千人之言、可見也已、故晉雖作六軍、以其出軍觀之、不過上中下三軍、則其餘小國、安得出三軍乎、魯作三軍、

春秋非之、豈不宜哉、夫軍旅卒伍之法、族出一乘、一軍爲萬二千五百人者、先王之道也、匪桓公以來所用者也、蓋管仲相桓公、九合諸侯、以降天下依之、而不左衽、軍旅車賦之法、亦從之、故與夫差、以三萬爲三軍、以方行天下、則可以見其從之也、其以甲士三人、步卒七十二人、爲一車者、自司馬法始也、嗚呼文武之道、既墜于地、上無方伯、下無連帥、國異政、家殊俗、而禮義廢矣、滔滔天下皆是、於是乎、春秋內外傳所載、軍車之事、雖數多矣、皆不依先王之道、而依齊晉之方、則一車無過五十人、故咸不合曲策謨訓、豈不弔哉、嗚呼自桓公至今、殆三千年、鄉遂井田軍旅之詳、寥寥乎無得聞焉、君子當盡心力、以讀先王之典訓也、如微曲策、孰知三千年之紕繆哉、詩曰、不愆不忘、率由舊章、率由先王之成憲、而愆者未之有矣

井田百里千乘五則

嗚呼周道衰微、禮義廢、禮義廢而名亂矣、名亂而物亾、故有以田一井爲里者也、春秋傳曰、有田一成、有衆一旅、是也、蓋皆摸古昔之義而論之已、非論先王制土田之法也、何則十里之地、豈五百夫哉、蓋古有以方十里爲成、以方百里爲同者、故子產氏曰、列國一同、范蠡氏曰、有田一成也、雖然、未以爲井田之名、故子產氏曰、自是以衰、則可知伯七十里、子男五十里也、未聞以井田封國之義也、孔子孟子論井田、亦唯謂稅斂之事已、未論封諸侯之義也、秦漢以降、封建之

制亡、而郡縣孤行、遂以爲井田也者、封國之法、豈不過哉、自古雖論千乘萬乘之義、未能論七十里九十里之義、司馬法、漢書、馬融、鄭玄之説、於是窮矣、故王制包咸不從之、遂以萬井爲公侯之國也、惜哉、不知井比之別、及以鄉遂封邦國、建王國之義也、書曰、典常作之師、君子其思諸

夫周道衰微以來、至于春秋戰國之世、諸侯擅僭、以井田制其地、以重其賦歛也、其古昔因有十里爲成、百里爲同之名、遂以百井爲成、以萬井爲同、詫其名耳、何則雖有以萬井爲同之名、未有十萬井及百萬井之名、則其説亦於是窮矣、漢書雖有同十爲封、封十爲畿之名、六經傳記無此名、則班固之億説耳、矧曰無周禮井田之法、十井爲通百井爲成、十成爲終、爲同之名、則知非聖人之制土地之道也、故又知班固司馬法之妄作也、學者不辨之、則聖人之道不可得論也

漢書曰、因井田而制軍賦、地方一里爲井、井十爲通、通十爲成、成方十里、成十爲終、終十爲同、同方百里、同十爲封、封十爲畿、畿方千里、有稅有賦、稅以足食、賦以足兵、故四井爲邑、四邑爲丘、丘十六井也、有戎馬一匹、牛三頭、四丘爲甸、甸六十四井也、有戎馬四匹、兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、卒七十二人、干才備具、是謂乘馬之法、一同百里、提封萬井、除山川沈斥城邑居園囿術路三千六百井、定出賦六千四百井、戎馬四百匹、兵車百乘、此卿大夫采地大者也、是謂百乘之家、節 提封十萬井、定出賦六萬四千井、戎馬四千匹、兵車千乘、此諸侯之大者也、是謂千乘之國、節 天子畿方千里、提

封百萬井、定出賦六十四萬井、戎馬四萬匹、兵車萬乘、故稱萬乘之主、蓋此說大氐出司馬法也、此則以百里之地為百乘之家、則其非覆其罪也、君子不可不辨也、夫天子三公、其地方六十四里、其賦二百五十六乘、其定出賦百二十五乘、及一軍、故稱百乘之家也、且以萬乘千乘百乘次序之、三公則當百乘、故以三公稱百乘、職是之由、天子六卿之田、其賦則六十四乘、不得出百乘也、雖然、三公者六卿兼領之、顧命次六卿、并三公言之、可以見已、故并公卿而以百乘稱之、孝經論卿大夫士也、以卿言之、不以公言之、其餘論禮樂亦如之、故公者、卿之兼職也、故雖卿大夫采地大者、不過有方六十四里、二百五十六乘也、司馬法漢書、以百里稱百乘、豈不過哉

夫天子之卿、與諸侯之卿、大異其制也、大國之卿、其田十里、其賦十乘、中國之卿、其田七里、其賦七乘、小國之卿、其田五里、其賦五乘、以其君之命數制之、其定出賦、其半而已、故大國之卿、出其半賦則五乘、次國三乘、故叔向曰、大國之卿一旅、上大夫一卒、荀子曰、有五乘之地者事三世、有三乘之地者事二世、此之謂也、故稱百乘之家者、天子之公卿已、非諸侯之卿稱也、其餘論禮樂、亦皆以天子之禮論之、不以諸侯論之也、鄭玄註儀禮、覲禮之外、以諸侯論之、皆非也、秦漢以來、不知是義、混而一之、豈不誤哉、君子當知斯義而後論聖人之道也

又論語曰、千室之邑、百乘之家、冉有可使之宰也、此則謂千室者十乘、百乘者萬室也、千室百乘、猶云十乘百乘也耳、孔安國以千室之邑為百乘之家者非也

又孟子曰、大國地方百里、君十卿祿、卿祿四大夫、大夫倍上士、上士倍中士、中士倍下士、下士與庶人在官者同祿、祿足以代其耕也、又曰、耕者之所獲、一夫百畝、百畝之糞、上農夫食九人、王制曰、諸侯之下士、視上農夫、由是觀之、則大國之卿、其田三千二百畝、其民三十二家、其人二百八十八人也、豈不亦鮮哉、以三十二家、每家出一人之役、則三十二人也、安得以三十二人、政百乘乎、王制依之、豈不謬哉、如叔向之言、則大國之卿、其田五萬畝、其民五百家也、殆二十倍孟子王制之說也、雖則二十倍乎、其定出賦、不過出戎車五乘也、由之觀之、則自非天子之公卿、孰得出百乘邪、如大國之卿、則當曰十乘之家也、奚得與天子之公卿同名乎、以周官推之、則雖天子之三公、不過有方六十四里、四千九十六井、然司馬法、漢書以萬井論之、遂以百里為卿大夫采地、以三百十六里有奇、為諸侯之國、豈不非覆而其罪哉、秦滅諸侯、立郡縣以降、天下之士、不知封建之制、井比之別、遂混天子之卿大夫、與諸侯之卿大夫而一之、其過不亦宜哉、君子當知斯義而後、論先王之世也

季康子欲以一井田出法賦焉、使訪孔子、子曰、丘弗識也、冉有三發、卒曰、子為國老、待子而行、若之何子之不言、孔子不對、而私於冉求曰、求汝來、汝弗聞乎、先王制土、籍田以力而底其遠近、賦里以入、而量其有無、任力以夫、而議其老幼、於是瘵寡孤疾老者、軍旅之出則徵之、無則已、其歲收田一井、出稯禾秉缶米芻藁、不是過、先王以為之足、君子之行、必度於禮、施取其厚、事

舉其中、斂從其薄、若是其已、丘足矣、不度於禮、而貪冒無厭、則雖賦田、將有不足、且子孫若以行之、而取法則、有周公之典在、若欲犯法則、苟行之、又何訪焉、今由是觀之、魯舊無井田之法、故季康子欲以一井田之法、厚其稅歛也、夫先王之道、於諸侯之國、不置井田、唯建鄉遂而已、自非王圻、何得置都鄙乎、魯故有七百里、至于春秋之時、伐蠻夷而幷兼其地、則殆千里、故季康子欲借以造井田、富其國、而訪之、故孔子以先王制土、籍田以力之法論之、且戒之曰、不度於禮、而貪冒無厭、則雖賦田、將有不足、賦也者、如九賦之賦也、謂稅歛之事、故子曰、斂從其薄、又曰、貪冒無厭、杜預註春秋、以田賦爲丘賦、非也、仲尼曰、軍旅之歲、鰥寡孤疾老者微之、其歲收田一井、出稯禾秉芻米缶藁、不是過、由是觀之、先王之賦都鄙之法、不是過也、而先王以爲之足、季康子欲制井田、以厚其賦、故孔子非之、而不答、豈以井田封諸侯之義哉、君子不可不知也、凡先王之制、雖都鄙之地、其賦重、故孔子曰、鰥寡孤疾老者、軍旅之出則徵之、周禮起徒役、每家出一人、其賦重、可見也、何有以百三十六家出戎馬一匹、牛三頭、以五百七十六家出兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、步卒七十二人之法乎、此則非先王之道、又非管敬仲之法、則司馬法僞作而已、

滕文公使畢戰問井地於孟子、孟子曰、請野九之一而助、國中什一使自賦、此野也者、謂遂之地、國中也者、謂鄉之地也、又曰、方里而井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田、公事畢、然後敢

治私事、所以別野人也、蓋孟子以爲、鄕從古法、而以十家可出百畮之稅、故曰國中什一使自賦、又曰、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、則可以見爾、曰、遂九之一而稅者、在欲以滕小國之故、制此方以富國也、非以先王制土地之道說之、故曰請也、載師職曰、近郊十一、遠郊二十而三、則先王之制、雖郊野皆什一也、孟子所論、非先王之古法、可以見也、故曰此其大略也、若夫潤澤之、則在君與子矣、曰潤澤之者、謂什一也、孟子又曰、死徙無出鄕、鄕田同井、出入相友、則孟子之意、亦可知、非外鄕遂而論之也、同井也者、猶云同里也、如鄕遂之田與井地、同其居則當無所置比閭也、是故知同井者、猶曰同里也、此蓋皆一時之論說、而與季康子訪井田之意同、謂稅斂之事而已、故子輿氏引詩、以爲雖周亦助也、以徵公田私田之義也、可以見非論封諸侯之道也、夫自周道衰微、而後國異政、家殊俗、故雖齊之地、鄕遂之制亾矣、而況於滕乎、雖管敬仲稱先王、以參其國、伍其鄙、而法非其法也、自是以降、諸侯以幷兼之故、至于有數畿、故典籍惡其害己、而皆去之、肆子輿氏、而其詳不得而聞也、而矧曰秦漢乎、故管仲氏造國鄙也、孟軻氏論井田也、班固氏說車賦也、咸非先王之道也、嗚呼哀哉、後人弗率由舊章、唯學下流、而不知岷山導江、遂以爲先王之道既亾矣、豈不哀哉、學者當明六經、以率由先王之典也、周書曰、典常作之師、豈道之亾之有

五義分士三等二則

五義之興也、諒不レ於二上皇之世一、虞書曰、肆覲二東后一、修二五禮一、夏書曰、天秩二有禮一、五禮五庸哉、然則五義之興、放二於此一乎、自二夏后一至二殷周一、率二承之一建二其極一、肆武王反二商政一、政依レ舊、而列レ爵惟五、而命二大宗伯一、掌二諸侯之五義一、典命率レ之、明二朝覲之禮一、而公侯伯子男之義粲然、於レ是乎、貴賤有レ別、尊卑有レ序、則民莫レ弗二尊レ上而敬一レ長、而萬邦惟康、子曰、義者所下以別二貴賤一明中尊卑上也、此之謂也、五義或謂二之爵一、或謂二之禮一、其實一矣、此則自二有殺氏一、至二于周人一、所レ弗レ變也、分二其土一惟三、此亦二帝三王攸レ弗レ變也、周書曰、列レ爵惟五、分レ土惟三、斯之謂也、其制レ之也、以二其命數一爲レ節、典命曰、國家、宮室、車旗、衣服、禮義、皆以二其命數一爲レ節、故上公百里、侯伯七十里、子男五十里也、子思曰、公侯百里、伯七十里、子男五十里、虞夏殷周之常制也、斯以レ侯爲二百里一者、傳寫之誤也、孟子依レ之、王制依二孟子一誤レ焉、雖レ然、三等之說、無二以異一焉、墨子曰、文武百里之諸侯也、又曰、古者湯封二於亳一、絕レ長繼レ短、方地百里、又曰、昔者文王封二於岐周一、絕レ長繼レ短、方地百里、春秋傳曰、昔天子一圻、列國一同、自レ是以衰、周制也、孟子曰、諸侯不二百里一、不レ足三以守二宗廟之典籍一、周公之封二于魯一、爲二百里一也、地非レ不レ足也、而儉二於百里一也、大公之封二於齊一也、亦爲二百里一也、地非レ不レ足也、而儉二於百里一也、又曰、湯以二七十里一、文王以二百里一、荀子曰、文王載二百里地一、而天下一、大司馬、有二大國中國小國之名一、由レ是觀レ之、自二有虞

氏至于周人、立爵分土所不變也、自秦漢至于今、殆二千年、以司馬法爲典常、遂以萬井爲百乘之家、以十萬井爲千乘之國、豈不誤哉、夫聖人之封國也、不以井田而以比鄰、王制雖弗從司馬法、以井田論之、易曰、差若毫釐、謬以千里、此之謂也

分土五等之文、佗經無所見也、獨周官大司空、及職方氏有之、此則謂以土圭之法土其地、以正日景以求其域也、非謂均土地、以室數封諸侯之道也、故大司空曰、凡建邦國、以土圭土其地、而制其域、諸公之地、封疆方五百里、其食者半、諸侯之地、封疆方四百里、其食者參之一、諸伯之地、封疆方三百里、其食者參之一、諸子之地、封疆方二百里、其食者四之一、諸男之地、封疆方百里、其食者四之一、職方氏曰、凡邦國千里、封公以方五百里則四公、方四百里則六侯、方三百里則七伯、方二百里則七十五子、百里則百男、此則謂以土圭計大數、立其法也、非謂均土地而封溝之、以室數制之也、如以三等之田立夫家、以制鄉遂都鄙之地、則何以土圭土其地之有、唯謂大數而已、又曰、其食者參之一、四之一、亦其大數而已、鄭衆曰、其半皆附庸小國也、屬天子也、參之一者亦然、此說庶幾乎、大司空職方雖分別五等、其實則歸三等、故大司馬、有大國中國小國之名、典命以其命數、別國家宮室之節、周書有分土惟三之文、豈以五等之文疑典籍之爲、子思、墨子、孟子、荀子、及王制、皆以公侯爲百里、以伯爲七十里者、不知以命數制之之禮也、鄭玄解典命、以國爲國城者、泥舊說、而誤之已、學者當明其事實、以論先王之道也、

鄉遂井田圖說卷上終

鄉遂井田圖說卷中

畿內諸侯一則

夫邦畿方千里、去二王城一規二畫面百里內一、以爲二六卿一、以二其餘地一爲二廛里一、謂二之國中之地一也、以外至二于二百里一爲二六遂一、以二其餘地一爲二場圃一、謂二之園地一也、又以二其餘地一爲二宅田、士田、賈田一、謂二之近郊野之地一也、又其外至二于五百里一、井二牧其田野一以建二公邑、家邑、小都、大都之田一、謂二之都鄙之地一也、以二其餘地一爲二牛田、賞田、牧田一、謂二之遠郊之地一也、公卿大夫無二大功一則食二都鄙之地一已、如有二大功一、則加二一等一以爲二諸侯一也、所レ謂畿內之諸侯也、朝士曰、邦國碁是也、周語曰、夫先王之制、邦內甸服、周襄王曰、昔我先王之有二天下一也、規二方千里一以爲二甸服一、有殷氏之世、微子啓爲二甸服諸侯一、有周氏之世、鄭桓公爲二圻內諸侯一也、故子產氏曰、卑而貢重者甸服、此之謂也、夫先王之造二都鄙一也、爲レ封二三公九卿旅大夫士一也、故其封疆可レ知也、夫先聖王之司二牧惟民一也、必自二經界一始、經界既正、而兆民得二其所一、鰥寡無レ蓋、書曰、申畫二郊圻一、愼固二封守一、以康二四海一、周官曰、體レ國經レ野、此之謂也、夫學二先王之道一、不レ明二斯道一、則譬猶下盲者與レ人同、命二白黑之名一、而不上レ能レ分二其物一也、豈謂二學者一哉

軍禮十二則

天子有道、則禮樂征伐、自天子出、必以四時田獵、教治兵振旅之法也、以歳之孟秋、賞軍帥武人于朝、簡練傑俊、任用有功、命將選士、以誅不義、於是孟冬以級授軍、司徒執朴、北面而誓之、誓于社以習其事

天子將征有罪、則先期五日、太史筮於祖廟、擇吉日齋戒、告于郊社稷宗廟、周書曰、王朝步自周、于征伐商、告于皇天后土、此之謂也、既筮、則獻兆於天子、天子使有司以牲特告社、告以所征之事、而受命焉、舍奠于帝學以受成、然後乃類于上帝、柴于郊、周書曰、受命于文考、類于上帝、宜于冢土、以爾有衆、底天之罰、此之謂也、乃出、以齋車遷廟之主及社主行、大司馬奉之、若無遷廟之主、則以幣帛皮圭告于祖禰、謂之主命、亦載齊車、節凡行主、皮圭幣帛皆每舍奠焉、而後就館、主車止于中門之外、外門之內、廟主居于道之右也、節凡所經名山大川、皆祭告焉、周書曰、告所過名山大川、曰、惟有道曾孫、周王發、將有大正于商、今商王受、無道、暴殄天物、害虐烝民、為天下逋逃主萃淵藪、予小子既獲仁人、敢祗承上帝、以遏亂略、華夏蠻貊、罔不率俾、恭天成命、肆予東征、綏厥士女、惟士女篚厥玄黃、昭我周王、天見休震動。用惟臣附我大邑周、惟爾有神、尚克相予、以濟兆民、無作神羞、此之謂也

及レ至二敵所一將レ戰、大史卜二戰日一、卜二右御一、先レ期三日、有司明以二敵人罪狀一告二之史一、史定レ誓、命二戰日一、軍將陳二列車甲卒伍于車門之前一、有司讀二誥誓一、使三周定二其誓一、如二禹誓甘誓湯誓秦誓牧誓一是也、三令五申既畢、如二大誓三篇及牧誓一是也、遂禱レ戰、祈二克于上帝一、然後卽レ敵

祈克之禮、先命二勇謀之將一、迎下於敵所二從來一之方上爲レ壇、祈二克于五帝一、衣服隨二其方色一、執事人數、從二其方之數一、牲則用二其方之牲一、祝史告二于社稷宗廟、邦域之內名山大川一

將二士戰一、全レ已克レ敵、史擇二吉日一、復禡二於所レ征之地一、柴二于上帝一、祭レ社奠レ祖、以告レ克者、不二頓レ兵傷一下士也、戰不レ克、則不レ告也、凡類禡、皆用二甲丙庚壬之剛日一也

有司簡レ功行レ賞、不レ稽二于時一、其用レ命者則加レ爵、受二賜于祖奠之前一、節其奔北犯レ命者、則加二刑罰一、戮二于社主之前一、書曰、用レ命賞二于祖一、弗レ用レ命戮二于社一、予則孥二戮汝一、此之謂也、此賞二功於祖一、告二分命之均一、示レ不二敢專一也、戮二罪於社一、告二聽獄之中於上一、示二聽レ獄之當一也

賞罰既行、然後鳴レ金振旅、有司徧告二捷于レ時所レ有レ事之山川一、既至レ舍二于國外一、三日齋、以二特牛一親格二于祖禰一、然後入、設レ奠以反レ主、若王命、則卒レ奠斂レ主、埋二之于廟兩階間一、反二社主一如二初迎之禮一

舍二奠于帝學一、以二訊馘一告、大享二于群吏一、用二備樂一饗二有功於社廟一、舍レ爵策レ勳焉、謂二之飲至一、此天子親征之禮也

若天子命二將帥一出二征之一、則將帥受レ命、而出則忘二其國一、卽レ戎師陳、則忘二其家一、故聖人命二將師一出征、則

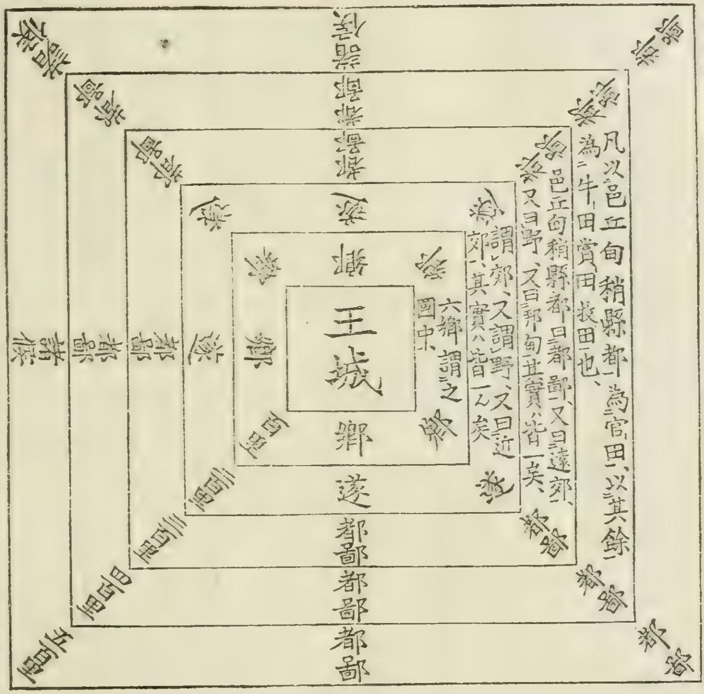
親潔齋盛服、設ニ奠于祖一以詔レ之、軍將先入、軍吏畢從、皆北面、再拜稽首而受レ之、天子當レ階南面、命授ニ之節鉞一、軍將受レ之、天子乃東向、西向而揖レ之、亦弗レ御也、然後告ニ大社一、冢宰執レ蜃、宜ニ於社之右一、南面授ニ軍將一、軍將北面、再拜稽首而受レ之、承レ所レ頒賜ニ于軍吏一、節將帥出則不レ類ニ于上帝一、其克不レ禡ニ於所レ征之地一也、節若戰之所レ在、有ニ大川名山一則祈レ焉、若禱ニ克于五帝一、則爲下壇於敵所ニ從來一之方上、而衣服隨ニ其方色一、執事人數、從ニ其方之數一、牲則用ニ其方之牲一、若ニ天子之禮一也、祝史告ニ于社稷宗廟、邦域之內名山大川一、天子親素服、誓ニ衆于太廟一曰、某人不道、侵ニ犯大國一、二三子、尙皆同レ心、比レ力死守、軍將再拜稽首受レ命、節既誓ニ將帥一、勤ニ士卒一陳ニ于廟之右一、天子立ニ太廟之庭一、祝史立ニ于社一、百官各警ニ其事一、御ニ于天子一以待レ命、乃大鼓ニ于廟門一詔ニ軍將一、命レ卒習レ射三發、擊刺三行、告レ廟用ニ兵于敵一、五兵備効、乃鼓而出、以即レ敵而捷、則報レ之振旅、復命節ニ異功一勒、親告レ廟告レ社、而後適ニ朝禮一也

凡居ニ軍中一之禮、將帥尙レ左、士卒尙レ右、出レ國先レ鋒、入レ國後レ刄、介冑左レ身、執レ銳在レ列、雖ニ君父一不レ拜

若不幸軍敗、則驛騎赴告、于載橐韔、天子素服、哭ニ于庫門之外一三日、大夫素服、哭ニ于社一、亦如レ之、節亾若レ將失レ城、則皆哭七日、天子俾ニ使迎ニ于軍一、命ニ將帥一無レ請レ罪、然後將帥結ニ草自縛、袒ニ右肩一而入、蓋喪禮也

凡諸侯親誅ニ有罪一之禮、諸侯命ニ將帥一之禮、亦若ニ天子之禮一也、唯無下類ニ于上帝一之禱上也

斯書論ニ軍賦之制一、故幷ニ載出賦之禮一爾、其至ニ于四時田獵之禮一、則大司馬之職備矣、故不レ贅焉



周官造鄉遂起軍旅之圖

周禮邦畿千里萬乘圖

里	夫	賦	田	稅	
方一里	十家		千畝	百畝	中士
	百家	一乘	萬畝	千畝	元士
方十里	千家	十乘	一億畝	萬畝	大夫
	萬家	百乘	十億畝	一億畝	公卿
方百里	十萬家	千乘	百億畝	十億畝	諸侯
方千里	十億家	萬乘	千億畝	百億畝	天子

公卿大夫士之祿秩、仝不レ在レ若レ玆、其實以ニ井田一封レ之、雖レ然、以ニ制レ國之次序一命レ之則如レ是、故以ニ公卿一稱ニ百乘一、職是之由、非ニ諸侯之卿稱一

國	野	軍	百畝	一家	賦	車賦		
比	鄰	伍	五百畝	五家			下士	長
閭	里	兩	二千五百畝	二十五家	馬一匹		中士	下士
族	鄼	卒	萬畮	百家	馬四匹	車一乘	上士	中士
黨	鄙	旅	五萬畝	五百家	馬二十匹	車五乘	下大夫	上士
州	縣	師	二十五萬畝	二千五百家	馬百匹	車二十五乘	中大夫	下大夫
鄉	遂	軍	百二十五萬畝	萬二千五百家	馬五百匹	車百二十五乘	卿	中大夫
							鄉	遂

天子六鄉、六遂、六軍、大國三鄉、三遂、三軍、中國二鄉、二遂、二軍、小國一鄉、一遂、一軍也

周人封上公百里千乘之圖

里	夫	賦	田	稅	
方一里	十家		千畝	百畝	元士

卿大夫之祿秩、全不レ在レ若レ茲、以二制レ國之次序一命レ之、則如レ是、其實大國之卿一黨、其賦五乘、上大夫之田三族、其賦三乘、叔向荀卿之言、可二以徵一也、七十里、五十

	百家	一乘	萬畝	千畝	大夫
方十里	千家	十乘	十萬畝	萬畝	卿
	萬家	百乘	百萬畝	十萬畝	
方百里	十萬家	千乘	十億畝	百萬畝	諸公

里之國、亦各降二一等一已、典命掌レ之、正二其義一、其尊卑可二以見一已、凡一千萬畝之內、除二其山陵林麓川澤城郭宮室塗巷一、則七百五十萬畝、此則三鄕、三遂之田也、故其賦六軍、七萬五千人、兵車七百五十乘也、其定出賦三軍、兵車三百七十五乘、此則三鄕之所レ出也、故曰大國三軍、是之謂也

周人封侯伯七十里七百乘之圖

里	夫	賦	田	税	
方一里	十家		千畝	百畮	元士
	七十家		七十畝	七百畮	大夫
方七里	七百家	七乘	七萬畝	七千畮	卿
	七千家	七十乘	七十萬畝	七萬畮	
方七十里	七萬家	七百乘	七百萬畝	七十萬畮	諸侯諸伯

凡七百萬畝之內、除二山陵林麓川澤城郭宮室塗巷一、則五百萬畝、此則二鄕二遂之田也、故其賦五百乘、四軍五萬人也、其定出賦二軍、兵車二百五十乘、此則二鄕之所レ出也、故曰、次國二軍、是之謂也

周人封子男十里五百乘之圖

里	夫	賦	田	稅	
方一里	十家		千畮	百畮	元士
	五十家		五千畮	五百畮	大夫
方五里	五百家	五乘	五萬畮	五千畮	卿
	五千家	五十乘	五十萬畮	五萬畮	
方五十里	五萬家	五百乘	五百萬畮	五十萬畮	諸子男

凡五百萬畝之內、除二山陵林麓川澤城郭宮室塗巷一、則二百五十萬畝、此則一鄉一遂之田也、故其賦二軍二萬五千人、兵車二百五十乘也、其定出賦一軍、兵車百二十五乘、此則一鄉之所レ出也、故曰、小國一軍、是之謂也

周官天子以二井田一造二都鄙一之圖

			采地		賦	定出賦	
井	一井	九家		下士			方一里
邑	四井	三十六家		中士	馬一匹 卒二十五人		方二里
丘	十六井	百四十四家		下士	馬四匹 車一乘 卒百人	馬二匹 卒五十人	方四里

甸	六十四井	五百七十六家	公邑之田	下大夫	車四乘 卒四百人	車二乘 卒二百人	方八里
稍	二百五十六井	二千三百二家	家邑之田	中大夫	車十六乘 卒千六百人	車八乘 卒八百人	方十六里
縣	千二十四井	九千二百八家	小都之田	六卿	車六十四乘 卒六千四百人	車三十二乘 卒三千二百人	方三十二里
都	四千九十六井	三萬六千八百卅二家	大都之田	三公	車二百五十六乘 卒二萬五千六百人	車萬二千八百乘 卒百二十八人	方六十四里

以二郷遂之法一推レ之、當レ如レ是也、漢書亦曰、丘戎馬一匹、甸戎馬四匹、兵車一乘、此則誤也、遂以二此法一推二諸侯之國一、亦誤也

此以下擧二繆說一

王制之圖			包咸之圖		司馬法之說			
井	九百畝	一里		九家				
十井	九千畝		一乘 甲士三人 步卒七十二人 七十五人	九十家	通	三十家 士一人 徒二人	士一人 馬一匹	
百井	九萬畝	十里	十乘 七百五十人	九百家	成	三百家 士十人	革車一乘 徒二十人	
千井	九十萬畝		卿大夫百乘 七千五百人	九千家	終	三千家 士百人	革車十乘 徒二百人	
萬井	九百萬畝	百里	諸侯千乘 三軍七萬五千人	九萬家	同	三萬家 士千人	革車百乘 徒二千人	卿大夫釆地

大凡以二一井一爲レ里者、於二都鄙之地一則是也、於二諸侯之地一則非也、何則以二井田一封二五十里、七十里、百里之國一、則何處置二鄉遂一乎、其謬可二以見一爾

漢書之圖

井	一井	方一里	除二山川沈斥城池邑居園囿術路三千六百井一、六則千四百井、定出賦也	定出賦	
通	十井				
成	百井	方十里	十六井	戎馬一匹牛三頭	
終	千井		六十四井	戎馬四匹兵車一乘牛十二頭甲士三人卒七十二人	
同	萬井	方百里	六千四百井	戎馬四百匹兵車百乘	卿大夫
封	十萬井	三百六十里奇	六万四千井	戎馬四千匹兵車千乘	公侯
畿	百萬井	方千里	六十四万井	戎馬四萬匹兵車萬乘	天子

凡造二都鄙一、制二其地域一、而封二溝之一、以二室數一制レ之、則何除二山川沈斥城池邑居園囿術路之地一乎、以二不易一易再易之地一制レ之、則其家與二比隣一無レ異焉、其所二以異一者、井二牧其田野一而已、此說亦無レ所レ建二鄉遂一、則其謬可レ見也

孟子及漢儒之圖

	田	公田	私田	夫家	車賦	
一井	九百畝	八十畝	八百畝	八家		
十井	九千畝	八百畝	八千畝	八十家		
百井	九萬畝	八千畝	八萬畝	八百家	一乘	
千井	九十萬畝	八萬畝	八十萬畝	八千家	十乘	
萬井	九百萬畝	八十萬畝	八百萬畝	八萬家	百乘	卿大夫
十萬井	九千萬畝	八百万畝	八千萬畝	八十萬家	千乘	公侯

右如二三圖一、則無レ所レ置二鄉遂一、又無レ所レ出二軍旅一也、其誤可二以見一也

孟子大國制祿之法

下士	百畝	九人
中士	倍二百畝	十八人

凡周室之禮、上公之卿、采地十乘也、其田十萬畝也、其士采地食二十家一、其田千畝也、圖既在レ上、可二并見一也、

上士	倍	四百畝	三十六人
大夫	倍	八百畝	七十二人
卿	四倍	三千二百畝	二百八十八人
君	十倍	三萬二千畝	二千八百八十人

孟子言レ之何居、皆臆說已、當下以レ此知中以二諸侯卿一稱二百乘一之誤上也

孟子中國制祿之法

下士		同上	同上
中士		同上	同上
上士		同上	同上
大夫		同上	同上
卿	三倍	二千四百畝	二百十六人
君	十倍	二萬四千畝	二千百六十人

凡周室之禮、中國之大夫、采地七乘也、其田七萬畝也、其士食二十家一、其田千畝也、圖既在レ上、可二并見一也、孟子言レ之何居、皆臆說已

孟子小國制祿之法

下士	同上	同上	同上	同上
中士	同上	同上	同上	同上
上士	同上	同上	同上	同上
大夫	同上	同上	同上	同上
卿	倍	千六百畝	百四十四人	
君	十倍	萬六千畝	千四百四十人	

凡周室之禮、小國之卿、采地五乘也、其田五萬畝也、又大中小三國之士、其上士皆食十家、其田千畝也、蓋中下之士、降之二等也、故中士食八家、其田八百畝也、下士食六家、其田六百畝也

管仲造國二十一鄉起軍旅之圖

一家	一人						部
軌	伍		五人	五家	軌長	邑	三家（國語作三十家非也）
里	小戎	一乘	五十人	五十家	里有司	卒	三十家
連	卒	四乘	二百人	二百家	連長	鄉	三百家
鄉	旅	四十乘	二千人	二千家	鄉良人	縣	九百家

師	軍	二百乘	萬人	一萬家（五鄉）	五鄉之師	屬	九千家	大夫

齊語曰、五家爲レ軌、十軌爲レ里、四里爲レ連、十連爲レ鄉、又曰、三十家（當レ作二三十家一）爲レ邑、十邑爲レ卒、十卒爲レ鄉、三鄉爲レ縣、十縣爲レ屬、詳見二齊語及管子一也

古說八則

周道衰微、禮樂陵遲、迨二乎戰國一、文武之道、旣墜二于地一、封國之道不レ明、以二井田一論レ之者、以二萬數一レ之、其所二祖述一、不レ過二孟子司馬法一、其所レ依不レ在二王制包咸一、必在二漢書馬融一矣、鄭玄註二周官一、亦依二司馬法一也、其佗皆以二井田一論下封二諸侯一建二王國一、百乘千乘萬乘之賦上也、其下焉者、以爲鄉田同レ井也、若不レ合二其臆一、則作二異說一曰、此非二先王之道一、又曰、非二聖人之書一、又曰、夏之制、殷之制也、此非レ侮二聖言一哉、如侮二聖言一者則服二墨刑一、仲尼則爲二小人一、豈不レ愼哉、其相傳之久、三二千年于是一矣、學者當下大明二于六經一、以論中其是非上也、今擧二其所レ論是非相悖者數條一、而論二之乎左一

鄭玄註二大司馬序一曰、伍一比、兩一閭、卒一族、旅一黨、師一州、軍一鄉、家所レ出一人、賈公彥依レ之、疏二小司徒一曰、小司徒佐二大司徒一、以掌二六鄉一、六軍之士、出レ自二六鄉一、故預配二卒伍一、百人爲レ卒、五人爲レ伍也、而用レ之者、卽軍旅田役是也、五人爲レ伍者、下文云、凡起二徒役一、無レ過二家一人一、六鄉之內、有二比閭族黨

州鄕、一鄕出一軍、六鄕還出六軍、今言五人爲伍者、五家爲比、家出一人、則是一比也、在家爲比、在軍爲伍、伍者聚也、五伍爲兩、兩二十五人也、四閭爲族、族百家也、在軍四兩爲卒、卒百人也、五卒爲旅者、在鄕五族爲黨、黨五百家、在軍五卒爲旅、旅五百人也、五旅爲師者、在鄕五黨爲州、州二千五百家、在軍亦五旅爲師、師亦二千五百人也、五師爲軍者、在鄕五州爲鄕、鄕萬二千五百家、在軍五師爲軍、軍亦萬二千五百人也、又曰、五家爲比、以營農事、比長領之、及其出軍、家出一人、五人爲伍、則伍長領之、在家閭胥領一閭、在軍則兩司馬領之、在家爲族師、在軍爲卒長、在家爲黨正、在軍爲旅師、在家爲州長、在軍爲師帥、在鄕爲大夫、在軍爲軍將、此皆協周禮之義矣、雖然、未知族鄙之地、出兵車一乘之義、遂以司馬法論車賦、豈不惜哉、鄭玄註遂人、引司馬法論乘車之法、亦不協周官之義也、陳祥道論之、故今不贅焉

孔安國註尙書牧誓序曰、 兵車百夫長所載、車稱兩、一車步卒七十二人、凡二萬一千人、 擧全數、虎賁勇士之稱也、皆百夫長、正義曰、孔既用司馬法一車七十二人、又云、兵車百夫長所乘、又下傳、以百夫長爲卒帥、是實領百人、非七十二人、依周禮大司馬法、天子六軍、出自六鄕、凡起徒役、無過一人、故一鄕出一軍、鄕爲正、遂爲副、此以上、能協周官之義矣、 若鄕遂不足、則徵兵于邦國、則司馬法六十四井爲甸、計有五百七十六夫、共出長轂一乘、甲士三人、步卒七十二人、此正義之說、鄕爲正、遂爲副、以上能協周官之義矣、以下不協周禮之義也、如曰鄕遂不足、則徵兵于都鄙、則可矣 曰徵于邦國則

不可、如徵兵于邦國、則出三軍二軍一軍而致之、何用旬法之爲、夫天子有大事、則徵六鄉之賦、於是乎六軍有焉、如六軍不足則徵六遂之賦、於是乎十有二軍出焉、如出十二軍不足、則徵旬稍縣都之賦、於是乎百軍萬乘出焉、如不足則徵于邦國而已、非常制也、故曰、徵兵于都鄙、則可也、如曰徵兵于邦國則不可、且也出旬乘者都鄙之定出賦也、其大法必用兵乘、故曰、稍人掌丘乘、此之謂也、夫先王之出車賦也必百人甲士兩司馬四人卒師一人載之、此則聖人不易之法也、以甲士三人步卒七十二人爲一車、非聖人之道也、孔穎達賈公彥不知之而作正義、豈不過哉

孔穎達又疏費誓曰、三郊三遂、謂魯人三軍、周禮司徒萬二千五百家爲鄉、司馬法萬二千五百人爲軍、小司徒云、凡起徒役、無過家一人、是家出一人、一鄉爲一軍、天子六軍、出自六鄉、而諸侯大國三軍、亦當出自三鄉也、周禮又云、萬二千五百人爲遂、遂人職云、以歲時稽其人民、簡其兵器、以起征役、則六遂亦當出六軍、鄉爲正、遂爲副耳、此說能協周官之義矣

又曰、此言三郊三遂者、三郊謂三鄉也、蓋使三鄉之民、分在四郊之內、三遂之民分在四郊之外、鄉近於郊、故以郊言之、穎達氏以郊爲鄉、蓋大國置三鄉、謂之國中也、故管仲制國亦倣之、可以見耳、國外謂之鄙、故敬仲氏制鄙亦倣之可以見已

陳師凱尙書旁通、依孔穎達曰、司馬法曰、王國百里爲郊、六鄉在焉、二百里爲州、六遂在焉、每鄉萬二千五百家、卿一人長之、每遂亦萬二千五百家、中大夫一人長之、每軍萬二千五百人、六鄉爲正軍、六

遂爲二副軍一、六軍共計車千乘、每レ乘甲士三人、步卒七十二人、通七十五人、則千乘該二七萬五千人一也、夏官司馬云、王六軍、大國三軍、次國二軍、小國一軍、軍將皆命レ卿、此說亦美、雖レ然、依二司馬法一曰、百里爲レ郊、二百里爲レ州、及每乘爲二七十五人一者、不レ協二周官之義一也、何則比之賦伍、閭之賦兩、族之賦卒、則周禮者每レ乘百人也、每乘百人、則六軍之車七百五十乘也、此則六鄕所レ出之賦也、故曰二六軍共計車千乘一者、誤矣

又曰、五家爲レ比、二十五家爲レ閭、百家爲レ族、五百家爲レ黨、二千五百家爲レ州、萬二千五百家爲レ鄕、此一鄕之民數也、五家爲レ鄰、二十五家爲レ里、百家爲レ酇、五百家爲レ鄙、二千五百家爲レ縣、萬二千五百家爲レ遂、此一遂之民數也、五人爲レ伍、二十五人爲レ兩、百人爲レ卒、五百人爲レ旅、二千五百人爲レ師、萬二千五百人爲レ軍、此一軍之民數也、高壽曰、每レ乘、七十五人、則如二軍旅一何　凡起二軍旅一、無レ過二家一人一、高壽曰、以レ井起二軍旅一、則一井九人、十井九十人、如分二別私田公田一、則八十人、比二乎司馬法一多二五人一、比二乎周禮一、不レ足二十人、共誤可レ見　王國六軍、六鄕爲二正軍一、六遂爲二副軍一、大國三軍、三鄕出二正軍一、三遂出二副軍一、次國二軍、二鄕出レ正、二遂副、小國一軍、一鄕正、一遂副、高壽曰、此說能協二周官之義一矣、惜哉迷二千乘萬乘之名一、而不レ知下族之賦、出二一乘一之義上矣、　凡六遂之職、皆降二六鄕一一等、副亞二於正一也、凡一軍伍長二千五百人、皆下士、在レ鄕爲二比長一、亦下士也、在レ遂爲二鄰長一、高壽曰、由レ是推レ之、一軍之下士二千五百人也、豈必步卒哉、兩司馬五百人、高壽曰、旣曰二兩司馬一、則掌二其馬一可二以見一也、由レ是推レ之、則閭里之賦出レ馬可レ知也、然則族賦出二駟馬一也、旣出レ駟、則是二以知一レ出二車一乘一矣、此則高壽所三以破二三千餘年之繆一也、學者、由レ是觀レ之、則王制、孟子、司馬法、漢書之紕繆自破矣、豈待二論說一乎、曰二兩司馬五百人一、則馬五百匹也、馬五百匹、則車百二十五乘也、一軍百有二十五乘、則三軍三百七十五乘、六軍七百五十乘也、學者知二是道一則萬古紕繆悉破矣、皆中士、在レ鄕爲二閭胥一、亦中士也、在レ遂爲二里宰一、下士也、卒長百二十五人高壽曰、車百二十五乘、則卒帥百二十五人　皆上士、在レ鄕爲二族

師、亦上士也、在遂爲鄙長、中士也、旅師二十五人、皆下大夫也、在鄉爲黨正、亦下大夫也、在遂爲鄙師、上士也、師帥五人、皆中大夫也、在鄉爲州長、亦中大夫也、在遂爲縣正、下大夫也、軍將一人、皆命卿、在鄉爲鄉大夫、亦卿也、在遂爲遂大夫、中大夫也、此郊遂軍制之大數也、此說也甚美焉、無所容疑矣、惜哉前後之說、不符合焉、既符合、則我又何作此論乎

陳師凱又引周官諸公之地、封疆方五百里之章曰、周禮成於武王崩後、恐周公具此制度、而未見之於施行也、孟子又言、周公之封於魯也、爲方百里也、伯禽既爲侯爵、合受百里、費誓亦言魯人三郊三遂、高壽曰、杜預註春秋傳曰、魯次國者、非是 計七萬五千家、合百里萬井之數、高壽曰、其說於是又悖焉、七萬五千家、則七百五十里已、封諸侯何用井田之法乎、如三鄉三遂之地、則何處置井田乎、其說可以見也 然以理推之、方里而井、高壽曰、無所置比鄰也、周人造都鄙也、必以井田也、三鄉三遂之外、置井田都鄙、則殆數百里哉 井古八家、百里萬井、古八萬家、豈魯國百里之地、皆爲田井、而略無山川城郭陂池園囿之所使乎、如以三分去一除之、則又不滿萬井之數、而無以容三郊三遂之民、而況可容泰山龜蒙之大乎、其實田與地不同、田則以百里七十里五十里爲限、而地之封域、則當如大司徒之制也、王制曰、天子之田方千里、公侯之田方百里、伯七十里、子男五十里、是專以田爲率、高壽曰、此說亦美焉、然爲田井者、非也、下文所言皆如是、豈不惜哉 夫田非有千百里之地、如棊枰之可布也、但以田井計之耳、八家共一井、而爲方一里、爲田九百畝也、八百家共百井、而爲方十里、爲田九萬畝也、八萬家共萬井、而爲方百里、爲田九百萬畝也、高壽曰、以井田計里數者、依王制而言、非 十井八十家、出車一乘、百井出十乘、千井出車百乘、萬井出車千乘、故公侯皆謂之千乘之國、高壽曰、此則依包咸爲說、非 是蓋

百里之田、提封萬井也、（高壽曰、此說依漢書、又非）大國三軍、三鄕三遂、三鄕爲正軍、三遂爲副車、每鄕萬二千五百家、家出一人、故一軍二千五百人、（高壽曰、其說於是又美矣）其次國二軍、小國一軍、皆倣此、惜哉陳師凱、未知車賦之出於族與鄭也

陳祥道曰、書言、舜之受禪、曰輯五瑞、修五玉、復五器、言武王之政由舊、曰、列爵惟五、分土惟三、則自唐至周、五等之爵一也、（高壽曰、亦既詳論於前篇矣）鄭玄稱王制、謂商因夏爵、有公侯伯、而無子男、以微子箕子爲畿內之爵、公羊釋春秋變周合伯子男皆稱子、豈其然哉、（高壽曰、此說信美矣）夫列爵惟五、所以稱其德、分土惟三、所以等其功、德異而功有所同、故諸侯之地、同於百里、子男之地、同於五十里、地同而附庸有所異、故諸公之地、方五百里、諸侯之地、方四百里、諸伯之地、方三百里、諸子之地、方二百里、諸男之地、方百里（高壽曰、信如說也）蓋三等之地、正封也、五等之附庸、廣封也、正封則尺地莫非其土、一民莫非其臣、尊者嫌於盛、而無所屈、卑者嫌於削、而無所立、故公之地必下、而從侯男之地、必上而從子、至於廣封、則於上之政令有所統、而不煩下之職貢、有所附而不費、又非諸侯得以擅之也、尊者不嫌於太多、卑者不嫌於太寡、故公之地、必五百里、而異於侯男之地、止百里異於子也、民功曰庸、朝會曰合、謂之附庸、以其有所附、然後有功於民也、古者、天子之地象日月、諸侯之地、象雷震、則周官所謂五百里以至百里、爲附庸明矣、陳祥道之說信是也、夫大司空之建王國造邦國也、必以土圭之法、以致日景、以土地之圖相其宅、而爲其地域、故有五等

之域、如以其田與夫家封之、必歸三等、何則王畿千里、必建郷遂與都鄙、則可以見以田與夫家制之、由是推之、則諸侯之地、必用郷遂、別有三郊三遂之徵乎、假令諸侯之國其地狹、而其邦域雖至千里、如其民與田、則無過三郷三遂也

陳祥道又曰、大司馬、凡令賦以地與民制之、司馬法、甸方八里、出長轂一乘、又成方十里、出長轂一乘、高壽曰、以井田出賦、天子畿内郷遂都鄙之法、今爲諸侯之法者非 古者或以甸爲乘、或以乘爲甸、以甸爲乘、稍人掌丘乘之政令、禮記曰、惟社、丘乘粢盛、是也、以乘爲甸、春秋、孫良夫、乘衷甸兩牡、是也、蓋乘者、甸之賦、甸者、乘之地、甸方八里、據地言之、成方十里、兼溝涂言之、其實一也、高壽曰、孔子論井田曰、鰥寡孤疾老者、軍旅之出則徵之、無則已用馬、故大徵則丘出三乘矣、甸出一乘者、其定出賦也耶 易曰、震驚百里、王制曰、公侯之田、方百里、孟子曰、諸侯不百里、不足以守宗廟之典籍、周公封於魯、太公封於齊、儉於百里、春秋傳曰、列國一同、坊記曰、制國不過千乘、論語曰、道千乘之國、蓋諸侯之地、不過百里、車不過千乘、高壽曰、此說信美焉、以開方之法計之、方十里者、爲方一里者百、方百里者、爲方一里者萬、方一里者百、其賦十乘、高壽曰、於是又使王制、既曰方八里、方十里、出長轂一乘、其情者如此 方一里者萬、則其賦千乘、然賦雖至於千乘、而軍不過三軍五百乘而已、高壽曰、此說、亦欲令六軍千乘之義、故又爲此說耳 則五百乘三郷之所出也、千乘閭境之所出也、高壽曰、徒曰閭境之所出也、未知三遂之所出也、劣於陳師凱之說也 何則郷萬二千五百家、合三郷則三萬七千五百家、凡起徒役、無過家一人、則三郷爲三軍、爲三萬七千五百人、高壽曰、其說於井又背矣 司馬法兵車一乘、甲士三人、步卒七十二人、高壽曰、司馬法所謂甸出牛十二頭、甲車一乘、炊家子十人、固守衣裝五人、廄養五人、樵汲五人、則一車凡百人也、十乘之賦、何必七十五人哉、諸儒之紕繆可以見 令七十五人、則

一卒所餘、在後車矣、高壽曰、七十五人、則不合軍旅之數、又曰、一乘一卒、則不合三軍五百乘之義、故作此說、比陳師凱、則頗加詳焉、然又非也 後卒復以五十人、合二十五人、爲一軍士卒、則所餘五十人、又在後車矣、凡三卒而車四乘、三旅而車二十乘、三師而車百乘、三軍而車五百乘、高壽曰、如說則無所分一軍之車、其誤可以見 由此推之、天子六軍、則車千乘矣、此車人參兩、以相聯糾之法也、詩曰、公車千乘、又曰、公徒三萬、則千乘之賦、豈特三軍而已哉

陳祥道又曰、鄭氏據司馬法曰、六尺爲步、步百爲畮、畮百爲夫、夫三爲屋、屋三爲井、井十爲通、通爲疋馬、三十家、士一人、徒二人、通十爲成、成百井、三百家、革車一乘、高壽曰、既依之、則甸方八里、成方十里、出長轂一乘者、與下文悖 士十人、徒二十人、十成爲終、終千井、三千家、革車十乘、士百人、徒二百人、十終爲同、同萬井、三萬家、革車百乘、士千人、徒二千人、率十家出一人之役、百家出十人之役、賈公彦遂以此爲畿内之法、以甸出長轂一乘甲子三人、步卒七十二人、爲邦國之法、然周官之於調役、其寡也家出一人、其多也起餘子、唯竭作、未聞十家出一人之役、百家出十人之役也、高壽曰、此說信然矣、故方十里、出長轂一乘者、非矣 賈公彦言、出軍之法先六鄉、次六遂、次公邑都鄙、乃徵兵於諸侯、不止則諸侯闔竟出焉、所謂千乘之賦也、然先王之於天下、大則有方伯、小則有連帥、其待卒應變、如身之使臂、臂之使指、各適其事之遠近而已、方伯連率、所不能充、然後鄉遂之士應之、周官曰、王之大事、諸侯次事、左傳、五侯九伯、汝實征之、又曰、諸侯敵王所愾、則出軍之法、顧豈先虛其內、以實其外哉、馬融曰、千乘之賦、其地千成、居地方三百十六里有奇、惟公侯之封、乃能容之、其說蓋惑周官五百里侯、四百里伯之制、不知周禮

之所言乃附庸也、此則陳祥道能知六鄉出六軍、然又曰、以井法計其車賦、前後之說悖焉、豈不惜哉、此外所論之賅洽、及夏貢商助周徹、力政之事甚詳焉、雖然、其所祖述不過司馬法孟子及考工記之類而已、故曰鄉遂同井也、則今舍而不論也、博雅君子、參校而可也

張敬夫曰、方千里者、先儒以爲王畿方千里、積百同、九百萬夫之地、是也、蓋方千里、則爲方百里者百、爲田百萬井、九百萬夫之地、受田者八百萬夫、百倍諸侯之國、夫如此而後可以爲天子邦畿、鎭撫天下、而卿大夫元士之采地、皆有所容焉、故公侯之方百里、伯七十里、子男五十里者、皆以其田言之也、獨以其田言之、則地雖有廣狹之不齊、山林川澤之相間、而制田之多寡、則有若也、而王制謂山陵林麓、川澤溝瀆、城郭宮室塗巷、三分去一者、則傳者之失矣、（高壽曰、既因王制爲說焉、於是又以爲失之、其自悖如此、未知尙本）周禮所載、往往與此不同、如曰諸公之地、封疆方五百里、其食者半、諸侯之地、封疆方四百里、其食者參之一、諸伯之地、封疆方三百里、其食者參之一、諸子之地、封疆方二百里、其食者四之一、諸男之地、封疆方百里、其食者四之一、蓋不知分田建國之意、遷就而爲此說耳、要當以孟子爲正、夫在孟子時、已去其籍、又更秦絕滅之餘、周官之書、存者無幾矣、今時所傳、先儒以爲、雖出漢儒一時之傅會、是不可以不考也、嗚呼甚矣、敬夫氏之侮聖人之言也、其以己之不能通、以傅會侮典常、豈不僭妄哉、小人者、侮聖人之言、敬夫有焉、豈獨敬夫乎、不知先王經紀天下之禮者、咸然、若以周禮爲傅會之書、何以觀夫先王經紀天下、以爲民極哉、斯則秦漢以來、生乎郡縣之地、長乎律令之

治、而不知封建禮樂之敎也、凡以井田論封國、殆三千年矣、雖以萬數之、其論如敬夫已、豈足以枚擧乎、夫漢書以十萬井爲公侯之國、以百萬井爲王畿、遂以百里之地爲百乘之家、則亂先王之大法矣、其罪不亦大哉、又依孟子王制、則以千井爲百乘之家、以萬井爲千乘之國、未聞諸侯之國、鄕遂之外置都鄙也、此皆不知井比之別所致、豈不惜哉、此則古今紕繆大者也、雖然、秦漢以來、所以有此紕繆、亦有所因然、夫周道衰微、禮樂陵遲、文武之道旣墜、諸侯力爭、縱橫相攻伐、以幷兼爲政于天下也、故子產曰、今大國多於數圻、論語曰、千乘之國、攝乎大國之間、墨子曰、言南荊吳之王、北則齊晉之君、始封於天子之時、其土地方未至有數百里也、人徒之衆、未至有數千萬人也、以攻戰之故、土地之博、至有數千里也、人徒之衆、至有數千萬人、又曰、古者天子之始封諸侯也萬有餘、今以幷國之故、萬有餘皆滅、而四國獨立、孟子曰、海內之地、方千里者九、齊集有其一、又曰、夏后殷周之盛、地未有過千里者也、而齊有其地矣、又曰、今魯方百里者五、荀子曰、古有萬國、今有數十焉、又曰、楚六千里、自是以降、迨乎秦之初、則九州之地、唯爲六國也、考工記、司馬法之書、出於是時、旣典籍惡其害己也、而皆去之、故不知先封諸侯之道、遂以井田仟伯、令貢賦、起軍旅也、以其土地博之故、使十家出一人之役也、此時也、上無天子、中無方伯連帥、是以國異政、家殊俗、故有甸之賦、出革車一乘之國、又有成之賦、出長轂一乘之國、或又有十井之賦、出戎車一乘之國也、蓋司馬法之書百有餘篇、不出一手、故有此異耳、秦變封

建一爲二郡縣一、而后鄉遂之制滅矣、漢奉二其餘風一、習與レ性成、不レ知二其紕繆一、因循以爲レ常、遂依二孟子之說一、以作二王制漢志一、而井田之名亂、鄉遂之義不レ明、豈不レ悲哉、蓋皆因下不レ知二周禮一之過上而已

鄉遂井田圖說卷中終

鄉遂井田圖說卷下附錄

倭周寸尺異同之論

周ノ壹尺ハ、日本ノ曲リ尺ニテ、六寸八分ニ當ル也、是ハ晉ノ大始年中ニ、中書監荀勗、尺ノ古物ヲ校ルニ、七品ナリ、一曰、姑洗ノ玉律、二曰、小品、三曰、京銅望臬、四ニ金錯望臬、五ニ銅斛、六ニ古錢、七ニ建武ノ銅尺、荀旭此七物ヲ校テ律ヲ鑄ル、時ニ又漢ノ故鐘吹律ヲ得テ、命レ之ニ皆相應ゼシト也、又宋ノ丁度、荀旭ガ尺ヲ以テ、漢ノ錯刀、大泉五十、王莽ガ貨布貨泉ヲ以テ、合校ルニ、分寸正ニ同ジ、後ニ元ノ黄鎭成、又大泉五十、貨布、貨泉ノ三品ヲ以テ參校スルニ、毫髮モ無レ差ト云ヘリ、即黄鎭成ガ尙書通考ニ載セタル寸尺ヲ以テ、日本ノ曲リ尺ニテ參校スルニ、右ノ通リ、六寸八分强クアタル也、是ヲ以テ右ノ圖說ヲ著セリ

或曰、周ノ尺ト漢ノ尺ト度ヲ同スルハ如何ト云ヘリ、不レ然、王制ハ漢儒ノ錄スル所ナリトイヘドモ、其文義ヲ攷ルニ、步ノ長短ヲ云ノミニシテ、分寸尺ノ差タル說ニハアラズ、故ニ周漢ノ度ヲ同スルヲ知也、是ヲ以、劉歆ガ度ヲトル者ナリ、徂徠先生論語徵、度量考、孫子解ニ、開元通法ヲ考テ、周尺ヲ論ジテ、曲リ尺ニテ、七寸貳分トシ、又鈐錄ニ兵制ヲ論ジ、七寸貳分ヲ周ノ壹尺トシ、井田

ヲ以公侯伯子男ノ國割ヲ論ジタリ、然ドモ秦漢以來ノ紕繆ニ因テ、井田ヲ以テ其法ヲ論ジタルハ、
周禮ノ義ヲ不レ詳ノ過ヲ以テ也

孟子ニ、五尺ノ童子、論語ニ、六尺ノ孤、周禮ニ、國中自ニ七尺一以及ニ六十、野自ニ六尺一以及ニ六十五一皆征レ之、孔子身長ケ九尺有六寸、叔梁紇身ノ長ケ十尺、孔叢子ニ、堯身修ケ十尺、舜身修ケ八尺有奇、竹書紀年ニ、堯ノ身長十尺、舜身ノ長六尺一寸、禹身長九尺九寸、孟子ニ、文王十尺、湯九尺、交九尺四寸、考工記ニ云、人長八尺、登一下メ以テ爲レ節、列子ニ云、七尺ノ骸、淮南子ニ云、吾生也有ニ七尺之形一、素問靈樞曰、八尺之士、又曰、衆人之度七尺五寸トアリ、又周禮ニ、馬八尺以上ヲ龍トシ、七尺以上ヲ騋トシ、六尺以上ヲ駒トストアリ、右ノ六寸八分ノ曲尺ヲ以度レバ、右ノ五尺ノ童子ハ曲尺ノ三尺四寸ナリ、十歳以下ノ童子ヲ云也、六尺ハ曲尺ノ四尺八分也、十五ヨリ以下ノ童子也、七尺ハ曲尺ノ四尺七寸六分也、コレニ十歳以上ノ人ヲ云ナリ、八尺ハ曲尺ノ五尺四寸四分ニアタル、九尺六寸ハ六尺三寸四分餘ニアタル、十尺ハ六尺八寸ニアタル、サレドモ大人國小人國ナドハイザ不レ知、中華日本ノ北極ハ、三十度ヨリ四十二三度ニ至ルノ地氣ニシテ、人物ヨリ草木ニ至マデ異コトナシ、古ノ天地日月モ、今ノ天地日月モ變ルコトナカルベシ、古ノ天地日月變ルコトナケレバ、萬物ヲ生ズルコト何ゾ異ナラン、サレバ堯叔梁紇ノ十尺、六尺八寸モイカヾアラン、安部ノ真任ハ九尺五寸、宗任ハ六尺四寸ノヨシ記シヌレドモ、コレハ其盛大ヲ稱美シタル言葉ニシテ、其實事ニ

ハ非ルナルベシ、孔子ノ曰、其短モノハ三尺、其長モノハ是ヲ十ニスルニ不レ過トアレバ、其大抵ヲ知ルベシ、徂徠先生ノ論語徴ニモ、七寸二分ヲ以テ周ノ壹尺トシ、七尺ヲ以テ中人ノ度トシ、周ノ七尺ハ、日本ノ曲尺五尺四分ニアタルト云、又曰、六尺ハ、四尺三寸二分ニアタリ、八尺ハ、五尺七寸四分ニアタリ、九尺六寸ハ、七尺一寸三分ニアタリ、十尺ハ、七尺二寸ニアタルト也、黄鎮成ガ說ニ從テ、六寸八分ヲ一尺トスレバ、壹丈ハ右ノ通リ六尺八寸ニアタル、コレハ今ノ世ニモ、六尺ニ越タル人アレバ、サモアリヌベシ、七尺貳寸ノ人ハ絕テアルベカラズ

右ノ說ヲ非ト知ルコトヲイカニトナレバ、孔子曰、指ヲ布テ寸ヲ知リ、手ヲ布テ尺ヲ知リ、肱ヲ舒テ尋ヲ知ルトアレバ、寸ハ指ヲマゲタルヨリ出デ、尺ハ大指人サシ指ヲ布タルヨリ出デ、尋ハ兩手ヲ伸タルヨリ出タル也、尋ヲバ八尺ト定メヌレバ、周ノ尺ノ大體ヲ知ルベシ、六寸八分ヲ一尺トスレバ、八尺ハ右ニ記タル如ク、五尺四寸四分ニアタル也、是レ周ノ一尋ナリ、サレドモ今日本ノ一尋ハ、鯨尺ニテ四尺、曲金ニテ五尺ヲ一尋トスルノ定法ニナレルナリ、今試ニ男ト女ノ中人ヲ以テ、兩手ヲ舒シメテコレヲ度レバ、大抵五尺ニアタル也、コレ誠ニ孔子所レ謂不レ遠之則也、今五尺四五寸ヲ一尋トスルハ大男ナリ、是ヲ以テ推レ之ニ、周ノ八尺ハ、日本ノ五尺ニアタルナルベシ

ハルシヤ國ノ人馬ハ格別ニシテ、唐ニ往タル人ニ尋問シニ、五尺ニアマル馬ヲ不レ見ト云フ、又長崎ニ來ル唐人ニ尋問シニモ、又右ノ通云ヘリ、此方ノ馬ハ四尺ヲ定寸トス、四尺三四寸ヲ中馬トシ、四

尺五六寸、七八寸ヲ大馬トス、五尺ニ越タル馬ナシ、コレヲ以テ推之ニ、周禮ノ八尺ヲ龍トイヘルハ、五尺ノ馬ナルベシ

右ノ條々ヲ以推ㇾ之ニ、周ノ八尺ヲ日本ノ五尺ニアツルハ正當ナルベシ、然レバ六寸八分ニアタルト云モ長トスベシ、マシテ七寸二分ハ彌長カルベシ、然ドモ周禮ニ十五ヲ六尺トシ、二十ヲ七尺、晏子ガ身ノ長ケ不ㇾ足ニ六尺ニトスレバ、六寸八分ヲ定說トスベシ、徂徠先生ノ七寸二分ノ說ハ非ナリ

倭周分土之論

周ノ一尺ハ、日本ノ曲リ金尺ニテ、六寸八分一釐ニ相當ル、周ハ八尺ヲ以壹步トスルト、禮記ノ王制ニ見タリ、周尺ノ事詳ニ上ニ論ズ、可ㇾ考ナリ

日本ハ五尺ヲ爲ㇾ步ト令ニ見タリ、サレドモ延喜式ヨリハ、六尺ヲ以壹步トス、今世是ヲ田舍間ト云、石垣等ニ用ユ、一ハ六尺三寸ヲ一步トス是ヲ京間ト云、田地ニ用ユ、又六尺五寸ヲ一步トス、是ヲ路程屋敷ニ用ユ、今六尺三寸ヲ一步トシテ定ㇾ之也、周ノ一坪ハ日本ノ五尺四寸四分八釐ニ當ルナリ

周ノ十步ハ、日本ノ九坪四合八勺ニ相當ル

周ノ百坪ハ日本ノ九十四步八合ナリ、即三畝四步八合ニ當ル

周ノ三百步ハ、日本ノ貳百八十四步四合ナリ、即九畝十四坪四合ナリ

周ノ千坪ハ、日本ノ九百四十八步ナリ、即三段四畝八合ナリ

周ノ制ハ百歩ヲ一畝トシ、百畝ヲ一家ノ田トス、百畮ハ日本ノ三町四段八畮ニ當ルナリ
日本、古ハ長サ三十歩、廣サ十二歩ヲ一段トシ、十段ヲ町ト云ト令ニ見タリ、今ノ世ハ三十歩ヲ壹畝トシ、十畝ヲ一段トシ、十段ヲ一町トスルナリ、段ヲ反ト書コトハ、何ノ頃ヨリノ誤ナルニヤ、未ㇾ詳、意ニ萬葉短歌ヲ以反歌ト書スレバ、音ノ誤ニテ書シト見エタリ、傳寫ノ誤ナルベシ
周ノ制ハ毎年〱不易ニ耕ス田地ヲ上田トシ、壹年越ニ耕ス田ヲ、一易ノ地ト云テ中田トス、二年越ニ耕ス田ヲ、再易ノ地ト云テ下田トス、三易四易以下ノ地ヲ萊ト云ナリ、周禮ノ注ニ、萊ハ不ㇾ耕ノ地トハ誤ナリ、今日本ノ下面ノ地モ、一年越二年越ニ耕サザレバ、五穀出來ザルナリ、中華モ日本同然ナリ

倭周定㆓石高㆒之論

織田氏、豐臣氏、　正親町帝ノ命ヲ奉テ、天下ノ地高下ノ位ヲ定ムルニ、國ノ上中下ニヨリ、其高ノ定メ相違アレドモ、格別ノ相違ナキ者ナリ、延喜式ヲ考フルニ、九州ノ地、大ノ國ハ肥後バカリナリ、凡日本ニ、大ノ國十二ヶ國、肥後共一ナリ、サレバ中華ノ五穀ヲ以考ルニ、甚キ下面ナルベシ、別日本ハ五穀ノ勝タル上品ナルニヨリ、豐秋津瑞穗ノ國ナド、其外ノ日本紀ニ所ㇾ載ノ異名、皆五穀ノ豐饒ニトレリ、今肥後ハ、上田壹段壹石三斗、其次壹石貳斗、下田壹石壹斗、下ノ下田ハ壹

石ナリ、上畑ハ八斗、中畑ハ七斗、下畑ハ五斗、下下畑ハ三斗五升、上山畑ハ三斗五升、中山畑ハ貳斗五升、下山畑ハ壹斗五升ナリ、豐後ハ、上田壹段壹石三斗、中田壹石壹斗、下田九斗、上畑壹石、中畑八斗、下畑六斗ナリ

今中華ヲ考ルニ、周禮ニ、不易ノ地ヲ上田トシ、一易ノ地ヲ中田トシ、再易ノ地ヲ下田トスルヲ以、考ルニ、其土壤甚下田ナルベシ、大抵下田ハ當國ノ中山畑ニ當ルベシ、中田ハ山畑ノ上ニ當ルベシ、上田ハ上ノ畑、豐後ノ下田、又中畑ニ當ルベシ、豐後ハ上國ナリ、肥後ハ大國ナリ、大國ト上國トノ地ヲ以度ルトキハ、中國下國ノ土地ハ推テ可レ知、彼此ヲ推撫シ、壹段ノ高、八斗五升ニ積レバ、三町四段八畮ノ高、貳拾九石七斗四升ニ當ル、大抵三十石ヲ百畮ノ田地トス、周ノ百畝ノ家ハ、今日本ノ三十石高ノ百姓ナリト知ルベシ

倭周設ニ鄉黨ニ出ニ軍旅ニ之法

周ノ百畝ノ家ハ、日本ノ三十石ノ百姓ナレバ、壹人ニテ耕ス事ハ成スナリ、故ニ周ノ制、上田ナレバ、一家ヲ七人以上ト定メ耕サスルナリ、其家ヨリ公役スル者三人ナリ、是以考レバ、十石ニ一人完〔宛カ〕ノ公役ナリ、サテ中田ハ一年越ニ耕スニヨリ、其田六町五段六畝也、其家ニハ六人ト定メ、公役ハ二軒ニテ五人ヲ出ス也　下田ハ二年越ニ耕スニヨリ、十町四畝也、其家ハ五人ト定メ、公役

ハ一軒ヨリ二人也、拔軍役ヲ出ス、上中下ノ家ヨリ各一人完(同上)ヲ出ス也、是周人ノ常法也、然ドモ又大切ナル軍ニハ、鰥寡、孤疾、老者モ出ルト、孔子モノ玉ヒシナレバ、家ヲ盡シテ出スハ勿論ノ事也、司馬法、漢書、馬融、鄭玄ナド、十家ヨリ一人ノ役ヲ出スト云ハ非也、又日本ハ長サ三十歩、廣サ十貳歩ヲ一段トシ、一段ヲ一人ノ持前トスルト令ニ見タリ、サレバ三町四段八畝ヲ七人ニテ耕ス時ハ、一人前ニ五段程ニ當ル也、今肥後ナドモ同然也

周禮ニハ、右ノ如ク百畝ヲ一家ノ田トシ、五家ヲ比ト云、其邑ヲ置ク、高百五十石也、其長ヲ比長ト云、下士也、軍旅ニハ、右ノ通リ一家一人ノ軍役ヲ出ス常法ナレバ伍ヲ出ス、故ニ比長ヲ軍旅ニテ伍長ト云也、五比ヲ閭ト云、二十五家、高七百五十石也、其長ヲ閭胥ト云、中士也、軍旅ニハ、二十五人ヲ出ス、此ヲ一組トシ、兩ト云、右二十五人ノ外ニ、軍旅ニ用ル馬一匹ヲ出ス、故ニ閭胥ヲ軍旅ニテハ兩司馬ト云、其馬ヲ司レバ也、是ヲ以推レ之バ、三軍六軍ノ馬數可レ知也○四閭ヲ族ト云、百家也、高則三千石也、其長ヲ族師ト云フ、上士也、軍旅ニハ、百人ヲ出ス、是ヲ卒ト云、故ニ軍旅ニハ、旅師ヲ卒長ト云、又伍長ノ下士十人、馬四匹、司馬ノ中士四人ヲ出ス、故ニ一旅ヨリ兵車一乘ヲ出ス、卒師載レ之、故ニ族ノ地ヲ一乘ノ地ト稱ス、即三千石ノ地ナレバ、三萬石ノ地ヲ十乘ト稱シ、三十萬石ノ地ヲ百乘ト云、三百萬石ノ地ヲ千乘ト稱ス、大國ヲ封ル也○又周ニテハ、十家ノ田ヲ一里ト云、高則三百石也、千乘ノ田ヲ十里トス、則千家也、高則三萬石也、千乘ノ

地ヲ百里トス、百萬家也、高則三百萬石也、故ニ方百里ノ國ヲ大國ト稱テ、上公ヲ封ル也、秦漢以來二千餘年不レ知レ之、井田ヲ以テ百乘千乘ノ諸侯ヲ封ルノ道ヲ論ズルハ、右ノ義ヲ不レ知ノ過ヲ以テ也○又五族ヲ黨ト云、五百家也、高則一萬五千石也、其長ヲ黨正ト云、下大夫也、其軍役ハ馬二十匹、車五乘、歩卒五百人、伍長ノ下士五十人、司馬ノ中士二十人、卒長ノ上士五人出ス也、是レヲ一組トシ、旅ト云、故ニ黨正軍旅ニテハ、旅師ト云也○又五黨ヲ州ト云、二千五百家也、高則七萬五千石也、其長ヲ州長ト云、中大夫也、其軍役ハ馬百匹、兵車二十五乘、歩卒二千五百人、伍長ノ下士二百五十人、司馬ノ中士百人、卒師ノ上士二十五人、旅師ノ下大夫五人也、是ヲ一組トシ、師ト云、故ニ州長軍旅ニテハ、師帥ト云○又五州ヲ郷ト云、一萬二千五百家也、高則三十七萬五千石也、其長ヲ郷大夫ト云、卿也、天子ニ六卿アリ、故ニ六卿掌レ之、是ヲ統掌ル者ハ大司徒也、其軍役ハ馬五百匹、車百二十五乘、歩卒一萬二千五百人、伍長ノ下士七百五十人、司馬ノ中士五百人、卒師ノ上士百二十五人、旅師ノ下大夫二十五人、師帥ノ中大夫五人、都合一萬三千九百五人、是ヲ一組トシ、軍ト云、故ニ卿大夫ノ卿、軍旅ニテハ軍將ト云也、是則聖人ノ郷黨ヲ立、國野ヲ封ジ、軍旅ヲ起スノ常法也

凡周ノ制ハ、天子ハ六郷アリ、故ニ六軍ヲ出ス也、大國ハ三郷アリ、故ニ三軍ヲ出ス、中國ハ二郷アリ、故ニ二軍ヲ出ス、小國ハ一郷アリ、故ニ一軍ヲ出ス、又天子ニ六郷アリ、故ニ六卿六軍ヲ掌

ル、大國ハ三鄕アリ、故ニ三卿三軍ヲ掌ル、中國ニ二鄕アリ、故ニ二卿二軍ヲ掌ル、小國ニ一鄕アリ、故ニ一卿一軍ヲ掌ルナリ

倭周設二六遂一出二軍旅一之論

凡周室ノ制、天子ハ王城ノ四面ニ六鄕ヲ設ク、是ヲ國ト云フ、是レ王城ヨリ以外百里ノ內也、又其外ニ遂縣ノ法ヲ造ル、是ヲ四郊ト云、又野ト云、其造ル法ハ鄕ト同ジ、唯上地ハ、夫一廛ニ田百畝、萊五十畝ナリ、餘夫亦如レ之、中地ハ、夫一廛ニ田百畝、萊五畝也、餘夫亦如レ之、下地ハ夫一廛ニ田百畝、萊二百畝ナリ、餘夫亦如レ之

右ハ五家ヲ鄰トス、長アリ、五鄰ヲ里トス、二十五家ナリ、其長ハ下士也、四里ヲ酇トス、百家也、其長ハ中士也、五酇ヲ鄙トス、五百家也、其長ハ上士也、五鄙ヲ縣トス、二千五百家也、其長ハ下大夫也、五縣ヲ遂ト云、萬二千五百家也、其外ハ鄕ニ少モ無レ異也、軍旅ヲ出スモ、亦六鄕ニ少モ無レ異也、唯六鄕ノ賦ヲ正軍トシ、六遂ノ賦ヲ副軍トス、唯群吏ノ爵一等ヲ降シテ、遂大夫ヲ以テ中大夫ニ任ズ、里宰ヲ以テ下士トスルノ類ノミ、其餘ハ無レ異也、詳ニ本篇ト圖ヲ見テ可レ知ナリ

凡天子ハ六遂也、上公ハ三遂ナリ、侯伯ハ二遂也、子男ハ一遂也、天子ハ六鄕六遂也、上公ハ三鄕三遂ナリ、是レハ山川塗巷ノ賦ヲ加ヘテ、千乘備ル、侯伯ノ中國ハ二鄕二遂也、是レ山川塗巷ノ賦ヲ

加ヘテ、七百乘備ル、子男ノ小國ハ一鄉一遂也、是レニ山川涂巷ノ賦ヲ加ヘテ、五百乘備ル、萬乘ノ賦ハ、下ノ井田ノ部ニ論ズ、可ニ幷見一也

日本鄉遂之圖

			一家百畝	三町四段八畝 高三十石	賦	同上	爵	日本
比	鄰	伍	五家	百五十石			下士	組頭
閭	里	兩	二十五家	七百五十石	馬一匹		中士	
族	酇	卒	百家	三千石	馬四匹	車一乘	上士	小庄屋
黨	鄙	旅	五百家	一萬五千石	馬二十匹	車五乘	下大夫	大庄屋
州	縣	師	二千五百家	七萬五千石	馬百匹	車廿五乘	中大夫	郡代
鄉	遂	軍	萬二千五百家	三十七萬五千石	馬五百匹	車百廿五乘	卿	奉行

右ノ外ハ下ノ圖ニアリ、可ニ幷見一ナリ

日本百里千乘萬乘之圖

里	夫一賦	田	高	

一里	十家		三十四町八段	三百石	
	百家	車一乗	三百四十八町	三千石	士
十里	千家	車十乗	三千四百八十町	三萬石	大夫
	萬家	車百乗	三萬四千八百町	三十萬石	卿
百里	十萬家	車千乗	三十四萬八千町	三百萬石	上公ノ國
	百萬家		三百四十八萬町	三千萬石	
千里	千萬家	車萬乗	三千四百八十萬町	三億萬石	天子ノ國

右ノ內、山川塗巷等ノ賦ヲ引高ニスルノ法、下ニアリ、可ニ考合一ナリ

倭周王國建ニ井田ニ設ニ采地ニ之禮

凡天子ノ國ニハ、右ノ通ノ鄕遂ノ地ヲ設ケテ、國ト稱シ郊ト稱シ、王城ノ衛トス、是ノ外ニ井田ヲ設ケテ都鄙ヲ作リ、井邑丘甸稍縣都ノ七品ヲ立テ、三公九卿王子弟二十七大夫、八十一ノ元士等ノ采地ヲ設ク、コレヲ官田ト云、其餘地ヲ以テ牛田牧田賞田トス、是レ王城ヲ距テ、二百里ヨリ外五百里マデ、四方六百里ノ地也、此レ天子ノ制ニシテ、諸侯ノ國ニ決テ無キ禮也

右井田ノ建ヨウハ、右ノ鄕遂ノ高定ノ如ク、一夫田百畝ニテ、高三十石ノ定ニシテ　九夫ノ井ト云、

高則二百七十石也、是レ下士ノ采地也、四井ヲ邑トス、三十六家也、高則千八十石也。中士ノ采地也、四邑ヲ丘トス、百四十四家也、高則四千三百二十石也、上士ノ采地也、四丘ヲ甸ト云、五百七十六家也、高則一萬七千二百八十石也、下大夫ノ采地也、四甸ヲ稍トス、二千三百四家也、高則六萬九千百二十石也、中大夫ノ采地也、四稍ヲ縣トス、九千二百十六家也、高則二十七萬六千四百八十石也、九卿ノ采地也、四縣ヲ都トス、三萬六千八百六十四家也、高則百十萬五千九百二十石也、此天子ノ三公、大師、大保、大傅ノ采地也

右ノ通リ定リナレドモ、其主人ヨリハ諸事取行ヌ也。其身ハ王朝ニ在ッテ、天子ノ吏シテ、コレヲ取行ナハシムル也、故ニ其國治ハ都大夫、都則掌レ之也、其祭祀ハ都宗人、家宗人掌レ之也、其軍旅田役ハ都司馬、家司馬掌レ之也、刑罰禁令ハ都士家士掌レ之也、其稅斂ノ事ハ、載師縣師稍人掌レ之也、諸侯ノ國トハ大ニ違也、諸侯ハ五十里ノ國トイヘドモ、天子ノ吏ヨリ、少モ取行フ事成ラヌ也、此禮能能可二會得一也

周天子以二井田一造二都鄙一之圖說

井	井
家	九家
里	方一里
采地	二百七十石 下士

邑	四井	三十六家	方二里		千八十石	中士
丘	十六井	百四十四家	方四里		四千三百二十石	元士
甸	六十四井	五百七十六家	方八里	公邑之田	一萬七千二百八十石	下大夫
稍	二百五十六井	二千三百二家	方十六里	家邑之田	六萬九千百二十石	中大夫
縣	千二十四井	九千二百八家	方三十二里	小都之田	廿七萬六千四百八十石	九卿
都	四千九十六井	三萬六千八百三十二家	方六十四里	大都之田	百十萬五千九百廿石	三公

右ノ外、兵賦ノ法ハ、下ニ詳ニ圖レ之、可ニ并考一也

孟軻、右ノ禮ヲ不レ知シテ曰、天子ノ卿ハ、地ヲ受ル事、侯ニ視ロフ、大夫地ヲ受クル事、伯ニ視フ、元士地ヲ受ル事、子男ニ視フト云ヘルハ、大ニ誤也、又按ニ典命之職一曰、王ノ三公ハ八命也、其卿ハ六命也、其大夫ハ四命也、及ニ其出封一、皆一等ヲ加テ、其國家宮室、車旗衣服、禮義亦如レ之トアリ、出封トハ畿內ヲ出テ八州ノ中ノ諸侯トナルヲ云也、卿大夫ニ大功アレバ、諸侯ト爲シ玉フヲ云也、其封ジ玉フ法ハ、其中大夫ノ人ヲ賞テ、一等ヲ加テ五命シテ子男ト爲シテ、五十里ノ君トナシ、其卿ナレバ一等ヲ加ヘテ、七命シテ侯伯ト爲シ、七十里ノ君トナシ、其三公ナレバ、一等ヲ加ヘテ、九命シテ上公トナシ、百里ノ君トナシ玉フヲ云也、是レ周公ノ所ニ制作一ノ大禮也、孟軻不レ知

レ之シテ、右ノ讀アルハ、周ノ典禮ヲ不レ知ノ誤也、詳ニ辨孟子ニ論レ之レバ、略レ之也、可二考合一也
右ニ記シタル通リ、聖王ノ士ヲ制シ玉フ禮ハ、四方千里ヲ以テ王畿ノ國トス、其內ニ王城ヲ建テ、其
王城ノ外、方二百里ノ內ニ右ノ六鄉ヲ設ケテ、六卿掌レ之、大司徒統二掌ル之一、其外又方二百里ノ內ニ、
六遂ヲ設テ六大夫掌レ之、大司空統二掌之一、又其外方六百里ノ地ヲ、田野ヲ井牧シテ、邑丘甸稍縣都
ヲ設ケテ、都鄙ノ地ト云ヒ、又是ヲ遠郊ノ地ト云フ、三公九卿大夫士王子弟ノ采地トス、又牛田園地
賞田トス、其餘ハ王事ニ服從スルノ地トス、是レニテ王畿千里ノ地終ル也、諸侯ノ國トハ大ニ異ナリ
上公ノ國ハ方百里也、右ノ通リ四方ニ三鄉三遂ヲ設タル也、三鄉三遂ノ賦ニ、山川涂巷等ノ賦ヲ加ヘ
ヌレバ、千乘ノ賦備ル、何ノ地ニ井田ヲ設ケ、都鄙ヲ造ンヤ、上公ノ國スラ既ニ如レ此、況ヤ侯伯
七十里ノ國、子男五十里ノ國ニ於テ、井田ヲ設ケ、都鄙ヲ作ル事ハ、得ンヤ、然ルニ孟子滕ノ五十
里ニ不レ足ノ小國ニ、井田ヲ設クルノ禮ヲ敎ルハ、何ゾヤ、是孟子鄉遂ノ法ヲ以テ、諸侯ヲ封ルノ道
ヲ不レ知、可レ見也、剏テ九百畝ノ中ニ公田ヲ設ケ、八家皆百畝ヲ私ニシテ、同ク公田ヲ養ヒ、公事
畢テ然後ニ私事ヲ治ルノ誤ニ於テヲヤ、毛詩ニ所レ謂、雨二公田一トハ、千畝ニ藉スルノ義也、公卿大
夫士ノ采地、豈皆公田ヲ用ンヤ、載師縣師稍人等ノ職ノ稅法ヲ案ルニ、九家各廿ガ一ノ稅ヲ出セ
バ、猶八家ノ如シ、孟軻觀レ之テ、遂ニ誤レ之ノミ、王制依レ之テ、井田ヲ以テ諸侯ヲ封ルノ道ヲ論
テ、百乘千乘萬乘ノ法ヲ說ク、包咸依レ之テ論語ヲ註ス、後世依レ之大ナル誤也、是ヨリシテ鄉遂ノ

制知ル人無キニ至ル、豈不レ悲哉、若シ三九ノ割ニテ井田ヲ制シ、諸侯ヲ封ゼバ、何ノ處ニ鄕黨ヲ設ンヤ、二千年ノ誤、以レ此テ可レ知也

倭周出二井田軍賦一之論

右ノ井田軍役ノ出ヨウハ、一邑千八十石ノ地ヨリ、馬一匹、歩卒二十五人ヲ出ス、丘ハ十六井、四千三百二十石ノ地ヨリ、馬四疋、兵車一乘、歩卒百人ヲ出ス、故ニ稍人職ニ曰、掌二丘乘之政一トアリ、可レ見也、甸ハ六十四井、一萬七千二百八十石ノ地ヨリ、馬十六疋、兵車四乘、歩卒四百人ヲ出ス也、稍ハ二百五十六井、六萬九千百二十石ノ地ヨリ、馬六十四疋、兵車十六乘、歩卒千六百人ヲ出ス也、縣ハ千二十四井、二十七萬六千四百八十石ノ地ヨリ、馬二百五十六疋、兵車六十四乘、歩卒六千四百人ヲ出ス也、都ハ四千九十六井、百十萬五千九百二十石ノ地ヨリ、千十六疋、兵車二百五十六乘、歩卒二萬五千六百人ヲ出ス也、是レ周ノ定法ナレドモ、鄕遂ト同然ニテ、山陵林麓川澤城郭宮室塗巷ノ地ヲ除ケバ、其半ノ軍役ヲ出スノ定法ナレバ、甸ハ兵車二乘、歩卒二百人ヲ出ス也、稍ヨリ兵車八乘歩卒八百人ヲ出ス也、縣ノ小都ノ地ヨリ、兵車三十二乘、歩卒三千二百人ヲ出ス也、大都ノ地ヨリ、兵車百二十八乘、歩卒一萬二千八百人ヲ出ス、是レ定出賦ナレドモ、都ノ賦ハ大抵一軍百二十五乘ヲ出ス也、故ニ天子ノ公卿ヲサシテ、百乘ノ家ト稱ル也、天子ノ三公ハ六卿ノ兼官

ト顧命ニ見ヘタリ、サレバ孝經其外ノ傳記ニモ、諸侯卿大夫トノミ稱ル也、是公ハ兼官ナレバ也、然ニ司馬法ニ、甸ハ方八里長轂一乘ヲ出スト也、漢書亦曰、丘ハ戎馬一匹、甸ハ戎馬四疋、兵車一乘ヲ出トアルハ、是誤ナリ

周人天子以井田造都鄙出軍賦之圖

井	一井	方一里	賦	定出賦	二百七十石	下士
邑	四井	方二里		馬一疋 卒二十五人	千八十石	中士
丘	十六井	方四里	馬四疋 卒百人 車一乘	馬二疋 卒五十人	四千三百二十石	上士
甸	六十四井	方八里	車四乘 卒四百人	車二乘 卒二百人	一萬七千二百八十石	下大夫
稍	二百五十六井	方十六里	車十六乘 卒千六百人	車八乘 卒八百人	六萬九千百二十石	中大夫
縣	千二十四井	方三十二里	車六十四乘 卒六千四百人	車三十二乘 卒三千二百人	廿七萬六千四百八十石	六卿
都	四千九十六井	方六十四里	車二百五十六乘 卒二萬五千六百人	車百二十八乘 卒一萬二千八百人	百十萬五千九百廿石	三公

前ノ圖ト見合テ可レ考也

右皆天子之禮

倭周封㆓三等諸侯㆒之論

周禮ノ典命ノ職曰、上公ハ九命爲㆑伯、其國家宮室、車旗衣服、禮儀皆以㆑九爲㆑節、侯伯ハ七命、其國家云云、皆以㆑七爲㆑節、子男ハ其國家云云、皆以㆑五爲㆑節トアリ、又大行人ニモ、亦曰、上公ハ以㆑九爲㆑節、諸侯諸伯ハ以㆑七爲㆑節、諸子諸男ハ以㆑五爲㆑節トアリ、由㆑是觀㆑之、上公ハ百里ノ國、三百萬石也、侯伯ハ、七十里ノ國、二百土萬石也、子男ハ五十里ノ國、百五十萬石也、（詳ニ本篇）孟子斯ノ禮ヲ不㆑知シテ、諸侯ヲ以テ百里トス、非也、是レハ孟子始テ非㆑言㆑之、子思モ亦謂㆑之、曰、公侯百里、伯七十里、子男五十里、虞夏殷周之常制也（孔叢子）孟子依㆑之、王制又依㆑之、漢儒依㆑之、數千歲ノ下遂依㆑之、皆不㆑知㆑禮ノ過也、鄭玄、典命ノ國家ヲ註テ、城方トス、誤也、周ノ制ハ右ノ通、上公ハ方百里、侯伯ハ方七十里、子男ハ方五十里也、周禮ノ大司空ノ職ト、職方氏ノ職ニ、公侯伯子男ノ五等ノ分㆑土ノ文アリ、是レハ室數ヲ以テ封㆑之ノ法ニアラズ、土圭ヲ以テ其地ヲ度ル、故ニ山陵林麓、川澤溝瀆、城郭宮室、塗巷園囿、斥鹵等ノ賦ヲ加ヘタル也、是レハ一家ノ田ヲ百畝ト定メヌレドモ、六遂ノ地ハ、上地ハ田百畝ニ、萊五十畝、中地ハ田百畝ニ、萊百畝、下地ハ田百畝ニ、萊二百畝ヲ頒與フガ如ク、其山川塗巷等ノ賦違ヒアリ、其地イカホド雖㆑多、其田税ハ百畝什ケ一也、其國ハ三等ニ歸ス、大國中國小國可㆑見也、故ニ其封疆ハ右ノ如ク五等ニ別チヌレドモ、其實ハ三等ニ

不レ過也、故ニ大司馬ノ官ニ、軍旅ヲ出スノ禮ヲ論テ、大國ハ三軍、中國ハ二軍、小國ハ一軍ノ文アリ、又尚書ノ武成ノ篇ニ、分レ土惟レ三ノ典アリ、費誓ニ、三郊三遂ノ文アリ、故ニ五等ノ封ハ、土圭ヲ以テ其地ヲ度ルノ義ナリ、室數ヲ以テ造レ之ノ法ニハ非也、其室數ヲ以テ造レ之ハ、鄉黨遂縣ヲ以テ造レ之也、其法ハ右ニ載タル通リ、百里ハ三鄉三遂也、七十里ハ二鄉二遂ナリ、五十里ハ一鄉一遂ヲ以テ封レ之也、詳ニ圖ヲ見テ可レ知也、子思孟子王制、皆命數ヲ以テ國ヲ建テ、鄉遂ヲ設ケテ、三等ノ諸侯ヲ封ルノ道ヲ述テ、誤ヲ千歲ノ下ニ傳ヘテ、魏徵、杜如晦、房玄齡等カ諸侯ヲ封ルノ道ヲ論ジタレドモ、遂ニ其道ヲ極ル事不レ能シテ、封建ノ道遂ニ不レ立シ也、數子法ヲ知バ、ナドカ其道ヲ立テザランヤ、可レ惜ノ至リナリ

日本千乘之國出二三軍一之論

凡百里ノ國ハ三百萬石也、三百萬石ノ地ヨリ、三軍ヲ出スト云ハ、大法ナレドモ、百里ノ國、三百萬石ノ內ヨリ、山川溝洫城郭ナドノ引高スレバ、殘高二百二十五萬石トナル、是レ三鄉三遂ノ高也、三鄉三遂ノ家ヨリ、一家一人ノ役ヲ出スト周禮ニアリ、サレバ三鄉三遂ノ室數七萬五千家ヨリ、七萬五千人ノ軍役ヲ出ス也、其定軍役ハ右ノ半分ニテ、三萬七千五百人也、是レ三鄉ノ賦也、大司馬ニ所レ謂、大國ハ三軍トハ此ノ義也、今日本ニテ二百二十五萬石ノ地ヨリ、三萬七千五白人ヲ出ス

ハ安カルベシ、然ニ魯七百里ノ地ヲ有ツテ、二軍ヲ出ス而已也、三軍ヲ出ス事ヲ不レ得也、襄公ノ十二年正月、魯作ニ三軍一ト稱テ、譏玉フヲ可レ見也、千乘ノ國三軍ヲ出スノ法、古ヨリ種々ノ說アレドモ、皆其大法ノミ也、又左傳莊公ノ十六年ニ、王曲沃ノ伯ニ命テ、一軍ヲ以テ晉侯ト爲ストアリ、今彼レ此レヲ考ルニ、二百七十里ノ國モ、一二軍ヲ出スニハ不レ過ト見タリ、矧テ五十里ノ小國ハ言ニ足ラザルナリ、又齊ノ桓公管仲ニ命テ、國鄙ヲ制セシメテ、士ノ鄕ヨリ三萬人ヲ出テ、三萬人ヲ分テ三軍トシ、革車六百乘ヲ以テ、天下ヲ方行シテ、無道ヲ誅シテ、周室ヲ屛ケタルト也、又吳ノ夫差依レ之テ萬人ヲ方陳トシ、帶甲三萬ヲ分テ三軍トシテ、天下ヲ方行スト也、是レ齊ノ桓公ヨリ以來ハ、一軍ヲ一萬人トシ、革車一乘ヲ五十人ト定タル也、其少キ可レ見也、又魯七百里ノ地ヲ有ツテ、革車千乘ト明堂位ニ載セヌレドモ、其軍賦ヲ見レバ、二萬人ヲ出スノミ、三萬人ヲ出スヲ春秋譏レ之テ、穆叔非レ之ハ何ゾヤ、論語ニ季氏ハ周公ヨリ富ルト、又千乘ノ國、大國ノ間ニ攝ルトアリ、千乘ノ國ハ三百萬石也、是レヲ小國トシテ、大國ノ間ニ攝ルトアリ、コレハ孔子ノ時、諸侯ノ大ナル、數畿ヲ有テリトアリ、（王畿ハ方千里）春秋傳ノ所レ載可レ見也、故ニ千乘ノ國ヲバ小國トシテ、如レ此言ヒタル也、然ドモ右ノ如ク齊三軍三萬人ヲ出スノミ也、魯三軍ヲ出シ不レ得シテ二軍ノミ、由レ是推レ之ニ、異國ノ下田タル可レ見也、肥後ハ十四郡也、生齒ヨリ以上ノ人民、八九拾餘萬人ニ不レ降也、周室ノ如ク邦內ノ人民ヲ竭シ出サバ、六軍ノ賦ヲ出スモ、易々タランノミ、矧テ三萬人ヲ出サバ言

ニ不レ是也、由レ是推レ之ニ、異國ノ下田タル可レ知也、故ニ地ノ廣狹ト、田ノ多少ヲ以テ、國ノ肥瘠豐貧ヲ推シ知ルベカラズ、唯人口ノ衆寡米穀ノ多少ヲ以テ、其豐貧ヲ計リ知ルベシ、是ヲ以テ推レ之バ、地萬里ヲ隔ツトイヘドモ、歲萬年ヲ經ルトイヘドモ、少モ差コト有ベカラズ、三國志ニ、蜀ノ家數人數ヲ載テ、二十八萬軒、男女老少九十四萬人トアリ、是大體肥後一國ノ人數ニ當レリ、又吳ノ人數ヲ載テ、四州、四十三郡、三百十三縣、家數五十二萬軒、男女老少二百三十萬人トアレバ、コレ又肥前肥後豐後三國ノ人數ニ當レリ、又漢ノ永壽三年、天下ノ口數五千餘萬人也、唐ノ天寶十四年、明ノ嘉靖年中、天下ノ口數モ亦五千餘萬人也、其數太ダ無レ異也、夫日本ノ地、東西六千里ニ不レ過、（六丁一里ノ積）南北三千里ニ不レ過、然レドモ其口數ハ三千萬人ニ不レ降也、是レ日本ノ口數ハ、異國ノ五ガ三ニ當ル也、由レ是推レ之ニ、地ノ廣狹ヲ以テ、國ノ肥瘠豐貧ヲシルベカラズ、日向ノ國ハ南北六七十里、（三十六町ノ積）東西三四十里也、サレバ其高ハ纔ニ二十八萬石餘也、肥後ハ東西二三十里、南北四五十里ニハ不レ足レドモ其高ハ日向ノ四倍ニモ至ル也

又案、尙書ニ、黍稷馨ニアラズ、明德コレ馨シトアリ、又家語ニ、孔子曰、黍稷ハ五穀ノ長也トノ玉ヘリ、是レ異國ニテ、五穀ノ最上トスル者ハ、黍ト稷也、日本ニテ稷抔ハ、至テ山奥ノ民カ、又馬ノ飼料ニノミ用レ之ノ品ニシテ、貴人ナドノ可レ食モノニ非ル也、然ルニ異國ニテハ、是ヲ五穀ノ長トス、又唐ヘ漂流シテ彼國ヘ二三年逗留シタル人ニ尋問シニ、彼國ノ食物ハ長崎ノ唐人ノ食物ニカ

ハル事ナシ、皆所レ謂大唐米也、余モ唐館ニ往テ食レ之ニ、日本ノ大唐米ヨリ又膏ナシ、誠ニ稻ノ至テ下品ニテ、日本ニテ貴人ナドノ可レ食モノニ非ズ、故ニ酒モ甚ダ淡ク、又酸クシテ、日本ノ酒ノ糟ヲ洗ヒタル水ノ如シ、又彼國ニ味噌ナシ、醬油ナシ、又海遠クシテ魚類少シ、依レ之テ牛豚羊狗ノ類ヲ食フニアラザレバ、腹力少キ故ニ、牛羊ナドヲ、大牢ノ滋味ト稱テ食レ之也、日本ニテ水田ナドヲ、一年越シ、二年越シニ耕ス田ハ、絶テ無レ之也、唯畑ノミ有レ之ドモ、萬分ノ一也、由レ是推レ之ニ、周禮ノ所レ謂、一易再易ノ地ノ下田タル可レ知也、故ニ其賦モ亦甚少シト見ヘタリ

右ノ通リ異國ハ下田ナルウヘ、周ノ度量ハ右ノ六寸八分ノ積ナレバ、周ノ一升ハ日本ノ七勺五撮有奇ニアタル、一斗ハ七合五勺七撮餘ニアタル也、一斛ハ七升五合七勺八撮餘ニアタル也、一豆ハ三合令三撮餘ニアタル也、一區ハ一升二合一勺二撮餘ニアタル也、一鬴ハ四升八合五勺餘ニアタル、一鐘ハ四斗八升五合零三撮餘ニアタル也、漢書ノ食貨志ニ、上熟中熟下熟ノ言アリ、又廩人ノ疏云、上ハ大豐年ヲ謂フ、中ハ中豐年ヲ謂フ、下ハ少儉年ヲ謂フ也、孔氏云、上熟ハ四百石ナリト云、又按ニ史記ニ云、上ノ上ハ、地畝ニ一鐘也、鐘ハ六斛四升也、百畝ニ六百四十斛ト云ヘリ、由レ是觀レ之、周ノ一畝ノ粟、四斗八升五合零三撮餘ニ出來ル、六百四十斛ハ、日本ノ三町四段八畝ニ、四十八石五斗零三合餘ニ出來ル也、是レ十石高ニ、十六石一斗六升七合六勺二撮餘ニアタル、是レハ殊ノ外ニ多ク見ユレバ、イカヾアラン、孔氏ガ上熟ハ四百斛ト云ヲ推スニ、中熟ハ三百石、下熟ハ二百斛

ナルベシ、然レバ周ノ上熟ノ年ハ、三十石ノ地ニ、粟四百斛ヲ取ナレバ、日本ノ三十石䉤三斗一升二合餘ヲ取也、中熟ノ年ニハ、三十石ノ地ニ、二十二石七斗三升四合ヲ取ル也、下熟ノ年ハ、三十石ノ地ニ、十五石一斗五升六合ヲ取ル也、扨右ノ粟ヲ米ニナセバ、上ノ年ハ大抵十五石三斗一升二合ヲ取ル也、中ノ年ハ十一石三斗八升二合ヲ取ル也、下ノ年ハ七石六斗二升八合ヲ取ル也、右ノ三十石高ノ租稅什ガ一ナレバ、上熟ノ年ハ、現米一石五斗三升一合二勺餘ニナル也、中ノ年ハ一石三升八合二勺程ニナル也、下ノ年ハ七斗六升二合八勺程ニナル也〇又右ノ三十石高ヲ四物成ニシテハ、上ハ六石一斗二升四合八勺程ニナル也、中ハ四石五斗三升二合八勺餘ニナル也、下ハ三石八斗四升九合六勺餘ニナル也〇今右ノ中熟ノ年ヲ以テ、百里ノ國、三鄕三遂ノ高、二百二十五萬石ノ租稅什ガ一ヲ計レバ、現米二十二萬五千石程也、四物成ニシテ九十萬石ノ藏入ナリ、然レバ右ノ三百萬石ノ地、上公ノ國トイヘドモ、其本高ハ九十萬石ノ大名也〇侯伯七十里ノ國、二鄕二遂ノ高、百五十萬石ノ租稅什ノ一ナレバ、十五萬石程也、四物成ニシテ、六十萬石ノ藏入也、然レバ諸侯諸伯ハ六十萬石ノ大名也〇子男五十里ノ國、一鄕一遂ノ高、七十五萬石ノ租稅什之一ハ、七萬五千石程也、四物成ニシテ、三十萬石ノ藏入也、然レバ諸子諸男ハ三十萬石ノ大名也

右ノ通リ公侯伯子男ノ國、百里、七十里、五十里ノ高定ナレドモ、右ニモ記シタル如ク、中土ノ五穀ノ長ハ、黍稷也、其稱ハ大唐米ナリ、今彼レ此レヲ參校スルニ、異國ノ百畝、三町四段八畝ノ高ハ、

日本ノ十石高ノ百姓ニモアタルベシ、徂徠先生ノ一町十石ノ積トイヘル、是ニ近カルベシ、サレバ一家十石ノ高トスルハ、一郷ノ高十二萬五千石トナル、三郷三遂ナレバ、七十五萬石トナル、其什ガ一ノ租稅ハ、七萬五千石也、四物成ニシテ三十萬石ノ藏入ノ大名ナリ、二郷二遂ノ高、五十萬石也、租稅什之一ナレバ、五萬石也、四物成ニシテ、二十萬石ノ藏入ノ大名也、一郷一遂ノ高、二十五萬石也、其租稅什之一ナレバ、二萬五千石也、四ツ物成ニシテ、十萬石ノ藏入ノ大名也、サレバ中土ハ聖人ノ國也トイヘドモ、五穀ノ惡キヲ以テ觀レバ、其土地ノ下面ナル、日本ニ似ルベキモナキ也、此ヲ以テ中土ノ下面ナル可レ知也、故ニ山陵ノ廣狹、原野ノ有無ヲ以テ、國ノ肥瘠豐貧ヲ計ルベカラズ、唯々右ノ條々ヲ以テ推セバ、地萬里ヲ隔テ歲千載ヲ經ルトイヘドモ、決テ差フ事アルベカラズ、何ントナレバ、古ノ天地モ變ル事ナケレバ也、天地變ル事無ク、日月不易ナレバ、萬物何ゾ異ナラン、唯變ル者ハ風俗ノミ、學者其レ思レ之

日本百里千乘封國之圖說

里	夫	賦	田	高	四物成	
一里	十家		三十四町八段	三百石		士
	百家	車一乘	三百四十八町	三千石		大夫
十里	千家	車十乘	三千四百八十町	三萬石		卿

	萬家	車百乘	三萬四千八百町	三十萬石		
百里	十萬家	車千乘	三十四萬八千町	三百萬石	九十萬石	上公ノ國

右ノ三百萬石ノ内ヨリ、山陵林麓、川澤溝瀆、城郭宮室、塗巷園囿、斥鹵等ノ高、七十五萬石ヲ引高ニスレバ、二百二十五萬石トナル、是レ三郷三遂ノ高也、(郷遂ノ圖在ㇾ上)是ヲ四物成ニシテ、九十萬石也、其定出賦ハ三郷ノ高、四物成ニシテ、四十五萬石ノ地ヨリ出ス、三郷ノ賦、三軍ヲ正軍トシ、三遂ヲ副軍トス、周禮ニ、大國ハ三軍トアルハ是也

日本七十里侯伯封ㇾ國之圖說

里	家	賦	田	高	四物成	
一里	十家		三十四町八段	三百石		士
	七十家		二百四十三町六段	二千百石		大夫
七里	七百家	七乘	二千四百三十六町	二萬千石		卿
	七千家	七十乘	二萬四千三百六十町	二十一萬石		
七十里	七萬家	七百乘	廿四萬三千六百町	二百十萬石	六十萬石	諸侯 諸伯

右二百十萬石ノ內ヨリ、右ノ通リ山陵林麓等ノ高六十萬石ヲ引高ニスレバ百五十萬石トナル、是レ二鄉二遂ノ高也、四物成ニシテ、六十萬石也、其定軍役ハ、二鄉ノ高四物成ニシテ、三十萬石ノ地ヨリ二軍ヲ出ス、是ヲ正軍トス、故ニ周禮ニ、中國ハ二軍トアルハ是也

日本五十里子男封國之圖說

里	家	賦	田	高	四物成	
一里	十家		三十四町八段	三百石		士
	一五十家		百七十四町	千五百石		大夫
五里	五百家	五乘	千七百四十町		一萬五千石	卿
	五千家	五十乘	萬七千四百町		十五萬石	
五十里	五萬家	五百乘	十七萬四千町	百五十萬石	三十萬石	諸子 諸男

右ノ百五十萬石ノ內、右ノ通リ山陵林麓等ノ高七十五萬石ヲ引ヌレバ、七十五萬石トナル、是レ一鄉ノ一遂ノ高也、四物成ニシテ、三十萬石トナル、其軍役ハ一鄉ノ高、四物成ニシテ、十五萬石ノ地ヨリ一軍ヲ出ス、是ヲ正軍トス、故ニ周禮ニ、小國ハ一軍トアルハ是也、但シ引高ハ右ノ通ナレドモ、

大司空職方氏等ニ、五等ノ分土ノ法アリ、是レハ皆七百里ノ地ニ、革車千乘ト云ガ如シ、大中小國三等アレドモ、其方疆ハ各差ヒアリ

倭周諸侯設二采地一之圖説

上公ノ國ハ百里也、百里ノ國ハ十萬家也、其ノ田ハ十億畝也、高ハ三百萬石也、故ニ十里ハ千家也、其ノ田ハ十萬畝也、高ハ三萬石也、此レ大國ノ卿ノ采地也、百家ハ其田萬畝也、高ハ三千石也、此大國ノ大夫ノ采地也、十家ハ其田千畝也、高ハ三百石也、此レ士ノ采地也〇侯伯ノ國ハ七十里也、七十里ノ國ハ七萬家也、其田ハ七百萬畝也、高ハ二百十萬石也、七里ハ七百家也、其田ハ七萬畝也、高ハ二萬千石也、是次國ノ卿ノ采地也、七十家ハ其田七千畝也、高ハ二千百石也、是レ大夫ノ采地也、士ノ采地ハ大國ニ同ジ、十家三百石ノ采地也〇子男ハ五十里ナリ、五十里ノ國ハ五萬家也、其田ハ五百萬畝也、高ハ百五十萬石也、五里ハ五百家也、其田ハ五萬畝也、高ハ一萬五千石也、是レ小國ノ卿ノ采地也、五十家ハ其田五千畝也、高ハ千五百石也、是大夫ノ采地也、斯レ則周室諸侯ノ卿大夫士ニ采地ヲ頒ノ大法也、天子ノ采地トハ大ニ異也（天子采地ノ法、既ニ井田ノ部ニ在リ）

凡右諸侯ノ卿大夫士頒二采地一ノ圖、上ノ諸侯ノ圖中ニアリ、可二考見一也、故ニ圖コヽニ略ス

百乘者非三諸侯之卿稱二之論

凡天子ヲ萬乘ト稱シ、諸侯ヲ千乘ト稱シ、公卿ヲ百乘ト稱ス、禮也、サレドモ小國ハ五百乘、其次ハ五十乘也、中國ハ七百乘、其次ハ七十乘也、大國ハ千乘、其次ハ百乘也、其賦ハ百乘ノ名アリトイヘドモ、其出賦ハ大國ノ卿ハ、三萬石ノ地、十里ノ賦、十乘而已、中國ノ卿ハ二萬千石ノ地、七里ノ賦、七乘而已、小國ノ卿ハ、一萬五千石ノ地、五里ノ賦、五乘而已、サレドモ天子ノ卿ニ比シテ、百乘ト稱スレドモ、其實ハ天子ノ卿ニ非ズシテ、百乘ノ賦ヲ出ス事ハ、決テ不レ成事也、其故ニ大國ノ君ハ、其高三百萬石ニ至レドモ、四物成ニシテ九十萬石也、其卿ニシテ百乘ヲ出シヌレバ、三十萬石也、四物成ニシテ十二萬石也、大國ハ三卿也、然レバ三人ニテ、三十六萬石ヲ取ル、殘テ五十四萬石ヲ以テ、大夫士ノ采地幷ニ公家ノ用トセバ、祿甚乏ク、國ノ貧ニ至ルコト可レ知也、故ニ卿ヲ百乘ノ家ト稱ルハ、天子ノ卿ニ限タル事也

齊語ニ、叔向曰、大國ノ卿ハ一旅ノ田、上大夫ハ一卒ノ田ト云ヘリ、是レ一旅ノ田ハ、一萬五千石ニシテ、周禮ノ小國ノ卿ニアタル也、荀子所レ謂、有ニ五乘之地一者是也、一卒ノ田ハ三千石ニシテ、周禮ノ大國ノ大夫ニアタル也、(前ノ圖ヲ可レ考)齊數畿ヲ有テリトイヘドモ、其小祿ナル如レ此ニ至ル也、又荀子、宗廟ヲ論テ曰、有ニ五乘之地一者ハ、三世ニ事アリ、三乘ノ地ヲ有ツ者ハ、一世ニ事アリト云ヘリ、

是レハ天子ハ七廟、諸侯ハ五廟、大夫ハ三廟、士ハ一廟アリ、故ニ大夫ハ三世ニ事アリ、士ハ一世ニ事アリトイヘリ、右ノ通リ小國ノ卿ハ、其賦五乘ニシテ、叔向所レ謂一旅ノ田也、サレドモ大國ノ卿ハ、其賦十乘ナレドモ、其定出賦ハ五乘也、故ニ荀子ニ、有二五乘之地一者トハ云シ也、又小國ノ卿ハ、其賦五乘也、其定軍役ハ三乘也、故ニ荀子ニ有二三乘之地一者トハ云シナルベシ、禮ニ、所レ謂士一廟トハ、天子ノ士ヲ謂フ也、諸侯ノ士ニハ非ル也、諸侯ノ士ハ三百石ナレバ、其寢ニ祭ノミ、其廟不レ得レ立也、唯荀子ノ時、小國ノ卿ノミ、一廟ヲ立ルコトヲ得タル故ニ、右ノ說アリタルナルベシ

右叔向ガ所謂一卒ノ田、三千石ハ至テ小祿ノヨウナレドモ、孟子ノ所レ謂、君ハ十ニ卿祿一、卿ノ祿ハ四ニ大夫一、大夫ハ倍ニ上士一、上士ハ倍ニ中士一、中士ハ倍ニ下士一、下士ハ與ニ庶人在レ官者一同レ祿、祿ハ足ニ以代ニ其耕一也、又曰、耕者所レ獲、一夫百畝、百畝ノ糞、上農夫食ニ九人一、又曰、諸侯ノ下士ハ視ニ上農夫一ト云ヘルヨリ合セ考ルニ、右ノ十乘七乘五乘ノ祿ハ、孟子ノ說ヨリ二十倍程ナレドモ、右ノ通リ小祿ニ見ユレバ、百乘ノ十二萬石ノ家老三人ヲ置ク事、決テ無キ事可レ見也、秦漢以來右ノ禮ヲ不レ知シテ論レ之ニヨリ、先王ノ道悉ク違也、故ニ百乘ノ家ト稱ルハ、天子ノ公卿ニ限タル事也、諸侯ノ制ニハ決テ無レ之事ト可レ知也、サレドモ文武ノ道既ニ墜テ、禮樂陵遲シテヨリ、名其名ニアラズ、物其物ニアラザレバ、左氏國語ノ所載ノ禮、多ク違レ之ヘル也、學者周禮ヲ讀ニアラズンバ、誰カ其誤ヲ知ラン

ヤ、孔子堯舜ヲ祖述シ、文武ヲ憲章シテ、六經ヲ定メ玉ヘリ、六經ハ皆王者ノ言也、孔子三千ノ徒ニ說キ喩シ玉フハ、多ク士ト大夫トノ言ノミ、王者ノ言ニ至テハ甚ダ希ナリト、孔子ノ玉ヒシナレバ、秦漢以來ノ誤不ニ亦宜一哉、周禮無リセバ、聖人上帝ヲ相ケ、天下ヲ寵綏シ玉フノ道永ク絕ヌベシ、學者疇カ不レ讀ニ周禮一哉、其懋(ツトメ)レ之哉、

孟子大國制レ祿之圖

下士		百畝	食九人	三十石
中士	倍ニ下士一	二百畝	食十八人	六十石
上士	倍ニ中士一	四百畝	食三十六人	百二十石
大夫	倍ニ上士一	八百畝	食七十二人	二百四十石
卿	四ニ倍大夫一	三千二百畝	食二百八十八人	九百六十石
君	十ニ倍卿一	三萬二千畝	食二千八百八十人	九千六百石

上ニ記シタル三等諸侯ノ圖ト見合テ、其相違ノ所ヲ可レ知也、孟子何ヲ以テ言レ之ヲ不レ知也、周室ノ禮ヲ不レ知ノ言可レ見也

孟子中國制祿之圖

下士		百畝	食九人	三十石
中士	倍下士	二百畝	食十八人	六十石
上士	倍中士	四百畝	食三十六人	百二十石
大夫	倍上士	八百畝	食七十二人	二百四十石
卿	三倍大夫	二千四百畝	食二百十六人	七百二十石
君	十倍卿	二萬四千畝	食二千百六十人	七千二百石

孟子小國制祿之圖

下士		百畝	食九人	三十石
中士	倍下士	二百畝	食十八人	六十石
上士	倍中士	四百畝	食三十六人	百二十石
大夫	倍上士	八百畝	食七十二人	二百四十石

卿	倍二大夫一	千六百畝	食百四十四人	四百八十石
君	十二倍卿一	萬六千畝	食千四百四十人	四千八百石

右三圖トモニ、前ノ三等諸侯ノ圖ト可二幷見一也、又案二周禮一ニ、大夫ニ下大夫アリ、中大夫アリ、孟子不レ言レ之者何ゾヤ、其説詳ニ論二辨ス孟子一レバ、可二幷見一也、故ニ今略レ之也

徂徠先生諸侯三等之論幷圖

鈴錄曰、三代ノ制、公侯ノ圖ハ、山川都邑ノ地ヲ除テ田地計リ方百里也、方百里ハ萬井也、一井ノ地ハ田地九百畝也、一畝ハ百歩也、一歩ハ八尺也、周尺ハ今ノ曲リ尺ニテ、七寸二分ニテ、八尺ハ五尺七寸六分、大抵一歩ハ今ノ一坪ナレバ、百畝ハ三町、一井ノ田地二十七町、然バ方百里ノ田地ハ二十七萬町、此方ノ井目ニシテ、大抵一町十石ト積リテ、井ノ石高二百七十石ナレバ、公侯ノ國ト云ハ、二百七十萬石ノ大名也、サレドモ租稅ハ什ガ一ナレバ、現米三十萬石程也、四物成ニシテ、七十五萬石ノ藏入ナリ、殘テ二十七萬町ヨリ出ル兵賦、三軍ノ人數三萬七千五百人ハ、八萬夫ノ家ヨリ出ルナレバ、大抵八萬ノ半ヲ取テ四萬ナリト見タリ

伯ノ國ハ方七十里、右ノ割ニテ田地四千九百井、大抵方百里ノ半分ナレバ、百三十五萬石ノ大名ナリ、藏入現米十五萬石、四物成ニシテ三十七萬石、四萬夫ノ家ヨリ出ル兵賦、二軍ノ人數二萬五千

人也

子男ノ國ハ方五十里、右ノ割ニシテ、田地二千五百井、大抵方七十里ノ半分ニシテ、六十七萬石ノ大名也、藏入現米七萬五千石、四物成ニシテ十八萬五千石、二萬夫ノ家ヨリ出ル兵賦、一軍ノ人數一萬二千五百人也、右ノ方百里、方七十里、方五十里ト云トモ、大概ノ數ニテ、大抵田地六町ニ軍兵一人出ス割ナリ

又曰、大國ハ三軍、車三百七十五乘、中國ハ二軍、二百五十乘、小國ハ一軍。百二十五乘也

右ノ説ヲ考テ圖ヲ作ル

公侯之圖

一歩	八尺	五尺七寸六分一坪	高	什ガ一四物成	車賦	兵賦
百畝	一家	三町	三十石			
一井	方一里	二十七町	二百七十石			
萬井	方百里	廿七萬町	什ガ一 二十七萬石 四物成 [illegible]		三百七十五乘	三萬七千五百人

伯之圖法如レ上

四千九百井	方七十里	百三十五萬石	什之一 十五萬石 四物成 三十七萬五千石	二百五十乘	二萬五千人

子男之圖法如レ上

二千五百井	方五十里	六十七萬石	什 七萬五千石 四 十八萬五千石	百二十五乘	一萬二千五百人

徂來先生右ノ說、大抵周禮ノ義ニ協ヘリ、サレドモ井比ノ別ヲ不レ知、又軍旅ノ鄕黨遂縣ヨリ出ル事ヲ不レ知、又鄕遂ヲ設ケテ、諸侯ヲ封ルノ道ヲ不レ知シテ、井田ヲ以テ諸侯ヲ封ジ、軍旅ヲ出ノ法ヲ論ジタルハ、大ナル誤也、是レ徂來先生ニモ不レ限、齊ノ管仲、國鄙ヲ作リショリ、孔門ノ外明レ之スル人無キニヤ、傳記ニモ見ヘ侍ラズ、孟子モ其詳事ヲ不レ知ト也、司馬法ノ書百餘篇、齊ノ景公、威王ノ世ニ出ダルト云ヘドモ、固ヨリ先王ノ道可レ知ヨウ無ケレバ、今ニ至ルマデ殆ド三千年ナレドモ其說明ナル事ナシ、周禮無リセバ、誰カ三千年ノ誤ヲ知ランヤ、周官ノ周禮タルコト、是ヲ以テ可レ知也、詳ニ本篇幷ニ復古周官ニ論ジタレバ、今略レ之也

鄉遂井田圖說附錄終

享和三年癸亥仲秋

江戶日本橋二丁目
橋屋七兵衛
肥後熊本新三丁目
橋屋清藏
京都御幸町押小路下ル町
橋屋儀兵衛

尙儉撮要

戸田養恬著

倘儉撮要序

家君嘗著ニ倘儉撮要一編ヲ、修身齊家之術、簡而要、約而備、其所レ用レ心豈淺々哉、小子在ニ東都ニ、有レ年ニ于此、已廢ニ定省之禮ヲ、又乏ニ甘旨之奉ヲ、況想ニ桑楡之末光ヲ、可レ無ニ喜懼之情ヲ乎哉、且恐ル是書之與ニ歳月ト消磨セン也、遂付ニ之鐫刻ニ、非レ願ニ聞於大方ニ、庶幾俾ニ子孫爲ニ帳中之珍ト耳

時明和庚寅春三月　　豫章賤士　戸田居正謹書

倘儉撮要序

儉之爲レ德也、諄々然見ニ於經傳ニ、不レ深ニ於斯ニ而能有ニ保レ財焉者ハ不也、夫人欲レ無レ窮、財產有レ限、以ニ有レ限財產ヲ而徇ニ無レ窮人欲ニ、苟不ニ節レ之以ニ制度ヲ則必傷レ財、斯乃前哲格言猶在ニ人耳ニ也、志ニ於儉ニ者必先須ニ於レ此究ム心ヲ矣、財之豐歉是家之盛衰、俗之貪廉兵之强弱世之治亂繫焉、可レ不レ愼歟、是知ル徇情縱欲之士、竟雖モ免ニ貧困之患レ矣也、由レ是不レ揣ニ蕪陋ヲ、陳ニ己意ニ而意而書以ニ國字ヲ、目レ之曰ニ倘儉撮要ト也、庶ニ田野之懶生讀レ之而悔悟一莇ト也、此余微志也、第恐ル素寡ニ聞見ヲ、考證疏而、詿誤亦不レ少也、實夫多言多語、罪豈容レ逭哉

享保癸丑臘月

豫大洲　戸田養恬自序

尙儉撮要卷之上

戸田養恬著

一　儉約とは誠の道にしたがひつゞまやかにして奢侈をなさず、財を用るに無益の費を省き、人のついえを思ひはかりて損失を施さず、「以レ義制レ事以レ禮制レ心」用ゆべき理にあたりてもちひ、用ひまじき理に當りては、いかにわが欲しこのむ事にも用ひず、與ふべきすじめと親戚朋友困餓の人を救ふに、分に應じて財を惜まず、萬事奢を制するのたぐひをいふなるべし、いかにもして財を多くあつむるわざのみを儉約と思ふはひがことなり、わが財の減るも儉の理にかなひたる事もあり、增にも儉約に背きたる事あり、儉約を行ふは天理にしたがふのみ、豈利欲の爲にはからむや、大凡儉に處する工夫情欲を制するにあり、情欲のために制せらるべからず

一　吝嗇とはおしむとよみてしわきことをいふ、與ふべき理にあたりても與へず、人の苦み損失となる事をもかへりみず、取まじき理に當りてもたゞ手前へ取ことをのみ好み、親戚朋友の困窮を見ても救ふ

に心なく、わが身あやまちあるを悪きと知ながら、あらたむるにしわさ是等のたぐひをいふなるべし、かくのごとき人は衣食淫事の情欲に財を用るには少もおしまず、心を利欲の上にのみをきて仁義行ことをしらず

一　もろこしに舜といひし聖徳の帝ましまして天下を治め玉ひ、それ〴〵の官人を定め給ひしに、稷といふ臣下に命じて百穀をうゆる事を初とし、又食哉惟時あれと州々の牧(ツカサ)につげ給ふ、政は食を以て首とし、農の事は時を以て先とす、耕作の道たねまき刈おさむるまで、其時節にたがはずつとめ行へば食をのづから足との心なり、其後禹といひし聖智の帝位につきて、八ッの政を定め給ふにも食を先とし、貨(タカラ)を其次とし給ふ、子貢といひし賢人國を治ることを、孔子といひし聖人に問れしにも、食の不足なきやうになすを第一のつとめと對(コタ)へ給ふ、ことはりなるかな食は生命の本根、一日もかくべからざる物なればなり、此故に稲の字をいのちのねと訓じ、中略していねとよむならし、學ばざる人は此理をしらず、米銀の事を論ずるはいやしき事と思ふ偏見より、足レ食のはかりごとにうとくなり、貧困よりして禮義すたれ家業もなしがたく、はては盗竊の災おこる事をしらず、みづから苦むのみならず他人に損失をあてがひ、水旱風虫の蓄もなく百行かげて行はれず、かなしむべきの至なり、民以レ食爲レ天と酈食其が漢王に説しもことはりなり

一　倹約はたゞ財用のみにかぎらず、天地の間事々物々此理にもるることなし、まづ忠孝を以ていはゞ

君より給る、俸祿をみだりについやさず、專に儉約を行ひて公役又は軍用の料をたくはへ、凶年饑饉の變にあひても身を全ふして、君恩を報ぜんことをおもひはかり、常に愼て儉約を行ふ是忠なり、父のゆづりをうけよくたもちてうしなはず、父母の遺體なる此身をして飢餓せしめず、父母のかりて返さざる物あらば是を返して、父母のあやまちをつぐのはん事を思ひ、志を大にし心を小て儉約を行ふ是孝の一事なり、また五常を以ていはゞ貴き人も盈るを惡て謙をこのみ、すこしも奢をなさず儉約を行ひて、凶年の備をたくはへをき、萬民をして困餓のうれひをまぬかれしめん事をはかり給ひ、又卑賤の人も分にしたがひ人をあはれみ惠み、わが身も亦よく此生をたもつはかりごとをなす、これ仁のはじめと、かりたるものを返すとに財をおしまざるのたぐひ是義なり、冠婚喪祭或は贈答等過不及なく節なり、身の分をかへりみ少しも過差なる事をなさず、毎事よきほどにかなはんことを思ひ與ふべきを儉をよみして奢侈をいましむるこれ禮の大略なり、安きに居て危を忘ず、遠を慮り常に勤儉にして豫めよろづ備をなし、其備に安からん事をはかるこれ智なり、仁義禮智皆信によりて用をなす、それ忠孝五常は人道の大綱なり、此大綱のはし勤儉の二ッによらざれば、つひにむすぼゝれてとけず、實に儉約の尊きこと知ぬべし

一　それ儉約を行なはんとならば、心と意との分ちを明に識得べし、是則本を知なり、心は天よりうけ得てわが身に固より有所の物にて、明徳とも良知ともいひ、神といひ佛といふも、皆此心のことなり、

意は物に應じてはせ出るこゝろなり、たとへば他人の金銀を見て盗み取んとはせ出るこれ意なり、はせ出るうちにもぬすみはあしきと知るこれ心なり、是を以て心と意と二ツの分ちを知べし、心は主君のごとく意は臣僕のごとし、臣下君の命をうけ用ひざれば、禮すたれ身はほろぶ、又主として臣下を使令することあたはざるときは、國みだれ家ほろぶ、各其職をうしなへばなり、他の貨財を見て盗取んと意のはせ出るを、主君の良知これを制しとゞむるにより、臣下たる意、遠く惡道へ赴かざる前に立復るなり、是に反して主君制しとゞむれども臣下我がまゝにして、主君の定めたる法度を背き働ときは、君くらゐをうしなひ國亂る、心を以て意を制する事、君の臣を使令するがごとし、情欲のために貧窮にいたる人は、君として臣下をつかふことあたはざるのみならず、臣下君をつかふにいたる心は此行ひはあしきと知ながら、臣下の意のいきほひつよく情欲さかんなるにをしおとされ、君臣一時に身をほろぼす、儉約に志す人心意の本根を極めず、事の上にてつとめをこなはゞ益なかるべし、たとへば酒は狂藥と心得たらん人、佛神に誓ひ禁酒せば酒の一事には災來るまじけれど、又外の嗜欲にて災を招くべし、もし本根の心意君臣の差別を識得たらん人は、事々物々に應じて固有明徳の主人公、外來嗜欲の臣下に制せらるべからず、此工夫儉約初發の專要ならんか、されば「伐レ木不レ自二其本一必復生、塞レ水不レ自二其源一必復流、滅レ禍不レ自二其基一必復亂」と、晉の大夫史蘇がこと葉國語に見へたり

一　曾て禪知識に參じて開し心は、大圓鏡のごとくかがみ明らかなるゆへに、森羅萬象うつらずとい

ふことなし、うるはしき物をばうつし、みにくき物はうつさぬといふ私照なしと、しかれば美女を見て色心のうつり、貨財を見て慾念のうつるも、是皆鏡の明かなる徳なれば、妄念のをこるもうれふべからず、たゞ善人はうつりたるまゝにして、心にてよきはよき、あしきはあしきと知分るのみなり、愚かなる人はうつりたる影に執着て、猿猴の月をのぞむがごとく、とられぬ影を取らんとして身をほろぼすに至る、火は指をやく故にいかなる愚人も是をとらず、色欲博奕のたぐひも身をそこなふものとは知ながら即時に指をやかざるゆへ、少し是を取つて、漸に身をほろぼすこと猛火を取に同じ、されば眞如本覺の心を以て、鏡にうつりたる影をかげと知を信心といふ、影をかげと知ながら其影に執著するを不信心といふ、予思ふに此不信心の人は儉約の門に入ことを得べからず

一　易節象曰、「天地節而四時成、節以二制度一不レ傷レ財不レ害レ民」と釋傳に「人欲之無レ窮也、苟非三節以二制度一則侈肆至三於傷レ財害二民矣」と見へたり、天地の節にをけるや、四時を分て萬物を化生し人民を育み給ふ、人は陰陽五行を具足して小天地なり、然るに天理にしたがふことをしらず、天地の恩賜をうけて制度なく、みだりに用るときは財を失ひ、身をほろぼすの理必せり、天地の節序四時あるが如く、財を用るにも年月不足なきやうに考ふべし、きはまりなき人欲にまかせ用るときは、夏秋冬の俸祿を春の間に用ひつくす、是天地の間に在ながら天地の理に背くなり、天地の節あるや春夏秋冬と次第して、其間春より冬に至るまで五穀草木節にしたがひて化育し、人民をやしなひ給ふ、人の欲に徇(シタガヒ)て財

を用るごとく、春九旬に五穀百草悉く花さきみのる事なし、人身も亦然り、一日飽まで食したるとて一月饑ざるものに非ず、一日の間にも朝夕分量をさだめ、毎日其量をみだらざる故に、身を終るまで命を全ふす、然るに情欲を以て財を用る事のみ制節なく、一時にもおほいに用ひ過し費ふしてやまざれば、來年の俸祿を今年用ひつくす、おほいに天理に背くといふべし、此故に儉約のたつときことを明かに察し篤くをこなはゞ、をのづから天理にしたがひ、身やすく心平かなるべし

一　世俗儉約と吝嗇との差別をわきまへず、儉約を行ふ人をば吝嗇なりとて譏り笑ふ、まことにあはれむべき至愚なり、かくのごとき人の言を信じては儉約は行はるべからず、孟子所謂「得レ志與レ民由レ之、不レ得レ志獨行二其道一、富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、」これ此大丈夫淺ましく小人婦女の譏のために心操を變ぜんや

一　「棄レ本徇レ末厥弊多」とは古人のことばなり、萬の事皆本と末とあり、樹の根と枝葉あるが根かたからざれば、枝葉榮えざるがごとし、是を明かに辨へざれば儉約は行はるべからず、此理を辨ざる人のなす事は外見はよき行ひと見ゆる事にも、儉約にかなはざる事あり、たとへば先祖の祭は分に應じ、ちからをつくすを善といふべけれど、もし返すべき心當もなきに米銀を乞かり、分外の祭をなす人あらば外面は善と見ゆれども、内は惡なるべし、先祖たらん人わが子孫他人の財をかすめ取を見ばいかばかりか苦しからん、眼前に盜にはあらざれども、返す心當もなきにかり用ひ、他人に損失を施すは實

は盗むに同じ、物ごとに本末をよく察し行なはざれば、力を用て益なき事多かるべし、かくいへばとて、かりたる財にては、祭すまじきとにはあらず、よきほどを知べし

一　書曰「謂二人莫一レ己若者亡、好レ問則裕、自用則小」と此語まことなるかな、我はよしとおもへど外より見ればあしきこと多きもの也、此外によき思案は有まじと思ふ事も、數多の人に問尋れば思ひの外のよき事も有ものなり、いかなる聖賢も獨なす事にはあやまちある故にこそ、古の聖王も傅說といへる野人をもちひて相となし、太公望といひし釣の翁を登アゲて輔とし給ひし帝も有しなり、其外代々のかしこき人皆かくのごとし、儉約を行ふ人もわれのみよきと思ふ人は、儉約には本づきがたし、孔文子が如く下問に恥ず、其すじ道の人に、とひ求て行ふを善とはいふべけれ、たとへば重き石など動かさむには大力の人ひとりよりは、尋常の人數多のちから功はやきものなり、世にあやまりて一人にて決斷するを大智なりとす、是則小智なり、まことの大智はわれをすてゝ、天下の人の智をわが智とす

一　國家をたもつ人は善人を知てあげもちひざれば、儉約は行はるべからず、人を知こと堯舜さへ知がたしとのたまひしなれば、堯舜たらざる人のたやすく知得べきにはあらざれども、わが至てすき好む事を欲し求るがごとく、眞實に善人をこのまば自然と求得る妙術もいできなん、求る心眞切ならざるにより、善人もいたづらに知る人なくて過行なるべし、「嘉言罔レ攸トコロレ伏、野無二遺賢一萬邦咸寧、稽二于衆一舍レ己從レ人、」と書經に說給へり、たとへば刀劍をこのみ又はよき彫の金物など、このむ人、各目利

の達人にあらざれども好む心深きゆへ、よき目利を頼み善悪を分別して求るゆへ、其人の身上にては求がたきほどの物もゝとめ得るものなり、わが身目利しらずとてすてをかば、いかでかもとむる道あらん、むかしもろこしの人君千金を臣下にさづけ、千里の馬を買に行かしめしに、其馬すでに死したり、此故に其骨を五百金に買て歸りたり、諸人是を聞て骨をさへ數多の金に買給へばとて、我も〳〵とよき馬をひき來り、一年をも過ざるに千里の良馬を三ッまで得られしとなり、かくの如くならば賢人もありなむ、たとひ賢人ならずとも其長ずる所を用る人あらば、儉約を行ふに不足はあるまじ、小人は是に反して一人につぶさならんことをもとむるゆへ用ゆべき材なし、良匠は材をすてずといへり、實に人を求る心なきゆへ、此人は是は善れど是悪しと、すつるくせあり、わが眞切にこのむ色欲などには口のかたちは醜けれど口のかたちよし、ものいふ顔はあしけれど笑ふかたちはよしとて人をすてず、「無ㇾ求ㇾ備二於一人一」とは周公のこと葉なり、彼もこれもそろひたる人は世に稀なり、其人の長じたる所を取用ゆべし、太公望は主人に逐出され肉の切賣しても買人もなく、八十になるまで世にいふ役にたゝずにて有しを、文王是を用て天下を定め、管仲は賤き賈人後に魯國にて囚になり恥をうけたる人なれども、桓公是を用て霸業をたて、百里奚は虞の乞人羊の皮を賣し匹夫なりしを、穆公是を宰相として西戎を朝せしめ、文公は中山の盜を用て城濮の敵に勝つ、右の輩は大なる詬大なる謗ある人なれども、明主は其非をすて其能を取用ゆ、差當る所發明なる人も根元をしり得ざる人は、枝葉ばかりを見

事にして居るものなり、大智如レ愚といへば人を用るに肝要あるべし、たとへば貨財を司る役人勘定算考一己の勤、殘所なく算勘毫釐の違ひなくとも、大本の貨財乏くては一生涯かりたる財の勘定して居るものなり、勘定差引等は少しうとくとも、大本の所を識得る胸襟なくては益なかるべし、大志ある人はむかしも一室の掃除はせざりしなり、大白はけがれたるが如しとて、至て白き物は至て白くは見へず、大方は無レ隅とて至て大なる四方なる物は、隅はたしかには見えわかぬものなり、人も亦かくの如し、大志ある人のなす事小人の目には惡くみゆる事多し、たゞ賢者是をよく見分て其職を任ず、「爲レ官擇レ人者治、爲レ人擇レ官者亂」と三略の記に見へたり、是は此役には誰かよからんと、ひいき、へんばなく貴賤をえらばず、賢才をあげもちゆれば其事よくとゝのふ、是に反して此人に何ぞ官職もがなと、人の爲に官をえらぶは私意より出ることゆへに、つひには亂るといふこゝろなり、世に此あやまりすくなからず、つゝしまずんばあるべからず

一「湯武以二諤々一而昌、桀紂以二誰々一而亡」とは、孔夫子のこと葉家語に見へたり、これは湯武のかしこき帝は諤々とて、帝のあしき事を正直にいひて諫めあらそふ臣下を愛し給ひし故に國榮え、桀紂とて愚かなる帝はあしき事をも尤とうけいるゝ臣下を愛して國ほろびしなり、「諸侯有二爭臣五人一雖二無道一不レ失二其國一、大夫有二爭臣三人一雖二無道一不レ失二其家一、士有二爭友一則身不レ離二令名一、父有二爭子一則身不レ陷二於不義一」と孝經にのせられたり、儉約を行はむと志さば、わがあやまちを聞んことを厚く欲し、奴婢

の言までも等閑に聞べからず、用れば連城の璧となり、用ひざれば石なり、子路といひし人は過ある
を告知する人あれば、餘りのうれしさに拜せしとなり、賢者をして口を杜がしむることなかれ
一　其身直にして影曲らずといへり、家の主人儉約を行ひて家内に及ずといふことなし疑ふべからず、
主人善を身にをこなはず口ばかり手だてのみの善は、必定一家にも及ぶことなし、たとひ一旦の利潤
を得るともつひには益なかるべし、此故に「惠而費不レ至怨出及二其身一」といへり
一　財寶はみだりに用れば家にかへらず、たとへば言語をみだりに出して口にかへらざるがごとし、用
財の道つゝしんで儉約ならざれば禍來り福去る、專ら愼むべきことにして、人ごとに此道理をば知な
がら守りがたき大事なり、人欲は窮なく財産はかぎりあり、窮なき人欲にまかせてかぎりある財産を
用れば、困窮して財たらず、それよりして必禮義をもかき、恥をも忘て利を貪り人の害になる事多し、
其品悉くしるしがたし、かくのごとくにてはわが身さへ養ひがたし、いかで人を助け人に施すにちか
らあらんや、故に古語に「禮義生二於富足一、盗竊起二於貧困一」ともいひ、又「富足生二於儉約一、貧困起二於奢
侈一」ともいへり、「千丈之堤以二螻蟻之穴一潰」と易經に說れたり、ながき堤も少しの蟻の穴より崩れ、次
第に其あな大に成つひに悉く潰崩なり、財を用るに其事々にしたがひ少しの所にも心を用ひ、儉約の理
にたがはざるやうにと心得ざれば、富足の長き堤も漸に情欲の心に潰され、貧苦の境界となるものな
り、然ればとて心鄙細にして少しの事に執着して光陰を送り、何志す事もなく蟻穴を守り居んも亦儉約

といふべからず、彼これ慮、奢侈懈惰吝嗇なきやうに心得ること、是用財の儉約なるべし、さて又言の禍をば聖賢の書又は佛説にも丁寧にいましめをき給ふ、恐れつゝしむべし、もろこしの南容といひし人は、白圭の詩を日に三たびよみて言をつゝしみし故、孔子此人、身を終るまで災なからんことをさとり給ひて、兄の子を以てめあはせ給ふ、白圭の詩はみがきたてたる白きたまの、玷損じたるは再びみがきなをさるれども、惡言いひ出してはとりなほされぬといふ詩なり、「惟口起レ羞」とは舜の禹に命じ給ひしことば、「吉凶榮辱惟其所レ召」とは程子の言のいましめ、「多言衆所レ忌苟不レ愼ニ樞機ニ災危從レ此始、是非毀譽間適足レ爲ニ身累ニ」とは范魯公の敎、「聰明深察而近ニ於死ニ者好譏ニ議人ニ者也、博辨閎達而危ニ其身ニ好發ニ人之惡ニ者也」とは、老子の孔子に贈られし餞の語なり、佛説には四ッの口の科を妄語綺語惡口兩舌といましめ給ひて、十惡の中の四ッに定給ふ、大凡言は心の聲なりと古よりいひ傳へ、心に思ふことすなはち聲にあらはるゝなれば、まことに恥を知るべきなり、人の爲にいふべき理にあたりては言をおしまず、いふまじきことをみだりにいはず審に察し、ことずくなに約るが言の儉約なり、事事物々儉約の理をはなれずといへども、ことしげければ財と言とをあぐるのみ、餘はおして知べし

一　人の此生をたもつは天地陰陽五行の恩に依てなり、君と父とは天に配し臣と母とは地になぞらふ、上王侯より下諸民にいたるまで天をいたゞき地に居り、五行の恩をうけて生をたもつ、五行とは木火土金水なり、凡木は宮室農具を作り船橋をこしらへ又は薪とす、火是を得ざれば用をなさず、人身に

おいては肝の臟是をつかさどる、其用眼筋謀慮、火は陽氣をつかさどり萬物を化生し、食物を煑熟し夜を照し寒をさく、金銕此ちからをからざれば器とならず、土是を得ざれば萬物を生ぜず、人身においては心の臟是をつかさどる、其用舌血神明、土は五穀草木を生育し河海を振め器皿を制す、金是を得ざれば生ぜず、人身においては脾の臟是をつかさどる、其用唇肉乳智周、金は刀劍農具釘針を作り釜鍋を製す、水これによりて生ず、人身においては肺是をつかさどる、その用鼻皮息治節、水は陰氣をつかさどり、萬物を潤し養ひ食物をとゝのへ渇をうるほし、衣帶又もろ〳〵の穢垢を洗濯し或は燒て鹽とす、木是を得ざれば生ぜず、人身においては腎の臟是をつかさどる、其用耳骨歯伎巧、右は日用の條目大略かくのごとし、五行生剋して人身を養ふ、しかるに人々多くは此恩のたつとき事をわきまへざるにより、或はみだりに用て身命をほろぼせども、其みだりなることをしらず、或は金銀米錢のみたつときを知て、水のたつときことをしらず、意にまかせて汲すつ、此意を察するに米錢は眼前の情欲を調ふるに、たよりすみやかなるによりてなり、米錢豈水のちからをからずして人身をやしなはんや、實に一掬の水も天地の深きを觀念し、一束の薪も亦同く念じ、且汲とる人の勞をも察して是を用ひば、天地の御心にもかなひみづからも貧困にいたらざるべし、何ぞたゞ金銀米錢をのみたつとぶ事の切なるや

一　四民ともに其年わが家に入る所の財を四ッに分ち、一分を除し三分にて一とせの倹養を調るとき

は三年にして一年のなりはひ出來るなり、是を以て吉凶不慮の變を助ることいにしへの定れる法なり、冠婚喪祭水旱風蟲盜賊火災等の備は、人家にかならず有べきものなれば、ちからの及ぶだけは右の法にしたがひてたくはへをくべきなり、古きことばにも「有二其具一者易二其備一」といへり

一　財を借り用ること家をやぶる基なり、成べきだけは艱難辛苦を忍て、惡衣惡食をこらへ借るべからず、されどもせんかたなき事にて財をかり用ひば、朝夕心にかけて早く返すべし、はじめかりし時の恩を思ひ懇に返しつぐのふべし、かす人の財萬辛百苦の中よりいできしこと、わがかり用てさへ足らざるにてをしはかるべし、人の辛苦にてたくはへし財をかり用て返さず、一旦貪欲不義の利潤を得るとも、後來餘殃の來らむこと響の聲に應ずるが如くならん、故に「積善之家必有二餘慶一、積不善之家必有二餘殃一」と易經にしるしをき給へり

一　居宅は富貴なる人も分限より少し狹きと見ゆるが理にかなひたるべし、富貴時ありてつくること春樹秋にありてしぼみ、圓月十五夜を過てかぐるが如し、天地の理皆かくのごとくなれば、今富貴にして居所こゝろにまかせ作りたりとも、遠き慮りなきときは後は修復のちからもなく破れ損じ、淺ましく見ゆるものなり、壯年の頃までは富貴身に餘り、屋作りかざりをなしたりし人も、一生其富をたもつことあたはず、老境膝を容る所もなくなりし人ども、眼前幾許といふ數をしらず、「天道虧レ盈而益レ謙、地道虧レ盈而流レ謙、鬼神害レ盈福レ謙」と聖人曰しなれば、物ごと分よりへりくだり不足と思ふ所を樂む

べき理ならん、花は半開に見、酒は微醉に飲と古よりいひ傳しなり、殊に武士は居を安ずべきにあらざれば、猶更心を用ゆべきなり。然れども一郷のきを並べし中に、居宅甚だやぶれ損じたるは他郷の人の見る目も、其所のからきまつりごとの然らしむるやうに見へ、あさ〳〵しき物なれば外見あしからざるほどにいとなむべし、外面は見ぐるしく内にかざりを好むは理に背きたるべし、惣て家を作るに異やう華麗をこのむは、見る目も苦しくいとわびしく、又時の間のけぶりともなりなんと兼好もかきをかれし

一 衣服は分限に應じ過不及なかるべし、まづ仕官の人は家の主人出仕の着用は、力の及ぶだけは潔く調ふべし、妻子の衣服は家の貧福にしたがふべし、是も分より下品に調るが理にかなふべし、出仕、又は禮席へは垢きやぶれたる衣服を着し、見物遊宴の塲へは美服を用ひ、家の主人は麁服して妻子の首飾（カシラノカザリ）衣帯はかざりをつくすたぐひ、甚だ倹約にそむけり、「惡二衣服一而致二美乎黻冕一」と、孔夫子は禹王を稱美し給ひ、「恥二惡衣惡食一者未レ足二與議一也」とも曰しなれば、士たる者惡衣惡食を恥ること、ろあるは鄙狹なりといふべし、やぶれたる縕袍をきて恥ざる勇氣百事なしつべし

一 同じ人と生れても袖乞をして飢をたすかる人もあり、又傭役して其日〳〵の命をつなぐもあり、日日農業に辛苦しながら其穀物を十分に食ふことならず、いやしき食物にて世をわたるもあり、しかれば富貴の人も安きに居て危きをわすれず、右の如く艱難してだにわたりがたき世の有さまを觀念し、

一盤の餐も粒々皆辛苦なる事を識得すべきなり、是に反してこゝろにまかせて家人を勞せしめ、慾に隨て飽食酩酊し、甚しきは食するに時なく、一日の間にも幾たびといふかぎりもなくのみ食ふ、まことに朝夕の煙さへたてかね勞役辛苦して、やう〳〵と半ば菜芹をまじへ炊く人あるは、まのあたり、見聞所なれば沈醉飽食の人天道恐るべし

一 親戚をば時々招て親しみを厚くすべし、食品は薄く情味は厚かるべし、近世親戚を招には佳肴美味を求め食品甚だ厚くす、家ごとに世事にいとまあらざれば、右の如き饗應のいとなみ數度設けがたく貧家は猶更の事なれば、親戚のまじはりをのづから疎くなるか、他人との宴集には却て食品も輕く、苦茶蔬食にても事調ふほどのならはしゆへ、招かざるにも來往して情したしくなる、是まことに親疎表裏せり、他人にこそ食品の設なきをはゞかり思ふとも、親戚の間は菜根を羮てなりとも、時々集會し和樂すべき理ならんか、「會數而禮勤、物薄而情厚」といへる古人のことば玩味すべし

一 客を招て饗應すること儉約の理にかなふ心得肝要なり、大凡親戚朋友を招て饗するの理は、相たがひに和樂して親情をのべ睦を結ぶためなるべし、佳肴美味を以て口腹を潤すのみのために非ず、しかるに食品人にまさらん事をおもふて客をなし、食物をたゝかはしむるのたぐひ其心中笑ふべし、只食品はすくなくいさぎよくし、鹽梅よきほどにかなふやうにしてすゝめ、酒をば客の心にまかせ亂におよばざるほどにもてなすこそよろしかるべけれ、客となる人もあるじの心づかひ、其上饑たる人

もある世の中に、今日わが身此饗應にあふことの幸なることを、再三觀念し心を用て食すべし、總て客を饗するに食品數多にして客をして飽まで食せしめ、其上に又種々の食物をすゝむるときは、いかほど甘美なる物も旨からず、さて酒をば多く飲しむるを以て面目とす、强らるゝ人は飲かね席上に打すて器皿にかくし入、とかくする間に甚く醉て飲食せし酒食を所をも恥ず嘔吐し、衣帶吐食にまみれはては死人の如く、其やど屋どへかき送ること是いかなる理ぞや、それ穀は身を養ひ生をたもつの寶、酒は氣血をめぐらし歡を合す美祿なり、此故に世のたからとしてもとめがたく、飢を救ひ身を養ふほどさへ食しかね、門外には乞人のさけびよばふ聲あるを聞ながら、堂上に逸居し飽食するさへあるに、飽上に飽を加へ其酒食をして身の養ひになす事あたはず、嘔吐し病根をうゆること是儉道の罪人なり、此故に「病從レ口入、禍從レ口出」といにしへよりいひ傳しなり

一　一物あれば一累を添とは古人の確言なり、惣て調度なくてかなはざる物の外は、成べきだけは省略すべし、器物は身を助くる物なれども、惡く心得れば其器物に一生つかはれてゐることあり、わが好む器を求て心を樂しましめんとすれば、すなはち其器につきて手入修復の心づかひ、樂をなすよりも過半苦勞ありて剩へ財をうしなふ、しかればなくて心の安きこそまさるべけれ、萬事勤て事すくなにすべし、是則福をたもつ要法なり、或人よき硯を得て常に玩び甚だ愛しけるに、或時書經に「玩レ物喪レ志」とあるを見て、かの硯を打くだきすてしとなり

一　もし朋友の許より饗應の案内を得たらんには、まづ其志の忝きよしを返答し、さて彼所に行て懇に謝禮をのべ、段々に食味の美鹽梅のよきを稱美し、食し終て歸る時又丁寧に禮詞をのべ、翌日又昨日盛宴のかたじけなきを謝す、つら〳〵案するに一時の食をうけてだに謝禮かくの如し、しかるに日日夜々天地の恩、主人の恩を食し身に着し、居を安んじながら此恩の厚きを思はず空々として衣食し、剩へ少し味の心にかなはざるあれば、奴婢を罵怒り飽まで食してこゝろなし、かなしむべし

一　一家を治るにも人の心別々になりては儉約は行はるべからず、是を一にするは主人の德なり、たとへば重き石などあげんに、聲を一にしてひとしく力を用ひなば、衆人の力ひとしく及ぶべし、是に反してこゝろ〳〵に力を用ひなばあげ得ること有べからず、家内和睦し助けあひなばあやまちなかるべし、馬蚿(ムカデ)あしきられて能行は、たすくるあし多き故なり

一　志士は溝壑に在むことを忘れざるを念とすべしと、朱文公かきをかれし、是は志をたつる士はいかなる高位富貴の人も、わが身いま貧窮におちぶれて溝壑に倒れ飢ると思ふ心を、常に忘るなとの心なるべし、かくの如く志さば疏食弊衣何ぞうれひとするにたらん、いかなる困窮にあふとも其心金石の如くなるべし

一　葉公龍を好て居室に龍の繪を書けり、此心天にや通じけん天龍下りけり、葉公是を見驚怖て走去ぬ是眞龍を好まざればなり、儉約を行ふにもまことに儉約に志なき人は、まことの儉約にあひては嗜欲

もこゝろのまゝならず、酒食淫行もなしがたく、葉公の眞龍にあひし如く逃避るなり、何事も誠を本とせざる行ひは、誠といふ眞龍にあひては逃走也、されば萬行共本は誠なることを知べし、「誠者天之道也、誠レ之者人之道也」と中庸に見へたり

一　道しらぬ人は儉約を行ふは甚だ艱難なる事とのみ思へり、さにはあらでわが心も安く身も安樂なるは儉約なり、別に苦しき所作もなく、只天に受得し良知のまゝに行ふのみ也、儉約を行はず貧乏に苦み、或は乞かり或はかし主より責はたられ、東西に奔走することそ艱難とはいふべけれ、儉約を行ふは坦途を行が如く、儉約を行はず貧苦に世をわたるは、荊棘の中を行がごとし

尙儉撮要卷之上　終

尙儉撮要卷之下

一 明₂其道₁不ㇾ謀₂其功₁とは、漢土の董仲舒が語也、是儉約を行ふ正理なり、無益の費を省き衣服酒食の美をこのまず、入をはかりて出す事をなし、他の財をかる事を好まず、是等は儉約に於て其道を明にすといふべし、かくの如く行ふときはあらかじめ富を期せざれども、其家をのづから富む、たとひ富ずともわれにおいて恥る事なし、是其功をはからざるなり、是に反して或は富貴榮利を求め、或は幾年儉約を行へば此貧をまぬかるゝなどゝ、まづ其功をはかり定め、さて身に行ふ所は情欲を制する事あたはず、衣食の美を好み無益の器をもとめ、或は日たくるまていね、或は晝夜出遊びて家事をしらず、萬事家の富べきしわざをなさて富を求む、翅なくして飛んとし、脚なくして走むとするが如し、是等をば「不ㇾ明₂其道₁而謀₂其功₁」といふべし

一 儉約を行ふに輕重ある事を分別し、おもきをとり輕きをすつべし、重きとは何ぞや、饑饉不虞のそなへ公役の料大凡是なり、輕きとは何ぞや、遊宴の具、妻子の衣帶無益の調度大略是なり、人ごとに死をにくみ生を貪るは、人情の大なるものなれども、是よりも重き義と云もの有故に、是にのぞみては死をかへり見ざるなり、萬事忠孝のために行ふ、儉約の重きにたくらべ見ば制し止め、たへ忍ば

れざる事は有べからず、君のためにわが子を殺せしためしもあり、又身に漆ぬりて癩病を似せ炭を呑て啞となり、君の仇をむくいんと志し人もあり、是皆義のおもきを取し行ひなり、かくの如き事さへあるに君父の恩をむくいんために儉約を行はむと欲して、わが好む無益の情欲を制し忍ぶ事ならざらんや、萬づの事彼これふたつながらよき事なし、かれ屈すればこれ伸天地の造化たがふ事なし、たとへば花よきは實あしきが如し、此故に重きを取、輕きを捨、謙に居て儉を行ふべし、尺蠖の屈むは以レ求レ信也、龍蛇の蟄するは以レ存レ身也と、易の繫辭に說給へり

一　一藝だも師を求て學ばずんば成し得べからず、匠人の家を作る事を學ぶ、古より定れる規矩準繩を以てすれば、愚かなる人も相應に家を作りなす、たとひ人に勝れたる發明ありとても、規矩を捨てばいかに良材ありとも家を作り得べからず、諸の藝能は達人ありと聞ば遠國といへども行て學ぶ人多し、一事の技藝にさへかくの如し、儉約を行ひて家をとゝのふるは、身を終るまでの貧富のかゝる所忠孝の本なり、諸の藝能にくらべ見ば百倍も學ばずんば成し得がたからん、「學而後入レ政未レ聞二以レ政學者一也、若果行レ此必有レ所レ害」とは鄭子產の金言なり、此心は國を治る道を習て政を行ふべし、學ずして政の官に入則其政を手習草紙にして政をし習ふ、かくの如くならば必害あるべしとなり、少も學ずして家ををさむる人多し、故に家日々に困窮し家內和睦せず財たらず人の怨をうけ、其怨の暗にわが身にむくふ事をしらず、己に出たるものはをのれにかへるものなりと、曾子のいひし事恐るべし

一「國無二九年之蓄一曰二不足一、無二六年之蓄一曰レ急、無二三年之蓄一曰二國非二其國一也」と、禮記の王制に見えたり、儉約を行ふにあらずんばいかでかかくの如くならん

一　荀子曰積レ土成レ山風雨興焉、積レ水成レ淵蛟龍生焉、積レ善成レ德而神明自得聖心循焉、故不レ積二蹞步一無三以至二千里一、不レ積二小流一無二以成二江河一、騏驥一躍不レ能二十步一、駑馬十駕功在レ不レ舍」と、土一塊も積ば山となりて風雨をこり、水積て淵となれば蛟龍生じ、善つもれば神明聖心も其人にしたがふ、一步を積ざれば千里も行れず、小き流つもらざれば江河とならず、騏驥とて一日に千里を走る馬も一をどりに十步は行れず、駑とてにぶき馬も止ざれば行とゞくといふこゝろなり、孔子水を稱して「逝者如レ斯、夫不レ舍二晝夜一」と曰し如く、止ざる事は功成ものなり、儉約に志す人此理をわきまへ知べし、さりながら久しく止ざる間には、順逆こもごもきたる事陰陽屈伸のことわりなれば、さまざまの屯難を經ずしては遂行れざるものなり、道しらぬ人はたまたま順境にあひ、なす事思ふ事心のまゝなるときはいさみはげむ心怠らざれども、もし逆境にむかひなすことごとに、利をうしなふ事二三度もつゞきぬれば、忽に志屈し此道よろしからず、時にあはずなどゝて末とげず成行人多し、是は其道を明にせず天命を樂しむ事をしらず、たゞ功をのみ、はかる人のなす事にて、志の薄きより發る所なり、色欲博奕などを好む人を見るに、負たりとてやむにも非ず、文返されしとてやむにもあらず、深草少將其外ためし多し、賢を賢として色にかへよとのいましめ、まこと成かな、沛公は七十餘度の戰まけいさくのみ

なりしも、やまざるの大志よりつひに一戰に打かち、天下をたもちし事誰も知る所なり、一進一退一左一右すれば、六の良馬をかけたる車も思ふ所へは行得ずと、古人の賢傳に明白なり

一　儉約を行ふの要、常と變とを明かに分ち知べし、此理明らかならずんば國家の衰弊は救ひがたかるべし、變にのぞみては變を以て救ひ、常に處しては常を以て治む、たとへば小學に「足容重手容恭」又は「堂上不レ趨」などゝあるは是常の禮なり、しかれども急難火災など有んには、堂上にてもはしり行てすくはずんばあるべからず、男女さづけ受るに手づからせざるが常の禮なればとて、あによめの溺るを手にていだき助けずば道にたがふなるべし、しかればとて常にいだきかゝへば禮にたがふべし、世人此理をわきまへず變にのぞみて常を以て論ずる人多し、かくの如き人はもし神社などに火災あらんには精進潔齋して上下を着せずんば火消にはゆかれずといふべきか、伯夷叔齊は古の賢人なり、變にのぞんで常を守りたる人なり、不義の粟を食せじとて餓死して、其身を潔くしたる仁者なり、武王は古の聖人變を以て變に應じたる聖智なり、紂王の大虐を討て苛政を糺し天下の民を救ひ給ふ、夷齊の如くならばいかでか天下を救む、さればとて夷齊を惡しといふには非ず、令名今に傳て天下是を稱す、然ども國家をさむる人衰弊の時に當て、常を以て是にのぞまば、あによめの溺死は助けがたからん、脾胃よく調へば病をのづからいゆとて、暴瀉の症に訶子(カシ)肉豆蔻(ニクヅク)を用ひず、食傷に神麴麥芽(シンギクバクガ)を用ひず、人參白朮のみにては治すべからず、神麯麥芽補藥には非れども胃中の邪を瀉しされば、胃すくや

かに成故に瀉すなはち補なり、まづ急を救て後、常に復る理なるべし、儉約を行ふの道世俗の諺にかかはりては行はるべからず、むかし或僧のもとに榎木有ければ榎木の僧正といひけるに、立腹し榎木を伐けるに木の根殘ければ、伐くいの僧正といひける故ほりすてければ、ほり池の僧正といひけるとなん、彼をやむればこれをそしる、惡をやむれば善をもそしる、是にかゝはりては千歳に一日も行ふ日は有べからず、かれ悅へばこれうれふ天地陰陽の道なり、出るを遲しと山の端に心をいたましむる月待人もあれば、川瀨の闇に樂みを極る鵜つかふ漁父もあり、かれよろこべばこれうらむ、天地の大なるも人猶憾る所ありと中庸に述給ふが如し、左も右も怨なく春の夜をながくして夜ごとに圓なる月を見、柳の枝に櫻をさかせ梅のにほひをうつし、花をちらさぬ風吹て匂ひをこせよとは、無理の又無理小人の事情なり、「天不㆘爲㆓人之惡㆒寒而輟㆗其冬㆖、地不㆘爲㆓人之惡㆒險而輟㆗其廣㆖、君子不㆘爲㆓人之匈匈㆒而易㆗其行㆖」と古人のいひし如く、こゞゆる人もあらばあれ天の冬をやめ給はぬが如く、志す所を眞直に廣く救ふの大仁にもとづき、本立て道なるの大礎をゆりするゑ、勇猛心をはげまさずんば成るべからず、さればこそ奢りゆたかなる風俗習ひと成、あらたまりがたき時に當ては馮河とて深き河をかちわたりする勇を用ひて、あらためかへよと易經に說給へり

一　ことわざにいふ小田原談合益なく損多し、志の合ざる輩多く集て評議する事は必災生ず、是を戰國策に百人瓢をになふて走らば瓢かならずわれん、一人持てはやく走りたるがよからんと書たり、此

言むべ成かな倹約を行ふも亦しかり、一人よき人をえらびて其事をつかさどらしめざれば災生ずるものなり、是を「委任不レ一亂之媒」と古人もいましめおきしなり、數人集て一人は白きは惡しといひ、一人は黒きは惡しといふが如き、一事も行はれざるものなり、たとへば貴人の病に藥を用るが如し、一醫は痰にさゝはれば當歸は用ひがたしといひ、一醫は燥劑なれば半夏は恐ありといひ、一醫は泄瀉の恐あれば枳殻は用ゆべからずといふほどに、はては白朮と甘草とばかりになる物なり、此白朮甘草何のさはりなけれども、急にのぞみて外邪を發散する功なければ邪さかんに成、つひに元氣衰へ死症となる、外邪さらざれば元氣復せざる故に、邪をさるが元氣をやしなふの本なり、かくいへばとて元氣を養ふには邪もなきに、邪をさる藥を用る事と琴柱に膠すべからず、又事に獨智を用ひては天下の善言聞事を得ず、廣く衆人の言をうけ納てかたより聽ず、深く思ひ遠く慮て行ふべし、さて善を取惡を捨るにいたりては自己の決斷なるべし、故に太公望の言ばに、「不レ能二獨斷一以二人言一斷者殃也」といへり、若謀未レ精成不成の道も見えざるに、利せんと欲し勝んと思ふ欲心より小き忿小き恥に忍びず、卒爾に事をはかりて是を決斷と思ふはひが事なり、是則敗に赴くの道なり、若謀すでに精く成不成の道もすでに見えたるに、疑心多く此上にもいかゞあらんと猶豫し、うしろより大難の來るをもしらず、事を延しとかくする間に慮り撓て必行ふ事ならざるものなり、是決斷なしといふべし、「謀熟而後斷、則大功大名隨レ之而興、智淺而言斷、則大惡大亂亦隨レ之而陷也、夫智與レ斷在二乎兼備一也矣」と、田錫が論宋

史に詳なり

一　貧窮なる人もとより不儉約によりて、かく貧窮に至し事をば察せず、死生命あり富貴天にありなどと遁辭をいひて、猶々儉約を嫌ふ其愚癡あはれむべし、たとへば今海をわたらんに船に乘、順風を得て出帆すといへども、俄に惡風吹來り船くつがへらば猶も命を助からんと水くゞりをよぎなどしても、つひに溺死せば是則天命ならん、然るに船にものらず深き海にわたり入て溺るは、是天命にあらざる事明らけし、今貧窮なる人儉約を行なはず天命なりといふは、是ふねにのらずして海に入溺死して天命なりといふが如し、「禍福在レ君不レ在二天時一」とは呂望の武王に答し語なり

一　人の財をかりたる人かし主よりつよく乞れ、かへすべきちからなく貧苦身に切なる時は、向後艱難をしのびいかにも儉約を行ひ、貧苦をまぬかれむと思へども、少し時過ぬれば艱難をわすれかす人だにあれば、後の事は思ひはからず、かり用ひ年々貧困をまぬかれず、後はわが俸祿は皆他人の物となる、凡の事始あらずといふ事はなけれども、終をよくする事かたし、書經に「夏暑雨小民惟曰怨咨、厥惟難哉思二其難一以圖二其易一民乃寧」といへり、此こゝろは夏の日の暑雨炎蒸として堪がたく、冬の寒氣凛烈として又堪がたく、愚かなる民怨みなげきて艱苦なりとす、是なげきて益なきなれば、しかじ咨むよりは、其艱苦を忘ず寒暑をしのぐはかり事をなさば、諸民安樂なるべしとの心なり、愚かなる者は寒暑に行當て寒暑の苦をなげくとも、寒暑さりぬれば其苦を忘る、かしこき人は冬にあたりても、暑

をさくるはかり事をあらかじめ設けをき、暑にも寒を忘れず安にも危を忘れず、富ても貧を忘れず此故に身とこしなへに安樂なり、「明者遠見二於未一レ萠、而智者避二危於無一レ形、禍固多藏二於隱微一、而發二於人之所一レ忽者也」と、司馬長卿が語史記に見えたり、是は智者は事のいまだきざゝざる前にきざすべきを見て危をあやうからざる前にさく、禍はすこしき所にかくれて人のゆだんする所にあらはるといふ意なり、凡の事豫めするといふ事肝要なり、豫めするとは物に先立て慮り前かどより計をなす事なり、行當て迷惑すまじきとのこゝろなり、「故に一言而有レ益二於智一莫レ如レ豫」と顏子ものべられたり、貧困なる人いたづらになげき居んよりは、あらかじめはかりて儉約を行ふべし、此貧始よりかくの如しまぬかるゝ術なしとて、時と不幸とにまかせをくはぬれてほさゞるが如し、「事豫則立、不レ豫則廢」とは、孔夫子の言なり

一　儉約を行ふに婦女尤さとしがたし、聰明なる婦女も稀には有べけれど、是はたぐひすくなく多くは道理にうとし、理を以てさとさんとせば倉卒には行はるべからず、其夫たる人制度を立、ちからを用て順ひ守らしむべし、道理を以て服しがたきゆゑにや昔より三從の法を定め、親の家に在ては親にしたがひ、すでに嫁しては夫に順ひ、老ては子にしたがふ、たゞ順ふを以て女の道とす、しかるに妻をして家法にしたがはしむる事能はざるは、其の夫の不德なる事知ぬべし、凡家の盛衰はひとへに妻の行ひの善惡のかゝる所なり、故に古の人家貧ふして良妻をおもふといひし

一 水火の災をなすも人を害する事すみやかなり、貧困の災をなすも亦人を害する事すみやかなり、故に水火の災來るときははせ走て是をさく、たとひ眼前にわが欲し好む物ありとも目もかけず、たゞ一足もはやく走去て、その難をのがれんとはからずといふものなし、貧困の災もはやく走りさけざれば、身を害する事水火の如くなるに走りさくる事速かならざるのみならず、逃る間にも目の欲にひかれて見物に時移り、口の慾にひかれて食を貪り、又は酒に醉てみちすゝまず、耳の欲にひかれて音曲など聞居る間に、うしろより貧困の災襲來りつひに身を苦しむ、いかなる大なる火災にも燒死する人は數おほからず、是逃さくる事純一なる故也、貧困のわざわいをも人事に逃まぬかれんとは思へども、走る事純一ならざるにより、みづからわが身を害するにいたる、もし又はしりさくる事純一なれども、不慮の變にあひ其身を苦しむるは是天命なり、かくの如き人のために此論をもふくるに非ず、たゞはしりさくる事の純一ならずして、災をうけ身をそこなふ類をして憤發せしめんと欲るのみ

一 張てゆるべざるは文武もよくせず、世人儉約をおこなはむとては、甚だきびしき法をもうけ、又はむつかしき算勘日課などにて功をはかる、はじめ思ひたつ時はいかなる艱難をも經て行ひ遂んと思へども、もとより天地の理に背ける故、いまだ半にも至らざるに氣力つかれ怠る、かくの如き理に心を用ひ一張一弛工夫せずんば、其行ひとほるべからず

一 天地の恩主君の恩をうけ、みだりについやし、みだりに我身に俸養して天理にしたがふと云べけむ

や恐れ愼べし、故に儉約を行ふはすなはち天地の理にしたがふなり、富貴を期し貧困をまぬかれん事をのみねがひて行ふは實の儉約にあらず、富貴貧富は天命あり、儉約を行ふは是をもとめ是をさくるに非ずたゞひとへに天地主君の恩をたつとび思ふにとゞまるのみ

一　目は明かなるを以てよしとす、耳は聰をもつてよしとす、智はさときを以てよしとす、聰明睿智聖賢の體なり、目は明かなるを以て惡しとす、耳は聰を以て惡しとす、智はさときを以て惡しとす、故に癡ならず聾ならざれば、家翁とならずと古人もいひしなり、君をば敬ふを以てよしとす、是忠なり禮なり、安宅の關にて辨慶が義經を打擲したるも亦忠なり、言はいつはりなきをよしとす、然れども父の羊の盗たるを子のあらはせしは惡なり、天地の間物皆かくの如し、よく觀ずれば善惡不二の理あり、一方にかたより琴柱に膠したる人は、善と思てなしたる事も惡なり、惡と思てなしたる事も善なる事もあり、此理をさとり得んには中庸不偏不易の眞理を工夫し得ざれば、いかほど精力をつくしたりとも無益なるべし、聖賢もかならずあやまちなきには非れども、本體天地の道理にかなひたる聖賢ゆゑ、其あやまちとほからずして復る、況や聖賢たらざる人あやまちなき事あるべからず、しかれども改るに吝かならず遠からずして復るときは、本然の性をそこなはず儉約を行ふ人、一時のあやまちをうれひとせず本然の性をやしなふべし、しからざれば儉約も災の端となる、米は命の根なれども食ひ過せば病生じ、金銀はたからなれどもあしく用れば身をほろぼす

一　禮記曰、「爲二人君一者謹三其所二好惡一而已矣、君好レ之則臣爲レ之、上行レ之民從レ之、詩云誘レ民孔易此之謂也、」此語まことなるかな、上たる人無益なる事を行ひてさへ下是を似せ學ぶ、況や善ををこなはば下たる人などか是にしたがはざらん、とかく主人のをこなひのまゝにしたがふゆゑ、民を誘事易しと詩經に云り、主人よく儉約を行なはゞ、令せずともおのづから行なはるべし、上の德の下へはやく及ぶ事、たとへば馬つぎをきていひ傳るよりも速かなりと、孟子のべをかれし

一　古の國を治し人は市の賣物を見て、民の好みきらひをさとりしれりと禮記に見へたり、これ志淫すれば好み辟なる故なり、無益の調度儉約をそこなふ器いくばくぞや、「不下作二無益一害中有益上功乃成、不下貴二異物一賤中用物上民乃足」とかきし、旅獒（カウ）のことばまことなるかな

一　奴婢をつかふに尤儉約なるべし、たとへば使をつかはすに南の方に行しめんには、其方角の用事を再三考へいひ含め行かしむべし、始には心を用ひずあとにて思ひ出し歸て後又行かしむるときは半日にてとゝのふ事も、一日を終てもとゝのはざるものなり、此故に不儉約なる人の家は何となくせわせわしく、奴婢もいとまなくて儉約なる人の事ずくなにいとまあるよりは、却て萬事はかどらず手をくれになるものなり、奴婢のいとまなくていそがはしきは、厚く財をそこなふべきに非れども、其事多くいそがはしきは無益なる事多きによりてなり、無益なる事多きは是財をそこなふ基なり、此故に家內事ずくなに法の正しきは財をたもつ要法なり、それ時の盛衰によりて貴賤高下とかはるといへど

も、元來天地のうみて子とし給ふ人間なれば、奴婢といふともいやしめあなどりしへたぐべからず、いかにもして其所を得せしむるやうにはかるべし、これも亦人の子なりといひし人の心をしはかるべし、然ればとて愛に過べからず、「威克二厥愛一允濟、愛克二厥威一允罔レ功」とは夏書のことばなり、物事にゆるがせなるは奴婢のためよきやうに見ゆれども、畢竟毒を施すの理なり、ゆるがせなる家の奴婢は萬事怠に習ひ、後は災下より起てやむ事を得ず、こらしいましむる事もいてくるものなり、水をばあなどりて溺る人多けれども、火に入て死する人は稀なりと子產は子を教へられしとなり、「一夫不レ可レ狃況國乎」と國語にも見えたり

一「君子居レ易以俟レ命、小人行レ險以激レ幸」と中庸に見えたり、君子とて學て人の道を知り得し人はみづから勤むべき業をよく勤て、人の道を行ひて分を安んじ其外を願はず、たとへば平地を行が如し、是易きに居るなり、小人とて道しらぬ人は外をねがひて分をやすんぜず、この故に賄賂を納て立身を求め、或は巧をかまへて富貴をねがふ、たとへば險阻なる道を行が如し、疲れ苦しむ事かぎりなし、みづから分を安んぜず人の行まじき邪路を行てこぼれ幸をもとむ、たとひもとめ得たりともまことの福に非ず、もとめ得ずして禍を得し人すくなからず、儉約を行ふも亦然り、わが分をやすんじて家業をつとめ、其中より得たるをこそまことの福といふべきに、さにはあらで他をむさぼり他をうらやみて、分外の奢をなし俸養不足して乞かり、返すべき力なくして人をあざむき、千慮百計して貪り取る、外よ

り見れば一日も安き日なし、是險きを行ひて幸をもとむるにあらずや

一　何事もよき道は天地造化の理にたがふ事なし、風雨寒暑共節をたがへず五穀熟して民人育す、天地の大なるしわざ千歳不易の大仁なり、たとへばけふはかしこに晴を待人ありとて、天其人のために雨をやめ給はず、けふはこゝに雨をまつ人ありとて晴をやめ給はず、愚なる人はあなどりなれて溺れ死するもあれども、其人のためにながれをやめ給はざるが如し、道しらぬ人は公道の大本を立る事あたはず、人の貧窮を見ては其人不儉約にして貧困に至しをば察せず、情にまかせて小惠を行ひ姑息の愛を施し、小兒に甘き食物をあたへて病の根をうゆるが如す、もし又天命にて自然と貧困なる人もあるべけれど、是は世に稀なるものにて百人に九十九人は或は用財の制度なく、或は奢て財をつひやし過し、貧窮に至し小人なれば、姑息の愛を尊く思ひ身をそこなふ毒とはしらず、つひには貧病の苦痛をまぬかるゝ事なし、是を憐みいたみて炙治を施す仁者あれば身のためとは思ひもしらず少しの痛に堪ず不仁なりとてそしりいかり、炙治をやめてはてしなき貧病に苦しむものなり、それ數おほき人民、人ごとによろこばしめんとせば日もまたゝらじ、一鄕一村などにしあらば人ごとによろこばしむる政も及ぶべけれど、一國にものぞみては行とゞくべからず、凡天下にをし廣め行はれまじき道はまことの道にあらず、天地造化の理にたがへばなり、むべも「大明無私照、至公無私親」と古人のいひ置しなり、かくいへばとて老て子なく、いとけなくして親なきたぐひを憐むべからずといふにはあらず、或は家業

ををろそかにし或は用財の道をしらず、奢りすさみて貧困に至し輩は、鰥寡孤獨のたぐひにはあらず

一 韓非子をよみしに人の像を刻削する法あり、鼻は大なるに宜し口と目とは小きなるに宜しと見えたり、是は最初に鼻を小く刻ては後に大にあらためがたく、口と目とを大く割ては再び小くなしがたしとの意なり、儉約を行ふも亦然り、初に法をゆるがせにしては後に嚴にあらためがたく、はじめに用財の法を儉にせざれば、後に儉にあらためがたき事口と目とを小くあらためがたきが如し、しかればはじめにゆるがせなるは、終り必ずやぶれにいたるべし、もろこしに子產といひし賢人鄭の國の政を行はれしに、久く惡き政に習ひたる人民、子產の政正しく姑息の愛なきをうらみそしる事甚しかりしに三とせすぎ國よく治り、夜戸をとざさず、みちにすてたるをひろはず、諸民困窮のうれひなく成て、はじめ怨し人共も皆相よろこび、子產の卒せられし時曾て罪を子產に得し人までも、をしみかなしびけるとなり、姑息の愛先入と成し輩はまことの仁政は却て怨みそしる、是にまどはされては行ひとげられざるべし

一 今こゝに人あらんに家貧く、わが家祿にて用たらずかり用て世をわたる、此故に儉約を行ひて貧苦をまぬかれんと志せどもあたはずば、人にとひてしたがひ守るべし、昔よりかくの如くなれば今急に改めがたしとてすてをき、貧に苦しむは是懈惰なり、たとへば病身なる人年を經て次第〳〵に病重ら

ば、是昔よりのやまひなりとて醫藥をたのまず打すて置べきや、死にのぞむまで醫禱百計して快氣をねがふべし、貧困も一生の病なるに是を療ずるにゆるがせなるは何ぞや

一 面に大なる贅いてきて痛まず痒からずとも、良醫ありて此こぶを愈すといはゞ、たとひ遠方なりとも行て療治をたのむべし、いたまずかゆからざるに是を思ふ事何故に、かくのごとくなれば見にくきによりてなり、大丈夫膝をかゞめ手を拱て人を賴み、他をうかゞひ言を巧にし色を令し、甚しきは賄賂を納て米銀をこひかるありさま、こぶよりなを見にくし、是を治するに儉約といふ藥あるを知ながら、用る事をしらず、かなしひかな

一 何志す事もなく吝嗇にして金銀をおほくあつめもち、身を終るまで是に心を勞して死する人あり、是を名づけて錢をまもるやつこといふ、人生百に滿ざるに常に千載のうれひをいだき、心志をして金銀利欲の間にあらしめ、人のうけ得たる太和の樂をしらず、目の前にみちたる四時のをし移る風景にも感ぜず、たゞ財寶にのみ執着しむなしく光陰を送り、老の至て死するといふ事を辨ざる事いたましいかな、夫儉約は王侯は萬民のために是を行ひ給ひ、つかふる人は君恩をむくいんために是をはかり、農工商は父母より受し財と、天地より附與し給ふ食とを情慾のためにそこなひ、困餓に至らざるために是を行なはゞ、是儉約の大なるものならん、然るに我身の欲にしたがひ心鄙吝にして財を多くあつめもち、命にかへて是をしむは何故ぞや、勇士義に當つて死をかへり見ざること塵芥の如し、況や

財寶をや

一 親友予にかたりけるは、汝をして廣く儉約を行なはしめば、汝いかなる法度をか定めいか成算勘をかなさんとするや、試に其意趣をきかんと問けるゆゑ、不爲論を書て是をしめす

不爲論

或問レ予曰、使ニ予行ニ儉約一子將ニ何爲一乎、對曰吾志在レ不レ爲耳、曰不レ爲不レ成歟、曰儉之要在レ不レ爲レ不レ爲矣、請試說レ之、一曰不レ爲ニ不忠一、二曰不レ爲ニ奢侈一、三曰不レ爲ニ冗費一、四曰不レ爲ニ多事一、五曰不レ爲ニ聚斂一、六曰不レ爲ニ損失一、七曰不レ爲ニ內荒一、八曰不レ爲ニ外荒一、九曰不レ爲ニ酒亂一、十曰不レ爲ニ酷迫一、十一曰不レ爲ニ姑息愛一、十二曰不レ爲レ徇レ欲、十三曰不レ爲ニ戒多一、十四曰不レ爲ニ禮煩一、十五曰不レ爲レ祈レ幸、十六曰不レ爲ニ玩好一、凡如レ此其佗不レ遑ニ枚擧一、公夫明辨レ之焉

和漢儉約の道に益ある人の言行を左に書しるしぬ、此道に志あらん人戒ともならんかし

一 むかし青砥左衛門といひし人、君より數十ヶ所の所領を知行して、財寶ゆたかなりしかども、わが身のために聊も過差なる事をなさず、奉公には千金をもをしまず、又飢人乞食などには品により分にしたがひて、米錢絹布の類を與へけり、或時訴訟事いてきて權貴の人と鄙賤の者と對決に及ぶ事あり、評定衆ないきをかまへ鄙賤の者をまかしぬ、勝負表裏しぬるゆゑ青砥左衛門只一人權門にも恐れ

ず、理の當る所をいひ立て權門の人を負しぬ、勝ける人此恩をむくいんために賂物したく思ふといへども、元より左衞門が受まじきをさとりて、錢三百貫俵につゝみてうしろの山より、ひそかに左衞門が坪の內に入たり、左衞門是を見て大に怒り、はるかに遠き田舍まで持送らせて返しぬ、又或時左衞門夜に入て出仕しけるに火うち袋に入て持たる錢十錢、取はづして滑川へおとし入けるを少しの物なれば其まゝにてこそ行過べかりしが、以の外に周章て其邊の町屋に人を走らし、錢五十文にて續松を買て燃したるは、小利大損かなとわらひければ、靑砥眉をひそめて、さればこそ御邊達は愚かにて世のついえをもしらず、民をめぐむ心なき人なり、十文の錢今求めずば滑河の底に沈てながく失ぬべし、續松をかへる五十錢は商人の家にとゞまりて永く失べからず、わが損は人の利なり彼と我と何の差別かある、かれこれ六十の錢ひとつもうしなはず、豈天下の利に非ずやと答しとなり、吝嗇のところより十錢ををしむべくば、何ぞ五十をすてて十錢をとらむや、これ實に儉約の公論確乎として拔べからざる大道なり、是によりて考るときは儉約と吝嗇との差別分明なり

一　相模守時賴の母松下禪尼、或時時賴を招き給ひけるに、すゝけたるあかり障子のやぶれたる所ばかりを禪尼手づから小刀してきりまはしつゝはられければ、兄の城介義景傍に在しが、給りてなにがし男にはらせ侍らん、さやうの事に心得たる者に侍ると申されければ、其男尼が細工によもまさらじと

てなを一間づゝはられけるを、まだらにて見ぐるしくやとかさねて申されければ、尼も後には皆々はりかへむと思へども、けふばかりはわざとかくて有べきなり、物はやぶれたる所ばかりを修理して用る事ぞとわかき人に見習せて心づけんためなりと申されしとかや、世を治る道儉約を本とす、女性なれども、聖人の心にかよへり、天下をたもつほどの人を子にもたれける、まことにたゞ人にはあらざりけるとぞ、吉田兼好がかきおかれし

一　張文節公といひし人は初め輕き官なりしが、後に宰相と成けるにはじめ輕き官に在し時の如く、惡衣惡食しければ親しき人のいひけるは、公の俸祿多ふして儉約なる事かくの如し、しかれども外人の譏もありなん、昔もためしある事なれば世上なみにしたまへかしと云しに、文公歎じていひけるはわが今の俸祿、家内皆錦を衣たるをくひものにするとも足らざるにあらず、されども人の常の情儉より奢に入事は易く、奢より儉に入事はかたし、わが今の所領いつまでも有べきにもあらず、人身も亦いつまでも存在すべきや、今家人奢に習ひなばもし時有て所領滅じ宰相の位去し時、俄に儉約になす事あたはず必困窮すべし、祿位盛なる時も又衰たる時もたゞとこしなへに、今日の如くならん事を願ふと語りしとなり、是安きに居て危を忘れざる至論なり

一　箕子は紂の臣下なり、紂はじめ象牙にて箸をつくる、箕子歎じて曰く、象箸を作る心よりしてかならず玉杯をつくらむ、玉杯よりして必遠方異やうの物を好んで是を玩ばん、それよりして馬車家居に及

び、つひに國をほろぼすに至らんと、後はたして其言の如くなりし、察するに纔に象箸の一物何ぞ國をほろぼすべきなれども、其象箸をつくるこゝろ物事に及ばゞ、つひに國をほろぼすの災きたるべし

一　王涯といひしは宰相の官にて有しが、ある時其むすめうるはしき釵の價、七十萬錢なるを買もとめんと乞ければ王涯答ていひしは七十萬錢はわが一月の俸金なれば汝において惜からず、しかれどもひとつの釵七十萬錢なるは、妖物にて災のつきしたがふ器なりとて求る事をゆるさず、其後むすめ王涯にかたりけるは、前日の釵は馮外郎が妻もとめたりと、王涯歎じていひけるは馮外郎が身にして、妻の首（カシラノ）飾七十萬錢をつひやす久しかるまじと、のちはたして災にあふて横死す

一　公父文伯は魯國の政にあづかり位たつとくして其うへ富貴なりしが、或日朝より退て見ればその母績みいたり、文伯思ひけるは今われ富足高官の家なるに、母のみづから績み給ふ事不相應のわざなりと、すなはち其意趣を母にかたりければ、母答へていへるは民勞すれば思ふおもへば善心生ず、逸すれば淫す淫すれば、善を忘る、善を忘るれば惡心生ず、此故に王后より以下庶士の妻に至るまで、或は冠の具或は帶又は服それぞれの位にしたがひて織なす、怠るときは辟（ツミ）を得る事古の法なり、汝朝夕われを修て怠らず、父の在し時の如く勤よかしとねがふべきに、さはなくて績をさへやめて安逸に居よといふ、かく兒童の如き心にて高官をうけ給はる災の來らん事必せり、定て父の家を失ふのみならず、魯國も

亦ほろびなんと歎じけるとなり

一　韓信といひし人ははじめ身貧賤なり、或時長き劍を横たへ市町を通りしに、腕だてを好む人行あひて韓信に向ひ、汝其劍をぬくべきや、もしぬかずんばわがまたをくゞれといひければ、韓信此者手にたらぬをさとり、大事を志すものかくの如き人を相手にせんやと思ひてまたをくゞりけり、大志ありて小の辱を忍ぶ心かくの如く成しゆゑ、後沛公をたすけて漢の代を興し、朱買臣は妻にすてらるゝほどの貧窮なりしかども、つひに封國の位にのぼりしなり、大丈夫大にこゝろざゝむとならば、細小の辱を忍び屯難に挫ずんばあるべからず、況や惡衣惡食小人婦女のそしり物のかずならんや、志す所おほひならばもろ／＼の小事は口にもかゝるまじ、鹿を逐ふ獵師は山を見ずといへり

一　魯の季文子宰相の官なりしに、帛を衣たる妾なく粟を食ふ馬なし、時に仲孫它といふ人諫ていひけるは、卿は魯國の宰相なるに妾帛を衣ず、馬粟を食はず人皆吝嗇なりと思へり、國の外見もあるなれば華美にし給へかしといひしに、文子聞て我も亦華美を好まざるには非れども、國中の民を見るに人の父兄たる者惡き物をくらひあしき衣を着たる人かず多し、然るにわが妾と馬とに華美を施すは人に相たる道に非ず、われ元より德を以て國の榮とする事をば聞しかど、妾と馬とを以て國の榮とする事をきかずと答ける、其後文子仲孫它が父の獻子にしか／＼と語ければ、獻子いかりて仲孫它を囚れ人の如くにしておきぬ、是より仲孫它妾に惡き布をきせ馬にあしき物を食せけり、文子是を聞てあやま

つて能改者民上也と賞し、上大夫の官に擧たり

一　魯嚴公桓宮の楹に彩色し桷に彫物せんとす、匠師の慶といふ人云けるは、君の先祖君はよく儉約を行ひて侈を禁じ、後人に法を遺し給ふ、故に久く福をたもてり、然るに今君侈をなし給はゞ君に益なきのみならず、先祖の令德までもすたれなんといさめけるとなり、予つら〳〵思ふに世人父祖の千辛萬苦にて蓄し財とはおもひとらず、却て父母の家法はむかし風にて今にあはずなどゝ譏り、わが身父祖の恩にて安逸に習しくせにて金銀をちりあくたの如く用ひつくす、他人も金銀のある間は莫逆の交をなしぬれども、金銀つきれば交うとくなり斷金の契もいつしかにへだゝり、はじめて金銀のたつとき事を知といへども、後悔益なく貧苦に身終る人多し、しかれば人の父母となりては世中の艱難を子によくしらしめ、安逸に馴ざるやうに敎へみちびくべし、貨財をゆづらんとならばまづ用財の法をゆづるべし、子たらん人も恐れ愼て、父祖の家法をかろ〳〵しく轉じかゆる事なかれ

一　晋文公問二於郭偃一曰、始也吾以レ國爲レ易、今也難、對曰、君以爲レ易其難也將レ至矣、君以爲レ難其易將レ至矣、此こゝろは文公始め國を治る事易しと思ひ給はゞ、國治らず難儀なる事いできなん、もし治めがたき事をさとりて心をよく用ひ給はゞ、治る事やすくなりなんとの意なり、一家を治るも亦しかり、子たる者父祖の恩にて成長し、飢寒のうれひもなく居所やすきを、いつもかくの如きものとおもひ、慾にまかせて財を用ひ、財をたもつ事のかたきをしらざる人は、その艱難なる事のいたらん事、郭偃

がことばの如くなるべし、是は國語の内晋語に見えたり

一　靈過章華の臺をつくり伍擧といふ臣とともに登り、臺美なるかなとほめられしに、伍擧云けるは國の君として賢人を愛し民を安んずるを樂みとし、德ある人の言を聽用るを以て聰とし、遠き所の人までもよくなつくるを以て明とす、其臺の高く楹の彩どり桷の刻みちりばめたるを美となす事を聞ず、今君此臺を作り國民つかれ用つき、年穀やぶれ百官わづらはしく國擧て是をさめ、數年にしてすなはち成る、目において見るときは美なれども、是民の利をあつめて以てみづから封じて、瘠民也胡ぞ是を美とせんやとの忠諫國語の楚語に見えたり

一　豫州大洲の中町といふ所に佐野傳四郎宗壽といふ商人あり、此人若年の頃は家もなく僕一人だになきほどの貧者なりしが、大志ありて日夜家業に辛勤して漸に家とみさかえ、且つ忠信の行ひありて城主より扶持米を賜ひ、氏をも名のり老境ゆたかに終りぬ、此人予にかたりしは親骨折て子樂孫乞食と心得、かならず奢をいましめ儉約を行ふべしと丁寧に教を施せしなり、予世間を見るに佐野翁が言にたがはず甚しきは孫まではのべひかず子乞食も世に多し、いやしき諺にしあれど人に益すくなからぬ言葉にて、言行そろひたる人のをしへなればかきしるしぬ

一　中流に舟をうしなひて一瓠も千金なる事を知といへり、物ごとにくるしみの甚しきをうけざれば其苦を救ふ物のたつとき事をしりがたきものか、こゝに享保十七年壬子夏の末より、國々に稲むしの災

あまねふして、青々たる秔稻一句ばかりの間にこと〴〵く枯くちぬ、西北の州々此災およばずといふ所なし、此故に米穀日々に乏く萬民荐に饑に向とす、こゝに於て人ごとに穀物のたつとく一飯だも容易うけ得がたきことわりを知る、しかはあれどわが君の仁澤にうるほひ諸民飢餓の災をまぬかれ、今歳豐穰の樂を得る事此さいわい大なるかな、然りといへども去年の患難を忘れず、鄕里頗る儉約を行ふに志あり、予貧窮の家にひととなり鄙細の事を知しを以ての故に、親戚朋友予をして財用の事を考へはからしむ、ひそかに思ふ人の貧窮に苦むや、其本こゝろばせのためにやぶれをうくるものなりと、此故に財の有無數量の事を後にし、かならずまづ告るにこゝろばせを誠にする事を以てすといへども、不肖者の迂言これを信ずる事すくなき事、實にむべなるかな、こゝに同志の人告ていへらく、ことしまさにつきんとし臘月たゞ一旬を殘せり、汝とけがたき言を以ていとながくくりかへさむとせば日もまたゝらじ、筆のつたなきに恥ず、ことのはしげくともかきあつめ見ば可ならんと、此故にみだりに所思を毫端にあらはし侍りぬ

尚儉撮要跋

傳曰、人之有德慧術智者、恒存乎疢疾、子和戸田君斯其人乎、其爲人也淑質慈厚、材技廣宜、御家勤儉、處已清愼、始少也貧、故世之艱苦備嘗之矣、人之情僞盡知之矣、已而博達於事理、左右其宜、而家且頗富、其於爲人可謂成矣、非如窮阨之士、僥倖得志於一時、夸耀之比也、乃者退公之暇、著尚儉撮要一篇、余熟閱之、生財之道備矣、克救世俗之弊、殆砭愚夫之病、抑亦修身齊家之一端耳、豈可忽乎、豈可忽乎

享保癸丑臘月下浣

鳳山玄之書

重刊尚儉撮要跋

夫儉之爲德也、神禹所勤、宣尼所不間然、無以尚焉、雖然、惟儉是尚、則土階三級、墨子之說、但恐使斯民陋且貧乎、或亦惟貴貨、務以收歛、出納吝嗇、豈其儉乎、雖有周公之美、夫子不取、故節之以制

度、則不傷財、不害民、而厚生利用、各得其所也、其是之謂居禮行儉也、若夫蠢愚之民、恒產資生、亦復不給、而無儉節之教、則俗弊所致、耳目所慣、奢侈相競、踰等失分、覬覦僭上之極、不知所以自斃也、亦不悲哉、琴山戶田先生、深憫時俗習弊、嘗撮先王儉節之遺訓、以述日用彝倫之要旨、其志亦偉哉、將有補于世敎、刊行未幾、惜乎、斯書罹于壬辰之災、以烏有矣、先生雖既沒、猶有嗣子在、號鏡湖、亦能脩家學、而彌濟美、君常憾其湮滅、謀余以再鐫之事、余曰、夫繼父之緒、以成其志、可不謂孝乎、知苟有益于世、而行之、可不謂惠乎、其孝而惠、亦何不勤、遂題數語於卷尾、以授剞劂云

維時天明七年丁未冬十一月

役氏末學源照明存甫書于三光堂

尙儉撮要卷之下 終

算家或問

會田安明著

算家或問

會田安明著

或問曰　本邦古升今升ト云コト有リ、如何

答曰　前章ニ云ゴトク、日本升ノ制國史ニ不レ詳、故其由來ヲシラズ、古來ヨリ有處ノ升ハ、口ノ方五寸深二寸五分、其積六十二歩半、コレヲ古升ト云、今升ハ口ノ方四寸九分、深二寸七分、其積六十四歩八二七ナリ、俗間ニ云傳フ豐臣秀吉公ノ命ニ依テ、宮部善乘坊ノ作ル處ト云、如レ此ツクリナヲサレタルハ、年貢ノ取リカヲ高クセントスレバ、百姓ノ肯ンゼザルヲ憂テ、口ノ廣サヲ一分ヅヽ縮メ、其二分ヲ深サヘ繼タスマデニテ、升ノ恰好ヨシト欺キタルモノナリト、然レドモ實錄ヲ見ザレバ、其眞僞ヲシラザルナリ

又問曰　今用ル處ノ一人扶持、國々所々ニヨツテ不同アレドモ、大略五合トタツルハ、イツノコロヨリニヤ

答曰　軍中又ハ所々ノ作法ニテ、一升或八合六合等ノ品々アレドモ、平常ノ一人扶持、通用五合トタツルハ、コレ又秀吉公ノ時ヨリト云、同宮部ノ定メラレシト云、六尺五寸四方ヲ一坪ト云、其一坪ニ大體籾一升ト心得、是ヲ米ニシテ凡五合ナリ、コレヲ朝夕ノ食ト定メ、一年ニ三百六十坪近キ地ヲ費ス、此

ヲ思ヘバ徒ニ我身ノ榮耀ヲ窮ムベカラズ

又問　本邦行程ノ里法三十六町ヲ以テシ、或五十町ヲ以テス、其由如何ン

答曰　今三十六町ヲ一里トシ、又ハ五十町ヲ一里トスルコト國史ニ見エザレバ、何レノ比ヨリスルヲ不レ詳ナリ、拾芥抄ニ、「一段爲ニ一町頭一、十段爲ニ一町積一、卅六町爲ニ一里一、三十六里爲ニ一條一、又云、條起レ從レ北行ニ於南一、（限ニ卅六條一）里起レ西行ニ於東一、（限ニ卅六條一）町始レ艮終レ乾（但已上可レ隨ニ國例一）」トアレドモ、田地ノ積リ方、一町ノ田ヲ三十六並ベタルヲ云、路程ノコトニ非ズ、今ノ卅六町四方ノ處ヲ、西ヨリ算ヘ始メテ一里二里ト云、毎一里方一町ノモノ卅六箇有リ、然バ幅一町ニ長サ三十六町ナリ、又此ヲ北ヨリ算ヘ出シテ一條二條ト云、毎一條ニ又方一町ノモノ卅六箇有リ、幅一町ニ長サ卅六町ナリト云、條ト云縱横ノ別ナリ、古ヘ田地ヲ分ツノ定法ト見エタリ、中華ノ所謂井田ノ名目ノ如シ、今尙鄕村ノ名ニ東條西條等殘レリ、中古以來廢絶セリ、今時卅六町ヲ一里トシ、又五十町ヲ一里トスルハ、是等ノ事ヨリ轉ズルナルベシ、五十町ヲ一里トスルハ、戸例ヨリ轉ズルト見エタリ、何レモ轉ズルコト國史ニ見エズ、本邦ノ里ニ三品アリ、戸令ニ、「以ニ五十戸一爲ニ一里一、」此ハ土地ノ廣狹ニ構ハズ、家數ヲ以テ一在所ヲ立ルノ名ナリ、雜令ニ、「凡三百歩爲ニ一里一、」此ハ路程ノ法ナリ三十六町ヲ爲ニ一里一、此ハ先ニ云フ如ク田地ノ積リナリ、本朝路程歩里、古ノ制ハ中華ニ相準ズ、尺ノ長短ハ變リ有ドモ大樣其法同ジ、此レ唐制ニ本クガ故ナリ、文武令云、「凡度レ地五尺爲レ歩、三百歩爲レ里」ト、今六尺ヲ一間トシ、六十間ヲ一町ト

スルヨリ見レバ、古ノ一里今ノ五町ニ足ラズ、然モ古ハ中華ノ制ニ準ジテ量地ノ尺ヲ異ニス、今ノ吳服尺ト云ノ長サナリ、故ニ曲尺六尺ハ、量地尺ノ五尺ナリ、名ハ異ニシテ長サハ同ジ、和俗云、漢土ハ六町一里ト云フハ無キコトナリ、本朝ノ古里ヲ以テ云、又ハ三百六十歩ト云ニヨリ、六十歩ヲ一町ト覺テカク云リ、本邦古ノ制、度量權衡トモニ唐制ニ準ジテ、大尺、小尺、大量、小量、大兩、小兩ヲ立ラレシコトハ、文武令ニ詳ニ見エタリ

又問　漢土ニハ三百六十歩ヲ爲ニ一畝、畝百ヲ爲レ頃、其制ノ世代ニ同ジカラザルハ已ニ聞ヌ、本邦曲尺六尺四方、或ハ六尺五寸四方ヲ一歩トシ、（今云一坪）三百坪ヲ爲ニ一段一、（古制三百六十坪）三千坪爲ニ一町一、異國モ亦田地ニ段町ノ名有ヤ、如何

答曰　本朝古ノ制ハ三百六十坪ヲ以テ一段トスル、一町三千六百坪ナリ、今世三百坪ヲ以テ一段トスル者ナリ、日本紀ニ云、「孝德天皇三年春、班田既訖、凡田長三十歩爲レ段、十段爲レ町」、又文武令云、「凡田長三十歩、廣十二歩爲レ段、十段爲レ町、」古ハ五尺ヲ一歩トシ、今六尺ヲ一歩トスルノ異同アリ、然モ先ニ云フ如ク、長サハ相等シキナリ、日本ノ歩（今段）段、（今反）町ハ唐ノ歩、畝、頃ニ準ズ、田地ニ段町ト云コト、異國ノ法ニ其名目ナシ、然モ一シキリヲ段ト云フコトハ、後世マデモ多ク見エタリ、田地ニ町名ヲ付ルコトハ遂ニ見エズ、左傳襄公二十五年ニ、「楚蔿掩爲ニ司馬一云々、町ニ原防一、牧ニ隰皐一、井ニ衍沃一、量レ入脩レ賦一」ト、杜註ニ、「廣平曰、原防隄也、隄防間地、不レ得ニ方正一、如ニ井田一、別爲ニ小頃町一」〇隰皐水涯下隰、爲ニ芻

牧之地、〇衍沃平美之地、則如ニ周禮制一、以爲井田六尺爲レ歩、々百爲レ畝、々百爲レ夫、九夫爲レ井、〇量ニ九士之所レ入、而治ニ理其賦税一云々、賈逵曰、原防之地九夫爲レ町、三町而當ニ一井一也ト、本朝ノ町段ノ名モ是レヨリ出ルナルベシ、字書町ノ字ヲ解シテ云、田區ノ畔埒ナリト、田地ノシキリヲ云、段モ町モ各一シキリト云フ義ナリ、又一段ノ十分一ヲ一畝ト云ハ、何ノ頃ヨリ始ルヲ知ラズ、國史ニ其文ナシ、拾芥抄ニ載ル處、令ノ文ト異ルコト無シ、其内令ニハ五尺四方ヲ歩ト云　抄ニハ六尺四方ヲ歩トスルノ別アレドモ、令ハ五尺ニテ唐制ニ準ズルナリ、是又同長サナリ、抄ニ云、積七十二歩爲ニ十代一、然レバ古ノ詞ニ十代田ト云ハ、今ノ二畝バカリノコトナリ、又段ノ字今ハ反ノ字ヲ用ユ、是ハ段ノ字草書ニシテ反ニ似タルユヱ、傳訛シテ如レ此

又問　古ハ武士ノ所領千貫、或ハ百貫ト云フ、如レ今幾千石幾百石ト云フコトナシ、今幾何ニ當ルヤ

答曰　此事徂徠ノ鈐錄ニ見エタリ、曰、大名ノ身上ヲ幾十萬石ト云ヒ、平士ノ身上ヲ幾百石ト云フコト古法ニ非ズ、大形信長秀吉ノ時ヨリ起ルト見エタリ、古ノ領地ノ書物ヲ見ルニ何郡何鄉何村ニテ幾十町、幾百町抔トアッテ石高ナシ、武士ノ知行ヲ幾十貫幾百貫ト云モ、當時百姓ノ詞ニ殘レリ、田一坪ニ苗一把種ルコトニテ、是ヲ一貫目ト云フ、此積リニテ、大抵十貫ハ百石、百貫ハ千石ニ當ルト云リ、本朝今ノ制三百坪ヲ以テ一反トシ、三千坪ヲ以テ一町トス、水帳ノ石高ハ所々ニ依テ不同アリト云ヘドモ、大略一反ヲ一石五斗、或ハ一石六斗一石三斗トス、然レバ百坪ノ高大凡五斗也、右所謂

十貫ハ一萬坪也、乘ニ五斗ヲ得ニ五十石ハ、コレヲ以テ思ヘバ、千貫ハ五千石、百貫ハ五百石、十貫ハ五十石ナルベキカ

又問フ　知行方ノ事其納方ノ事、如何

答曰　千石萬石ニテモ、何ノ國何ノ郡何ノ村何石何斗何升及ビ何勺、カクノ如ク其一邑〳〵ノ高ヲ擧テ、幾村ニテ何千石トス、此内ニ田アリ畑アリ、押シマルメテ高ニ結ブ、其田ニ上中下下々ノ四段アリ、畑モ同ジ、扨何石何程ノ一村ノ中ニ、田一處〳〵皆名ヲ付テ、一處〳〵ノ其石高アリ、是ヲモリト云フ、其名ヲ字ト云フ、國主ト雖ドモ、其名其石高ヲバ、心ノ儘ニ改ルコト叶ハズ、一國ノ高マセバ日本ノ高モマス故ナリ、然モ近世ノ打出シ、或ハ新田等ハ格外ノコトナリ、如此ノ定メノ古ヨリ大帳アリ、是ヲ水帳トテ、其處ノ庄屋ニ預リ置クナリ、是ヲ以テ知行ノ高程米ヲ取ルニ非ズ、其取ル處ノ定ヲ取リカト云フ、トリカ三ツ八分二厘三毛ナド云ハ、右ノモリ一石ノ高ナレバ、三斗八升二合三勺トルコトナリ、籾ニテ納レバ、此ノ倍數ヲ納ム、其トリ集タル米ヲ現米トモ取米トモ云フ、一石ノモリノ田ニテ一石トルヲスクミト云フ、若一石一斗取ヲメン十一ト云フ、併シ其如ノ田ハ少シ、上田ハ面高ク米ヲ多ク取ル、下田下々田ハ面ヒキク少ク取ル、然レバ上田ノ多ハ領主ノ益ナリ、下田多ハ損ナリ、畑年貢ハ關東ニテハ、永納トテ金ニテ取ル、民ノ家居ノ分モ、屋舖年貢トテ永納ニシテ、而モ畑年貢ヨリ高ク取ル、其外込高、越石、落石、田成畑ノコト、或ハ檢地川普請等ハ、勸農固本錄ニ出ヅ、故

ニ略レ之

又問　今世ニ一尋ト云コト五尺トシテ通用ス、是レ如何

答曰　度量衡考云、一人長八尺一歩、亦八尺一尋、亦八尺、伸ニ兩手一左右指レ之、自ニ左指尖一至ニ右指尖一是爲ニ一尋一、廣ニ張兩足一極ニ其所一至、是爲ニ一歩一、與ニ人長一等」ト、此ノ八尺ハ周尺ナリ、今ノ五尺七寸五分餘ニ當ル、人長モ一尋モ一歩モ各均キモノナレバ、各此數ヲ以テ大法トス、然モ今世ノ俗其端數ヲ去テ、五尺ヲ通用シテ一尋トスルモノナリ、人々ノ一尋ハ、其長短ニ依テ各々不レ同ルナリ

又問　大工ノ曲尺ニ裏矩ト云ハ、如何ナルモノニヤ

答曰　曲尺一尺四方ノモノヽ角ヨリ角マデ、斜尺一尺四寸一分四厘二毛餘アルモノナリ、然ルニ表ノ方ニハ常ニ用ルカネザシノ分寸ヲ盛付、裡ノ方ニハ一尺四寸一四二ヲ、一尺ノサシノ如ク十ニ割リ、其一寸ノ内一分ノ如ク刻ヲ付タルモノヲ裡ガネト云フ、其故長サ一尺四寸三四分アルナリ、假令バ徑九寸ノ丸木アルヲ角物ニセバ、何寸角ニナルト云フニ、尋常ノ番匠算術ヲ知ラネバ、表ノ曲尺八寸ニ當ル處ニ、裡矩ノ寸ヲ見レバ五寸六分ニ當ル、故ニ五寸六分角トナル、又三寸角ハ丸木ニテ幾寸ト云フニ、裡矩三寸ナル表ノ曲尺四寸二分ナル故、是ヲ丸木ノ徑トス、凡テ斜角ニカヽルコトヲ積ルモノナリ

又問　四方四神ハ建都築城ニ專ラトス、此事如何

答曰　蒼龍、朱雀、白虎、玄武ヲ四方神ト云、四方ニ配ス、實ニ鬼神ノ象アリト思フハ誤リナリ、元ト

二十八宿ノ星像ナレバ、角、亢、氐、房、心、尾、箕ノ七宿ハ、東方配當ノ星ニシテ、其並ビ樣龍ノ如シ、斗、牛、女、虛、危、室、壁ノ七宿ハ、北方ノ配當ニシテ、其並樣蛇ノ龜ヲマトフガ如シ、奎、婁、胃、昴、畢、觜、參ノ七宿ハ西方ニシテ、虎ノ形ノ如シ、井、鬼、柳、星、張、翼、軫ハ南方ニシテ、短尾ノ鳥ノ如シ、故ニ雀トス、蒼、朱、白、玄ハ四方ノ色ニ配ス、史記、天官書、爾雅等ニ出ヅ、今其象ヲ見ルニ、蒼龍ハ房、心、尾ノ三座、武玄ハ虛、危、白虎ハ觜、心、朱雀ハ柳、星、張ノ三座ナリ、王者ハ天ニ體スルナレバ、此紋ヲ書キテ用ルナリ

問曰　九六錢ノコト、其説ヲ聞ン

答曰　錢ニ省ヲ用ルコト、東涯曰、南朝ノ頃ヨリ始ル、梁ノ武帝ノ時ニ銅錢ヲ罷テ、更ニ鐵錢ヲ鑄ル、依之鐵錢ハ得易ク、多ク私鑄ヲナス、大同以後愈多クシテ物價騰貴セリ、東錢ハ八十ヲ陌トシ、西錢ハ七十ヲ百トシ、京師ハ九十ヲ佰トシテ、是ヲ長錢ト云、其後詔シテ通ジテ足百ヲ用ラレタレドモ、人從ハズ、末年ニハ三十五文ヲ以テ百トス、是ヨリ後隋ノ世、又唐全盛ノ時此事聞エズ、憲宗ノ世ニナリテ、錢少キヲ以テ飛錢ノコト起ル、元和四年ヨリ京師通用ノ錢、每緡ニ二十ヲ缺グ、穆宗ノ世ニ至テ、京ニテ金銀ヲヒサグニモ、十兩ニ一兩ヲ墊ス、米鹽ヲ買ニハ、百錢ニ七八ヲ墊ス、內外ノ通用遂ニ八十ヲ以テ百トス、是ヲ墊陌ト云フ、其後五代唐ノ時ハ、八十ヲ百トス、是ヲ短陌短錢ト云フ、漢ノ隱帝ノ時ニハ、入ルモノ八十、出ルモノ七十七、是ヲ省陌ト云、宋ノ世モ國初ニハ五代ノ制

ニ因リ、八十又ハ八十五ヲ百トシ、又四十八錢ヲ百トスルコトアリ、太祖ノ乾徳五年ヨリ七十六ヲ以テ百トス、省百ヲ除百トモ、折百トモ云ト云々、和事始曰、人王百六代後奈良院天文年中、上杉憲政ノ臣長尾意玄此ヲ制セシヨリ始ル、其事ニ曰、敵國ニ入リ町人地下人逃散リテ其所ニ居ラザランニハ、中間ドモ少ノ物ヲモ買フベキヨウナシ、然レバ取リ鎮ラネバ代物ハ遣レザルナリ、豐カナル世ニハ、闕滿アルコト長久ノ政ニナレバ、代物ヲ九十六錢ニシテ、四錢ヅヽ缺ギテ然ルベシ、其上三十二錢ヅツ三ツニ分ケ、又三十二ヲ四ニ分レバ八錢ニナル、如ㇾ此ナレバ遣イ易シトテ定タリトナリ、本朝天文曰、太陽冬至ニ赤道ヲ南ニ去ルコト二十四度、夏至ニハ北ニ去ルコト二十四度、南北四十八度、往來九十六度ナリ、依テ此レニ象ドリテ九六ヲ省百トシ、名ケテ御足ト云フ、一說ニ、九六陰陽ノ極數ナリ、物極レバ必ズ變ズ、交易交通ノ義ニ取ルト、兩說共ニ附會ノ言ニシテ信ジ難シ、千文ヲ貫ト云フハ、字義ニヨリテ云フナラン、註ニ、「以ㇾ緡穿ㇾ錢曰ㇾ貫」トアリ

問曰　一貫文ヲ百疋ト云フハ如何、其說ヲ語レ

答曰　此事ハ俗間ノ習ハシト見エタリ、諺ニ曰、錢ヲ鑄ル時若干文ニ駒牽ヲ入ル、此割ヨリ出ル名ナリト、又建久文治ノ頃、右大將頼朝數々狩ヲ好ム、其令ニ、畜一疋ヲ捕モノニハ錢十文ヲ賞シ、百疋ヲ捕ルモノニハ一貫文ヲ賞セント、當時此ノ言ヲ以テ一貫ヲ以テ百疋ト云フト、其是非ヲ知ラズ

又問　金銀ノ通用ハ、和漢如何ナル事ニヤ

答曰　上世ハサテオキ、漢書食貨志ニ、黄金一斤直二萬錢一、朱提銀重八兩爲二一流一、直一千五百八十一ト、朱提ハ銀ヲ出ス縣ノ名ナリ、爾後銅錢ヲ通用セシト見エタリ、諸書ニ金銀ヲ用ルコト無シ、然レバ銅錢ヲ通用セシト見エタリ、元明ノ世ニ至リテ寶鈔アレバ、金、銀、錢、鈔四ノモノ其價相通用ス、又明ニハ租税等一切銀ヲ納ム、於レ是銀始テ世ニ重シ、張習孔ガ雲谷臥餘ニ、前古之通用者、大率以二金銀一金銀之見二于載籍一者、始二于禹貢一、錢制者始二于太公一、正是貨財中之一種耳、不二常用一也、自二漢鑄一レ錢以通二百貨一、數千年來、皆是用レ錢、金銀雖二亦行一二于世一、然國課二物價一、不下以レ之爲上レ準、至レ明租税權贖、一槩徵レ銀、々始重二于天下一、百物皆取レ銀爲レ準矣一トアレバ、秦漢マデハ金銀ヲ通用スレドモ、夫ヨリ後ハ銅錢ヲ用ルト見エタリ、而漢ハ錢ヲ以テ準トシテ、金銀共ニ價幾錢ト云フ、明ニハ銀ヲ以テ準トシテ、百物共ニ價銀幾兩幾錢ト云フ、古今ノ變知ルベシ、其朱提云々、八兩云々ナルモノ、今世ノ掉金ト云フモノヽ如クナラン、而今ノ二十四匁弱ナリ、今ノ丁銀ヨリハ小ニシテ、其制ハ似タルモノナラン、今云極印タルモノモ、當時ノ制アルベキコトナリ、扨日本ノ銀有ルハ、四十代天武天皇ノ二年三月七日ニ對馬ノ國司忍ノ海造大國、初テ當國ヨリ銀ノ出ルヲ奏シテ銀ヲ貢ス、依レ之小錦下ト云フ位ヲ授ケ、銀ヲ神社ニ奉リ、亦小錦下ノ大夫ニモ賜フトアリ、朝野群載ニ、二十四代顯宗ノ時銀錢ノ通用アレバ、國史ノ闕文ナルベシ、元明廢帝ヨリ後ハ、専ラ銅錢ニシテ、銀錢ノコト聞エズ、應仁文明ノ比ハ亂世ナレバニヤ、將軍錢貨ヲ異國ニ請フテ民ヲ利スルコトナレバ、金銀共形ヲ制シ用ルコトアランヤ、文祿慶長

ノ頃ヨリシテ、世モ靜謐ニナリシカバ、板銀菽板等ノ形ヲ鑄ル、其局官ノ極印大黒常是等アルヲ、今ニ至リテ改メズ、其初ハ秀吉公ヨリス、爾後慶長年中ニ金銀ヲ鑄テ、元祿マデ凡百年計通用ス、元祿八年ニ新銀ヲ鑄ル、元字ノ極印アリ、世人此ヲ元字銀ト云フ、寶永年中ニ新銀ヲ鑄テ寶字ヲウツ、此ヲ二ツ寶ト云フ、相繼デ又鑄ル、此ヲ中銀ト云、同ク七年ニ又鑄ルヲ三ツ寶ト云、其年五月ニ又鑄ルヲ四ツ寶ト云フ、正德年ニ新銀ヲ鑄ル、今云古銀ナリ、元文ニ新銀ヲ鑄ル、文字ノ極印アリ、慶長ノ金銀共ニ其制ヲ知ラズ、然レドモ其初ハ極印ヲ打タズ掉ガネノ如クニシテ切リ遣フト見エタリ、尾州ヨリ掘リ出セシヲ見ルニ、左ニ云フガ如シ、今猶持傳ヘテ有リ、重ハ四十四五匁ノ前後ナリ、又米判ト云フアリ、表ニ米判ト極印アリ、裡ハ石目ナリ、米一俵ニ易ヘシト云フ、重ハ十四五匁ナリ、却テ説ク金ハ續日本紀曰「四十五代聖武天皇天平二十一年二月、陸奥國守從五位上百濟王敬福、始貢二黄金一、奉幣以告二畿內七道諸社一」ト、「詔曰、此大和國天地開闢以來、有レ獻二黄金於外國一、然斯地曾無者也」ト、我國ノ黄金ヲ掘出セシハ此ヲ始トス、萬葉集ニ天平勝寶元年（天平二十一年四月改元）五月、越中國守ノ舘ニテ、大伴宿禰家持賀ノ題ニ、「スメロギノ御代榮ント東ナル陸奥山ニ黄金ハナサク」ト、錢ニ鑄テ通用セシハ、廢帝ノ開基勝寶ノミ、然ドモ其形チノコト見エズ、三十四代推古天皇ノ時、高麗ヨリ黄金ヲ貢セシコトアリ、文武天皇ノ大寶元年三月對馬國ヨリ金ヲ貢スル故ニ大寶ト改元ストアリ、安元々年平重盛、宋ノ育王山ヘ黄金三千兩ヲ渡スコトアリ、此レハ斤兩ノ兩ニシテ、形ヲ鑄テ重サヲ極メシ物ニ非ズ、

當時ノ金ニスレバ一萬餘兩ナルベシ、金ノ制モ銀ト同ク慶長文祿ノ比ヨリ始ル、今ノ慶長金ト云フハ、諸人ノ知ル如ク直圓ニシテ、竪二寸四分横一寸二分ナリ、步判アリ、四分ヲ兩トス、桐ノ紋ハ秀吉ノ紋ナリ、扇形ハ光次ノ其局官タレバ記號ナリ、今ニ至ル迄不レ改レ之、元祿八年新ニ鑄ル、元ノ字ヲ打ツ、此ヲ元ノ字金ト云フ、大抵百九十餘兩ヲ以テ慶長ノ百兩ニ當ツ、同ク十年二朱判ヲ鑄ル、寶永七年五月新ニ鑄ル、乾ノ字ヲ打ツ、此ヲ乾金ト云フ、重サ二匁五分、慶長元祿ハ各重サ四匁七分ナリ、正德四年十二月新金ヲ鑄ル、重サ四匁七分六厘、此ヲ古金ト云フ、元文元年五月今ノ新金ヲ鑄ル、重サ三匁五分、文ノ字ヲ打ツ、此ヲ文金ト云、又大判アリ、小判拾兩ナリ、然ドモ其時々ノ相當不同アレバ、此ヲ判金ト云フ、後藤墨ヲ以書付アリ、大略和漢古今金銀ノ通用有增如レ此、然ドモ此末又々如何アラン

問曰　四分ヲ一兩トシ、一分ヲ百疋ト云フハ、何等ノ事ゾ

答曰　古昔ヨリ二十四銖ヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トス、秦ハ十六銖ヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トス、漢又同ジ、宋以來明迄サノミカハルコトナシ、其內後世ニ一金ト云フハ、上代漢ノ時代ニ一金ト云フト大ニ同ジカラス、方密之ガ通雅ニ曰、「古一金、以二一斤一制レ幣、雖レ未三必實重二一斤一、然定有二常形一、如二今之錠一、又曰、後世分兩漸改、錠有二大小一相沿、遂以二一兩一爲二一金一矣」トアレバ、古ノ一金ハ一斤ノ重サナリ、後ノ一金ハ一兩ナリ、十匁十厘「本朝之制、凡權衡二十四銖爲レ兩、三兩爲二大兩一兩一、十六兩爲レ斤一

ト文武令ニ載タレバ、全ク唐ノ法ニ因ル、六銖ヲ一分トシ、四分ヲ一兩トスルコト和漢同ジ、只秦ハ四銖ヲ一分トシ、四分ヲ兩トス、然ドモ日本近來金ノ制四銖ヲ一分トシ、一分ヲ兩トス、銀ハ四錢三分ヲ以テ兩トス、又金ハ四匁七分ヲ以テ一兩トスルコトハ、其初金銀各其顏色ノ分數ヨリ立タル一兩ノ重サニシテ、銖（今制銖判ナシ）分、兩ノ名同ク、其輕重時制ニ依テ變ズルナリ、銀ノ如キハ錠銀藪板等其形大小不レ同レバ、銀ヲ鑄ルニ兩ノ重ニ拘ルコトナシ、故ニ四分ヲ兩トスルコトモ無シ、錠銀一枚ヲ十兩トスルノ心ナリ、故ニ一枚ノ名アリ、銀ノ形輕重定率ナキ故、是ヲ秤テ其兩其枚ニ適シテ用レ之、故ニ兩ノ重サヲ改メ制スルコトナリ、今ニ至リテ用ルナリ、又一分ヲ百疋ト云フハ、錢一貫ヲ百疋ト云ヨリ出タルナリ、國初元和年中、小判一兩ニ錢四貫文タルベク、寛永十三年ニモ亦右ノ法度ヲ立ラレタリ、故ニ如レ此仕來リシナリ

問曰　銀ニ一匁一貫目等ノ字ヲ云フコト、如何

答曰　唐ヨリ已前ニ一兩ノ小割ヲ銖ト云テ、錢ト云コトナシ、開元錢十文ヲ一兩ノ重ニ定メテ、金銀ノ量目ニ、銅錢一文ノ重ニ當ルヲ一錢トス、然レバ量目ニ一錢ト云フハ、開元ヨリ起ルコトニテ、唐ノ以前ニハ無キコトナリ、唐ノ太宗魏徴等ノ相タルトキニ、斗米三四錢ト云フハ、只銅錢三四文ノコトナリ、其後宋ノ時ヨリ金銀ヲ幾錢ト云フ、文目ト云フ、漢土ニハナキコトナリ、此方ノ制ハ唐ヲ學ビタレバ、重サ一文ノ重サノ目ニ當ルト云フコトナリ、一貫目モ同ジ、銅錢ノ一貫文ノ目ニ當ルト云

フ義ナリ、匁ノ字ハ海篇ニ「錢俗作レ匁」トアレバ、世俗字ノ書キ易ニ隨ヒ用ヒ來リシナリ

問曰　錢ノコトハ諸書ニ多見エタレバ、聽モ可ナリ、聽ヌモ可ナリ、札ト云フモノハ、漢土ニモ有ルコトニヤ

答曰　文獻通考ニ云、「憲宗以二錢少一、復禁下用二銅器一、時商估至二京師一、委二錢諸路進奏院、及諸軍諸使富家一、以二輕裝一趨二四方一、合レ券乃取レ之、號二飛錢一云々、」進奏院トハ、諸國ノ守護ノ京ヤシキヲ云、此レ今ノ爲レ替ノ祖ナリ、此レヨリ轉ジ來リ、金元ニ至リテ交鈔ト云起ル、此則札ナリ、其名世々ニ變リハアレドモ事同ジ、交子、會子、關子、關會、寶鈔等皆札遣ノコトナリ、朝鮮ニハ楮貨ト云、（攷事撮要ニ見エタリ）元ノ世祖ノ時ニ、中統元寶鈔至元寶鈔アリ、通寶ノ寶ヲ取リテ寶鈔ト云フナレバ、銀札ヲ銀鈔ト云フニ同ジ、和漢共ニ札遣ハ諸民ノ嫌フコトナレバ、年久シク行ヘバ物重クシテ鈔輕シナド云フコトアレバ、宜シキ所ニ非ズト知ルベシ、錢ハ和漢共ニ其談多シ、他日ヲ以テ此ヲ語ン

算家或問　終

數度宵談

西村遠里著

數度霄談序

夫文道之所ニ由以顯一者也、然過則反害ニ於道一、先王之敎、假レ文以明レ道、其賢者由焉、而以造ニ於德一、其不賢者資焉、而以造ニ於藝一、是故先王之秩士德成而上、藝成而下、而藝亦有レ類ニ乎是一、夫數六之一也、九章盡矣、而入猶競ニ於時一、於レ是乎或萬ニ分秋毫一、而又萬ニ其萬一、不レ可レ謂ニ之非下巧也、然而如ニ過レ巧之不レ中レ用何一、西村君之言ニ數也、恥レ言一其不下中レ用、蓋嘗以謂、人聞ニ夫數一、所レ用之物、是以與レ實相違也、其居常所レ言、先舉ニ其物一、霄談所レ書者、即是也、余讀ニ霄談一、於ニ田制鑄幣、及度量衡歷代沿革一詳哉、其言レ之也、苟能熟レ之、亦可三以爲ニ練故之士一、豈啻數術而已哉、而予則有レ感乎、夫藝與レ道類、乃作ニ之敘一

安永戊戌冬十一月　　平安　皆川愿書

數度霄談卷上

數ノ濫觴ノ話

數學算學ノ話

數度宵談卷上

華洛　西村遠里　著

中秋月ノ明朗タル夜、水之長杉知一ノ兩友ト相トモニ茗ヲ煮テ、吾ノミナラヌ秋ノ哀シサモ、虫ノ聲

ノ鄙々タルニナヲマサリテ、實ヤ他郷ニ在マシカバ、如何許リ古郷ノ戀シカラメト、李白ガ詩モ更ニ思ハルヽナドウチ物語ルニ、杉知一曰、著往寒來リ、何事ヲ爲コトモナク、ムナシク白頭ニイタランコト無爲（アヂキナキ）コトニコソアレト、愚曰、ヨシソレトテモ命ナリ、蜻蛉ノ一日モ、彭祖ガ七百歳モ、歸根復命ハ相同ジク、其長短ハ數ナリ、人事ヲ盡スノ上ハ、歎クトモカヒナカルベキカト、知一曰、足下數學ヲ學ブガ故ニ其言アリ、我輩ラ數學ヲシラズ、命數ヲアキラメンコト難シ、愚曰、嗚呼コレ何ノ謂ゾヤ、命ヲ知ルニ至リテハ、孱夫ノ能及ブ所ニアラズ、大聖ナヲ「五十而知二天命一」況ンヤ斗筲ノ人ヲヤ、愚ガ學ブ所ハ小技算數ノ數ニシテ卑下ノ事ナリ、然レドモ其原々ヲ探レバ、コレ易學ノ數ニシテ聖人說ク所ノ數ナレバ、階梯ニアラズトモ言難シ、水之長曰、數學ニヨル所ノ一二ヲ舉テ二三子コレヲ問ン、閑語ノ慰ミトモナラン、足下コレヲ答ヘヨ、愚曰、開傳フル所ノ事ニ於テハ何ヲカ惜マン、不レ知ニ至リテハ不レ知トセンノミ。二三子慰ミニ思ヒ出ル所ヲトヘ

之長曰　數ノ濫觴如何

愚曰　數爲レ言也源遠シ、夫理アレバ氣アリ、氣アレバ形アリ、形アレバ數アリ、理氣形數ハ離ルベカラズ、老子曰、「無名天地之始、有名萬物之母、」太極ハ理ノ別名ニシテ事理ノ祖ナリ、朱子曰、「太極所以指二天地萬物之根一也、故太一肇判、陰降陽升、陽一以施、陰兩而承、惟皇昊羲、仰觀俯察、奇偶旣陳、兩儀斯設焉、」然ルトキハコレ三才ノ道備リテ、後コノ數ヲ制作シタルニハアラザルナリ

知一曰　數學ト算學ト其學ブ所異ナルカ、又ハ二名ニシテ相同ジキカ、其異別如何

答曰　數學ハ大事ナリ、算學ハ小技ナリ、世人其理ヲシラズ、算士ト云ヘドモ、其異別ナシト思フ者多シ、ソレ數ハ體ニシテ、算ハ用ナリ、「抑數起㆑一、成㆓於十㆒、天地之數也、」今試ニ問曰、「天地之惣數幾何、」答曰、「總數五十五、術曰、列㆓天地之數㆒加㆑一、而以㆓天地之數㆒乘㆑之、而折㆓半之㆒、得㆓五十五㆒、合㆑問也、」惣數ヲ知ラント欲シテ如㆑右、布㆑算コレ算術ナリ、習㆑之コレヲ算學ト云、所謂數起㆑一成㆓於十㆒、ソノ然ル所以ヲ學ブ、コレヲ數學ト云、算ハ藝ニシテ、數ハ藝ニアラズ、六藝ノ尾ニ居ルモノハ、コレ體用ヲ統ルノ謂ナリ、蓋シ天ノ能覆フトコロ、地ノ能載ルトコロ、孰レカ數ニアラズトセンヤ、三才ノ道ミナ數學ノ外ニ出ズ、學徒尙此理ヲ悟ラズ、況衆人乎

之長曰　數學算學其權輿トスル人ハ、何等ノ人ヲイフヤ

答曰　數學ノ祖ハ包義氏ナリ、「仰觀㆓天象㆒、俯察㆓地理㆒、而畫㆓八卦㆒、」生々シテ萬物ノ數備ハル、算學ノ祖ハ黃帝ノ臣頴首ナリ、コレヨリ以來算學ヲ以テ世ニ鳴ルモノ歷代不㆑少、數學ノ隱微ヲ究ムルモノ蓋シ又鮮シ、無㆑佗事ニ偏ニシテ中ヲ失ルノ所以ナリ、豈可㆑不㆑惜乎哉

之長又問曰　何某ハ算學熟スルノ名人ナリト、如㆑此ノ人ハ如何ナル事ヲ會得スルヤ、天文ヲ測リ曆ヲ造リ、七曜ノ運行、日月ノ食ノ如キ、皆算術ヲ以テ考知ルコト實ニナルコトナレドモ、其算術開平方ノ上ニ出デズ、田野ノ檢地、稅務ノ法則、又ハ宮殿ヲ營ミ、城ヲ築クノ類ヒ、商工ノ器財ヲ作リ、賣

買ノ損益ニイタルマデ、算術ヲ知ラザル人モ、其業ヲツトメテ世ヲ渡ルコト、算術熟スル人ト異ナルコトナシ、然レバ算道ノ大要トスル所ハ、何等ノコトヲイフヤ、其説ヲ聞ン

答曰　足下ノ問フ所甚理ニ中レルニ似タリ、世人皆此理ニ惑ヘリ、コレ算道ノ世ニ用ヒラレザル所以ナリ、然レドモ前章ニ云如ク、數ハ自然ノ數ニシテ、三才ノ道コレヲ免ルヽコトナシ、其用タル算道ナレバ、大要ナクンバアルベカラズ、夫レ欽ンデ命ヲ上帝ニ受ケ、百官ヲ率ヰ萬邦ニ莅ミ、萬民ヲ撫育シテ四海ヲ統御スルハ、コレ天子ノ算ナリ、治ニシテ亂ヲ忘レズ、亂ニシテ治ヲ忘レズ、外ニ文事アルトキハ、内必武備ヲ全フシ、外ニ干戈ノ變アルトキハ、内必文德ヲ脩メ、コレガ基本トシ、用ヲ節シテ民ノ時ヲ奪フコトナク、常ニ兵ヲ習ハシ武ヲ講ジ、朝庭ノ干城トナルハ、コレ諸侯ノ算ナリ、士農工商各其家業ニ疎カラズ、倹約ヲ守リ奢リヲ省キ、分限相應ノ樂ミヲ以テ身ヲ養ヒ、日々其業ヲツトメテ家ヲ齊ムルハ、コレ庶人ノ算ナリ、上天文ニ通ジ、下地理ヲ察シ、致レ虚守レ靜、數學ノ玄々ヲ極メ權變ヲ知リ、人事ノ數ニ惑ハズ、數ノ死活ヲ悟ルハ、コレ君子ノ算ナリ、算ヲ以テ己ヲ利センコトヲ欲シ、怪談ヲ以テ人ヲ惑ハシ、譽レヲ求メテ人世ニ迂遠ナルコトヲ好ミ、空理ヲ設ケ手段ヲ爭ヒ、我意ヲ専ラニシテ人ヲ誹リ、書ヲ讀コトヲ欲セズ、故ニ野ニシテ文ナク、算學ノ人ヲシテ劉累ガ徒タラシメ、惜ムベキ口ヲ費ヤシ、進ベキ人ヲ罵スハ、コレ小人ノ算ナリ、足下ノアヤシム所コヽニアタレリ、世上ノ算士ミナ以爲萬物ノ形、萬象ノ理、訂レ之ニ算術ノ外ニ出ベカラズト、故ニ近世術

ヲ巧ニシ、書ヲ以テ理ヲ爭ヒ、名人ナリトスル所ノコトヲ視ルニ、人世用ユルトコロナキ形ヲエガキ、或ハ假ニ言ヲ以テ迂遠ノ理ヲ設ケテ難問ス、答フル者モ、又數百乘方ニノボルノ術ヲナシ、某ノ答ヲ得ル等ノ如キ、譽レトスル所世ニ益ナキノ事ナリ、算道ノ假ニ問ヲ設ケテ導レ之ヤ、蓋シ武藝ニ假ニ形ヲ設ケテ勝負ノ理ヲヲシユルニ似タリ、相鬪フノトキ敵ノ機變シルベカラズ、時ニノゾンデ變化スルニアリ、コレヲ敎ヘント欲スレドモヨル所ナシ、故ニ豫ジメ其理ヲ具フルノ形ヲ設ケテコレヲミチビキ、其理ヲシラシム、算亦同ジ、參差タル萬物其術モマタ萬變ナリ、コノ理ヲシリテ時ニノゾンデ變化センガタメニ、假ニ問ヲ設ケテコレヲ道キ、切礎琢磨ノ種トス、然リトイヘドモ、人世アヅカル所ノ術ニオイテハ、凡カギリアリ、空理ヲ設ケコレヲ問ニイタリテハ、其理カギリナシ、其術モ亦盡キズ、百年ノ壽ヲ終ルトモツクルコトナシ、而シテ修身齊家治國平天下ニ益ナシ、人世アルベカラザルノ理ヲ設ケ、只紙筆上ニ術ヲ爭ヒ、白ヲ論ジ、黑ヲ論ジ、算道ノ大要コヽニアリトシ、夸ルニ六藝ノ尾ニ居ルヲ以テス、國家ニ用ユル所ナキトキハ、何ゾ大要トセンヤ、人事ノ上土地ヲ開キ宮殿ヲ建、器物ヲ制スルニイタルマデ、皆人力ノイタス所ナリ、コレヲ制スルノ原、規矩準繩ノ外ニ出デズ、規矩準繩毫釐ノ差舛ハ、目力ノ能及ブ所ニアラズ、胸股衷分ノ法トイヘドモナヲ然リ、ソレ天ノ覆ヒ地ノ載ル所、皆自然ノ象ナリ、森羅萬象ノヒトシカラザル、算道ノ神人トイヘドモ、能其術ヲ密ナラシムルコトアランヤ、假如今比叡山ノ立積ヲツモリテ、其土ヲ以テ湖水ヲ埋ンニ、其埋ム所ノ坪數、及

山ノ士坪ノ立積ヲ測リ得テ密合ナラシメヨト云バ、大略ハコレヲ知ラン、密合ニ至リテハ、如何ニ術ヲホドコストモ、造化自然ノ形、一尺ノ地ダモ勾配ヒトシカルベカラズ、豈眞數ヲ得ルコトアランヤ、曹元理ガ囷中ノ赤小豆ヲ算シ、又ハ言下ニ洞中ノ水ヲ計リ、樹頭ノ棗ヲ算スルガ如キ、皆庸人ヲ惑ハスノコトナリ、徂徠イヘルコトアリ、「凡算士貴二奇巧一、務二妙解一、是其通病」ト、宜ナル哉、熟和漢古ノ算書ヲ視ルニ、今ノ書ノ如キ無用ノ答論アルコトナシ、近世ノ算士古昔ヨリ堪能ナリト云バカリニハアラズ、今人己ガ能ヲ曜カシ、邪路ニ墮イルノ致ス所ナリ、愈精フシテ愈益ナシ、人事用ル所ノ術、和朝ニテハ、吉田光由ガ塵刧記、或ハ宮城外記ガ和漢算法、唐土ニシテハ、汝思甫ガ算法統宗、朱世傑ガ算學啓蒙等ノ外ニ出デズ、猶熟得スルトキハ餘リ有トス、往々著ハス所ノ算書又不レ少、遂一ニコレヲ擧ンモ無レ由、皆人世ニ迂遠ニシテ、愚ガ尊信セザル意趣ナリ、コレヲ破スルニハアラネド、算道ノ大要トハ思フベカラズ、只慰ミニ其理ノ精シキヲ愛シ、其術ノ巧ミナルヲ翫ハ、又可ナランカ、世上ノ算士小人ノ算ヲ以テ大要トシテ、數學ノ玄々ニ昏ク、體ヲステヽ用ヲ專ラニス、豈不レ惑乎、算學ヲ學バザル人モ皆算ヲツトム、上一人ヨリ下庶人ニ至ルマデ己々ガ分限ヲ計リ、用ヲ節シテ其身ヲ脩ムルハ、コレ算ニアラズシテ何乎、兵書曰、「算二多勝一、算二少負一」コレ所謂己ヲ知リ彼ヲ知リテ廟算スルナリ、夫算ノ大要ヤ、日日ニ用ヒテ人皆不レ知レ之、コレ大要ナル所以ナリ、然レドモ算士ノミ正道ヲ失ヘルニモアラズ、大内山ノ事ハ申モ提シ、諸侯ヲ論ズルハ身ノ卑賤ヲ忘ルヽニ似タリ、

故ニ措テ不レ論、武士ハ表ニ武ヲ飾ルトイヘドモ、内空虚ニシテ、兵道ノ具、忠戰ノ備ハ其形バカリニシテ、大ニ其實ヲ失フ、浮圖氏ハ遁世ヲ嫌ヒ名聞ヲ覔メ、寺格ヲ爭ヒ人世ヲ貪ル、醫者ハ天文地理ヲ知ラズ、人ハ小天地タルコトヲダニ悟ラズ、世上ヲ専ラニシテ其習業ニ疎ク、病根ヲ察ルコトタシカナラザルガ故ニ、神丹耳遂ノ如キ物ハ鬼神ノ如ク恐レ、發汗吐下ノ機ヲ失ヒ、己ガ過チヲ病ニ屬ス、今ノ醫師匕ノ恩ヲオロソカニ思フカベラズ、匕ナラズシテ人ヲ殺サバ、豈天命ノ壽ヲ終ルコトヲ得ンヤ、儒者ハ天命ヲ不レ知、古文詞章ノ學文ヲ尊ンデ、餘力アラバ文ヲ學ブノ教ヘニ反シ、篤行質朴ノ君子ヲ嘲ケリ、己ガ門戸ヲカマヘテ、古人ノ言ヲ賣テ名譽ヲ求メ、聞達ヲ願ヒ議論ニ誇ル、衆人ハ産業ニ倦デ安逸ヲ願ヒ、分限ヲ忘レテ奢リヲ好ミ、「惟庸儒而力不レ振、而後挫折、思而悔レ之、歸ニ之于數一矣、」愚少年ヨリ此道ヲ學ンデ他ヲ不レ省、少ク神ノ助ケヲ得ルニ似ルモノアリ、蓋宿昔身ノ不肖ヲ忘レテ、猥ニ青雲ノ志ヲ懷ヒテ過チヲ累ネ、ムナシク道路ニ老ント欲ストイヘドモ、得難キノ貨ヲ貪ルコトモナク、何ヲカウラミ何ヲカナゲカン、「死生有レ命富貴有レ天、」吾愚ニシテ過チ多モ、卑賤ニシテ貧キモ天命ニヨリ吾過チニヨル、人事ヲ盡シ正路ヲ守ルノ外、如何トモスルコトナシ、當レ生ヲ知リテ生當レ死ヲ知リテ死センノミト、孱夫ノ身ニ思ヒサダムルモ、此道ノ體用玄々ヲ探リシヨリ成レリ、コレヲ思ヘバ學ビ得テ益ナシトモ云ベカラザル歟

杉子曰　世俗用ユル八算見一、及十露盤各其雅名如何、又十露盤ノコト古昔ヨリ用ヒ來レルカ

答曰　俗間ノ八算、算家コレヲ九歸ト云、見一コレヲ歸除ト云、古昔ヨリ籌（サンギ）ヲ以テ乘除ヲナス、故ニ都テ商除ト云、今ノ十露盤ノ如キ割聲ト云モノナシ、皆九々ノ數ヲ以テ術ヲナス、俗ニ云龜井算、九九引算ト云モノ其意趣ナリ、今モナヲ算家籌ヲ以テスル所ノ諸術如レ此、故ニ古昔以二九々術一齊桓公ニ見ユル者アリ等ノ言アルナリ、算術ヲ九々術ト云故ナリ、算書曰、法ノ單位ナルモノヲ九歸ト云ヒ、衆位ナルモノヲ歸除ト云、十露盤ノ雅名ハ球盤ト云、元ノ末ニ至リテ制レ之、日用ニ便ナルガ故ニ、ソレ〳〵ノ割聲ト云モノヲコシラヘ、近世專ラ用レ之、珠盤ニテスル今ノ見一ヲ撞除法ト云、故ニ八算ノ割聲ヲ九歸歌ト云ヒ、見一ノ割聲ヲ撞除歌ト云、九歸ハ二ヨリ九ニ至リテ八段、故ニ世俗コレヲ八算ト云、撞除ノ割聲、見一ニ始リ見九ニ終ル、故ニ見一ノ始メヲトリテ名トスルナラン、見一八算ノ割聲ト云モノモ、皆而（メノコ）一ヲ以テコシラエ、各ソレニ辭ヲツケタルモノナリ、皆九九ノ裏ナリ、九九合數（又釋九數ト云）トテ、天地陰陽ノ數ヲカヌルモノニシテ、萬事ノ數九九ニ漏ルヽコトナシ、割聲皆而一ノ理ナルユヱ、熟得ノ上ハ無テモクルシカラザルモノナリ、假如菓十箇ヲ三人シテ配レバ、一人ニ三箇宛トリテ一箇餘ル、ソノ而一ニ辭ヲツケテ三一三十一トス、一ヲ三ニ作ルモノハ、一人ノ配分三箇ナリ、下ヘ一ト作ルモノハ、餘リノ一箇ナリ、各如レ此而一ヲ以テ辭ヲカケタルモノナリト知ルベシ

水子曰　算者ハ卜筮ヲ知ルモノヽヤウニ俗間ニハ思フ、實ニ類ノ似タルヤウナルモノテリ、算學習熟スレバ占モナルカ、又ハ占ハ別ナルカ

答曰　算術ト卜筮トハ各別ノモノナリ、數學ニ長ジテ易ノ道理ヲアキラメ、卦象ニ通達スレバ、自ラ占法ヲモシル、易ハ亦一道ニシテ甚キ大事也、算法ヲ學ブモノ、占法ヲウルト云コトハコレナシ、俗ニ占ヲスルヲ算ヲ置ト云、占者モ籌ヲ用ユ、算者モトヨリ用ユ、類ヲ同フスルヤウナレドモ、占者ノ籌ハ大ニシテ用ユル數ニ限アリ、算者ノ籌ハ近世方二分長一寸二分ニシテ、用ユル數ニカギリナシ、何レモ色ハ黑赤二色ナリトイヘドモ、用ル所ノ用ヲ異ニス、且往古算者ノ算木ヲ制スルノ本筮木ヨリ寫シ來レリ、世說ニ所謂王衍象牙ノ籌ヲ用ユルノ類、又ハ漢書隋志等ニ載ルガ如シ、如レ此似タルコト故ニ、世俗紛シク思フナリ、占ニモ品々アリ、龜ノ甲ヲ燒テ占フヲトト云、蓍ヲ取テ占フヲ筮ト云、卜法ハ悉ク不レ傳、筮法ハ繫辭傳及易學啓蒙等ニ審ラカナリ、左傳ノ易斷易、梅花易、或ハ京房易等其品多シ、今世俗間ニ流行スル察(サシ)物ノ占アリ、新井氏等ノ流コレナリ、今山伏ナドノ用ユル八卦陰陽書ノ類ハ鬼谷子ヨリ出デ、後佛家ヨリ守本尊等ヲ附タルナリ、古昔所謂祿命家、堪輿家、又ハ五行家等ノ遺法ナリ、易經ハ伏羲、文王、周公、孔子四聖ノ手ニ成レルモノニシテ、京房、郭璞、邵公節ノ如キ易ニ名ヲ得タル輩モ、聖人ノ本意ニ合フヤ否知ベカラズ、況ヤ算士ナドノ能知ル所ニアラズ、今世僧、山伏、陰陽師等ニ惑ハサル、所ノ占ハ、道ニ志ス者ノ論ズルニ不レ足コトナリ

杉子曰　時ヲシラスル鐘鼓日中中夜ニ九ヲウチ、昧爽黃昏ニ六ヲウチ、次第不順ナル事如何、又イツノコロヨリカ、鐘鼓ヲウチテ時ヲ告ルヤ

答曰　鐘鼓ノコト說マチ〳〵ナリ、菩提心論ノ說ヲ、弘法大師ノ說ナリトテ皆人コレヲ信ズ、其說九識ノ大日如來ハ日中ヲ掌リ玉フ、故ニ日中ニ九ヲ鐘（ウツ）、八識ノ藥師如來ハ其次ヲ掌リ玉フ、故ニ八ヲ鐘ト云々、予ハ不ㇾ信、又勸者御伽双紙ノ說、五行ノ五七曜ノ七二、十八宿ノ數等ヲ以テ招差法ニ依テ乘除ヲナシ、其各數ヲウルノ類附會セルニ似テ不ㇾ穩、コヽニ一說アリ、日中午ノ正刻ハ陽ノ至極、姤ノ一陰下ニ萠ス、數ノ極數ハ九ナリ、コレニヨリテ一陰ト、極數ノ九ト相因シテ、一九ノ九ナル故ニ九ヲ鐘、未ノ正刻ハ陰ノ二爻ナリ、九ト相因シテ二九十八、滿ルヲステヽ八ヲ鐘、申ノ正刻ハ陰ノ三爻九ト相因シテ二十七、滿ルヲステテ七ヲ鐘、酉ノ正刻ハ陰ノ四爻、依ニ前法ニ三十六、滿ルヲステヽ六ヲ鐘、戌ノ正刻ハ陰ノ五爻、依ニ前法ニ四十五、滿ルヲステヽ五ヲ鐘、亥ノ正刻ハ陰ノ六爻、卦ニ於テハ坤ナリ、依ニ前法ニ五十四、滿ルヲステヽ四ヲ鐘、子ノ正刻夜半ニハ陰ノ至極ナリ、復ノ一陽下ニ萠ス、九ト相因シテ九ヲ鐘、依ニ前法ニ丑ノ正刻ハ陽ノ二爻、寅ノ正刻ハ陽ノ三爻、卯ノ正刻ハ陽ノ四爻、辰ノ正刻ハ陽ノ五爻、巳ノ正刻ハ陽ノ六爻、各滿ルヲステヽ八、七、六、五、四ヲ鐘、巳ノ正刻陽ノ六爻ニ至リテ、卦ニ於テハ乾ナリ、其惣數五十四、乾（陽也）坤（陰也）ノ數合テ一百〇八ヲ晨朝日沒ニ撞テ、諸行無常是生滅、法生滅滅已、寂滅爲樂ノ理ヲ告知セシムト云、念珠ノ數ヲ百八ニシ、又ハ百八梵惱ノ眠ヲサマスナド云モ、陰陽ノ數ヲ統ルニ適ス、マコトニ此說然ンカ、又時ヲツグルノ如ハ、異朝ニテハ上古ヨリノコトナリ、寺院ニ鐘ヲ鐘コトハ、梁ノ武帝天監六年ヨリハジマル、本朝ニテハ鐘鼓トモニ、

天智天皇十年ヨリ始ル也

之長曰　世ニ一尋二尋ト云コト、一尋ヲ五尺トシテ通用ス、是ナルヤ否

答曰　度量衡考曰、「人長八尺一歩、亦八尺一尋、亦八尺、伸二兩手一左右指レ之自二左指尖一至二右指尖一、是爲二一尋一、廣張二兩足一、極二其所一レ至、是爲二一歩一、與二人長一等、」コノ八尺ハ周尺ナリ、今ノ五尺七寸五分餘ニアタル、人長モ一尋モ一歩モ各等キモノナレバ、各此數ヲ以テ大法トス、然レドモ今世ノ俗、其端數ヲ去テ五尺ヲ通用シテ一尋トスルモノナリ、毎レ人ノ一尋ハ、其長短ニヨリテ各不レ等ナリ

知一曰　俗間青樓妓館ニテ用ユル拳ト云モノアリテ、酒ノ勝負ヲ飮ミ爭フ、其辭一二三及十マデノ數ヲ一二或兩三四五六麼七八麼九都來ト云、コレニ依テ言ヤ

答曰　拳ノコト唐土ヨリ有コトニシテ、雅名ハコレヲ酒令ト云、或打花拳、又ハ一拳ナド云、打花ハ唐音ニテタア、ハアトキコユルヤウニ云ナリ、一ヨリ九ニ至ルノ辭ミナコレ唐音ナリ、一ヲイト云、或ハタニト云、タニハ單ノ唐音ナリ、兩マ參マナドイヘルマハ、那ノ字、或也ノ字ナリ、四ヲスムイト云ハ、四矣ト云コトナリ、七ヲチエ々ト云ハ、唐音七ヲチト云カサヌコトバナリ、又七麼六麼八麼等ノ麼ハ、上一字ノ音ニシテ、ツマルガ故ニ用ユル助語ナリ、俗語ノ也乎ト云字ナリ、故ニ八也乎ト云ホドノコトナリ、ナハ唐音ニテハナト云、拳ニ都來ト云モノハ、都ハ統也ニテ、總數ヲスブルト云コトナリ、來ト云モノハ、又コレ都ト音ツマルユヘニ助語ヲ用ユルナリ、唐詩ニ所レ謂「夜來風雨聲」ノ

如キナリ、又惣數ヲスベタルノ心ニモ通ズベキナリ

之長曰　周天三百六十五度四分度之一、諸書ニ、天ノ一度ヲ何萬何千里トスルノ說不レ同、又九重天ノ高サニ各里數ヲ著セルノコト、何ヲ以テ測リ知リタルモノナランヤ

答曰　周天ノ度ハ日ヲ以テ測ルモノニシテ、里數ヲ論ズル所ニアラズ、假如碁局ノ目ノ如シ、縱橫十九目トイヘドモ、一目ノ寸ヲ論ズルコトナシ、蒼蒼タル上天、豈里數ヲ測ルノ術アランヤ、天經或問ニ、游子六ノ推里數ヲ測ルノ言ヲナシ、妙術アリト稱シ、其術ヲ不レ記、各理論ニ精クシテ算ニ疎シ、算ニ堪タル者里數ヲ論ズルコトナシ、九重天ノ里數ナヲ然リ、中根元珪兩儀玄覽ノ說ヲ破シテ曰、天ノ遠近ハ實ニ荒唐ノ言也、蓋試ニコレヲ論ゼン、物ノ遠近大小ヲ考索スルコト、勾股衰分ノ法ニ過ズ、其衰分ヲ知ルコト目力ニアリ、シカルニ人目ノ至明ナルモ、一毫（千分寸之一也）ヲ察ルニ足モノナシ、モシクハ一毫ヲ察モノ有テ、寸木ニヨリテコレヲ考ヘバ、一百尺ノ遠大ヲ知リ、尺木ニヨリテコレヲ考ヘバ、一萬尺ノ遠大ヲ知ラン、其測量ノ器愈大ナルトキハ、愈遠大ヲ知ルハ理ノ當然ナリ、シカルニ人力ノ及ブトコロノ至大ノ器ヲ製シテコレヲ測ルトモ、豈千萬里ノ遠大ヲ考ヘ知ルコトヲ得ンヤ、且日月星辰住スルコト少時モセズ、唯太陽ハ太陰ノ上ニ在テ、其體大ナリト云コトハ、交食ニヨリテコレヲ知ル、シカレドモ其遠大若干ト云フコトハ得ベカラズ、誠ニ來學ヲ聾瞽スルコト此レヨリ甚キハナシ、明者コレヲ是正セヨト云々、澁川春海天經或問ノ九重天、七曜離地ノ說ヲ破シテ曰、「此章可レ謂ニ

奇說ノ也、續日本紀天平八年冬十月癸酉、夜太白入ㇾ月、星有ㇾ光、又貞享三年夏四月庚辰晨、太白入ニ月魄内ㇾ星有ㇾ光、此月高遠而大、太白卑近而小可ㇾ見、然又太白入ㇾ月、而星不ㇾ見亦有ㇾ之、不ㇾ可ニ槩論ㇾ凡五星逆行時、星大而有ㇾ光、此位卑而離ㇾ地、近順行反ㇾ之、故或在ニ月上ㇾ或在ニ月下ㇾ也、又日月之大、天地之里數、從ニ所ㇾ載之數ㇾ測ニ驗日食數大差ㇾ五星亦不ㇾ合、蓋不ㇾ足ㇾ取也ㇾト云々、亦周髀算經ニ、算術ヲモッテ日ノ高サヲハカリシルノコトアリトイヘドモ、其數天上一寸、地下千里ノ說妄術ナルヲ以テ、前哲ノトラザル所ナリ、地周ノ大サハ、北極高下ノ度數ヲ以テ測量スルノ算術アリ、故ニ紅毛、蠻方、唐土、日本ソレ〳〵ノ測量ノ里數アリ、盡ク擧ンモ無用ナリ、日本ノ今測地周一萬三千八百有餘里、尙里差ニ不ㇾ合、密ナラズトス、思力測別ニアリ、無用ノ論ナリ、故ニ大略ノ數ヲ擧ルノミ、如ㇾ此其法アリテ測ルコトスラ、密合ノ是非ヲ考訂センコト難シ、況ヤ悠々タル蒼天、里數ヲ測ルコトヲ得ンヤ

知一曰　世俗用ユル所ノ磁石ト云モノ、諺曰、北方ニ磁石山アリテ鐵ヲ吸、故ニ其針北ヲ指ト、然ルトキハ宮室民家ニ用ユル所ノ釘、或ハ鐵器盡ク北ニ吸ベキノ理ナレバ、此說樵牧ノ市語ナルコト必セリ、其北ニ指ノ理如何ナル故ニヤ、亦其雅名如何

答曰　磁石ノ漢名コレヲ針車ト云、曆家コレヲ定方鍼トモ云、畧見者ハ淸月トモ名ヅクルナリ、其北ニ指ノ理、本艸曰、ㇾ山之陽産ㇾ鐵者、陰必有ニ磁石ㇾ蓋二物同氣也ㇾト云々、此理ヲ以テ推ニ、其製スル所ノ針ニ其一方ハ磁石ヲ摺傳、一方ハ鐵ヲ摺傳、置心針ニ載セ承ル所ノ細工ヲ密ニスルトキハ、陰陽位

ヲ定メ、北ハ磁石、南ハ鐵トナリ、自然ノ理ニシテ南北ニ指シ、東西ニ指コトヲ不レ得ナリ、其妙工ナラザルノ器ハ其位定リガタシ、二物陰陽トナルノ理ヲ用ルニ非ザレバ、亦東西南北ニ廻リテ位不レ定モノナリ

之長曰　和漢トモ錢ヲ以テ物ニ交易スルコト、何レノ代ヨリ始ルヤ、其說ヲ詳ニセヨ

答曰　錢ノコト和漢トモ上古ヨリノ事ト見エタリ

古今原始曰　女媧氏（伏羲ノ妹ナリ）ノ時棘幣ヲ鑄ル、外圓ナルハ天ニ法リ、內方ナルハ地ニ象リ、以テ輕重ヲ定メ、有無ヲ通ズ、銅ヲ聚メテ是ヲ作ル、是錢ノ始也ト、馮鑑ガ續事始ニ、錢ハ堯ヨリ起ルトモイヘリ、史記平準書云、「虞夏之幣、金爲二三等一」ト、管子ニ夏商ノ世珠玉ヲ上幣トシ、黃金ヲ中幣トシ、刀布ヲ下幣トスト、然レドモ上代ノ事ナレバ其法タシカナラズ、漢志ニ「太公爲レ周立二九府圜法一、錢圜函レ方、輕重以レ銖」ト、コレ錢ノ始メ也、國語ニ、周ノ景王ノ時、錢ノ輕キヲ患テ大錢ヲ鑄ルコトアリ、韋昭ガ注ニ、徑一寸二分（今ノ八分六厘有奇）重サ十二銖（今ノ一匁四分八厘有奇）ト、コレヨリ代々錢ヲ鑄ル、亦刀布ト云コトハ、刀ハ刀ノ形ノ如ク、布ハ方ニシテ長シ、何レモ長サ二三寸アリ、古ヘヨリモ是アリテ、皆錢ノ如クニ使用ル幣也、漢ノ王莽ガ時ニ多ク是ヲ鑄ル、是契刀ト云、今醫家ニ用ル方寸、七錢、七ノ類コレナリ、其圖洪遵泉志三才圖會ニ詳ナリ、秦天下ヲ兼テ半兩錢ヲ鑄ル、好ノ左右ニ篆字ニテ半兩トアリ、徑一寸三分重八銖ト、コノ時十六銖ヲ一兩トス、故ニ八銖乃半兩ナリ、錢ニ銘ヲ鑄ルコトタシカニ知レタルハ、

コレヲ始メトス、漢ノ呂後又半兩錢ヲ鑄ル、漢書ニ「文帝除盜鑄令」注ニ、「秦法有禁、至是鑄四銖錢、除其令、令民得自鑄」（四銖今ノ四分九厘有奇）ト云、其後又三銖錢ヲ鑄ルコトアリ、「同武帝行半兩錢、（重サ乃十二銖ナリ）時罷三銖錢、改鑄通用郡國」又元狩五年ニ半兩ヲ罷テ、五銖錢ヲ用ヒラル、徑一寸、（今ノ七分二厘弱）「王莽又改錢貨法」コトアリ、其後後漢ノ光武、靈帝、及三國、南北朝、隋ノ初マデニ、世々ニ五銖錢ヲ鑄ル、又二銖錢四銖錢アリ、郡國通用不同、南宋文帝元嘉二十四年大錢ヲ鑄ル、同武帝孝建元年ニ四銖錢ヲ鑄ル、面ニ孝建ノ二字ヲ書シ、背文ニ四銖ノ二字アリ、年號ヲ錢文ニ鑄ルコト是ヲ始メトス、同明帝ノ泰始元年、鑄鵞眼錢、世俗錢ヲ鵞眼及鳥目ト云コトコレヨリ始ル、洿又鑄四銖、北魏文帝大和十九年ニ至リ、大和五銖ヲ鑄ル、又永安五銖ヲ鑄ル、隋又鑄五銖錢、（今ノ六分一厘有奇）唐高祖武德四年ニ鑄開元通寶、徑八分、重二銖四絫、（徑重與今尺及今秤同也）積十錢重一兩、其文八分、篆隷ノ三體アリ、舊唐書食貨志ニ、「開元錢歐陽詢制詞、其詞先上後下次、左後右讀之、自上及左、廻環讀之、其義亦通ス、俗謂之開通元寶錢云々、」錢ニ通寶ヲ書スルコト是ニ始ル、其後時々改メ鑄ルコトアレドモ、是錢ハカハラズ、治鑄相繼グ、ヨッテ多ク世ニ行ル、今モ多ク殘レリ、錢背ノ甲痕ノコト、楊貴妃亦ハ文德皇后ノ爪痕ト云コトトルニ不足コト也、其後肅宗ノ乾封泉寶、乾封元重寶、德宗ノ建中通寶、代宗ノ大曆元寶、懿宗ノ咸通玄寶、何レモ年號ニ配シテ名ヲ立タリ、其ノリ開元ニ準ジテ大小マ、不同、後梁太祖時、吳越鑄鐵錢、濟民用、後晋高祖天福三年鑄錢、後周世宗顯德二年ニ法物軍器、寺院ノ鐘磬等ヲ毀

シ、民間ノ銅器佛像ヲ取アゲテ錢ヲ鑄サシム、周元通寶ト云、侍臣或ハ佛像ヲ毀ルヲ疑フ、世宗ノ云、「佛以善道化人、苟志於善、斯奉佛矣、彼銅像豈所謂佛邪、且吾聞、佛志在利人、雖頭目猶捨以布施、若朕身可以濟民、亦非所惜也云々、宋ノ初ノ錢文ヲ宋元通寶ト云、太宗太平已來、年號改元ゴトニ必ズ錢ヲ鑄ル、當時ノ年號ヲ以テ銘トシ、元寶又ハ通寶ト云、淳化通寶ハ太宗ノ宸筆ニテ、眞草行ノ三體アリ、コレ錢ニ草書アルノ始也、至道、咸和、景德、大中、天禧、天聖、明道、景祐、寶光、康定、慶曆、皇祐、至和、嘉祐、治平、熙寧、元豐、元祐、紹聖、元符、建中、崇寧、大觀、政和、宣和、コノ類ヒ皆宋ノ年號ニシテ皆通寶或元寶ノ錢ヲ鑄ル、右ノ內明道、寶光、康定、紹聖、建中、宣和ノ六品ハ愚未見、其餘ハ各今通用スル所ノ錢ノ內ニアリ、南宋ノ內モ紹興、慶元、嘉泰、嘉定、淳祐、景定等ノ錢ナヲ今モアリ、皇宋通寶ハ年號ニハアラネドモ、仁宗ノ命ニヨッテ名之、宋朝ノ錢都テ五等アリ、仁宗ノ時ニ軍起リ、用度タラザルニ因テ、陝西都轉運使張奎、和永興軍范雍ガ請ヲ以テ大銅錢ヲ鑄ル、一ヲ以テ小錢十文ニ當テ關中ノ軍用ヲ助ク、其時又當五當三折二錢アリ、小錢ヲ合テ五等也、當五ハ一文五文ニ當ル、當三ハ三文ニ當ル、折二ハ二文ニ當ル、折ト云ハ物ニカユルコト、大ナル物ヲ小ニトリ直シ、又他ノ物ヲ以テカヘニスルコトヲ云、年貢ノ銀納ヲ折税ト云ガ如シ、小錢ハ代々定リテ鑄ラルレドモ、折二以上ハ時ニ因テ行レシナリ、遼金元ノ世時々錢ヲ鑄ルコト前代ト同ジ、金元ノ時ヨリ交鈔ヲ造リテ國有ヲ濟フ、其法サマ〳〵多シ、遂一ニ談リガタシ、續

文献通考ニ詳ナリ、今世諸國ニ行ル、所ノ札遣ノコトナリ、其初メ唐ノ比ヨリ起テ、元明ノ時ニ盛ナリ、初メ唐憲宗ノ時ニ錢少ヲ以テ、商賈人京師ニ至テ、諸國ノ進奏院ニ錢ヲ渡シテ、其手形ヲ以テ國々ヘ往テ錢ヲ受取ル、是ヲ飛錢ト云、今ノ所謂カハセト云法ノ如シ、文献通考云、「憲宗以ニ錢少一、復禁レ用ニ銅器一、時商估至ニ京師一、委ニ錢諸路進奏院、及諸軍諸使富家一、以ニ輕裝一趨ニ四方一、合レ劵反取レ之、號ニ飛錢一云云、」進奏院トハ諸國ノ守護ノ京ヤシキヲ云、コレ今ノ爲替（カハセ）ノ祖ナリ、コレヨリ轉ジ來テ、金元ヨリ交鈔オコレリ、今ノ銀札ノ祖也、其名世々ニシテ、交子、會子、關子、關會、寶鈔等ノカハリアレドモ、何モ札遣ノコトナリ、朝鮮ニハコレヲ楮貨ト云、弘事撮要ニ見タリ元ノ世祖ノ時ニ中統元寶鈔、至元寶鈔アリ、寶鈔ノ名是ニ始ル、寶鈔トハ尊デ稱スルニアラズ、通寶ノ寶ヲ取リテ、錢札ヲ寶鈔ト云ナリ、銀札ヲ銀鈔ト云ニテ知ベシ、和漢トモ札遣ハ民ノ嫌フコトナラメ、年久シク行テ、物重シテ鈔輕シナド云コトノアルヲ以テ思ヘバ、今ノ趣ニ相同ジキナリ、明ノ太祖ノ初メイマダ國號ヲ立ラレザル先呉王ト稱ス、是時ニ大中通寶ヲ鑄ル、是ハ錢ノ銘ニテ年號ニアラズ、今ノ世ニモ偶コノ錢アリ、洪武以來代々錢ヲ鑄ラル、何レモ年號ヲ以テ銘トス、小錢ヨリ當十錢マデ、スベテ五等アリ、大明會典云、「令ニ戸部及各行省、鑄ニ洪武通寶錢一、其制凡五等、當十錢重一兩、當五錢重五錢、當三當二、重皆如ニ其所レ當之數一、小錢重一錢云々、」太宗永樂九年ニ永樂通寶ヲ鑄ル、大明寶鈔ハ太祖、洪武八年ニコレヲ作ラシム、其制會典ニ詳ナリ、「又曰、毎ニ錢四貫一易ニ赤金一兩一、禁ニ民間一、不レ得下以ニ金銀一物貨交易上、又四

百文以下、則止用銅銭云々、宣宗宣徳九年ニ宣徳通寶ヲ鑄ル、景泰、天順、成化、弘治、正徳、皆明ノ年號ナリ、銭ヲ鑄ルヤ否詳ニコレヲ不知、又成化十七年ノ令ニ、洪武、永樂、宣徳ノ舊銭、毎銭八文、折銀一分八十文、折銀一銭、嘉靖ノ比ニハ、舊銭百四十文、准銀一銭ト、何レモ會典ニ詳ナリ、明朝ニ制銭ト云ハ、廣治平略云、嘉靖十五年、御史閻隣等言、朝庭取用銭幣有二、一曰、制銭、如祖宗列聖、及皇上所鑄、洪永、嘉靖等通寶是也、次曰、舊銭、歴代所鑄、如開元、祥府、太平、淳化等銭是也云々、」嘉靖萬暦各新銭ヲ鑄ルナリ、「平略又曰、崇禎之季、私鑄盛行、莫之能禁、銭百文僅値銀二分、所以銭日鑄、而國用日匱也云々、」清朝康熙年中、又康熙寶ヲ鑄ル、今世上ニ多クアリ、人ノ知ル所也、扨本朝ノ制幣有三等、金為上幣、銀為中幣、銅為下幣、凡鑄銭有輪郭好大小、略如開元銭、而有文、或配紀元、或命美號、其輪郭肉好ノコト詳ナラズ、輪郭ハ銭ノフチナリ、肉ハ銭ノ體ナリ、孔ハアナナリ、漢書律暦志注云、「體為肉、孔為好、按ニ、「日本紀顯宗天皇二年、是時天下安平、民無徭役、歳比登稔、百姓殷富、稲解銀銭一文」トアリ、コレ人王二十四代ニシテ、中華南北朝ノ宋武帝ノ時ニ當ル、亦「天武天皇三年夏四月朔、詔曰、自今以後、必用銅銭、莫用銀銭、又詔曰、用銀莫止ト、本朝ニ銀銭銅銭ヲ鑄ルコト、國史ニ見ルヽハ是ヲ始トス、神武天皇以來、鑄銭ノ始ヲ載ザルハ史ノ闕文ナラン、同曰、四十一代持統天皇八年三月、直廣二大宅(オホヤケ)朝臣麿勤大二臺忌寸八島(ウテナノイムキヤシマ)黄書連本(キフミノムラジ)實等ヲ鑄銭司ニ任ゼラル、鑄銭ノ司コヽニ始ル、續日本紀曰、四十二代文武天皇三年十二月庚子鑄銭

司ヲ置、直大二中臣朝臣意美麿ヲ以テ長官トス、四十三代元明天皇ノ時、武藏國秩父郡ヨリ自然ノ和銅ヲ献ズ、是ニ因テ元ヲ改テ和銅元年トス、同二月催鑄錢司ヲ置、多治比三元麿ヲ以テ是ニ任ズ、五月ニ始テ銀錢ヲ行ヒ、八月ニ始テ銅錢ヲ行フ、和銅開珎コレナリ、「同二年三月制ニ凡交關雜物一其物價銀錢四文已上、即用ニ銀錢一、其價三文、已下皆用ニ銅錢ニ」ト、コノ年八月銀錢ヲ廢シテ、一ニ銅錢ヲ行ハシム、同曰、四十七代廢帝天平寶字四年正月ニ、金銀銅三等ノ錢ヲ鑄ラル、コノ時私ニ鑄ル者多キニ因テ急ニ禁斷セラレテハ騷擾アランコトヲ恐レ、新錢ヲ鑄テ舊錢ト並ビ行ヒ、民ニ損ナク國ニ益アラシメン、詔書ノ旨國史ニ詳ナリ、金錢ノ文ヲ開基勝寶ト云、銀錢ノ文ヲ大平元寶ト云、銅錢ノ文ヲ萬年通寶ト云、其通用ノ法、金錢一文ハ銀錢十文ニアタル、銀錢一文銅錢十文ニアタル、至ニ弘仁八年一五十七箇年ノ間行ル、此文拾芥抄ニモ出タリ、四十八代稱德天皇天平神護元年ニ錢ヲ鑄ラル、續日本紀云、「九月丁酉、更鑄ニ新錢一、文曰、神功開寶、與ニ舊錢一並行ニ於世一」同云、「五十代桓武天皇延曆九年、置ニ鑄錢司一、拾芥抄云、「五十四代仁明天皇承和二年二月五日、鑄ニ承和昌寶一、至ニ同十四年一、經ニ十三年ニ」ト、國史云、同嘉祥元年九月ニ、長年錢ヲ鑄ル、詔曰、「文曰、長年大寶、一以當ニ舊之十一、新之與レ舊、並用維行、將レ令ニ用而不一レ倦、既富而敎レ之」トアリ、拾芥抄ニハ長平永寶ニ作ル、天安二年マデ八年行フト、五十六代淸和天皇貞觀元年四月廿八日、饒益神寶錢ヲ鑄ル、同十一年マデ十三年行フト、拾芥抄ニモ出タリ、同十二年正月ニ貞觀永寶ヲ鑄ル、寛平元年マデ八年通用ス、五十九

代宇多天皇寛平三年五月ニ寛平大寳ヲ鑄ル、延喜六年マデ十七年通用ス、六十代醍醐天皇延喜七年十一月三日ニ延喜通寳ヲ鑄ル、天德元年マデ三十四年通用ス、拾芥抄ニ、天平寳字四年所レ鑄ノ三等ノ錢ニ同ク列シテ云、延喜十五年十一月八日隆平永寳ヲ鑄ル、今年ヨリ至二弘仁八年一卅二箇年ヲ經ルト、愚按ルニ、弘仁ハコレ五十二代嵯峨天皇ノ年號ニシテ、延喜ニ先ツコト八代、年數凡百年ノ往古ナリ、疑クバコレ五十代桓武天皇ノ延暦年中ニ鑄ル所ナランカ、亦天平寳字四年ヨリ弘仁八年ニ至テ五十有七年、所謂三十二箇年ハコレ誤リナルベシ、六十一代朱雀天皇天德二年三月廿五日ニ乾元大寳ヲ鑄ル、一曰、村上天皇ノ代ナリト、天德ハ六十二代村上ノ年號ナリ、村上天皇ノ應和三年マデ通用ス、コノ後錢ヲ鑄ルコトアルベシトイヘドモ、國史ニ不レ見、保元ノ前後ヨリ慶長ニ至ルマデ五百有餘歳、天下亂レテ靜ナルコトナシ、新タニ錢ヲ鑄ルコトヲ不レ聞、制度通曰、百四代後土御門院文明五年（明ノ憲宗成化十九年癸卯也）禮部ヘ遣ス、咨文ニ云、「抑弊邑久承二焚蕩之餘一銅錢掃レ地而盡、官庫空虚、何以利レ民、今差二使者入一レ朝、所レ求在レ此耳、聖恩廣大、願得二壹拾萬貫一以滿二其所一レ求、則賜莫レ大レ焉」ト、又百三代後花園院寛正五年（明ノ英宗天順八年甲申也）禮部ヘ咨スル書簡ニ云、「書籍銅錢仰二之上國一、其來久矣、今求二二物伏希奏達一、以滿二所一レ欲、書目見二于左方一、永樂年間、多給二銅錢一、近無二此擧一、公庫索然、何以利レ民、欽待二周急一」ト、是何レモ慈照院義政公ノ時ナリ、大抵先王ノ盛ナル時ハ、鑄錢ノ擧世々ニ是アリ、中世コノカタヨリ、國表亂ニ陷リテ干戈ノコト繁ク、錢幣ノコト又取行ハレズ、故ニ元明ヘ請テ國用ヲツグナフコ

ト推知スベシ、其事具ニ善鄰國寶記ニアリト云々、慶長年中ニ至リ、慶長通寶ヲ鑄ルトイヘドモ、其數不ㇾ多ト見エタリ、其後百十代明正院寛永十三年ニ、始テ寛永通寶ノ錢ヲ鑄ル、今通用スル處ナリ、百十四代東山院元祿十年ニ又寛永ノ新錢ヲ鑄ル、コレヨリ往々錢ヲ鑄ルト雖モ、寛永通寶ヲ改ムルコトナシ、人ノ知所ナリ、亦大錢ヲ用ユルコト、寶永五年五月ニ寶永通寶ノ大錢ヲ鑄テ通用ス、大錢一文當ニ小錢十錢ニ、翌年正月停止セラル、和銅ノコト、伊弉諾尊ノ時スデニ白銅鏡（マスミ）アリ、又天照太神ノ時石凝姥命（イシコリトメ）天香山（アマノカグ）ノ銅ヲ取テ鏡ヲ鑄ルコトアリトイヘドモ、神代ノコト知ベカラズ、錢ヲ鑄テ通用セシコト、和銅年中已前久シキコトナレバ、異國ヨリ渡ル所ノ銅ヲ以テ錢ヲ鑄テ通用セシナラン、錢ノコト和漢大略如ㇾ此、愚ガ不ㇾ知トコロ多シ、其外三才圖會、文獻通考、又ハ本朝六國史等ヲ以テ考フベキナリ

知一曰　九十六文ヲ以テ一百トシ、又九百六十文トモイハズシテ一貫ト名ルコト、各其説ヲ詳ニセヨ

答曰　錢ニ省百ヲ用ルコト、東涯曰、南朝ノ頃ヨリ始レリ、梁ノ武帝ノ時ニ銅錢ヲ罷テ、更ニ鐵錢ヲ鑄ル、是ニ因テ鐵錢得マスク、多ク私鑄ヲナス、大同以後鐵錢愈多クシテ物價騰貴セリ、東錢ハ八十ヲ陌トシ、西錢ハ七十ヲ百トシ、京師ハ九十ヲ百トシテ、是ヲ長錢ト云、其後詔アリテ通ジテ足陌ヲ用ラレタレドモ、人從ハズ、末年ニハ三十五文ヲ以テ百トセリ、是ヨリ後隋ノ世、唐ノ全盛ノ時コノコトキコエズ、憲宗ノ世ニ成テ、錢スクナキヲ以テ飛錢ノコト興ル、元和四年ヨリ京師通用ノ錢每緡ニ二

十ッカグ、穆宗ノ世ニ至テ、京ニテ金銀ヲヒサグニモ十兩ニ一兩ヲ墊ス、米鹽ヲカフニハ百錢ニ七八ヲ墊ス・內外ノ通用遂ニ八十ヲ以テ百トス、是ヲ墊陌ト云、其後五代唐ノ時ハ八十ヲ百トス、是ヲ短陌短錢ト云、漢ノ隱帝ノ時ニハ入ルモノ八十、出ル物七十七、是ヲ省陌ト云、宋ノ世モ國初ニハ五代ノ制ニ因リ、八十又ハ八十五ヲ百トシ、又四十八錢ヲ百トスルコトアリ、大祖ノ乾德五年ヨリ七十七文ヲ以テ百トス、省陌ヲ又除百トモ、折百トモ云ト云々、此事通典及沉存中筆談ニ出、金、元、明、淸ノコトハ愚イマダ不レ知レ之、本朝ノ制ハ往古ヨリ足錢ヲ用ユ、故ニ今モナホ九州・或ハ北越等足百ヲ通用スル所アリ、此事國史ニ不レ見バ、戰國ノ制ニシテ、其ウヘ和邦ノ風俗、諸家近世ノ國史ヲ秘シ、民間ノ手ニオチザルヲ以テ、其事實ヲ詳ニスルコト不レ能、和事始曰、人王六代後奈良院天文年中、上杉憲政ノ家臣長尾意玄コレヲ制セショリ始ル、意玄曰、敵國ニ入リ町人地下人迯散、ソノ所ニヲラザルニハ、小身ノ中間等スコシノモノヲモ買フベキヤウナシ、然レバ取シヅメテユタカナラテバ、代物ハツカハレザルモノナリ、マタユタカナル世ニハ、闕漏アルコト長久ノ政ニナレバ、代物ヲ九十六錢ニシテ四文ヅヽ闕漏シカルベシ、其上三十二文ヅヽ三ツニ分ケ、又三十二文ヲ四ツニ分レバ八文ニナル、カクテハ錢ノツカヒヤウモヨシトテ如レ此サダメタリト云、此說ノ如クシカラン、本朝天文曰、太陽冬至ニ赤道ヲ去ル南至二十四度、夏至ニ赤道ヲ去ル北至二十四度、南北四十八度、往來九十六度ニシテ一歲ヲナス、故ニ太陽一歲ノ天度往來ノ歩ニカタドリ、九十六錢ヲ省百トシ、名ケテコレヲ御足

ト云ト、一說曰、九六ハ陰陽ノ極數ナリ、物極レバ必變ジ易シ、交易交通ノ義ニ取ト、兩說各其ヨリドコロアリトイヘドモ、附會ノ說ニシテ信ジ難シ、千文ヲ貫ト名ルコト、字義ニ因テカク云ナラン、字書曰、「以レ緡穿レ錢曰レ貫、」ナホ其邪正ヲ明哲ニタダシトヘ

之長曰　本朝錢一貫文ヲ百疋ト云フ如何、其說ヲカタレ

答曰　此コト國史ニモ不レ見。亦何ノ書ニ出タリト云コトヲキカズ、只和俗ノナラハシト見エタリ、諺曰、錢ヲ鑄ルノ時駒牽錢ヲ鑄ル、錢若干文ニ駒牽一文ト、此割ヨリ出タル名ナリト、錢ヲ鑄ルノ法和邦如レ此ヤ否、其局官ニアヅカラズ、詳ナルコトヲキカズ、愚往昔翰禮ヲ學ビシコトアリシガ、其書ニ云、建久文治ノ頃右大將頼朝卿シバ〱狩ヲ好ム、其田獵ノ令ニ云、畜一疋ヲ捕モノニハ錢十文ヲ賞シ、百疋ヲ捕モノニハ一貫文ヲ賞セント、當時此コトヲ以テ世俗一貫ヲ百疋ト云、其時ノ方言ナリト云々、如レ此ナリヤ、其是非ヲシラズ

杉子曰　金銀ヲ通用スルコト、和漢其異同如何

答曰　金銀ノコト、東涯曰、古今ノ變、通ジテコレヲ考ルニ、金ノコトハ古禹ノ時「貢ニ金九牧ニ」ト云コト左傳ニ見エタリ、禹貢ニ荊州楊州ノ貢惟金三品トアリ、易金矢金夫ノ象アリ、周禮ニ、釣金束矢ノ事アリ、孟子ニ、兼金ノ贈アリ、專ラ金ヲ用テ交易ス、銀ノコトハ書經ノ禹貢ニ著シテ銀鏤砮磬トアリ、漢ノ時ニ「黃金重一斤直ニ錢萬ニ、朱提銀重八兩爲ニ一流ニ、直一千五百八十」ト、漢書食貨志ニ見エタリ、

朱提トハ縣ノ名銀ヲ出ス、然レバ其時ニハ銅錢ヲ用ヒテ金銀ヲ通用スルコト見エズ、通典通考大明會典等ノ書詳ニ銅錢ノ事ヲ載テ、金銀ノ沙汰曾テ見ハレズ、元明ノ世ニ至テ又寶鈔起ル、是ニオイテ金銀錢鈔ノ四ノモノ其價相通用ス、然レドモ金銀ヲ常ニ使フコト見エズ、明ニ至テ租稅等一切銀ヲ納ム、是ニオイテ銀始テ世ニ重シ、張習孔ガ雲谷臥餘ニ云、「前古之通用者、大率以金銀、金銀之見于載籍者、始于禹貢、錢制始于太公、正是貨財中之一種耳、不常用也、自漢鑄錢以通百貨、數千年來、皆是用錢、金銀雖亦行于世、然國課物價、不以之爲準、至明租稅權贖、一槩徵銀、銀始重于天下、百物皆取銀爲準矣、」コノ說ニテ古今貨財ノ變大概見ベシ、大抵中國ハ五金ノ產國ニ合テハ甚乏シ、上世ヨリ秦漢マデハ金銀ヲ通用スルコトアレドモ、ソレヨリ後ハタヾ銅錢バカリヲ用ユルト見エタリ、ソノ內漢ノ時ニハ錢ヲ以テ準トシテ、金銀トモニ價幾錢ト云、明ニハ銀ヲ以テ準トシテ、百物トモニ價銀幾兩幾錢ト云コト古今ノ變自ラ知ベシトイヘリ、漢土金銀ノ制、和邦今通用スル所ノ如キ形ヲ鑄ルト云コトヲキカズ、タヾ幾斤幾両幾錢ト云ヲ以テスルコト古今同ジキナリ、古所謂朱提銀重八兩爲一流ト云フモノ、今世ノ掉金ト云モノヽ如キナラン、其八兩今ノ二十四匁弱ナリ、今ノ丁銀ト云モノヨリハ小ナルベシ、其制ハ似タルモノナラン、金銀トモ如此ノ類ニシテ通用セシナラン、今云極印タルモノモ當時ノ制アルベキコトナリ、按本朝銀アルコト、日本紀曰、四十代天武天皇ノ二年三月七日ニ、對馬ノ國司忍ノ海造大國當國ヨリ銀出ルコトヲ奏聞シテ銀ヲ貢上ス、是ニ由テ大國

ニ小錦下ト云、位ヲ授ケラルト云々、「凡銀有二倭國一、初出二于此一」ト、此時神社ニ奉ツラレ、亦小錦下ノ大夫ニ賜フ、朝野群載ニ、對馬貢銀記アリ、然レドモ錢貨ノ條ニ云如ク、二十四代顯宗ノ時スデニ銀錢ノ通用アレバ、外國ノ銀ヲ以テ錢ヲ鑄テ通用セシコトハ往古ヨリノコトニシテ、國史ノ闕文ニシテ其始メヲシラズ、銀錢ヲ用ユルノ文國史ニ出ル所二十四代顯宗、四十代天武、四十三代元明、四十七代廢帝等ナリ、中世以後專ラ銅錢ヲ通用スルニ至テハ、銀錢ノコトキコエズ、今ノ如キ形ヲ鑄ルコトハ近世マデナカリシコトト見エタリ、サキニ云如ク五百有餘年ノ亂世、應仁文明ノ比ハ皇帝居ヲ安ズルコトアタハズ、將軍錢貨ヲ異國ニ請テ、利レ民ノ時務豈金銀ニ形ヲ制シテ貨幣トスルノイトマアランヤ、天下漸靜謐ナルニ至テ、文祿慶長ノ比ヨリ今ノ板銀莚板等ノ形ヲ鑄ル、其局官ノ所以ニ因テ、大黑或ハ常是等ノ極印アリ、今ニ至テ不レ改、世人ノ知トコロナリ、其起本秀吉ニ立テ、東照宮コレヲ大成シ玉フナリ、慶長以前ノ制ハ今世ニノコラザレバ其制ヲ見ズ、金ニモ慶長已前ノ小判アリシトキケバ、銀ニモ亦ソノ始メアルベシ、慶長已後ノコトハ世人ノ知トコロニシテ談ルニ不レ及トイヘドモ、其大略ヲカタラン、今云慶長銀ハコレ慶長年中ニ鑄ル所ノ銀ニシテ、元祿年中マデ凡百年バカリ通用ス、百十四代東山院元祿八年ニ新銀ヲ鑄ル、元ノ字ノ極印ヲウツ、故ニ世人コレヲ元字銀ト云、寶永年中ニ新銀ヲ鑄ル、寶ノ字ノ極印ヲウツ、世人コレヲ二ツ寶ト云、相繼デ新銀ヲ鑄ル、コレヲ中銀ト云、同七年ニ亦新銀ヲ鑄ル、三ツ寶ト云、其五月亦新銀ヲ鑄ル、四ツ寶ト云、中御門院正德年中新銀ヲ鑄ル、今云古銀ナ

リ、櫻町院元文元年ニ亦新銀ヲ鑄ル、文ノ字ノ極印ヲウツ、今ノ通用世人ノ知ル所ナリ、サキニ云如ク金銀トモ慶長以前ノ制ハシルベカラズトイヘドモ、其ハジメハ極印ヲモウタズ、今ノ銅ノ棹ガネノ如クシテ切遣ニセシトテ、尾州ヨリ掘出セシ金ヲ少年ノ時見キタリヌ、銀モ今ノ丁銀ノ如キ形チニシテ、極印モナクウチノバシ切遣ニセシトテ、今モナホ持傳ル人アリ、重サハ各四十四五匁ノ前後ナリ、亦米判ト云銀アリ、藁篇ニテワカシタルマヽノ形チヲ、大サ大錢バカリニシテ、裏ハイシメニテ、表ニ米判ノ二字極印アリ、米一俵ニカヘシ故ナリト云、重サ各十四五匁程ヅヽ有ナリ、又本朝ニ金アルコト、續日本紀ニ云、「四十五代聖武天皇、天平二十一年二月、陸奧國守從五位上百濟王敬福始貢黄金、奉幣以告畿內七道諸社」ト、按ニ、聖武ノ詔ニ此大和國ハ天地開闢以來、黄金ヲ人ノ國ヨリ獻ルコトハアレドモ、斯地ニハ無物トアレバ、本朝ニ金ヲ掘出セシハ此時ヲ始トス、三十四代推古天皇ノ時高麗ヨリ黄金ヲ貢スルコトアリ、亦續日本紀ニ、文武天皇ノ大寶元年三月、對馬國ヨリ金ヲ貢スル故ニ大寶ト改元ストアリ、然レドモ此對馬ヨリ獻ズル金モ、異國ヨリ渡ル所ノ金ヲ獻ズルナラン、コレヨリ歷代陸奧ヨリ黄金ヲ貢スルコト絕ズ、萬葉集ニ、天平勝寶元年天平二十一年四年改元五月、越中國守ノ舘ニオイテ大伴宿禰家持賀ノ題ニ、「スメロギノ御代サカエント東ナル陸奧山ニ金花サク」ト云々、錢ニ鑄テ通用セシコト、廢帝ノ開基勝寶ノミ國史ニ見エタリ、今ノ如ク形ヲ鑄テ通用セシコト、國史ニ不見ノ趣ハ銀ト相同ジ、高倉院安元元年、平重盛宋ノ育王山ヘ三千兩ノ金ヲ渡スト云事アレドモ、斤兩

ノ兩ニシテ、今ノ如ク形ヲ鑄テ重サヲ制セシ一兩ニハアラズ、此三千兩今ノ一萬兩餘ナラン、金ノ顏色シレザレバ不レ詳、扨近世群國ニ通用スルコト、銀ト同ジク文祿慶長ノ比ヨリ始ル、コレ亦慶長以前ノ制アリシト聞、慶長金ハ慶長年中ニ鑄ル、其形諸人ノシル如ク直圓ニシテ縱二寸四分、横一寸二分也・分判アリ、四分ヲ兩トス、後世其制相同ジ、桐ノ紋ハ秀吉ノ紋ナリ、裏ノ極印扇子形光次等ハ、其局官ニヨルノ所以ニシテ、今ニオイテ不レ改レ之、元祿八年新小判ヲ鑄ル、元ノ字ヲウツ、世人コレヲ元祿小判ト云、縱二寸二分、横ハ舊ニヨル、大略百九十餘兩ヲ以テ慶長百兩ニアツル、亦分判アリ・同十年二朱判ヲ鑄ル、寶永七年五月新金ヲ鑄ル、乾ノ字ヲウツ、世人コレヲ乾金ト云、重サ二匁五分、縱二寸横一寸一分、亦分判アリ、慶長元祿ハ各重サ四匁七分六厘ナリ、正德四年十二月新金ヲ鑄ル、重サ四匁七分六厘、縱二寸三分、横一寸三分、亦分判アリ、今云古金ナリ、元文元年五月今ノ新金ヲ鑄ル、重サ三匁五分、縱二寸二分、横一寸二分、亦分判アリ、文ノ字ヲウツ、故ニ世人文金ト云、百六十五兩ヲ以テ乾金ハ二百兩、慶長及元金享保金ハ各百兩ニ易フ、大判ハ亦其局官アリテコレヲ鑄ル、大體小判十兩ニ當ル、然レドモ金ノ顏色互ニ不同アルヲ以テ、其時々ノ相當不レ同、コレヲ判金ト云コトハ、其局官後藤家ノ人墨ヲ以テ書判ヲ大判ノ裏ニ書ユヘナリ、凡慶長ヨリ以來ノ金銀、各顏色ノ分數、又ハソレゾレノ交易ノ多少等ノ委キコトハ、各其局官ノ秘スル所ナレバ、愚マタ詳ニコレヲシラズ、疑ヲ缺デコヽニカタラズ、蓋和漢トモ金銀ヲ通用スルコト古昔ヨリ盛ナラズ、錢貨ヲ以テ

專ラ物ノ價ニ準ズ、明朝ニ至テ銀ヲ以テ物ノ價ニ準ジ用ルコト專ラナリ、和朝ニシテハ慶長ノ比ヨリ盛ナリ、和漢其時變ヲ同フスルノミ、亦甲州判トテマロキ一分アリ、一朱、二朱、三朱ノ品アリ、各其極印ヲウツ、一分ノ重サ一匁二分也、各其割也、甲州一國ニ通用シテ、武田信虎ノ時ヨリ用ユト云フ

之長曰　四分ヲ一兩トシ、一分ヲ百疋ト云コト如何

答曰　權衡ノ法古昔ヨリ二十四銖ヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トス、秦ノ法二十六銖ヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トス、漢又依二古法一、宋已來明マデ斤兩ノ法サノミカハルコトヲ聞カズ、ソノ内後世ニ一金ト云ハ、上代漢ノ時代ニ一金ト云ト大ニ同カラズ、方密之通雅云、「古一金以二一斤一制レ幣、雖レ未二必實重一斤一、然定有二常形一、如二今之錠一、又曰、後世分兩漸改、錠有二大小一相沿、遂以二一兩一爲二一金一矣」ト云リ、古ヘノ一金ハ上ニ舉ル通リ、一斤ノ重サ金ナリ、後世ノ所謂一金ハ一兩十匁ナリヲ一金ト云コト是ニテ知ベシ、本朝ノ制、「凡權衡二十四銖爲レ兩、三兩爲二大兩一兩一、十六兩爲レ斤云々、」右文武令ニ所レ載如レ此、全ク唐ノ制ニヨル、六銖ヲ一分トシ、四分ヲ一兩トスルコト和漢同ジ、ヒトリ秦ノ三四銖ヲ一分トシ、四分ヲ兩トス、然レドモ本朝近世黃金ノ制四朱ヲ分トシ、四分ヲ兩トスルコト秦制ニヨルト云ニモアラジ、國史ニモ不レ載バ近代ノ制ナルベシ、四分ヲ兩トスルコトハ和漢古今相同ジキ也、今銀ハ四匁三分ヲ以テ一兩トシ、金ハ四匁七分六厘、或ハ二匁五分、或ハ今時三匁五分ヲ以テ一兩トスルコト、其初メ金銀各其顏色ノ分數ノ割ヨリ立タル一兩ノ重サニシテ、銖今制銖判ナシ分兩ノ名同ク、其輕重時制ニ

依テ變ズルナリ、銀ノ如キハ錠銀菽板等、其形大小不レ同、多寡不レ等ノ制ナレバ、銀ヲ鑄ルニ兩ノ重サニ拘ルコトナシ、故ニ四分ヲ兩トスルコトモナシ、錠銀一枚ヲ凡銀十兩トスルノ心ナリ、故ニ一枚ノ名アリ、銀ノ形輕重定率ナキユヘ、權衡ヲ以テコレヲ秤テ、其兩其枚ニ適シテ用レ之、故ニ兩ノ重サヲ改メ制ルコトナク、其初制ニヨリテ今ニ用ルモノナリ、其初顏色分數ノ制ヨリ立タルコトハ、コレ亦局官ノ秘事ナレバ、其趣ヲシラザルニハアラ子ド詳ニコレヲカタラズ、又一分ヲ百疋ト云コト、錢一貫ヲ百疋ト云ヨリ轉ジキタレルナリ、國初武家諸法度ノ時、元和年中小判一兩ニ錢四貫文タルベキヨシ有レ之、其後寛永十三年又一兩四貫文ノ法度アリ、故ニ世人云ナラハシ、終ニ今ノゴトクナレルナリ

知一曰　銀ニ一匁一貫目等ノ字ヲ云コト如何

答曰　唐ヨリ已前ニ一兩ノ小ワリヲ銖ト云テ、錢ト云コトナシ、開元錢十文ヲ一兩ノ重サニ定メラレテヨリ、金銀ノ量目ニ銅錢一文ノ重サニ當ヲ一錢トス、然レバ量目ニ一錢ト云ハ開元ヨリ起ルコトニテ、唐ヨリ前ハ是ナシ、然バ唐ノ太宗ノ時魏徵等相タル時ニ斗米三四錢ト云ハ、只銅錢三四文ノコトナリ、金銀ノコトニハアラズ、其後宋ノ時ヨリ金銀ヲ幾錢ト云トミエタリ、文目ト云コトハ漢土ニハコレナシ、本朝唐制ヲウケテ金銀ノ量目、銅錢一文ノ重ニアタルヲ一錢ト云、コレヨリ轉ジテ一文ノ重サナルユヱ、和俗一文目ト云ナラハスナリ、一貫匁モ亦同意ニテ銅錢一貫ノ目ト云ノ義ナリ、匁ノ

字ハ箋ノ字ト同ジ義トミエタリ、篇海ニ、一箋字下云俗作レ匁、一コレニヨリテ見レバ、字畫ノスクナキヲ以テ、世俗モッパラ箋字ニカヘテ用來レルナラン

之長曰　天文學ト算學トハ其道ヲ異ニスルコト辨ヲマタズシテ明ナリ、曆學ハ算術ヲ熟セザレバ其道ヲ得ザルカ、又天文學ト曆學トノ差別如何

答曰　天文家、曆家、又星名家數學家、算家、訓詁家、陰陽家ミナ其端ヲ分ツトイヘドモ道自ラ近シ、數學、算學ハ前條ニ辨ズ、訓詁學ハ大ナルコトナレドモ、古今ノ事ニ通ズルニシテ、三才ヲ兼ルニハアラズ、陰陽學ハコレ陰陽ノコトヲ學ブハ、天地ノ學ト云ベキモノナレドモ、今ノ陰陽師ノ學ノ如キ道ニオイテ甚遠ク、名ノミノコトニシテ祿命家ニ近シ、天文學ハ二義アリ、命理ノ天學ト形氣ノ天學トナリ、所謂命ト天道トハ、命理ノ天學ナリ、三才ノ道ヲ兼テコヽニ外ナルコトナシ、日月五星ノ運行、推步、測量ヲ修ル、是形氣ノ天學ナリ、命理ト形氣ト本二ツニ非ズ、一天地主宰、先レ天無レ始、後レ天無レ終、其樞軸之至、能運二于於穆不一レ已者、蓋雖レ非二人所一レ思議能及、天之運旋、使レ有二寒暑晝夜一、人之運旋、使下二其血脈一周流上、然人物未レ生時、只言レ理不レ言レ性、所謂在レ天曰レ命也、生則稟二天地之氣一、以成レ質、質有二其氣一、卽有レ性有レ理、有レ神在二其中一、故人之生也、借レ質以存レ氣、人之死也、氣散神亡、而質敗、唯性與レ理、而返歸二于天一耳、其氣猶二天之甘露一、質猶二地之承盤一、盤清則露清、盤濁則露濁、盤之大小、則露有二厚薄一、是天之雨二甘露一、無心而下レ之、承レ之者自有レ分也、然此理已墮在二氣質中一、不レ全二是性之本體一、故

人之賢愚貴賤因レ此也、如レ此ノ三才一貫ヲ窮ル、是ヲ命理ノ天學ト云、又日月五星ノ運行ヲ推步測量シテ、四時ヲ定メ時ヲ授ケ、或ハ世界ノ萬國ニ行舟シ、或ハ邦國山川ノ地理ヲ窮ル、是ヲ形氣ノ天學ト云、コレ乃チ曆學ナリ、又諸史ニ載ル所ノ如キハ、占候ノ天文ニシテ陰陽學ニ近シ、世人コレヲ天學ノ大要トスルハ誤ナリ

數度宵談卷上終

數度宵談卷下

數度宵談卷下

杉子曰　世俗六十一年ヲ歷レバ、モトノ曆ニカヘルト云、又六十一歲ヲ本卦ト稱ス、六十一ハコレ易ノ六十四卦ニモアタラズ、本卦ニ年卦ノカヘルベキヤウナシ、然ドモ世人本卦ニナレバ、ソレヨリ此世ヲカリテ居ルナド云、邵子ノ一世ト云シハ三十年ナレバ、六十年ニシテハ二世ナレバ、ソレニモアタラズ、其由トコロ各如何

答曰　日月五星ノ七曜各其行錯綜シテ、上古ヨリ八千世ノ將來マデ、毎年同ジ曆ト云モノハアラザルナリ、其理曆學ニ長ズル人ハ昭然タリト雖、俗間ニハシラザルコトナリ、今萬民ノ手ニ頒ルヽカナ曆ノ中段下段ト云モノハ、コレ算術ヲ以テ推テ造ルニハアラズ、曆象家ノアヅカラザル所ニシテ、陰陽家ヨリコレヲ附スルナリ、其附ヤウ六十甲子ニアワセテソレソレニ配當スルコトナリ、其法陰陽家ノ秘事ナリ、コレハ甲子ニ配當スルモノ故、六十年ヲ歷テ甲子ガ元ヘ復レバ、中段下段モソレニ淮ジテ復ルナリ、假如太歲ハ其年ノ支干ノ方ニアルモノナレバ、甲子一周スレバ太歲モ甲子ノ復ルガ如キナリ、コレヲ以テ世人ノ說ノ據トスルナラン、亦本卦ノコト俗間ノ說不審ナリ、愚モ其由來ヲシラズ、愚疑本朝成丁ノ律ヨリ出デ、カク云ナラハシタルニテハナキヤ、漢土ニシテモ古三代ノ時ハ其サダメ

經書ニ見エザレドモ、漢以來ハ往々其制アリ、唐ニ至テ男子三歳以下爲レ黄、十五以下爲レ小、二十以下爲レ中、二十一以上爲レ丁、六十爲レ老、本朝唐制ヲツケテ少ク異同アリ、文武令ニ載ル所、「三歳以下爲レ黄、十六以下爲レ小、二十以下爲レ中、二十一以上爲レ丁、六十一以上爲レ老、六十六以上爲レ耆」ト云々、思フニ二十一ヨリ六十マデ、盛丁ニシテ壯年ノ部ナリ、六十一ヨリ老ト云本朝ノ定メナレバ、コレヨリ轉ジ來レルニテハナキヤ

之長曰　俗ニ宵ノ明星、曉ノ明星ト云星アリ、コレ何等ノ星ヲ云ヤ

答曰　コレ金、木、水、火、土、五星ノ内ナリ、詩經ニ「東曰ニ啓明一、西曰ニ長庚一」コレ太白星（金曜）ナリ、春曙抄ニ、長庚（ユフヅヽ）ハ暮ニ西ニアラハルヽ星ナリト、又和名抄ニ、明星ハ歳星（木星）ナリ、和名ヲ阿加保之ト云ト、五星ノ内金木コトニ大ナル星ナレバ、右ノ諸書ニ因テ金木二星ト云ベキモノナレドモ、五星ハ各其行進ムトキアリ、退クトキアリ、留ツテ動カザルトキアリ、伏シカクレテ不レ見トキアリ、或ハ宵ニ西方ニ見レ、晨ニ東方ニ見ル、故ニ俗人ノ目ニハ五星各明星ナルベキナリ、各相同ジトイヘドモ、金水ノ二星ハ晨ニ東方ニ見レテ東方ニ伏シ、夕ニ西方ニ見レテ西方ニ伏ス、故ニ曆家ノ指所ハ金水ノ二星ナリ、五星各異名多シ、今暫略レ之

知一曰　北辰ト北斗ト其差別如何

答曰　俗ニ北國星ト云モノコレ極星ナリ、北極南極ハ天ノ樞軸ノ所ヲ云、樞ニハ星ナシ、故ニ其側ニ

近キ星ヲ測極星トス、北辰北極ハ相同ジ、然レドモ別テコレヲ云バ、北辰ハ無星ノ樞ノ所、北極ハ測極星ナリ、國ニ隨テ高低アルヲ測リ、其國赤道ヲ去ル度數ヲ知リ、寒熱ノ氣候晝夜ノ長短ヲ測ル、南極星ハ地下ニ入ルコト、北極ノ出地ノ度ト同ジ、故ニ赤道以北ヨリハ不レ見、北極ハ赤道以南ヨリハ不レ見、北極星ハ五星ナリ、衆人其極星ヲ擧テ一星ト思フナリ、五星各其名スル所アリ、今答ニ無レ益故コレヲ略ス、扨北斗ハ俗ニ云破軍星ナリ、七星各一星々ノ名アリ、第六星ヲ北極星ト名ヅク、故ニ其名同キコトアリテ紛シキナリ、「或主二人之本命一、以定二吉凶一、或主二物之根元一、以生二萬物一」コレニヨリテ人ノ壽命ヲ祈リ福ヲ祈ル、鎮宅靈府神ト云フモ此星ヲ祭ルナリ、太史公ガ天官書已來、諸書ニ說所立春ノ初昏（暮六ナリ）寅ニ建シテ、一晝夜ニ十二辰ヲ一周シテ少シヅヽスギ、十二箇月ニ十二辰ヲ建シ畢ル、故ニ正月ヲ寅月、二月ヲ卯月（三月已上准レ之ナリ）トス、夏ノ代ニハ寅ニ建スノ月ヲ以テ正月トス、今ノ制ニ同ジ、殷ノ代ニハ丑ニ建スノ月ヲ以テ正月トス、周ノ代ニハ子ニ建スノ月ヲ以テ正月トス、三代ノ制天ハ子ニ闢ケ、地ハ丑ニ闢ク、人ハ寅ニ闢ケ始ルノ義ニトルト漢志ニ詳ナリ、此說正說ナラズ、北斗ノ周旋ニ不レ合、故ニ和漢其說紛々タリトイヘドモ、梅文鼎ガ說ヲ以テ古義ニ合ズトス、暦理ニ論ズル所附會ノ說ナリ、其餘ハ皆空論ナレバ、太史公トイヘドモ天度ニ不レ合トス、說說ハ問ニアラザレバ不レ答ノミ

知一日　元年正月元日、又ハ三朝四始ノ事如何

答曰　漢志曰「元典歴始曰レ元、傳曰、元善之長也、共養ニ三德一爲レ善、元體之長也、合ニ三體一而爲ニ之原一故曰レ元」云々、正月ノコト、字書曰、「每歲首月、不レ曰ニ一月一而曰ニ正月一、正月一日曰ニ元日一、蓋欲下人君體ニ元以居上レ正也」ト云々、イヅレモ人君德ヲツヽシムノ謂ナラン、又元朝ヲ三朝四始ト云コト、顏師古曰、「歲之朝、月之朝、日之朝、故謂ニ之三朝一、又謂ニ之四始一、正義云、謂ニ歲之始、時之始、日之始、月之始一也」ト云々

之長曰　易ニ坎中ノ陽爻、離中ノ陰爻アリ、數ニモ又陰中ノ陽、陽中ノ陰アリヤ

答曰　十ト一ト象ヲ同ス、數ハ一ニ起テ九ニ極ル、一三五七九ハ奇數ニシテ陽ニ屬シ、天ニ象ル、而シテ一ハコレ太極ナリ、數ノ起本トス、二四六八ハ偶數ニシテ陰ニ屬シ、地ニ象ル、陽ハ圓ニシテ生シ、陰ハ方ニシテ定也、故ニ以ニ奇數一除レ一而不レ盡アリ、コレ生々ノ義ナリ、以ニ偶數一除レ一不盡ナシ、必然ノ理ナリ、然シテ奇數ノ五除レ一不盡ナク、偶數ノ六除レ一不盡アリ、コレ陰陽相反スルナリ、故ニ五六ノ數、陰中ノ陽、陽中ノ陰ナリ

又問曰　律、度、量、衡、規、矩、準、繩ノ事如何

答曰　律、度、量、衡、規、矩、準、繩ハ八法トテ治ヲナスノ具ナリ、律度量衡ノコトハ世代ノ制アリテ、一夜ノ談ノ盡ス所ニアラズ、然レドモ問ニ不レ答モ不興ナレバ、一二ノアラマシヲ語ラン、律トハ六律六呂ナリ、律ヲアゲテ呂ヲイハズ、十二律ト云モ陽ヲ擧テ陰ヲイハズ、易ニ一陽來復ヲ擧テ、姤ニ一陰來復ヲ云ザルガゴトシ、「或曰、黃帝命ニ伶倫一制レ律、以レ此作レ樂、神人皆和、度量衡考曰、舜典曰、詩言

レ志、歌永レ言、聲依レ永、律和レ聲、是樂律之本、由ニ人聲一生焉、人之長短大小不レ齊、故其聲之高下清濁亦不レ齊、是亦埋之常也、聖人作レ樂、定ニ中聲一爲ニ之極一、高者俯就、下者企及、庶足ニ以被ニ天下之民一、是制レ律之本也、其所謂中聲者、以ニ周尺九寸一、作ニ黄鐘之管一是也」ト云々、晉志ニヨレバ、周尺九寸ハ今ノ六寸四分有奇ナリ、周尺ノ說三器攷略、制度通等其考フル所異同アリトイヘドモ、徂徠考フル所ノ茍勗ガ說ヲ近シトス、蓋黄鐘ヲ以テ本トシテ、三分損益ノ法アリテ上生シ下生ス、而シテ十二律生ズ、世ニ圖竹ト云モノコレナリ、黄鐘、大簇、沽洗、蕤賓、夷則、無射ヲ六律トス、陽ナリ、大呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘ヲ六呂トス、陰ナリ、又六間トモ云、各宮、商、角、徵、羽ノ五音ヲ備ヘ萬聲ニ應ズ、亦本朝ノ十二調子ト云モノアリ、壹越斷金平調勝絶下無双調鳬鐘 黄鐘鸞鏡 盤渉神仙上無コレナリ、コレ律名ニアラズ、調名ナリ、調トハイヅレノ律ヲ宮ニシテモ、其商、角、徵、羽、變徵、變宮ノ七音相和シタルヲ一調某調ト云ナリ、然レドモ今人十二律ノ名トシテ其誤ヲ不レ悟、クハシクハ度量衡考ニ出タリ、十二律ノコト呂氏春秋、淮南子、律書、漢志、晉志、隋志、宋志、明志、律呂新書等其說議論多シ、和漢水土ノ然ラシムル所ニシテ、七音異同アルノ類容易ノコトニアラズ、故ニ略レ之、其大綱ヲ答ルノミ、詳ナルコトハ愚ガ著ス所ノ和漢律學要覽ニアルナリ○度ハ物サシナリ、和俗摺尺ト書、易緯ニ馬尾ニオコルノ說アリ、孫子算術ニハ蠶糸ニ生ルノ說アリ、漢志ニハ黄鐘ニ生ズトシ、朱載堉ガ輩ハ秬黍ニ起ルトシ、縱黍、横黍、斜黍ノ說ノゴトキ皆附會ノコトニシテ、上古ノ制知ベカラザルノ辨徂徠審ニ

コレヲ說リ、蓋上三皇ヨリ下周漢ニイタリテ、尺ヲ異ニセザルノコト諸儒ノ說ニ詳ナリ、世々ノ制不レ同、隋志所レ載ノ十五等ノ尺ノ如キ、事繁キガ故ニ略レ之、周漢ノ尺ヲ擧テ答トスルノミ、周漢ノ尺ハ今ノ七寸二分弱ナリ、唐ノ大尺ト稱スルモノ今ノ曲尺ト等シ○量ハ升ナリ、ハカルト訓ズ、周ニハ升、豆、斗、區、釜、斛、鬷、庾、鍾、秉、溢ノ名アリ、漢ニハ龠、合、升、斗、斛ノ五量アリ、各其量數アリテ今ノ升數ニ直スノ算アリトイヘドモ今略レ之、サテ中華上古ノ制ハ知ベカラズ、周制ハ嘉量ト號シテ、六斗四升容ル升ヲモトヽス、今ノ五升七合有奇ナリ、乃一釜ト云モノコレナリ、其制周禮ニ詳ナリ、漢制亦大同小異也、周ノ一升ハ今ノ八勺八撮餘ニアタリ、漢ノ一升ハ今ノ九勺三撮餘ニアタル、ソレヨリ世々不レ同、唐ノ一升ハ今ノ四合一勺餘ニアタリ、宋ノ一升ハ今ノ三合二勺餘ニアタリ、元ノ一升ハ今ノ四合六勺餘ニアタリ、明ノ一升ハ今ノ五合七勺餘ニアタル、漢ヨリ唐ニイタルノ諸代ハ繁キガ故ニ略レ之、本朝今升ノ法寸、立積六十四步八二七ナルコト從來ツマビラカナラズ、「徂徠曰、按、吾邦今升法、不レ知ニ其所ニ從來一也、僧家相傳、鉢所ニ容受用ニ唐量一、弘安時以ニ當時升法一計レ之、唐壹升當ニ陸合五勺一也、古朝廷制度、皆稟ニ唐代一、若ニ文武令所レ載、度量權衡一與ニ六典一不同、弘安時猶當ニ是古制一、而其言如レ此、因疑、其時升法、當ニ是粟法一、以ニ陸伍一歸ニ唐升一、則弘安壹升、又當ニ今陸合肆勺有奇一、以レ此觀レ之、米粟法展轉相仍、量遂致ニ轉大一者審矣」ト云々、方四寸九分、深二寸七分ハ恰好ヲ制シタルモノトミエタリ、米粟法トハ糲米一斗ヲ米ニスレバ、六升四合有奇ニナルト云ヲ、六四有奇トシテ糲ノ米ニ直ス法ニス

ルヲ粟法ト云、米ヲ籾ニ直ストキハコレ米法ナリ、又本朝ニ古升ト云モノアリ、其積六十二歩五分、方五寸、深二寸五分ナリ、江州ニ武者升ト云モノアリテ、今ノ八合ニアタル、其從來石田三成作レ之ト云○衡ハ秤（ハカリ）ナリ、輕重ヲサダムルノ具ナリ、「徂徠曰、古秤、古周秤也、秦漢魏晉梁陳隋大業共依ニ古秤ニ云々、壹兩今貳錢玖分陸釐、貳毫玖絲陸忽不盡、壹斤今肆拾柒錢肆分零柒毫肆絲零柒肆不盡云々、齊玖兩當ニ唐四兩、隋開皇玖兩當ニ唐八兩、玉秤宇文周秤也、三兩當ニ唐一兩、唐以ニ玉秤三兩ニ爲ニ一兩、宋元明共依ニ唐秤、同ニ於今秤」ト云々、淸秤與ニ今秤ニ相等シ、或人淸秤ヲ崎陽ヨリ得テ、今秤トハカルニ相同トイヘリ、今チカク見ル所ナリ○規ハ俗ニ云ブンマハシナリ、圖ヲ作ルノ道具ナリ○矩ハ曲尺（マガリカ子）ナリ、方ヲ作ルノ具ナリ、孟子曰、「規矩方員之至也」○準ハ俗ニ云ナンバンカ子ナリ、高下平直ヲ定ルノ具ナリ、其制品々アリトイヘド、三才圖會ニ出ルトコロヲ見レバ、今ノナンバンノ如シ○繩ハ水繩ナリ、間數ヲハカリ水モリヲスルノ具ナリ、然レドモ三才圖會ニ出ルトコロヲ見レバ、今番匠ノ用キル墨壺ト云モノヽ如クシテ、細キ糸ヲ收メ車ニヨツテタグリ出スヤウニシタルモノナリ、コレヲ以テ見レバ今ノ墨壺ノコトナランカ

水子曰　古ハ武士ノ所領千貫二千貫、或百貫二百貫ナド稱シテ、今ノ如ク幾千石幾百石ト云フコトナシ、古ノ千貫ハ今ノ幾何ニアタルヤ

答曰　此コト鈐錄ニ出タリ、徂徠曰、大名ノ身上ヲ幾十萬石ト云ヒ、平士ノ身上ヲ幾千石幾百石ト云

フコト古法ニアラズ、大形信長秀吉ノ時ヨリ起ルトミエタリ、古ノ領地ノ書物ヲミルニ、何郡何郷何村ニテ幾十町幾百町抔トアッテ、石高ハナシ、武士ノ知行ヲ幾十貫幾百貫ト云モ、當時百姓ノ詞ニノコリアリ、田一坪ニ苗一把種ルコトニテ、百坪ニハ百把種ユ、是ヲ百目ト云、千坪ニ千把種ユ、是ヲ一貫目ト云、此積ニテ大抵十貫ハ百石、百貫ハ千石ニアタルト云々、愚按ニ、本朝今ノ制三百坪ヲ以テ一反トシ、三千坪ヲ以テ一町トス、水帳ノ石高所々ニ依テ不同アリトイヘドモ、大抵一反ヲ一石五斗、或一石六斗、一石三斗トス、然バ百坪ノ高大略五斗也、右所謂十貫ハ一萬坪也、乘二五斗一得二五十石一コレヲ以テ思ヘバ、千貫ハ五千石、百貫ハ五百石、十貫ハ五十石ナルベキカ

杉子曰　知行方ノ事、其納方ノ事如何

答曰　千石萬石ニテモ、何ノ國、何ノ郡、何ノ村、何石何斗何升及何勺如レ此、第一村〱ノ高ヲアゲテ、幾村ニテ何千石トス、此内ニ田アリ、畑アリ、押マルメテ高ニムスブ、其田ニ上、中、下、下下ノ四段アリ、畑モシカリ、サテ何石何ホドノ一村ノ中ニ、田一所〱皆名ヲツケテ、一所〱ノ其石高アリ、是ヲモリト云、其名ヲアザナト云、國主トイヘドモ其名其石高ヲ心ノ儘ニ改ムルコト叶ハズ、一國ノ高マセハ日本ノ高モマス故ナリ、然レドモ近世ノウチ出シ、或新田等ハ格外ノコトナリ、如此ノ定メノ古ヨリノ大帳アリ、是ヲ水帳ト名付ケ、一大事ノ物トシテ其所々ノ庄屋ニ預リヲルト云、サテ知行ノ高ホド米ヲトルニ非ズ、其トル所ノ定メヲ取リカト云、トリカ三ツ八分二厘三毛ナド云ハ、

右ノモリ一石ノ高ナレバ、三斗八升二合三勺トルコトナリ、籾ニテ納ムレバ、此倍數ヲ納ム、其トリ集メタル米ヲ現米トモ取米トモ云、一石ノモリノ田ニテ一石トルヲスクミト云、モシ一石一斗トルヲメン十一ト云、シカシ其如クナル田ハスクナカルベシ、上田ハメン高ク米ヲ多クトル、下田、下々田ハメンヒキクスクナクトル、然レバ上田多キハ領主ノ益ナリ、下田多キハ領主ノ損ナリ、畑年貢ノコト、關東邊ニテハ永納メトテ金ニテ取レ之、民ノ家居ノ分モ、屋シキ年貢トテ永納ニシテ、シカモ畑年貢ヨリ高クトルコトナリ、其外込高、越石、落石、田成畑ノコト、或ハ檢地、川普請等ノコトハ、委ク勸農固本錄ニ出タリ、故ニ略レ之

水子曰　土ニ色々アリト云、如何ナルコトゾ

答曰　禹貢ニ九州ノ土ノ性ヲ壤、墳、壚、埴、塗、泥以テ別レ之、色ヲ青　黄、赤、白、黒トス、本草又其色性ヲ論ズ、然レドモコレハ異邦ノコトナリ、和邦ノコト國々ノ風土記ニアリヤ否、余未レ見レ之、其實錄ヲシラズ、世俗ニ云傳ル所ハ、本邦ノ土ノ性アラマシ、七品アリ、眞土、紫眞土、砂眞土、赤土、埴土(ヘニ)、野土、壚(クロボコ)ナリ、マツチハ米ニヨシ、砂マツチハ作ル米性カタシトイヘドモ取ル所スクナシ、赤ツチハカタクシマルモノニヨロシ、黒ホコハ芋ニヨロシ、草木ニモヨロシ、松ニハヨロシカラズ、野土ノ卑濕ノ地ハ稗ニ宜シ、砂石マジリ堅キ處ハ菜、大根ニ宜シ、砂マジリニヤワラカナル處ハ牛房、葱、胡羅蔔(ニンジン)ニヨロシ、今思フニ、洛東ノ胡瓜(アサウリ)、茄子(ナスビ)、大根ハ實ノ入コト甚カタシ、其土ヲミレバ砂石多シ、洛西壬

生東寺邊ノ胡瓜、茄子、大根ハツヤウルヲヒアリテ見事ナレドモ、ヤハラカスギ水ダチテ味アシヽ、其土ヲ見レバ黒ボコニ似テ壊リ砂石ナシ、麥ハマツチヨケレドモ穀スクナシ、紫マツチニ生ジタルハ味ヨシト云、野ツチハ大粒ニ出來テシマリスクナケレドモ、穀多シトイヘリ、其是非老農老圃ニ問ベキモノナランカ

杉子曰　本朝古升今升ト云コトアリ、如何

答曰　前章ニ云ゴトク、日本升ノ制國史ニ不レ詳、故其由來ヲシラズ、古來ヨリ有處ノ升ハ、口ノ方五寸、深二寸五分、其積六十二歩半、コレヲ古升ト云、今升ハ口ノ方四寸九分、深二寸七分、其積六寸四歩八二七ナリ、俗間ニ云傳フ、豐臣秀吉公ノ命ニ依テ宮部善乘坊ノ作ル處ト云、如レ此ツクリナヲサレタルハ、年貢ノ取リカヲ高クセントスレバ、百姓ノ背ンゼザルヲ憂テ、口ノ廣サヲ一分ヅヽ縮メ、其二分ヲ深サヘ繼メスマデニテ、升ノ恰好ヨシト欺キタルモノナリト、然レドモ實錄ヲ見ザレバ、其眞僞ヲシラザルナリ

又問曰　今用ル處ノ一人扶持、國々所々ニヨツテ不同アレドモ、大略五合トタツルハ、イツノコロヨリニヤ

答曰　軍中又ハ所々ノ作法ニテ、一升或八合六合等ノ品々アレドモ、平常ノ一人扶持通用五合トタツルハ、コレ又秀吉公ノ時ヨリト云、同宮部ノ定メ玉フト云六尺五寸四方ヲ一坪ト云、其一坪ニ大體粗一

升ト心得、是ヲ米ニシテ凡五合ナリ、コレヲ朝夕ノ食ト定メ、一年ニ三百六十坪近キ地ヲツイヤスナリ、コレヲ思ヘバイタヅラニ我身ノ榮曜ノミニ奢リヲキハムル輩、天豈コレヲ惡マザラン乎

水子曰　本朝行程ノ里法三十六町ヲ以テシ、或五十町ヲ以テス、其由來如何

答曰　今三十六町ヲ一里トシ、又ハ五十町ヲ一里トスルコト國史ニ見エザレバ、何レノ比ヨリト云コトヲ詳ニセズ、拾芥抄ニ、「一段爲一町頭、十段爲一町積、卅六町爲一里、卅六里爲一條、又云、條起從北行於南、(限卅六條)里起西行於東、(限卅六里)町始艮終乾(但已上可隨國例)」トアレドモ、田地ノツモリ方一町ノ田ヲ三十六ナラベタルヲ云、路程ノコトニハアラズ、今ノ卅六町四方ノ處ヲ、西ヨリ算ヘ始メテ一里二里ト云、毎一里方一町ノモノ卅六箇アリ、然バ幅一町ニ長サ三十六町也、又コレヲ北ヨリ算ヘ出シテ一條二條ト云、毎一條ニ又方一町ノモノ卅六箇アリテ、幅一町ニ長サ卅六町也、里ト云條ト云縱橫ノ別ナリ、古ヘ田地ヲ分ツノ定法ト見エタリ、中華所謂井田ノ名目ノ如シ、今モナヲ鄕村ノ名ニ東條西條等ノコレリ、中古以來廢絕スト見エタリ、今三十六町ヲ一里トシ、又五十町ヲ一里トスルノ法、是等ノコトヨリ轉ズルナルベシ、五十町ヲ一里トスル制ハ、戶令ヨリ轉ズルト見エタリ、イヅレモ其制ノ轉ズルコト國史ニ見エズ、和邦ノ里ニ三品アリ、戶令ニ「以五十戶爲一里、」コレハ土地ノ廣狹ニカマハズ家數ヲ以テ一在所ヲ立ルノ名ナリ、雜令ニ、「凡三百步爲一里、」コレハ路程ノ法ナリ、「三十六町爲一里、」コレハサキニ云ゴトク田地ノツモリナリ、本朝路程步里古ノ制ハ、又中華ニ相準ズ、

尺ノ長短ハカハリアレドモ、大樣其法相同ジ、コレ唐制ニモトヅクガ故ナルベシ、文武令云、「凡度レ地五尺爲レ歩、三百歩爲レ里云々」今六尺ヲ一間トシ、六十間ヲ一町トスルヨリ見レバ古ノ一里今ノ五町バカリナリ、モシ六尺五寸ヲ一間トスレバ五町ニタラズ、然レドモ古ハ中華ノ制ニ準ジテ、量地ノ尺ヲ異ニス、今ノ呉服尺ト云ノ長ナリ、故ニ曲尺六尺ハ量地尺五尺ナリ、名異ニシテ長サハ同ジキナリ、和俗云、漢土ハ六町一里ト云ハナキコトナリ、本朝ノ古里ヲ以テ云、又ハ三百六十歩ト云ニヨリ、六十歩ヲ一町ト覺テカクイヘリ、漢土ノ一里ハ大樣今ノ三四町ノ間ナリト知ルベシ、本朝古ノ制度量權衡トモニ唐制ニ準ジテ、大尺、小尺、大量、小量、大兩、小兩ヲタテラレタルコト文武令ニ詳ナリ

杉子曰　漢土ニテハ三百六十歩ヲ爲ニ一畝一、畝百ヲ爲レ頃、其制世代ニ同ジカラズ、一朝一夕ノ談ニアラザルコトハ前ニ聞、又和邦曲尺六尺四方、或六尺五寸四方ヲ一歩トシ、今一坪ト云三百坪ヲ爲ニ一段一、古制三百六十歩也三千坪爲ニ一町一、異國亦田地ニ段町ノ名アリヤ、如何

答曰　本朝古ノ制ハ三百六十坪ヲ以テ一段トス、一町三千六百坪ナリ、今世三百坪ヲ以テ一段トスル者ナリ、日本紀云、「孝德天皇三年春、班レ田既訖、凡田長三十歩爲レ段、十段爲レ町、又文武令云、凡田長三十歩、廣十二歩爲レ段、十段爲レ町、」古ハ五尺ヲ一歩トシ、今ハ六尺ヲ一歩トスルノ異同アリ、然レドモサキニ云如ク、長サハ相等シキナリ、日本ノ歩、今ノ段段、今ノ反町ハ唐ノ歩、畝、頃ニ準ズ、田地ニ段町ト云フコト異國ノ法ニ其名目ナシ、然レドモ一シキリヲ段ト云コトハ、後世マデモ多見エタリ、田地

ニ町名ヲツクルコトハ遂ニ見アタラズ、左傳襄公二十五年ニ、「楚蔿掩爲司馬云々、町原防、牧隰皐、井衍沃、量入脩賦云々、」杜氏集解ニ、「廣平曰原、防隄也、隄防間地、不得方正如井田、別爲小頃町〇隰皐、水厓下隰、爲芻牧之地、〇衍沃、平美之地、則如周禮制、以爲井田、六尺爲歩、歩百爲畝、畝百爲夫、九夫爲井、〇量九士之所入、而治理其賦税云々」、「賈逵曰、原防之地九夫、爲町三町、而當一井也」ト、本朝ノ町段ノ名モ是ヨリ出ルナルベシ、字書ニ、町ノ字ヲ解シテ云、田區ノ畔埒トアリ、田地ノシキリヲ云、段モ町モ各一シキリト云ノ義ナリ、又一段ノ十分一ヲ一畝ト云コト、何ノ比ヨリ始ルコトヲシラズ、國史ニ其文ナシ、拾芥抄ニ載ルトコロ、令ノ文ト異ルコトナシ、ソノ内令ニハ五尺四方ヲ歩ト云、拾芥ニハ六尺四方ヲ歩トスルノ別アレドモ、令ハ長五尺ニテ唐制ニ準ズルナリ、是又同ジ長サナリ、拾芥ニ云、「積七十二歩爲十代」シカレバ古ヘノ詞ニ十代田(ソシロダ)ト云モノハ、今ノ二畝(セ)バカリノコトナリ、又段ノ字今ハ反ノ字ヲ用ユ、是ハ段ノ字艸書反ニ似タルユヱニ、訛傳シテカクノゴトシト知ルベシ

水子曰　今大工ノ持トコロノ曲尺ニ裏矩(ウラカネ)ト名付ケ、曲尺ノ寸ヨリ長キモノアリ、如何ナルモノニヤ

答曰　曲尺一尺四方ノモノヽ、角ヨリ角マデ斜尺一尺四寸一分四厘二毛餘アルモノナリ、然ルニ大工ノモツ處ノ曲尺(マガリカネ)、常ニ用ル表ノ方ニハ常ニ用ルカネザシノ寸分ヲ割ツケ、裏ノ方ニハ一尺四寸一四二ヲ一尺ノサシノ如ク十ニワリ、其一寸ノ内一分ノ如クキザミヲ付タルモノヲ裡(ウラ)カネト云、ソレ故大工

ノモツ曲尺ノ長サ一尺四寸三四分バカリアルモノナリ、サテ是ヲカヤウニモリ付ケヲクコトハ、タトヘバ番匠ニ徑八寸ノ丸木アリ、コレヲ角物ニセバ何寸角ニナルゾト問ンニ、尋常ノ番匠此算術ノシヤウハシルベカラズ、其トキ表ノ曲尺八寸ニアタル所ニ裏矩ノ寸ヲ見レバ五寸六分バカリニアタル、故ニ五寸六分角ニナルト答ルナリ、又三寸角ハ丸木ノ徑何寸ト問バ、裏矩三寸ニアタル表ノ曲尺ヲ見テ、四寸二分ニナル故、コレヲ丸木ノ徑トシテ答ルナリ、スベテ角斜ニカヽルコトヲコレニテツモルナリ、裏矩ハ番匠ノ角斜法ナリト云ベシ

杉子曰　蒼龍、白虎、朱雀、玄武ヲ四神ト號シ、東西南北ニ配シ、古ヨリ遷都或築城ニモ專ラコレヲ云、亦ハ四神ノ旗ヲ建テコレヲ表スルコト、何等ノ神ヲ云ヤ

答曰　蒼龍、朱雀、白虎、玄武ヲ四神相應ト云テ、四方ニカクノ如キ鬼神ノ象アリト思フハアヤマリナリ、モト二十八宿ノ星象ヨリオコルコトナリ、漢土古昔ヨリ名ヅクル所ノ二十八宿此象アレバナリ、紅毛(オランダ)等西洋ノ天學ハ、星座ヲ名ヅクルコト中國ト異ナル故此說ナシ、角、亢、房、氐、心、尾、箕ノ七宿ハ東方配當ノ宿ニシテ、其並ビヤウ龍ノゴトシ、斗、牛、女、虛、危、室、壁ノ七宿ハ北方配當ノ宿ニシテ、其並ビヤウ蛇ノ龜ヲマトウゴトシ、奎、婁、胃、昴、畢、觜、參ノ七宿ハ西方配當ノ宿ニシテ、其並ビヤウ虎ノ形ノゴトシ、井、鬼、柳、星、張、翼、軫ノ七宿ハ南方配當ノ宿ニシテ、鶉尾ノ鳥ノ形ノゴトシ、故ニ蒼、朱、白、玄ハ四方ノ色ニ配當シテ如レ此云ナリ、其詳ナルコトハ爾雅、正義、史記、天官書ニ出タリ、爾雅釋

天疏ニ云、「四方皆有二七宿一、各成二一形一、東方成二龍形一、西方成二虎形一、皆南首而北尾、南方成二鳥形一、北方成二龜形一、皆西首而東尾云々、」如レ此アレドモ、今其星象ヲ見ルニ、蒼龍トサスモノハ房、心、尾ノ三座、玄武トサスモノハ虛、危ノ二座、白虎トサスモノハ觜、參ノ二座、朱雀トサスモノハ柳、星、張ノ三座ナリ、王者ハ天ニ體シテ行フニヨリ、其旗常ニコノ紋ヲ繪ガキテ、四方ノ星象ニカタドル者ナリ

水子曰　本邦和歌ヲ詠スルニ八百萬代八千代八重垣八重ノ鹽路ナド云テ八ノ字ヲカギリナキコトニ用ユ、余聞、九ハ數ノ極ル所、三ハ數ノ備ル所、天地人ヲ表シテ萬物ヲ具足ス、九ハ陽ノ極ナレドモ、カギリナキニ用ルハ三ナリ、故ニシバ〳〵トモコレヲ訓ス、八ハ八卦ノ數ナレドモ、陰數ニシテカギリナキ心ニ至ツテハ、三文字ヨロシカルベキノ理ナリ、異國亦此意ニシテ、サダマラザル數ニハ三ヲ用ユ、白髮三千丈ノ類ヒナリ、シカルニ和邦八ノ字ヲ用ユルハ、如何ナル意ナラン、其說ヲカタレ

答曰　和歌ノコトハ我邦ノ大事ニシテ、愚ガ如キ卑賤ノ者ノ知ル所ニアラザレバ其道ヲマナバス、和邦ノナラハシニテ秘事多ケレバ、秘藏ノ說コソアラメ、然レドモコレモ數字ナルヲ以テ、足下問ヲ我ニ下ス、不レ答モ不興ナレバ、秘藏ノ說ハ不レ知トシテ、愚ガ臆見ヲ語ラン、或曰、八ハ八卦ノ數ニシテ生々シテ與不レ極、萬物ノツキヌ意ヲ以テ、コレヲ陽數トシテカギリナキコトニ用ユ、其コレヲ陽數トスル所以ハ、和訓ノ數字一二三四五六七トマデ、其音皆仄ニテ陰ナリ、八トロヲ開キテ陽ナルガ故ナリトイヘリ、愚私ニ疑フ、和邦用ル所ノヤ文字カギリナキ心ノ時ハ、八ノ字ニハアラザルベ

シ、後世同音ナルユヱ、コレヲ昔ナランカ、彌ノ字ノ訓ヲイヨ〳〵トヨミテ、イヤマシ、イヤマサルナド、カギリナクカサナルコトニ用ユレバ、コレヲ上略シテ云ニハアラザルカ

杉子曰　古語ニ「天不レ足ニ西北一、地不レ滿ニ東南一」余累年足下ノ人ニカタルヲ聞バ、天ハ渾圓ニシテ碧璣ノ如クモツテ裹レ地、地ハ彈丸ノ如クニシテ適ニ天之最中一、永靜不レ動シテ四面ニ人居スト、何ヲ以テ不レ足ニ西北一、不レ滿ニ東南一ヤ、其説ヲキカン

答曰　コレ淮南天文訓ニハジメテ見エタルノ説ナリ、天地ノ形象ヲモツテ云ニアラズ、陰陽ノ理ヲ以テ云ナリ、天官家天地陰陽升降ノ道理ヲ云、十二子ニオイテハ子ヲ陽ノ始メトシ、午ヲ陰ノ始メトシ、巳ヲ純陽トシ、亥ヲ純陰トス、戌亥ノ間ハ陰盛ニシテ陽缺タリ、人ノ宮室ノ如キモ、其缺タル處ニ門戸ヲ建ツ、故ニ素問ニ戌ヲ天門トスルノ説アリ、辰巳ノ間ハ陽盛ニシテ陰缺タリ、素問ニ辰ヲ地戸トス、其説陰陽ノ理ヲ以テ論ズ、形象ヲ云ニハアラズ、地勢北高南低等ノ形像ヲ以テ解ヲナス甚誤ナリ、五雜俎ニ、「天之不レ足ニ西北一也者、日月行ニ斗之北一故也」ノ説、亦地不レ滿ニ東南一ニ通ゼザルノ説ニシテ、斗宿亦北方ノ宿ナレドモ、東北ニ位シテ其理齟齬ス、又日月其宿ノ北ヲ行コト斗宿ニカギルニアラズ、曆理ニ通ゼザル人ノ説ナリ、然シテ易ノ乾坤二卦ノ方位、先天後天各此理ニ不レ合モノハ其理アリテ存ス、易道ノ第一儀ニシテ、一朝ノ論ニアラズ、易學ニ通ズル人ニアラザレバ會得スルコト難シ、故ニ今省ニ略之一ノミ

水子曰　漢土ヨリ和邦ハ、弓ト算術トハ勝レリト云モノアリ、如何

答曰　算術和漢ノ勝劣未レ聞、愚武門ノ端ヲ汚スノ身慙愧甚シトイヘドモ、弓ノ事ハ其術ヲ不レ學、絶テ知ラザル所也、愚私ニ按ルニ、暦算全書或ハ算學啓蒙、算法統宗ノ類ハ各元明清ノ書ニシテ、其算法今和邦ノ術ニ比スルニ疎ナルコト多シテ勝レリトハ云ベカラズ、和邦ハ近世延寶ノコロ、關孝和已來連綿シテ出ル所ノ算書、或下學中學竿頭探玄等ノ書カゾフルニイトマアラズ、イヅレモ近世ノ書ハ神妙ノ奇術多シ、然レドモ算ノ本意ヲ失シテ人世ニ迂遠ナルコトノミ多シ、始メニ云シ如ク無用ノコトトナル、愈精シテ愈失ス、漢土ハ其術ハ拙ナケレドモ、本意今ニオイテ存ス、コヽヲ以テミレバ、和邦ハ古ヨリ其術巧ナルコト必セリ、上古ハステヽ、中古ヨリ此カタヲ思フニ、保元平治ノ頃、新院崇德院思召立テ大亂オコリ、源爲義其子義朝ノタメニ七條朱雀ニテ弑サレ、平清盛伯父ヲ殺ス、義朝ハ尾州智多郡ニテ其臣長田ニ弑セラレ、八郎爲朝ハ伊豆ノ島ニテ殺サレ、院ヲバ讃州ニウツス、治承ニ頼政ノ亂アリ、保元ヨリ平家世ヲトツテ、勢ヒ四海ニ震フトイヘドモ、治承ノ末ヨリ源氏關東ニ群起シ義仲入洛ニ趣シヨリ、元暦文治マデニ至リ、安德西海ニ崩御、頼朝四海ヲ平治ストイヘドモ、頼家ハ實朝ニ殺サレ、實朝ハ公曉ニ殺サレ、公曉亦時政ニ亡サレ、和田、秩父、三浦、佐々木ノ舊臣時政ガタメニ家ヲ滅ス、是ヨリ鎌倉六代將軍ニウツルトイヘドモ、順德院ノ思召ニ依テ承久ノ亂オコリヌ、北條家權ヲトツテ、泰時時頼美德アリテ政事ノ私ナク、其身四品已上ヲ不レ受、式目ヲ定メ誓ヲナシ、

親疎偏頗ノ邪マナカリシニ九代目相摸入道宗鑒不德ニシテ奢侈ヲ專ニシ、政事邪マナリシカバ、元弘建武ノ亂オコリ、相續テ五十年鯨波地ヲウゴカス、義滿ニ至テ暫ク平治ストイヘドモ、ナホオダヤカナラズ又明德ニ山名陸奥守ノ亂アツテ京中大ニサワギ内野ノ邊ニ討死ス、其後河州南朝ノ味方ヨリヨリ起テ、騷動ヤムコトナシ、又上杉細川ノ亂アリ、後赤松滿祐將軍義教ヲ弑ス、義政世ヲ治メテ應仁文明ノ大亂オコリ、應仁ヨリ永祿マデ、一日モ合戰ヤムコトナシ、此前後信玄、信長、景勝、北條、淺井、毛利、吉川、嶋津、尼子等ノ面々相互ニ衡ヲアラソウ、信長ハ、光秀ガタメニ弑セラレ、光秀マタ秀吉ノタメニ殺サレ、幾程ナク慶長ノ亂アリ、元和ノ比ヨリ天下泰平ノ世トナリ、有難クモ萬民無爲ノ化ニホコル、保元ヨリ慶長マデ五百有餘年誰人カ數學ヲタシミ樂ンヤ、古ヘヨリ近世ハ上手ナルベキコトナリ、弓ノコトハ知ラザレドモ、聞傳ル一二ヲイヘバ、古ヘ射タル弓ノ流ヲ古流ト云、押手勝手ヨクツリ合、己レヲ正シテ發ツ、ヨク射ル者ハ勝手ノ肘ノ曲ル所ニ茶椀ニ水ヲ盛テ是ヲコボサズト云、サアレバ其キツテ發ツコト今ノ楊弓ノ如シト聞エタリ、中ムカシ日置彈正ト云人此道ヲ發明シ、ヨク射ルコトヲナス、其流四派ニワカル、吉田、雪荊、竹林、石堂ナリ、今ノ射ル者ハ皆此流派ニシテ古流ハナシ、思フニ古流ハ中リコマカナランカ、日置流ハ押手勝手ツリ合セ、己レヲ正シテ意ヲ以テ勝手シマツテ發ツ、依レ之矢走リ勢ツヨク篦深ク立ツコト古流ニ倍スベシ、慶長十一年ノ春竹林ガ弟子淺岡平兵衛盛次ト云人クリ矢ヲ射初ム、通矢ワヅカ五十一本ニシテ天下ニ名望ヲ得タリ（其矢根矢ナリ）ソレヨリ世々

コレヲ射ル者多シ、蓮華王院ノ觀音堂ノ裡ニテ射レ之、天下一ト稱ス、貞享元年甲子、紀州ノ吉見臺右衞門弟子和佐大八則遠惣矢萬有一千ノ內、八千百有餘ヲ通シエテ天下ニ名譽ヲ得ル、東都ニモ堂出來テ、世々コレヲ射ハゲム、其具モムカシハ韘ノ皮バカリニテ作リシヲ、今ハ牛ノ角ヲクリテ入レ、指ノ痛マザルコトヲナシ、弓ノホコヲツメテ、矢ノヨクハジクコトヲ發明ス、又吉田大藏弓ノ竹篦(ヒゴ)ヲ焦シテ是ヲ入ル、矢マス〳〵ハジクコト利シト云、修羅弓モ昔ハ銀ノツクウチタル弓ニナドヽカキテアリ、是ハ重キ矢ノ根ヲカケタルトキ、押手ヨリコロビオツル故ニツク打タリシヲ、今ハツクナシニコロビ落ザルノ傳アリ、クツマキ抔モ傳アリト云、然バ昔ヨリ上手ニナリシヤ如何、其本旨ヲシラズ水子、杉子トモニ曰　足下恒ニ云、數ヲ學ビ其玄々ヲ探レバ道ヲ知ルト、請其說ヲカタレ答曰　此言大事ナリ、夜モハヤ深更ニオヨビヌ、足下モシバシ睡眠セヨ、我モヤスマン、客曰、古人秉レ燭夜アソブマコトニユヱアリ、足下勞ヲ忘レテコレヲカタレ、愚曰、中星漸ク五更ニウツリ興盡タリ、足下ノ聞ト不レ聞トモ命也、コレヲキクベクンバ、愚ニカギルベカラス、人亦コレヲ語ラン、物ゴトノ滿ルモノハ缺ヤスシ、マゲテ後會ノ時ヲ待ベシトテ、相共ニ枕ヲカタブケヌ

數度宵談卷下　終

不盡言

堀景山著

不盡言

堀景山著

文學御達者ニ候ハヾ、御慰ニモ成可レ申ト被二仰下一候事ハ、定テ詩文ニ巧ニナリ、博學ニ成申ス事ト思召候ト存候、勿論人君ノ學ハ詩文博學ハイラヌモノ也、文學達者ニナルト申スコトハ、成程詩文ノコトヲ申ニテモアルベク候ヘ共、愚拙内々存候ハ、文字ニ達スルト云ハ、中華ノ文字ノ意味ニ能ク通達スルコト也、詩文ヲ著シ博學ニナルト云コトモ、先中華ノ書ヲ讀テノ後ナラデハ、何ヲ以テイタスベキ資アルベキヤ、元來書ハ皆中華ノ物ナレバ、先下地ニ中華ノ文字ノ意味ニ能通達セネバ、書ハ讀レヌモノ也、詩文モ慰ニナルマデハ餘程苦勞ヲシ心力ヲ盡サデハユキトヾカヌモノナル上ニ、詩文ニハ人ノ生レツキテ別ノ才モアルモノニテ、器用不器用アル也、博學ト云モ、大體ノコトニテハナラヌ事限モナキコト也、林羅山ナド博學ト云名ヲ傳タル人ナレドモ、ソノ著述ノ書ニ考ヘソコナヒ、取リチガヘモ多クアルコト也、サレバ人ノ常ニ云コトナレドモ、中華ノ文字ト申ハ大キナヒガコト也、文字ト云モノハ元來中華ノ物ニテ、日本ヘ傳ヘ來レルモノ也、日本ニハ文字ハナキ國ナルヲ、中華ノ文字ト云ヘバ、日本ニモ又文字アルヤウニ覺ユレドモ、中華ヨリ外ニ文字ト云コトハナキコト也、文盲

ナル人ハ、イハユル假名ト云モノヽイロハノ字ヲ我國ノ文字トオモヒ、甚シクシテハ、我國ノ俗書家ノ一流書通ノ文字ヲ我國ノ文字トオモヒ、俗書者流ノ村夫ノ子ナド、唐樣ハアシシトテキラヒ、筆法ヲ傳受シテ我國ノ一流也ト祕訣トスル、是皆ソノ本ヲ知ラズ、文盲ナルコト也、イロハナド云ハ、文字ニテハナシ、日本人ノ語ノ聲音（ヒビキ）也、ソレヲ中華ノ文字ノ音ノ似タルモノヲ借用シテ、以呂波ナドト草書ノ體ニ、オカシク書キ崩シタルモノ也、日本ニテ人ノ常ニ云文字ノ音ト云モノハ、元來唐音ヲ傳ヘテ、ソレヲ云ソコナヒ來レルモノ也、我國ニハ文字ノ音ト云モノハ曾テナキコト也、文字ニ音（コヱ）ト訓（ヨミ）トアルユヱ、ソノ音モ日本ノ音トオモヘドモ、文字ノ音ト云モノ日本ニハナキコト也、日本通用ノ語ヲ以テ文字ヲ飜譯シ、一字〳〵ニ訓ヲツケタルバカリノコト也、訓ト云モノハ日本ノ語也、音ト云モノハ皆中華ノ音也、日本ニテハ音ハ合點ノユカヌコトイラヌモノ也、日本ニ傳ヘタル唐音ニ二樣アル内ニ、呉音ハ對馬ノ國ヨリツタハリタルトテ、一名ヲ對馬音トモ云ヘリ、對馬ハ唐山（カラ）ヘモ近ケレバ、カノ島ヘワタレル唐人ニ習ヒ來テ、ヒロマレルナルベシ、今ノ唐音ノ宮音ノ内ニハ、日本ニテ常ニ云フ呉音ガ多クマジリテアル也、唐音モ中華ノ代々ニテ音カハリ、國々ニテ又音モ大キニカハレバ、呉ノ音ノ今宮音ノ内ニマジハレルハ、昔ノ唐人ガ對馬ニテ日本人ヘ傳ヘタリシ時分ノ音ノ殘レルナランカ、漢音トイヘルモノ定テ、イツ時分ノ唐ヨリ傳ヘタル音ナラン、シカレドモ呉音ハアマネク文字ニ足ツテ、漢音ハ音ガ不足アレバ呉音ハクハシク傳ヘ、漢音ハコト〳〵ク傳ヘ得ザリシカ、又ハ傳ヘタ

レドモ遺失セルナランカ、呉トイヒ漢トイヘル名モイヅレノ世ノコトカシレヌコト也、カノ日用書迪ノ文字モ、ソノ本ハ皆中華ノ草書ノ體ニテ、御家流ナドノ筆ヅカヒハ、成程ソノ初ハ唐ノ運筆ニテアリシトミユル也、ソノヤツシ様モ草體ヲウシナハヌモ多ケレドモ、只其文字ノ形ヲ野俗ニイヤシク書クヅシタルモノ也、カノ祖トスル尊圓親王ノ手跡ヲミレバ、甚雅麗ニシテ全ク唐流ヲウシナハヌモノ也、ソノ末流ニ至リ、轉移シテ鄙俗ニナリ、カノ雅風ヲ取リ失ヒ、アシク成タルヲ知ラズ、傳ヘ來ルマヽヲヨシトシ、コレハ我朝ノ筆法ナリトコヽロエ、互ニ相秘授シ俗ニ成カタマリタルモノ也、雅ヲシラズ俗ヲヨシトシルハ、誠ニ孟子ノイハレシ無目者也トモイフベシ、日本モ上代ハ遣唐使アツテ、筆法ハ皆唐山(カラ)ヨリ傳授シタルユヱ、古人ハ皆手跡古雅ニシテ唐流也、今ノヤウナ鄙俗ナ、手跡ノ風ハカツテミエヌコト也、遣唐使ヤミテ後ニ、日本ノ心ニテ我流ヲ出シ、イツトモナクイヤシキ風ニカキクヅシ、ソレヲ段々ニ傳ヘ來リ、我朝ノ筆法ナリトコヽロエ、唐山トハ一流チガヒタルコトヽ自慢シ、文盲ナル者ハカノ俗草ノ文字マデヲモ、我朝ノ文字トオモフヤカラモアル也、皆ソノ本ヲ知ラヌユヱ、鄙俗ナコトヲ高雅トオモヒアヤマリ、唐人ノ手ノ古雅ナルヲミテハ、餘所ノコトノヤウニオモヒ、又コレモ一流ジヤトイフヤウニアルハ、文盲ノ甚キコト也、文字ト云モノ一二三ノ文字ニ至ルマデ、元來一ツモ日本ノ物ニテハナキコト也、日本ニハ日本ノ語アツテ萬事相スムコト也、ソノ語聲四十八音ニテ、日用ノ言語コト〴〵クスミ萬事ニサシツカユルコトハナキ也、ソレユヱ中華ノ文字四十八字

ノ、日本ノ語聲四十八音ニ相似タル字ヲ借リ用ヒテ、四十八字ノ以呂波トシタルモノ也、日本ハ文字ハナクテ語バカリ也、中華ノ語ハ皆文字ニテ、人ノ云ホドノ語ハ、コト〳〵ク文字ヨリ出ル也、シカレバ文字ハ元來中華ノ物ニテ、日本人ノヒトツモ合點ノユカヌモノ也、サレバ書ト云モノ皆中華ノ人ノ言語ナルユヱニ、コト〳〵ク文字ナレバ日本人ノ學文ヲスルニハ、文字ノ意味ニ通達スルガ最初ノ事也、文字ノ意義ニ通ジテ後ニ、初テ書ト云フモノガ讀マルヽコトナリ、文字ニ通達スルヨリシテ、學文ニ入ラデ外ニ入リ樣ハカツテナキコトヽ覺ル也、俗ニ文字讀ト云コトハ、何事ヤラモ知ラズ、人ノロウツシニ唱ヘルマデノコトニテ、ソノ內ハ夢中ノ如ナレバ、眞ノ唐人ノ囈語ヲキクヤウナルベキ也、讀ㇾ書ト云フハ、ソノ意義ヲ合點シテ吟誦スルコト也、元ヨリ意義ガ合點ユカネバ書ト云フモノ、一口モヨマルヽモノナラズ、ソレユヱ善讀ㇾ書ト云ヒ、不ㇾ善ㇾ書ナド云テアル也、日本ニテハ唐本ヲヨク讀ガ讀ㇾ書ト云モノ也、口上バカリニテ吟誦スルヲ、誦ムトハイハヌコト也、勿論文字ハ中華ノ物ナルヲ、日本ニテハ日本ノ語意ヲ以テ、ソレ〳〵ノ文字ノ意味ヲ推量シ、日本ノ語ニ翻譯シ直シ、文字ニ一々和訓ヲツケテ通用シ來レリ、ソノ和訓ト云フモノハ、即チ字義ニシテ又和語也、文字ノ音ト云モノハ日本ニテハ畢竟イラヌモノ、元ヨリ又日本人ノ合點ユカヌコト也、中華ハ又ナニゴトデモ音ニテ合點シ通用スルコト也、日本モ王代ニ遣唐使ノアリシ時ハ、唐話ニヨリ達スル人モ多ク、吉備公ヤ菅、江諸君子ノ手ヲヘテ、和訓モソレ〳〵ノ字義ニチガハヌ樣ニ、大概ハヨク出來テ萬事ニ滯

ルコトモナケレドモ和訓ト云モノハ大概ニツケタルモノニテ、ソノ字ノ意味ヲコト〳〵クハドウモツケオホセラレヌコト也、文字ノ内ニ和語ハ同訓ニシテ、ソノ意味ノ各別ナル字多クアリ、タトヘバ橋ト端トノ類ハ異字ニテ和語同訓ナルガコレラハ字ノ音ノ平上去入ノソカル丶氣味ニテ、ソノ云ヒヤウニテ皆ソカルレドモ、澄ヲスムト訓ジ、濟ヲモスムト訓ジ、翻ヲカヘルト訓ジ、歸ヲモ亦カヘルト訓ズルノ類ハ、和語ヲ文字ニウツシ直スニ同語ナレバ、同訓ニツケネバナラヌユヘ、ソノ和訓ノ同キニヨツテ文字ヲトリソコナフコト多キコト也、事ノ濟ニ澄ノ字ヲカキ家ニ歸ルニ翻ノ字ヲカクヤウノコト、俗ニ多キコト也、勿論唐山ニテモ、同音ノ文字ガ多ケレバ日用ノ俗語答問ヲ中ニテ云トキニ、間アヤマルコトアツテ、烟ト鹽ト同音ニテ似タレバ、烟(タバコ)トイフニ、フツト鹽ヲモツテクルヤウナコトアレドモ、文字ヲ見知ツタ人ノ同音ノ字ニテモ、ソノ字ヲ見ルトソノ字ノ意義ヲトリアヤマルコトハ、何程ニテモナキコト也、スベテ文字ノ意味ハ心ニテ合點セネバナラヌモノユヘニ、意味マデハドウモ和訓ニツケオホセラレズ、文字ハ皆大概ニ和訓ヲツケテオカネバナラヌコト也、ソレデソノ字ノ和訓ノトホリニバカリ、律義ニコ丶ロウレバ、意味ノ大キニチガフ類モ多クアルコト也、又ハ先達モ和訓ニ翻譯シザマニ、カキチガヘタル文字モ數多アルコト也、和語ノ同訓ニヨツテ、文字ノ意味ノ大キニハキチガヘ合點シテイル、文字ト云ハタトヘテイハヾ、以(モツ)テト持(モツ)テト、者(モノ)ト物(モノ)ト、立(タツ)ト絶(タツ)ト、誣(シユル)ト強(シユル)トノ類、アゲテカゾヘラレヌコトナリ、ソノ上ニ一等ノ精シキ穿鑿ニナツテハ、同心ノ文字ナルユヘ和訓

モ同訓ナレドモ、畢竟ハ同心ニシテ、底ノ意味ニ差別アル文字モ又多クアツテ、文章ナドカク時ニ至テ同心ノ文字ナガラソレ〳〵ノ用ヒ所ニ、ドウモサシヌキノナラヌコトアル也、コレハ似テ而非ナル者ナレバ知リワカタイデハ叶ハヌコト也、書ヲヨム時ニ、ソノ字ノ底ノ意味ノ差別ヲ合點セネバ、同心ノ文字ユヱ表向ラハ義モスムヤウナレドモドコヤラ落著セヌヤウニ覺ユル所ガアルモノ也、此類ノ文字ヲヨム時ハ、精シク氣ヲツケ見レバ、カノ差別ガソレ〳〵ニ分レ、ドコデモ約束ガ合フテ、チヨツトデモソノ字ノ用ヒ所ガチガハヌ也、中華ノ雅語ハ勿論ノコト、日用ノ俗語ニテモソノ文字ノツカイドコロ約束ノトヲリミヂンモチガハヌコト妙也、日本ノ心ニテ大概オシトヲリニ見テハ、アヤマリノチガヒメニ氣ガツカヌモノナレドモ、ソノ意味ヲ知テカラハ、目ガツケカハツテ、各別ニ觀ヲ改メテクルコト也、タトヘテイハヾ、恐ト懼ト、閑ト靜トノ字ノ類也、皆コレハ同心ノ字ニテ、和訓モ亦同ジケレドモ、ソノ底ノ意味ハミナ差別アルコト也、恐ノ字ハ物事ヲ前方カラ、モシモコレハカフナラフカト氣ヅカヒスル意味ニテ、ソレヨリオソルヽ心ニナル字也、史記漢書ナドニ多クツカフテ、但恐クハ云々センコトヲ、恐クハ使ニ云々ニナドヽアル所ニ、怪我ニモ懼ノ字ハカイテナキハ差別アルユヱ也、勿論懼ノ字ハ同心ノ字ナレバ、只オソルヽト云訓ニシテ、大概オシトヲリニキコユレドモ、此差別ノ氣ガツイテ見ナヲスト、各別ニソノ所ノ文段ガ面白ク親切ニ合點ユクコト也、懼ノ字ハタヾ物ヲコワガリオソルヽ、心ノ字也、閑ハ何ノ事モナクヒマナ意味ナルユヱ、ヒマナレバシヅカナル也、ソレデハ閑人、

閑官、閑具ナド云熟語アル也　閑人ハヒマナ人、閑官ハヒマナ役、閑具ハ何ノ用ニモヽヽスタリ道具
ト云フ心也、サレバ閑官ヲ静官トモ閑具ヲ静具トモイフテナキハ、ソノ意味ノ差別アレバサシヌキナ
ラヌコトナル也、静ハタヾ物サビシクシヅマリタル意マデ也、閑ノ字ヲツカフ所ヘ静ノ字ハツカハレ
ヌ事アル也、ナレドモ二字トモニ畢竟ハ同心ノ字ナレバ、所ニヨリ事ニヨツテハ通用スルコトモ多
クアル也、此類ノ字ハ同心同訓ナレバ、ヒトツ心ニ見テモ大キナルチガヒナケレドモ、底ノ意味ハ餘
程ノ相違アルコト也、コレ等ハドフモ和訓ノツケオホセラレヌ文字也、中華ノ人ハ音バカリニテ、ソ
ノ字ヲ見レバ心ニ底ノ意味ヲ合點スル故、此ヤウナ世話モナク、字ノ意味ヲソキマヘヌコトハナキ
也、天性文字ノ國ニ生レタル人ナレバ也、日本人ハ和訓ヲ恃ミニシテ、文字ハ和訓ギリニ心得ルユエ
ニ、精ク氣ヲツケネバソノ和訓ニヨツテ、大キニハキチガヘアルコト出來ル也、和訓バカリニテ、文
字ノ意味ニハ通達ナラヌコトナリ、心ニテ合點セネバナラヌ也、勿論中華ニモ字義ノコトニオイテハ、
樣々ノ說モアルユヱニ、字書ト云フモノ多クアリ、又古書ニハイロ〳〵ノ註解モアルコトナレドモ、
日本人ノヤウニ和訓マギラカサレテ、文字ノ意味ヲハキチガヘルコトハ、怪我ニモ無キコト也、ソノ
書ノ文段ノ全體ノ理ノ見ヤウニテ、ソレニ相應シ、人々ノ意見ヨリ字義ヲカヘテ見ル迄ノコト也、ソ
レニハ、善惡モ出來ルナレドモ、ソノ本體ノ字義ヲハキチガユルコトハ、誤テモナキコト也、又文字
ヲトリアヤマツテ和訓ヲツケ來リ、世上日用流布シテ、ニハカニ改カヘニクキモ多クアリ、タトヘバ

胃ナルヲ甲トシ、姑ガ姨ナルベキヲ伯母トシ、公儀ノフレノ心ハ徇ノ字ナルベキヲ、物ニフレサハル心ノ觸ノ字ヲカキ、事ノスムハ畢ナルベキヲ、物ノナリガタキコトヲ、チカラヲソヘテシオホセサスルノ心ノ濟ノ字ヲカキ來ル類ハ多クアルコトナリ、意義各別ナルヲワキマヘズ、和語ノ上ヨリアテズイニ字ヲトリ用ヒタル也、中華ハ天性文字ノ國ナルユヱ、文學ノ音ヒビキヲキケバ、人々ソノ意味ハ自然ト心ニ徹スルコト天性也、唐人ニ學文ヲセヌ者ハ文盲ナルコト、チヤウド日本人ノ如ク唐ニモ文盲ナル者ハ多クアレドモ、唐人ノ文盲ト云ハ「不レ知二一丁ノ字一」トイヒテ、文字ノカタチヲ見知ラヌマデノコトニテ、婦人小兒ニ至ルマデ生レ落ルトハヤ、我シラズ文字ノ意味ニハ通達シテヰルコト、コレ又天性ナレバ也、文盲ナレドモ、文字ノ意味ニハ我シラズト思ヒ過レ半トモ云ベキ也、中華ニ生ル、人ノ言語ハスベテ文字ナルユヱ也、ソレデ日本人ノ樣ニ骨ヲ折ズシテ、唐人ノ學文ハ早ク成就スルコトソノ筈ノコト也、今近ゴロ渡ル唐僧ノ内ニ、アノ方ニテ文盲ナ者ヲ勸メテ日本ヘツレテ來リ、船中ニテ剃髮サセテ長崎デ始メテ學文スルガ間々アル也、長崎デ少ノ間ニツイ手モヨクナリ、詩文モツヾルヤクニナル也、コレ日本人ノ何タル才士ニテモナラヌコト也、日本ニテ儒者ト呼バル丶人ノカク文章ニハ精出シテカイテモ、文法ニ轉倒錯置アリテヨマレヌガ多クアル也、林羅山ナド、日本ノ大儒トイハレシ人ナレドモ、羅山文集ノ内ニハ大キナ轉倒ガ多クアルコト也、中華ニテハ日用ノ俗語デモ、日本ノ語ヲ平假名デカクヤウニ、ソノイフトヲリヲ眞直ニ文字ニ寫シテ見レバ、皆文章ニテナリト語ヲ成シ、轉倒ナ

ドハ怪我ニモナキハ亦是天性自然ノコト也、日本ハ元來文字ノナキ國ナレバ、文字ノ事ニオイテハ、物ノ一重ヘダタリタル如クナリ、シカルユヱニ日本人ノ學文ノ入リヤウハ、外ノ事ハ先ヅサシオキ、文字ノ意義ヲ能々味ヒ合點スルコト第一ノコト也、文字ノ意義ニ通達スルコト粗略ナレバ、和語ニ引直シテ書ノ文句ヲ見テ推量シ、サマ〲心得チガイ出來テ、古聖賢ノ語意ヲ大キニトリチガユルコト多クアルベシ、儒者トテモ初メニ文字ノ意義ヲ不吟味ニシコミタル人ハ、イツマデモソノ氣ガツカズ、文盲ナルコトヲ云ヘル輩ガ、京師ナドニモ多クアルコト也、古聖賢ノ語ハ書ヲハナレテ外ニハナキコト、ソノ書ト云モノハ皆中華ノ物也、シカレバ、書ヲヨマズシテハ、聖賢ノ雖有教ハ何ヲ以テ知ルヤウガアルベキヤ、ソノ書ト云モノコソ、皆文字ニシテ、ソノ文字ヲ積デ語ヲ成シ、語ノ積デ書ト成リ、古來傳授シ來レバ、何ヲイフテモ先ヅ文字ノ意ニ通達セイデハ、聖賢ノ語意ヲ實ニ合點ノユカウヤウハナキコト也、仔細ラシク經書ノ講釋ヲ、我ガ物顔ニ色々ト辯ヲツケ、古ヲフルウヲ、タトヒ聞エタトコロ、尤至極ニシテ、面白キコトニテモ、文字ノ意義ヲトリソコナツテ、妄リニ辯ヲ飾リタルハ、ソレハ皆私意ヲ以テ推量シタルコトニテ、カンジンノ本體ノ聖賢ノ意ニアラヌコト多カルベシト覺ユル也、文字ノ意義ハ少シノトリチガヘデモ、イヒツノレバ大キナ謬リニナツテ、一毫千里ニナルコト也、愼ムベク畏ルベキコト也、サテ又古ノトホリニ字ヲ積デ語ヲ成シ、語積デ書ト成リタルコトナレバ、彼ノ字義ヲ辯ズル内ニハ、又中華ノ人ノ語勢ヲトクト合點セネバ文字ノ意義ニ通達シタバカ

リデハ、又書ガ讀マレヌモノ也、シカルニ中華人ノ語勢ト、日本人ノ語勢トハ、雲泥ノチガヒアルコト也、ソレユヱ日本人ノ語勢ヲ以テ中華人ノ語勢ヲ推量スルニヨツテ、心得チガヒガ出來ル也、スベテ中華人ノ語勢ハ、日用通俗ノ語勢モ、雅文經子史集ノ語勢モ、ソノ勢ハ皆同ジ樣也、日本人ノ文ヲカイテ、語ニ顚倒ノ出來ルト云フコトハ、中華人ノ語勢ノ樣子ヲトクト考ヘズ、ヤハリ日本人ノ語勢ノ意持ヲ以テ文ヲカクユヱニ、顚倒ノ出來ル筈ノコト也ソノ譯ハ日本人ノ語勢ハ俗語雅語トモニ、スベテ物體ヲ先ヘ云、用ヲ後ニ云習セ也、コレ日本ニ生ル丶人ノ天性ノコト也、中華ノ語勢ハ雅俗ノ語トモニ、スベテ物ノ用ヲ先ヘイヒ、體ヲ後ニイフ習セニテ、是亦中華ニ生ル丶人ノ天性ノコト也、カクノ如クソノ語勢ニ各天性ノ相違アルコトヲ考ヘズ、中華ノ書ヲ讀ニヤハリ日本ノ意持デ和語ノ勢ノ通リニ合點スルユヱニ、皆上ガ下ヘ顚倒シテ日本ガツテニ體ノ文字ヲ先ヘヨミ、用ノ文字ヲ後ニヨミテカノ反リ點ト云モノヲツケテ倒讀セ子バナラヌ筈也、ソレヲ又中華ノ語勢ヲ知テ、ソレニシタガヒ書ヲヨミ、用ノ字ヲ先ヘ體ノ字ヲ後ヘヨメバ、イハユル御經讀ト云モノニナツテ、日本人ハ一向ニ合點ヲ得セヌコト也、中華人ノヤウニ書ヲ直讀シテ義ヲ通ズルコトハ、日本人ノ意持デキル内ハ、ナンボデモ合點ノユカヌト云コトハ、天性語勢ノ習セガ相違アレバ也、中華ノ人モ亦日本人ノヤウニ、下カラ上ヘカヘツテヨミ、體ノ字ヲ先ヘ用ノ字ヲ後ニヨミ、合點スルト云フコトハ、ナニ程ニイフテキカセタリトモ、得心スマジキコトト覺ル也、日本人ノ上カラ直讀シテ義ノ通ズルコトヲ、何程デモ

合點セスト同ジコト也、中華人ノ語勢ハ、天性ト用ヲ先ニイフガ習セナレバ、中華人ノ語ヲ口ウツシノマヽニ、直ニ文字ニ寫シテ見タ時ハ、タトヘバ「在明明德在新民」トカイタガ正直也、俗語ニモ、日本人ハ茶ヲ持ツテコイトイフ語勢也、茶ガ語ノ內ノ體ナルヲ先ヘ云フ也、文字ニウツシテモ、茶ヲ先ヘ書キ、持ヲ後ニ書ク也、御暇ヲ申スト云モ御暇トイフガ體ナルヲ先ヘイヒ、申スハ用ナルヲ後ニ云フハ、日本ノ語勢ニテ萬事皆シカル也、ソレヲ中華ノ人ノ俗語デハ、「拿茶茶來請去了」トイフ語勢也、拿ヲ先ヘイヒ、茶ヲ後ニイヒ、請ヲ先ヘイヒ、去ヲ後ニイフ也、文字ニウツシテモ如レ此ニシテヤハリ文章ヲ成シタルモノ也、日本人ノ語ハ文字ニ寫セバ、ミナ顚倒ニシテ、カツテ文章ヲ成サヌコト也、日本人ノ口ウツシヲ文字ニ寫シテ見レバ、「明德明在民新在」又ハ「茶持來去請了」ト書ケバ、一向ニワケモナイモノニシテ、ドウモヨマレヌコトニナル也、然レドモカクノ通寫シタヲ日本デハ正直トオモヘドモ、中華人ガコレヲ見レバミナ顚倒ジヤト見ル也、ソレデ中華デ直讀トオモフテイルハ、日本デハ倒讀ト見ル也、日本デ直讀トオモフテイルハ、中華デハ倒讀ト見ル也、天性ノ語勢ノ習セ相違ナレバ也、日本ノ草紙物語ナドハ、日本人ノ語勢ノトホリニカキタルモノナレバ、體トシテイヘル文學コト〳〵ク上ニアル也、ソノ內ニ和歌ニハ、中華人ノ語勢ニ似タルコトアル也、文章ヲナスニハアラネ共、中華人ノ語勢ヲスベテ合點セフトラナラバ、和歌ノ內ニ、タトヘバ、オモヒキヤ…………トハ、イカニセン…………トハ、下ニトハトイヒトメテ上ヘカヘリテ、心ノ通ズル體製ノ歌アリ、中

華人ノ語勢ハ何事ヲイフモ皆コノ勢也、是ヲ以テソノ語勢ヲ察スベキコト也、カフミレバ反リ點ト云モノナシニ、合點ハ心ニテユクコト也、ナレドモ只空デ口上ニテイフバカリナレバ、ソノトホリ國ノカハリニテ、天性自然ノ習セナレバ、是非ニ及バヌコト也、少ニテモ、文字ニカクト云フ時ニナツテハ、文字ト云モノ元來中華ノ物ニテ、日本ノ無案內ナルコトナレバ、「在所民」ヲ「民新在」ト書キ、「請去了」ヲ「去請了」ト書イテハ、一向ニワケモナイコト也、中華ノ國ハ天地ノ間ニテ正中（マンナカ）ノ國ナレバ、何事ニテモ正キ筈ノ理ナルユヱ、人ニモ聖人ガ出生シ玉フナレバ、人ノ語勢トテモスベテ用ヲ先ヘイヒ體ヲ後ニイフガ正眞ノ事ナルベシト覺ユル也、サレバ日本ノ如ク體ヲ先ニ云ヒ、用ヲ後ニイフ語勢ハ結句ニ顚倒ナルベシ、虛字助語ノ上マデモ亦オノ〳〵體用アレバ、カノ所以、所謂、不能、不可ノ類マデモ用ヲ先トシ、體ヲ後トスル模樣ソナハル也、是卽語勢ノ當然ナルコトミエタリ、元來文字ト云フモノ、神妙不測ナルアリガタキ物ニテ、天地ノ間ニ一日モナクテ叶ハヌモノ也、今モシ文字ナクバ萬事闇ノ如ク、何ヲ云フテモ證據ナクヒトツモ埒ハアクマジキトオモハル也、サテコソ中華ハ天地ノ正中ノ國ニテ正キ國ユヱニ、神妙ナル文字出來タルコト也、ソノ本ハ凡人ノ私慮巧造ヨリ出來タルモノトハオモハレヌ也、シカレバ向上ナルコトナレドモ、書ヲ讀ニハ日本人ノ心持ヲトントハナレテ、中華人ノ心持ニナリカハツテ見子バ、正眞ノコトニテハナキ也、日本人ノ心持デキル內ハ、書ヲ讀ムニ反リ點ナシニ直讀シテハ、ドウシテソノ義理ガ通ズルコトゾト、イツマデモ疑ハ晴ルコトアルマジキ

也、又中華人ノ心持ニナツテカラハ日本人ノヤウニ下カラ上ヘ反リ、倒讀ノ義理ヲ合點スルコトハドウジヤゾト疑ヒ惑フベシ、何程ニイフテキカシテモ、トント日本人ノ心持ニナリキラネバ、イツマデモ得心ハセマジキ也、亦是ヲノ〱ソノ天性習慣ノ自然ナレバ也、莊周ガ心持ニ胡蝶ナク、胡蝶ガ心持ニ莊周ナク現(ウツヽ)ガ周カ夢ガ周ニナツテミネバ周タルコトヲ知ラズ、蝶ニナツテミネバ蝶タルコトヲ知ルマジキコト也、右ノトホリナレバ、日本人ノ學文ヘ入リヤウハ、先字義ト語勢トヲヨク辨ジテ、ソレヲズイブンチガハヌヤウニソロ〱ト和語ニ翻譯シ、合點スルガ最第一ノコトナルベシ、學文ニ入リ様ノサマ〲アルト云フコトハ、字義語勢ヲ大方ニ辨ジタル以後ノコトニテ、ソレカラシテハ面々物數奇モ趣向モ出來ルユヱ、人々ノ導キカハツテ學文ノ入リ樣、サマ〲ニナリタルモノ也、書ヲ讀マズシテ學文ト云フコトハナラヌコト也、書ヲ讀ムカラハ、字義語勢ヲ辨ゼズシテハ、イカデカ書ハヨマルベキヤ、ソレヲ文盲ナル者ハ、只理窟ヲ聞クコトバカリヲ學文ジヤト心得ルガ多キ也、字義語勢ヲ辨ゼズシテ、初心ノ内カラハヤ高妙ナル經書ノ理義バカリヲ、日本人ノ講釋ノ上ニテ聞キ習ヒ、私意ヲ以テ書ヲ讀ムユヱニ、我知ラズト大キニ理義ヲトリソコナフテ、俗ニ云フサイタラ畠ヘユク也、元來中華ヨリ傳リタル古聖賢ノ書ハ皆中華人ノ語也、古聖賢ハコト〲ク、中華人ナレバ中華人ノ語勢ト字義トヲ通達セズシテハ、何ヲ以テ古聖賢ノ語意ヲ合點スベキゾヤ、只一義ノ意義ニテモ誤テワルヲ推量スレバ、聖賢ノ實意ニモナイコトヲ、己レガ私意ヲ以テ造リコシラヘルモノ也、

物體(モツタイ)ナキコトト愼ムベク畏ルベキヿト云ベシ、サヤウニ私意ヲ以テ理窟ヲ造リコシラユルナレバ、古聖賢ノ書ヲヨムニハ及ブマジキコト也、イカニトナレバ理ト云フモノハ、畢竟極ツタヤウナモノデ極マラヌモノ、空ナモノナルユヱニ造リ拵ユレバ、白イモノヲ黒ナリトモドノヤウニモ云ヒマハサルヽコトニテ、心得次第ニテイロ〳〵ニナルモノ也、ソノ內ニ正眞ノ理ヲ知ルト云フガ、聖賢ナラデハナラヌコト也、凡人ノ智惠ニテハ、彼(アレ)ジヤトオモヘバ彼ガヤウニオモハレ、此(カウ)ジヤトオモヘバ又カヤウニモオモハルヽモノ也、京都ナドニ講肆ノ先生トイハル人、字義語勢ヲモ辨ゼズ、日本心ヲ以テ巧ミニ己レガ私意ヲ以テ、人ヲ面白ガラスヤウニ理ヲ飾リ辯ヲコシラヘ、聖賢ノ曉ノ夢ニモオモハレヌコト共ヲ辯舌ニノツテイヒチラス輩ガ多キコト也、皆是ハ文盲ナルコトノミナラズ、物體ナキコトトオモハルヽ也、世上文盲ナル人ガ古聖賢ノ高妙ナル語ヲキヽ、片ソツヘラヲキヽハツリテ、ソレニ私意ヲ以テ理ヲツケナラヒテ、ソレガ功ズレハカノワルフスレバ、心持偏屈ニ理窟クサク成、色々ノ私意ガ出來テ一種ノ料見ガツキ、カリソメニモ物事ヲマツスグニトホサズ、一理窟ヲツケルヤウニ成リ、人ヲサゲシミ我シラズ高慢ニ成リ、人柄アシクナル媒トモナリユクコト也、世上ニ文盲ナル者ガ學文スレバ人柄アシクナルト云フコトハコノユヱト覺ル也、又日本ノ儒者トイフモノニ、近代ハ朱學者、王學者ナドトテ、佛者　宗門ヲ立ルヤウニシテ、一流ヲ立テ門ヲ專ニシ、唐本ヲヨミ文字センサクヲスル人ヲ、記誦詞章ノ學ジヤトテ甚賤ミ、ソノ身ハ字義語勢ハカツテ不案內ニ一向文盲ニシテ、タヾ假

名抄ニテ講釋ノ辯ガキヲソノ師匠ヨリ互ニ秘傳シ口訣トシ、學文ト云コトヲソレデスマシ、孔子ノ意ニモ朱子ノ意ニモカツテナイコトナドヲ私意ヨリ造リ拵ヘ、人ヲ面白ガラス辯ヲフルヒ、俗人ヲ誑ル輩ナド多クアル也、皆是上ニイヘルトホリ理ト云フモノ、極マリテ極マラヌ空ナルモノナレバ、人ノ私造ニヨツテハイカヤウニモ成リ、雄辯ニマカセテハイカナル大學者ニテモ、イヒツメラルベキコト也、サレバコソ夏ノ桀王ヲ史記ニ「辯足以拒諫」トハイヘル也、近代又日本ニ劒術者流ト云フモノ、面々ニ理窟ヲ造リ拵ヘテ、一種ノ道ヲ說クモノ多シ、或ハ孟子ノ不動心ノ說ヲカリ氣ヲ養フコトヲ云ヒ、又ハ神武大道トヤラン云フコトヲ拵ヘ、劒術ハ元來周易ヨリ出ヅトテ、神武不殺ト云コトヲ本トシ、陰陽ノ理ナドヲ面白ク傳會シ、文盲ナル武士ヲアザムク類モアリ、又近比ニハ京師ニ茶道ト云フテ、點茶ノ道ノ根源ハ論語ノ理ヨリ出タルコトトテ、孔子ノ語ヲ借リ用ヒ、ソノ理ヲ辨ズルコト甚面白ク人ノ耳ヲ驚カシ間ニ文盲ナ者ハ尤ナルコトト感服スルヤカラモアレバ、京師ニテハ茶儒ト稱スルヨシ也、傍カラ聞イテモ恥ガハシク面ハユキコト也、是亦唯理ト云モノ空ナルモノユヱニ、人ノ私造ヲ以テ辯舌ニ舞セバ、ドノヤウニモ尤ラシク面白フナレバナリ、シカリトイヘドモ、三代先王孔夫子ノ書ヲ借リ用ヒ、己レガ私意ヲ以テ下賤ナル家業ノ飾トシ、人ヲ騙弄スルコトサテ〳〵悲ムベク物體ナキコト愚拙ハオモハル丶コト也、佛家ノ方ニモカヤウノ事多クアルコト成ニヤ、明惠上人ノ歌ニ「けがさじとおもふ御法をともすれば世わたるわざとなすぞ悲しき」ト詠ゼラレシハ、誠ニ殊

勝ナルコト、常ニ感賞スルコト也
人君ノ學文ニハ、資治通鑑ヨリハ貞觀政要ノ方ガ實用ナルベク思召候ヤウニ、御書面ニ相見エ申候、コレハ一途ニタヾ諫ヲ容レ用ラルヽコトヲ勸進シ奉ラル御趣向ト相聞エ、至極ノ思召御尤ニ存候、サリナガラ古來經ト史トハ、車ノ兩輪鳥ノ兩翼ノ如キモノトカ申傳ヘタリ、凡經ハ皆左樣ナフテ叶ハヌ筈ノ定リタル道理ヲ說イテ、條々ニ人ニ教訓シオキタルモノ也、史ハ皆古ヨリ近代迄ノ代々ノ時勢風俗事ニ因リ、時ニ臨ムデノ人ノ言行善惡トモニアリノマヽニ記錄シ、代々ノ君臣ノ政治行跡人情ノ變態ヲ、コト〴〵ク知ラシムルモノ也、シカルユヱニ人ノ教戒トナリ、善惡トモニ手本トナリ鑑トナルコト、經史兩方トモイヅレモ人君ノ別シテ急務功用ナルモノ也、經ハ理也、史ハ事也、理ノ當然ヲ推シテ事情ノ變ヲ察シ、事情ノ變ヲ考ヘテ理ノ當然ニ料ルコトナレバ、事ト理トハイヅレヲ先トモシガタキコトナリ、シカシナガラ下地ニ先ヅ理ニ達シテイタラバ、何事ニ出逢テモ少モソコニ惑ハヌ筈ナルベキコトナレドモ、高明ニ生レツキシ人ハ各別ノコト、中人以下ノ人ハ平生アマリニ理バカリ詮議シスギ、ソレニ拘泥シテ理窟クサクナレバ、必時ニ臨ミ事ニ因テハ結句偏屈ニテ通ゼヌコト出來テ、理ヲトリマドヒワルウシテハ、仕ソコナフコトモアルコト也、又世間ノ事變ニ歷ワタリ、人情ニヨクナレタル人ハ、理ノ當然ヲハヤク悟ルモノニテ、事實ノ上カラシテ道理ヲ考フレバ、早クソノ當然ヲ悟ルコトモアルモノ也、スベテ事ハ時ニヨツテイロ〳〵變態ノアルモノニテ、定ツタル道理バカリヲ

以テ料見スレバ、ドウモ決斷ナリガタキコトモアル・ユヱナリ、事變ニ多ク歷ソタレバ事ノ成敗ノソケヲ直ニ知テ、如レ此スレバ善シ、如レ彼スレバ惡ルイト云フコトガ能ク功者ニナルユヱ、ソノ理ノ當然ガ早ク見エテ來ル筈モアル也、別シテ人君ト立チ國家ヲ支配スル人ハ、先ヅ古今ノ事實時勢ノ成敗ヲトクト考ヘ知ライデハ叶ハヌコト也、史ハ古來ノ事實成敗ヲアリノマヽニ記錄シタルモノナレバ、人君ノ學文ニハ、史ヲ學ブガイチハヤク用ニ立ツコトアリテ切要ナルモノ也、史ヲ覽ル內ヨリ、自然ト世上ノ人情ニモ通ズル筈アリテ、臣下ノ內ニ姦佞ニシテ上ニ諂フ者モアリ、正直ニシテ諫諍スル者モアリ、或ハ事ノ得失ト決斷シガタキニ至テ詮議スル時ニ、臣下ノサマ〴〵ナル面々ノ意見ヲ言上スルトコロヲ考ヘテミレバ、ソノ理非モヨクミユルモノ也、今日ニ在ルホドノ事ハ大概古モ亦アルモノナレバ、先ヅ古來ノ事實ノ成敗得失ト、古人ノイヒシ議論ノ理非ヲ下地ニトクト考ヘテヲレバ、今日アル現在ノ事ニ引クラベテ見レバ、ソノ理ガトクト合點ユキ、古聖賢ノ名言ニヒシト符合スルコトヲ思ヒアタルベキ也、ソレデハ經理モ親切ニ的實ニ得心スルモノ也、カノ經理ノ高妙ナルトコロヘモソレカラシテハ、次第ニ見ヒラキヨウモナリユクモノニテ、經理ノ高妙ナド思フコトモ心ヤスフ鼻ノサキニアルヤウニ合點ガユクモノ也、今ノ世ニ學文トイヘバ、初心ノ人ニハヤ大學ヲ講釋シテキカセ、中庸ナドヲ說キ聞カスルコトニナリヌ、大學中庸ナドソノ理高妙ナルモノユヱ、初心大體ノ人ノ耳ニイラネバ聞カヽツテモ精ヲツカシ、ツイ怠リヤメルヤウニ多クハ成リ、ソノ內ニ合點ユカズニ無理ニツ

トメテ聞トホシ、又ハ生レツキ高妙ナル人ナド大方ニキヽ悟レルモ、カノ私造ノ料見ガツキ理窟クサク成リ、偏固ニ成リ、事ニ通ゼザルヤウニモ成ユクモノ也、是タヾカノ字義語勢ヲトクト合點セズ、私造ノ偏見ガデキルユヱノ事也、ソノ上ニ元來大學ナドハ、初心ノ人ノキクモノヽヤウニ世上ニ覺エテヲレドモ、初心ナル人ノ遽カニ聞クコトニハアラズ、古ヘ三代ノ時分、十五歲ヨリ大學寮ヘ入ルト云フ先王ノ掟ニモ、ナベテノ人ノコトニハアラズ、天子ノ元子衆子ト、公卿大夫ノ嫡子バカリト、凡民ハソノ內ノ俊秀ナル生レツキノ者バカリヲエランデ入ルヽコト也、大體ノ生レツキノ人ナレバ、大學ノ敎ヲキクコトハナラヌトミエテ、至テ人ニスグレタ者デナケレバ、大學ノ敎ヲキキテモ用ニ立タヌナレバナルベシ、タヾ小學ノ敎ハ上下オシナベテノ人ノ敎トミエテ、先大體ナ人並ノ人ノ敎ハ小學ノ敎ギリニテスマシタルコトナルベシ、大學ノ敎ハ天下國家ヲ治メ、人ノ上ニ立ツベキ人ノ學文ニテ一等向上ナル敎ナレバ、凡民ノ上ニハ先ヅ急用ナラヌコト也、ソノ內ニ俊秀ニシテ引キアゲテ公卿大夫ニモナルベキ者ハ、格別ニエラビテ大學寮ヘ入レラルヽコトトミエタリ、シカレドモ古ノ小學ノ敎トモ久ク斷絕シタルコトナレバ、委細ハシレズ、今アル小學ノ書ハ朱子ノ集メラレテ、古ヘ小學寮ニシテ人ニ敎ヘラレシコトノ古書ノ內ニ端々ミエタルヲトリ集メタルマデノコト、ソノ上ニ朱子ノ料見ヲ加ヘ、後世ノ諸書ノ內ニアルコトマデヲ引合セラレシモノ也、コレハ初心ノ人ニ講ジキカスベキコト也、小學ノ敎ハ畢竟ハ敬ノ一字ニ歸スルコトナレバ、曲禮ノ篇ガ大方小學ノ敎トミエタリ、スベテ

人ハ兎角ニ幼少カラノ敎ガイチ大切ノコトニテ、ソノ敎ト云フハ心ノ敬ヨリ外ノコトハナキ也、敬トイヘバハヤ人ガコムヅカシキコトノヤウニ心得レドモ、左ニテハナカルベシ、敬ハタヾ人ノ心ノシマリヲイヘルコトニテ、物事ヲ畏レハヾカリ、大事ニカケ微塵デモ氣マヽニ肝太クナゲヤリニナリ、我慢ニナラヌヤウニトスルコトバカリノコト也、敬ノ工夫ナド云フコトアレド、ソレデハハヤ味ノ外ニムヅカシクナリ、大體ノ人ノナラヌ及バヌコトノヤウニナル也、敬ハタヾ小學ノ敎カタニコツテ、幼少ノ時ヨリ仕習ニ成リ、我シラズト心ガ敬ニナリカタマツタルモノ也、工夫スルヤウデハ用ニ立ツマジキコト也、スベテ人ノ我慢氣マヽニ勝手シダイニナルト云フモ、生レツキニモヨルトハイヒナガラ、第一ハ幼少カラノ仕習ニヨルコト也、何事ニテモ習ト云モノガ大事ニテ、學ヨリハ習ヨトノ云フ俗語ノトホリデ、（俗語ノナラフト云心、文字ニテハ學ノ字ニアタル也、ナレコト云心ガ習ノ字ニアタルナリ）善キコトモ皆習セニテ、成就シ、悪キコトモ尚サラ習ハセニコツテ染ヤスキモノ也、何程ヨキ生レツキノ人ニテモ、幼少ノ時ニ氣マヽ勝手シダイニソダテアゲバ善キ人ニオヒタツベキヤウハナキコト也、サレバ幼少ノ内ニ敎モナク、氣マヽ勝手次第ニシテオキ、成長シテ俄ニ行儀アシキトテ意見ヲ加ヘ敎導シタト云フテモ、ソレハドウモナラヌコトナルベシ、清少納言枕草紙ニモ、見習ヒスルモノト云内ニ、アクビト兒ドモト書ケリ、ソレユヱ世上ニ幼少ヨリ氣マヽニソダテアゲル人ハ、十人ガ九人ハ必定カ成長シテ我儘我慢ニナルモノ也、譬ヘバ作木ヲスル如ク、若木ノ時カラソロ〳〵枝ブリヲタメ直シ、メツタニノビル枝ナドヲ斬リ、ハビコル葉ヲツミナ

ドシテ、恰好ノヨイヤウニ作リタツルユヱニコソ、大木ニナリテモヤハリ若木ノ時ノ木ツキヲトリ失ハズ見事ニミユル也、ソレヲ若木ノ時ニノビタイマヽハビコリタイマヽニシテオキ、大木ニ成リ枝モ幹モコハクカタマリキツテカラ、俄ニ木ツキ枝ブリ見苦キトテ恰好ヲヨクセウトシテタメツキリツスレバ、必木ツキハ直ライデ枯レテ仕舞フモノ也、人モ亦カクノトホリ也、別シテ人君ニナル人ハ、幼少ノ時ニハ大形ガ常ノ人ヨリハ各別ニ大事ニカケ、ドウシテ成リトモ息災ニ生長ナサルレバヨイコトトシ、兎角病氣ノ出ヌヤウニト何ニテモ氣屈シ精ノツキルコトハサセヌヤウニシ、隨分氣儘ニソダテ、左右ニ立マハル者モ善惡トモニソノ人ノ仰セラルヽヤウニスルユヱ、自然ノ習慣ニナリキツテ、皆ソノ性根氣隨我慢ニナライデ叶ハヌコト也、ソレユヱ古聖人ノ敎ニハ、天子ノ太子、諸侯ノ世子ニハ、必幼少ノ時ヨリ師傅トテソノ人柄ヲ選ビ、傍ヲハナサズツケオカルヽ也、師ハ師匠ト成リ、禮法讀書ナドヲ敎ヘ、行儀ノアシキコトアレバ敎訓シテ氣隨ニサセヌヤウニシ、傅ハソノ傍ヲハナレズモリヲシテ行跡ヲ吟味シ、怪我ナドナキヤウニ萬事ニ氣ヲツクル役人也、何事ニテモ師傅ノ云コトヲソムカセズ、師傅ヲ畏レサスルヤウニシタルコト、即チ幼少カラ敬ヲ敎ヘテ氣隨我慢ニナラヌヤウニシタルモノ也、後世ニ又ソノ師傅ノ外ニ友トテ人柄ヲ選ビ、ソノ友達相手トナツテ共々ニ禮ヲ習ヒ書ヲ讀マスル役人ヲ設ケ、ソレハ臣下ノ列ヲハナレタル者ニシテ太子ト同輩ノ氣味ニシ、相互ニ物ニ精ヲ出シ勵マスヤウニシタルモノ也、下ザマノ人デモ何藝ヲ學ブトテモ、ソノ師匠ニ習フバカリデ弟子朋輩ナ

ク友吟味ナケレバ、勵ミナク勢ナクテソノ藝モアガラヌモノ也、コトゴトク師匠ニモ問ヒニクキモノナレバ、萬事イヒ合セ心ヤスク相談ノ相手ナケレバ成就シガタキモノユヱ、師アッテ友ナケレバ叶ハヌコト也、孔子モ「以レ友助レ仁」ト仰セラレシコト也、臣下ノ列ノ人ナレバイヒ次第ニナルモノユヱ、アマリ用ニ立タネドモ、友ト名ガツクユヱ心持ガ甚ダチガヒ、助ケトルコト多キ理アル也、シカレバ太子世子ノ傍ニハ、必ズ師傅、友ノ役人ナケレバ叶ハヌコト也、是即チ古聖人ノ遺教也

日本武家ノ政ニナリテコノカタ、シッカリト師、傅、友ノ役人モ設ルコトナケレバ、近代ノ大名ノ世子ハ殊サラ大方幼少ヨリ我儘ニソダテアゲ、傍カラ善惡トモニイハセヌヤウニシ、人ヲ何トモ思ハズ學文ハ精ガツクレバアシキトテ、幼少ノ時ニハサセズニオキ、只勝手次第アリタキマヽニ成長サセタルモノナレバ、カノ我慢ノ性根、ハヤ幼少ヨリ我シラズト出來テ、習慣自然トナル筈ノコト也、ソノ內ニスグレテ聰明ナル人ハ、サヤウニモアルマジケレド、中材以下ノ人ハ我慢氣隨ニナラデハ叶ハヌコト也、日本人ノ學文ハ唐人ノ學文スルトハ大キニチガヒ、一重ヘダヽリテ甚難キコトユヱ、餘程精ヲ盡シ心力ヲ勞セデハ、何程デモユキトヾカヌコトナレバ、彼ノ上サマノ人ノ氣隨我慢ニソダチタル人ナドヲ、俄カニ學文ヲサセフト云テモ、大體ニテ事ユクベシトモ思ハレズ、少ニテモ面白ト感心シテアノ方ニ徹スルコトナケレバ、ソノマヽ精ヲツカシ學文ヲウトマルヽヤウニナルコト必定也、サテ貞觀政要ト云フ書ハ、魏徵ナドノ正直ナル諫ヲ、太宗ノコト〳〵ク容レ用ヒラレシコトヲカキ集タル

モノナレバ、實ニ政治ノ龜鑑ナルコトナレドモ、ソノ書ノ全體議論ノ文章ナレバ、諫諍スルコトノ理窟入リ組ミタルコトノミ多ク、工面ヲ始終トクト合點セデハ中々心ヤスフハ通ゼヌ書ナルユヱ、別シテカノ字義語勢ニ通ゼネバ、ソノ意味合點シガタキコト也、スベテ事實ノ成敗ハ合點ユキヨキモノニテ面白キモノ也、議論ノ理窟ハ工面ガトクト合點ユカネバ、面白キトコロヘユカヌモノユヱ、議論ハ合點ユキニクキモノ也、合點トクトユカネバハヤク精ツキ、ツイ書ヲウトミヤスクナル也、初心ノ人下地ニ一向字義語勢ノ合點ナキ人ニ入組タル議論ノ理窟ヲ、タトヒ講釋ニシタト云ヒテモ、ソノ心ニトクトハ徹シガタキモノ也、コレモ初心ノ人ニ高妙ノ理ヲ說キ聞カスルト同ジ類也、事實ノ成敗ノ趣ハ初心ノ人モ通ジヨキ方モアル上ニ、字義語勢共ニ事實ヲ記シタル文章ハ、議論ノ入組ミタルヨリハ辨ジヨスキモノ也、スベテ何事ニテモ心易キ方ヨリ至テ難キトコロヘ入リコム順理ナルコトニテ、躐レ等（コユルシナナ）ト云フコトハ宜シカラヌコトト古ヨリ戒メ來レリ、ソノ上ニ事實ノ成敗ヲ記錄シタル書ハ、畢竟昔物語ヤ今日ノ世上咄ヲキクト同ジモノニテ、誰デモ先ヅ耳近ク面白ク其慰ニモ成レバ、カノ精ヲツクシ書ヲ疎ム患モ少ク、ソレヨリハ學文ニトリツク氣ニモ移リヨキコト也、學文ト云フモノハ少デモ心ノ內ニ樂シミ、面白イト思ヒ、感徹シテセネバナラヌモノト思ヒ込ムモノガ一ツ生ジ出來テコネバ、何程デモ進ムモノニテハナシ、面白イト樂ミ心ヨリ感徹シテ、コレヲ仕トゲネバ叶ハヌト思フ心ガ生ズレバ、聖人ノ敎ヲ樂ミ、コレナラデハト云フ氣ガツキ、實ニ尊敬スル心モ生ズルモノ

也、ソノ人ノ心ニ未ダ面白ト思ヒ感徹スル心ノ生ズルコトモナキニ、僅カニ當ニテ無理ニスクメ往生トヤラン云ヤウニ勸メ責メツケタレバトテ、カノ馬ノ耳ニ風、ツケヤキ刃ト云モノニテ、一ツモ用ニ立ツモノニテナシ、況ンヤ上ミ樣ノ人ナドハ我慢氣儘ニソダテタレバ、ソノ人ノ心ニ面白ト思ヒ尊敬スル氣モ生ゼヌニ、傍カラ學文ニ勸メ責メ申シケレバトテ、イカナコト徹スマジキコト也、漢ノ高祖ノ如ク、儒者ノ顏ヲ見ラルレバ胸ワルク思レ、溺レ冠モシタキ心ナルベシト思ハルヽコト也、譬バ無根ノ草木ヲ種ヘテ榮エサセフトスルゴトク決シテナラヌコト、タトヒ蘇張ガ辯ニテ說キ聞セタリトモ、世話ノヤキ損ニテアルベキコト也、初手カラ面白イ遊藝、碁、將棊、音曲ノ類ニテモ、其人ノ心ニイマダ生ズルモノナクテ、スカヌコトヲ外カラ無理ヤリニ勸メ込ミサセタト云フテモ、精ヲツカシ氣ヲ屈シ、何程デモ進ミハナキモノ也、ソノ内ニ遊藝ハ人ノ勸ニヨツテ、ツイ數寄ニナルモノアルコトナレドモ、根ニスカヌコトナレバ遊藝ニテモ進マヌモノ也、別シテ學文ト云フモノハ先ヅ氣ノツマル屈スルコトナレバ、初心ノ内ニハ闇ヲタドル如クニテ、中々感徹ノ心ハ生ジガタキモノ也、ソレユヱニ初手ニ精ヲツカシ、氣ノ屈セヌヤウニ先ヅ合點ノユキヨイ手近イ書ヲ讀ム内ニ、ソロ／＼ト字義語勢ヲ得心サスルヤウニシカクレバ、イツトモナク中華ノ語ガ心ノ内ニ徹スルモノニテ、ソレカラハ書ニ馴染シタシク書成リ來ツテ、カノ面白ト思ヒ樂ム心ニナリ、感徹ノ心生ジテソノ生ジタモノ、内ニジツトスハツタ時ハ何程外ニ面白イコトアリテモ、コレナラデハト思ヒ込ンデキテ、カユル心ハナキ

モノニテ、ソレカラハモハヤ飽ガキテ、ウトミヤムル患ハナキ也、ヤメテモヤメラレヌヤウニナルモノ也、何事ニテモ內ニオノレナリニ發起シテ、自然ト時節ガ來テ生ズルモノナクテハ、外カラツケヤキ刄デシタコトハ、ドコゾデ飽ガキテ始終ヲトゲヌモノ也、孟子ノ「樂則生矣、生則惡可㆑已」トイハレシハ、古今ノ名言ニテ萬事カクノ如ク也、サテ又資治通鑑ト云フ書ハ、人君タル人ノ左右ニハ一日モナクテ叶ハヌ物ニテ、古來ノ政治ノ得失事跡ノ成敗、臣下ノ忠邪ヲアリノマヽニ記錄シタル書也、古ヘニ有リシ事ハ、今日ノ上ニチヤウド似タル事多クアルモノナレバ、古ノ成敗得失ノ實ヲ今日ノ政治ノ上ニ通ジテ鑑ミ合セ見レバ、大キナル政治ノ資助トナルト云フ意ニテ、宋ノ仁宗皇帝勅名ヲ賜ハリ、司馬光ノ勅ヲ奉ジテ選述セラレタル書ナリ、通鑑綱目ト云フ書ハ、ソノ後百年ノ餘モヘダタリ、朱熹ノ自分トシテカノ資治通鑑ヲ本トシ、ソノ內ヲ拔キ書キ綱ト目トニ分ケテ、綱ハ春秋ノ筆意ノ例ニ準ジテ作リ改メラレタルモノナレバ、綱ヲ主トシテ目ハ大槩ヲカキタルバカリニテ、通鑑ヨリ殊ノ外略シ所ニヨツテハ少ト事ノ始終モ通ジガタキモノナレドモ、資治通鑑ハ倭版ナク、ソノ書モタジナキユヱニ、是非ナク先ヅ綱目ヲ用ルコト也、元來ハ先ヅ通鑑ヲ見セテ後ニ綱目ヲ見スルガ順路也、通鑑ハ周ノ戰國ノ世ヨリ五代ノ季マデノ事實ヲ委細ニ錄シタルモノナレバ、ソノ內ニ唐朝一代ノ事實モ委クアツテ、太宗ハイカナル人柄、魏徵ハイカナル人品ト云フコトモ、唐ノ世ノ政ノ樣子モヨク勝手ヲ覺ルコト也、唐鑑ハ勿論ノコト、貞觀政要ニアル諫臣ノ議論ノコトマデモ、大槩ハ載セテアル也、ソノ下

地ノ様子ヲトクト知リタル上ニテ政要ノ書ヲ見レバ、親切ニ合點ユクモノ也、太宗モ魏徴モドウシタ人柄心持ヤラ、ツイニ近ヅキデナク唐ノ世ハイツ時分ノコトジヤヤラ、政治ノ様子ハイカヤウナコトジヤヤラ、カツテ知ラズシテ初手カラフト政要ノ書ヲ讀メバ、感徴ノ心モ生ゼヌモノナル上ニ、先ヅ本末相違シタルコト也、凡ソ史ノ書ヲヨム心持ハ、先ヅソノ時代ノ様子ヲヨク考ヘ、サテソノ時ノ天子ト臣下ノ身ノ上ヲ想像（オモヒヤリ）、直ニ我ガ身ノ上ニヒキアテ、萬事ソノ心ニナリカハツテ、其時ノ政事ヲ今日ノ事ト想ヒ込ミ、我ガ處置（サバク）心ニナリキツテ見ルベキコト也、左様ニスレバソノ理非得失モヨク見エテクルモノニテ、ソレデコソ我身ノ考ニナリ、用ニ立ツコトナリ、別シテハ政事ノ助ケトナルコト也、餘所ノ事トシテ見レバ、只一座ノ物語ニ聞クト同ジコトニテ、無益ノワザ也、古ヨリ非ヲウツニ當局ノ人ハ闇ク、傍觀ルノ者ハ明カ也トイヒ傳ヘテ、俗ニイヘル脇目百目ナレバ、人ノシタ事過去シ事ヲ、跡カラソノ評判ヲツケ、立チカヘツテ思按ヲメグラシ見レバ、各別ニヨキ分別モ出ルモノ也、前ニイヘル如ク昔アリシ事ハ、必今モソレニ似タルコトアルモノナレバ、古人ノ仕損事（シソコナヒシ）ニ氣ガツイテアレバ、今日スルコトノ考ニナルコト多カルベシ、是レ史ヲ學ブノ大利益也、人君ノ學文ニハ、史ヲ讀ムコト甚ダ當用ナルコト知ルベシ、通鑑ノ内ニハ太宗魏徴ノ間ノコトニカギラズ、古來人君ノ人ノ諫ヲ容ルヽト、拒ムトノ成敗得失ハ、世々ニコレアルコト也、學文初心ノ人ニ、初テカラ急ニセツキ責ルヤウニシテ、早フ學文ヲ用ニ立テウト云コトハ、中々ソレハナラスコト、左様ニ責レバ常ノ人デ

モワルウスレバ、學文ニウトミガデキルモノ也、況ヤ人君ハ下地氣儘ナルノモノナレバ、少トコムヅカシキコトナレバ、早ク飽キウトマル丶也、ウトマレテカラハモハヤ取リツク島ハナクナル也、兎角ニ内ニ生ズル時節ガイタラネバ成リガタキコト也、ソノ上ニ又左様ニ早ク用ニ立テウトテ、イマダロクニ字義語勢ヲモ辨ゼヌ内ニ、六借(ムツカシキ)議論アル書ヲ讀マスレバ、必我意ヲ以テ理窟ヲツクルヤウニナッテキテ、ソノ書ノ本意ニアラヌコトヲ掘リ出シ、聖人ノ意ニモナキコトヲ心得ルヤウニナリタガルユヱ、書ヲ讀マヌモ同然ニナルコト也、我意ガマジレバ、必我慢ニナラデ叶ハヌコトナレバ、學文ヲシタ益ハナクシテ、結句却テ理窟クサキ害モ出來ルモノ也、字義語勢ヲ辨ズルコト、俗人初心ノ目カラハ甚ダムツカシキコトノヤウニ見ユレドモ、左ニテハナシ、只ヨク唐本ヲ讀得テ、唐人ノ語意ヲトクト知リ悟ツタル學者ヲ求メテ、唐人ノ語ヲ日本人ノ語ニアテガヒ、違ヌヤウニ飜譯サセテ合點スレバ、自然ト字義ニモ語勢ニモ早ク通ズルモノ也、ソノ合點シタ字義語勢ヲ和語ニアテガヒ、書ヲ讀ムガ書ヲ讀ムノ捷徑(ハヤミチ)ナリ

中華ニ臣下ノ言上シテ人君ヲ諫ルコトハ、平生ノ風俗ナレドモ、人君ノヨク諫ヲ容レ用ルコトハ、甚ダ稀有ナルコトト見エタリ、サテコソ唐太宗ヲ古來稱美シタルコト也、愚拙ハ幸ニ資治通鑑モ、二十一史モ所持シタレバ、年來ニ徧ク一覽セシニ、古來ヨク諫ヲ用ル人君ハ甚ダ少キコト也、上トシテハ下ノイフコトニ從ヒニクキモノト見エタリ、ソノ情ヲ察スルニ人ノ上ニ立ッテハ人ヲ教ユル筈ノモノ

ナルニ、ソノコヂヨリ教ユル筈ノ下々ニ教ヘラルヽコトユヱニ、人君トナツテハ臣下ノ諫ニハ従ヒニクキハズ也、ソレユヱ孟子モ「好レ臣ニ其所テ教而不レ好レ臣ニ其所テ受レ教」トイハレシコト也、殊更ニ日本ノ武家ノ風トシテ、スベテ人ニ智恵ヲツケラレタ事ヲソノトホリニ受テ用ヒ、自分ヲ仕損アヤマツテ改メナホスコトヲ、人ノ卑下恥辱トスル習ハセト成來レリ、況ヤ上様ノ人ハ猶以テ下カラ智恵ヲツケラレ、其イフヤウニスレバ、上ノ威光ガ落ルト覺エ、下々シテ上ノスルコトヲトヤカフ云フコトヲ、甚ダ無禮慮外ナコトヽ立テヽアルユヱニ、タトヒミスミスノ仕損過リガアツテモハヤ、一旦上コリイヒ出シ事、スギタコトヲ跡カラ罪レ己、アヤマツテ改メナホスコトヲイカイ上ノ恥辱トシ、ソノヤウニスレバ後ニハ下カラアナドラルヽヤウニナルモノト思ヒ込ム也、是ハ武家ハソノ武力ヲ以テ天下ヲ取リ得タルモノナレバ、ヒタスラ武威ヲ張リ輝ヤカシ下民ヲオドシ、推シツケヘシツケ歸服サセテ、國家ヲ治ムルニモ只モノ上ノ威光ト格式トノ兩ツヲ恃ミトシテ政ヲシタルモノナレバ、只モノ上ノ威ヲ大事ニカケルコトユヱ、自然トソノ風ニ移リタルモノ也、韓非子ガ術モ日本ノ武風ニ似タルモノ也、古來ノ史ヲアマネク覽ルニ、百年モ治リタル世ハドノヤウニシテモ、大體ノコトニテ亂ルヽモノニテナケレバ、カノ武威ニ人ヲ懼レ服シテ治リ來レルヲ見テ、日本ハ武ニテ治リタル國ナリト心得テ武國トイヒ、イヨイヨ武威ヲ自負スルコトニナリ、日本モ王代ノ時分ニハ、今ノヤウニ武威ヲ張リシ様子ニテハナシ、唐ノ政治ヲ慕ヒ使ヲ通ジ、萬事ヲ唐ノ典故ニ擬シテ、文物甚盛ンナリシコトナレバ、左ノ

ミ武國トハ稱シガタカランコト也、元祿ノ比赤穗ノ忠臣四十七人、一時ニコト〳〵ク殺サレシコトナドモマノアタリソノ本原ヲ尋ヌレバ、公儀ノ御裁許ニ片落ナルサバキアリシヨリ事起レリ、左アレバトテ忠臣共ヲ褒賞スレバ、公儀ノ始ノ下知ガ無ニナリ、上ノアヤマリニナルユヱ仕置立タズ、上ノ威光ノ落ンコトヲ恐レ、忠臣ナレドモ勸賞ヲ加フルコトモナラズ、公儀ニモ忠臣義士ヲ殺スコトハ非義ナルコトハ知リナガラ、是非ナク古今希有ナル忠臣共ニ言ヲ飾リ、罪ヲイヒオホセテ一人モ殘サズ殺サレシ也、此時ニ於テハ天下ノ萬民心アルモ心ナキモ、憤怨シテ己ヲ寃トシ、涙ヲ落サヌモノハ一人モナカリキ、是只ソノ本ヲ考フレバ武威ヲ張ツテ我慢ニ好レ勝ノ心、且ツハ又威光ノ落ンコトヲ恐ルル心ヨリ起ルコト也、世ニ忠臣孝子一人デモアレバ、即チ勸賞ヲ加ヘ、天下旌表スルコトハ、古代ヨリ政ゴトナルニ、イカナルコトノアレバトテ、カヽル四十七人ノ忠臣ニ罪ヲイヒカケ一人モ殘サズ一時ニ殺サルヽコトハイカナル政ゴトゾヤ、唐ニモツイ聞カヌコト也、カクノゴトクナル武威熾盛ナル世ニ、又近代ハ軍學トテカノ權謀功利ノ道ニ仁義ノ名ヲ借リ面白ク理窟ヲトリ合セ、コレヲ以テ武家ノ大事トシ、甚尊敬スルナリ、聖人ノ敎ニコヱタリ、軍學ニ仁義ノ理ヲ、傅會スルコト、前ニイヒシ茶儒ノ同類ト云ベシ、軍學ノ主意ト仁義ノ道トハ氷炭ノ如ク也、ソノユヱハ孫子モ直ニ兵ハ詭道ナリトイヒテ、軍中ニテハ敵ヲ賣騙（タバカリダマ）スコトヲ以テ主トシ、萬事姑息スルコトヲ專トシ、小股ヲトツテナリトモ、人ニ勝ツコトヲ道トシタルモノ也、シカルニ戰場ニ臨デ仁ヲノミ存セバ、早速ニ負ベシ、サル

ユエ左傳ニモ宋襄之仁ト云フコトアッテ、大キニ咲ヒ種トナレリ、孟子ノ義戰トイハレシコトハ、何ノイヒグサ由緒モナキニ、只人ノ國ヲ攻メ取フトシテ起シタル軍ニテハナク、義ニ迫リヤムコトヲ得ズシテ起シタル軍ノコトヲ褒メテ義戰トハイヘル也、義兵トイヘルモ同ジコト也、シカシ戰陣ニ臨ンデハ詐略權謀モイルコトアルベシ、治世ニナリテハカツテイラヌコトナレバ、古聖人ノ世ニハ弓ヲ袋ニ入レ干戈ヲ廢シ、二「偃レ武修レ文歸レ馬放レ牛」一トモ云ヘルコトナルニ、我朝ノ武家ハ武威ヲ護スル爲ニ、治世ニ成テモヤハリ一向ニ軍中ノ心ヲ以テ政ヲシタルモノ也、少デモ武威ガ落ツレバ、人ニ天下ヲツイ取ラレ、ウカト安イ心モナク、平生ニ氣ヲクパリ用心ヲシタルモノ也、ソレユヱ司馬法ニ「天下雖レ安忘レ武必危」ト云フコトヲ口實トシ、軍學ヲ以テ吾道也ト心得、コレヲ尊信スルユヱ、ツイニイツトナク我知ラズ、人ノ心術ヲ惡フシ、只モノ人ニ卑下ヲトラジトシ、何事ニテモ人ニ勝ツコトヲ專トスル氣ニ移リ、人ニ智惠ヲツケラルヽコトヲ大キナ恥辱ト思ヒ込ミ、現在ニ惡ルフテモ我ヲ立テトホスヤウニ、皆人ノ心カナレルハ軍學ノ失也、是又彼ノ人ノ諫ヲ拒ム根本トナリ來レリ、武ヲ忘レヌトイヘルハ平生ジット心ニ武ヲ忘レズ、用心ヲセヨト云コトニテハナシ、治世ニモ武備ヲ一向ニ思ヒモ出サヌヤウニシテ、怠リ忘レヌヤウニ時々吟味セヨト云フコト也、古ハ治世ニハ武士ト云モノ一人モナク、二「隱二兵於農一」一トイヒテ皆百姓ニシテ平生ハ田ヲ耕ヘサセ、軍事アル時ハ百姓ヲスグニ軍兵ニスルヤウニシタルモノ也、井田ノ法ト云フモノ、即チ軍ノ時ノ組分トナルヤウニツモリタルモノタルモノ

也、後世ノ軍家八陣ノ法ナドモ、ヤハリ井田ノ法ヨリ出タルコト也、先王ノ政ニ、四時ノ獵ヲ民ニサスルコト軍中ノ法ヲ以テ獸ヲ獵ルハ、武備ヲ忘レサセヌ爲也、ソノ上ニ講レ武トテ、武官ノ者ニ仰セ、武藝軍旅ノ事ヲ調練サスルコトナドバカリアルハ、即チ武ヲ忘レヌト云コト也、ソレヲアシク心得テ、朝夕片時デモ萬一ノコトアラバト用心要害シ、寢テモ寤メテモ武ヲ忘レヌコトト思フハ、文官ノ甚シキコト也、カクノ如ク心得タルモノユヱ、スベテ世ノ武士ノ心持ト云フモノハ、大形偏急狹迫ニテ、萬事ヲ手ドリ早ク仕舞ヒ、油斷セズツイ物ヲ埒ヲ明ケテノクヤウニトバカリシテ、寬雅優美ナルコトヲ生温キコトト思フユヱ、物ヲ容ルコトナラヌヤウニナリ、人ノ諫ヲ我腹中ヘ容レテオクコトハナラヌナリ、シカレバ「忘レ武必危」ト云コトヲ口實ニシテ、武士ノ道ト云モノヲ立タルユヘニ、我國ハ元來武國ユヱ武ヲ用ヒテ治リタルコトナレバ、武士ハ武士ノ道アリテ濟ミタルコトナレバ、學文ハ本ハ唐山ノコト、唐流孔子流ニセウトテ、青表紙ノ分ニテハ中々國家ハ治ルモノナラズ、唐流ダテヲセウトスル間ニハ、ツイ人ニ國ヲ取ラレテ仕舞フナドヽ、カノ「忘レ武必危」ト云フコトヲワルク心得テ、民ヲ治ル處ヘマデ急迫ナル見ヲツケタルモノ也、別シテ近世ノ風ハ古聖人ノ道ヲ借ラズ、日本ニハオノヅカラ武士ノ道アリトテ、一流ヲ立フトスルモ、ヤハリカノ武家ノ威ヲ張ル我慢ノ風、又ハ軍學ヲ聞キ込ミタル蔽ノ錮リタルユヱ也、中華ニテモ周ノ末ニ戰國諸侯ノ風モ、今ノ世ノ風ニ似タルモノニ、孟子ナド王道ヲ說キアリカレタレドモ、ソノ時分ハ皆申、韓、蘇、張ナドガ刑名功利ノ道狙詐、

縱橫ノ術ヲ近道トコヽロヘテ、孟子ノイヘルコトハ迂遠ニテ事情ニ遠キコト、今ノ世ノ風ニハアハヌトテ聞キイルヽ諸侯一人モナカリシコト、今ノ大名ノ風ニ似タルコト也、シカシ日本ノ軍學ト云モノモ、仁義ヲ傳會シタルコトナドハ、治世ニ出來タルコトニテ、亂世戰國ノ時ニハカツテナキコトヽミエタリ、戰爭ノ時世ニハ、直ニ干戈ノ間ニテ自然ト軍法ニモ調練スルコトナレバ、今ノヤウナ軍學ヲ講釋スル暇ハアルマジク覺ユル也、ソノ上軍中ノ詐略ハ、前方カラシテオカルヽモノナラズ、權謀ハソノ期ニ臨ンデ出來ルモノナレバ、一度シタコトハ用ニハ立タヌモノ、柱ニ膠シテ瑟ハヒカレマジキコト也、軍用ノ器ナドモ、當世面々ニ流ヲ立テ、利方トテ餘リ用害ヲシ飾ヲシスギタルハ、殊ノ外重クテ働ク爲ニハ惡カルベシ、古ノ名將ノ具足ナドハ、甚ダ質朴ナルモノ也、或ハ神社ナドヘコメ物ニシタル武具ハ、別ニ美ヲ盡シテワザト拵ヘタルモノトイヘリ、鎧ニ金銀ナドヲ鏤バメ、アマリ用害ヲシスギタルハ戰場ニ臨デ必要ニ立タヌコトトミエテ、大坂御陣ノ時ニモ、兵士ノ内ニ花ヤカニオドシテ目ニタツ鎧武者ノアリシヲ、神君御覽アリテ咲ハセ玉ヒ、アレニテハ働カレマジト仰セラレシニ、案ノ如クトリアヒニ成テカノ武者ノ鎧樹ニカケテアリシト也、ソノ内ニモ組分ケ、隊立、城立ナドハ大將タル人ノ常ニ工夫シ、古來宗々ノ規格ヲモ考ヘオクベキコト也、今ノ軍學イカナルコトカハ知ラネドモ、只孟子ノ一不レ如人和ニトイハレテコソ眞ノ軍學ニテアルベシ、信玄流、謙信流ノ軍學ノ平生ニ學ブヨリハ、人和ヲ得ル軍學ヲ平生ニ學ビタル方ガ、肝要ニテアルベシト覺ル也、人和ガナク

テハ何流ノ隊立、イカナル城立ニテモ、崩レヤスカルベキコト也、サテ中華ニハ古來代々ニ諫官トテ、學者ヲ選ビソノ役人トシ、遠慮ナク上ノ非ヲ申シ上、政ノ是非ヲ議論スル人ヲ多ク立テオカレ、ソノ役所ヲ立テ諫林院ト號セリ、昔ヨリ器量アル大儒多ク諫官ノ中ヨリ立身シ宰相トナレルコト也、コノ外ニ諫官ノ役ナラデモ、中華風俗トシテ町人百姓ノ内ニテモ、誰ト云フニカギラズ、所存アレバカツテ遠慮ナク上書シテ、公儀ノ政ノ惡シキコトヲ申シ上ルコト也、タトヒ表向ニ已ニキツト勅詔ノ下リ相スミタルコトニテモ、ソノ非ヲ申シ上ル風ニナリテ咎メハナキコト也、上ノコトノミナラズ、民ノ自分ノ寃(ムツ)ニアヒタルコトヲモ、直ニ天子ヘ言上スルコトノ自由ニナルヤウニ、登聞鼓ナド云フ大皷ヲ朝廷ニ設ケオキ、何程ノ賤キ者タリトモ、ドコヘツケトドケスルコトモナク、大皷ノアル所ヘユキ鼓ヲ打ツト、ソノ聲早速天子ノ御聽ニ達スルヤウニシテ、ソノ役所ノ取次ノ者ソノ訴狀ヲウケトリ、直ニ上ヘサシアグルコト也、ソノ役所ヲ登聞皷院トイヘリ、古ニテハコレヲ諫鼓トイヘリ、是即チ古聖人ノ遺教也、カクノ如ク上ヲ諫ルコトノ自由ニナル風俗ナレドモ、古來人君ノ諫ヲキヽ容ルヽコト希有ナルニ、況ヤ日本ノ武風ニ於テ、下トシテ上ノ仕置ヲトヤカウト批判スルハ理非ノ差別ナシニ、先ヅ慮外無禮ノ至極トスル急迫嚴酷ナル風習ナレバ、何トシテ大體ノ氣量ノ人君ニテハ諫ヲ容ルヽト云フコトアルマジキコト也、シカレバ一命ヲスツル心ナラデハ上ヲ諫ルコトハナラヌユヱ、下トシテモ亦上ヲ諫ル者ハ希有ナルコト也、日本ノ武風モ秦ノ始皇ノ政治ノ風アリテ、下トシテ上ヲ議スルヲ

忌ミ惡ミ只ムキニ威ト法トヲ以テ民ヲ治メフトシタル、カノ申、韓、商鞅ガ刑名法家ノ術ヨリ出タルモノ也、人君タル人ハソノ筈ノコト也、下ザマノ者ノ父子兄弟夫婦朋友ノ間ニテモ人ノ意見ニアヘ二、ソレヲ納得シ尤ト感服シテ、乍ニ我ガ過惡ヲ改メナホスト云フコトハアリガタキコト也、況ヤ人君トシテ下ヲ下知シ、自由ニ引マハス身ニテ、我ガセウト思ヒ込ンダルコトヲ打ヤメテ下ノ意見ニシタガヒ、諫ヲ容レ用ルコトハ大體ノコトニテハ成ガタキ勢ト知ルベシ、カノ「不レ好レ臣二其所一レ受レ教一」トイヘルハ、誠ニヨク人情ニ通ジタル語也、是古今人君ノ通患ニシテ、今ニ始メヌコトト見エタリ、サレバ聖人ト云者ノ、凡人ト各別ナルト云フハ、此ヤウナ所ノ違ヒバカリ也、傍カラ思ヘバ、人君トナツタリトモ能ク合點シ、心ヲ死ナシテ勤メテ、下ノ諫ヲ容ルヽコトハナリヤスサウナコトト思ハルレドモ、聖人ノ氣量ナケレバナリニクキコトナレバコソ、「禹湯罪レ己其興勃焉、桀紂罪レ人其亡忽焉」ト、罪レ己ト罪レ人トノカハリバカリニテ、國家ノ興亡ノ驗ヲ心ヤスサウニイヘルコトモゲニサルコト也、ソノ外ニ聖人德ヲ稱美シテ「好レ問」モ、「好察二邇言一」トモ、「詢二于芻蕘一」トモイヘルコトハ、聖凡公私ノワカレメハ外ノコトハナク、此ヤウナ所ニテソノ氣量ノ大小、コヽニテ知ルヽコト也、世上文盲ナル人ハ、聖人ト云モノハ唐ノ人ニテ佛ヤ仙人ナドノヤウニ思テイルコトナレドモ、聖人ト云フハヤハリ常ノ世上人並ノ人ナレバ、曹操ガイヒシ如ク四目兩口ノアルニモ非ズ、心モ形モサシテチガフタコトナク何事モナキ人也、只ソノ人ニカハリタコトハ、ソノ心公ケニ平カニシテ少モ我意ナク、カノ我慢

ナル氣味微塵ナク、氣量ノ大キナルバカリ也、是凡人ノ及バヌコトナレバコソ、孔子ノ德ヲ意、必、固、我ナシト稱美シタルコト也、ソノ上聖人ト云フ名ハ、古ハ大形ミナ德ヲ以テ天下ヲ治メ得タル天子ノコトニテ、無位ノ人ヲ聖人ト稱スルコトハ、孔子一人ニ限ルコト也、孔子ノ德ハ天子トナリ、天下ヲ治メラレデハ叶ハヌ人ナレドモ、天運ノアシキ時代ニ生レアハレシユヱニ、生無位ニ不遇ニシテ終リ玉ヘリ、故ニ禮記ニモ、「作者謂二之聖一」トアツテ、作者ト云ハ一代ノ天子ナリ、天下ノ禮樂ヲ作リ民ヲ敎ヘ風俗ヲ正シフセラレシ人ノコトナレバ、天子トナラデ禮樂ヲ作ルコトハナラヌコト也、聖人ノ敎トイヒ、道ト云フコトモ、上ニ立テ下民ヲ敎導ナサレシ掟ノコト也、サテ漢ノ文帝ト唐ノ太宗トヲ、古來三代以下ノ明君ト並べ稱スルコトモ、ヨク諫ヲ容レ用ヒラレタルユヱノコトナレバ也、ソノ內文帝ハソノ實德アルコト、漢書ニノスル勅詔ヲ見テモ知ルヽコト、ソノ上ニ通鑑漢書等ニモ、文帝外ヘ出御ノ時、途中ニテ人ノ上書シテ直訴スル者アレバ、イツデモソノマヽ輦ヲ止メサセソレヲ御覽アリ、用ユベキコトナレバ、ソノイフ言ヲ采リ、又用ニ立タヌコトハソノトホリニシテオキ、用ユベキヲモ用ユマジキヲモドチラヘモ稱シレ善トタマヒ、尤ナルコトヲ申シ上グルト甚ダ御褒美ナサレシトアリ、萬事ニツイテ自然ト罪レ己ノ意ミユル也、太宗モ同ク能ク諫ヲ容レ用ヒラレシコト、ソノ罪レ己ノ意アレバ也、是卽チ二君ノ明君タル所以也、ナレドモ太宗ノ方ニハ心根ヲ穿鑿シテミレバ、功利ノ意アツテ拵ラヘタルヤウナコト多ク、少ト名聞クサキ氣味アレバ、實德ノハヘヌキトハイハレマジキ

也、通鑑唐書ナドニテ考ヘ見レバ、彼ノ六月四日ノ事ニ、「推ニ刃同氣ニ」ノ譏リヲ貽シ、ソノ上弟元吉ノ妃ニ通ジ、子明ヲ生レシコトサツパリトセヌヿモアレバ、ソノ實德ハ文帝ニハ及バレヌトミエタリ、歐陽永叔ノ太宗ノ放囚論ニ人ノ見出シニクキコトヲ能ク見ツケラレシハ、サテ〳〵歐公ノ卓見也、ソレヨリトクト氣ヲ付テ太宗ノ始終ノコトヲ考レバ、歐公ノ論ニ符合スルコト多クアル也、スベテ名聞ヲ飾ルト云フハ氣量ノ狹キユヱ也、太宗ハ身ニ過リノアル覺アレバ、天下ノ人ニヨク思ハレ譏ヲ銷サウトスル心ヨリ、名聞ヲ飾ラレシト思ハルヽ也、魏徵ガ諫ヲ容レラレシコトノ内ニモ、實德ノ方カラ出ルヨリハ名聞ヲ思ヒ、世上ヲツクラフ心ヨリ勉强シテ、心ヲ忍ビ無理ニシタヤウナコト、ケヤケキ仕形多ク見エタリ、然ドモ夫レハ一等ノ上ノ詮議デコソアレ、何ニテモセヨ、氣量ナクテハ能ク諫ヲ容ルルト云フコトハ決シテナラヌコトナレバコソ、三代以下ニ並ナキ人君ト古來稱美シタルコト也、如レ此三代以下ニ只ワヅカニ二人ノ明君ナルニ、精ク一等ヲアゲテ深ク吟味シテミタ時ハ、太宗ハハヘヌキノ實德ニテモナケレバ、無我ニシテ諫ヲ用ルコトハ古今ニアリガタキト知ルベシ、殊ニ況ヤ、日本ハ中華ニ合スレバ小國ナルユヱ、自然ト人ノ氣量モ狹ク、カノ武風モ畢竟ハミナ氣量ノ狹キヨリ起ルコト也、漢高祖ハ實德ハナケレド、自然ト氣量ノヒロキ人ユヱニ、圓イ物ヲ轉スル如ク、能ク人ノ諫ヲ用ラレ、我ガ過チヲ早ク悟ラレシユヱニ、ヨキ人モ手下ニ多ク集リ、小軍ヲ以テ項羽ノ大軍ニ勝チ漢ノ四百年ノ基ヲ開カレシコト也、ソレユヱ寛仁大度ト稱美セリ、大度ナレバ物ヲ容ルヽトコロアツテ料

見ヨク、自然ト仁徳モアル筈ノ事也、項羽ハ勇氣ハアレドモ甚ダ小量ニシテ、物ヲ容ルヽコトナラズ、人ニ疑ヒ深ク我慢ナル人ユヱ、只我ガ武威ノ強ク人ノ懼ルヽヲ恃ミトシ、大軍デアリナガラ人和ナク、好キ臣下モ皆亡散リテツヒニ高祖ニ亡サレシコト也、小量ナル人ハ必我慢ナルモノ也、是自然ノ符也、凡常ノ人君ハ大形ガ我ガ手ニアヒ、自由ニ下知ニマハル者バカリヲ臣トシ使フコトヲスキテ、下ザマノ人ノ方カラ此ノ方ヘ智惠ヲツケラレ、我ガ自由ニナラヌ者、我ヨリ分別ノヨキ者ヲ使フコトヲ忌ミソネミテスキ好マヌコト、孟子ノイハレシニ違ハズ、只モノ我慢ニシテ、罪レ人バカリノ料見ナルユヱ、ソレニ仕フル臣下モ先ヅ己レガ身ガカハイサニ何事モヲシダマリ、智惠ノアル者モ智惠ヲカクシ、惡ルイト見ユルコトガアツテモ面々ニ機嫌ヲソコナハンコトヲ恐レテ、イハヌヤウニスル也、ソノ上ニ上タル人ノ威光ヲ恃ミニシ、推シツケ人ヲ歸服サスルコトハ、武勇ナルヤウニ見ユレドモ、能クタチカヘリテ思テミレバ、ケツク却テ怯ナルコトトモ云ベキ也、ソノユヱハ畢竟ソノ威ヲ張リ強フシテ、人ヲオドシテ歸服サスルハ萬一ニ上ノ威ガ落レバ人ガ上ヲアナドリ、ソレカラ違背セフカト恐ルヽカラノコトナレバ、我ガ心ノ内ニ省ミテ、ソノ人君タル徳ガカイナキユヱニ、氣ヅカハシク疚シキコトアレバ、人ノ我ニ歸服セマジキカト恐ルヽノ卑怯ナル心ヨリ起ルコト也、三代聖人ノ我ガ徳ヲ以テ天下ヲ治メ得ラレシヲ思フニ、ソノ内ニ省ミテ何ンノ氣ヅカヒ疚シキ心ハアルマジケレバ、別ニ何ンノ用心用害ハイルマジト思ハルヽコト也、ソレユヱニ無爲ニシテ而治ルトモ、垂拱而天下治ルト

モ、稱美セルコト也．內ニ省ミ何ンノ疚シキコトナキユヱニ、無爲ニシテ垂拱スルノミ也．コレデコソ天下ヲ泰山ノ安キニオクト云ベキ也、威光ヲ恃ミトシテ國家ヲ治ル、譬テイハヾ醂(サン)ヲシタル酒ナドノ如ク、酒ハ元來冷タル物ニ當分ノ火氣ヲ借テ煖メシタルモノナレバ、火氣ノアル內バカリハ煖カナレドモ、少シニテモ火氣ノ威光ガサムレバ、ソノマヽヒヘテ水トナル也．アブナキモノ也．德ヲ以テ國家ヲ治ルハ、名香ノ如クソノ下地カラ無垢ニ香氣ヲ十分持ツテヰルモノナレバ、元ヨリ火氣ヲ借テ焚(タ)カイデモ香氣アリ、焚(タケ)バイヨ〱馥(カウバシ)キ也、焚(タキ)スガリ火氣ガ消エ盡キテモ、猶ソノ香氣ハ跡マデモ物ニトマリ、坐中ニモ時ヲ經テ殘ルモノ也．サレバ德ノ馨香共、明德維馨トモイヒテ、德ヲ古ヨリ香ニ譬ヘタル也

武士ノ道ト云フコト、世上武家ニ常ニイヒ習ハセルコトナレドモ、愚拙ハコノ道ト云フコト不審ニ思ハルヽ也、先ヅ武士ノ道トスルコトハイカヤウノコトニヤ、軍旅ノ事カ弓馬ノ事、是ナレバ武士ノ事(ワザ)ニテ、コト〴〵シク道トハイハレマジキコト也、事(ワザ)ニハナニゴトニモソレ〴〵筋道仕形アルモノナレバ、卽チ道ナレドモ、世上ニイヘルハ事(ワザ)ノ意ニアラズ、武士ト云フモノヽ、武士タル所以ノ理ヲイヘバ、軍旅ノ事弓馬ノ事ヲイヘルニハアルマジ、サラバ義ニ臨ミ一命ヲスツルコトヲ主トシタルコトガ、是ヲ武士ト云者バカリ道ト思フハ甚狹キ見識ニテ、文盲ナルコト也．又ハ只ムキニ人ヨリ少ニテモ卑下ヲ取ラズ、人ニ手ヲツキアヤマラヌヤウニセウトスルコトヲ主トシタルコトカ、是モ我身ヲ能

ク修メ、自然トアヤマリナク恥辱ヲトルコトナキコトヲ主トスレバ好キコトナレドモ、左ニテハアルマジ、前ニイヘル如ク畢竟ハカノ我慢ノ心根ヨリ出ルコトニテ、仁義忠信ノ道ニテハアルマジト思ハルヽコト也、ソノ上ニ人ハ微塵モ過リノナイヤウニスルト云フコトハ、タトヒ聖人タリトモナリガタキコト聖人モ不慮ノ過ハアルコトナレバ、過テハ即座ニ改メナホスコソ善キコトト云ルコト也、孔子モ易ヲ學ビタラバ大キナ過ハアルマジトノ玉ヘバ、聖人ニテモ過ノ少モナキヤウニハナリガタキコトト見エタリ、シカルニ武風ニハ只モノ過リタルコトヲ跡カラ改メカユルコトヲ卑下恥辱ト覺ルコト、大キナルハキチガヘ也、我ガ過ヲ飾リ繕ヒ、過リナガラアヤマラヌ顏ヲシテマギラカシテ仕舞フコトハ、却テ卑怯ナ弱キコトト思ハルヽ也、コレ亦唯前ニイヘル如ク、只々威ノ落ルコトヲ恐ルヽカラ起ルコトト見エタリ、又ハ「衽ニ金革ニ而死而不レ厭」トイヘル如キヲ武道トセルコトカ、是亦君子タル人ノ甚ダキラフコト、彼ノ果敢ニシテ人ニ勝ツコトヲノミ專ラトスル强者ノコトニテ、血氣一偏ニシテ、「暴虎馮河死而無レ悔者」ノ類ナレバ、孔子ノ不レ與(クミセ)同心ニナキコトナルユヱ、議論ニ及バヌコト也、又ハ前ニイヘル如ク一種和流ノ軍學者トテ、權謀功利ノ學ヲ主トシ、表向ニ仁義ノ説ヲ借テ飾リ拵ヘタルモノヲ武道トイヘル、是即チ孫子ガイヘル詭道ニシテ、賊ニ夫人之子ニ學術ナレバ、聖人ノ仁義忠信ノ道トハ氷炭胡越ノ如ク相違セシコトニテ、一向トモニ論ズルニ足ラヌコト也、此等ノ外ニ武士ノ道トスルコトイカナルコトノアルニヤ、平生不審ナルコト也、士ト云字ヲ和訓ニハサブラヒトイヘルユ

エ、文官ナ人ハ武士ノコトヽ心得レドモ、士ノ字義ハ元來男子ヲ通ジテオシナベテ稱スル字ニテ、天子諸侯卿大夫士トツヾキテ大夫以下ノ官位俸祿アル人ヲ貴賤ヲ普通ニ士ト云フコトナレバ、士ノ内ニハ文官モ武官モアツテ、武官ニ限ルコトニアラズ、武官ナラバ武士ト稱スベシ、日本ニテイハヾ公家モ武家モ共ニ士ト云ベキ也、武家ニ限リテ士ト稱スルハ文盲ナルコト也、ソノ上ニ元來ガ武士トイヘル名目ハ賤シキ名目ト見エテ、史記「淮陰侯傳常使武士縛信」トアレバ、武士ハトリデノ者ナドノコト也、淮南子ノ覽冥訓ノ内ニ「勇武一人爲百夫長」トイヘル、高誘ガ註ニ、武ハ士也、「江淮之間謂士爲武也」トアリ、コレラヨリ日本ニテ武士ト云フ名目ヲ云ヒフラシタルモノト見エタリ、是本ハ江淮ノ俗語ニシテ、聖賢ノ書古キ書傳ニナキ名目ナル上ニ、淮南子ニイヘルモ、軍兵士卒ノ内ニ勇アル者ヲ選ビ、雜兵百人ノ長（フレガシラ）トスルト云フコトナレバ、面目ラシキ名目ニモアラズ、貴人大將分上ノ人ノ武士〳〵トハ稱スマジキコトヽ思ハルヽ也、士大夫士君子ナドヽ稱スルハ、彼ノ男子ノ通稱ヲ以テイヘルコト也、ソノ上ニサブラヒト云フ和訓ハ、元來ハ侍ノ字ノ訓ナレドモ、士ノ字ヲ武士ト必覺ルヨリ士ノ字ヲモ通ジテ、サブラヒト云ヘルトミヘタリ、侍ノ字サブライト云フ訓ハ侍衞ノ心ニテ、番兵警護ノコトナレバ、大將分上ノ人ノカリソメニモ稱スル詞ニハアラズ、古キ物語ナドノ書ニ遠侍ト云フコトアルヲ以テ見レバ、軍兵侍衞スル番所ノコトニテ、サブラヒト云フ意ハ、警護ノ爲ニハンベリサブラフ者ト云フコト也、シカレバ國老職ノ人ヤ大將タル人ノ、必武士サブラヒナドヽ自分ニ稱ス

ルコトハ、文盲ノ至リト云ベキコト也、日本ハ淸盛賴朝以來ハ王政ノ衰タルニ乘ジ武家ノ威勢サカンニ成リ、武力弓馬ナラデハ天下ハ取ラレヌコトト思ヒ込ミ、ソノ武功ニホコルヨリシテ自然ト風俗トナツテ、武力ヲ面々ニ鼻ニカケ只モノ武威ヲ張リ耀シ、武士ト云フ名目ヲ結構ナルコトト心得タル也、又弓馬ノ家トコト〳〵シク面目ラシウ思ヒ稱スルモ、大キナル違ヒナルベシ、弓馬ハ勿論武藝ナレバ、大將タル人ノアマリ手ヲ下スコトニテハナシ、賤シキ事也、シカレドモ弓ノ射ヤウ、馬ノ乘リヤウハ、大將モヨク修練セネバナラヌコトナガラ、畢竟大將ノ職ハ弓馬ノミヲ主トスルコトニハアルマジキコト也、タトヒツヨ弓ヲヨク引キ、馬上達者也トモ、一人ニシテハ働カレマジキコト也、楚ノ項羽ノ弱年ナリシ時ニ、季父ノ項梁項羽ニ劍術ヲ習ハセラレタレバ、項羽スコシ學ビテ劍ハ一人ノ敵ニシタルモノナレバ、大將ノ用ニタヽヌモノ也、萬人ヲ相手ニシタルコトヲ學ビタシトテ、劍術ハ學バレザリケレバ、項梁又軍法ヲ敎ヘラレシニ、項羽コレヲ喜ビ學バレタレドモ、コレモソノ大槩ヲ知リテ學ビ遂ゲザリシト也、是コソ實ニ大將ノ氣量トモ云ベケレ、漢ノ高祖ハ匹夫ヨリ起リ、天下ヲトル大英雄ニシテ古今ノ將門ニ仰グ人ナレドモ、弓馬ノコトハカツテ沙汰モナク、大勢ノ軍兵ヲソレゾレニツカヒ軍ヲスルコトサヘ、我ガ手下ノ大將韓信ニハオトリタリシト也、シカレドモカク勇謀無双ノ韓信モ、陛下ハ軍ヲスルコトヲ我ニハ及バレマジケレドモ、手下ノ大將共ヲ我ガ自由ニ引マハシテ、將ニ將タルトコロノ氣量アルユヱ、我ハ中々陛下ニハ及バヌトイヒテ高祖ニ畏レ服セシ也、ソノ上ニ

高祖寛仁大度ニシテ人和ヲ得ラレタレバ、遂ニ天下ヲ取ラレシ也、項羽ハ大將ノ氣量ハ高祖ニモマサリタレドモ、氣ノ狭キ生レツキニテ人ヲ疑ヒ妬ム處アルユヱ、高祖ヨリハ一倍ノ大軍ナレドモ、敗軍セラレシハ英雄ノ氣量アリテモ、人和ナケレバ用ニ立ヌトミエタリ、我朝ニテモ太閤秀吉公ナドモ將レ將ノ氣量アリシ、コレラヲコソ武家ニ慕ヒ學ブベキコトナルニ何ゾ只武士ト云フコトヲ面目トシコレニ安ンズルコトゾヤ、タトヒ又所謂武士ノ道ト云フコトニ各別ナルコトアリトモ、又ハ英雄名將ノ威力ニテモ天下ヲトリ得テ、兵戈ノ事終リテ國家ヲ治メ民ヲ安ンズル場ニ成テハ、一途ニ武力バカリニテハ中々國家ハ治ルマジキコト也、ソノ證據ハ漢ノ陸賈ト云フ者、高祖ノ前ニテ聖人ノ書ヲ引キ政事ヲ議論セシニ、元ヨリ儒者ギラヒノ高祖ノ我ハ古ノ聖人ノ天下ヲ取ラレシトハチガヒ、馬上ニテ天下ヲ取タレバ、聖人ノコトハ用ヌトテ、陸賈ヲ大キニ罵叱レケレバ、陸賈イヘルハ、陛下ハ馬上ニテ天下ヲ得ラレシト思召セドモ、ナニトシテ馬上ニテ天下ハ治ルマジキゾト云ヒケレバ、大英雄ノ高祖モ陸賈ガ答ニハ閉口セラレテ、ソレヨリ陸賈ヲ信向シ、卽チ陸賈ニ命ジ古聖賢ノ語ヲ引キ、ソノ意ヲ主トシ天下ヲ治ル道ヲ論ジタル新語ト云フ書ヲ作ラセラレシニ、一篇出來テ指シ上ルタビゴトニソノ意味ヲ聞カレテハ、一々ニ尤也ト感服アリシト也、高祖ハ元不學ナル人ナレバ、始ハ儒者ハ用ニ立タヌモノ也トテ賤シミ嫌ハレシコト、チヤウド日本ノ文盲ナル武士ノ心ニヨク似テ、馬上ヲ以テ天下ヲ取ラレシコトヲ自慢ニ思ヒ、我武威ヲ推サバ勢ニテ天下ハ自由ニ治ルモノト思ヒ込マレシニ、陸賈ガ語

ヲ聞キ忽チ悟ラレシハ、サスガ大英雄ノ氣量アレバナリ、是ソノ漢四百年ノ基ヲ開カレシ所以也、ソレヨリ儒者ヲ信向シ、叔孫通ニ命ジテ古聖人ノ禮ヲ用ヒ斟酌シテ、漢一代ノ禮式ヲ製作セシメ、朝廷ノ儀式事ソナハリ萬事嚴重ニナリケレバ、始メテ天子ト云フモノ、貴キコトヲ覺エタリトイハレシ也、何程ニ思ハレテモ馬上ノ心バカリニテ天下ハ治マルモノニテナキ也、御當代ノ天下長久ナルモ、神君ノ武勇ノ威光バカリデハナシ、ソノ天性寬仁ノ德ニ自然ト人心感服シ來ルコト久シケレバ、天下ヒトリデニ御手ニ入シコト也、信長、秀吉、信玄、謙信ナドノ武力一途ナルヲ以テ引合セミレバ、イヤトイハレヌコトアル也、只ムキニ武威バカリヲ恃ミトシ、無理ヤリニ推シツケ、人ヲ勢ヲ以テ服サセタルハナルホド一旦ハ人ノ服スルモノナレドモ、少ニテモソノ威光ガ落レバ、ソノマヽニ人心ハナレ、天下ガ亂ルヽハズノコト也、彼ノカンヲシタル酒ノ如ク、油斷シタラバツイ冷サウデ危ク、常住ノ氣遣ヒ絕ル間ハナキ也、德ヲ以テ人心ヲ感服サセタハ、人ガ實ニ歸服スルユヱ、氣遣ヒナク安穩ニテ、ソノ德ノ光輝スナハチ威光トナツテ、自然ノ威光ナレバ何程デモサムルコトナク、人ガ違背スルコトノナラヌハ、是コソ眞ノ威光トモ云ベケレ、ソレユヱ書經甫刑ニ、德威惟威、德明ハ惟レ明トイヘリ、三代聖王ノ世ノ長クツヾケルハ、聖人ノ德ガ人心ニイツトモナク浹洽テ、聖人先王ハ沒レ世スギ去テ久シケレドモ、イツマデモ先王ノ德ヲ思ヒ慕ヒ、萬民忘レヌユヱニ、後世ニ少々不德ナル人主アツテモ、脇カラ人ガソノ天下ヘチツトモ指ヲサスコトノナラヌ也、詩ニ、「於戲先王不レ忘」ト詠ジタルモ、先王

ハ歿シスデニ久シクナレドモ、ソノ徳惠ヲ思慕敬戴シテ忘レラレヌト云コトナレバ、カノ名香ノ聖徳ナレバ、ソノ馨香ハイツマデモ人ノ心ニ染トマリテウサラヌ也、中華ニテ秦ノ始皇帝ハ武力ヲ以テ、一旦ハ天下ノ人ヲ推シツケ服サセラレタレドモ、只ソノ身一代バカリニテ、ワヅカノ間ニ滅亡セシハ、ソノ武威ノミヲ恃ミ、全ク我慢ノ心ヲ以テ自身ノ愚ナルコトヲシラズ、狭キ心ヨリ天下ノ人ガ古ノ聖賢ノ書ヲ見ルユヱ、古ヘノコトヲ善シトシ、今ノ世ヲ譏リ口ガシコキコトヲイヒ、上ヘ歸服セヌト思ヒ込ミ、天下ノ萬民ヲコト〳〵ク愚カニスル爲メニ、古聖賢ノ書ヲ人ニ見セヌヤウニセウトテ天下ノ書ヲ焚ステ、キビシク禁制シテ、書ヲ持テイル者アレバ刑罰セラレシハ、俗ニ云鼻ノサキ智惠ト云ベシ、漢モ同ジク武力ヲ以テ天下ヲ取レルコトナレドモ、高祖ハ天然ト寛仁大度ノ徳アリテ、ソノ仕形始皇ト大キニカハリ、氣量ヒロキユヱニ、人モ實ニ感服セシコト也、ソノ上ニ守文ノ君文帝、三代以下ニ並ナキ明君ニテオハセシカバ、ソノ徳惠自然ト人心ニ浹洽シテ、天下四百年迄久シクツヾケリ、ナレドモ三代聖人ノ治メカタトハ大キニカハレリ、惣ジテ三代以下ノ政ハ、大槩ハ威ト法トヲ恃ミニシテ天下ヲ治ムルコトナレドモ、ソノ内ニモ人ノ實徳ニ感服スルト、只ウハムキノ威法ニ畏服スルバカリトノチガヒメノ驗ハ、聖人ホドノ徳ナラデモ、相應ノ奇特ハアルコト、古今符節ヲ合セタル如ク也、史ヲ讀ミトクト考ヘテ見レバ知ルヽコト也、サテ又文武二道ト云コトヲ世俗ニイヘルコトモ、少ト心得チガイアルコト也、古書ニ文武ト並ベテ稱スルコトハ、多クハ聖人ノ徳ヲ表シテ稱美シタル詞ニテ、

論語ナドニ文武之道トアルハ、周ノ文王武王ノ政道ノコトヲイヘル也、本文王ヲ文トイヒ武王ヲ武トイヘルモ、ソノ德ヲ以テ稱シタルコト也、ソノ外ニ文武トイヘルモ、必文ト武ト相並ベテ稱シ、兩輪翼ノ如クドチラモハナスコトハナラヌ都合シタルコトニシテ、武ノ一偏バカリヲ稱スルコトハカツテナキコト也、中庸ニイヘル知仁勇ノ三德ノ名モ、三ツ相並ビテ知バカリデモナラズ、仁バカリデモナラズ、勇バカリデモナラズ、三ツデチヤウドツリアフタルコト、一ツデモハシタニナレバ用ニタタヌモノニナル事也、知バカリニテ仁ナケレバ、知モ邪知也、仁バカリニテ勇ナケレバ、仁モ立タヌコトガ出來、勇バカリニテ仁ナケレバ、血氣ノ勇ニテ害ヲナスコトアル也、聖人ノ武勇ハソノ德ノ光輝ニシテ、內ヨリ自然ト持ツテ出タルモノナレバ、イツマデモ衰ヘ變ズルト云コトハナキモノ也、武士ノ武勇ト思フハ、ミナ人ノ血氣ヨリ出來タル客氣ト云モノニテ、イツマデモアルモノニテハナシ、當分ノ客人ノヤウナルモノ也、ソノ勇氣血氣ノナスワザナレバ、人ノ血氣ハ年ノ老ルニ隨ヒ衰ヘユクモノユヱ、身ガ衰フレバ心底ニマカセズ、恃ミトセシ武勇モ衰ルモノ也、一日ニ千里ヲ飛騏驎モ、年老ヒ血氣衰フレバ、駑馬ニモ劣ル如ク也、シカレバカノ血氣ノ武勇ハ恃ミニハナラズ、中々ユキトヾカヌ所アツテ、始終ノ用ニハ立タズ、外客ユヱニ身ニナラヌモノ也、德ヨリ出來タル武勇ナラデハ、トテモ始終ノ用ニハ立ヌト知ルベシ、イカナレバ「和而不ㇾ流、中立而不ㇾ倚」ノ德ヨリ、天然ト出來タル武勇ナレバ、イカナル色慾、酒慾、名慾、利慾ナド云ヘル神通力ヲ得タル魔王ノ大敵、右往左往ヨリド

ノヤウニセメツケタレバトテ、チツトモタジロカズ、人ノ克チオホセラレヌ強敵ニ、能ク克チオホセタル聖賢克己ノ大武勇ニハ、名將勇士モカツテ及ブマジキコトト覺ル也、古來唐モ大和モサシモノ名將勇士、ミナ色慾ノ大敵ニ出合テハ、ホロヲミダシ勇氣ヲ失フ類アマタアルコトナレバ、武士ノ武勇ハツヨイヤウデ又ドコヤラニ弱キ所アツテユキトヾカヌ也、何程デモ武威一偏ニテ天下ハ治ラヌコトニ極リタルヲ、武門ノ士ハ我ヲ立テ、一途ニ武勇ヲ以テ吾道ト心得テ、武威ナラデハ天下治ラヌモノジヤト思フハ大キナル違也、ソノ上日本ヲ武國也トテ自慢スレドモ、元來日本ハ聖人ノ國ナルコト、イヤト云レヌ近キ證據アレド人ガ氣ガツカヌ也、ソノ故清盛賴朝以來ハ、武士ノ方カラハ武家ノ天下ジヤト心得テヰレドモ、今ノ世ニテモ天子ヲ奉リテ主トセザレバ、忽チ天下ノ人心ノ離レ叛クコト明白ナルコト也、御當家モ官職ハ内大臣ギリニテ昇進ナサレズ、實ハソノ權威ヲ以推サバ、太政大臣ニ進マセラレテモ、一向ノコトニ天子ヲ推シ下シテ、取テ代ラセラレウト儘ノコトナレドモ、ジツト謙損シ天朝ヲ尊仰ナサルヽコト、御尤ナルコトヽ思ハルヽ也、武家ノ天下トテ、武威ヲ以テ天下ノ政ハ自由ニナレドモ、兎角ニ表向ノ名代ハ、天子ヲ君ト仰ギ、自身ハ臣下トナツテ、ヲラネバナラヌト云コトハ、ドウモヤメテモヤメラレヌイヤトイハレヌコトアレバ也、我國人皇ノ始、神武天皇ト申シ奉ルハ日本創業ノ君、天照大神ヨリ五代ノ孫ニテ、今上皇帝マデハ三千餘年ニ及ビ、皇統相承ケテ一王ノ血脈相續シ、萬民是ヲ天子ト仰グコト、實ハ中華ニモ例ナキコト也、シカレバ日本國中ノ人ハ、今ノ

世ニ至リ天照大神ノ御子孫ヲ日本ノ主ト思ヒ込ミ、天子ヲ戴ク心ハ日月ノ如ク也、昔ヨリ度々ノ亂世アリシニ、イカナル大英雄ガ出テモ、天子ニ刄向ヘバ卽時ニ朝敵ノ名ヲ被ル也、朝敵ト名ガツケバ、人心コト〴〵ク離レ叛キ、忽チ滅亡スルコト土崩ノ勢ナルコト、イヤヲウナラヌ神妙不測ナルコト也、名ハ實ノ賓ト莊子ガイヒシ如ク、名ト云モノ大切ナルモノ也、ソノ實ノアル名デサヘアレバ、ドフモヲスニ推サレヌモノト知ベシ、サシモ横紙ヲサカレシ淸盛ノ如キ英雄、天子ヲ我ガ婿トシ、太上皇ヲ推シコメ、朝廷ノ政ヲ我儘ニシ、例モナキ太政大臣トナッテ、人臣ノ極官マデハナラレタレドモ、平家物語ヲ見ルニ、新大納言成親卿謀叛ノ時ニ、淸盛ノ朝敵ト成テ後ハ、イカニ悔トモ益アルマジト云レシヲ思ヘバ、淸盛モ朝敵ノ名ヲ被ルヲバ大キニ懼レラレシト見エタリ、淸盛ノ武威ニテハ、天子ニ取テ代ハルコトモイト安カルベキコトト思ハルレドモ、朝敵トイハルヽコトヲサヘ懼レラレタレバ、何程ニテモ天子ノ位ヲ冒コトハナラナンダト見エタリ、淸盛ノ以後ニハ、室町家ノ時ニモ、義滿太政大臣ニナッテ、武威コトノ外熾盛ニシテ、內心ニ王室ヲ亡シ、自身天子トナラント支度セラレシカドモ、ドコトモナク氣味ワルカリシニヤ、ソレモ遂ニ果サズ、大明ヘ使ヲ通ジ、厚ク禮ヲナシ、黃金ヲ多ク贈ラレシユヱニ、明ヨリ返簡ニ、日本國王トカキ來リシヲ大キニ悅バレケレドモ、ソレモ內證ノコトバカリニテ、日本ニテハ王ト稱スルコトヲ憚カラレシハ、兎角ニ懼ロシイトコロノアレバ也、其以後ニ又太閤秀吉公中華ヲモ攻取ラフト企ダツル程ノ大英雄ナリシモ、太閤トナリ人臣ノ極官迄ニハ

ナラレタレドモ、皇統ヲ絶チ天子ニ取テ代ルコトハ懼ロシケレバコソ、一生ノ内遂ニ人臣ノ位ニテ終ラレシコト也、淸盛モ秀吉モワヅカ二代目ニ滅亡シタレバ、イカサマ御當家ノ官職ヲ内府ギリニテ御謙損ナサルヽコト、御代長久ノ驗ト見ユル也、御當家ノ國初ヨリ足利家ノ先例ニ依テ、天朝ヨリ代々王子ヲ人質ノ氣味ニトリ、關東日光ノ宮門跡ヲ建オカルヽコトハ、マサカノ時ニ朝敵トイワレンコトヲ恐レテ、何時ニテモ關東ニ天子ヲ立ル爲メノ謀トミエタリ、是偏ニ朝敵ノ名ヲノガルヽ爲ノ御用心也、サレバ朝敵ト名ガツケバ、日本國中ノ人心忽チニ離ト云ハ、別ノ事ニテハナク、只天照大神聖神ノ德數千年ヲ歷テ、今澆李ノ世ニナリテモ、日本國中ノ人心ニ浹洽シテイマダサラズ、「於戲前王不レ忘」ノ所以也、伊勢參宮トテ、日本國中ノ人西ヨリ東ヨリ南ヨリ北ヨリ、其子ヲ襁負シテ一人モ參宮セザルモノモナク、小兒ノ內カラハヤ參宮ノ志デキテ、遠國カラ小兒女子マデ必參宮ハスルコトニテ、外ノ神社ニナキコトナルハ、是即チ天照大神ノ聖德ノ馨香ハ、數千年ヲ歷テ人心ニ薰陶シテウサラヌユヱノコトナレバ、天照大神ハ至德ノ聖人ナルコトイチジルシ、或說ニ、天照大神女體ト云コトナレドモ、吳ノ太伯ナルベシトイヘルコト、サモアルベキコトトモ思ハルヽ也、ソノ上太伯ハ元ト殷ノ世ノ人ナレバ、殷ノ世ノ人ハ鬼神ヲ尙ブ風俗ナルユヱ、殷ノ餘風ガノコリテ、日本ニハ神ヲ尙ブコトト見エタリ、又吳ノ字ヲツケテ稱スルコト多ク、吳竹吳服ノ類ナドカタ〳〵符合スルコトモアル也、然レドモカク云ルコトヲ神道者ナドハ、コレハ儒者ノ唐ビイキカラ云出シタル傅會ノ說トテ甚嫌フコト

也、神道者ハ只日本ハ神國也トテ、神ト云モノヲ奇怪幻妖ナルモノヽヤウニ思ハセ、日本ニハ別ニ日本ノ道アリトテ、吾道ヲ神妙不測ニセウト拵ヘタルモノ也、神道トテアルベキコトナラズ、ソノ極意トスル中臣祓ナドヲ見レバ、上古ニ治レ民ノ掟トミエテ、殊勝ナル質樸ナモノ也、又神代ノ巻トハ、日本紀ノ初巻ニテ、上古ノ記錄ナレバ、ソノ詞モ日本ノ古語ユヱ、今ミレバ古怪ナルコトアルヲ、ソレニ色々ト後世ニ理ヲツケ、或ハ中庸ナドノ理ヲ借リ用ヒ、面白ク傳會シ拵ヘタルコトハ、元來山崎闇齋ナド片店ニ神道ヲ賣リ出シ、人ノ面白ガルヤウ建立セシコト也、元ヨリ理ト云モノハ、空ナルモノニテ、極ツテ又極ハマラヌモノナレバ、何ヲツカマヘテナリトモ、利口ニトリ合セテ作リ拵ヘラルヽモノ也、又神道ノ土金ノ傳ナド云ルコト、ワケモナキ文盲ナル詮議也、和語ノ解モ神道者ノイヘルハ、皆理窟ヲ以テ我意ニテ拵ヘタルモノ也、愚拙モ和語ノコトハ、幸ニ歌學ヲ好ミシ方ヨリ聞キ傳ルコトアリシユヱ、神道者流ノ說モ粗聞タルニ皆牽强シタルコトニテ、一ツモ採ラレヌコト也、和語ト云モノ、日本ノ古語ト云モノヽ根本ヲ吟味シテ知ラネバ、多クハ我意理窟ニナリテ、本意トハ相違スルコト也、タトヘバ古語ニ物ノトガリタルコトヲイガトイヘルヨリ轉用シテ、怒ル碇才（イカシ）ボコナドヽイヒ、又物ヲ入ルヽ物ヲツキトイヘルヨリ、飯器（メシツキ）、油器（アブラツキ）、酒器（サカツキ）ナドヽイヘル類ニテ、ソノ古語ノイカトイヒツキト云コトニ義理ハナキコトナルニ、ソレヲ無理ニ我意ヲ以テ理ヲ傳會スルハ、蛇足ヲ添ルト云モノニテ、神道者流ノ和語ノ解ノ如クニナルコト也、カノ神道トテ別ニ道アルヤウニイヒ立ルモ、畢

覺イハヾ前ニイヘル如ク、茶儒ノ說ト同類カト思ハルヽ也、シカシナガラ神ハ卽チ古ノ聖神ナレバイカサマ天照大神ノ聖德、數千年ノ季マデ人心ニ薰染シテウサフヌト云ハ、神妙不測ノコトナルニヨツテ、神國トイハレンモコトワリト覺ルナレバ、カノ武國トイハンヨリハ一理アルコト也、カヤウニ德ノ人心ヲ服スルコト、先王歿レ世ノ後數千年ノ季マデ、イカナル英雄名將ニテモ、先王ノ德ニ懾服シ、朝敵ノ名ヲ懼レ忘ムヤウニアルト云、眞ニ神武不殺ノ武威トモイフベシ、聖德ノ武威ハ此方ニ何トモセズ、世話ヤカズシテ自然ト人ガ懾服シ、ソノ人ハスデニ歿レ世テ後モ、ナホ人ヲ懼レシムル也、武力ノ武威ハ此方ニ色々ト思慮計謀ヲメグラシ、種々ノ仕樣ヲ拵ヘ、後々マデノ手管ヲシテ、人ヲ推シツケテ服サセウトシテ、シカモ常住氣遣ヒガヤマズ、タトヒ人ヲ服シオホセテカラガ、一旦ノコトニテ朝日マツ間ノ氷ノ如ク也、淸盛ヨリ近代ノ太閤秀吉マデノ成敗ヲ考ヘテ知ベシ、目ノアタリナル豐國ノ武威ナリシニ、一旦ニ酒ノカン冷テ水ヨリモ寒ク、宗廟モ忽チ丘墟トナリ、亡國ノ社トテ不レ祀忽諸、今ハ草棘森然トシテ狐兎ノ遊トナリ、黍離ヲ歌フ人サヘナキヤウニナリヌ、嗚呼、殷鑑不レ遠、ナゲクベキ哉

人情ニ通ジ諫ヲ容レ用ルコト、人君政治ノ肝要ナルコトト仰セラルヽコト、至極ノ卓識ト感入候、聖人ノ敎ハ近クイハヾ、人情ニ通ズルマデノコト也、今ノ世ノ經生儒者ナドハ、人情ニ遠ク世間ノ事ニ無案內ナルヲ、向上ニシテ殊勝ナルコトト心得、世上俗人ノ方カラモ經生儒者ノ異風ニテ、世事無

案内ニ人情ニウトキヲ見テハ、各別ナ人ジヤ、殊勝不凡ナルコト、サスガ儒者ナリト稱嘆スルコト大キナルハキチガヘカト思ハルヽ也、儒者ノ業ハ古聖賢ノ書ヲ讀ミ歴史ニ達スレバ、世常凡常ノ人ヨリハ各別ニ能ク人情ニ通達セデバ叶ハヌハズノコト也、シカルニ儒者ニヨツテ人情ニ通達スルハ、世間功者ニナツテ世智カシコク、卑俗ナル風ナリトテ忌ミ嫌ヒ、世事不案内ナルヲ向上ナルコトヽ心得テ、我ハ凡俗ノ世人トハ各別ジヤト高ブリ、人ヲ非ニ見ルヤウニナルコト也、ソレカラシテ、世人モ或ハ嘲ケリ或ハ惡ミ、儒者ナルユヱ世事ハ知ラヌハズ、政事ナド青表紙ノ儒者ナドヽナルコトニテハナイナド、用ニタヽヌモノヽヤウニ思ハレ、此輩當レ束ニ高閣ニトイヘル如ク、棚ヘアゲテノケモノニシ、俗人ノ高名ナル者ノ自カラハ愚ニ見ユルヤウニナツテ、今時ノ大名ノ家ナドニテワルウスレバ、儒者ヲ武士ヨリ各段ニ格ヲ下テ賤シムルヤウニナルハ、無念ノコト也、漢ノ高帝ノ儒者ヲキライ賤シマレタルモ、中華ニテモ古ヨリ書生ト云者ガワルウ心得テ、人情ニウトク用ニ立タヌ風ト見エタリ、テウド今ノ世ノ大名ノ儒者ヲアシクアヒシライ、武士ノ格式ニサヘイレヌヤウニスルト同ジ氣味也、コレ皆儒者モ自分ヨリワルク仕向ケ、俗人モ文盲ニテ樣子ヲ知ラヌユヘノコト也、イカナレバトテ儒醫ナドト云名目ハ、文盲ノ甚シキコト也、或ハ出家ノ僧徒ヤ、山居ノ隱居ヤ、亦ハ一藝ヲ業トスル文人詩人ヤ、射御ノ師、醫トナドノ類ハ世上ノ事ヲ打忘レ、一向三昧ニ心ヲ我ガ業ニ專トシ他事ナキユヱ、自然ト世上ノ事ハ不案内ナルガ、成程妙手ニモナルハズ、又殊勝不凡ニモアルコト也、儒者ノ業

ト云モノ、人倫ノ道ヲ知リ、古聖賢ノ書ヲ讀ミ、ソノ本意ヲ考ヘ、身ヲ修メ國家ヲ治ムル仕形ヲ知ルコトナレバ、人情ニ通ゼズシテ何ヲ以テスベキニヤ、世間ノ俗人ヲハナレテ、五倫ハイヅクニ求メンヤ、孔子モ鳥獸ニハ「不レ可ニ與同一レ群、吾非ニ斯人之徒與一而誰與」ト仰セラレシニアラズヤ、斯人ト云ハ、斯ノ現世世間ノ俗人ニアラズシテ、イヅ方ニアルベキヤ、五倫ハコトゞゝク斯人ナレバ、人ノ情ヲシラデハ其教ヲ施スベキヤウハナキナリ、佛者ナドノ斯人ヲハナレ、五倫ヲ絶ツテ教ヲ建立シタルモノナレバ、聖人ノ教ハ斯人ヲ教ルコトノミナレバ、カノ佛者ノ世間法トテ、凡夫ノ道トイヒ、一等ニ卑キヿニシタルモノガ、卽チ儒者ノ道トスルモノニテ、聖人ノ教コレヨリ外ニ向上ナルコトヲ求メヌヲ至極トセリ、一部ノ論語ハ皆是求レ仁ノ事ヨリ外ハナキコトナレバ、仁ト云モノハ人ノ本心ナルユヱ、人情ニ通ゼズシテ仁ハ求メ得ベカラザルコト也、人情ヲ知ルハ、求レ仁ノ手ガヽリニシテ、學者最初ノ工夫ナリ、孔子ノ「能ク近取テ譬ルハ可レ謂ニ仁之方一也已」ト仰セラレシニテモ知ルベシ、人情ニ通ゼズンバ、何トシテ近ク我ガ身ニアルコトヲ取テ、人ノ身ノ上ニ引アハセ譬テミルコトハナルマジ、ソノ能近ク取テ譬ルト云ハ、卽恕ノコト也、恕ハ卽チ求レ仁ノ方術ナレバ、人情ニ通ズルト云ハ、卽又恕ヲイタスノ方術ト知ルベシ、シカル故ニ、孔子ノ門弟子ノ學文トテ、書ヲ讀ムト云フコトハ、先ヅ詩經ト見エタリ、サレバ興ニ於詩一トノ玉ヘリ、詩ヲ學ブヨリ興發シテ、段々ト道ニ進ムコトナリ、コレヲ以テミレバ、詩經ハ人情ヲ知スル爲ノ書ト見エタリ、ソレユヱ論語ノ内ノ師弟ノ問答ニモ、其ノ外

ノ經傳ニモ書ヲ引テ用ユルニ、外ノ書ヲ引クコトハ少ナク、只モノ詩經ヲ多ク引ケリ、詩ヲ學バヌハ、墻レ面立ツガ如シトモノ玉ヘバ、學者ノ第一ニ業トスルモノハ、詩經ト知ルベキコト也、ソノ外論語ニ詩ノコトヲノ玉ヘルコト多クアレバ、氣ヲツケ考ヘ見レバ知ルヽコト也、元來詩經ト云モノ、上ハ王公大人朝廷ノコトヨリシテ、下ハ賤シキ士民ノ耕作ノコト迄ヲ詠ジタル詩ヲ采リ集メ、諸國ノ詩ヲ載セタレバ、國ノ風俗人情コト〴〵ク知ラルヽ也、詩ヲ學ブト云ハ、全ク人ノ五倫、世上朝夕ノ間ニオイテ、貴賤上下色々樣々ナル人情ノ善モ惡モ酸モ甘イモ、委細ニ通ズル爲メト見エタリ、ソノ上ニテ詩人ノ詞ノ人情ニアタリタルヲ取テ、ソノ理ヲ轉用シテイロ〳〵ニハタラカシ、我ガ身ノ上ノコト、又ハ人ノ身ノ上ノコトニ引合セ見レバ、無量ノ利益アルコト也、論語ニ、子貢ノ詩ノ詞ヲ取テ發明セラレタコトヲ孔子ノ稱美ナサレ、可ニ與言レ詩ト仰セラレタルヲ見テ知ルベシ、凡聖人ノ教ハ、勿論五倫ノ外ナルコトハナシ、今日世界ノ人ノ相交ルニモ、五倫ヨリ外ノ人ハナキコトナレバ、人情ト云ニ、五倫ノ外ノ人情ハナキ也、詩ト云モノヽ出來ルハ、人ノ五倫朝夕相交ル間ノ事ニツケテ、人ノ七情ガ動キ發リ、內ニ鬱シ積ツテドフモタマラヌモノガ、我ト覺エズシラズ詞ニ自然ト發シタルモノ也、朱子詩經ノ序ノ內ニ、「發ニ於咨嗟嘆咏之餘一」トイヘルガ詩ノ本意也、今人ノ詩ト云モノハ、ワザト心ニテ作リ拵ヘタルモノナレバ、實ノ詩ト云モノハ希ナルコトナリ、和歌ト云モノモ、本ハ詩ト同ジモノニテ紀貫之ガ古今ノ序ニ、人ノ心ヲ種トシテ、萬ノ言ノ葉トハナレリケリトイヒ、見ルモノ聞モノニ

ツケテイヒ出セルトイヘバ、詩ノ本意ト符合セルモノ也、此萬ノ字面白シ、人情ハ善惡曲直千端萬緒ナルモノナレバ、人ノ心ノ種ノ内ニシ發生ノ氣欝シタルガ、見ルモノ聞クモノニ觸レテ、按排工夫ナシニ思ハズ知ラズ、フット言ヒ出セル詞ニスグニソノ色ヲアラハスモノナリ、草木ノ種ト云モノ、内ニハ生ヨウト工夫シテ生ズルモノデハアルマジ、發生ノ氣ガ内ニ欝シテ、ソレト自然ニスト生エ出ルモノ也、ナレドモ人ノ大事ニ臨ミ自警シテタシナミ、按排工夫シテ、心ノ内ニテソノ善惡ヲシラベ吟味シ、詞ニ發スルコトハ、皆ソレハ作リ拵ヘタルモノナレバ、中々人ノ實情ハシレヌコトモアル也、ソレユヱニ簞食羹斗ニ心ノ色ヲアラハスト云テ、人ノ心ヲユルシ、ウッカリト思ハズニフト言ヒ出シタル詞ニテ、人ノ實情ハ見ユルモノ也、俗諺ニ問ニハ落イデ語ルニ落ルト云モ、人ノ思ハズ知ラズフット實情ヲイヒアラハスコトナリ、コレガ詩トナルモノニテ、人ノ底心骨髓カラズット出タルモノナリ、シカレバソノ詞ヲ見ルニヨッテ、世上ノ人情ノ酸モ甘モヨク知ラルヽコト也、詩ハ三百篇アレド詩ト云モノハコト〲ク只一言ノ「思無㆑邪」ノ三字ヨリ出來ス詩ト云フモノハ一篇モナキ也、孔子思無㆑邪ノ三字ヲ借ッテ、詩ト云モノ出來ル譯ヲ解釋シ玉フナリ、此ノ邪ノ字ヲ朱子ハ人ノ邪惡ノ心ト見ラレタレドモ、ソレニテハ味ナキコト也、人ノ邪念ヨリ出ス詩ヲヨシトスルコトハ勿論ナレドモ、詩三百篇ノ内ニハ、邪念ヨリ出ル詩モ多クアルコト也、心ノ内ニ按排工夫ヲメグラシ、邪念ヲ吟味シテ、邪念ヨリ出スヤウニト一(ヒト)シラベシテ出來タルモノハ、詩ニテハアルマジキト思ハルヽ也、只ソノ

邪念ハ邪念ナリ、正念ハ正念ナリ、我シラズフット思フトホリヲ云ヒ出スガ詩ト云モノナルベシ、ソノ詩ヲ見テ邪念ヨリ出ルト、正念ヨリ出ルト云コトヲ知リ分ツハ、ソレハ詩ヲ見ル人ノ上ニコソアルベケレ、詩ト云モノヽ本體ニテハナキコト也、詩ヲ作リ出ス人ハ邪正ハカツテ覺エヌ也、ソレユヱ詩ト云モノハ恥カシキモノニテ、人ノ實情ノ鏡ニカケタルヤウニ見ユルコトナレバ、善惡邪正トモニ、人ノ內ニヒソメタル實情ノカクサレヌモノハ詩ニアルコトナリ、聖人人ニ人情ノ色々樣々ナルヲ知ラサン爲メニ、詩ヲ集メ書トシテ讀セラルヽニ付テ、思無レ邪ノ一言ヲ借ッテ、元來ノ詩ト云モノヽ本義ヲ解釋ナサレ、三百篇アル詩ハ只此ノ一言デ以テ、詩ノ義ハ此內ニ蔽籠(オホヒコモル)トノ玉ヒシコトナルベシ、愚拙經學ハ朱學ヲ主トスルコトナレドモ、詩ト云モノヽ見ヤウハ、朱子ノ註ソノ意ヲ得ザルコト也、思無レ邪ト云ヲ、朱子ハ人ノ詩ヲ學ブ法ヲノ玉ヘルト見ラレタルユヱニ、論語ノ此所ノ註ニ、勸善懲惡ノコトトセラレタルナリ、シカレドモ勸善懲惡ト云ハ、春秋ノ敎ニテコソアレ、詩ノ敎ニテハナキナリ、禮記ニモスデニ人ノ溫柔敦厚ニナルヤウニトスルガ、詩ノ敎ジヤト云テアルコトナリ、コヽニノ玉ヒシハ、詩ノ敎ヲ說キ玉ヒタルニハアルマジ、只詩ト云モノヽ一體ヲ解釋シテ人ニ示シ玉フコトト見エタリ、朱註ニイヘル如ク、淫佚ナル詩ヲ見テ、我ガ淫慾ノ邪念ヲ戒メ懲ラス程ノ人ナラバ、ヤガテハヤ思過レ半ト云モノニテ、ソノ人ノ天質アマリ淫慾ノ深キ人ニテハアルマジケレバ、必ズ詩ヲ見ヌトテ淫奔ニ至ルコトアルマジキコト也、シカレバ淫慾ノナキ人ハナケレバ、タトヒ淫慾ノ少

キ人ニテモ、婬蝶ノ詩ノ醜キヲ見テハ、イヨ〳〵懼レツヽシミ、戒メ懲ラス益ハアルベケレバ、ソレハ左モアルベキコトナレドモ、カノ天質淫慾フカキ人ガ鄭衛淫奔ノ詩ヲ見タラバ、イヨ〳〵慾火ノタキツケニナツテソノ風ニハ移リヨキモノナリ、オボロゲノ人ダニ戯場ノ淫劇ヲ見タリ、春畫ノ態ヲ見テ忽チニ心ウツリ淫慾ノ媒トナルモノナレバ、況ヤ下地ノ生質淫慾フカキ人ニ於テヲヤ、ソレユヱニコソ顔子ノ政ヲ爲ルコトヲ孔子ヘ問ハレシ御返答ニモ、天下ノ人ヘナベテノ教ニハ「放二鄭聲一」ト仰セラレタルコトナリ、末俗ノコトナレドモ、今世ニ流行スル男女相對ニテ双斃スル、俗ニイハユル心中（唐ニテハ女柳ト云也）ト云コトナドモ、下地浮氣ナル者共、カノ戯場ノ淫劇ヤ時樣婬奔ノ淨瑠璃小歌ナドヲ見タリ聞タリスルヨリ、昏惑シテソノ心ニウツリ、且ハ又カノ佛教ノ來世ヲ期スル心ノ愚カナルヨリ起ルコト也、ソノ如キ淫慾フカキ人ガ鄭衛ノ淫風ヲ見テ醜キコト人ノスマジキコトト鑑戒シ、忽チ發心シテ我ガ淫行ヲ懲ラシ直スト云人ハ、千百人ノ内ニハ一人アルカナキカ、ソレハ甚ダ稀有ノ事ト思ハル、ナリ、兎角ニタダ詩ノ教ハ、世間ノ人情ノ酸モ甜モ知ラスル爲メノコトニテ、人情ニヨク通ズレバ、人ノ實情ヲ察スルコト明カナルユヱ、仁恕モコレヨリシテコソ求メ得ル手ガカリモアルナレバ、元來詩ヲ學ブト云ハ、學者以上ノ事ニテ、ナベテ世俗ノ人マナブコトニテハナキコトト見エタリ、況ヤ人ノ上ニ立チ國家ノ政ヲスル人ハ、必ズ學文ヲシテ人情ヲ能ク知リ下シ、委曲ノ情ヲトクト察セズシテハ、人ノ實ニ歸服スルコトアルマジケレバ、人情ニ通達セズシテ、國家ノ政ハ必定ニナラヌコトナ

リ、サレバ論語ニ「誦二詩三百一、授レ之以レ政不レ達、使二於四方一、不レ能二專對一、雖レ多亦奚以爲」トノ玉ヒタレバ、是政ニ達スルト專對トハ、詩ヲ學ビタル驗ト見エタリ、朱註ノ如ク、詩ヲ學ブ驗ヲ勸善懲惡トイハヾコソ、聖語ハイカヾ見ルベキヤ、朱註コヽニ至テ思無レ邪ノ註ト不都合ニ見ユル也、苟牽强傅會シテイハヾ、イカヤウニモイハルベケレドモ、ソレデハ親切ニ覺エヌナリ、專對ト云フコトハ、春秋諸侯割據ノ時代ハ、國々互ニ使者ノトリカハシアツテ、甚ダ大切ナルコト、使者ノ一言ニヨツテハ、敵國ヘユケバ質ヲトラレナドスレバ、大キニ國ノ利害ニナルコトナレバ、人ヲ隨分ト選ビタルコトナリ、左傳ヲ見レバ、ソノ樣子クハシク知ルヽコト也、使者ノ行ク所ハ、皆ナ敵國ノコトナレバ、先ニテ色々ノムヅカシキコトヲイヒカケ、詞質ヲトリ手ヲトラサフトスルコトユヱ、使者タル人君命ヲ辱シメヌヤウニ、我ヒトリノ一存ヲ以テ道理タヾシク、人ノイヤヲウナラズ、敬服スルヤウニ、中デヨイヤウニイヒヌケ返答セルヲ專對ト云ナリ、是ヨリ世間ノコトニ物ナレ、人情ノ酸モ甜モ知リヌキタル人ニテナクテハ、必定シソコナフコトナリ、人情ニ達スレバ自然ト人ノ氣量モ潤フナリ、料見ヨクナルモノユヱ、イカヤウノコトニ出逢フテモ、ヅラ／＼處置(サバケ)テユクハヅモアレバ、敵國ヘユキ先ヨリイカヤウノムヅカシキコトヲイヒカケ仕ムケタリトモ、サシツカヘコマルコトハアルマジキト覺ユルナリ、サルニヨツテ詩三百篇ヲコト／＼ク平生ニ誦シテ學ビ得タリトモ、人情ニ達スル驗ガナクバ、何ノ用ニハ立タヌコトトノ玉ヘル義ナルベシ、サ又テ思無レ邪ノ邪ノ字ノ義

ハ、邪惡邪佞ナドノ字ノ味ニテハアルマジ、邪行邪視又ハ邪幅ナド、イヘル邪ノ字ノ義ニアルベシ、元來邪字ノ音義ニ斜ノ字アレバ、斜ノ字ノ意ガ即チ邪ノ字ノ本義ニシテ、字注ニモ不レ正也トアルユヱ、惣ジテ物ノ何ニテモ横スヂカイニナリ、眞ロクニナキ意味ノ字ニテ、正ノ字ノ反也、正ノ字ノ本義モ、惣ジテ何ニテモ物ノ眞スグニテチヤウドロクナル意味ノ字ニテ、正立、正坐又ハ正午、正東、正面ナドイヘル類ガ正ノ字ノ本義ナリ、ソノ意義ヲ働ラカシ、轉ジテ人ノ心ノ質直ニテ善キコトニ用ヒ、正レ心正レ己正レ言ナドイヘルコトナリ、シカレバ邪行邪視ナドイヘル類ノ邪ノ字ガ元ト邪ノ字ノ本義ニテ、ソレカラ轉ジ働ラカシテ、人ノ横スヂニ曲リテ惡キコトニ用ヒ、邪佞邪曲ナド、イヘルコトナリ、スベテ文字ニハ皆ソノ字ノ本義アッテ、ソレカラソノ意義ヲ働ラカシ、外ヘ轉ジ意味ヲ用ヒ換ヘタル字ガ多クアルコトナレバ、ソノ字ニ意義ノ多アルハ、ソノ本義ヲ知ラデハ叶ハヌコトナリ、ソレヲ辨ゼズニ、邪ノ字ナド、邪トアレバドコデモオシナベテ必ズ佞惡ナルコトト心得ルハ、末ヲ知ッテ本ヲ知ヌト云モノナリ、シカルユヱニ字義ト云モノ大切ナルモノニテ、ソノ意義ヲトリソコナヘバ、聖語ノ味ヒ大キニ相違スレバ、聖人ノ意ニカッテナキコトヲ心得ルヤウニナルコトナリ、朱子ハ邪ノ字ヲ本義ヲ知ラレヌト云コトニテハナケレドモ、詩ヲ勸善懲惡ト見ラレシヨリ、邪ヲ佞惡ノ義ニ見ラレシナリ、和語ニモ自然トコノ意アッテ前ニイヘル如ク和語ノ本トアッテ、イカト云ヲ轉用ニシテイカルトイヒ、イカリトイヒ、ツキヲ轉用シテサカツキ、メシツキトイヘル如クナリ、コレヲ以テミ

レバ、思無レ邪ノ邪ノ字ハ本義ニ見テ人ノ心ノ思フトホリズツト出テスグニユカウトスルトコロヲスグニヤラズ、內ニテ横スヂカイヘヒカヘ、ヒト思按シ按排料理スルハ邪ナリ、シカルヲソノ思フトホリ我シラズ內カラ自然ニズツト眞スグニ出テ、情實ヲ吐露シタトコロヲ無レ邪ト云意ナルベシ、孟子ノ「乍見二孺子入一レ井」ト云乍見ノ意味ガ、此思無レ邪ノ所ナリ、詩ト云モノハ、內ニ思フトホリマツスグニズツトイヒ出セル思無レ邪トコロヨリ出來タルモノナリ、貫之ガ心ヲ種トシテ、見ルモノ聞モノニツケテイヒ出セルトイヘルモ、此義ニカヨヒテ面白キコトナリ、シカレバ人情善惡ノ實ヲ知ラフトナレバ、思無レ邪ナルトコロノ詩ヲ見テ知ルヽコト也、ナレドモソノ善惡ノ分レテ知ルヽハ、思無レ邪ヨリ發出シタル以後ノコトニテ、思無レ邪ナル時ニ於テハ、イマダ何ンノ善惡ノ差別モナク、我シラズ無念無想ニズツト出ルモノナリ、モシソコニテ按排工夫ヲ運ラシ、少シデモ善惡ノ差別ヲスル氣味アレバ、ソレハ思無レ邪トハイハレヌコトナリ、近ク譬ヘテイハヾ、人ノ腹痛スルニ、大體ニ痛ム分ハ誰レデモ先ヅジツトダマリコラヘテ居ラルヽモノナレドモ、甚シク痛ンデクルト、ハヤドウモタマラレズ、內ヨリズツト呻吟ノ聲ガ發出シ、吾思ハズ詞ニアラハレ、アヽイタイナドヽ云ハ、底心骨體カラ味モシヤシヤリモナク、內デ一ヒカヘ横スヂカヒヘヒカヘテ、思案スル間モ、何ンニモナク、思ハズ知ラズニズツト出タトコロヲ、思無レ邪トハイヘル也、又ハ人ノ音曲絲竹ノ操ヲ聞ニ、大體功者ナル人ノスルヲ聞テハ、誰デモ尤ノミ感心ハセヌモノナレバ、先ヅ皆ダマツテ聞キ終リ、只表向ノ挨拶バ

カリナドヲスルモノナレドモ、至極ノ上手妙境ニ至リタル人ノスル藝ヲ聞ク時ハ、衆人コゾツテ自然ト肝ニ徹シテ感ニタヘヌユヱ、我ヲ忘レ思ハズ知ラズ、內ヨリアヽシタリヤナドヽ詞ニ發出スルモノ、是モ亦思無ㇾ邪ナリ、又ハ人ノ我レ知ラヌ聲ヲ發シ咲ツ嘯イツスルナドモ、皆是思無ㇾ邪ヨリ發シタルトコロナリ、詩ハ三百篇アレドモ、一々皆人ノ思無ㇾ邪ヨリ發出シタルモノニテ、人ノ實情ノスグニアラハレタルモノナリトノ玉ヘルコトナルベシ、和歌ノ道モ此トホリニ少シモカハルコトハナキモノ、只唐(カラ)山大和ト人ノ語言ノチガヒタルバカリニテ、共ニ人ノ思無ㇾ邪ニナルトコロヨリ發出セルモノナリ、別シテハ萬葉集時代ノ和歌ハ、詩經ノ詩ニ能ク似タルモノ、殊勝ナルモノナリ、サテ人情ノコトヲ論ゼバ、卽チ禮記ニ飲食男女ハ人ノ大欲存焉トアル聖語ノ如ク、人情ノ最モ重ク大事ナルモノハ男女ノ欲ナリ、シカルユヱニ、人ノ五倫ノ內ニテ能ク吟味シテ見ルニ、夫婦ノ間ホド人ノ實情深切ナルモノハナキナリ、大方ノ人ガ父母兄弟ニモイハヌコトヲ、夫婦ノ間ニテハ言ヒ明カスモノナリ、親子ノ間ハ人ノ喉ヲシメテ問フタラバ、ワルウシタラソノ內ノ實情深切ナルトコロハ、表向ノ半分モナキ人ガ多フカラウガ、夫婦ノ間ハ表向ハワザト左モナク疎遠ナル顏ツキニテ、ソノ內ノ實情深切ナルトコロヲ探ガシテ見タラバ、親子ノ間ヨリ一倍ニモアルベシト思ハルヽコト也　サレバ淸少納言ガ枕草紙ニ遠フテ近キモノ男女ノ中トカケルハ、實ニヨク人情ニ通達シタルコトナルベシ、欲ト云ヿモノハ卽チ人ノ情ニテ、人ニ樣々ノ欲アレドモ、ソノ內ニテ最重ク大イナレバ、大欲トノ玉ヘルナリ、欲

トイヘバ惡シキコトノヤウニノミ心得ルハ大キナ違ヒナリ、欲ハ卽チ人情ノコトニテ、コレナケレバ人ト云モノデハナキナリ、欲ハ天性自然ニ具足シタルモノナレバ、人ト生レテ欲ノナキモノハ一人モナキナリ、欲ノナキハ木石ノ類ナリ、ソノ天性ノ自然ノトホリシテハ居ヌモノニテ、色々樣々ニ己レガ身勝手ナコトヲ思ヒ、私ノ料見ヲ出シテ造拵ユルカラシテ、理義ヲソムキアラヌコトヲ欲シネガフユヱニ、私欲ト名ガツケバ、惡シキモノニナリユクナリ、シカルユヱニ、此人ノ欲ト云モノヽ上カラシテコソ、心ノ善惡邪正ハ分ルヽコトナリ、佛者ノ敎ニハ、人ノ欲ヲ絕ツテ無イヨウニセヨト敎ユレドモ、聖人ノ敎ニハカツテ人ノ欲ヲ絕テヨト云コトハナクテ、只人ハ欲ヲ寡フスルヤウニセヨト敎ヘラルヽハ、人ノ欲何程ニテモ絕ツテ、トント無イヤウニスルコトハ、聖人デモ決シテナラヌコトナレバ、聖人ト云モノモ元ヨリ木石ニアラズ、肉身ヲ具足セル人ナレバ、ナドカ男女ノ欲ナカルベキナレドモ、ソノ男女ノ欲ノ上ナドニテコソ、最モ人心ノ善惡邪正ノワカルヽ塲ナレバ、コヽニ於テ聖人ト凡人トノ分レメモ知ルヽコトナリ、人情ノ内ニテ男女ノ欲コソイチ重ク大事ナルモノト知ルベシ、易序卦傳ニ云フ、「有二天地一然後有二萬物一、有二萬物一然後有二男女一、有二男女一然後有二夫婦一、有二夫婦一然後有二父子一」トイヒ（祀記郊特牲篇云「夫婦有レ別、然後父子親、然後義生云云」）「夫婦之道不レ可二以不一レ久也」トモイヘレバ、夫婦ト云モノアツテ後ニコソ父子モ兄弟モ出來ルコトナレバ、夫婦ノ情ハ父子ノ情ヨリハ最初ニ出來ルコトナルニヨツテ、男女ノ欲ヲバ聖人ノ最モ大事ニシ、重ジテ愼アルコトナリ、サレバ夫婦ハ人倫ノ始メナリトモノ玉ヒテ、男

女ノ欲ハ全ク是人情ノ起レル本原ナルナリ、シカルニ男女ノ欲ハ人タルモノ誰ニテモコレニハ溺レ惑ヒヨキモノニテ、何程ノ高明ナル人モ、大英雄ノ士デモ、必ズコレニハ惑溺レテ、平生ノ心ヲトリ失フコトナルユヱ、人ノ最モ第一ニコレヲ大事トシ愼ミ畏ルベキコト、甚ダ危ナキ場ニシテ、コレニ於テ克念ヘバ聖トモナリ、念ハザレバ狂トモナル分レメノ所ト知ルベシ、朱子ノ淫欲ヲ戒メラレシ詩ニ、「世上無レ如二人欲險一、幾人到レ此誤二平生一」ト作ランシハ尤ナルコトナリ、人男女ノ欲ハ甚ダ險難ナル場ナレバ一足フミソコナヘバ、聖ト狂トワカル丶雲泥ノ違ヒ危ナキコト限リナキ所ナリ、聖人モ欲ハ凡人トカハルコトハナケレドモ、ソノ欲ガ凡人ヨリ甚ダ寡フシテ、イカナコト溺レ惑フナド丶云コトハ思モヨラヌコトナリ、是コソ聖人タル所以ナルベシ、シカレバ男女ノ欲ハ人情ノ最モ重キコトニテ聖人ノ第一ニ愼ミ畏レ玉フトコロナルユヱ、詩經ノ始メニ先ヅ關雎ノ詩ヲ載セ、夫婦ノ間琴瑟相和スル情思ノ正大高雅ナル風詩ヲ以テ人ニ示メシ玉ヒシノミナラズ、關雎ハ「樂而不レ淫」トコトワリ玉フナリ、コ丶ニ能々心ヲ平ニシ、公ケニシ、トクト氣ヲツケテ體究シテ見ルベキコトナリ、夫婦ノ間ニ樂ムト淫スルハ、ドウヤラ似タヤウナモノデワルウシタラバ、蹈ミソコナイソウナ危ナイ場ニシテ、然モソノ情思ノ邪正相判ル丶コトハ氷炭ノ違ヒ、コ丶コソ聖人ト凡人トノ境メナリ、樂ムト云意味ハ天性自然ノナリニテ一物ノワダカマリナク、互ノ心物ズキユキアイ打（クワロキ）、琴瑟鐘鼓ノ調子拍子ヨリアヒ少シモ違フコトナク、相共ニ和樂シテ溫柔敦厚ニ、春風ノ中ニ坐スル如キ情思ヲイヘルナリ、淫スト

云ハ、私愛ニ溺レ淫慾染シツコク、何モ角モ打忘レ、昏迷流蕩シテ自ラ女私愛ノ昏惑ニヨツテハ、夫ハ萬事ヲ女房ノイヒシダイニシ、何ヲ云フテモ女房ノ云フコトヲ信向スルヤウニナレバ、女モソレニ乘ツテ夫ノ云フコト爲ルコトニテモ脇カラ指出テ我ガ勝手ノヨイヤウニシ、後ニハ夫ハ却テ女房ヲ恐レ、女房ハ夫ヲ何トモ思ハズ、人ノ前ニテモ夫ニ口ヲアカサズ、イヒコメテオクヤウニナリ。俗ニ云フ尻ニシクト云如クニナリユクモノナルユヱニ、夫婦分チモタヽズ、男女内外ノ差別ナクナルナリ、コヽヲ隨分大事ニシ、私愛ニ迷ハヌヤウニ畏レ愼ムヲ有レ別トイヘルナリ、女ト云モノハ、詩經ニ、無レ非無レ義トテ、女ハ非キコトハ云フニ及ヌコト、儀コトニテモセヌガ女ノ道ナリト戒メ、易ニモ「無レ所レ遂在ニ中饋一」トテ、女ハ何事ニテモ我レ一分シテ、事ヲ仕遂テ材智ヲ出スコトヲセズ、只內證ノ味噌鹽ヲ世話ヲヤキ、臺所ムキ朝夕食物ノ事バカリヲツカサドツテ、表向公ニ我スヂノコトニハ微塵モ指出サヌ筈ノ者ト、古ノ聖人ノ戒オカレタルハ、男ハ外向ノコト表立チタル事ヲサバキ、女ハ內證勝手向キノ事ノミヲサバクガ、男女內外ノ別也、此意ヲ以テソレカラ朝タノチヨツトシタ事マデモ氣ヲツケ、男女ハ不レ同ニ椸架一ナドハ禮記ニイヒテ、夫婦ノ衣類デモ衣桁一所ニハカケヌモノト敎ヘタリ、是ハ今ノ人ノ氣デハアマリ偏屈ナコトノヤウナレドモ、コノヤウナコトガ聖人ノ敎ニハ最第一トスルコト、カノ敬ト云モノナリ、敬ト云ハ、物事ヲ畏レツヽシミ、前方ニ氣ヲツケルコトナリ、惡シキコトモワヅカナコトニハ、大形ノ人ガコリヤコレ程ノコトハ大事ナイ〱ト自ラ許シテオクモノユヱ、ソノ時ハ

氣ガツカネドモ、積リツモツテ大キニ悪フナツタル時ニ始メテ氣ガツイテ、俄ニ驚キ當惑スルモノナリ、スベテ物事ニハ僅ノ事カラシテ崩レヨイモノニテ、蟻ノ穴カラ大キナ堤モ崩ルヽナレバ、ソノ前方ニ僅カナ時ニ隨分大事ニカケ、畏レ愼ムコトヲ敬ト云フコトナリ、男女ノ衣服ヲ一所ニ衣桁ニカケタト云テモ、當分ニ何ンノ悪シイコトハナキコトナレドモ、ソレカラシテ物事ガジダラクニナリ崩レテ來テ、外ノコトヘモ必安ダテカ出來テクルナリ、コリヤ大事ナイト許ルセバソレカラ覺エズ知ラズニ流蕩シテ昏迷スル基トナルモノナリ、コヽヲノガサズ細カニ氣ヲツケ、前方ニ少シソノ機ノ見ユル始メヲ油斷セズ畏レ愼ミ吟味スルガ聖人ノ敬ノ教ナリ、譬ヘバ鳥銃ノ臬(ケントウ)ノ如、未彈ヲ發セヌ前ニ、臬ガ手前ニテ毫ノ先ホドチガフテモ、那邊ヘ往テハ大キニチガイガ出來ル也、一分程ニ東ヘヨツタト思ヘバ、那邊デハ五尺モ七尺モ東ヘユク、手前ニテハ毫末ト思フテモ、那邊ヘ往テハ東西ト違フテ分ルヽナレバ、臬ノサキハ甚ダオソロシキ大切至極ノ場ナリ、彼ノ善悪ノ機ノ微塵ホドニテ、コリヤ大事ナイト見ユルトコロハ鳥銃ノ臬ノ如クナレバ、コリヤ大事ナイト輕ク思ヘドモ、ソレガ功ジタ後ハ善悪邪正ト相判ルヽコトナリ、衆人ノクセトシテ必ズソコヲナグツテ、ソノ機ヲ見ルコトガナラヌモノナルハ、智ノ明カナラヌユヱノコトナリ、彼ノ樂ト淫ト分ル機ガ即チ此場ニテ、夫婦ノ間トリワケ心安スキジダラクニナリヨク、且ツソノ機ハ僅カニ毫末ノコト、似タヤウナコトユヱニ、ツヒ蹈ソコナイサウデ甚ダ危ナキトコロ、畏レ愼ムベキコトナレバ、夫婦ノ間ニハ常ニ別ヲ立ツルコトヲ忘ルヽナト教ヘラレシ

ト也、サテ和歌ノ歌ノ字ノ訓ヲウタト云ハ、本トウトフニテ、訴ト云意トナリ、人情ノ内ニ積モリタマツテアル不平ノ事ヲ訴ヘテ、ソノ鬱ヲ晴ラス義ナリ、是亦ソノ内ニ鬱シタルモノ思ハズ知ラズニ、ズツト思無レ邪ナルヨリ出ルモノナルニ因ッテ、和歌ハ詩ト同一轍ナルモノナリ、和歌ハ我朝古來ノ宗匠ノ論ニモ、戀ノ歌ヲ以テ最モ大事トシ重キコトトシタルコトモ、夫婦ノ情ハ人情ノ本原ニテ、和歌ノヨツテ起ルトコロナレバ、萬葉集ニモ相聞トテ、戀ノ部ノ歌ヲ巻首ニ載セ、全體ニコヒノ歌多ク入レラレ、其後ノ代々ノ撰集ニモ、戀歌ヲ最多ク載セテコレヲ主トスルコトナリ、萬葉時代ノ戀歌ハ、後世ノ戀歌トハチガヒ、ソノ様々質直ナルコト、カノ溫柔敦厚ノ雅ナル風ニ見ユルガ多クシテ、樂ト云氣味ニ似タルモアルコトナリ、風雅集ノ序ニ歌ノ様ヲ論ジテ、艶ナルハ婬(タム)レヤスク、本强ハ雅馴ナラズトイヘル、卽チカノ樂ト淫トノ分レメノ意味ニカヨヒ、詩ノ本意ニモ自然ト相叶ヒ、和漢古今ノ人心スコシモカハラザルコト殊ニ目出タシ、俊成卿ノ歌ニ「戀せずば人は心のなからまし物のあはれはこれよりぞ知る」ト詠ゼラレシハ、左ノミ秀歌ニハアラズトモ、ソノ意趣向上ナルコトニシテ、人情ニヨク達シタルコトナリ、シカシカヤウニイヘバ、何トヤラン戀ヲ人ニ勸ムルヤウニ聞ユレドモ、左ニテハナシ、スベテ戀トイヘバ、只大方ノ譯ヲ知ラヌ片ムクロナル人ナドハ、一途ニ淫慾交會ノコトニ志ザシ、性ノワルキコトノミ心得レドモ、戀ト云コトハアナガチニ左様ノコトバカリニテハアルマジキコトト覺ルナリ、勿論カノ今様世上ノ娼女(ユウジョ)舞妓ナドニ溺愛シ、長夜ノ飲ヲ至樂コレナラデハト思

ヒ、或ハ閨深處女ナドヲ虚言シテ摟(ソヽロ)カシタリスル輕薄虚蕩ニ、淫慾ヲノミ目アテトスル無下ノ俗人ノ蓬心(キタナゴヽロ)カラハ、ソノ事ノミヲ戀ト心得ルナルベシ、イカナレバトテ左樣ノ婬媟穢醜ノ事ヲ君臣父子ノ間ニ詠吟シ、朝廷ノ重典トナレル雅歌ト云ベキヤウヤアル、殊更ニ和歌ハ古ヘモ我朝ノ治道ノ助ケトナリ、ソノ時代ノ和歌ノ風ヲ見テ、政ノ善惡世ノ盛衰ヲ考ルコトトイヘルコトナレバ、ソノ譯アルベキコトナリ、愚拙コレヲ論ズルニ、戀トイヘルハ夫婦ノ思慕深切ナルトコロノ實情ヲイヘルコトナルベシ、如レ此イヘバ又カノ今樣無下ノ俗人ノ蓬心カラハ、ソノ夫婦ノ實情ト云モノヽ因ツテ起ル本原ヲ尋テミレバ、全ク淫慾ヨリシテ生ズルコトトナレバ、交會ノコトナクテ、イカヾソノ實情ハ出來マジキコトト心得ルナリ、カノ蓬心カラ思ハヾ左モアルベキコト、全ク淫慾昏惑セル上カラハ、何程イフテ聞カセタレバトテ、合點スベキヤウナケレバ、此ノ義ハ、是非ノ論ニハ及ブマジキコト也、シカレドモ先ヅイト心ヲ平カニ公ケニシテ見バ、アナガチ左樣バカリニテハアルマジキコトト思ハルヽナリ、戀ト云コトハ、畢竟ソノ淫慾ノ外ニエモイハレヌ自然夫婦ノ情ト云モノアルナリ、夫婦ノ情バカリナラズ、親ノ子ヲ思フ心モ即チ思慕深功ノ實情ナレバ、亦コレ戀ニアラズヤ、親ノ子ヲ思フ心ヅカヒノ程ハ夫婦ノ間ヨリモ事ニヨリイヤマシナルコトモアルベシ、是亦天性自然トノ事ナルベシ、子ノ親ヲ思慕スル孝心ハ人ニヨリ厚薄ノ不同アルモノナレドモ、何程ニ不孝ナル子ト云トモ、ソノ思慕ノ實情ハドコヤラサスガ相應ニアルモノニテ、コヽハイヤトイハレヌコト天性自然ナレバ、子ノ親ヲ思慕スル

モ亦コレ戀ニアラズヤ、兄弟ト云モノニナツテハ、又親子ノ間トハ少シチガイ、各別ニ面ノ厚薄不同アルモノユヱ、鄙諺ニモ兄弟ハ他人ノ始マリトイヒ、古今人情ハカハラヌモノト見エテ、詩經ニモ兄弟鬩ㇾ牆(セメグカキニ)ト詠ジテ、世上ニ間ニハ兄弟不和ナルコト、他人ヨリ甚シキモアレドモ、又世ニ兄弟思ヒトイヒテ、甚ダ相互ニ思慕深切ナルコト、親子ノ間ノ如キ兄弟モアルモノナリ、兄弟モ同胞骨肉ニテ血ヲ分ケタルモノナレバ、タトヒ鬩ㇾ牆ノ輩タリトテモ、詩ニ又防ニ其侮ニト詠ジ、我ガ兄弟ノ事ヲ他人ガ侮レバ、忽チニ腹立シテ鬩ㇾ牆テ不通グラヰニテモ、吾ガ兄弟ニ卑下恥辱ヲトラセジト、人ニ指ヲサヽセヌヤウニトスル心ガ出來ルモノハ、是レ何トナクドコヤラニイヤトイハレヌ思慕シテ、實情ノ天性自然ナルトコロアルナリ、是亦戀ト云モノナルベシ、勿論人ノ五倫中ニテ父子兄弟ノ交リ、ソノ本ガ血ヲ分ケタルモノユヱ、天性自然ナルハズノコト也、君臣ハ朋友トノ交リニ至テハ、本ガ他人トノ出合ナンドモ、是亦ドコトモナクヤメテモヤメラレズ、默然(モダシ)ガタキモノ、卽チ俗ニイヘルトホリノ義理アヒト云モノガ自然ト出來テ、君ト名ガツキ臣ト名ガツケバ、イカナル人ニテモ相應ニ忠節ヲ勵ム心ニナツテ、タトヒ渡リ竝ノ半季居ノ僕婢ノ類ニ至ルマデ、僅カ半年ノ間ニテモ主人ト賴ミ家來ニ約束シテカラハ、ソノ內ハ主人ヲ主人トアガメ奉公シ、違背スル者ハ十人ニモナキナリ、朋友ノ出合ニハ誰ニテモ必ズ信實ヲ守リ、相互ニオレソレガ出來テ底意ナク、不信實ナルコトヲ羞ヂ惡クミ、ヤメテモヤメラレズ義理合ノ自然トアルハ、是亦他人ト他人トノ交リナレバ也、勿論父子兄弟トハチガ

ヒ、君臣朋友ノ交ニハ、正身ノ表向バカリ義理アヒ一偏ナル人ガ多キコトナレドモ、タトヒ表向バカリニモセヨガシソノ自然ト何トナクヤメテモヤメラレヌモダシガタク心ノスマヌコトアッテ、ソノ心ノ出來ル根原ヲ吟味シテ見レバ、カツテ作リ拵ヘテ出來タルモノニアラズ、トリモナホサズ彼ノ思慕深切ノ實情ニシテ、君臣朋友ノ間モ是亦天性自然ノモノナレバ、人ノ五倫ニ具ハレルコトナリ、スレバ畢竟君臣朋友ノ交モ亦戀ト云ベシ、尤父子兄弟ハ云ニ及ヌコト、君臣朋友ノ交迄モ思慕深切ノ實情ニシテ、天性自然ノモノナルユヱニコソ、天地ノ間古往今來日月ノ地ニ墜チヌ如ク、人ノ五倫ノ道ノ廢スルト云フコトハツヒニナキコトナリ、コレヲ以テ觀レバ、夫婦ノ間思慕深切ノ實情ハ、カノ輕薄虛蕩ナルコトヨリ出來タルモノニアラザレバ、アナガチニ淫慾交會ヨリ出來タルモノトバカリモ思ハレズ、是亦カノ何トナク默止ガタクテ、ヤメテモヤメラレヌ天性自然ト古ヨリ出來タルモノナレバ、夫婦ト云モノ人ノ五倫ノ內ニテ最モ重キモノナレバコソ、「有二夫婦一然後有二父子一」トモ、又ハ人倫ノ始トモアルコトナリ、シカルニ此ノ人ノ思慕深切ノ實情ト云フモノ能ク考フレバ、即チ孟子ノイハユル「不レ忍レ人之心」ト云モノニテ、トリモナホサズ是レ仁ノ本體ニシテ、人ノ本心性ノ善ナルトコロナリ、カノ物ノアハレヲ知ルト俊成卿ノ詠ゼラレシモ、此場ヲ見ツケ得ラレタリト覺エテ、殊勝ナルコト、尊仰スベキ歌ト平生目出度オモヘルコトナリ、心ノナカラマシト詠ゼルハ、俗ニイヘル心ナイト云成ナレバ、人トシテモシ人情ニウトクアラバ、物事ニ細カニ氣ガツカズ、覺エズト心ナイコト出來

テ、フツヅカナルムゴイコトアルベシ、人情ニ通達セズシテ、何トシテ物ノアハレハ知ルベキヤウハナキコトトイヘル、俊成卿ノ意ナルベシト思ハルヽナリ、シカルユヱニ人情ニ通ズルハ仁ヲ求ルノ方術ナリ、ナレドモ此譯ハ今樣ノ世上淫媟ノ貪慾ニ昏迷セシ蓬心カラハ、ソレハ何程ニテモ見ユマジキコト、タトヒ風流那（フルナ）ノ如キ辯舌ヲ以テイヒ聞カセタリトモ、中々合點ハユクマジケレバ、一向ニ是非ノ沙汰ニハ及ブマジキナリ、今一ツノ譬ヲ以イハンニ、今世ニ流行（ハヤル）三線ハ人ノ耳近ノ花手（ハデ）ニシテ、面白スギタル聲ニテ、打キクニ人ノ心ノ蕩カレ躁ガシ、起リモセヌ淫慾ヲ誘フモノナリ、琵琶ト云モノハ紫式部モラウ〳〵ジキモノトイヒオキ、高古遠雅ニサビテシメヤカナル音ニテ、打アガリタルモノナレバ、聞ク内ニハ自然ト人ノ心モシヅマリ落ツキ、イツトモナク清淨ニナルヤウニ覺ユルモノナリ、三線トハ只ソノ絃一筋ノカハリニテ、打キヽタルトコロ雲泥チガヒタルモノナリ、三線ハ今樣ノ淫風ニヨリアヒタルモノナレバ、彼ノ淫貪無下ノ俗人コレナラデハト面白ガリ嗜ミ耽ルユヱニ、世上ニ流行ルコトナリ、無下ノ俗ノ三線ヲコレコソ眞ノ樂ト思ヒキク蓬心カラハ、琵琶ノ音ニ眞ノ面白イ高古遠雅ニシテ、清整ナル意味アルコトヲ何ニシテ聞キ知ルベキヤ、琵琶ヲ聞スレバサテモヤクタイモナキモノ、コレガドコガ面白コトアルゾト一曲モスマヌ内カラハヤ精ヲ盡シ、コレ大方ガソノ坐ニモコタヘヌモノナリ、此ノ三線ト琵琶トノ音ヲ聞ク人ノ心ノ相違ニテモ、カノ樂ト淫ト氣味違ヒヲ推量シテ知ルベキコトナリ、古今ノ人情ハ同ジキコトニテ、禮記ニアル如ク魏文侯ノイハレシニ、我

レ古樂ヲ聞ケバソノマヽネムケガツイテ、只臥サンカト氣ヅカウバカリナルガ、鄭衛ノ音ヲ聞ケバイツマデモ倦ミ厭クコトハ覺エヌナリ、今琵琶ハ亦古樂ニテ、三線ハ亦鄭衛ナリ、古今自然ノ符合ナリ、ナレドモ人情ト云モノハ大概ガ同ジキモノナレバ、カノ三線ト云モノ、本ハ人ヲ面白ガラスヤウニ拵ヘテ調ラベタモノナレバ、誰レデモ聞イテコレハイヤナモノ、面白フナイモノジヤト身ニタヘテ嫌ラヒ惡クムト云モノハナキナリ、シカルニソレヲ嫌ヒ惡クムト云ハ人情ニアラヌコトナレバ、生レツキ偏屈異風ナル人カ、又ハ内心ハナルホド面白ケレドモ、表向ヲツクロイ名聞ヲ思ヒ、賢者ブリヲ作リ拵ラヘル人カ、是亦人ノ實情ニテハアルマジキコトナリ、聖人ノ教ニモ、放二鄭聲一トハアレドモ、鄭聲ヲ嫌ヒ惡クムトハツヒニ宣ハヌナリ、放トハアタリ邊リヘ寄セ付ケヌヤウニシ、兎角ソレニ出合セヌヤウニスルコトナリ、鄭聲ノ淫ナルニ、三線ノ面白スギタルニ同ジコトナルベシ、聖人モソレヲ惡クムトハ宣ハズ、只放ツテソレニ出合ハヌヤウニトアルハ、聖人タリトモ我輩ノ人ニテ、サスガ岩木ナラネバナベテ人ノ面白イト思フコトヲ人情ニウトク身ニタヘテ、イヤト思ヒ惡ミ嫌フゴトキ偏屈ナルコトハアルマジキト思ハルヽナリ、「惡三鄭聲之亂二雅樂一」ト宣ヘルハ、鄭聲ヲ全ク嫌ヒ惡ムコトバカリトハ見エヌナリ、此ノ段ノ語ハ紫ノ朱ヲ亂ルヲ惡ムト宣ヘル次ニアレバ、上ヨリコレモ語ノ同例ニテ、鄭聲ノ内ニ正シキ雅樂ニ似セテ調ベタルガ有テ、世上ニ元來ハ鄭聲ニシテ、シカモ雅樂ノヤウニ聞エテ、亂シマギル樂一流アルヲ指シテ宣ヘルナリ、鄭聲ト雅樂トハ、チヤウド三線ト琵琶トノ氣味ニテ、ドコデ聞イ

テモカツテマギルモノニテハナカルベシ、サレバ亂ノ字ニテ知ルベシ、打ミダレテドチラガドウヤラ知レズ、取リマギラカス意味ナリ、ソノ鄭聲ニテアルヲ人ガ雅樂ジヤ眞ノジヤト思ヒ込ミ、トリマギラカスヲ惡ムト宣ヘルコトナリ、是レ大キニ雅樂ノ邪魔ニナルコトユヱニ、コレヲ惡ミ嫌ハルヽコト也、我朝ニ傳ハレル天朝樂部ノ音樂ハ、元來隋唐ノ樂ト見エタリ、此中ニサヘ聞ケバ雅樂ト思ハルヽト、淫樂ラシキトガマジツテアルト聞ユルナリ、面白スギテ浮（ウキ）蕩テ躁ガシキハ、タシカニ淫樂ト聞ユルナリ、是ラモ鄭聲ノ雅樂ヲ亂ル氣味ナルベシ、世上ノ人ハ一様ミナ雅樂ジヤト思コトユヱニ、雅樂ノ邪魔ニナルヲ惡ムト云コトナリ、惣ジテ音樂ノ音節繁急ニシテ面白スギタルハ、忽チニ人ノ心ノ浮キ躁シ、ソレヨリ起ラヌ淫慾モ感動サスルモノナルユヱニ、音樂ハ人心ヲ感動サスルコト早キモノニテ、人心ニ關係（アヅカ）ルコトノ重ク大切ナルコトナリ、ソレユヱ古聖人ノ天下ヲ治ルニ、禮ト樂トノ二ツヲ以テ人ヲ治メ玉フコトナリ、禮ハ人ノ行儀ノ作法ヲ敎ヘ、樂ハ人ノ心ヲ正シフサスル敎ナリ、カノ鄭聲ハ殊ノ外面白スギタルモノユヱ、凡人ガコレヲ聞キテハ、コレヨリ淫慾モイロ／＼盛ニナル媒ナレバ、人ノ敎ニハ必ズコレヲ放タシメ、隨分コレヲ遠ザケ、出合セヌヤウニサスルガ聖人ノ心ヅカヒナリ、シカルニ朱注ノ如ク鄭衞ノ詩ヲ人ニ見スルコトハ、人ノ惡心ヲ懲ス爲メトイハヾ、此放ニ鄭聲ノ敎トハ大キニ相違スルコトナリ、鄭衞ノ詩ヲ人ニ見スル敎ノ心ナレバ、鄭聲ヲ放ツニハ及ブマジキト思ハルルナリ、樂ト云モノモ、上古ノ時分ニハヤ禮記ニヤ「蕢桴（クヘイフツ）而土鼓ス」ト云、堯舜以前ノ時代ヨリアルモ

ノナリ、人ト云モノハ常住窮屈ナヲリツメタコトバカリニテ續ガタキモノナレバ、必ズ打クツロイデ心ヲ和ラゲ、遊ビ慰ムコトナケレバ叶ハヌナリ、ソノ心ノ和ラギ打クツロギタル時ニハ、ダマツテ居ラレヌモノデ、必ズ音聲ヲ發シ拍子ヲトリ、歌ヒツ舞フツセネバナラヌ、是レ自然ノコトナリ、上古ノ時分カラハヤアルコトナレバ、樂ムト云モノハ元來人情ノヤメテモヤラレヌ默止ガタキコトナリ、米フミノ歌、木ヤリ歌モ自然ノ樂ナリ、禮記ニ「春不レ相」トイヒ、詩ニ「伐レ木許々」ト詠ジ、淮南子ニ「擧ニ大木一者呼ニ邪許一」トイヘルヲ、「擧レ重勸レ力之歌也」トイヘル、春ツク時ノ相歌モ、大木ヲヒク時ノ木ヤリ歌モ、古ヨリアルコト自然ノコトナリ、ソレユヱ聖人ハ情ニヨツテ人ヲ教ヘ玉フコトナレバ、樂ヲ以テ教トシテ人ノ心ヲソレニテスグニ揉通スヤウニシ玉フコトナリ、カノ鄭聲ヲ放チ遠ザケ、平生ニ正シキ雅樂ヲ人ニ聞カセ、イツトモナクカノ鄭聲ノコトヲ打忘レサセ、雅樂ヲ面白ト思フ心ニ移ルヤウニサセ玉フ爲メト見エタリ、聖人ノ作ラセラレシ雅樂ヲ琴瑟ニシラベ、隙ナル時ハ平生人ニ聞カスヤウニスレバ、イツトモナク我シラズカノ我慢私慾ノ蓬心ヲ打ワスレ、溫柔敦厚易直子諒ノ心ニ移リカハリ、人ノ心自然ト正シフナルナリ、天下ノ人心タヾシフナレバ、自然ト風俗ハヨクナルモノナレバ、「移レ風易レ俗、莫レ善ニ雅樂ニ一」トモ宣ヘルナリ、ソレユヱニ又「士無レ故不レ徹ニ琴瑟ニ一」トモ教ヘラレタリ、樂ノ教ハ後世ニハ廢レタレドモ、今ニテ考ルニ、彼ノ三線ヲ聞ケバ、ドコトモナク淫慾ヲ引キ起シ、何トモナキ心モ忽チニ浮躁クナルヲ思フニ、人ノ心ハ物ノ音ニ感ジヤスク、忽ニ變ジ移シヨキモノナレ

バ、カノ聖人ノ作ラセラレシ雅樂ヲ琴瑟ノ正律ニ調ラベテ、平生ニ聞キタラバ、我シラズ自然ト人ノ心モ正シクナルベキコトト思ハルヽナリ、孔子ノ「三月不レ知ニ肉味一」ト云趣ハイカバカリノコトナラント想望感念ノ至ニタヘザルコトナリ、人ノ琵琶ヲ聞テサヘ、ドコトモナク私欲ヲ打忘レ、心ガ清淨ニナルヤウニ思ハルニ、眞ノ古ノ琴瑟ノ雅音ヲキヽタラバ、イカヤウニアルベキト覺ルナリ、今ノ人心ノ淫樂ニヨツテ移リ變ズルヲ以テ推量シテミレバ、雅樂ニテモ人心ノ移リ變ズマジキモノトモ思ハレヌコトナリ、古聖人ノ樂ヲ以テ人ニ敎ヘ、人心ヲ正シフシ風俗ヲ移易ナサルヽト云コトハ、雅樂モ傳ハラズ、聖人モ世ニ出ズ、ソノ敎ヘ一向ニ廢シタルコトナレバ、樂ノ敎ト云コトハ、今ノ人ハ何程ニイフテ聞シテモ合點セヌコトナレドモ、假リニ琵琶ト三線トノ氣味ヲ以テ推察シテ知ルベキコトナリ、シカレバ聖人タリトモ鄭聲ヲ聞キ玉ヒ、イヤナモノト惡ミ嫌ハルヽコト、惡臭ヲ惡ム程マデハアルマジケレドモ、雅樂ヲ聞キ玉ヒテ、ソノ正雅高遠ニシテ、心モコレニヨツテ正直清淨ニナリ、肉味ヲダニ忘レ玉フバカリノ眞實ニ面白イ味ヲ知ラセ玉ヒ、カノ鄭聲ノイヤシキ淫泆浮躁ナル聲ヲ聞キ玉フトハ、雲泥ニ思メサルヽトコロガ、聖人ノ心ノ凡人トカハリタルコトヽ知ルベシ、鄭聲ヲ聞テハ忽ソレニ心ヲ蕩ラサレ、雅樂ヲ聞イテソノマヽ精ヲツカシ、眠ム氣ノ來ルガ世上大方ノ人ノ蓬心ナリ、コヽニオイテ聖凡ノ分レメハアルコトナリ、富トイヘバ金銀財寶ヲ澤山ニタクハヘ、萬事自由ニスルコトナレバ、人欲ノ最モ目アテスルコトナリ、是誰ニテモイヤナコトデナケレバ、富ヲ欲シ願フガ人情ナリ、

シカルニソレヲイヤガリ悪ミ嫌ト云ハ、人情ニアラヌ偏異ナルコトナリ、愚俗ヲ曉ラセン爲メノ方便ニテ宣ヒタルニモセヨ、聖人タリトモ此ノ肉身ヲ具ヘタル人ナレバ、富ヲイヤナリトハ思召レヌカシテ、「富ニシテ而可レ求也、雖ニ執鞭之士ニ吾亦爲レ之」ト宣ヒ、富ト云モノガ求メテ得ルコトノツヒナルゾナラバ、馬ノ鞭ヲ執リ人ノ僕御トナリ、イカヤウノ下賤ノ事ヲシテナリトモ求メタイトアルハ、實ニ人情ハ聖人モ凡人ト同ジケレバナリ、ナレドモ富貴ハ在レ天モノニテ、求メ得タイト無理ニ是非共ト思ヒ込ミ、急ニモガキタレバトテモ、何程デモ叶ハヌコト、人力ノ及バザルコトナリ、貧賤ナリトモ是非ニ及バヌコト、何トゾシテ逃レタキモノ、イヤナルコトナレドモ、兎角ニタヾ天命ト云モノアレバ、一向アナタ次第ニシテオキ、迚テモナラヌコトヲトヤカウト思フヨリハ、ソコヲ早ク悟リ、我ガ心ノ眞實ニ面白イト思ヒ好ムコトハ、古聖人ノ書ヲ讀ミ、學文ヲシ義理ヲ分別シ、心ヲ清淨ニスル方ガハルカ安樂ニシテ増シタルコト、此ノ眞實ノ樂ミハ、又何ニモカヘラレタモノデハナイト、カノ富ニテ自由ナル樂ミト兩方ヲクラベテ、迚モナラヌコトヲ辛苦シテ求メヤウトスルヨリハ、ハルカ此方ノ樂ミガマシトキハメテ「從二吾所一レ好」ト宣ヒシコトナリ、シカルニ凡人ハ只モノ貧賤ヲジユツナク堪ヘカヌル心カラ富貴ヲウラヤミ、ナラヌコトモ知リナガラ、是非共ト萬ガ一ヲ僥倖シ力ワザ無理ニ求メントト、全ク富貴名利ニノミ心ガ入キツテ居ルユヱ、外ノ事ニハ目ガツカズ、羹ニ見エ墻ニ見エ、夢ウツヽニモ忘レガタク、何程ニ吾ガ好ムトコロノ學文ノ道ニ、眞實ノ樂味アルコトナドヲイヒ聞カセタト云テモ、アノ方ヘカツテ徹スル

コトハナキコトナリ、ソノ心ニ好ムトコロノ趣向大キニ相違シテアレバナリ、コヽガ聖人ト凡人トノカハリメト知ルベシ、ナレドモ聖人ニテモ富貴ヲイヤナコト、嫌ヒ惡ム心ノナキハ、人情ニハ聖凡ノカハリナケレバナリ、サテ琵琶ハ元來胡國ヨリ傳ヘ來ル樂器ナレバ、眞ノ雅樂ノ器ニモアラ子ドモ、三線トクラブレバ、ソノ音調甚ダ高雅ナル趣アルモノナレバ、是亦雅樂ノ遺音トモイフベキモノナリ、サレバ三線ヲ面白ガル人ノ心ト、琵琶ヲ面白ガル人ノ心ハ、物數奇ガ大キニ相違スレバ、一樣ニハイハレヌコトナルユヱ、カノ鄭聲ト雅樂トノ相違、又ハカノ樂ト淫トノ相違ノ氣味モ、此ノ三線ト琵琶トヲ聞ク相違ノ氣味ヲ以テ、推量シテ知ラルベキコトヽ思ハルヽナリ、三線ヲ以テコレナラデハトシ、眞ノ樂ト覺ユル無下ノ俗人ニ向ツテ、琵琶ニ眞ノ面白イ味アルコトヲ說キ聞カセタレバトテ、馬ノ耳ニ風ノ吹ク如クニテ、合點スベキヤウハナキナリ、コレト同ジ事ニテ、和歌ノ道ニ大事トスル戀ト云フコトハ、夫婦思慕深切天性自然ノ實情ナル譯ヲ、カノ今樣淫慾交會ノコトノミ戀ト思ヒ込ミシ、無下ノ俗人ニイヒキカセタレバトテ中々淫慾ノ口實トスルヤウニナリユキ、イハヌニマシナルベクシテ、是非ニ及バヌコトナレドモ、上ニ段々イヘル如ク、五倫ノ內ニテハ夫婦ノ間ノ思慕深切ナル實情ハ、イチ大事ナル重キコトナレバ、我朝和歌ノ道モ自然トコヽヲ以テ大切トスル所以ナリ、夫レ和歌ノ起ル本原ヲ尋ヌルニ、陰陽ノ二神ノ憙哉（アナニヘヤ）ノ語ヲ祖トシ、八雲ノ神詠卅一字ヨリ始マリ、人ノ代ニ至リソノ實情ヲ訴タヘテ鬱ヲハラスモノナレバ、萬葉集ニモ相聞ヲ始メトシ、戀歌ヲ取多ク載セ、詩經ニモ自然ト關雎ノ詩ヲ以

テ始トセシハ夫婦ノ道ハ人情ノ最重キモノニシテ、聖人ノコレヲ大事トシ重ンジ愼マルトコロナレバナリ、又ソノ言ヒツヾクル詞マデモ、自然ト詩モ五言七言ニテ、和歌モ又五字七字ニサダマリ、唐詩大和歌ノ道ノ符節ヲ合ハセタル如クナルハ、是亦天地自然ノ事ナリ、ソノ上ニ夫婦ハ五倫ノ始メナリトモ聖人ノ宣ヒ、禮ノ内ニテモ婚姻ノ禮ヲワケテ重キコトトセラレタルハ、兎角ニタダ夫婦ノ情ハ、五倫ノ内ニテ最モ重キモノナレバ、是ハ人情ノ本ナルコトヲ知ルナリ、人情ノ本ヲ知リ、五倫ノ間ノ人ノ實情ヲ察スルコト明カナレバ、心ガ公ヤケニ平カニナリ、氣量ガ大キニナッテ、料見ヨク物ヲ容ルニヨッテスベテ人ヲ憐憫シ、自然ト人ノ諫ヲモ容レ用ルヤウニナルコトナリ、人情ニツトク人ノ身ノ上ニナリカハッテ、ソノ情ニトクト通達スルコトナラズバ、萬事ニ氣ノツカヌコト多事ニヨッテ、我シラズトムゴイコト出來ルモノナリ、シカレバ人情ニ通ズルハ、トリモナホサズ即チ是レ恕ノ道ナリ、人情ニ通ジ、恕ヲナシ得テ、ソノ恕ガ熟シタ時ハ即チ仁ニ至ルコトナレバ、前ニイヘル如ク、トカク人情ヲ知ルハ仁ヲ求ルノ端トナルコトナリ、人情ニ達スルハ、國家ノ政ヲセバ、古聖人ノ徒トモナルベキコトナレバ、人情ニ達スルハ又政ノ本ニ達スルト云モノナリ　然レドモ此夫婦ノ情ガ人情ノ本タルト云コトハ、能ク心ヲ公ケニ平カニシ、吟味セヌバ、眞實ニ合點ユカヌコト、言論ノ上ニテハ盡サレヌコトナリ、人情ニウトキ經生儒者ナドノ氣ノツカヌコトナリ、俗ニイヘル以心傳心ノ場ナレバ、聊爾ニハ無下ノ俗人ヤ、又ハ年ワカキ初學ノ書生輩ナド說キ聞カスベキコトニアラズ、ワルウ心得タ

ラバ、コレヨリ淫慾ヲ恣ニスル口實トナリ、詞質ニトラルベキナレバ、必ズソノ人ヲ見テ說クベキコト也、妄リニ說クベカラズ、アナカシコ〳〵

八雲ノ傳授ト云フヿ、世上ニ秘訣トスルヿ其譯ハ知ラネド、理窟ヲ臆斷ニテ拵タルモノト思ハル丶也、惣ジテ秘傳ト云フヿハ大道ニハ曾テナキヿナレバコソ、夫子モ吾無レ隱乎爾ト宣ヒシ也、和歌ノ道ハ我朝ノ大道ナレバ、元來和歌ノ道ニ秘傳ト云フヿアルベシトモ思ハレズ、八雲ノ傳ハ全ク後世ノ拵ヘゴトナレバ、一向議論ニハ及バヌヿ、コレモ又カノ茶儒ノ類ナルベシ、乍レ去古今傳授ト云コトハ今ハ朝廷ノ重典ニナリ、事々シキ公事ノ沙汰ニナリタルハ如何シタルヿニヤ、和歌ノ道ノ極意ハ、古今ノ序ニ言ヲ盡シ、其ノ外讀方心持ハ、詠歌ノ大概又ハ八雲御抄用意ノ部、頓阿法師ガ愚問賢注ニテ、何ノ傳授モイラヌコト丶思ハル丶也、和歌ノ道モ亦イハユル以心傳心ナルモノナレバ、委細ニ言句傳授ナドニテ言ヒ傳ヘラル丶ヿニテアルマジケレバコソ、大概トイヘル名ニテモ知ルベシ、至極ニ中リタル名目ナリ、詩ノ道モ又同ジコトニテ、天然ト和漢符合シタルハ、人情ノ同ジケレバナリ、我朝古來歌道ニオイテ、別ニ秘スルコトハ少シモナキト見ユレドモ、近代ニ及ンデハ古今傳授ストイヘルコト出來テ、和歌ハヨマレヌモノ丶ヤウニ事ムヅカシウナリ、ソノ上公家ナラデハ歌ハヨマレヌコト、地下ノ人ハ歌ト云モノハヨマヌコトニテ、地下ノ歌ヲコノムハ僭稱ラシキコトノヤウニナリ、公家モ地下ノ者ノ歌ハタトヒヨクテモ、眞ノコトデナイナドトコナシ、堂上家ノ物トナリユクコトイカナルコトニヤ、

イヨ〳〵此ヤウノコトナラバ日本ノ人ハ今ト昔トノ人ノ生レツキカハリタルニヤ、公家モ地下モ人ニカハリナケレバ、歌ヲヨマンニ數奇デ志サヘ深カヽラバ、堂上地下ノ差別ハアルマジキコトナリ、定家卿ノ集メラレシ百人一首ノ內ニハ、地下ノ者十七人マデノセラレタリ、勿論古今集ヨリ始メ廿一代集ニ、地下ノ人ノ歌ヲ載スルコトソノ數ヲ知ラズ、ソノ內ニモサノミ歌人ト名ヲ呼バレザル地下ノ者モ、秀歌ナレバニヤ撰集ニ入リタル歌多クアルコトナレバ、昔ノ歌道ノ盛ンナリシ代ニハ、カツテ堂上地下ノ差別ナキコトト見エタリ、古今傳授ノコト世上ニ流布セル說ニハ、紀氏ヨリ段々ト女ニ傳ハリ、後ニ左金吾基俊石山ニ參籠シ、古今ノコトヲ祈ラレシニ、夢中ニ女來リテ、我ハ志賀ノ邊ニ侍ル者ナリ、殊ノ外貧ニ侍ベレバ惠ミ玉ヘトイツテ見テ夢サメヌ、ヨツテ志賀邊ヲ尋テカノ女ニ逢ヒ、古今傳授ノコトヲカノ女ヨリ基俊ノ傳授ナサレ、ソレヨリ俊成卿相傳シテ二條家ニ傳來セリトナリ、是レ古今系圖ト云モノヽ說ニ見エタリ、ソレヨリ南北朝戰國ノ時ニ至リ、二條家斷絕セシ處ニ、一條家ハ南朝へ仕フ東ノ野州常緣ヨリ古今ヲ宗祇ヘ傳ヘ、宗祇ヨリ實枝道遙院殿ヘ傳授シ、實枝公ヨリ細川玄旨ヘ傳ヘラレシナリ、細川玄旨ノ丹後ノ田邊ヲ石田治部少輔攻メ圍ムコト十數日ニシテ、スデニ落城ニ及ブベキヨシヲ後陽成院キコシメシテ、烏丸光廣西三條公條ヲ勅使トシテ田邊ノ城ヘゾツカハサレ、古今ヲ傳授セシメ玉ヒ古今相傳ノ內ニ合戰ヲ止ムベキヨシ勅諚アリ、サテ古今相傳ヲハリテ後、又玄旨ハ天子和歌ノ御師範ナレバ、コレニ敵スルハ朝敵ナリト宣旨下リケレバ、寄手ノ諸軍牙ヲカミテ引退シトナリ、是ヨ

リ代々天子ノコトトシ、古今傳授近代ニ至リテハ事々シキ重典ノヤウニナレリ、或人ノイヘルニ、紀氏古今ヲ撰シテ自ラ傳授ト云フコトヲ拵ヘテ傳ヘ侍ラン理ハナキコトナリ、スベテ作者ノ後スデニ數年ヲ經テ知ル人マレナルヨリ、傳授秘密ト云コトハ出來ルコトナリ、古今集ヲ貫之ノ心ニハ十成セザルニヤ、新撰三百六十首ヲ撰ンデ、古今ノ歌ニ二百八十首ヲノセテ、今撰ムトコロ玄ノ玄ナリトイヘリト頓阿モイヘルコトナレバ、ソノ古今集サヘイマダ十成ノ撰集ニハナカリシト見エタリ、又基俊ノ石山ヘ祈ラレシコト式部源氏ノコトニ同ジ、是レ後人奇怪ノコトヲ拵テ、古今ヲ賣ルモノ、作リシコトナルベシ、又俊成卿ノ顯輔卿卒後ニ、基俊ノ弟子トナラレシコトヲ知ラズシテ、六條家ヲ見ヤブリ、二條家ノ傳ヲ受ケラシト云古說、コレ後人ノ僞造ノ證據ナリ、二條ト云ハ、定家ノ二條ニ住マレシユヱニ二條黃門ト云ヒシヨリ、爲家卿ノ後ヨリイヒシ稱號ナリ、俊成時分ニハイマダ二條家ト云フコトアルベカラズ、二條家ト云フニツキテモ、定家ノ時分ニ古今傳授ノコトナキ一證ニテ、後人ノ僞造ナルコト紛ナシトナリ、契沖師ノ說ニ、顯昭法師ノ古今ノ註ヲ顯注トイヘリ、ソノ註ニ定家卿考ヲ書加ヘテ密勘ヲ作ラレシナリ、密勘ノ二字ハ、人ニ見スベキニ非ズト云意ナリ、是ヲ注シテ密勘ト名付テオカレ、外ニ傳授ト云コトアルベキニアラズ、古ヨリ記錄多ク侍レドモ、定家卿ノ時分ニ傳授ノ沙汰ナシト云ヘリ、契沖師ハ水戸ノ文庫ノ秘書ヲモ徧ク覽、ソノ外歌學ヲ極メシ宏覽逸材ノ人ナレバ、此語ニテモ定家ノ時分モ、古今傳授ト云コトナキ證トモスベキ、又井蛙抄ニ云頓阿法師爲世卿ノ

方ヘ（爲家ノ孫ニテ爲氏ノ子ナリ）古今ノコトナラヒニマキリシガ、三度マデ人アリ障リ侍リテ、四度メニハ人ナクテ傳ヘラレシトアレバ、是ガ先ヅ古今ノ傳授トイハン名目ノ始ナルベクヤ、頓阿ノ子法師經賢ヨリ大僧都堯孝ヘ傳ヘラレシナリ、堯孝ハ後小松院ノ時代ノ人ナリ、康富ノ記ニ云、堯孝ハ古今ノコトヨリ初テ歌道ノコトニクハシキ人ナリシガ、死近ヅキケレド傳フベキ人ナカリシ故、隨身ノ尼ニハ大方ノコトハ傳ヘラレケルトアリ、コレニテ思ヘバ古今ノコトモ堯孝ニテ先ヅハ絶タルナラメ、古今ノ地下ノ人ノ傳ト云コトハ、畢竟頓阿法師ヨリ見ユルコトナリ、ソノ後ニ東野州ノ時ニ至リ古今傳授ト云名目出來テ、古今集ノ箱ノ銘ヲ天地一馬、古今一貉、雪月風花、拒攘千古ト野州ノカヽレシトナリ、是レ世俗ニ箱傳授ト云始ナルベシ、コレヲ宗祇法師ヘ傳ヘラレシト見エタリ、今ノコトヲ以テ見レバ、古今ノ傳授ハ大切ナルコト下賤ノ者ナドガ傳フベキニアラズ、シカルニ野州ノ時ヨリ古今傳授ノ漸ナレドモ、左ホド大切ナルコトヲ下賤ノ者ナドガ傳フベキニアラズ、ソカルニ野州ノ時ヨリ古今傳授ノ漸ナレドモ、宗祇ニ傳ヘラレタルハ、野州ノ時ニハイマダ貴賤ヲエラブコトニアラズト見エタリ、宗祇ヨリ逍遙院三代ニ傳ハリ、玄旨ヨリ後陽成院ニ傳ヘ奉ラレケル、是レ天子御傳授ノ始ナレバ、古今傳授ト云コトハ、元來ハ地下ヨリ公家ヘ傳ヘタルコトナリ、傳授ノ名目ハ東野州ニ始リ、宗祇ト玄旨トニテ成就シ、ソレヨリ後人朝廷ノ大事トナリシヲ見テ、イヨ〱傳授ヲタテヽ、古今ヲ賣ル輩色々ノ說ヲ造作セルコトヽ見エタリ、契沖師ノ歌學ヲ今井自閑ト云者ニ傳ヘラレシニ、自閑モ宏覽ノ達者ナ

リシガ、ソノ比ノ宗匠中院内府通茂卿ヲ我ガ隱栖ヘ招請セラレシ時ニ、自閑ソト古今ノ事ヲイヒ出サレタレバ、通茂卿ノ御答ニ自閑ハ故實記錄ヲ大分所持スレバ、古今ハ殘ラズ合點シヌラン、古今殘ラズ合點ユクコソ即チ傳授ナレ、ソノ方ガ口ナドカラ傳授ト云コトキツトアルヤウニ思フハ、不審ナルベシトノ玉ヒシトイヘルタシカナル物語ヲ聞シコトナリ、是サモアルベキコト、通茂卿ノ語ヲ以テモ、古今ニ傳授ト云コトノナキ明證トスベシ、偏ニタヾ朝廷歌道ノ御傳授ト云コトハ、熹哉ノ詞ヲ始メ八雲ノ神詠ヨリ傳ハリタル道コソ最モ大事ノ御傳授、コレニ越エタルコトハアルマジ、古今傳授ト云コトハ、頓阿ヲ始トシ東野州ヨリコノカタノコトナレバ、大方ハ地下ヨリ事起レバ、左ノミ朝廷ノ大事重典トナルベキコトヽモ思ハレズ、今イフヤウノコトナラバ、大概御抄賢注ナドニ、少トナリトモ沙汰ナキコトハアルマジキコトナレバ、古今傳授セネバ和歌ハヨマレヌモノト云コトニハナキコト明白ナリ、和歌ハ我朝ノ大道ナリ、スベテ大道分明ニシテ、少モ隱スコトハナキハズノコトニテ、秘密スル道ハ狹小ナルモノナレバナリ、和歌ト云モノ人ノ思無レ邪ナルトコロヨリ出ルモノニシテ、人ニ堂上地下ノカハリハナキコトナレバ、元ヨリ和歌ヲヨマンニ、人ノ差別ハアルマジキコトナリ、紀氏ノイヘル人ノ心ヲ種トシタル和歌ナレバ、彼ノ無下ノ俗人ノ蓬心カラハ、大雅ノ風ハ讀ミ出スマジキコトヽ思ハルヽナリ、ワルウスレバ地下ノ人ヨリサモシキ心ノ公家モ多ケレバ、心ノ種ニハ貴賤ノヘダテハナキコトヽ知ルベシ、ソノ上ニ秘傳ニヨッテ歌ガヨマルヽモノナレバ、歌道ハ狹キ小キモノニ

シテ取ルニ足ラヌコトナリ、古今集ハ上モナキ撰集ナルニ、游女ノヨミシ歌ヲモ入レラレタレバ、撰集ニオイテハ人ノ貴賤良奴ノ差別ヲサヘ、古ハセザリシコトト見エタリ、兎角ニタヾ人ノ心ヲ種トシテトイヘルハ、古今ノ絶唱ト思ハルヽナリ、和歌ヲヨク我ガ朝ノ大道ト思ハルヽヲ、何ンゾヤ祕傳トイヒテ自ラ狹ク小クスルコトゾヤ、嘆クベク悲ムベキコトナリ、軍學ナドコソ其ノ本原ヲ尋レバ、皆陰謀ヲ立意トシタルコトニシテ人ヲ賣騙スル術ナルハ、廣ク人ニ知ラセテハ物ガナクナルユエ、祕事トシ傳授スルハズナリ、ソレユエソノ門人トナラネバ、カツテ人ニ說キ聞カセズ、弟子トナルニハ誓紙血判シテ、他言サセヌ祕授口訣スルヲ見テモ、ソノ道ノ正大ナルモノニアラザルコト明白ナリ、賊二夫人子一ノ道ナルコト軍學ニシクハナシ、聖人ノ道ノ正大ナルコト日月ノ天ニ中スル如ク、人ミナ仰グモノニ祕シ隱スコト何モナキナリ、和歌ハ我朝ノ大道ナレバ、祕傳ト云フコトアルベキニアラズ

學文ヲスレバ必ズ、人ヲ非ニ見ルヤウニナリ、人柄アシクナルト云コト俗論ナレドモ、現在俗人ノ內ニ多クアルコトナリ、俗人ニカギラズ、中々學者ニサヘ多キコトナリ、イカントナレバ、先ヅイハヾ俗ニ云フ生兵法トヤランニテモアルベクヤ、サリナガラ畢竟ハ學文ヲシタユエノ咎ニテモアルマジキコトト思ハルヽナリ、心ヲ平カニ公ケニシテソノ病根ヲ按ズルニ、カノ我慢高慢ト云病ヨリ起ルコトニテ、學文ヲ以テ口實トシタルコトナリ、學文シタル人ハ誰ニテモ必定人柄アシクナルモノニテモナケレバ、學文ニカヽリタルコトトモ見エズ、但シハ世上文盲ナル人ガ彼ノ學文ヲシテ人ヲ下シミ我ヲ

立ツル輩ヲ見テハ、ソレヲヨイ事ニシテ學文ヲ非トスル口實トシ、學文シタテヲスレバ、大方ガ誰ニテモアノヤウニナルニヨツテ、人ハ學文ハセヌガ却テマシジヤト學文ニ罪ヲ負セ、イヨ〳〵學文ヲキライ、人ニサセヌヤウニスルナリ、コレハ譬ヘバ一旦ヒヨツト熱羹ニテ舌ヲヤキタルニ懲リテ、冷虀ヲ見テモ吹イテサマシテ食フヤウニスル如クナリ、シカレドモソノ文盲ナル人ノ學文ニキヅヲツケテ非トスルモ、トクトソノ實情ヲサガシ吟味シテミレバ實ニ底心カラ學文ヲアシキモノ、人柄ヲ害スルモノト思ヒ込ムニモアラズ、ソノ身ガ無學ナルユヱ、學文ノアル人ニ出逢テハ切々コナサレ恥ヲカクコト多ク、イカサマ學文ハ人ノスベキコト、セデハナラヌモノト知リナガラ、モハヤ我身年モ老イ、俄ニ大學ノ素讀スルモオトナゲナクテ恥カハシク、心外ニ空シク年月ヲ暮シタル輩ヤ、又ハ一向ニ疎嬾ノ情夫遊山酒色ニノミハマリテ、虛蕩輕薄ナル心ヨリ學文ノムツカシキヲ、唐ノコトチンプンカンニテ日本ニハイラヌコトトテ實ニ嫌ヒ忌ム輩ヤ、又ハ一向生レツキ不肖ニ、人並ニハヅレ無器用ナル上ニ記憶モスキトナク、一旦勤メテ學ムデ見テモユカヌユヱニツヒ怠タリタル輩ヤ、又各別聰明ナル人ハ別シテ我慢ノ心ヅヨキモノナレバ、タトヒ文盲ナレバト人ニ手ヲ下ゲ物ヲナラヒ學ブコトヲ小無心ニオモヒ、學文ヲ嫌ヒ惡ム輩ナドアリテ、タマ〳〵學文ヲスル人ノ人柄アシクナリタルヲ見テ、喜ンデ學文ニキヅヲツケタガルコト、俗諺ニイヘル疫病ノ神デ敵トルノ意ナルベシ、誠ニ學文シテ人柄ノアシクナルト云ハ、養生ヲヨクシタル人ニ疫病ノトリツキタルニ似タルナリ、游惰輕蕩ノ人ノ學文ヲ嫌ヒ忌

ムハ、一向議論ニ及バヌコトナリ、我ガ無學ユヱ人ニコナサルヽガ口惜キトテ、學文ハ人ノセデ叶ハヌモノ好キヿトハ知リナガラ、無學ナル方ガケツクマシジヤトイフコトハ、畢竟コレ又人ノ我慢ノ心ヨリ起ルコトナレバ、學文シタ方モ學文セヌ方モドチラモ同ジ我慢高慢ナガラノ學文ヲシテ人ヲ下グシム咎ヨリハ、無學ノ人ノ學文ヲ非ニイヒナス方ノ咎ハ、一等モ罪ハ重カルベシト思ハルヽコト也、前ニ云フ如ク無學ノ人モ、ソノ內心ニハ學文ヲセネバナラヌモノト知リナガラ、我慢ノ心カラシテ學者ニコナサレ卑下ヲトルコトヲ無念口惜キコトト鬱憤シテ、カノ學文シテ高慢ニナリ人柄アシクナリタル人ヲ見出シテハ、ソリヤコソ學文ヲシダテスレバ、皆アノヤウニケツク人ガラワルクナルニヨツテ、アレデハ一向學文ノナイ方ガ、クワツトマシナリトイヒ、又ハ學文ハ唐ノコトナレバ、我國ハモト武國ニテ武ヲ以テ治マリタルコトナレバ畢竟アハヌコト、武士ハ武士ノ道ト云フモノアツテ、ナマヌルキ儒者ノ青表紙ノ上ナドニテイフコトハ、國家ハ治マルモノニテナイナドヽ云フ輩アリ、是レソノ內心ノ實ニハセネバナラヌコトト欲シ願ヘドモ、我カエセヌコトナルユヱ、カノ我慢ノ心カラシテ、表向ニハ左モナイ顏ツキヲシテ、辭ヲ造リ拵ヘアシクイヒナシ、ソノ事ヲイヒ銷ス人ナレバ、ソノ實情ヲ匿クシテ僞リ飾ルユヱ、ソノ心根ガ甚ダアシケレバ、是モ孔子ノ春秋ノ法ヲ見レバ、誅ス心ツベキコトナリ、內外邪正ノチガイアレド、是モ「疾三夫舍レ曰レ欲レ之、而必爲二之辭一」ノ類ナレバ、カクノ如キ輩ハ決シテ孔子ニ疾マル人ナリ、一向ニ學文ヲセズバヨシ、ソノトホリノコトスルカラハ、トクト學ビ

オホスレバヨケレドモ、片ソッペラヲ聞ハツリ下地ノ我慢ノ助ケトシ、書ヲヨメドモ皆ナ我意ノ勝手ノヨイヤウニ、私ノ料簡ヲ以テ理窟ヲツケルユヱニ、ソノヤウナ人ノ學文ハ、名ハ學文ヲスルトイヘドモ、畢竟文盲ト同ジコト俗ニ云フ論語ヨミノ論語シラズナレバ、眞ノコトニテナキニヱ、學文ヲシタルユヱ人ノアシクナルニハアラザルナリ、大方ノ人ハ皆ナ我慢心アルモノナルニ、況ヤ貴族侯家ニ生レアヒタル幼少ヨリ隨分氣儘ニソダチ、何事モ言ヒ次第仕次第ニシテ、飽マデ我慢高驕ノ心ヲ養ヒ立テタルモノナレバ、タトヒ學文ヲセラルヽトテモ、天性高明ニシテ嗜マルヽハ各別ノコトナリ、大方ハ下樣ノ人ノスル如ク學文ニ精ヲイレ苦勞ヲスルモノニテナケレバ、ソノ學文ト云テモ大名藝ト云ヒテ、先ヅ大方ハ片ソッヘラノ聞ハツリバカリコトナル上ニ、上樣ノ人物ノ習ヒ「不レ好レ臣ニ其所ロ受レ教」トテ、下樣ノ人物ヲ習フコトヲ必ズ心ヨク思ハレヌモノナリ、幼少ヨリカノ我慢ノ習慣自然ノ性トナリキツテアレバナリ、殊更我朝武家ノ政トナリ、師傅ノ役ヲ立ルコトモナク、ソノ上軍學ノ功利陰謀ノコトヲ第一ト心得、只ムキニ武威ヲ以テ人ヲ推シ、權ヲ取ル風習ナルユヱ、人ニ智惠ヲツケラルヽコトヲ卑下恥辱ト覺エ、威ヲ張ルコトヲノミ專トスルニヨッテ、必ズ學文ハ唐山ノコト、武士ハ武士ノ道アリ、聖人ハ昔ノ人ニテ、當代ノ風ニハアハヌコト、イヨ〳〵我慢ノ威風ヲ張ルヤウニナレバ、何程ニテモ學文ノ方ヘハ移ラヌハズノコトアルナリ、周季春秋戰國ノ時分ノ風ハ、我朝ノ近代ニ似タルモノナリ、武家ノ習ハ武一偏ノミヲ主トシ、片時モ心武ヲ忘レヌヤウニ心ガケ、物イヒ形樣迄武ニ

造リ、頂露シ短衣ヲキ、脛ヲ出シ長劍ヲ横タヘ、隨分トリマハシヲリヽシク、少モ温柔綏帶ノ風ヲナマスルキニトトテイヤシミ嫌ヒ、全體只武ヲ鼻ニカケヒケラカシタルモノナリ、ソノ内ニワケテ武士ノ武士クサキ人ガ多クアルモノナリ、總ジテ何ニヨラズ、物ノ臭氣ノスルハワルキモノニテ、味噌ノ味噌クサキ、鰹節ノカツヲクサキ人デ學者ノ學者クサキ、武士ノ武士クサキガ、大方ハ胸ノソルイ氣味ガスルモノナリ、是レ俗諺ニイヘル無イ樽ノ鳴ルト云モノニテ、内ニ一バイ物ガツマラズ、イマダ不足ナルユヱ、少シアル物ユヱ、人ガ知ルマイカト思ヒ、人ニ知ラレタクナリ、ヒケラカス心アッテ、コチカラ人ニナラシテ見セルナリ、亦唯自慢高慢ノ心ヨリ人ヲ推シテ、我ヲ立テフト競ヲ仕形ト見ユルナリ、無イ樽ノ鳴ルハ、外カラツヒソノ内ガ知レテ、却テ信向ガサメルモノナリ、只々心ヲ公ケニ平カニシテ、少ニテモ我ヲ立テ私意ノ指出ヌヤウニセネバ、眞實ニ聖人ノ道ハ見ツケラレマジキコトナリ

不盡言 終

社倉考

宇佐美灊水著

社倉考

宇佐美灊水 著

日本王代一覧ニ曰ハク、宣化天皇詔シテ曰ク、黄金萬貫アリトモ飢ヲ救ベカラズ、白玉千箱アリトモ寒ヲ救フベカラズ、シカレバ五穀ハ天下ノ本ナリトテ、稻目(イナメ)麁鹿火(ソカヒ)ニ命ジテ、國々ニ御藏ヲ立テ糧ヲ積タクハヘシム、タトヒ不虞ノコトアリトモ、人民ノ命ヲ救フベシトノ心ナリ

管子曰、「倉廩盈而知ニ禮節一、衣食足而知ニ榮辱一」ト、上モ下モ貧窮シテハ、義理モ外聞モ顧ルコトナラヌモノナリ、俗諺ニ、貧ハ諸道ノ妨ゲトイヘリ、論語ニ「小人窮斯濫矣」トアリ、又「足レ食足レ兵」トモアリ、又庶富教ノ次第モアリ、民ニ邪曲ナク、正直ナランコトヲ欲シテ、種々ニ敎ヲ施ストイヘドモ、民貧ニシテハトヾカヌナリ、故ニ民ヲ貧困ニ至ラシメザルヤウニスルヲ政務ノ始トス、爭訟ハ多ク貧困ヨリ起ル、爭訟アレバ禮讓ヲ忘ルレバ鄕里和セズ、風俗アシクナル、敎ハ風俗ヲ正シクスルコトナリ、故ニ「聽レ訟吾猶レ人也、必也使レ無レ訟乎」ト孔子ノ玉ヘリ、王制ニ、「三年耕必有ニ一年之食一、九年耕必有ニ三年之食一、以ニ三十年之通一、雖レ有ニ凶旱水溢一、民無ニ菜色一、然後天子食、日擧以レ樂」トアリ、「三年耕有ニ一年之食一」トハ、タトヘバ二十萬石ノ收納アレバ、十五萬石ヲ一年ノ國用トシ、五萬石ヲ殘シオクヤウニ

スル、五萬石ヲ三年積メバ十五萬石ニナル、是レ一年ノ國用ガノコルトイフコトナリ、カクノ如ク段段ニ積メバ、凶年アリテモ民ヲ餓死セシムルコトハナキナリ、又通鑑ニ、「隋開皇五年、度支尚書長孫平奏、令二民間、毎秋家出二粟麥一石以下一、貧富爲レ差、儲二之當社一、委二社司檢校一、以備二凶年一、名曰二義倉一、隋王從レ之」トハ粟麥ノデキタルトキ、有德ノ者ニハ一石出サセ、貧シキ者ニハ少ナク出サセ、ソノ村ニ儲ヘ置スルコトナリ、又朱子文集ニ、社倉ノ法アリ、飢饉ノ用意ニ上ヨリ米ヲ貧民ニ貸シ、少シヅヽ息ヲトリ、時ヲ以テ斂散シ、料簡ノ難儀ニナラズ、生計ノ爲ニナルヤウニシ、歉年ニハ半息ヲトリ、凶年ニハ息ヲトラズ、儲ヘ多クナレバ息ヲトラズ、耗米ヲ少シヅヽトルナリ、仕形ハトモアリ、當世諸侯ニ貧富アリ、儲蓄ノ事行ハルヽ國モアリ、今雲國富有トイヘルニハアラネドモ、行ハバ行ハルベキ時ナリ、行フニ就テハ事ノ時宜アリ、時宜モ古ヲ稽ザレバマチガヒ多シ、古意ヲ失ヒ少シモマチガヒアリテハ行ハレズ、却テ害ヲ生ズ、因テ古ヲ稽ヘ今ノ宜キニ從フテ、社倉ノ法ヲ左ニ著ハス、今ノ宜ニ從フトイヘド、ソノ國ソノ村ノ時宜アレバ、問ヒ謀リテ人情ヲ盡スベシ、小人ノ料簡ヲ用ヒズ、君子ノ腹ニテ古意ヲ失ハズンバ、此上ニ時宜ニ叶フテ、ヨキ仕形ドモアルベシ

社倉ノ法

社倉トモ義倉トモイフ、社ハ里中寄合テ土地ノ神ヲ祭ルコトナリ、史記孔子世家ニ、「楚昭王將下以二

書社地、封孔子、註ニ、二十五家爲里、里各立社、書社者書其社之人於籍ニトアリ、又合聚シテ組ヲ立ルヲ結社トイフ、村々一村ゴトニ組シテ米穀儲蓄ノ倉ヲ立ルヲ社倉トイフ、義ハ人ヲ救フコトナリ、親類ノ貧シキ者ヲ救ン爲、ソノ分ニ應ズ所持ノ田地ヲ引分ケテオクヲ義田トイフ、行路ノ人ノ爲ニフルマヒ水ヲ出シテオクヲ義漿トイフ、漿ハ砂糖ニテモ葛ニテモ入レテ味ヲ付タル水ヲイフ、人ヲ救フ爲メニ米穀ヲ儲ヘ置ク倉ナル故義倉トイフ、上ヨリモ下ヨリモ米ヲ少シヅヽ出シ、村々ニ貯ヘ置テ凶年饑饉ノ備トスベシ

田地高一石ニ付キ、或ハ五升或ハ三升ヅヽモ出ダサスベシ、豐年ニハ七八升モ出サスベシ、百姓ノ有徳ナル者ニハ餘計ヲ出サスベシ、上ヨリモ高一石ニ付キ五升カ三升出スベシ、此米千石ノ村ニテハ一ケ年ニ七八十石モアルベシ、今年秋冬ノ中ニソノ米ヲ聚メ倉ニ入置テ、來年ニイタリ貧民ニ貸ベシ、一石ニ付キ五升ホドノ利息ヲ加ヘ、冬ニイタリテ返納サスベシ、右ノ通リニシテ年々米ヲ聚ムルトキハ、十ケ年ニテハ千石ノ村ニ社倉千石アリ、ソノ後ハ利息ヲトラズ耗米ヲ少シ添テ返納サスベシ、五人一トロ十人一トロトカ組ヲ立テ貸ベシ

年々古米ヲ新米ニカヘテ置クベシ、儲ルハ粟ガヨキナリ、粟ハ七八年モタモツ、米五升ノ所ヘ粟一斗納サセ、貸スモ粟ヲカスベシ、粟ヲタワラニ入ズ、亂シテ納オケバ、盜アリテモ多ク持去ルコトナラズト云ヘリ

凶年ニハ相應ニ此ヲ貸ベシ、上ノ百姓ハ豐年ニ至リ此ヲ返スベシ、中以下ノ百姓ハ返スニ及ズ、然レドモ米數前ヨリ減ズレバ、翌年ヨリ前數ニ滿ルマデ貸シ米ニ始ノ通リニ利息ヲトルベシ

始メハ儲米ヲ倉持タル者ドモニ分ケテモアヅクベシ、後ニ儲米多クナリタラバ、儲米ノ内ヨリ入用ヲ出シ、地ヲ買ヒ倉ヲ立テ會所ヲモ立ベシ

身代有德ニ人ガラ宜シキ百姓一人ヲ選ビテ義倉ノ頭トシ、副役二人書算ヲココロエタルモノヲ選ブベシ、毎月一日、日ヲ定メテ、頭百姓二三人、小百姓二三人庄屋ナド會所ヘ集マリ米出入ノ勘定アリ、米ノシメクヽリ、村ノ百姓中ノ貧富風俗、耕作渡世ノ事ナド申合スベシ

頭役添役庄屋ナド姦曲アラバ、百姓中ヨリ訴ヘ出ルヤウニ云聞カセキット僉議シ科代ヲ申付ベシ

奉行代官ニ此米ヲイロハスベカラズ、毎年現米ノ有無ヲ奉行代官見屆ケ、モシ米不足セバ吟味スベシ」

全體百姓ヲ救ヒノ米ニテ、百姓中ノ物ト云コトヲヨク〳〵ノミコマセ、少シモ疑心ナカラシメ、上ハ軍用ノ備ノミニテ、奉行代官ハ勿論上ニモイロハレヌヤウニ法ヲ定メ置ベシ、古ヘヨリ時ニヨリ人ニヨリテ、度々廢レルコトアリ

麥粟モ貯フベシ、貧民ハ常ニ麥粟ヲ食ス

町人モ願フベシ

博奕飮酒遊興シテ、家產ヲ破ル者ニハ貸ベカラズ、志ヲ改ムル者ニハ貸ベシ

古今ヲ斟酌シ、當時ト其ノ所ニ宜キヤウニ、後世マデ廢レヌヤウニ仕形アルベシ、先ヅ右之趣ヲ以テ近郡四五ヶ村ニ初メテヤウスヲ試ムベシ、郷方役人ノ民ノ治メニ志アル者ニトクトノミコマセ、百姓ノ中ニ不身上ニテモナク、志アル者ヲ見立テサセ相談サセバ行ハルベシ

社倉取扱心得ノ事

義倉ノ取扱ハ至ッテ大事ナリ、心得アシケレバ民ヲ救ントシテ立テタルコトガ民ノ大害トナル、懼ルベシ、愼ムベシ

義倉ハ上ノ恩惠ヲ普ク及ボシ、一村ヲナラシテ貧困ノ憂ナク、人々家業ヲ樂ミテ、父母妻子ヲ養ヒ、孝慈ヲ風化スル本ナレバ、義倉ニ就テ民ノ難儀ニナルコトハ少シモセマジキコト也、少シモ難儀ナルコトアリテハ、義倉ガクヅルヽナリ、孝慈ノ風行ハルレバ、諸ノ善事ハコレヨリ段々興ルナリ、古ノ教ハ孝慈ヲ家々ニ說キ聞スルコトニテハナシ、人々自然ニ孝慈ニナルヤウニ、善政ノ仕形ヨリ移スコトナリ、仕形ナク言語デ喩サントスルハトヾカズ、拙キコトナリ

漢書ニ、「鼂錯言二於漢文帝一曰、聖王在レ上、而民不二凍飢一者、非三能耕而食レ之織而衣二之也、爲レ開二其資レ財之道一也、故堯禹有二九年之水一、湯有二七年之旱一、而亡二捐瘠一者、以二畜積多而備先具一也」

耕シテ食ヒ、織テ衣ルハ、其年切リノ事ナリ、モシソノ年水旱蝗アレバ凍餓ニ及ブ、故ニ古ノ聖王ハ

カヲテ凶年ノ備ヲシテ置クトナリ

四十年ホド以前ニ、西國ニ蝗アリ、國々餓死ノ人夥シ、雲州ニモ蝗アリ、餓死道路ニ横ハレリト傳ヘ聞ケリ、村老ニ問ハバソノ時ノ樣子詳ニ知ルベシ、コノ時社倉アラバ、一人モ死スマジキ也

義倉ハ百姓ノ飢饉ヲ救フタメナレドモ、儲畜ニ就、百姓ノ役害ニナラヌヤウニスベシ、役害ニナラバ、ソレダケノコトハ義倉ノ内ヨリ費用ヲ出シツカハスベシ、民情ハ遠キ慮ナク、目前ノ利害ノミヲ見ルモノニテ、少シノ事ニモ怨咨スルモノナレバ、當前ノセワヲ難儀トシテ訴へ出ルコトアルモノ也、「如レ保ニ赤子ニ」トイヘリ、無智ノ赤子ト見テ、アハレミテ取扱フコトナリ

大學衍義補ニ、「胡寅曰、賑レ飢莫レ要ニ乎近ニ其人一、隋義倉取ニ之於民ニ不レ厚、而置ニ倉於當社一、饑民之得レ食也、其庶矣乎、後世義倉之名固在、而置ニ倉於州郡一、一有ニ凶飢一、無狀有司固不ニ以上聞一也、良有司敢以聞矣、比レ及下報可委ニ吏屬一、出而施セ之、文移反復、給散艱阻、監臨胥吏相與侵沒、其受レ惠者、大抵城郭之近、力能自達之人耳、居之遠者、安能扶レ老携レ幼、數百里以就ニ龠合之廩一哉、必欲ニ有レ備無下患、當下以ニ隋氏一爲セ法、而擇ニ長レ民之官一、行ニ劭レ農之法一、補以ニ救レ荒之政一、本末具擧、民之饑也庶レ有レ瘳乎」

飢饉ヲ救フニハ、百姓ノ近キ處ニ儲米ノアルガヨキ也、城下遠方ニアリテハ、飢饉ノ時百姓ヨリ願ヒ出テモ、役人前ガ早速ニスマズ、大イニヒマドル、日數ヲ經テ運ビトルニモ、遠方ハ人々難儀シ、手都合アシケレバ、隋ノソノ村々ニ儲へ置タル法ガヨキト也

又曰、五代周顯德六年、淮南饑、世宗令以米貸之、或曰、民貧恐不能償、世宗曰、民猶子也、安有子倒懸、而父不爲解者、安責其必償也、胡寅曰、稱貸所以惠民、亦以病之、惠者紓其目前之急也、病者責其他日之償也、其責償也、或嚴其期、或徵其耗、或取其息、或予之以米、而使之歸錢、或貧無可償、而督之不置、或胥吏以詭貸、而徵諸編民、凡此皆民之所甚病也、世宗視民猶子、匡救其乏、而不責其必償、仁人之心、王者之政也、丘濬曰、胡寅此言、非但稱貸之弊、乃今日義倉之弊也

民ニ貸スハ惠ムニナリ、又苦シムルニモ、仕形ニヨリテナルナリ、惠ムト云フハ、目前ノ難儀フユルクシテヤル也、苦シムルト云ハ、償ヲ責ル也、貸ヤウ償ハセヤウニ次第アリテ、イタハルトナサケナキトニテ、勝手ニナルト難儀ニナルトノ分レアリ、貧ニシテ不慮ノ事アリ、返納ノナラヌニセメテヤマズ、ドウヨク者ヲウチヤク者ナラバ格別、實ニ叶ハヌ者ナラバ、クレテヤリタキコトナリ、義倉モ右ノ通リ、貸トキハヨケレドモ、返納ニ貧民ガ甚ダ難儀スルトハコヽニテ、貧民ヲ苦シムル故義倉支配ノ者ガ義倉ノ本意ヲ失ハヌヤウニ取扱フベキコト也

中庸ニ「孔子曰、文武之政布在方策、其人存則其政擧、其人亡則其政止」

文王武王ノ政事ハ方策ノ記錄ニシキノベテアレドモ、賢人ガ出レバソノ政事ヲ擧ゲ行フ、賢人ガナクナレバ擧ゲ行フコトナラズ擧ルトハ、タトヘ力アル者ハ重キ物ヲヨク擧グ、力ナキ者ハ擧ルコトナラヌガ如シ、論語ニ「人能弘道、非道弘人」トアルモ此意ナリ、金錢米穀ニカヽハル者ハ、私欲偏頗

ニ落ヤスシ、義倉ハ別ケテ人ガ大事ニテ、廢興ニカヽルコトナレバ、公正廉潔ニテ慈愛アル人ニ非レバ、私曲アリテ百姓ノ爲ニナラズ、義倉ノ本意ヲ失フテ無益ナリ
民ノ衣食住足リテ安穩ナレバ、自然ニ奢ガ出來ルモノ也、奢レバ民貧クナル、奢ノ出來ルハ、上ヨリ民ニ制ヲ立テザル故ナリ、依テ民ニ奢ノナラヌヤウニ制ヲ立ツベシ、制ニ違フ者ハ庄屋ヨリキット正スベシ、庄屋怠ラバ郡奉行下郡ヨリ庄屋ヲ正スベシ、見ノガシニスベカラズ、見ノガシニスル癖ツケバ、次第ニ民ガ怠ルナリ、始ヨリキットスレバ、ソレニナレテ後ニハ民ノ心定マリテ奢ラヌナリ、法ヲ立テタルバカリニテ、跡ニテ違フ者ヲ役人ガ正サヾレバ、制ガ段々廢ルヽ也、義倉ヲ立ルハ、民ヲナラシテ貧クナラヌヤウニスルコトナルニ、奢ヲ制セヌトキハ、何ツモ民ハ貧シクシテ困窮スルナレバ、義倉ヲ立テタル詮ハナキナリ、百姓ノ家居ニハ、床、違店、書院作、長押作、唐紙張付、赤壁白土、マイラ戶、杉戶、ランマ、玄關ニ式臺付ルコトナド堅ク禁ズベシ、器物ニマキヱ、梨子地、靑貝、黑ヌリ、朱ヌリ、金銀赤銅ノ金物堅ク禁ズベシ、脇指ハ皮柄、藤柄、皮ノ下緒ヲ用ヒテ糸柄鮫ヲカケ、金銀赤銅ノ飾等堅ク禁ズベシ、鞘ハ黑ヌリヲユルスベシ、ノリ物ハ町人百姓トモニ禁ズベシ、燭臺、挑灯、合羽百姓ニハ堅ク禁ズベシ、コレラハ皆錢ノ入ルモノ也、百姓ガ錢ヲツカフ故ニ貧クナル也、錢ヲツカハセヌヤウニスベシ、在鄕ノ商ヒ店市町ニ制禁ノ物ヲ賣ルマジト堅ク申シ付ベシ、商店ニテ賣ネバ、調ルコトモオノヅカラナラズ

博奕ハ嚴刑ヲ以テ止ムベシ、民ノ貧クナルハ、多クハ博奕ヨリ起リテ、身上ヲモツブスナリ、博奕ヲスル者、孝悌、忠信、禮儀、廉恥ミナカグルナリ、風俗ヲ壞ルノ尤甚シキモノ也、又博奕ヲ業トスルモノ國中ニ甚ダ多シ、人ヲスヽメソヽノカシテ博奕ヲサセ身上ヲヤブラスル、或ハ男立テヲシワル者ヲ引入テ所ノ害ヲ生ズ、博奕ヲ業トスル者所ニアリテハ貧者多クナリ、風俗アシクナル、盗賊モコレヨリ出來ルナリ、故ニ改メテ農工商ノ業ニ入ラズンバ、所ニオクベカラズ追ヒ放ツベシ、又庄屋ナドニ博奕ヲ好ムモノ多クアルモノ也、庄屋博奕ヲ好ミテハ、所ノ禁制ハナラ子バ、庄屋ヲカユベシ、甚シキ者ヲ一二人モカユレバ餘村マデノ畏(オド)シニモナルナリ、博奕ノ徒ヲシタル者ハ科ヲ重ク申シ付ベシ

金銀サヘアレバ、米穀ハ自由ニ買ハルヽハ、治世ノコトナリ、軍爭ノ時ハ兵粮ガ第一ナレバ、他國ノ米ハ賣ラズ買レズ、城下ニ儲ヘ置キタリトテ、ソレニテ足ルコトニアラズ、自國ノ諸郡鄕村ニ儲ヘテアレバ、何ツニテモ自由ナリ、因テ上ハ義倉ヲ兵粮ノ儲ニシテ、治世ニハ上ヨリ一向手ヲ付ヌ事ト定メ置ベキコト也、軍用ノ儲コレヨリ便ナルハナシ、少シモ上ニテ借リ用ルトキハ、ソレヨリ義倉ガクヅレテ民ノ害ニナル事ドモガ段々出來ル也、義倉ニオイテ上ノ御爲ニナルコトハ毫釐モイタスベカラズ、郡奉行鄕役人ドモヘモ、此儀ヲヨク〳〵合點サスベシ、上ノ御爲ト云ハ、義倉ガ續ケバ民ガ富有安穩ニナル、民富有安穩ナレバ風俗ガ正シクナリ、爭訟モ起ラズ役人モヒマニナリ、三人ガ二人ニテモツトマル所ニ事アレバ費モ多シ、費多ケレバ、ソレニ就キ上ニモ亦費アリ、目ニ見エヌ費ガイクラ

モ出來レドモ、俗吏ハコヽニ心付ズ、只目前ノ利損ノミヲ見ル、遠キ慮ナシトイフベシ、コヽニ心ヲ付ル時ハ御爲メ夥シキコト也、コレヲ「國不㆓以㆑利爲㆒利、以㆑義爲㆑利也」ト云

壬辰四月(安永元年)　　宇佐美惠

社倉考 終

事務談

宇佐美灊水著

事務談

宇佐美灊水 著

當時東都之富、和漢古來ヨリ如レ此甚事ヲ聞ズ、何トナレバ和漢トモニ諸侯之都城下ニ參リ居住スル事ハコレナク、只參勤シテ暫ク都下ニ居リ、頓テ本國へ歸ル事ナリ、當時ハ諸侯皆東都城下ニ居住シ玉フテ、妻子モ都下ニ在リ、上中下之屋敷數處アリテ、家中大勢聚リ居住ス、武家盡ク集リ居ル故ニ、工商モ都下ニ充滿シ寺社モ其數ヲシラズ、海内之萬貨輻湊シ、一ツトシテ用事ノ辨ゼザル事ナシ、日本國中ノ金穀ヲ集メテ、東都ニテ使ヒ棄ル事日ニ幾千萬億トイフ事ヲシラズ、升平百年ニ過スレバ、都下之貴賤奢侈日々長ジ、樂事ニナレテ無レ所レ不レ至、風俗輕靡ニ成リ行キ、其中ニ生ル丶者、生レテ歡樂浮花ノ事ノミニ習レテ、其外ヲシラズ、風俗ニ染テ身志輕薄ニナリ、質素遠慮ハ聊カモナシ、山川田野ヲシラズ、五穀ヲ分タズ、民情ヲ解セズ、夏蟲疑レ氷トイヘル如ク、民間之事ハ少シモ會得ナシ、婦人女子ノ志ノ如シ、只今日ノ浮遊歡樂、歌舞淫曲ニ溺レテ、人間之樂ミ此上ハナシト思ヘリ、當時東都ノ貴賤如レ此風俗ナレバ、此後モ猶尙甚シカルベシ、諸侯方此風俗ニ馴給フ時ハ、國ヲ忘レ民ヲ忘レ、歡樂奢侈ニ費用多ク、國用常ニ不足シ、御家中之俸祿モ給ハル事

滯リ、民之租稅ハ用捨ナクキビシク取立ル樣ニ成行キ、大臣之諫モ聞入給ハズ、臣下之國用不レ足成ル故ニ、不レ得レ已御家中ヲ儉ニシテ、用事ヲ辨ズルモ年々之事ニテ、下之難儀ニ成ルノミニテ、イツニテモ國用ハ不足ナリ、是甚ダ治國ノ道ニ害アリ、故ニ公子ハ御幼稚之時ヨリ本國ニ在シ給フテ、東都之浮華ノ風俗ニ習レシムベカラズ、東都ニテ御生長アランニハ、右之累免ガタシ、又本國ニテ御生長シ給ハンニハ、國城內外廣ケレバ御遊行モ時々アリテ、東都邸ニテ深宮之內ニ在シ、婦人之手ヲ離レ給ハヌト違ヒ、御身モ健ニ成リ給フベシ、日々華靡輕薄ヲ見給ハザレバ、自然ニ質素厚重ニ成リ給フベシ、御家中多ク之人ヲ朝夕見給ヘバ、諸臣ニ親ミ厚ク、臣下ヲ寵セラル丶事偏ニ落ズ、田野ニ御遊行アリテハ、民之疾苦ヲ親ク見給ヘバ、遠ク民ヲ計ルヨリハ切ニ成リ、思慮深成リ、諸臣トモ藝場ニ入給ヘバ諸藝モ長ジ、誠ニ武將之器ニ堪給フベシ、東都ニ在之害不レ可ニ勝計一、本國在之利モ不レ可ニ勝計一、是當世東都之繁華中ニ居テ利害ヲ計リ合セ、遠慮シテ愚見ヲ建ル事如レ此

一 論語ニ「孔子曰、性相近也、習相遠也」トアリ、此意ハ人ノ生レタル初ハ如何樣ニモ成ル物ナリ、輕浮ニ習ルレバ輕浮ニ成、質素ニ習ルレバ質素ニ成ル、染習ニ隨フ物也トナリ、故ニ墨子悲ニ絲染一トイヘリ、今東都城下ニテ生ル丶世子公子、未ダ物之別チモナキニ、附添フ者共賤シキ戲技ヲ呼ンデ、鄙猥至極ノ事ヲナサシメテ樂マシム、先入者爲レ主トイヘリ、是計リデモ、外ヲ推量セラル丶ナリ、故ニ本國ニ在シテ質素ニ習シ給ハバ、質素ニ成給フベキ也、質素ニ成リ給フトモ教ナクバ、又鄙野ニテ

固陋免レガタシ質樸ニテ敎ヲ受レバ、篤厚之君子トナルナリ、敎之道篤厚嚴整成ル者ヲ選ビテ傳トシ、奇技淫巧鄙猥ノ雜戲ヲ見セシムベカラズ、學問弓馬間斷ナキ樣ニアルベシ、是則質素ニスルノ道ナリ、如レ此ニシテ不レ怠時ハ、德器成就シテ後ニハ國家藩屏之任ニ堪給フベシ、人君姑息之愛ニテ、子ヲ敎之道ニ疏ナル時ハ、愛スルニ似テ却而害スルナリ、却而不慈之父ト云ベシ、易ニ童牛之牿トイヘル事アリ

一 儉ハ入用ヲ程ヨクシ、ヒカヘテ奢侈ヲセザル事ナリ、儉ハ仁人之道ニテ、人君之大德ナリ、堯舜茅茨不レ剪、土階三尺トイヘルハ、宮室之造リ甚ダ質素成ル事也、禹惡二衣服一、菲二飮食一、卑二宮室一トイヘルハ、衣食住ノ三ツヲ樸素ニシタル事ナリ、皆儉德ヲホメテ言タルナリ、孟子ニ、仁レ民而愛レ物トイヘルハ、愛トハ愛情ノ義ニテ、ヲシム事也、人君上ニ在テ奢侈ヲ好メバ、下萬民ノ難儀ニ成ルナリ、故ニ仁君ハ民ニ仁恩深キユヱ、奢侈ヲセズ、諸物ヲ惜ミテ妄リニ費サヾル事也、是則儉也、漢ノ文帝隋ノ文帝ハ、躬儉約ヲ守リ、衣服宮室等ニモ美麗ヲ好給ハザリシ故、上一人ノナストコロ下萬民ニオシウタリ、此二帝ノ時ハ天下豐饒ニシテ事ナカリシナリ、人ノ惡事ヲナスハ貧困ヨリ起ルモノ也、下ヲ豐ニシテ禮義ヲ敎ル時ハ上ニ服セザル者ナシ、豐成ル時ハ只驕奢ヲ戒ルノミナリ、然レバ政事之大要ハ、詰ル處人君之儉約ニ歸スルナリ、此儉約モ東都浮華中ニ在シテハ、御心付無レ之物ナリ、本國ニ在シテ民ノ疾苦ヲ親見給ハヾ、其レニ習レテ自然ニ哀憐ノ心モ生ズベキナリ、ソレヨリ民ハ國之本ナリ

トイフ事モ御心付、今日ノ國用ハ皆民之粒々辛苦シテ耕スヨリ出ル物ト思召サバ、是ヨリ儉約モ起ルベキ也、國用ハ皆民之辛苦シテ出ス事、人君皆シロシメサヾルニハナシ、然レドモ民ニ甚遠ザカリ給フ故ニ、今日ノ歡樂ニ長ジテ民ヲ忘レ給フナリ、公子本國ニ居給ヘバ、日々民ヲ親ク見給フユヱニ忘ルヽ事ナキナリ

一　禮記ニ、「國君世子生、射人以二桑孤蓬矢六一、射二天地四方一」トアリ、註ニ「天地四方男子所レ有レ事也」トイヘリ、又擇三於諸母與二可者一、必求二其寬裕慈惠、溫良恭敬、愼而寡レ言者一、使レ爲二子師一」トアリ、其外ニモ世子ヲ敎ルノ道ヲ處々ニ說ケリ、又漢文帝時賈誼ガ上疏ノ中ニモ、太子ヲ敎ル道ヲ說テ、「逐二去邪人一、不レ使レ見二惡行一、選二天下之端士一、孝悌博聞、有二道術一者、以衞二翼之一、使下與二太子一居處出入上、故太子迺生、而見二正事一、聞二正言一、行二正道一、左右前後皆正人也、及三太子長少知二妃色一、則入二于學一、學者所レ學之宮也」ナドイヘリ

書經ノ註ニ、「殷ノ高宗爲二王子一時、其父小乙、欲三其知二民艱苦一、故使レ居二民間一也」トアリ、又明ノ太祖ハ太子ニ農家ヲ遍閱セシメテ、「農終歲勤苦、服食不レ過レ如レ此、故令三爾知レ之無二過取一也」トノタマヒシ事アリ

一　嫡夫人ハ東都ニ御居住有レ之、本國ニ御居住不レ成ハ公法ナレバ、御寵愛ノ婦人ハ本國ニ置クベシ、然レバ侯之御往復何レニ在シテモ樂シキナリ、且又嫡夫人寵妾一處ニアリテ、爭レ寵ハ禍亂之基

也、是ヲ計ルノ機會今ニアリ、機會ヲハヅシテ、何事モ成就スル事ナシ、易ニ、「知レ幾其神乎、幾者動之微、吉之先見者也、君子見レ幾而作、不レ俟レ終レ日」トアリ

一 學舘ヲ設テ敎サザバ、士大夫道ニ暗ク、風俗正シカラズ、且ツ英才之人ヲ敎育スル事アタハズ、故ニ學舘ヲ建ツベシ、其仕方ハ城外之廣地ニ於テ、方一町程之地ヲ構ヘ、廻リ堀ヲ掘リ、墻ヲ結ベシ・其內ニ聖堂ヲ建テ、春秋ノ釋奠アルベシ、別ニ訓導所ヲ立テテ、素讀、口說、會讀等其內ニテ稽古アルベシ

一 構ヒ之內ニ六藝、射場、馬場、鐵砲、鎗場、劍拳場等之諸藝之稽古場アルベシ、諸藝場ヲ置ケバ、學舘ノ永ク續テ廢セヌタメナリ

一 構ヒ之內ニ田地一段程開發シ、我侯藉田之禮ヲ行ヒ給フベシ、古ヘ天子諸侯藉田アリシナリ、藉田ハ天子諸侯自身田地ヲ耕シ始メ、其跡ヲ卿大夫士耕シ、其跡ヲ民共ガ耕シテ終ルナリ、藉田終リテ、其處ニテ酒宴アリ、上下歡樂シテ歸ルナリ、此藉田ハ第一民ニ耕農ヲ勸メ勵マスタメナリ、又我邦ハ先祖ノ祭リヲ佛寺ニ託シ置テ、主ハ拜禮ノミナリ、手ヅカラ爲スノ事ナシ、今日ノ國家ハ先祖ノ國家也、先祖ノ國家ヲ承繼ケドモ、先祖ヘ事ルノ禮甚薄シ、責テハ此田地ニテ生ズル米ヲ、先祖ヘノ供物ニナスベシ、論語ニ、「子曰、吾不レ與レ祭、如レ不レ祭」トアリ、是ハ孔子先祖ヲ祭ル時、病氣抔ノ故障アリテ、自身祭リ給フ事ナリガタシ、人ニ祭スル時ハ、自身先祖ヘ誠ヲ致サヾル故ニ、祭ラザル樣ニ思召

給リト云事ナリ、タマ〳〵ノ事ニテサヘモ如レ此、然ルニ今ノ世ハ上タル人ホド、自身ノ手ヅカラナシ給フ事益々薄シ、然ルニ上タル人ハ先祖ノ恩益々深キナリ、手親ノ物ヲ先祖ヘ供シ給ハヾ、先祖モ甚悦給フベシ、又毎年藉田アレバ、君卿大夫士民事ヲ忘レズ、粒々皆民ノ辛苦成ル事ヲ知ガ故ニ、民ヲ恤ムノ心深ク、自然ニ上タル人ノ奢侈モナク、儉ヲ貴ビ質ニ成ルナリ、然ル時ハ萬民徳ニ歸シテ、令行禁止、孝經ニ、「得二百姓之歡心一、以事二其先君一」トイヘルハ此事也、此藉田ハ國中之里長ヲ召テ拜見セシメ、酒食ヲ給ハルベシ、是ヲ明ニ明徳一トイフナリ

一　長門ノ明倫舘ニテハ、養老之禮ヲ行ヒシト傳聞ケリ、養老之禮ハ、古天子諸侯老人ノ徳高キ人ヲ敬ヒテ、自身ニ庖厨ニ入リ刀ヲ取テ料理シ給ヒ、自身ニ膳ヲ居ヘテ老人ヲ敬シ給フ禮也、「書經ニ、「天佑二下民一、作二之君一、作二之師一」トアリ、人君ハ民ノ師ナリ、故ニ民ニ尊長ヲ敬スル事ヲ自身ナサレテ、下萬民ニ見セ玉フナリ、依レ之萬民是ニ感ジ、上タル人サヘモ如レ斯老人ヲ敬シ給フ、況下タル者老ヲ敬セザランヤトイフテ孝悌ヲ行也、此禮ハ既ニ行フタル人アリ、今行ント欲スル時ハ難キ事ニアラズ、大學ハ養老之事ヲ言タル書也ト先師之説也

一　長門城下ニ明倫舘トイヘル學舘アリト傳聞ケリ、學問ヲ主トシテ諸藝場アリトイヘリ、是ニ依テ長門ニ文學才藝之士多シ、故ニ自然ニ大臣ニ學ヲ嗜人多シトイヘリ

一　藝州ニテハ堀氏ノ儒臣二人、各二百石之祿ヲ給リテ京都ニ遊居ス、藝侯東都ヘ參勤ノ時ハ、一人

ヅ、從テ東都ニ來ルトイヘリ、上タル人自學ニ暇ナクバ、下ヲ勸メテ學バシムベシ、是大德ナリ、自學ヨリモ其功大ナリ、下ノ學デ德ヲ成スハ、上ノ勸ニヨリテノ事ナレバ、上ノ大德是ニ勝ルハアラズ、諸ル處下人々ノ學得テ働キヲナス事、上タル人ノ功ニ歸スルナリ、大量ニテ妬忌ナキ人ニアラザレバ、此大德ヲ成就スル事アタハズ、是ヲ先師徂徠先生學則トイヘル文ヲ著シテ、其末ニ「仕不レ優、無レ暇命也、故已不レ能レ學者、害ニ人之學一也、力能使ニ人學一者、使ニ人學一也、雖レ不レ學猶レ學也、何必才知德行、出ニ諸己一而後愉快乎」トイヘリ、雖レ有志ナリ、誠ニ思フベシ、學館立チテ士大夫奉公之餘暇ニハ、時々學館ニ遊バヾ、人々材德ヲ成シテ、國之治メニ補益アル人モ多ク出ヅベキナリ、論語ニ、「孔子曰、十室之邑、必有ニ忠信如レ丘者一焉不レ如ニ丘之好一レ學也」トアリ、此意ハ小邑トイヘドモ、忠信之人ハアル物ナリ、忠信之人ナラバ、敎ルニ學バザランヤ、敎ヘザル故ニ學ブ事アタハズ、棄置クベカラズトイフ事也（本書ハ「寶曆二年八月與ニ小田切邦相一」トアリ）

一　前車ノ覆ルハ、後車ノ戒メトイヘリ、前年泉府ノ壞レタルモ大夫ノ意ニ非ズ、上ノ御物入ノ莫大ニテツヾキカチツルヨリ無ニ是非一壞レタリト愚推仕ルナリ、然レバ此度ハ本ノシマリヲ極テ、政事ニ御トリカヽリタキコトナリ、前ニ懲ベキコトナリ、源濁テ流ノ淸ムコトハナシ、一タビ正レ君而國治ル

ト孟子ニ云リ、今マデ執政ノ御方、皆上ノ御機嫌ニ入ネバ事不レ行トテ是非ニカマハズ、上ノ御意ニ從フコトノミヲスル實ニ事ノ行ハルヽハ、御意ニ入ネバナラズ、然ドモソノ事一ツモ功ナシ、御爲メニナル事一ツモナシ、何ノ役ニ不レ立コトナリ、然ラバ前轍ヲカマハズ風ヲカヘテ見ルモ善カルベシ、今マデ入代リ〱テ政事ニ心ヲ勞シタル御方々誠ニ忠節ノ至リト云ベシ、然ドモ國益困窮ニ及ベルハ何故ゾヤ、聖人ノ道ヲ迂遠ナルコトヽ思ヒ、私智ヲ以テ治メントスル故ナリ、是ヲ古語ニ「笑ニ古人之未レ工、忘ニ己之事之已拙一」トイヘリ、聖人ノ道ノ至極善キトイフ證據ハ、今日ノスルコトヾモ差閊ヘ、行ツマリ次第ニ難儀ニ及ブ是目前タシカナル證據ナリ、聖人ハ今世上ニイヘル至極ノ水ト云物ナリ、人情萬事ニ通達シ少シモヌケメナキ人也、コノ人國ノ治カタニ一生心ヲ用ヒ、至極ノ道ヲ立テタリ、因テコノ道ニ從テ國ヲ治ムレバ、智慧モ才覺モ不レ入、無造作ニ穩便ニ治マルナリ、ソノ事ドモハ委細六經、論語等ニ載セテアリ、因テ人君卿大夫ハ學バデ不レ叶コトナリ、學バザレバ大ニ野父（ヤボ）ナリ、野父ナル故ニ却テ自分ノ小智ヲ上モ無キモノト思フ故ナリ、水ホドガマス〱虛レ心受レ人トシルベシ

一今ノ政事下ニハ恩德聊モ無ク、困窮至極ニ及トイヘリ、上ニハ國用乏シケレバ、此上ニモ下ヲ取掠メ、難儀サスルヨリ外ハナシ、コレヲハタラクハ聚斂ノ臣ナリ、聚斂ノ臣アランヨリハ、ムシロ盜臣アレトイヘリ、事カハリテモ、主意前轍ノトホリニテハ、幾重ニ工夫ヲコラストモ、今マデニカハルコト不レ可レ有、千變萬化ヲツクストモ、次第ニ惡シクコソナルベケレ、善キ事ハアルマジ、當分見

分ヨクトモ、末ノ害ニナルベシ、病人ニタトフレバ、此時節甚大病ナリ、コノ療治外ニ手段アルマジ、國君學問ニ志ヲヨセバ、忽ニ平愈スベシ、學問ノ仕方、マヅ學バデ不レ叶コトヲ古書ニ多クイヘレバ、其勸學ノ語ドモヲヨセ合セテ御覽ノ上ニ、又過ヲ改ムルコトヲ聖人シキリニノ玉フタルコトナレバ、改レ過ノ語ヲアツメ、諫言ヲ用ルコト人君ノ肝腎ナレバ、納諫ノ語ヲ集メ、サテ民ハ國ノ本ニテ、コレヲ大切ニスベキコトナレバ、恤民ノコトヲ古書ニイヘルヲ集メ、サテ仁孝儉ノ三ツハ、人君朝暮ニ忘レタマフマジキコトナレバ、コノ道ヲ得ト知ラシメン、ソレヨリ國ノ治メ種々ノ事ドモ段々ニ忘ラズ御覽アラバ、始メテ夢サメタマフ御心地アルベシ、コレヨリ費用モ多ク省キ、萬事ニ行キワタリテハ、年中ニ今マデノ勘定トハ、十萬石ヅヽノ違アルベシ、然レバ今ノ執政ノ御方ハ、國政ニ種々ノ工面ヲ運サンヨリハ、上ノ學問ヲ好ミタマフヤウニアルベキ工夫ヲ明ケ暮レ思案シ、種々ノ術ヲ以テ學問ヲ勸メラルベキコトナリ、コノ一ツ手段サヘデキレバ、國政ヲ執ツ行フニ苦勞ナク、サシサヽヘハ少モナキナリ、政務ニ預ル人々ノ苦勞ヲ甚輕ンズルノコトナリ、コレ源ヲ清スルシカタナリ、コレニコエタル療治ハアルマジキコト也、孔子ノ「聽レ訟吾猶レ人也、必也使レ無レ訟乎」トノ玉ヘルハ、人ハ訴訟ヲヨクキクトイフテ器量ジマンスルガ、ソレハ末ノコトナリ、ソノ事ハ人ニスグレタルコトナシ、人ナミナリ、タヾ吾政ヲ執リ行ハバ、訴訟ノナキヤウニスベシトノ事ナリ、本ヲ正シクスレバ自然ニ訴訟ハデキヌナリ、ソノゴトク國用モ始ヨリ費用ノデキヌヤウニスレバ、工面才覺モイラヌナリ、

上ノ費用莫大ニテハ、イツマデモ國用ハ不足スレバ、本ヲ正シタキコトナリ、本ハ人君ノヨク合點シ玉ヒテ儉ヲ守ルニアリ、サレドモ學問ニ入リ玉ハザレバ、儉道ヲノミコミ玉フコト深カラヌナリ、人臣コヽニ思慮ヲ運ラサバ、眞ノ大忠ト云ベシ

一　一國ノ君トナリ、一國ノ相トナルハ、天下億兆ノ人ノ內ニテ、限リアル尊キ人ニテ、萬民ニ尊敬セラレ榮華ヲ極ム何故ナレバ、ソノ職萬民ヲ安ジ治メ、萬民ヲ子ノ如ク思ヒ、民ニ父母タレバナリ、民之父母トイヘル四字ハ、人君卿相ハ常ニ念ンジテ忘ルマジキコトナリ、下位ニ居ル者ハ德アリ才アリ志アリテモ、ソノ位ヲ得ザレバ、德澤ヲ下ニ施スコトアタハズ、志ヲ抱テ空朽果ル最モ可レ惜、ソレラ思フトキハ、上位ニ居ル人ハ志ヲハゲマシテ怠ラズ、人ヲ撫育スベキコトナリ、又下位ノ人ニ恥ベキナリ、殷湯王ハ「萬方有レ罪、罪在二予一人一、予一人有レ罪、無レ以二爾萬方一」トノ玉フ、又孟子ニ、伊尹ハ天下ニ一人飢タル者アレバ、己コレヲ飢ガ如ト思フトアリ、前漢ノ嚴延年ハ河南郡ノ太守トナレリ、モト東海郡ノ人ナリ、刑罰ヲキビシクシテ民ヲ治メ甚酷烈ナリ、延年ガ母東海郡ヨリ河南ヘ來リテ見レバ、罪人ヲ道々ニツレテトホルヲ見テ、母大ニ驚キ、延年ヲ責テイヘルハ、ソノ方ハ幸ニ郡守トナルコトヲ得タレバ、仁愛ヲ以下ヲ治ベキコトナルニ、刑罰ヲ强ク用ヒテ威勢ヲ立ルハ、民ノ父母タルノ意ニテハナシトイヒテ、甚不興ニテ東海ニ反ル、後ニ延年上ヨリ罪ヲ得テ刑セラレタリ、因テ東海郡ニテハ延年ガ母ヲ賢知ノ人ナリト稱セリ、誠ニ延年ガ母ノ云ル如ク、上ニ立ツハ幸ナリ、コヽニテ

コノ仁愛行ハルレバ、民ノタメニナルコトヲ多クナシタキコトナリ、餘人ノ所レ不レ及也（本書ハ上ニ
某相公ニ」トアリ）

庚辰八月

相公此度御當職被レ爲レ蒙レ仰、御苦勞ニ奉レ存候、御國之儀者、困窮至極ト承候ヘバ、相公御歸國被レ成候而モ、被レ成方有ニ御座一間敷奉レ存候、今迄之樣成ル事共被レ成候テハ、何ツ迄モ困窮ハ止ミ不レ申次第ニ困窮ニ成候トモ、引返候事ハ難レ被レ成候半ト奉レ存候、段々之儀ハ不レ及ニ申上一、畢竟之所江戸二千貫目之御入用ヲ千貫目ヲ被レ成、此處ヲトクト御定メ被レ成、是ヨリ御國之經濟ヲ被レ成候樣ニ不レ被レ成候テハ幾重ニ智略ヲ御メグラシ被レ成候テモ決テ不レ參候事、目前誰ガ目ニモ見エ候事ニテ御座候、今迄ノ國政ヲ被レ成候御方、是ヲ殿リヲ付テ候事不レ被レ成候而、只江戸之間ヲ合セ候事計リヲ被レ成、下ヲ取リカスメ候事計リヲ被レ成候故、今ノ樣ニ大困窮ニ成リ候、御當職ノ初發ガ大事ニテ御座候、初ヲ仕損ジ被レ成候ヘバ、引返シガタキ物ニ御座候、時ガ大事ニテ御座候、時ヲ御ハヅシ被レ成候ヘバ、事成就不レ致候事ニ御座候、殊ニ只今ガ大事ニテ御座候、此時ヲ御失ヒ被レ成間敷候、「琴瑟不レ調、甚者必解、而更ニ張之一、乃可レ鼓也、爲レ政而不レ行、甚者必變、而更ニ化之一、乃可レ理也」ト有レ之候、全體ガ今迄トうらは

らニ引替リ不レ申候テハ治リ不レ申候、此場ガ難レ被レ成候ハヾ、御當職ハ御受被レ成間敷事ニ奉レ存候、御引受被レ成候ヘバ、此場ヲバ是非不レ被レ成候テハ不レ叶儀ニ御座候、江戸之殿リ甚ダ難レ被レ成事ニ御座候ヘドモ、ナリガタキ理ヲ申候ヘバ、幾等モ有レ之候テ、ナラヌ事ニ成リ申候、又ナル理ヲ申候ヘバ、幾等モナル理ガ有レ之候、ナルモ、ナラヌモ人之器量ニ有事ニ御座候、然レドモナラヌトイヒテ濟ヌ事ニテ御座候、不器用ナガラモ、是非ナル理ヲ考不レ申候テハ不レ叶事ニ御座候、國ノ安危、存亡、治亂、盛衰、榮辱、貧富、憂喜、壽夭、是非、善惡二樣ニ別レテ、一家中、一國中、二十五萬人ノ上ニカヽリ候事ニテ、相公御一人之御思慮ニ有レ之事ニ御座候、依而二月モ三月モ江戸ニ御逗留被レ成、上之思召之筋ニ叶ヒ玉ヒ、江戸之費用之減ズベキヲ減ジ、御濟ニ落付キ被レ成候程ニ被レ成候而、御歸國被レ成、御國政ニ御取リ掛リ不レ被レ成候テハ、何ツ迄モ同ジ體面ニテ、困窮彌益々、御辛勞モ彌益シ、御國益々危ク、臣民益々困ミ候、此通リニテハ相濟不レ申候事ヲ、其形ニ二三年御勤被レ成、ナラヌトアリテ御引込被レ成候半モ詰リ不レ申候、何ツ迄モナラヌ事ヲグズ〳〵被レ成候事ニテモ有二御座一間敷候、久々ニテ御歸役被レ成、兼而民望ヲ得テ被レ成二御座一候得バ、當分ハ百姓町人共御用金ヲ上ゲ可レ申候ヘドモ、御返濟滯リ候節ニ到リテハ、民望ヲ失ヒ可レ被レ成候、去年澤相公久々ニテ御歸國被レ成、澤相公ニモ前々ヨリ人望ヲ得テ被レ成二御座一候ヘバ、去年被二仰付一候御用金ハ出シ候處、御返濟滯リ申候故、町人百姓共大イニ望ヲ失ヒ、信ノ無キ御方ト申シ、是ヨリ人望モハナレ候ト風說ニ承リ候、

「民無レ信不レ立」ト論語ニ有レ之候、右之通ニ候ハヾ、澤相公ノ被ニ仰付一候事ハ、百姓町人此後ハ受申間敷候、依而此度又相公新御當職被ニ仰付一候ヘバ、本ヨリ人望ヲ得テ被レ成ニ御座一候ヘバ、朝相公ハ各別之御方ナレバ、信ハ御違ヒ被レ成間敷ト御用調達可レ仕候、然共本之殿リ之憶ナラザル事ニ御座候ヘバ、御返濟不レ滯候樣ニハ難レ被レ成可レ有ニ御座一奉レ存候、其節ニハ又信ヲ失ヒ、人望ハナレ可レ申候、事ハ今日ヨリ見エ候樣ニ乍レ憚奉レ存候、ケ樣ニ相公方入替リ〳〵信ヲ失ヒ候事ノミ被レ成候テハ、號令モ行ハレ間敷候ヘバ、亂之本ト奉レ存候、亂之本之御手傳ヲ被レ成候事、御賢慮難レ量奉レ存候、大臣者「以レ道事レ君、不可則止」ト論語ニ有レ之候、禮記ニ、「事レ君有レ犯而無レ隱」ト有レ之候、孝經ニ、「君子之事レ上也、進思レ盡レ忠、退思レ補レ過、將ニ順其美一、匡ニ救其惡一」ト有レ之候、大學ニ、「所レ惡ニ於下一、毋ニ以事一レ上」ト有レ之候、左傳ニ、「林父之事レ君也、進思レ盡レ忠、退思レ補レ過、社稷之衞也」ト有レ之候、又「事レ君者、從ニ其義一、不レ阿ニ其惑一」ト有レ之候、國語ニ、「夫成子道ニ前志一、以佐ニ先君一、道レ法而卒以レ政、可レ不レ謂レ文乎、夫宣子盡ニ諫於襄靈一、以レ諫取レ惡、不レ憚レ死進也、可レ不レ謂レ忠乎」ト有レ之、又「事レ君者、諫レ過、而賞レ善、薦レ可而替レ不、獻レ能而進レ賢、擇レ才而薦レ之、朝夕誦ニ善敗一而納レ之、道レ之以レ文、行レ之以レ順、勤レ之以レ力、致レ之以レ死、聽則進、不則退」ト有レ之候、孔子家語ニ、「有レ道順レ命、無レ道衡レ命、晏平仲之行也」ト有レ之候、大戴禮ニ、「臣事レ君、而不レ言ニ情於君一則不臣」ト有レ之、孟子ニ、「責ニ難於君一謂ニ之恭一、陳レ善閉レ邪謂ニ之敬一、吾君不レ能謂ニ之賊一」ト有レ之候、又「君子之事レ君也、務下引ニ其君一以當レ道志中於仁上而已」ト有レ之候、又「今之事レ君者、

曰、我能爲レ君辟ニ土地一、充ニ府庫一、今之所レ謂良臣、古之所レ謂民賊也」ト有レ之候、又「有ニ事レ君人者一、事ニ是君一則爲レ容悅者也、有下安ニ社稷一臣者上、以レ安ニ社稷一爲レ悅者也」ト有レ之、荀子ニ、「良農不下爲ニ水旱一不上レ耕、良賈不下爲ニ折閱一不上レ市、士君子不下爲ニ貧窮一怠中乎道上」ト有レ之、今相公上之御志格別ニ改給ヒ、江戶無益之費用ヲ悉ク省キ、士民ニ仁恩ヲ施シ、信ヲ民ニ失ハズ、今迄之御借用金之形付ヲ考ヘ被レ成、重テ下ニ御借用ヲ不レ被レ成、國中之賦稅ヲ利息ニ引カレ不レ申、全ク國用ニ被レ成候而、士民安堵之萬全之策ヲ獻ジ不レ被レ成、ヤハリ前轍ヲ御踏被レ成候半ハ、無下ニ口惜キ御事ニ奉レ存候、尤被ニ仰上一候事共モ可レ有ニ御座一候ヘドモ、孟子ニイヘル五十步百步グラヰノ事ニテハ、永々御困窮ハ止ミ申間敷候ヘバ、格別之御思慮ヲ御出シ被レ成度事ト奉レ存候、相公之可レ被ニ仰上一ハ、此時節ト奉レ存候間、蒙ニ御懇意一候故、恐多キ事共ニ御座候ヘドモ、不レ憚ニ愚意一申上候、頓首

丙戌十月　宇惠　拜

朝相公　執事

一　爲ニ人君一ハ大量ニ有度ト申儀ニ付テ、委曲御敎戒之處至極之儀致ニ感服一候、依猶拙者存寄之處申述候、學文無クシテ難レ成事ハ勿論之事ニ候得共、唐ト日本トハ人ノ情性强弱有レ之候、其上上古、中古、當世又違候

答、唐ト日本ト人之情性强弱有レ之候ト被レ仰候儀、何ヲ當テニ被レ仰候哉、世俗不學之人之口グセニ申候事ヲ尤ト思召候而被レ仰候ト奉レ存候、愚ハ性質魯鈍不才之身ニ候得共、幼年ヨリ書籍ヲ好ミ、和漢古今之書ドモ多ク見申候、十三經註疏四百卷、是ハ儒家根本之書ニテ御座候、新註共外ヲモツキ合セ、句ヲ切リ文字ヲ改メ、悉ク見終申候、史記百卅卷、前漢書百卷、後漢書百卷、其外歷代之史記、資治通鑑、宋元通鑑等迄モ見申候、文選六十卷、國語、孔子家語、荀子、大戴禮、老子、莊子、列子、管子、晏子、春秋呂覽、韓非子、淮南子、楊子法言等周、秦、漢之間書、及後世之書籍、明淸迄之書籍共ヲモ多ク見候ニ、情性强弱日本之今ト引クラベテ能合ヒ申候、少モ違ハ無二御座一候、日本之書モ日本書紀ヲ始、世々之記錄ヲ多ク見候、且愚ハ上總之民間ニ致二生長一候得バ、民間之情態モ本ヨリ存居候、東海道、東山道、五畿內等諸國ヲ致二歷順一候ヘバ、諸國之人情ヲモ氣ヲ付テ略致二聞見一候、江戶ニ住居仕候得バ、東西南北中國諸國之人ト致二出會一候、諸侯方、御旗本衆、諸家中、町人、醫者、出家、神主之類迄モ多ク交リ申候ニ、日本人之人情物態强弱、中華ト少モ替リ無二御座一候、又上古、中古、當世何方モ、人ト生候ニ差別ハ、無二御座一候、愚俗之申事ヲ尤ト思召、御取違御座候テハ、世子之御後見、御國之御政事ニ可レ被レ成事ヲ不レ被レ成、怠リニ御成候事モ有二御座一間敷物ニモ無二御座一奉レ存候間、和漢古今不二相替一段、不レ憚二愚意一申上候、雅量ニ被レ成二御座一候ヘバ、狂者之言ヲモ御納レ可レ被レ成ト狂言ヲ吐露イタシ候

一 譬バ伎藝ヲ學ビ候ニ、業ヲ隨分盡シ〳〵テ至リ至ル時、其理ヲ相傳スレバ、其儘其人得意シテ妙術之處ヘモ至リ申候、如レ此敎候事ハ古之事ニテ、當世ノ人中々左樣ニ不レ致二修行一候、依名人モ出兼候、業ヨリ入ル藝ハ、能所ニ至リテ至極之事ニ候ヘドモ、當世之人彌以學ビ兼候

答、前件之思召故、ケ樣ニ御志怠リ御座候、當世墮弱之者モ有レ之、精勤之者モ有レ之候、古モ同斷ニ御座候、今之墮弱之者ハ、古之墮弱之者ノ如ク、今之精勤之者ハ、古之精勤之者ニマケ不レ申候、又大臣國政ノ仕方ニテ、風俗ガ善クモ惡クモ成リ、墮弱之者之勤メ、精勤之者之墮弱ニ成候事ニテ御座候、國風墮弱ニテ致方之ナキト申ハ、下ニ居ル者之申習ニテ御座候、今相公國政ヲ御トリ被レ成候而、如レ斯被レ仰候ハヽ、古之政術ヲ深ク御信向ナク、古之事ガ今行ハルヽ物カイカヌ事ト、俗人之申事ヲ尤ト思召候故ト奉レ存候、日比之御學問ハ爰ニゾ御入用ニテ御座候、思召ニヨリテ輔導ト國政ト善惡之分レ大事之場ニテ御座候、惠ガ不才之身デモ書籍之力ヲカリテ、今日之上是ハカク有度事、彼ハカク有度事ヲ思ヒ付候事モ御座候、況ヤ相公之御聰明ニテ、學問ハ今日行フ爲之事ト思召候而、御教導ヲ御ハゲミ被レ成候ハヾ、莫大之功業ヲ御立可レ被レ成ニ、右之如ク御志怠リ、御ハゲミ無二御座一候而ハ、歎ケ敷事之第一ト奉レ存候、大臣之御心得違御座候ハ、小臣ノ心得違有レ之候トハ違ヒ・國ノ大事ニカヽリ候、俗料簡ヲ被レ成候テハ相濟不レ申候

一 マシテ人君ノ上ハ餘リニ御幼年ヨリ歡樂モ多ク、其上御發明ナル事、下品之者トハ格別ナル物ニ

候間、彌以學ニハ遠ク成行候、下品之人ニハ業ヨリ入ル者モ可レ有レ之候得共、中々人君ニハマレニ可レ有レ之候

答、カクアリテハ世子御成立善クハ御成不レ被レ成候、然時ハ行々御家中難儀、御國中困窮、國之危事ニ相成候間、輕キ者ノ輔導ニテハ不レ參候ニ付、世子之憚リ給フ大臣ヲ御後見ニ被ニ仰付一候、歡樂多キ物故、下ヲ忘給フ事ニ成リ候、御發明ヲ其儘ニ致候ヘバ邪智ニ成リ候、學ニハ遠ク成候物故、別而勧メヲ專トシ、惣而嚴ニ無レ之候而ハ流候物故、大臣ニ輔導ヲ命ゼラレ候、嚴師傅ト申候

世子之輔導ハ嚴ニ無レ之候而ハ不レ叶事古之教ニテ御座候、ソレヲ其レニテハ當世之風ニアハヌ野父ナル事、是ニハ上手功者ガ入ルナド、物ナレタル様ニ利口ヲ被レ仰候テハ尤之様ニ相見候得共、世子之害ニコソナレ、御益ニ成候事ハ無ニ御座一候、御身業ヲ御出精不レ被レ成シテ、御成就被レ成候事ハ決而無レ之事ニテ御座候、世ノ人君ニモ大傅ノ仕付ニテ、學問ニ深ク御志被レ成候御方御座候、屆カヌ事ハ猶多ク御座候得共、其通ニ計思召候而ハ、世子之御爲ニ相成不レ申候、古之教ニ寄ラズ、私智ヲ以被レ仰候故、御心得違御座候、輔儲篇ハ一向ニ御覽不レ被レ成候ト相見申候

一 其上端的御入用ニモ有レ之儀ニ候ヘバ、先ヅ大量之處ヲ随分申上、無レ左候而ハ御取扱之上不ニ相成一候ト申ス儀ナ、能ク御合點參候様ニ仕、其所ニ思召寄サヘ出來候ハヾ、大量之御穿鑿可レ被レ成候、其ノ時ニ大量ト申候ハ、御學問ニ御座候間、御ハナレ不レ被レ成様ニ御學ビ被レ成候様ニ申上度候、左候

時ハ一句ヲ御聞被レ成候而モ、右之大量ニ御引當テ、御詮議可レ被レ成候、左アラバ聖賢之語一句御聞被レ成候テモ、端的御用ニ相立可レ申候

答、俗人之承候ハヾ至極御尤、此上ハ無レ之候ト可レ申候得共、左ニテハ無ニ御座一候、左アレバ學問之外ニ、別ニ大量ト申事有レ之候、學問ハ大量之下ニテ御座候、學問ヲ如何ナル物ト被ニ思召一候哉、御學問ニテコソ大量ニ御成リ被レ成候、御學問ヲ御離レ被レ成候テハ、大量ニハ御成不レ被レ成候、學問ハ大量ニナリ候仕方ニテ御座候、其仕方ヲハナレ候而、何トテ大量ニ御成リ可レ被レ成候哉、何トテ左程マデ學問ヲバ御キラヒ被レ成候哉、カク申候ハヾ、學問御キラヒ被レ成候ニテハ無レ之候ト可レ被レ仰候ヘドモ、ヤハリ世上之學問ヲキラヒ候人之申言ニテ御座候、大量ハ御申上不レ被レ成候而モ、御學問被レ成候ヘバ、自然ニ大量ニ御成リ候、幼君ヘ學問ヲハナレテ、別ニ大量ト申事ヲ被ニ仰上一候テハ大ニ害ヲ生ジ候、御氣ニ入候侫人ヘ物ヲ多ク賜ハリ候モ、大量ト思召候、費之有レ之候事ドモヲイトヒ給ハズ、ソレモ大量ト思召候、大量〳〵ト御進メ被レ成候テハ、善キ大量ニ御導キ被レ成候ト思召候、而モイツカ惡キ大量ニ御流レ候物ニテ御座候、後之弊ヲ御考可レ被レ成候、御學問ヲ先キニ立テ、跡ヨリ御學問ニ付テ大量ヲ御進メ被レ成度奉レ存候、惡キ大量ハ以之外之事、善キ大量ハ御學問御增長之上ニテ無レ之候テハ、御合點ハ不レ參候、被ニ仰上一候御口上ニ而、大量之譯ヲ世子之御飲込被レ遊候樣ニト思召候ハヽ、無術ト申ニテ御座候、被ニ仰聞一候ニテ考候ニ、先書ニ申上候事

ハ、一向御承知不レ被レ成候ト相見申候、御智慧自慢ニテ被レ成二御座一候ヘバ、申上候テモ御用ニ被レ成マジク無益之事ニ奉レ存候得共、御輔導之上ニテハ一大事ニ御座候間、叉々不レ憚二愚意一申述候

一　先ヅ心之寄所ヲ先ニシテ御導不レ申候テハ、アマリ面白キ事ニハ無レ之候故、御合點ナシニハ御學問遠ク可二相成一候

答、御幼君ニハ年長ケ候者之樣ニハ喩シハ出來不レ申候、學問モ面白ク思召候事モ無レ之モノニ御座候ヘバ、只嚴密ニ押付テ御學問ヲ御進メ被レ成、諸侯之不レ被レ成シテ不レ叶事ト、無二是非一御取掛リ被レ成候樣ニ被レ成候ヨリ外無二御座一候、カク被レ成候ヘバ、御イヤナガラ不斷御カヽリ被レ成候ヘバ、イツシカ御學問ガ御クセニナリ、其内ニ自然ニ文義モ少々ヅヽ御濟メ、段々面白ク思召候樣ニ相成リ申候、無理ニ御學問ニヒタラセ申候ヨリ外無二御座一候、爰ガ大臣之場ニテ御座候、小臣之届キ不レ申事ニテ御座候

一　如レ此申候トテ、宋儒ノ心ヲ主トスルノ心ヲ正シテ國天下ニ及ナド申樣ナル儀ニテハ無レ之候、心ヲ主トシテ學ブ時ハ、私之了簡ニ落ハテバ、獨善之道ニ相成、釋氏ノ教ニ同ジク、木石之如ク、可二相成一候、左樣ニテハ無レ之候

答、此段ハ至極御尤ニ奉レ存候

一　乍レ爾思召寄所ナクシテ、只御學問被レ成候樣ニト計申候而ハ、學問遠ク成行可レ申候

答、何之御思慮モ入不レ申候、唯諸侯ハ御學問不レ被レ成候而ハ不ニ相濟一候、治國之事共ニ御座候ヘバ、御職分之業ト被ニ仰上一愚癡ニ御進メ被レ成、學者ヲ御前ヘ出シ候、御世話被レ成候ニテ相濟申候、敎侯上ハ學者ニ御任セ被レ成、相公ハ學者之世話被レ成候ガ相公之御大量ニテ、是ヨリ世子モ自然ニ御大量ニ御成リ被レ成候

一　人君ハ臣民ヲ御撫育被レ成候處ヲ以、億兆之人之上ニ立給ヒテ、誠ニ難レ有御身之上ニテ候、左候ヘバ御大量ヲ專ト被レ成、小仁ヲノミ仁ト不ニ思召一、仁モ大成ル御仁政之處ヲ御目ヲ被レ止、御行ヒ被レ成候樣ニ有ニ御座一度候、兎角小量ニ相成候故ニ、小キ御物數奇モ御好被レ成候、大量ニ候得バ、何事モ民ト共ニ御好被レ成候樣ニ可レ有レ之候、此所ヘ御心ヲ向ケ申度ト申事ニテ御座候

答、至極尤感心仕候、是モ學問之上ニ有レ之候ヘバ、御學問ト共ニ被ニ仰上一候ハヾ、別而能御合點可レ被レ成候、學問ハ此儀ヲ悉ク述候ニテ御座候

一　拙者儀歸役被ニ仰付一候、因而御敎戒忝愼而相守リ可レ申候、然シ至而大儀ニ候ヘバ、急ニ難レ成儀ト存候、惣而存ズル通リニ世間之事相成候ヘバ、德モ不德モ入不レ申候、中々不才之人難レ及候

答、如レ仰世間之事自由ニ相成候ヘバ、何之六ケ敷事モ無ニ御座一候ヘドモ、人心如レ面ト古人モ申候テ、一樣ナラザル事故難儀御座候、然共御難儀之筋早ク御形付不レ被レ成候テハ御難儀次第ニ重ナリ

申候、前書之一件甚六ヶ敷事ニ御座候ヘドモ、何レヘ御懸リ被レ成候テモ、六ヶ敷事ハ無レ限事共ニ御座候外之六ヶ敷事共ハ當分譯立候テモ、又跡ヨリ段々出來候間、御手段格別ナル事無ニ御座一候テハ、何年モ六ヶ敷事ハ止不レ申候、一件之事ハ甚六ヶ敷難レ成事御座候ヘドモ、譯立候ヘバ永々之六ヶ敷事ヲ是ニテ止メ申候、愚ハ唯此處計ヲ目當テ申候、御見合セ被レ成候而、年ヲ御積被レ成候事ニハ有ニ御座一間敷奉レ存候

一 君ヲ堯舜之如ク不レ致候ハヾ云云

答、被ニ仰下一候儀承知仕候、如レ仰多力ニ無ニ御座一候テハ、功業モ御成就難レ被レ成候、私モ微賤ナガラ寸忠ヲ存付候、是又猶多力ヲ不レ得シテハ不レ叶事ニ御座候、御身上逼迫御家中一國中困窮、此上之大難儀ハ無ニ御座一候、然レバ相公之御引返叶不レ被レ成、御手ニ終不レ申候ト被レ仰候而不ニ相濟一儀ニ奉レ存候、然共又御多力ニ無ニ御座一候テハ難レ被レ成奉レ存候

一 拙者儀元來泉石之癖有レ之候間、譲リ候人サヘ御座候ハヾ、片時モ早ク譲リ、閑暇ニ老身ヲ養申度儀願ニテ候間、其段ハ氣遣被レ下間敷候、名聞利祿ヲ求申所存ハ毛頭無レ之候

答、此儀ハ不レ被ニ仰下一候テモ、兼而御志ハ推察仕候、其レ故ニ愚意ヲ不レ憚申上候、御志ヲ不レ存候テハ、ケ様ニ不屆千萬成ル恐多キ事ハ難ニ申上一候、何事モ國之爲ト一途ニ奉レ存候計ニテ、失禮ヲ不レ顧候、空談ニ理非ヲ爭候心ニテハ毛頭無レ之候、但シ名聞利祿ヲ御求不レ被レ成候御心底ハ毛頭無ニ

御座一候段ハ推察仕候ヘドモ、爰ニ議論御座候、譬バ儉約ト吝嗇ト似テ天地之違ニ御座候、儉約ハ美德、吝嗇ハ惡德ニ而御座候、然レ共行フ所同樣ニ相見エ、何レモ身ヲ詰メ費ヲ致サズ財寶ヲ蓄ヘ候、是ヲ見分ルニハ、施ト不レ施候トニテ分レ候、平生シワク見エ候ヘドモ、親類故舊ナドノ貧困ナルヲバスカト物ヲ出シテ贍シ候事ヲ致候得バ、儉ニテ御座候、仁者ニテ御座候、君子ニテ御座候、人之難儀ヲ見テモ救ハズ、身一分之勝手ノミヲシテ物ヲ出サヌ者ナレバ、吝嗇ニテ御座候、不仁者ニテ御座候、小人ニテ御座候、行フ上ニテ分レ候、今相公之御身モ御心中ニハ名聞利祿之御求無二御座一候テモ、行ヒニアラハレ不レ申候テハ、名聞利祿之御求無レ之トハ難レ申候、然ラバ今相公之御身之上ニテ何ヲ專一ニ可レ被レ成事ト申候半ニ、侯ヲ御喩シ被レ成候テ江戸之費用ヲ御省キ被レ成候ガ經濟之第一ニテ御座候、此處譯立不レ申候テハ、御政務萬事埒明不レ申候、名聞利祿ヲ求ル人ハ、侯之御意ニ少シモ背カズ、費用ヲ御心マヽニ運送シ、家中ヲ詰メ、國民ヲ聚斂シ、國之困窮ニモ、侯之御恥辱ニモカマハズ、唯我身之爲ヲ營候、今相公前轍ヲ御フミ被レ成候ハヾ、御心ハトモアレ、行ヒニ相違アレバ、ヤハリ名聞利祿之人ニテ御座候、此處能々御辨別被レ成度奉レ存候、相公之一大事ハ此處ニテ御座候、御當職一ト通リ之相知候、御勤方ハ、誰ガ成リ候而モ勤マリ申候、器量ハ入不レ申候、大事之場ヲ被レ成候ニテ、餘人之不レ及、此位ハ此人ナラデハト渴仰仕候外之事ハ、如何樣ニ御粉骨被レ成候テモ、皆水之沫ニテ跡之御益ハ無二御座一候、惣而昨日之スル事ハ今日之益ニナリ、今

日之事ハ明日之益ニ成候樣ニ有ニ御座一度候處、昨日之事ハ今日之費ニナリ、今日之事ハ明日之害ニ成候事ノミノ樣ニ、舊來之御政事相見エ申候、相公之御當職ノ前傍見被レ成候時ハ、御政事カクハ有間敷事ト被レ仰候事共モ御座候由、依而御當職ニ御成リ候ヘバ、前弊ハ改マリ可レ申ト人々相公ヲ倚賴イタシ候、然ルニ前弊改マリ不レ申候テハ、人望ヲ失ヒ可レ被レ成ト奉レ存候、憲モ寸志ヲ抱候テ上言仕度事共書集メ置申候、相公之思召立被レ成候ハヾ、萬一之御助成ニモ相成可レ申候、相公ハ國之大臣、侯ニモ甚憚ラセ給ヒ候、憲モ先王之道之端ヲモ學候ヘバ、惡敷モ被ニ思召一間敷奉レ存候、關相公ニモ兼而思召御座候樣ニ見受申候、是モ多力ヲ御待被レ成候ニテ可レ有ニ御座一候、齋藤葛西二大夫モ國事ニ御心ヲ被レ惱候樣ニ相見エ申候、脇坂君ニモ勿論ニ奉レ存候、然レ共相公國計ヲ專ラニ被レ成候ヘバ、相公ヨリ御發起不レ被レ成候テハ、事出來申間敷奉レ存候、相公ニモ多力無ニ御座一候テハ難レ被レ成、又多力モ相公ヨリ御發シ不レ被レ成候テハ成リ不レ申候、相公多力被ニ仰上一候而モ、憲ガ治國之根本ヨリ申上ルニテ無レ之而ハ、永々深ク御喩シ被レ成候事有ニ御座一間敷候ヘバ、頓而前へ返リ可レ申候、憲ガ申上候事ハ學問之上ニテ御座候間、各樣ヨリハ難レ被ニ仰上一候、諸方悳持ニテ無レ之候而ハ、何レモ參リ申間敷候、カク有レ之候ハバ、侯ハ御性質御聰明御仁心ニマシマセバ、必御喩リ可レ被レ成事ト奉レ存候、此事至而六ケ敷候ヘバ、難レ被レ成事ト可レ被ニ思召一候得共、是ヲ不レ被レ成候ヘバ、御國ハ治リ不レ申候、亂國ニ相成候、頓而百姓共郡々ヨリ旗ヲ立御城下へ押寄セ可レ申候、諸

國ヘ聞エ、御外聞實義、此上之御恥辱ハ無ニ御座一候、其時ニ至リ候而ハ、御後悔被レ成候テモ及不レ申候間、甚ダ苦キ場ヲ被レ成、今年被ニ仰上一候樣ニ被レ成度奉レ存候、ナラヌ事ヲ御進メ申候樣ニ御座候ヘドモ、是ヨリ外ニ上策ハ有ニ御座一間敷奉レ存候、御讓リ被レ成候テ可レ然御方御座候ハヾ、御讓リ被レ成候モ可レ然奉レ存候ヘドモ、今迄之相公方段々手段御盡キ、貴相公ニ止リ申候、泉石之間ニ被レ成ニ御座一候テモ、奮激シテ御出可レ被レ成時節ト奉レ存候、惠平生心中ニ大願ヲ起シ、一家中一國中數十萬人困窮ニ及ビ御身上年々逼迫スルヲ聞見シテ、徒ラニ居ルハ仁者ニ非ズト存ジ、學中ニ今日入用之治國之道ハ幾等モアレバ、侯ニ見エテ一タビ利害ヲ上言セント欲スレドモ、薦達スル人ヲ得ザレバ、咫尺之間ニテ千里ヨリ遠シ、一見セバ種々鬱結シテアル事共ヲ解シ、目前ニ見テ居ルハ心苦敷事哉ト、朝暮念頭ニ有レ之候間、乍ニ不遜一愚存申上候、惠徂徠ニ謁シ候時十七歲以後有德院樣以來御三代四十年之移リ行ヲ目ニ見來リ候、御家ヘ罷出候而二十年、江戶ハ目前之事、御國衆ニ平生出合候ヘバ、御國之樣子モ略承知仕候、ケ樣ニ自慢ラシキ事申上間敷事ハ候ヘドモ、學者ハ古ノ事ヲ知レドモ當世之事ニハ疎キモノナドヽ、御俗見御座候ヘバ態ト申上候、徂徠學流ハ治國ヲ至トイタシ、人情渡リ候間、當世ニ甚氣ヲ付申候事ニ御座候、古書ヲ見候ニモ治國ヨリ目ヲ附申候、學問ハ君臣之間、政事之上之事ニテ御座候、頓首再拜

丁亥正月　　宇　惠　上

愚問　　　　　　　　大野舍人

一　執政ノ職ハ、其器ニアタラザレバ其任ヲ不レ受事ハ勿論ノコトニ候、此所ニ和漢ノ違有テ、漢土ニテハ、我其器ニアタラズト知レバ、身ヲ退キ位ヲ辭シテ農ニ歸スルコト見エタリ、日本ニテハ、其家譜代ノ士ニシテ、父祖代々君恩ヲ得來ル身故、其職ニアタラズト知リテ、二三應謙退スト雖ドモ、强テ命ゼラルヽ時ハ、不レ及ニ是非一シテ其職ニ備リ政ヲ執候時元來不肖ニシテ、其器ニアタラザレバ、其席ヲ汚スノミニテ、其人ニアラズシテ其位ニ居ルコトヲ戒メ玉フ聖語ニモ戻ルコト如何心得可レ然哉

謹對　　　　　　　　宇惠

一　其器ニ當ラズ候ハヾ、何職ニ而モ其任ヲ受間敷事、執政之職ニ限不レ申候、然バ執政之職ハ極官ニ候ヘバ、別而之事ト奉レ存候、然ルニ當世身之分量ヲ不レ顧上位ニ進ミ、富貴ヲ極度ト計存候ハ、一統之俗情ニテ御座候和漢古今共ニ同然ニ御座候、然ルニ古聖賢ノ道ニ御心付、御身ヲ顧被レ成候テ被ニ仰聞一候儀感心仕候、懇切之御尋ニ御座候ヘバ、愚意ヲ包候モ不情ニ候、打明候ヘバ憚多事共ニ御座候、然共御尋ヲ可ニ默止一事ニ無ニ御座一候ヘバ、愚意之及候處ヲ相述申候、先ヅ封建之世ト郡縣之世ト、世之風義替候事徂徠答問書ニ辨ジ有レ之候、御熟覽可レ被レ成候、封建之世ハ士大夫世祿ニテ御座候、郡縣之

世ハ一代切ニテ農ニ歸候、我邦今之世ニテ御座候夏殷周三代ノ如ク士大夫世祿ニテ御座候、三代ハ位ヲ辭シ候トテ農ニ歸ルト申事無レ之候、我邦今ノ世モ同然ニ御座候、古ハ位ヲ辭スレバ必農ニ歸ト計リ思召候ハヽ、御心得違ニ御座候、時代制度ノ替リヲ御心付不レ被レ成候故ニテ御座候、扨人ニハ其身之器量ニ得手不得手有レ之候、不得手成ル職ハ、大職ニテモ不レ受、得手ト存候ハヾ、卑職ニテモ勤可レ申事ニ御座候ヘバ、大職ヲ辭シ卑職ヲ勤メ、又ハ大職ヨリ卑職ニナラレヌ事候ハバ、病ト稱シ引込居候カ、位ヲ辭スルニテ御座候、身ノ不レ及候ヲ實ニ知ナガラ勤候ハ、塞ニ賢者之路一ト申候テ、進ムベキ賢者ヲ邪魔シテ進マセズ、政ニ益ナク不忠ニテ御座候、日本ニテハ、其家譜代之士ニテ、父祖代々君恩ヲ得來ル身故、其職ニ當ラズトイヘドモ辭退ヲ不レ用、强而命ゼラル、時ハ、君命不レ及ニ是非一其職ニ當リ、政ヲ執候ト被レ仰候ハヽ、世ノ執政者モ多クイハレ候事ニ御座候ヘドモ、其レハ遁辭ニテ御座候、日本ニテモ實ニ身ヲ引ント欲シテナラヌ事ハ無レ之候、遁辭ニテ無レ之、實ニ身ノ分量ニ過候ト思召候ハヾ、相公ヨリ勝レタル人ヲ御進メ候テ、御讓リ可レ被レ成事ニ御座候、又勤マルト思召候テモ、謙退ニテ御申被レ成候ハヾ、其時之禮辭ノミニテ終リ候テ、論難ニハ及申間敷事御座候、論難ニ及候而ハ實事ニ相成候實事ニ及候ハヾ、前ノ通リ卑職ヲ勤ムル歟、病ト稱シテ引込候歟ニ可レ有ニ御座一候、相公ハ御性質御發明ニテ、御器量御座候ヘバ、政事ノ上ハ御自負ニ御座候半ニ、カク被ニ仰聞一候ハ、從來御學問之立テ、事實ヲ捨テ空論ヲ御好被レ成候習弊ト奉レ存候、相公ニ不レ限如何之事ニ御座

候哉、世之卿大夫事務ヲ捨テ、空論計ヲ被ㇾ申候、先能御合點可ㇾ被ㇾ成候、不肖ノ御身ト思召、御引込被ㇾ成度思召候テモ、引込ミ候時勢ニテハ無㆓御座㆒候、御尋ニ付御引込被ㇾ成候ガ道ニ叶候ト御答申候テモ、尤ニ思召候而モ御引込被ㇾ成候事ハ成リ申間敷候、然レバ皆空論ヲ被ㇾ成候ト申ニテ御座候、御文言之内二三應謙退スト御座候、謙退トハ、ナル事ヲナラヌト禮ノ上ニテヘリクダリ候事ニテ御座候、コヽノ御文言ニハ叶不ㇾ申候文字ニテ御座候、御問之内ニ御心得違共御座候間、若シハケ様ニモ御認被ㇾ成候テ可ㇾ然歟ト乍ㇾ憚御文言ヲ改申候、執政之職ハ政ノ本ニテ、上ハ君ヲ輔佐シ、下ハ諸臣ヲ統べ國民ヲ安ズル事ニ候ヘバ、其器ニ當リ候人ニテ無ㇾ之候テハ、大任ヲ受申間敷事ニ候、然ルニ不肖ノ身ニテ執政之列ニ加ヘラレ、再三辭退仕候ヘドモ强而命ゼラレ、君命不ㇾ及㆓是非㆒候、不德不才ニテ誠ニ尸位素餐ニ候ヘバ、聖言ニモ背キ安心不ㇾ致候、今日時勢之上如何心得可ㇾ然哉

右之通ニ候ハヾ、御文言之内ノ非難モ先ヅ有ㇾ之間敷奉ㇾ存候、扨被㆓仰聞㆒候主意ハ、不才ニテ高位ニ居ルハ迷惑千萬、然レ共君命ナレバ是非ナシ、是非ナキトテ高位ニ居レバ、不才ニテハ高位ニ居ル間敷事ト申ス聖言ノ意ニ背ク、此境ハ如何セントノ御尋ト奉ㇾ存候、然レバ兩方ニ背キ不ㇾ申候樣ニ、御料簡入用之處ニテ御座候、其レハ執政之職ニ御備リ被ㇾ成候ヘバ。君意ニ背キ不ㇾ申候、又其職ヲ能ク御勤被ㇾ成候ヘバ聖言ニ背キ不ㇾ申候、其職ヲ能ク御勤被ㇾ成度思召候而モ、不才之身ニ應ゼヌコトト思召候ハヾ、今日ヨリ御出精被ㇾ成候テ、才德之應ズル樣ニ御上達被ㇾ成候御工夫可ㇾ被ㇾ成候、御心之向

ケ様ニテ隨分御上達ハ被レ成候、先ヅ下聞ヲ不レ恥、此度不佞ナドヘモ御尋被レ成候ガ、御上達之基ニテ御座候、御性質勝レテ御發明ニテ御座候ヘドモ、御謙退ニ而不肖ノ身位ヲ汚スナド被レ仰候テモ、ヤハリ先ヅ不肖ノ身ニ御成リ可レ被レ成候、身不肖ト思召候ヲ、外ヨリ料簡ヲ御借リ可レ被レ成候、私智ヲ御用ヒ被レ成間敷候、料簡ヲ御借リ被レ成候ニハ、御學問被レ成候テ、聖賢ノ料簡ヲ御借リ可レ被レ成候、治國之道古聖賢説盡シ被レ置候テ、今日之用ニ少モ不足無レ之候、聖賢之語御濟兼被レ成候ハヾ、學者共ヘ御問可レ被レ成候、多ク御問被レ成候内ニハ、漸々ニ御自身ニ濟候樣ニ相成候物ニ御座候、學問ハ御身ノ爲ニ被レ成候トハ被ニ思召一間敷候、君之爲ニスルト可レ被ニ思召一候、大ニ御骨折成事ニ御座候ヘドモ、大任ヲ命ゼラレ候君恩ノ重キト、聖言ニ背キ候ヲ恐レ被レ成候ト、此二ツヲ實ニ大事ト思召候ハヾ、御出精被レ成候テモ、學問ノ被レ成方ニヨリテズカ〲御上達被レ成候ト、縮ミテ御進ミ不レ被レ成候トノ次第ニ御座候、此儀ハ難レ盡ニ筆紙一候、唯答問書平日傍ヲ離ズ、幾遍モ〱御覽可レ被レ成候、遍ヲ御重ネ被レ成候程、次第ニ御心付被レ成候事共多ク相成候テ、外之書ヲ御覽被レ成候ニモ益ニ成リ、從來之惑ヲ除キ候事夥敷御座候、第一經濟之心得學問之仕樣、相公ヘ御相應之書是ニ如ハ無ニ御座一候、一條〱皆惑ヲ解キ、智見ヲ發クニ候事ニ御座候ヘバ、一行〱ヅヽ、文言ニ細カニ御心ヲ付、能ク御濟シ御覽可レ被レ成候、假名物ニテ濟ト被ニ思召一間敷候、一句一字御心ニ落不レ申候處ハ御案ジ付ケ、或ハ御問詰メ、サツバリト濟候樣ニ御覽可レ被レ成候、大意ヲ知レバ能キト計御心得被レ成候テ

ハ得益少ク候、一句一字之間ニ意味之有レ之事共御座候、以上

戊子之秋

天下之大事トイフハ、國ヲ治ムル事ナリ、天下中ニ大事〱トイフ事幾等モアレド、其大事〱中之最第一之大事ナリ、此最第一之大事ヲ御身ニ引受給フハ諸侯也、日本國中三百人ニ滿ズ、三百諸侯之仁不仁明不明ニテ、今日直ニ其國〱之盛衰、治亂、壽夭、貧富、憂樂分ル丶也、扨其諸侯ヲ輔佐スルハ執政也、上ハ君ヲ輔佐シ、下ハ一家中一國中ヲ統べ治ム、其任至而重キ事ナリ、執政ノ人ハ諸侯ニ一兩人ナルモアリ、三四人ナルモアリ、大小ヲ平シテ一侯ニ三人ト積レバ、三百諸侯ノ執政ハ九百人ナリ、千人ニ滿ズ、此九百人ニテ日本國中幾億萬人ヲ治ム、實ニ貴キ人ナリ、外ニ高位ノ人、俸祿多キ人幾千人アリテモ、執政ナラザレバ政令ヲ行フ事ナラズ、善惡トモニ國中へ及ボス事アタハズ、皆虛位ナリ、佛神ノ罰利生ヲトカイヘドモ、目ニ見エヌ事ニテ信驗ナシ、世ヲ救ケトテ彌陀之四十八願、觀音ノ餘サズ漏サズノ誓ヒナド、イカメシク云ヒタル計リニテ、普ク及ビタル事見エズ、的面ニ天下之人ヲ一人モ餘サズ、罰利生ヲ見スルハ執政ナリ、然レバ佛神ヨリモ實ニ尊シ、故ニ聖人ノ道ハ天下ヲ治ル道ニテ、天子諸侯執政ノ上ヲ專ニ說タルナリ、天下之教ハ是ヨリ出ル、五倫之道、仁義、禮讓、孝弟、忠信、恩惠、刑罰是ヨリ出デ、人一日モカグコトナラズ、教ニ順ヘバ福ヲ得、教ニ背ケバ禍ヲ得、是コソ上下普クニ及ビテ一人モ餘サズトイフベシ、執政職ハ自家之事ニアラズ、君ノ御名

代ヲ勤ルナリ、政令ハ皆君道ヲ以テ下ヘ傳ヘ行フ也、然レバ人並ミ〳〵ノ料簡ニテハナラズ、拔群格別ナル處無㆑之候テハ國治ラズ、害ヲナス事多キ也、害ヲナサントニハ非レドモ、智狹ク心附ヌ事アル時ハ下鬱シ、自然ニ害ヲ生ズルナリ、依テ公ケニ正シク、虛㆑己人ニ問事ヲ好ミ、學問ニ志シ、師ヲ尊敬シ、賢者ヲ禮待シ、以㆑貴下㆑賤、惑ヲ解キ、非ヲ悔イ、過ヲ改メ、諫ヲ求メ、諫ヲ納レ、謙讓敬愼ノ心得、君子小人之辨、君道臣道ノ大體、凡ソ政事ニ益有ン事ヲ日夜ニ求ムベキ事ナリ、尤其人惡心ハナク、善心ニテ上ヲ大切ニシ、下ヲ哀憐シ、國事ヲ苦ニシ勤トイヘドモ、自己之發明ヲ賴ミ、私智ヲ以テ一大事之政務ヲ取行ントシ、虛心ナクバ何ゾ治道ヲ誤ラザル事ヲ得ンヤ、古ノ賢相ハ爰ノ界ヲ能會得シタルナリ、今相公執政之列ニ備リ御座候テ、九百人中之一人也、然バ古之道ニ御心ヲ寄セ俗情ヲ御離レ被㆑成度事也、重キ處ハ右ニ述候事ドモ也、先月憲相公ニ岩淵夜話ヲ進ム、此內ニ相公之御心得被㆑成度事ト心附タル一段アリシ、御政事ニ益アリ、相公爰ニ御心附被㆑成候哉、憲ガ心附候處ト、相公ノ御心附ト、何レ之條ニテ可㆑有哉奉㆑尋候處、兩月ニ及ベドモ御挨拶ナシ、古之賢相ハケ樣成ル事ハ幸ト存ジ、貴ヲ忘レテ早速草廬之人ヘモ過訪シテ問難スルナリ、古計リニアラズ、今ニテモ志アル人ニハ有事ナリ、肥後侯ノ今ノ執政堀平太左衛門ト申人ノ事ヲ傳聞ニ、弊政ヲ取直シ、一家中一國中思ヒ付器量勝レタル人ナリ、然ルニ料簡有人ト聞ケバ、心ヲ虛ニシテ議論ヲ聞キ、學者ヲ尊敬シ、駕ヲ抂ゲ尋問テ禮待厚ク政事ノ益ヲ求テ寢食ヲ忘ル、云ヘリ、徒然草ニ、人アマタ有ル中

ニアル者マスホノ薄、マソホノ薄ナドイフ事アリ、ワタノベノ此事ヲ傳ヘシリタリト語リケレバ、登蓮法師其座ニ侍リケルガ、聞テ雨ノ降ルニミノカサヤアル、カシ給ヒ、カノ薄ノ事ナラビニワタノベノ聖ノガリ尋マハラント云ヒケルヲ、アマリニモノサワガシ、雨ヤミテコソト人ノ云カクレバ、無下ノ事ヲモ仰ラルヽ物カナ、人ノ命ハ雨ノ時間ヲ待物カハ、我モ死、聖モウセナバ、尋聞テンヤトテ走リ出テ、行ツヽ習傳ヘニケリト申傳タルコソ、ユヽシク有難フ覺ユル、敏キ時ハ則功アリトゾ論語トイフ文ニモ侍ルナリ、此薄ヲイブカシク思ヒケル樣ニ、一大事因緣ヲゾ思フベカリケルトアリ、相公ニモ御政事ノ益ヲ求メ、タヾカクコソ思召タケレ、憲ガ岩淵夜話ヲ進メルハ、相公ノ御身一ツノ上ニカカリタル事ニアラズ。當時御政事之御心掛ニ、此內ニ一ツ御心得アリタキコトト思ヒ付タル事アル故ニ寸志ヲ述ベタリ、相公之病ニ中ル事ト憲ハ存付タル故也、然ルニ二月ヲ經レドモ御挨拶ナキハイカニゾヤ、尤相公ハ御才智拔羣ニ御座候ヘバ、憲等ガ申ス腐儒ノ言取ニ足ラズトオカシク思召シナレド、「詢ニ于蒭蕘ニ」ト古人イヘリ、智者モ千慮ニ一失、愚者モ千慮ニ一得トモイヘリ、孔子ノ大舜ヲ贊歎シ玉ヒシニモ、「舜其大智歟、舜好レ問」トノ玉ヘリ、舜ハ聖王ナリ、聖王ノ自己ノ智ヲ稱シ玉ハズシテ、好レ問ヲ稱歎シ玉ヘリ、是則聖王ノ聖王タル所以也、去歲ヨリ講席ニ御出有リシガ、當春西城御修復御手傳之命ヲ藩主爲レ蒙給ヒシヨリ、相公總奉行ヲ命ゼラレ、其レヨリ休ヌ、是學問ヲ外之事ト思召候故ナリ、東照宮大坂御陣ヘ林道春ヲ召連給ヒ少シ御透間ノアルトキハ道春ニ武經七書ノ講釋ヲ御聽給

ヒシト舊記ニ有レ之、東照宮ハ御小身ヨリ起リテ、天下ヲ取給ヒタル事ナレバ、御智慧タクマシキコトハ不レ及レ申、然ルニ御陣中ニテ忩劇ノ中ニテモ、カク講釋ヲ御聽有シハ、自己ノ智慧ニハ限リアル事ヲ思召ニテ、陣中ナレバ七書ノ中ニ思召付キ候コトアランカト思召テノコトナルベシ、英雄ノ君ノ思召ハ格別ナリ、相公ノ思召ハ此大事ノ命ヲ蒙リナガラ、書籍ニ心ヲ寄セ、大事ヲ疎ソカニ存ズル樣ニ、人ニオモハレテハ如何ト思召候テ御止メ候ト相見エタリ、是大量ト申ガタシ、善事ナラバ誰ニ憚ルベキ、下々ニテモ忙シキ中ニモ書籍ヲ捨ヌ者アラバ、賞セラルベキ事也、書籍ヲ御覽アレバ、今日ノ御心得幾等モアル也、人見ザル故ニ今日ノ上ニ暗ク、功ヲ立ル事ナラズ、學問ヲ外ノ事ト御心得被レ成、自己ノ智ヲ是ト御賴被レ成候半ハ、執政職ニオイテ以之外之事也、御心得違多キナリ、外ニ證ヲ取ニ及バズ、相公之御身ノ上ニテ申サンニ先年御指物ニシヤレ頭ヲ染サセテ御所持ナリ、シヤレ頭ヲ御付被レ成候ハ、軍ニ臨ンデ一足モ引ズ、死ヲ顧ズ、卑怯ノナキコトヲ示スノ意ナルベシ、アツパレ潔キ事ト人皆感ズベシ、然レドモ是レ匹夫ノ勇ナリ、大將タル人ハ進ムベキ時ハ進、退クベキ時ハ退ク一軍ノ命大將ノ指揮ニ有テ、可レ退時退ザルハ眞勇ニアラズ、可レ退時退キ、時ニシヤレ頭之指物濟ヌ物ナリ、又始陣列之時ニ、人見テ悅ブ者有マジ、イマ〳〵敷覺ユベシ、先ヅ不吉敗軍ノ相ナリ、君前モスマヌ者ナリ、是レ小勇ニ潔ヲ上モナキコト丶御心得、大事ヲ忘却被レ成候ナリ、此差物ヲ見テ料簡アル者ハ嘲ルベシ、是レ人ニ御心之程ヲ見ラル丶ナリ、山鹿流ノ軍學ヲ被レ成候由ニ候ヘドモ、山鹿流ニ善キ處モアルベシ、又惡キ所モ

アルベシ、其悪敷處ヲ是ト被㆑成候處ヨリ、誤ラレ候事モ有ベシ、又駿河ノ白いんトヤランイヘル者ヲ御信向ナレバ、是等ガ何ヲカ申タル事ヲ是ト御心得被㆑成、是等ヨリ右之御趣向思ヒ付被㆑成候ニテモアルベシ、又先年御國御勝手向ヲ被㆓仰付㆒候ニ付、江戶ヘ御出被㆑成候、其節人之不佞ヘ申候ハ、此度大野公御勝手向被㆓仰付㆒候、御發明成ル御方ニ御座候ヘバ是ヨリ御勝手モ引直リ可㆑申ト申候間、不佞答候ニ、大野公御發明ニテ、丹誠ヲ御凝シ被㆑成候ハヾ、定テ御勝手引直リ可㆑申候、然レドモ不佞存候ニハ、事遂ゲ申マジク候、何トナレバ御勝手ヲ引直シ候ニハ、先ヅ上之御心ヲ定メ、江戶之費用ヲ減ジ不㆑申候テハ、御國ニテ如何程ニ丹誠ヲ御凝シ被㆑成候テモ屆ザル事ニ候、大事之職ヲ命ゼラレ候ヘバ、上ニモ御信向ト相見候ヘバ、存寄ヲ御申上被㆑成候半ニ、御聽濟ハ可㆑有事也、然ルニ諸大臣方惣而下ニ對シテハ種々之事共ヲ行ハレ候ヘドモ、上之御心ヲ憚ニ定メ江戶之費用ヲ減ズル事ハ不㆓相成㆒候、此事成不㆑申候テハ、經濟ハ遂ゲ不㆑申候、此度大野公此場ニ御心付被㆑成候哉、無㆓心元㆒候、此場ヨリ御始被㆑成候ハヾ、事成就可㆑致候、此場ヲハヅレ候テハ、御國ニテ幾重ニ工夫ヲ御凝シ被㆑成候テモ、皆水之沫ニテ候、此儀ハ御勝手向ヘ御掛リ候方ハ、目前知レ候事ニ候間、必申上ラレ候半ハ必定ニ候、然レドモ此場ヲ憚ニ被㆑成、跡ニ而變ジ不㆑申候樣ニ不㆑被㆑成候テハ不㆓相成㆒事ニ候、不佞ガ志候處ハ唯此事ニ候ヘバ、一言申度事候ヘドモ、大野公智慧タクマシク、人言ヲ賴候御方ニテ無㆑之、且ツ江戶ヘ御出候テモ一度モ不㆑被㆑召、御見舞ニモ不㆑預、是レ不佞ナドハ淺ハカニ思召候處相見候故、用ヒラレ

ヌ處ヘ此方ヨリ强テ申出候テハ嘲ラレ、却而恥辱ヲ招候間、乍二殘念一差控ルナリト相公ヲ譏リ候、又其節相公之政令ヲ御出シ被ㇾ成候ヲ拜見セシニ、其中ニ一家中御儉約ニ付、人々師ヘノ禮物モ輕ク可ㇾ致由之一ケ條有リ、師ハ古ヘ君、父、師ト三ツヲ同樣ノ恩ニシテ、至而尊重スル事ナリ、然ルヲ師ノ禮ヲ麁末ニセヨト政令アルハ無道ヲ下ニ敎ヒナリ、如何ニ儉約ヲ專ニ被ㇾ成樣トテ、無道ヲ下ニ敎ルヤウヤアルベキ、是ヲ推テ此節之事故、父ヲモ君ヲモ麁末ニシテモ不ㇾ苦トアルニ當ナリ、此外ニモ瑣細ナル政令アリキ、忘却セリ、政令ハ大事ニテ、一國ノ人心ヲ留而見且ツ行ナリ、然ルニ無道ノ政令アリテハ治ルベキ樣ナシ、御儉約之節ナリトモ、師ヘノ禮物ハ人々ノ心得ニ可ㇾ有事トアラバ、道ヲ重ンジ被ㇾ成候政令ト、心アル人ハ仰ギ尊ムベシ、左モ無ㇾ之バ政令ナキガ能キナリ、政令ニ此條ナクテ不ㇾ叶事ナシ、私智ヲ御用ヒ人ニ問事ナク、御不學故ケ樣ナル御誤モアルナリ、其節其國ヨリ參候人之咄ヲ承候ヘバ、相公ハ丹誠ヲ御凝シ、晝夜寢食ヲ忘レテ御勝手向之御工夫被ㇾ成候由、然ル共事不ㇾ成、尤其歲前年ニ無ㇾ之凶年不熟ナレバ、如何トモ被ㇾ成方アルマジ、然共江戶之殿リサヘキマリ候ヘバナラヌ事ハナシ、前年ニ無ㇾ之豐年成リトモ、江戶之殿リ立タザル內ハ、幾重之御手段ニテモ不ㇾ參事ナリ、荀子ニ「南方有ㇾ鳥焉、名曰二蒙鳩一、以ㇾ羽爲ㇾ巢、而編ㇾ之以ㇾ髮、繫二之葦苕一、風至苕折、卵破子死、巢非ㇾ不ㇾ完也、所ㇾ繫者然也」トアリ、相公之謂也、果シテ事不ㇾ遂相公廢セラル、然ル時ハ御閑暇ニナレバ、是ヨリ學問ヲ御始被ㇾ成候樣桃源藏森文四郎ナド進ムレドモ、今學問ヲスルハ歸役ヲ願フ

様ニテ見テ苦シト思召テカ、ヤハリ小潔ヲ御守リ、手前ヲタワケト上ニテ思召テ廢セラル、事ナレバ、上之意ニ叶フテタワケニナリテ居ルガ善キ事ナリ、學問シテタテヲスルハ、手前ニテハタワケニナキト、上ヘ張リ合フニ當リテヨカラヌトアリテ、學問ニ御掛リナク、世ヲ忘レ歌讀ナド、其外無益之事ヲシテ日ヲ送リ被レ成候、是レ大イ成ル御心得違ナリ、然ルニ今ニ是ヲ是ト御心得被レ成候御樣體也、上ヲ敬セラル丶ニ似テ、實ハ憤リノ甚キニ當リ、上ヘノ大不敬也、是ヲ論ジ詰レバ我身ヲ過トセズ、君ヲ捨タルニ當ナリ、非ヲ悔バ學デ心得違ヲ改ムベシ、廢セラレバ、本ヘ立歸リ度ト願フガ君ヲ敬スルナリ、臣下ノ本心ナリ、是皆小潔ヲ是トシ、其レヨリ出タル御料簡ニテ、匹夫ノ志ト同ク、大臣之大量ノ場ナキ也、果シテ今執政職ニ備リ御座候ヘバ、前方御閑暇之時御學問不レ被レ成候ガ御損ナリ、遠キ慮リナシトイフベシ、蘧伯玉ハ衞ノ國ノ賢大夫ニテ、孔子ノ譽メ給ヒタル人ナリ、然ルニ、蘧伯玉五十知ニ四十九年非ニトアリ、難レ有事ナリ、然ルニ今人伯玉ニ及バズシテ、非ヲ悔ル志ナキハ無下ニ口惜キ事ナリ、非ヲ悔レバ、昔ノ非ガ皆消失テ、今日新ニ功ヲ立ル、非ヲ悔ザレバ、昔ノ非ガ增長シテ、今日功ヲ立ル事ナラズ、平人ノ上ニテモ得失多シ、況ヤ執政職ニオイテヲヤ、右皆既往ノ事ナリ、既往ハ不レ咎ト論語ニ有レ之、過去リシ事ハ咎ムマジキ事、聞人モ悦バシカラズ、過去リシ事ナレバ、咎メテ何ノ益ニナラズ、愚ノ至リナリ、然共既往ヲ相公ハ非ト御悟リ不レ被レ成、今ニヤハリ是ト思召候御樣體ナリ、然レバ既往ニテハナク、今ニ其誤ヲ御所持也、時々祇候之節、御咄之端シニ出デ丶相

知候ナリ、因テ愚存ヲ述ルナリ、去歳相公疑シキ事ハ時々問ントアリテ問件一條アリ、其節惠卒爾ニ
奉レ答ズ、奉答之言ニ激切ナル事ドモアリ、相公之御心ニ叶ハザルカ、其後一モ問件ナシ、問件ナキ
ハ、又激切ナル事ヲ申サンカト悦ビ思召ザル故カ、其レナラバ俗情ヲ御免レ、不レ被レ成候也、「殷高宗
啓ニ乃心一沃ニ朕心一、若藥弗ニ瞑眩一、厥疾弗レ瘳」ト傅說ニ仰ラレタリ、唐魏徵ハ太宗ニ向テ、「自レ古上書率多ニ
激切一、若不ニ激切一、則不レ能レ起ニ人主心一、激切卽似ニ訕謗一、惟陛下詳ニ其可否一」トイヘリ、相公之御心ニハ、
激切之言ヲ聞キ惑ヲ解シ、非ヲ改ン益ヲ得ン我心得ノ間違ハ我一人ノ損計ニアラズ、君ノ御損ナリ、
一家中一國中ノ損ナリ、大舜ハ聖人ニシテ問ヲ好ミ玉フ、況ンヤ我小智之限リ有ルヲヤ、編僻ノ地ニ
居テ固陋ナルヲヤ、「孔子吾終夜不レ寢、以思無レ益、不レ如レ學也」トノ玉ヒキ、況ンヤ我不學ニシテ事足ン
ヤト、古之事共日夜ニ御忘却アルマジキ事也、相公ヘ議論ヲ掛候ハ慰ニイタシ候ト思召候哉、此方ニ
テハ相公ニ御心得違御座候ト存付候處有候ハヾ、國政ニ掛リ候ト存候故ニ御座候、若シ岩淵夜話之內、
相公之御心付被レ成候處、不佞ガ心付候處ト違候ハヾ、耻ケ敷事ト思召候テ御タシナミ御ヒカヘ、御
沙汰モ無ニ御座一候ハヾ、甚小量成ル御事御座候、大臣ハ大量ニ而活達ニ無レ之候テハ相濟不レ申候、人
誰カ過ナカラン、過ヲ聞カバ早速ニ改ベシ、人ニモ知ラスベシ、其レガ直ニ人ニ過ヲ改メサスルノ敎
ナリト、此意ヲ能々御會得アリ度事ナリ、岩淵夜話之內御心付被レ成候處、不佞ト同クテハ御益ニハ
成リ不レ申候違候ニテ今迄思召不レ被レ付候事ヲ御聞被レ成、切磋之御得益御座候而、御政事之御心得

ニ成候事モ御座候、達候事ヲコソ御聞被レ成度思召スベキ事ナレ、然ル御心得御座候時ハ、恥ケ敷事ハ御忘レ、早ク御議論被レ成度可ニ思召一事ナルニ、今ニ御沙汰無レ之ハ、御タシナミト奉レ存候、不佞ガ心付候處、相公之御心附ニマサラバ相公之益アリ、相公之御心付被レ成候處、不佞ニマサラバ不佞ニ益アリ、論ゼバ何レカ一益ヲ得ベキ也、不佞近來學業事繁ク久敷闕參候、不急事ニ候間、不佞參候之節御議論可レ被レ成ト御待被レ成候ハヾ、御政事ニ益ヲ得度思召候御志之淺キナリ、何トテ一書札ヲ以不レ被仰下一候哉、惠ガ激切之言、皆腐儒ニテ取ニ足ラズ、重テ問ニ及バズ、又岩淵夜話一覽シテ知レタル事ニテ、議論ニ及バズト思召候テノ御事カ、然ラバ御尤千萬ナリ、惠ハ唯愚存ヲ述ルノミ、惠ガ云悉ク不遜ナリ、若シ不遜ヲ御咎メアラバ、大罪遁ル丶所ナシ、此內一事モ御納レ、大罪ヲ免レバ惠ガ甚幸ナリ、唯相公之御心上ニアリ、伏請ニ垂炤一恐懼謹言

己丑五月廿七日

上

大野相公閣下　　宇佐美惠　頓首再拜

岩淵夜話之內

權現樣ノ御內ニ本多作左衛門ト申者、至而武勇之者ニテ、平生狂氣同然之荒者ナリシガ、御領分之三奉所被ニ仰付一其砌御旗本中ノ取沙汰ニモ、是計ハ御見立違ヒニテ可レ有レ之、作左衛門ニ限リ、奉行職ハ不ニ相勤一人柄ナリト申アヘリ、然ルニ少モ非道成事ナク、コト

ノ外明白ニ訴訟等致二吟味一物クドキヲキラヒ、手短ク埒明事好ミケリ、或時旅宿ヨリ女房之方ヘ状遣トテ、一筆申、火ノ用心、オセン泣スナ、馬コヤセ、カシクト」書テヤリケルトナリ

濁水先生ヘイヅレノケ條ニ候哉ト尋シニ、右之ケ條ナリト云リ、是瑣細ナル事ヲ戒シムルノ敎ナリトゾ

一　藩主御前ニテ、桃源藏、春ニ成リ月ニ三度ヅヽ講譯申上候御議定ニ御座候由承及候、愚意ニハ毎日講釋ヲ御聽被レ遊度事奉レ存候、若シ左様ニモ難レ被レ成候ハヾ、隔日ニハ必御聽被レ遊度事ニ奉レ存候、三日計リニテハ、一日暴十日寒ト申物ニテ候ヘバ、學問ニハ御入リ不レ被レ成候、不斷御聽被レ成候ヘバ、御馴被レ成候テ染込深ク、自然ニ御合點モ參リ面白ク思召、學問ニ御入被レ成候、江戸ニテハ御障共多御座候ヘバ、折角ニ奉レ存候テモ届不レ申候、御國ヘ被レ爲レ入候而ハ、御障共皆無ク、其上ニ大臣方段々御勸メ被レ成候ヘバ、御學問ニ御入被レ成候上ハ、御器用ニ被レ成二御座一候ヘバ、御志一度轉ジ被レ成候得バ、御入ハ早ク御座候、大臣御出精被レ成、御取持被レ成候ヘバ御指南申上候者モ、御學問ニ御入被レ成候様ニ致方共ハ種々有レ之候、總ジテワキツレ揃不レ申候テハ、狂言モ出來不レ申候

一　諸侯ハ御學問不レ被レ成候而不レ叶事、前之勸學書ニ委曲述ベ候

一時ハ得ガタク、失ヤスキ物ニ御座候間、時至ラバ失ハヌヤウニ油斷致間敷事、只今ガ藩主之御朝起之始、又御學問ニ入玉フベキ時節到來ト申物ニ候ヘバ、此節ヲ忘ル間敷事、委曲ニ前之上ニ諸相公ニ書ニ書ニ記之一候

一茶ノ湯御好ミ被レ成候テハ、後々段々不レ宜事共出來候、此儀前之愼微書ニ述申候、此事ハ御遠慮之筋モ可レ有ニ御座一候ヘドモ、被ニ仰上一方ハ幾等モ可レ有ニ御座一候

一藩主御入部被レ成候テ、御朝起ヲ被レ成候樣ニ諸公被レ仰候ヘドモ、爾今日々御朝起不レ被レ遊候哉、御用御座候時計リ御朝起ヲ被レ成候テハ、御朝起ト申ニテハ無ニ御座一候、江戸ニテ御對客ニ御出之時ハ御朝起被レ遊候、御平生日々定メテ、御朝起被レ遊候ニテ無ニ御座一候而ハ、御朝起トハ不レ被レ申候、遠察恐多候ヘドモ、最早ソロ〳〵御朝寢始マリ候半ト奉レ存候、御朝起之儀モ、御學問ヲ御自身ヨリ御好被レ成候程ニ無ニ御座一候テハ、得ト御合點ハ參リ不レ申候、何ニ付候テモ御不學ニテハ、行支ヘ候事ノミ御出來被レ成候

一來年正月中御參府被レ成候樣ニ、公儀ヨリ被ニ仰出一候由承候ヘバ、江戸來年ハ二月三月ノミ御逗留ニテ、四月ハ御暇之月ニテ、其間幾程モ無レ之候ヘバ、藤堂樣之例モ有レ之候故、スグニ御在國ヲ御願被レ成候テ相濟可レ申候ヘバ、相公方其思召ト奉レ存候、五百姫樣御婚禮モ、藩主江戸ニ不レ被レ成ニ御座一候テモ相濟可レ申候、其レニハ又色々之難レ被レ成事ドモ可レ有ニ御座一候ヘドモ、御揃御心ヲ盡シ、御

相談被レ成候ハバ、相濟候筋ニモ參リ可レ申候、然ル時ハ御國ニ丸二年餘被レ成二御座一候ヘバ、御國ニ御馴被レ成、御國ヲ御スキ可レ被レ成候、御在國之日少ナク候テハ、御國ニ御馴不レ被レ成候故、御國ニ馴心落付不レ被レ成候、御國ニ馴サセ給フニハ、來年スグニ御在國被レ成候程能キ事ハ無二御座一候、御物入モ大ニ違可レ有二御座一候、久敷御在國被レ成候內、書物ヲ被レ成二御覽一候事ヲ御勸メ被レ成候ハバ、御好學ニ御成リ可レ被レ成候、然ル時ハ何カニ付キ善事共生ジ申候、ケ樣成ル事モ、相公方只今ヨリ御心ヲ定メテ被レ成候ハバ、事遂ゲ可レ申候事ニ候、オソキハ功ヲ不レ遂候

一　相公方思召ニハ上御學問御嫌被レ成候ヲ、是非ニ御勸メ申上候テモ、思召ヨリ出不レ申候事ニ候ヘバ甚苦敷可レ被二思召一、其上御國ヲ何卒御スキ被レ遊候樣ニ致度候ヘバ、御嫌被レ遊候儀ヲ強而被二仰上一ガタクト可レ被二思召一候、右之思召ニ候ハバ、上之御學問ニ御入被レ成候期ハ無二御座一候、其思召ニテハ、御朝寐モ御心儘ニ被レ成候ガ能ト思召、御益ニ成リ候事ハ、何モ御構ヒ被レ成間敷ト奉レ存候、講釋ヲ御聽被レ成候日ヲ月ニ二日ト御定被レ成候ニテ、思召モ相見エ申候、御學問御嫌ナレバ、講釋不二申上一モ御心ニ叶ヒ宜シケレドモ、三日計リハ有レ之而モ、苦カル間敷ト思召候テ、日ヲ少ナク被レ成候ト相見エ申候、諸侯ハ御學問不レ被レ成候テハ不レ叶事ト申儀ハ、一向ニ御心付不レ被レ成候ト奉レ存候、只御國ヲ嫌ハセ給ハズ、御スキ被レ成候樣御心ニ叶ヒ候事共ヲ、何ガナト是ノミ御考被レ成候ト奉レ存候、御學問ヲ勸メ申上候テ御心ニ叶ハズ、御國ヲ嫌ハセ給ハバ是非ナシ、御學問ハ諸侯之職業ナレバ、御出精

被成候樣ニ御勸メ不申上候而ハ不叶事ト、御ハマリ被成度事ニ御座候、上之御心ヨリ學問ヲ御好被成候時節ヲ御待被成候テハ、何ツ迄モ御學問ニハ御入不被成候、十日ニ一度位御聽被成候テ、御好出來候ト申ハ決而無之事ニ御座候、種々ニ御思慮被成、日ヲ多クシ、不斷ニ書物ニ御馴被成候樣ニ、御世話被成候ヨリ外無御座候、毎事道ニ叶ヒ、風儀モ善ク、國之治メモヨク、公儀へ忠、御先祖樣へ孝、臣下國民へ仁、種々之善事生ジ、費ヲ省キ益ヲ得ル事幾萬石カ量リガタク、上下安穩ヲ得ル事ハ學問中ニ有之候、相公方俗氣ヲ御離レ、能々御思案被成度事ニ奉存候、歡樂ヲ勸メ、御國ヲ好セ給フ樣ニ被成度ト思召候ヨリ、大事之教方ドモ皆廢、暗昧惰弱ニ御成リ被成候、御國ヲ好マセ給フ樣ニ被成度思召候テ被成候事ドモ、却而其レガ後々御國ヲ好マセ給ハヌ之本ニ成候、御國ヲ好マセ給フヤウニト申ニハカマハズ、只御教導ヲ專一ニ被成候ガ、却而後々御國ヲ好セ玉フコトニ相成リ候、遠キ慮ヲ被成候ト、目前之差當リ計リヲ御考被成候トノ違ニ而御座候

一 御國ヲ好マセ玉フヤウニ御嗜キナル事計リヲ勸メ、御嫌ナル事ヲ勸メ不申、歡樂ヲ專トシ、御心儘ニ被成候時ハ、藩主御發明ニ御成候期ハ無御座候、御一生暗君ニテ御暮シ被成候、苦々敷事イハン方ナク候、只今御弱年ニ被成御座候へバ、何之御辨別モ無御座候、是ヲ明君ニ御成リ被成候樣ニ、今日ヨリ御教導申上候事ニ御座候、是レ國相之任ニテ御座候、學問ニ御入、道ニ御志生ジ候ヘバ、國ハ大切之物ト思召、國ヲ安ンズルハ仁ト申所ニ御心付キ、仁ノ仕方ハケ樣ニ致候物ト、其仕

方ヲ御心得被レ成、書籍中ヨリ御考被レ成候樣ニ相成候ヘバ、自然ニ御國ヲ大事ニ思召候ヘバ、御國ヲ好マセ給フ事ハ不ニ申上一候テモ、御心ヨリ好マセ給フヤウニ御成リ被レ成候、此場ヲ能々御合點被レ成度事ニ御座候、此處ヲ能々御合點被レ成候ヘバ、藩主之御身之上ニ付テ萬病圓ニテ御座候、歡樂ノミヲ御勸メ候ハ、下手醫者之本病ヲ療治セズシテ、枝病ヲ療治致候ト同樣ニテ御座候、本病ヲ治スレバ枝病ハ自然ト愈申候、枝病ヲ治シテハ本病ハ何ツ迄モ愈不レ申候、本病愈不レ申候ヘバ、段々ニ別ニ又橫合ヒ出申候

國相ハ一國上下皆總ベ候ヘバ、一事トシテ引受不レ申候事ハ無ニ御座一候故君之御身ニ付テ可ニ申出一事ハ、何ニテモ憚ル間敷事ニ御座候、此事ハ我任此事ハ我任ニ非ズトイハレンハ遁辭ニテ御座候、今時上ニ立ツ人多クハ遁辭ニテマギラカサレ候、殊ニ國相ハ君ヲ誘導シテ善道ニ入レ候ガ、第一之職分ニテ御座候、國政ヨリ重ク御座候、國政之本ニテ御座候ヘバコヽニキマリ無レ之候而ハ、善政ハ行ハレ不レ申候

一　耳ヨリ入ル學問ト、目ヨリ入ル學問ハ飮込大ニ違ヒ候、耳ヨリ入ル學問ハ聽時計リニテ、其レモ後ニハ忘レ、詰リハ私智ヲ用ル事ニ落申候、聞テ知候故、其レ切リニテ知ルコト狹ク候、知ル事狹ケレバ、私智ヲ用ル事ニ成リ候、目ヨリ入ル學問ハ、朝夕見テ知リ候故、知ル事多ク候、善言善行之事ヲ不レ斷見候ヘバ多ク知リテツカヘズ、自然ニ私智ヲ離レ、古人ノ正智ヲイツシカ我心トスルヤウニ成リ、聞見多ク候ヘバ、心モ寛大ニ成リ候、依而藩主ハ目ヨリ入ル學問ニ御教導仕度平生心掛ケ候、然共先

ヅ始ハ耳ヨリ入不レ申候而ハ成リ不レ申候物ニ候故、講釋ヲ多ク御聽被レ成候ガヨク御座候、切々書籍ニ御馴レ被レ成候テ、其内ニ御飲込出來候ヘバ、其レヨリ自學ニ誘導仕候、六ケ敷事ニテモ無二御座一只御馴被レ成候迄ニ御座候、因而日々書物ヲ御離レ不レ被レ成候樣ニ被レ成度事ニ御座候、月ニ三度計リニテハ、中々此場ヘハ不レ參候、只書物之講釋ヲ御聽被レ成候ト申ス名計リニテ御座候、御實用ニハ相成不レ申候、御聽不レ被レ成ヨリハマサルト申迄之事ニ御座候、上之思召ニモ無レ之事ヲ御氣遣ヒ、若シハ御國ヲ嫌ハセ玉フベキカト、是ノミニ御心ヲ勞シ諸侯之事業ヲバ脇ニ被レ成候ハ、大ニ思召違ト奉レ存候

一　右愚意申述候儀ハ、只今ガ一大事之時ニテ御座候、上之明君ニナリ玉フモ、暗君ニナリ玉フモ此時ニテ御座候、御一生之善惡之分レメノ年ニテ御座候、大臣方之上ニテ君ヲ明君ニ御仕立、大忠義立候モ、又暗君ニ御仕立大不忠ト御成リ候モ此時ニテ御座候、御家中國民之貧富憂喜ハ、上御一人之明暗掛リ候事ニ候ヘバ、臣民之行々歡喜致候モ、愁苦致候モ、此時ヨリ萌候事ニ御座候、是皆今日大臣衆之御心得次第ニテ御座候故、無禮過言モ不レ顧心之及候處ヲ申述候、疎ソカニ御心得不レ被レ成掛二御目一候書共ヲ幾遍モ打返シ、御覽之上得ト御思慮可レ被レ成候、俗氣ニ墮チ弱リテハ不レ參候、大勇氣ヲ御出シ御フミ込、藩主ヲ明君ニ仕立奉ント御出精被レ成候ハヾ、誠ニ御大忠ト奉レ存候、乍レ憚相公方學問ハ善キ事トハ被二思召一候ヘドモ、御自身ニ深ク御嗜キ不レ被レ成候故、學問筋之事ニ御心得違共

多ク御座候樣奉レ存候、カク申上候ハ不敬至極、大罪遁ルヽ處無レ之存候ヘドモ、腹心ヲ不レ憚吐露仕候ニテ無レ之候テハ、シカト譯立不レ申候間、不屆ニ可レ被ニ思召一ヲモ不レ顧、愚意ニ存付候儀申上候、是モ只今迄學問ニ御入被レ成候樣ニ切角ニ誘導仕候ヘドモ、江戸ニテハ何カニ御障共多ク御座候テ屆不レ申候處、此度ハ御學問ニ御入可レ被レ成時節到來ト奉レ存候間、此場ヲハヅシ候テハ、御學問ニ御入可レ被レ成時節ハ無レ之候故、餘リ惜ク存候テ申上候、無禮過言ヲ御咎メ被レ成候御心少モ御座候テハ、申上候儀御得心ハ無ニ御座一候、狂人之申事ナガラ、狂人ハ狂人ニシテノケ置キ、申述ル處ニ少モ尤成ル事有レ之候ハヾ、御取可レ被レ成ト思召候ニテ無ニ御座一候テハ、私切角ニ申上候甲斐モ無ニ御座一候、御心ヲ平カニシ、無我ニ御成リ、先ヅ私ガ心ニ御成リ、御推察被レ成候テ御覽可レ被レ下候、私體之者之申事ヲ御用被レ成候ハ、恥之樣ニ思召候ハヾ御小量ニテ御座候、大臣ハ自己之料簡ヲバ出サズ、衆人ニイハセテ善言ヲ取用ルヲ大量ト申候、尤愚ナル者之申事ハ取ニ不レ足候ヘドモ、智者モ千慮ニ一失、愚者モ千慮ニ一得ト申候、又狂夫之言モ聖人ハ擇レ焉トモ有レ之候、中庸ニ、「孔子曰、舜其大知也與、舜好レ問、而好察ニ邇言一」ト有レ之候、孟子ニモ、「大舜舍レ己從レ人、樂下取ニ於人一以爲上レ善、自耕稼陶漁、以至レ爲レ帝、無下非レ取ニ於人一者上、君子莫レ大ニ乎與レ人爲上レ善」ト有レ之候、舜ハ聖人ニテ御座候ニ、舜之御自身之智ヲバ稱セズシテ人言ヲ取用ヒ給ヒシ事ヲ、孔子モ孟子モ稱美被レ成候、是ニテ古聖賢之虛心大量ヲ御想像可レ被レ成候、恐惶謹言

二月　　　　宇佐美惠助　花押

上

諸相公　臺下

事務談 終

價原

三浦梅園著

價原引

今之俗、人家買貧民之失產者為奴婢焉、有周期者、有半期者、有更日者、有累歲者、出入之候、各地有其風、總謂之奉公、蓋近年儉歲則不雇、而多不得以就食者、豐年則直遽騰貴、而多不得以買奴者、且若今年、若以麥價量之、則健奴則上十石、雖至疲弱者、不減四三石、然而考其入、則傭之勤、終不能償其直也、上田君怪焉、乃者辱下問、嗚呼晉也細人、量腹而食、稱身而衣、豈知其佗焉哉、雖然區々之心、竊以為關係不小、因不自量、探其原而及其派矣、以為一冊子、命以價原、以答來意、雖似有漆室倚柱之嘆、而實同杞國憂天之愚、惟茲燕石、胡能補天、一看置之於廡下、不然將有比子於宋人者

安永癸巳夏四月壬辰

三浦晉

價原

豐二子山人

三浦晉著

禹謨ヲ「德惟善政、政在ㇾ養ㇾ民、水火木金土穀惟修、正德利用厚生惟和」トイヘリ、水火木金土穀コレヲ六府ト云、正德利用厚生コレヲ三事ト云、後世ノ治千術萬法アリトイヘドモ、此六府三事ニ出デズ、禹謨ニ、水火木金土穀トイヘルヲ、其後ハ穀ヲ土ニ合シ五行トモ云、五材トモイヘリ、天下ノ至寶ト云者此六府也、禹謨ノ後洪範ニ初テ是ヲ五行ト謂テ、箕子ノ所ㇾ述初テ禹謨ニ違ヒテ、後世五行家ノ禍胎トハナレリ、已ニ尙書ニイデタレバ、後世ノ人コレヲ左右動スコトナラデ、其後歷々方モ色々ノ曲說ヲ設テ調停セリ、サレドモ天地ノ條理ヲ取テ禹謨ト相照シテ是ヲミレバ、箕子ノ誤傳掩フベカラズ、古ノ聖人ト云者ハ天下ヲ有スル人也、コレヲ王者ト云、王者ノ材トスル處ハ水火木金土穀也、城郭、橋梁、屋壁、舟車、耒耜、釜甑、刀劍、陶瓦、百ノ器械、烹熟、煨炙、衣服、飮食何レカ五行ノ外ニ出ル、是天下ノ至寶ニシテ、得易ク塞易ク足易キ者ニシテ、必得難キ者ニアラズ、得難キ寶ハ寶ニアラズ、タトヒ連城ノ璧十二乘ヲ照ストモ、燈火ノ千家萬家ニ滿テ照スノ功ニ比スレバ、對用スベキニアラズ、コノ故ニ得ガタキノ寶ハ得ズシテモスム者也、得ヤスキ寶ハ、民生須臾モ離ルベカラザルモノナリ、ムカシ人質朴ニシテ奢靡文飾ニ走ラザリシ世ハ是ニテ用足リタリ、世移俗變ジテ次第ニ侈リ飾ル世ニナリテ、得ヤスク塞易キ者ノ財タルヲ忘、謾ニ得難ク給シ難キ者ヲ求メテ至寶ト思ヘリ、其至寶ハ無用ノ者ニシテ、王者ノ寶ハ有用ノモノ也、我國ハ漢土ニ比スレバ遲ク闢ケタル故、風俗モ最淳樸ニシテ立ケリ、サレバ銀ハ人皇四十代天武天皇白鳳三年對馬ヨリイダシ、銅ハ四十三代元明天皇和銅元年武藏國ヨリ

出シ金ハ四十五代聖武天皇天平二十一年陸奥國ヨリ貢スト云ドモ、サマデ多キニモアラズ、錢ノ通用白鳳以來アリシカドモ、今ノ樣ナルコトニハアラズ、博多ニモロコシ船來リシ頃ハ、宋錢ヲ以物ヲ辨ジ、近ク室町殿ノ頃マデモ明朝永樂錢ニテ事スミ又東山殿ハ國用乏シトテ、三度マデ明ヘ錢ヲ乞レシ、今ノ富中ニモ文明ノ頃乞レシニハ、十萬貫ヲ賜ハラバ國用足ント歎キ申サレキ、十萬貫幾バクゾヤ、今ノ富人一家ノ產トスルニダモタラズ、然レバ今ノ錢幣ノ多キコト辨ゼズシテ知ルベシ、カク迄財貨ニ富ル世ヲ金銀少キ樣ニ心得タルハ僻事也、一通ニ考レバ金銀少ケレバ世ノ中貧シク、金銀多ケレバ世ノ中豐ナルモノカト思ヘドモ、然ルニアラズ、コヽニ於テ、天下ノ至寶ハ六府ニ過ザルコトヲ察スベシ、東坡イヘル如ク、「使二天而雨一レ珠、寒者不レ得二以爲一レ襦、使二天雨一レ玉、飢者不レ得二以爲一レ粟」ニテ、金銀、瑠璃、硨磲、碼碯琥珀ナド言テ、世ノ中賞玩スレ共、民用ニ何ノ益モナケレバ、王者之ヲ寶トセズ、是故ニ古ノ王者ハ五官トテ、水火木金土ニ各其長ヲ置テ治メラレシナリ、金トハ五金ノ總名ナリ、分テイヘバ金銀銅鐵鉛、合セテイヘバ皆金也、五金ノ內鐵ヲ至寶トス、銅コレニ次、鉛コレニ次、イカントナレバ、鐵ハ其價廉ニシテ其用廣シ、民生一日モ無ンバアルベカラズ、銅ハ器物ノ用アリ、鉛ハ軍中ノ用アリ、金銀アレバ有所ノ用アレドモ、無テモ先スム者也、去程ニ餘ノ金ハ此方ニハ遲ク見エ侍レ共、鐵ハ神代ノ昔ヨリアリシト見エタリ、金銀ハ諸貨ニ易ヘテ用ルヲ以其用トス、金銀錢コレヲ幣ト云、珍ニシテ小也、諸貨ノ重大ニシテ移シ難キニハコビヲツクルモノナレバ、其用舟車ニ近キモノ也、金銀

ハ貴重ナリ、能大物ヲ運ブ、錢ハ賤シテ多シ、能小物ヲ運ブ、貴賤輕重アルヲ以テ、銀以金ヲ分ツベク、錢以銀ヲ分ツベシ、此故ニ是金銀トイヘバ、錢モ亦其內ニアリ、先天下ノ勢ヲ慮ル人ハ、能財ノ有用無用ヲ辨知スベシ、譬バ海內ニ如レ此澤山ニ充ル所ノ金銀、今悉盡果タリトモ、他ノ五材アラマシカバ、民生立タヌヿノアルベキヤ、蓋金銀ハ所々出ル處有ト云ドモ、佐渡ノ山天下ニ甲タリ、上杉謙信佐渡ヲ攻取金ヲトラレシカバ國用ニ饒ニ有シ由、豐臣太閤知給ヒテ公料トナシ、金ヲ採レシガ出ズ、慶長五年關ケ原事畢リテ後、銀ヲ出スコト夥シ、銀ヤンデ金ヲ出ス、今ニ至テ不レ絕有。然錢ハ白鳳以來元明ノ和銅開珎、孝謙ノ萬年通寶ヨリ絕ズ鑄給ヒシカドモ、甚ダ少キ事ニヤト思ハル、異國世々ノ錢ハ京錢ト云キ、是ハ小田原氏康東國ヲ領セラレシ時ノ勢、永樂錢貴クシテ、他錢四五文ヲ以其一文ニ充シカバ、他錢ヲ禁ゼラレシ程ニ、關東ハ專ラ永樂錢行レテ、他錢ヲビタト賤ミ、京畿ニハ他錢盛ニシテ、コレヲ京錢ト稱シキ、慶長ノ頃錢鑄ケルト見エテ稀ニ慶長通寶ヲ見ルコトアリ、輪郭字樣頗明錢ニ似タリ、開元乾元ノ錢ハ異國千年ノ故物ナレドモ、得ガタカラズ、慶長通寶ハ得難ケレバ幾程モ鑄ザリシト覺ユ、慶長十三年永樂ヲ禁ジ京錢ヲ用ヒシヨリ、永樂多クツブシニ成テ世ニ隱レヌ、寬永十三年猷廟江戶ト近江坂本ト二處ニテ、寬永通寶ヲ鑄サシメ給ヒシヨリ、財用世ニ饒ニナリ、諸貨ノ通利自在ナリシバカ、諸貨ヲ賤ミ金銀ヲ貴ム風トハナレリ、金銀貴クシテ六府賤シ、六府賤シテ國本薄シ、姑其故ヲ說ベシ、譬バコヽニ一島アリ、土地人民足リ、米粟、布帛、魚鹽、他島ヲ假ラズ、一切

事足リ、唯金銀ノミ無ランニ、民粟以器械ヲ庸作ニ易テ、金銀ノ貴ヲモシラデ立ザルコトヤハアルベキ追々ニ錢一萬ヲ入テ他ノ用ヲ通ゼシニ、一萬ノ錢其一島ノ用ヲ足サシムベシ、是ヨリ增テ十萬ニ至ラバ、十萬ノ錢其一島ノ用トツリ合ヲナシテ、一萬ノ錢決シテ一島ノ用ヲ辨ゼズ、其初ハ島ノ諸用一萬ノ錢トツリ合ヲナシ、米一石五百錢ニアタラバ、其五百錢ヲ以一奴ヲ買ベシ、又入テ十萬ニ至ル日ハ、一石ノ米五千錢ニテツリ合ベシ、此時五百ノ錢纔數十日ノ人ヲ雇フニ過ジ、然ラバ前ノ五百錢モテルト、後ノ五千錢モテルト、數ハ一倍スレドモ、用ハ異ナルコトナシ、乃至增シテ千萬錢億ナリトモ、一島ニ出ス所ノ米粟布帛多ヲ增ズシテ、獨金銀ノミ增サンニ、多ト少ト替ルコトハナクシテ、多ケレバ多程煩シキヲマシ、其多キ金銀ニツイテ游手ヲマシ、天地ヨリ生ズル財ヲ費スモノ次第ニ出來ベシ、我國ノ昔モ幣ナクテ立シ也、和銅ノ頃太宰府及播磨ヨリ始テ銅錢ヲ獻ゼシニ、コレヲ民間ニシキ、民ニ交換セシメシ時ハ穀六升ニ付一文ナリシトカヤ、蝦夷ナドハ今ニ其土地ノ產物ヲ出シテ我米穀烟酒ヲカヘテ錢ヲ用ヒズトナリ、故ニ金銀多ケレバ物價貴シ、金銀少ケレバ物價賤シ、物價賤キハ金銀ノ貴キ也、物價貴キハ金銀ノ賤キナリ、諸工ノ造リ出ス所ノ者ヲ見ニ、古代ノ物ハ精工ニシテ、今ノ物ハ粗惡ナリ、是其用ノ廣ヨリ起トイヘドモ、半ハ金銀ノ賤フシテ、物價ノ貴キニ係レリ、サレバ漢ノ初天下ニ縱シテ恣ニ錢鑄サシメシカバ、米一石五千錢ニ至シナリ、漢一石ト云ハ、今ノ京ニテハ大槩一斗程ノ事也、其後錢幣ノ勢ヲ抑ヘ、段々人ヲ農ニカヘシ、趙過ナドヽ云人出テ農ノ道ヲ敎ヘ、

耕ヲ進メ、代田ヲ復シ、後ニハ一石ノ價五錢ニ至リシナリ、天下ノ勢ヲトルコトヲ權柄ト云リ、權トハ錘ノ稱也、柄トハ其錘ヲ自在ニツクリ合スルナリ、今衡ハ持スレドモ、懸ル者ノ輕重ヲ稱錘ヲ以テ自由ニスルコト能ハズンバ、權柄ヲ何カセン、稱錘ハ重ヲマサズ、輕ヲ加ヘズ、輕ケレバ輕ニ從ヒ、重ケレバ重キニ從ヒ、ツリアヒヲツケテ平ヲ持ス、若權柄ヲトル人米粟布帛百器財費用ト、金銀ト、其ツリ合ヲ見テ多少其宜ヲ得セシメバ增減ニ從テ平ヲ得ベシ、此故ニ稱錘ヲカヘヨトニハアラズ、輕重ニ從テツリ合ヲトルコト也、コレヲ執ニ權柄ト云コト也、然バ金銀ノ多少ハ强テ有國ノ者ノ患トスベキコトニアラズ、唯金銀ノ用ハ何物ゾ、米粟布帛百器財、庸作ノ用ハ何物ゾト察スレバ、金銀盛ニ行ハルノ有益無益知ベキ也、今金銀ノ通用ヲ好ムコト獨日本ノミニアラズ、萬國同ク然リ、萬國同ク金銀ヲ好トイヘドモ、金銀ノ多キコト我國ノ如キ稀也、其徵ニハ海舶ノ長崎ニテ交易スル者價太廉也、商賈ノ手ニ入リ賣買スル日和物ノ價ト比スレバ、海外直廉ナルコト知ベシ、金銀少ケレバ少ニテツリ合、多ケレバ多ニテツリ合ニ成ル者ナリ、サレバ國家ノ初ハ米價一石二三四五六斗金一兩ニ當リシ時ハ、諸物ノ價モ廉ニシテ、士庶ノ苦ム沙汰モナシ、元祿十二歲己卯八月十五日ノ大風ニ、一兩纔ニ七斗ヲ糴フ、是ヨリ歲荐ニ登ラズ、工商ノ營食ニ給スルニタラズ、都下餓莩多シ、コレ憲廟職ニアラセシ日也、ソレヨリ憲廟ノ職ヲ終ヘ、文廟職ニツカセ給ヒ、正德元年辛卯ノ秋、米價ヤヽ賤シクナリテ、壬辰ノ春ニ至テハ九斗一兩ニ相當リ、章廟時ニ乾金ノ沙汰アリ、有廟ノ時西國ノ苗稼悉ク腐ニ逢テ、享保辛

丑ノ夏一兩纔ニ米六斗餘ヲ糴フ、元祿ノ頃糴俄ニ貴カリシニハ、餓莩多アリシカドモ、二十餘年是ニ慣タレバ、治生ノ道コレニ居リ合出來タレバ、コレガ常トナリヌ、元祿以前米價賤シテ士庶苦マズ、元祿ノ始米價貴フシテ、士人ハ利ヲ得工商ハ飢ユ、以來米價依然トシテ工商ハ苦マズ、士人ハ餒ユ、モシ今日米價元祿ノ舊キニ復セバ、士人手足ヲ措地ナケン、是居合ト居合ザルトノ間ニシテ、權ノ入用若〃有ル時ノ事ナルベシ、是春臺經濟錄ニヨル江府ノ米價也、又東涯盍簪錄ヲ讀ムニ、先元明天皇民ニ幣財交通ノ道ヲ教給ヒシ始、和銅三年ノ詔ヲ引テ曰、諸國ノ地江山遐阻負擔之輩久苦行役宜持一嚢錢トアリ此時錢貴フシテ銀賤シ、二十文以テ一錢ニ當ル新銀出デ八十文以銀一錢ヲ買フ、然レバ正德中脫粟米ニ二百文ト云モ四百文也、油九錢ト云モ百八十文ナリ、今ヨリシテ觀レバ世豈如レ此廉價ノ物アランヤ、今文字銀元文元年發行ノ時十五貫目ヲ以テ享保銀十五貫目ヲ收レバ錢五十文上下以テ銀一錢ニ替タリ、然ルニ今三幣愈麁惡金黃ナラズ、銀白カラズ、新鑄ノ錢鐵ヲ用ユ、若痛ク擲テバ碎ク、物價歲々ニ增ス、賤人其勢ノ止ル所ヲ知ラズ

安永壬寅十月追加シテ曰、予コノ書ヲ著スル時猶銀一錢ニ錢六、七十文ニ當ル今ハ已ニ百ヲ過グ、而シテ米價京師浪華百錢ニ充ツト傳フ、春來價ヲ增スベシ

夫金玉ハモト土石ノ精英ニシテ、得難ク朽難シ、是ヲ以至小ヲ以大ニ對スベク、米粟布帛諸貨ノ壅塞ヲ通ズベシ、「神農日中爲レ市、教二天下民聚一天下之貨交易、而退各得二其所一、而貨通」トイヘバ、其由テ來

ルコト最遠、然シテ諸貨ノ能スル處ハ、金銀ノ能セザル所ニシテ、金銀能スル處ハ、諸貨能セザル處アリ、是以諸貨ハ物大ニシテ、數積ム運漕甚難シ、夫金銀ノ用トスル處、則鎭西ノ米粟舟車ヲ假ラズシテ、關東ニシテ炊ベシ、北陸ノ布帛牛馬ニ駄セズシテ、南海ニシテ衣ルベシ、此故ニ行旅ノ人萬里糧ヲ裹マズ、腰纒ノ用車馬ニ敵スルコトヲ得、諸貨ノ如キハ通利惡シキ程ニ、米ハ衣ト成難ク、衣ハ薪トナリ難、金銀銅錢ノ小物ハワカツテ用ユベク、大物ハ聚メテ償フベキ自在ニ如カザルヿ遠シ、是天下ノ靡然トシテコレニ向フ所也、蓋金銀銅ノ三幣、金ハ大用有テ瑣碎ニ用難ク、錢ハ小財ニ便ニシテ、大用ニ便ナラズ、銀ハ中間ニアル者ニシテ、三幣ノ代ニ用ヲナス所也、昔ハ人質朴ニシテ金ハ砂金、銀ハ灰吹樣ノ物多ク通ジタリ、天正ノ頃ヨリ大判小判丁銀ナド始リ、慶長四年始テ一分判出來、慶長六年ノ後大判、小判、一分判、丁銀、豆板等改ラル、コレ國家ノ造幣ニシテ、以來元祿、享保、元文近來ニ至テ、三幣色々ノ製トモ出來タリシナリ、夫金銀ハ幣ノ用ヲ主トス、民用ニ於テハ鐵ヲ主トス、然シテ銅ハ幣器兼用ル者也、金銀モシ幣ノ用ヲ除カバ、刀ノ緣頭、佛殿ノ裝嚴(マヽ)、漆匠ノ苗金ナド玩物ニ過ズ、藥用モアレドモ要藥ニハアラズ、サレバ近來ハツヒヘ廣クナリテ、然マデ多ク金銀ヲ猶給スルコト不レ能、楮鈔(フタ)大ニ世ニ行ル、金銀ノ用ハ只諸貨運輸ノ用バカリナレバ、楮鈔ニテモ飛錢(カハセ)ニテモスムモノ也、金貨ノ如キニテハ、寒ヲ凌グコト布帛ニアラザレバ不レ能、飢ヲイヤスコトハ米粟ニアラザレバ不レ能ニテ、金銀本來ノ面目ヲ知ベシ、此故ニ天下ノ權ヲ執テ、經濟ニ心ヲ用ル人ハ、有用ノ貨ヲ日々ニ生殖シ、

無用ノ貨ヲ貴バス樣ニ致スベキコトナリ、金銀ヲ以テ天下ノ豐歉ヲ病ム人ハ、回天ノ功ハ難レ有カルベシ、大學ニ財ヲ生ズル大道ヲ、一生レ之者衆、食レ之者寡、爲レ之者疾、用レ之者舒財恒足矣一トイヘリ、是則乃チ禹謨ノ利用ノ工夫ナリ、有國ノ者常ニ此語ヲ體認セバ、天下將ニ指掌ニ在ラントス、然ヲ今ノ世ハ何ニモナラヌ金銀ヲ何ニモカヘヌ至寶ト思ヨリ、只上モ下モ寐テモサメテモ、金銀ヲアツムル工夫ノ外他事ナシ、人ハ四民トテ士農工商ノ四ニ過ズ、士ハ上ニ事ヘ下ヲ敎ヘ、禮義ヲ道トシ、政刑ヲ權トシ社稷ヲ守リ、國土ヲ安ズルモノ也、農ハ黍稻桑麻ヲ作リ出シテ自他ヲ養ヒ、筋力ヲ以徭役ヲ務メ、餘算ヲ得工商ト相通ズル者也、工ハ天下ニ色々ノ器財ナクテカナハヌモノ故ニ、朝夕共道ヲ鍛錬シ、百ノ器物ヲ作リ出シ、民生ノ用ニ不自由ナキ樣ニスルモノ也、商ハ農ノ作リ出セル米麥布帛、工ノ作リ出セル百ノ器械、コナタニ餘、カナタニ足ラズ、此ニアリ彼ニ無キヲ通用サセテ天下ノ用ヲナスモノ也、此四ノ者ハ一ツモ闕テハ、天下ノ用ヲ成シ難シ、是ヲ以テ人タル者士農工商ノ本業ニ本ヅキ、各職分ヲ務メテ怠ラザルヲ、敬ンデ天ニ事ルトスルナリ、此外ニ遊デ民ノ用ヲナサズ、天下ノ物財ヲ費スモノヲ遊民ト謂テ國家ノ蠹トスル也、是ヲ以テ金銀ハ四民共ニ有無ヲ通ズル要物ナレドモ、專交易ヲ事トスルモノナル故ニ、金銀ノ運ヲ假ルコト專要ナリ、賴朝府ヲ鎌倉ニ開カレシヨリ、足利織田豐臣繼興ルトイヘドモ、只馬上ヲ以テ天下ヲ治メントシテ、民ヲ軌物ニ入ルヽノ暇ナク、實ノ太平ト云ハナカリシニ、國家オコリシヨリ德妖氛ヲ消シ、治封建ニナラヒ、百六十年來四海波ヲ揚

ズ、吾儕小人ニ至ル迄緩帶皷腹、早寢ネ肝タケテ食コトモ得、何カ恩波ノ及ベル所ニアラザラン、蓋國初藤堂高虎足利ノ先徹ヲ監ミ、自ラ夫人公子ヲ東都ノ邸ニ入レラレショリ、諸侯後ルヽモノナク、身封國ニツクトイヘドモ、家東都ニアリ、隔年朝覲ノ禮アリテ、割據虎視ノ勢變ジテ、四海一家ノ化トナリ、戸ザヽヌ御世トナリ侍リヌ、是故ニ今日諸侯ノ費用朝覲ヲ主トス、次ニ公事屬役ノ事アリ、然トイヘドモ、是ハコレ主盟控掣ノ權ノアル所、コレヲ戰爭ノ難ニ比スレバ九牛ガ一毛ナリ、謹デ財ヲ節ニセバ、國用ハ定テ足ルノ道アルベシ、人久シク太平ノ化ニ浴シ、安樂ニ慣レ安ジ、奉養ノ道日ヲ追テ華靡ニ走ル、是故ニ飮食ハ人生ヲ養フ用ノ外ニス、遠味珍品烹熟ノ道調和ノ品、日暮夜明ルニ逮ベル、衣服ハ寒暑ヲ防グノ道ヲ外ニシテ、巧ヲ衒ヒ奇ヲ競ヒ月ヲ重ネ、一端ノ帛ヲ繡ニシ、時ヲ踰テ一端ノ錦ヲ織出ス、燕安ノ屋宅、隨身ノ調度、彫幾刻鏤ニ窮ハメ、財ヲ生ズルノ道日々ニ疎ク、巧ヲ費スノ事歲々ニ多シ、コヽニ於テ人巧ヲ費スノ道ヲ日々ニ求メテ、金銀ヲハコブノ巧漸ニナル、博奕富ナドヽ云樣ノコトヲ興行シ、富者ハ貯ヘテ其息ヲトリ、富ザル者營々トテ東ニ奔リ西ニ走、天地生々ノ財ヲ只飮潰シ食潰シ、日ヲ終ヘ年ヲ終リ、終ニハ圍碁象戲俳諧樣ノ物マデ賭ニナリ侍リテ、殺風景甚シ、サレバ金銀ノ用貴ケレバ其權重シ、重シテ貴ケレバ人ヨクコレヲ積、積者多ケレバ乏者多シ、然バ今ノ多債ニ困窮スル事ハ、金銀多キノ致所也、金銀ハ無情ノ物ナレバ、人ヲ苦メン樣ナシ、只處置宜ヲ失スレバ、權傾ノ致ス處也、噫、昔ハ天下國家ヲ有スルヲコソ富貴トハ申侍、然ルニ今ノ

有國者ハ媚ヲ素封ノ家ニ求、陶朱猗頓ガ徒、齊魯ノ如キ國ヲ見テモ、己ガ家内ノ出納ノ如ク思フ程ニ貴キ者ハ貧シク、賤キ者ハ富デ、富貴胡越ヲ隔テタリ、是ヲ以今先金銀ニ佞ル者ハ諸侯也、廉恥ノ風ヲ導ント欲スレドモ、倉廩實テ禮節ヲ知ル民ナレバ、イカデカ是ヲ導キ得ン、金銀既多、費用既廣シ、債ノ多キ處也、古ヲ稽ヘ今ヲ察スルニ、金銀當今ヲ盛ナリトス、然シテ金銀ニ窮スルモ今ノ如キナシ、故ニ人々相アヘバ、只金銀ナキヲ語ル、天下ニ通ジテ然リ、天下ニ通ジテ人皆金銀ノ無ヲ語ラバ何ノ處ニ隱ル丶トスル、試ニ今金銀ノアル處ヲ索ルニ、諸侯ノ國ヨリシテ士農工共ニ金ヲ齎ヘズ、然則商賈ニアルコト知ベシ、商賈一同ナラズトイヘドモ、其能巨萬ヲ積ムモノ他ニアラズ、商賈已ニ素封ノ富ヲ有スレバ、千里控摯ノ權半ハ已ニ其手ニ歸ス、蘇秦張儀者流會計ノ道ヲ以、往々六國ノ印ヲ帶ブ、コ丶ニ於テ其徒身公門ニ鞠躬ストイヘドモ、心實ニ千乘ヲ呑、其心農工ヲ見コト奴隷ノ如シ、只彼見テ奴隷ノ如クスルノナミラズ、農工亦彼ヲ仰グコト主君ノ如シ、コ丶ニ於テ四民只金銀ノミヲ見テ是ニ走ル水ノヒキ丶ニ赴ガ如シ、當今難藥ノ世ナレバ、兵馬ノ功ハ立ベキ様ナシ、寰宇艾安ナレバ、修文ノ業モ施ス所ナシ、屯ヲ亨シ蹇ヲ濟ノ用、文武ノ德ニモマサル故ニ金銀ニダモ富ル人ハ、無藝無能ニテモ、不禮不德ニテモ、上下ニ渇仰セラルレバ、最興シ難キハ廉恥ノ風ナリ、コ丶ニ於テ是ヲカルモノハ年々息ヲ出シ、コレヲ借ス者ハ年々息ヲ收ム、借セバ金銀世ニ散ル様ナレドモ、實ハ本錢ヲ囮ニシテ以天下ノ金銀ヲ羅ス、富家ノ息年ヲ逐テ乏シ、乏シケレバ上ノ人下ニ求メザルコトヲ得ズ、上ノ

人下ニ求ムレバ下乃上ニ給ス、豐臣太閤以來租稅ノ法、三分之二地頭取レ之、三分之一耕民取レ之、昔戰國ノ世ニサヘ、是ニテ事足リシ也、今ヲ以テ國初ニ比ズレバ、人多ク田野闢ケタリ、租稅侯國皆昔ヨリ多シ、サレドモ費用昔ニマサルヲ以、百計聚斂ノ道興ル、聚斂興テ是ヲ受ル者ハ農也、農事本艱也、コレニ加フル百ノ徵求アリ、終ニ生ヲ遂ルコト能ハザレバ民本務ヲ捨テ、工商庸作百ノ技術、水ニ走リ山ヲワケ千百計シテ財ヲ求ム、已ニ多技ニ走レバ、本產ニ怠ラザルコト不レ能、深ク耕シ厚ク培ント欲レドモエズ、肥タル地ハ瘦セ、廣キ地ハ狹ク、終ニ本產ニ放レ、流亡シテ游民トナル者數フベカラズ、今水ニ走リ山ヲ分チ、百計シテ財ヲ求レドモ、是亦聊飢渴ヲ救フニモアラデ、半ハ侯家ニ輸スル也、受テ納ムル樣ナレドモ、コレモ償ノ爲ナレバ、其實ハ侯家モ農工モ、畢竟富家ノ役ヲトル者也、サレバ戰國ノ頃ハ日夜鬪爭ヤムヿ無カリシカバ、手拱テ人ニ命ヲ授ベキ樣モナケレバ、人防禦ヲ主トシテ、僧モ俗モ農モ商モ其實ハ武士トリナリキ、今ヤ昇平ノ世ノ中ニシテ、唯困シムコトハ金銀ナレバ上下オシナベテ只一心專念金銀ニアリ、コヽニ於テ其形ハサマ〳〵カハレドモ、心ハ孰カ乾沒ニアラザラン、一得一失ノ理勢誠ニイカニトモスベカラザルモノナルベシ、サレバ今天下ノ事勢ヲ聞ニ、何方ヲ尋テモ郡縣ノ人ハ年々ニ減ジ、都會ノ人ハ年々增由也、是衡ヲ取人之最眼ヲ着ベキ處也、夫天下國家ヲ有スル人ニ豐饒ト云ハ、全ク金銀ノ上ニアラズ、金銀ヲ有シテ豐饒トスルハ商賈ノ事也、此故ニ今ハ上下交利ヲ射テ錙銖ヲ爭フ程惡ク心得タル人ハ、政ヲ執レル身ニモ、商賈ノ術ヲ以テ

國ヲ治ントスル人モアリ、乾沒ト經濟ト同ジク利ヲ求ル者也、只其差別商賈ハ利ヲ以テ利トス、經濟ハ義ヲ以テ利トス、昔鄒穆公鳧雁ノ類ヲ畜レシニ、粟ヲ用ヒズ常ニ粃ヲ用ラレシニ、折フシ粃竭キケリ、有司コレヲ民間ニ求シニ、民粃一石ヲ以テ粟二石ニ易ント云、有司コレヲ損ナリトシテ粟ヲ以鳥ニ畜ント請、穆公否爾ガシル所ニアラズ、夫百姓ノ手ヲ煦シテ耕シ、背ヲ曝シテ耘ルヿ、豈鳥獸ノ爲ニセンヤ、粟米ハ民ノ上食ナリ、何トテ鳥ニカフベキゾ、爾小計ヲ知テ大會ヲシラズ、周ノ諺ニモ、囊漏テ貯レ中ニト云リ、夫君ハ民ノ父母也、倉ノ粟ヲトリテ民ニ移ス、民ニ在テモ我粟也、鳥モシ鄒ノ粃ヲハマバ是我粃ヲハム也、何ゾ鄒ノ粟ヲ害ハント有シカバ、是ヨリ下ニ至迄上ノ事ニ思ツキテ、上下一體ノ思ヲナシケリ、國家ヲ有スル人ハ、國家ヲ一身ト見ル時ハ、民ニアルト我ニアルトノ隔ナシ、商賈ハ人ニ有セラルヽヲ損トシ、自有スル得トス、君其民ヲ外ニスレバ、民ノ物ヲ己ニ得テ得トシ、民ニハ散ジテ損ト思、是ヲ以百計千慮聚斂ニアリ、詩ニ、「彼有二遺秉一、此有二滯穗一、伊寡婦之利」ト云リ、政ヲ執テ利ヲ下ニ遺ス、一視同仁人ニ君タル者ノ利也、誠ニ田地ヲハシバシマデモ籍スレバ、水難多シ、幣ヲ鑄ルニ物ヲ雜レバ盜鑄多シ、租稅重ク上ニトレバ、凶年ニハ諸民凍餒シテ、大ニ府庫倉廩ヲ費シテ、民疲レテ又急ニ農ニ力ヲ盡コトヲエズ、孝悌ヲ誘ヒ禮讓ヲ勸メンモ暇モナケレバ、上ニ內難多ク、下ニ獄訟繁ク、財ヲ費シ人ヲ損ズ、是有國者細民ノ利ヲ以テ利トシ、民ト利ヲ爭ノ弊也、コレ治國者ノ利商賈ノ利ト同ジカラザル所也、是故ニ庫ノ財ヲ費シテ國ノ風俗ヲ勵シ、農ヲスヽメ工ヲ利シテ、財貨ヲ國人ニ積

マシムベシ、是等ヲ費ト見ル程ニ、勘定ヲ入レテ元ニ合ハヌコトハ損トセズ、是ヲ市井ノ心ト云、是故ニ財ヲ生ズルノ大道、生レ之者多トハ、天下ノ財日々地ヨリ出テ、民生ノ用ヲナスモノ也、其品ハ水穀魚鹽ヲ始トシ、麻絮竹木等ノ類ヨリ工人ノ造リ出セルモノ也、夫權ヲ執ル人ハ、輕重己ガ手ニ從フ、昔亂世武猛ノ俗モ、今ハ昇平遊惰ノ民トナレリ、コレニ因テ思ヘバ、今タトヒ權金銀ニ歸シタリトモ、大有力ヲシテ衡ヲ持シメバ、終ニ其錘ヲ移シ、人儉勤ニ復リ、廉恥禮讓ノ風オコルモナドカ難カラン、輕重ニ從テ權ヲ移ス人ハ、其病根ヲ知ルニアリ、モシ其本ニ本ヅカズ、唯金銀ヲ增減シ、其平ヲ持セントナラバ、懸者ノ重キヲ見テ錘ヲ重クシ、輕キヲ見テ錘ヲ輕クスルノ道ヲ無術ト謂ツベシ、宋ノ頃錢ヒタスラニ增ス程ニ、後ハ小サク輕クナリテ、縱環錢トテ縷ニ貫キ、水ニ入レバ縷ニ引レテ沈ミヤラヌ程ニナリ、物ノ價シキリニ貴クナリテ、後ニハ一斗ノ米價一萬錢ニ至リシトカヤ、近年錢ハ鐵トナリ、銀ハ鈔トナル程ニ、物價騰躍スルモノ縱環錢ト同意ニ衡傾キシ故ナルベシ、モシ其柄ヲ正サズシテ、其低昂ニ從ントナラバ、金銀愈多、富家ハ則愈金ヲ積ミ、貧家ハ則愈債ヲ重ネン、惡弊盛ニ世ニ行ルレバ精金皆隱ル、夫富家大ナル者ハ巨萬ヲ儲ヘ、小ナル者ハ數金ヲ儲ヘ、小家ハ數金ノ家ニカリ、大家ハ巨萬ノ家ニカル、借ル者ハ本錢ニシテ收ル者息ヲ幷ス、小民ノ數金、大人ノ數萬、其勢侔クシテ、同ク富家ノ爲ニ金銀ヲ敺ル者也、ソレ叢ニハ雀アツマリ、淵ニハ魚アツマル、叢ニハ雀アツマル者ハ、鸇外ヨリコレヲカレバ也、淵ニ魚ノ聚マルハ獺ノ瀬ヨリコレヲ敺レバナリ、淵叢ノ力ニテ魚雀ハ聚ラザレ

ドモ、鶴ト獺トノ魚ト雀トヲ好ム故、却テ淵叢ニ聚ル也、金銀モ其如ク富家ノ力ニテハ中々アツマルモノニアラズ、債家コレヲ殴ル故、倍蓰什佰巨萬ニ至ル、抑債家何故ニコレヲ殴ルゾナレバ、歳計ノ常ニ足ザルヨリ成ル、歳計ノ足ザルハ、奢侈賄賂昔ニ倍シテ制度未立タズ、節儉ノ道行レザレバ也、サレバ神君三河ニマシマセシ頃ハ、知行トレル人ノ妻迎ルニモ、負木ト云モノアリ、婦ニハ被カツガセ、負木ニ腰カケサセテ迎ヘシ由也、サル故ニ慶長十一年丙午江城修造マシ〳〵テ、次第人民聚リ會ヒ、蕃昌斜ナラザリシカモ、竹輿トテモ武家願達テ用ヒ、町家ナドノ用ニハアラズ、橋下甚三郎ト云シハ、上ノ御用ヲモ達スル大家ニテ、後剃髪シテ深入ト云シガ、珍シク濫張ノ竹輿ヲ免サレ、不案内ナレバ下乗場ニ乗越シ目付ニ糺サレ難儀ニ及ビケルヲ、朽木民部少輔殿見テ

橋本ニ下ルベキ物ガ乗物デ深入ヲシテ咎ラレケリ

ト殿ニ挨拶有テスミシ由也、是等モ其類ナキヨリカヽル過ハアリシ也、唐モ大和モ昔ハ馬ナリシガ、イツシカ轎盛ニナリ、今ハ下々迄用ル様ニナレリ、馬ハ人ノ乗ル物ニシテ、人ハ人ノ乗者ニアラズト古人コレヲ提レキ、心アラン人ハ愼ベキ事也、コノ頃ハ三絃ナド云者ハ、男子ハモトヨリ、士商ノ婦女ニ至リテ自奏カナデル様ノコトハナカリシ由也、何事モ國初ハコレニヒトシカリシバ、財用ノ費モ然マデ無リシナルベシ、今諸侯ノ家何レカ節儉ノ令ナカラン、唯滔々ノ勢カヘ難ク、且經濟ニ掣肘多ク、或ハ任ズル處其人ニ非ズ、任ゼラルヽ者其才ヲ伸ル事ヲ得ザレバ也、是ヲ以テ人君ハヨク識鑒ヲ貴ム、

ヨク其人ヲ目利シテ擧テ是ニ任ジテハ、其一盃ノ才ヲ竭サシムベシ、掣肘トハ人ニ物ヲカヽセテ、後ヨリ其肘ヲ掣ナリ、如何ナル能書ニテモ後ヨリ肘ヲ時々掣カレテハ書度ニ書損アリ、書損サセテ其過ヲ恣ラルヽ事筆取ノ難澁也、是ヲ以人主ハ人ヲ得ルニ勞シテ、政ヲスルニ逸スル者也、事二ナガラ全ウシ難ケレバ、廉恥ノ風荒メバ人賄賂ヲ好ム禮讓ノ敎至ラザレバ人爭奪ヲ好ム、掣度立事ナケレバ華奢等ヲ踰エ、今ソノ好ヲ好ニ任セ踰ルヲ踰ルニ任セ限ナキ人ノ慾ヲ極リ、アル財寶ニテ償ン事ヲ求メバ、天下ノ大山高岳ヲシテ盡ク金ヲイダサシムトモ、米粟布帛ノ至寶ヲ生ズル者ヲシテ其業ヲ棄シメ、衣食器械ニモナラザル物ニ人巧ヲ費サシムルニ過ズ、是ヲ以今タトヒ金銀ヲシテ天下ノ米粟布帛ノ如ク多カラシムトモ、世唯債數ノ多ナルマデニテ、至寶ノ生路日々ニ薄ク、人ノ賑フコトハ有マジキ也　但シカク傾キシ勢ニ處スルニハ、金持テルヨリヨキハナシ、金ヲ持ベキ樣ハ乾沒ニシクハナシ、此故ニ今ノ富人ハ十ニ九ハ商賈也、其一ツモ外面ハ異ナル樣ニテモ、其實ハ皆廢居ヲツトム、コレニ繼デ世ヲ渡ルニ易キハ游手也、士農工ハ貧シキ者ナリ、利ヲ見テ趨リ害ヲ見テ避ルハ天下ノ通態ナリ、故ニ今ノ士農ハ本業ヲウタテニ思ナシ、十ニ二三ハ工商ニ移リ、十ニ三四ハ遊手ニ移ル、移レバ前ヨリハ生モ遂易キ程ニ、日ヲ逐年ヲ逐、農ヲ去ノ勢ヤマズ、農減ズレバ財減ズ、財減ズレバ國本薄シ、是郡縣ノ籍年ヲ逐テ減ジ、市肆ノ人日ニ隨ヒ增處ナリ、我見聞スル處ヲ以テ之ヲ云ニ、コノアタリニテモ七八十年以前ハ、京畿大坂ノ邊ヨリ兒女ヲツレ下リ、家ニ使ヒテ近キ頃モ多カリ、今子孫猶殘モアリ、今ハコレヨリ

只管ニ上ルコトバカリニテ、下ルコトハナシ、事小ナルニ似タリトイヘドモ、時勢ノ變見ツベシ、財貨控摯ノ權已ニ商賈ニ屬スレバ、米粟布帛魚鹽百品生ズルヲ遲シ、皆都會ノ地ニ向テ輸ス、輸スルアトハ、貧家ハ初ヨリ衣食ニ不足、富家ハ纔ニ其年ノ衣食ノ料ヲ留メテ賣ホドニ、農家ノ餘計地ヲ拂テ空シ輸スルムカ(ヽヽ)ヿハ財寶四方ヨリ輻湊スル程ニ諸貨常ニ餘計ヲ貯ヘ、其糶ヲ停ムレバ國郡食ニ乏シ、糶ヲ拒ム日ハ郡縣金銀ヲ仰グ所ナシ。コレヲ以郡縣餘計ナケレバ、唯之ヲ都會ニ恃ム、都會コレヲ互商ニ恃ム郡縣已ニ財寶ニ餘計ナキ程ニ貧民皆本業ヲ捨テ、金銀ヲ營ム、營ミ得テ殺郡縣ニカヘル時、價前ヨリハ貴ク、量前ヨリ減ズ、之ニ加フルニ、送迎ノ費幾クゾヤ、都會ハカク財寶ニ富ル地ナリ、遊手共日々夜々ニ聚リ會ヒ、文彩刻鏤音聲技巧人ノ目ヲ奪ヒ、心ヲ蕩スコトヲ巧ミ衒ヒテ、良民力ヲ盡シテ生出スル者ヲ費シ、人ノ囊中ニアル物ヲ釣出ス、コヽニ於テ釣ルモノト釣ラルヽモノト、同ク民ノ膏血ヲ貪リ費ス、然レバ金アレバ成ザルコトナシト金ヲ悅ブコトハ吾儕小人一身ヲ安ズルコトニシテ、天下國家ヲ有スル人ノ悅トスルコトニ非ズ、金銀ノ通用ハ天地ヨリシテ觀ル時ハ、左ノ物ヲ右ニ移シ、右ノ物ヲ左ニ移スニ過ズシテ、布粟器械昨日マデナキ物ノ、今日ハ天地ノ間ニ出來テ、造化ノ功ヲ賛テ飢渴ヲ愈シ、寒暑ヲ禦グノ功ニ何ゾタクラブベキ、然レバ此至寶ヲ少ニテモ天地ノ間ニ生殖シ、少ニテモ天地ノ間ニ存シ、民ノ生々ノ用ヲ助ル程ニ天ニ事フル務ハアラジ、唯勢偏ニシテ郡縣ニ來歲凶飢ノ備ナク、都會ニハ遊手貪リ費スノ類有テ之ヲ傷ムノ人ニ乏シ、故ニ民ノ風ニ梳リ雨ニ沐シ星ニ耕シ露ニ耘リシ膏

血ヲ、文彩刻鏤、音聲技巧ノ用ニ貪リ盡シ、其生ズル者ヲシテ閉チ、其費ス者ヲシテ播サシム意アルモノ、豈嵩目シテ憂ザルベケンヤ、若コレヲ憂ル人アラバ、一郡一縣ヲ治ンニモ、何トゾ人ヲ一人ニテモ農ニカヘシ、一人ニテモ游手ヲ本業ニ本ヅカシメ、財貨ヨリ入ルノ路ヲ開キ、器械他ニ求メザルベキコソ肝要ナレ、一國ヲ治ル人ハ他國ヲ以テ壑トセザルヲ得ズ、白圭ト禹ト勢同ジカラザルコトナリ、サテ人ノ農ニツキ工ニ務メ、士上ニ廉恥禮讓ノ風ヲ誘ヒ、民下ニ華靡淫奔ノ俗ヲ改メバ、遊手ハイツシカ少クナルベシ、是ヲ「生レ之者衆、食レ之者寡、爲レ之者疾、用レ之者舒」ト云、乃利用ノ事也、用ヲ利スル者其生ヲ厚センガ爲也、論語ニ之ヲ富スト云者、乃厚生也、今市肆ノ日々ニ榮エ、人ノ彌增ヲ蕃昌トハイヘドモ、郡縣ノ人ヲモマシ、市肆ノ人モマサバ實ノ蕃昌ナルベキニ、郡縣ノ人ハ次第ニ滅ジ、市肆ノ人而已次第ニ增侍ランハ、豈感慨ノ一ナラズヤ、王制有國之道ヲ說テ、「國無ニ九年之蓄一曰ニ不足一、無ニ六年之蓄一曰レ急、無ニ三年之蓄一曰ニ國非ニ其國一也」ト云リ、當今ノ世ハ控掣ノ權金銀ニアリ、コレヲ以タトヒ人家餘ノ布餘ノ粟有テモ、之ヲ貯ントスル人ハナシ、コレ貯ヘザル人ノ罪ニアラズ、金銀ノ便利他貨ニ勝レバ也、便利已ニ他貨ニ勝ル、タレカ重(カサ)高ク運惡ク、息ヲ生ゼザル他貨ヲ貯ンヤ、コノ故ニ民擧テ他貨ヲウリ、貧者富家ノ舊債ヲ償ヒ、富者ハ貧者ノ求ヲマツ、吾儕小人勢然ラザルヿヲ得ズ、吾儕小人ノ利スル處有國者ノ利スル所ニアラズ、其故如何トナレバ、國中米粟布帛、金銀ニカヘテ都會ニ輸ス、然シテ其發ル所ノ金銀、細民ノ手ニトヾマラザレバ、凶飢軍國之慮何ヲ以テカ之ニ供セン、サルニヨリ、

今ノ世ハ一年立ト云フモノ也、一年立ト云コトハ、一年ニ生ズル地上ノ財ヲ一年ニ費シ盡也、モシ天下永安ノ爲之ヲ憂フル人アラバ、金銀只彼方此方ヘ書替サスルコトヲ省キ、米粟布帛生植蓄藏ノ道ヲ謀ルベシ、只其年ニ生ズルモノヲ空ク輸シ盡シ、都會遊手ノ娛樂ニ供スルコト惜ムベキノ甚キ也、古人三年ノ蓄ヲダニナキ國非ニ其國ニト云シ也、然ルヲ稍登ル時ハ麥民間ニ盡、麥熟スル時ハ粟民間ニ竭ク、民爭デカ荒歳ヲ淩グコトヲ得ン、誠ニ一得一失ノ理ニテ、昔金銀少カリシ世ハ、諸貨通利惡カリシカバ、コレヲ運ビ盡サズシテ、凶飢諸災ノ備モアリキ、今金銀多ク諸貨ノ通利自由ナリシカバ、之ヲ都會ニ運ビ盡シテ、舊穀新穀ニ及事不レ能、故ニ今控掣ノ權ヲトルモノハ、有金ノ家コレヲ聚斂スレバ、上下ノ財盡竭、是ヲ以テ名ハ諸侯米粟ヲ有スルモノニテ、其實ハ富商ニ幷セラレテ、纔ノ臣民ヲ扶助スルニ難ンズ、米粟ハモトヨリ充滿シ易キ者ニシテ、モシ一年豐熟スル時ハ、穀ハ食料ニ贏ル者也、贏ル處蓄フレバ、凶年ニ備フベシ、是ヲ賣盡ニ至テハ、豐年ノ後ノ年凶年ノ後ノ年ニ異ナルコトナシ、是天下ノ良民金銀ノ爲ニ遊手ノ奴隷トナル所也、布帛米粟ハ諸貨交易ニ便ナラズ、便ナラザルヲ以テ金銀ノ用廣シ、是ヲ以金銀ノ用ハ急ニシテ布粟ノ用ハ緩シ、緩キヲ置テ急ナルヲ先ズル、勢然ラザルコトヲ得ズ、故ニ布帛ニハ事足レドモ、金銀足ラヌ故、布粟貯フルヲ損ト見テ、足ルモ足ザルモ、布粟ハ家ニトヾメズ、故金銀ニ富ル人モ、米粟ニ餘ナキ事ハ相似タリ、用多ケレバ借ル人多シ、借ル人多ケレバ錢神足無クシテ飛、用少ケレバ借ル人少シ、借ル人少ケレバ錢權衰ヘテ飛騰ノ用殺グ、錢權衰フレバ布粟蓄フベ

シ、布粟蓄ル事ヲ得テ、今年ノ蓄以テ來年ノ飢ヲ禦ベク、今年ノ布以來年ノ寒ヲ禦グベシ、有國ノ人ハ強ニ己ガ府庫ニ物ヲ積マヌトテ、貧シキトハ云ガタシ、昔亂國ノ頃ハ下民モ農桑ノ暇ナカリシカドモ、ソコノ籠城、コヽノ對陣ト云ニ相應ノ兵糧ハアリシ也、今ハ昇平ノ世ニシテ、ワヅカニ朝覲屬役ノミナレドモ、其臣僚ノ扶持ニダニ乏シ、萬一邊陲ノ警モアラバ、何ヲ以祖宗ノ意ニ答ヘ、國家百年ノ恩ニ報ゼン、遠キ慮ナケレバ必近キ憂アリ、有國者ノ急務何レカコレヨリ先ナラン、四民ハコレヲ有國者ニ仰グ、有國者ハコレヲ有天下ノ人ニ仰グ、天下ノ勢ハ有天下ノ人ノナス處ニシテ、有國者ノ力ノ及所ニアラズ、一國ノ勢ハ一國ヲ有スルノ人ノナス處ニシテ、士民ノ力ノ及處ニアラズ、ヨク權ヲトル人ハヨク勢ヲツカフ、勢ヲ使ハタトヘバ砂ヲ盆中ニ淘ルガ如シ、左ニ走ラシメンモ、右ニ走ラシメンモ、利ニ赴カシメンモ、義ニ赴カシメンモ、金銀ヲ貴クスルモ、布粟ヲ貴クスルモ、良民多カラシムルモ、游手多カラシムルモ、テスニ從フ者也、天下一年立ノ勢ハ、有國者ノ回ラスベキニ非ザレドモ、一國ノ勢ハ豈一國ノ勢アラザランヤ、其術即生レ之者衆、コレヲ食ム者寡ク、之ヲ爲ル者疾ク、コレヲ用ル者舒ナルニアリ、今ハ天下太平ニシテ、恩澤天ノ如クナレバ、何故ニカヽル安樂ニ耽ルゾト思ヒ回ラスコトモナク、貴キモ賤キモ、衣服、飲食、居處、交際只日々ニ華靡ニ走リ、有司モ俸祿ノ外ニ賄ヲタノミテ事ヲ辨ズル故、田地ノ租稅モ重カラザルコト不レ能、臣僚ノ俸粟モ減ゼザルコトヲ得ズ、故ニ農ニ餘ノ利ヲ見セテ人ヲ農ニカヘシ、工ニ力ヲソヘテ遊手ヲ力ニ食セシメ、財貨他國ニイダサヾル樣ニ

ト思フ也、モシ其病根ヲ見ズシテ末ヲ追ヒ、令ヲ下シテ賄賂ヲ禁ジ、奢侈ヲヤメント欲ストモ、禮樂講ウセズ制度立タズ、民用ノ足ランコトヲ求ムトモ、網ヲ結バズシテ魚ヲ羨ム類ナルベシ、先大勢ヲ治メンニハ、大稍ヲ知ベキ事也、蓋十人ノ耕ヲ一人ニテ食ヒ盡シ、十人ノ織ヲ一人ニテ著盡サバ、九人ハ飢寒ヲ免ザルベシ、此故ニ一夫耕シ耘テ其妻子ヲ養フベク、一婦蠶シ繰ツテ夫子ニ衣スベシ、飲食コレヨリ美ニ過、衣服コレヨリ麗キニ過レバ、其人ニハ贏アレドモ、天下ニ通ジテ足ラザルベシ、有力ノ人ハ匹夫ト同ジカルベキニハアラザレドモ、細民ノ爲ニ慮ルニ於テ、察セズンバアルベカラズ、爽口ハ數金ヲ盡スニアラザレバ一餐ニ供スルニ足ラズ、美服ハ數月ノ力ヲ用フルニアラザレバ、一衣トナスニ足ラズ、モシ齊民ノ風俗自然ト此積リヨリ外ニ出ナバ、爭カ飢寒ニ免レン、夫民ヲ治ルノ道ハ赤子ヲ保ンズルガ如シト云ヘリ、君上ハ父母ニシテ、民ハ則子也、子ハ甘旨膏膩ノ病ヲ釀スヲモ、泥土雨露ノ衣服ヲ損フヲモ知ズ、有ニ任セテ用ヒ仕マウ者也、民モソノ如ク、チト耕シメ餘資アレバ、色々ノ事ヲ思出シテ企ダテ、僧巫ノ徒緣ヲ募リ、遊伎ノ輩間ヲ覗ヒ、工人結構ヲナシ、國ノ富ム方ニ心ヲツク者ニアラズ、故ニ何ホドノ仁政ヲ行レテモ、湯ヲ以雪ニ沃クガ如ク、財貨ハトヾマル者ニアラズ、故ニ子ノ爲ニ甘旨膏膩ヲヒカヘ、雨露泥土ニ衣服ノヌレザル樣ニ節制ヲ加ヘザレバ、給スルモノハ暇ナク、用ル者ハ災ヲナス、災ヲ身ニ受トイヘドモ、節制ヲ加ヘル日ハ父母ヲ怨ミテ泣號ブ也、細民ハ己一身當然ノ事ノミヲ見テ、大勢ヲ見ザルモノナレバ、或ハ一己ニ不便利、或ハ情欲ニ伸ビザレバ、嬰兒ノ父母ヲ

怨ムル如ク、左ヤ右與シテ人心ヲ動搖サスル者也、小利ヲ謂テ大利ヲ害スルモノ也、此時英斷ノ君ニアラザレバ其臣ニ任ズルコト不レ克、剛毅ノ臣ニ非ザレバ其業ヲナスコトアタハズ、是ヲ以テ政ニ制度ヲ立ルコト甚要ニシテ、膚タユマズ目逃カザル人ニ非レバ、ナシ得ルコトニ非ズ、又制度ニ過ツコトアレバ、物ヲ害スルコト限ナケレバ、假初ニ立易キコトニモアラズ、鄭子產政ヲセシニ「都鄙有レ章、上下有レ服、田有ニ封洫一、廬井有レ伍、大人之忠儉者、從而與レ之、泰侈者、因而斃レ之カ」ハ、輿人之ヲ誦シテ取ニ我衣冠一而褚レ之、取ニ我田疇一而伍レ之、孰殺ニ子產一、吾其與レ之ト云シガ、三年ヲ經テ皆誦メ、我有ニ子弟一、子產誨レ之、我有ニ田疇一、子產殖レ之、子產而死、誰其嗣レ之ト云、子產死スルニ及デハ、人皆慈母ヲ喪フ如クニ思ヒシト也、弦莽先生云、刻薄ノ法ヲ立ルモノ、常ニ子產ヲ以テ口實トナスコトナレドモ、古聖賢ノ政ヲナス、必シモ子產ト同一ナルニ非ズ、動スレバ安石ノ新法ニヒトシキコトニナリ行ベシ、深慮スベキコト也、子產ノ政ハ可也、輿誦ヲ以テ口實トスルハ不可也、立法ノ根本イカントミルベキノミ　只上ニモ目前ニテ人ニヨキ人ト謂レンコトヲ謀ル人ハ、非常ノ功ハ立得ヌモノ也、非常ノ功ヲ立ル者、非常ノ才ヲ抱ク、非常ノ才ヲ知ル人ハ、非常ノ君也、君才ヲ用ル日、譽ル者半、謗ル者半、利モ亦半、不利モ又半也、苟明識果斷ナルニアラザレバ、事ヲ擾リ人ヲ損フニ過ズ、故ニ古ヨリ君臣ノ値遇ヲ以難シトスルコト故アル哉、故ニ制度ヲ立ザレバ仁惠モ益ナシ、夫產自養ニ足ラズ、或ハ餘計ニ迸散ノ路アラバ、有餘不足ノ相去コト近シ、王制ニ「量レ入以爲レ出」トハ、上王公大人ヨリ下輿僮卑隷ニ至ル迄、經紀要語トシルベキ也、サテ天下一年餘計ノ布粟ハ皆富商ニ歸シ、富商コレヲ都會ニ輸ス、コヽニ於テ郡縣空乏ナリ、凶饑ハ全都會ニ仰グ、都會空乏ノ變アラバ、郡縣給ス

ル處ナカラン、都會ノ物ヲ蓄ル、常平倉ニ非ザレバ、本郡縣ニ給スル爲ニモアラズ、畢竟遊手ドモノ餕餘ナリ、コノ故ニ郡縣布粟ニ餘計ナク。都會積聚ニ蠧蟲アリ、穀ハ滿易フシテ減ヤスシ、サルニヨツテ一年年登レバ天下ニ穀ミツ、一年年儉ナレバ郡縣穀盡ク、滿レバ人々糧ニ乏カラヌ程ニ、各職ニツイテ本業ニ歸センコトヲ思フベシ、盡レバ糧ニ仰處ナキホドニ、壯者ハ庸作ニ糊ヒ、弱者ハ乞丐ニ糊フ、本業ヲステテ餘業ニ糊フハ、勢ノ已ムヲ得ザルニ出テ、其本心ニアラズ、故ニ年登ルヲミレバ、遠客ノ歸舟ニ遇フ如ク、餘業ヲステヽ本業ニ歸ラントスル程ニ、庸作スル者希ニシテ、餘業ヲ務者怠ル、コヽニ於テ諸價皆騰貴ス、然シテ一年穀熟セザレバ、雨後潦水忽涸ルヽガ如ク、又本業ヲステヽ餘業ニ走ル、コヽニ於テ諸價又賤シ、畢竟民一年立ニナリテ、定レル業ノ糊フニ足ル者ナケレバ也、ソレ人情タレカ本業ニ歸シ、安キニツクコトヲ願ザル者アランヤ、是郡縣ニ凶饑ノ備ナク、一度ハ本業ニツキ、一度ハ本業ヲ離ルレバ也、モシ眞ノ太平ヲ得ントナラバ、金銀ノ通利ヲ貴バズ、餘布餘粟民家ニ蓄ヘシムベシ、タトヒ惡年ニアフトモ、ミダリニ本業ヲ失フマジ、本業ヲ失ハザレバ、價ニ貴賤ナキコト能ハズトモ、又格別ノ事モアラジ、コノ故ニ國家ノ乏シキト云モノハ、金銀通利ノ快キニ、布粟ヲツムノ人ナケレバナリ、布粟ヲツム人ナキ者ハ、金銀ヲ借人多クシテ、金銀ノ利布粟ニ倍スレバ也、利布粟ニ倍シテ、運輸蓄藏布粟ヨリ便也、タトヒ嚴刑ヲ以テコレニ臨トモ、コノ勢ニ當ルベカラズ、今世ノ態ヲミルニ、庸作ヲハジメ其佗ノ營ミニツケテモ、多クハ皆其人ノ本業ニアラズ、困苦

ノ爲ニ金銀ニセメラレテ、已コトヲ得ズシテ姑コヽニ雨ヤドリヲナシ、雨ノ晴間ヲ待也、空少ク晴行バ、ヤガテフルベキ空トテモ、イカデ久シク其木蔭ニハ留ルベキ、サル程ニ少ク衣食ニ休息アレバ女子ハ嫁シ、男子ハ本業ヲ求メ、其務メニ服センコトヲ願也、其務ニ服センコトヲ願ヘドモ、程ナク年ノ荒ルヽニ赴キ、糊フノ營ニカヽルコト、本ノ木蔭ヲ立出テ、先ノ木蔭ニ雨ヲ凌グノ心也、人ニ貧富ノ隔コソアラメ、豈人情ニ異アランヤ、已ニ人情ニ異ナケレバ、老タル親、馴來シ妻子ニハ、朝ナ夕ナ見モシ見エモシ打談ラヒ、親シキ友ドチ問ヒ問ハレンコトヲ願ザル者アランヤ、シカラバ孰カ其本業ヲ棄テヽ餘業ニツキ、歡娯ヲ厭テ勞苦ヲ好ムモノアランヤ、身ヲ賣テ人ノ奴隷トナルコトハ、勢ノヤムコトヲ得ザレバ也、然レバ世ヲ平觀スル時ハ、庸作ノ小人ハ本業ヲ求メテカヘル程悦バシキコトハナシ、治國ヲ以テ任トスル人ハ、庸作ノ徒ノ本業ニツクガ本懷也、今貧民ノ田ハ富家ニ幷ラレ、貧家ハ富家ノ貨田ヲ耕ス程ニ、富家他手ヲ假ラザルコトアタハズ、貧家他主ヲ恃マザルコト不ㇾ能、モシ陰陽爕理ノ手ヲ經テ、經界平ニ歸シテ、穀祿郡縣ニ三五年ヲサヽユルコトヲ得バ、富家兼幷セズ、貧民本業ニ歸シ、遊手ツトムル處アリ、餘夫ヨク良民ニ左右シテ、餘事ニツトムル處アラバ、本業他業コモ〱執ラズ、物價高下アリトモ粗定準ノアルベキアラン、スベテ物ニハ居リ合ト云モノアリ、今ノ癖ツキタルヨリミレバ、海內皆富マバ奴婢ノ買ベキナク、庸作ノ人ナクシテ却テ難儀トナルベク思ヘドモ、其居合ヲ見ヌ故也、今ノ貧民一年ハ本業ニ走リ、一年ハ餘業ニ赴ク故ニ、物價皺動シテ定ラ

ズ、本業人アリ、餘業ツトムル處アラバ、四海富デ人苦ムノ事アランヤ、古仁德天皇ノ朝ニハ三年マデ貢ヲユルサセ給ヒシカド、宮牆荒タルバカリノ沙汰アリテ、其外サハレル事モキカズ、今ノ世ノ心ヲ以テミレバ、怪シキ程ニ思ハルレド、漢文帝ノ時晁錯ガ計ニ從ヒ給ヒ、民ニ十二年租稅ノ半ヲ賜ヒ、明年終ニ民田ノ租稅ヲ除キ給ヒシモ、猶大倉ノ粟ハ陳ニ相ヨリシト也、和漢古今ノ相違ハアレドモ地物ヲ出ス事依然トシテ、人ノ身ノ丈モ縮マラズ、腹ノ量モカハラ子バ、陰陽燮理ノ手ヲカラバ、人々六府ノ眞貨タルヲ覺リ、九年ノ水七年ノ旱トモ、終ニサヽフル道ナカランヤ、今ハ只六府ノ運トナルベキ金銀却テ主トナリ平準立チ難ク、豐年ニハ豐年ニ苦シミ、凶年ハ凶年ニ苦シム、仁人位ニアルコト有テ、豈豐年ヲ苦ム事アランヤ、稱錘平ヲ得ザル日ハ重キ物ヲカクレバ錘サキヘスベリ、輕キ物ヲ懸クレバ錘アトヘ隕ル也　今奴婢諸物價ノ貴賤事微ナリトイヘドモ、關係小ニアラズ、國家ノ權ヲトレル人最心ヲ注グベキコト也、庸作ノ人ノニワカニ價ヲマス事ハ、吾儕身ノ爲ニ憂ルコトニシテ、有國者ノ悅ブベキコト也、其故ハ此機ニ乘リ小民ヲシテ本業ニカヘラシメ、兼幷ノ道ヲ察シ、農ヲシテ專力ヲ耕耘ニ歸セシメ、荒タルヲ闢キ、堤防ヲ修シ、彼寒苦ノ細民ヲシテ老タル親馴來シ妻子ト優游セシメ、同ジク太平ノ餘澤ニ浴セシムベキ機アレバ也、其悅ブベキヲ憂ルハ衡ヲ持シ難キニ苦シメバ也、カクシテ人本業ニカヘルコトヲ得バ、民力業專農桑ニ歸シ、地力盡スコトヲ得テ、地ノ物ヲ生ズルコト益多クシテ、男女餘布餘粟アリ、金銀偏重ノ勢ナク、各其力ヲ以テ金銀ヲ蓄ヘ、然シテ

暇日孝悌忠信ノ敎ヲ施セバ、人米粟布帛ノ貴ヲ知リ、金銀通利ノ物タルヲ知リ、禮讓廉恥ノ風オコスベシ、慈愛惻隱ノ情養フベシ、夫人々足ル所アレバ、食マレズ衣ラレザル金銀ヲ誰アツテ息ヲ出シ借ルモノアラン、借ルモノナケレバ、金銀ヲ貯フル人モナク、游手トナリテ產業ニ成難キ故、コレモ各四民ノ務ニ本ク也、金銀通利ノ上ヨリ觀レバ、有金ノ人ハ最有用ノ人ニシテ、造化ヲ賛クル上ヨリ觀レバ、頗ル游手ト相類ス、造化ノ功ヲ賛クル事、士ノ太平ヲ守ルト、農工ノ物ヲ造リ出ストト、商賈ノ有無ヲ通ズル外皆游手ナリ、游手勝テバ四民ノ業疲ル、四民ノ業疲ルレバ、國本終ニ弱シ、今天下ノ勢末ヲ追テ、金銀ノ便利ヲシリ、其息ヲ積ンデ游手トナラン事ヲ冀ヒ、米粟布帛ヲ賤ンデ、餘分ヲ家ニ蓄ルノ道ヲ知ザル程ニ、上下皆市井ノ心ニナリ、久安ノ計ニ暇ナク、コヽニ於テ僧ハ佛ヲウリ、巫ハ神ヲウリ、學者ハ道ヲウリ、醫者ハ藥ヲウリ、形ハサマ〳〵ニ替レドモ、心ハ商賈ニ非ザザルハナシ、カクマデ久シク人ノ心ニ染タル金銀ナレバ、タトヒ聖人イデタリトモ、一朝一夕ニ金銀ノ輕ク、六府ノ重キヲバ知シメ難カルベシ、然リトテ金銀ヲ一切ニ除キ去テ、治ヲナセトニハアラズ、何トゾ費用多キ所ノ故如何トタヅネ借ルベキ天下ノ源ヲ塞ギ、有金ノ家ヲシテ天下ノ百貨ヲ網スルコトヲ得ザラシメテ、諸侯ノ國小康ヲ得、四民其業ヲ樂ムコトヲ得ベシ、是平準ノ要領也、金銀モト美物、國家ヲ有スル人ハ布粟金銀府庫ニ滿チ下ヲシテ兼幷偏重ノ勢ナカラシメバ、用ヲ通ズルノ能、マコトニ諸貨ノ及ブ處ニアラズ、軍中ノ捷利民間ノ必用有國者ノカグベキ者ニアラズ、ソレ金ノ山ニアル土石

ノ精英ニシテ至テ得ガタシ、至美至重萬國皆望ヲコレニ屬ス、然レハコレヲ得ン者土石ノ如ク思ン事、下人巧ノ勞疲ヲ察セズ、上造化ノ精英ヲ貪リ、國ヲ有スル者ハ國ヲ傾ケ、家ヲ有スル者ハ家ヲ破ル且各國其境界アリ界ヲ出ル者ハ、再歸ラズ、最愼ザルベケンヤ、五事略ニ載タル所ヲ考ルニ、長崎一所官ヨリ海外へ出ル所、正保五年ヨリ寶永五年迄六十一年ノ間、金二百三十九萬七千六百兩餘ニシテ、銀三十七萬二千二百九貫目餘銅寛文三年ヨリ寶永五年マデ三十六年ノ間一億一萬一千百四十九萬八千七百斤餘此計ノ外ナル者其幾ト云コトヲシラズ、大概コレニ三倍シテ、我國見在ニ遺ル者三分ノ一ト云ヘリ、今狡黠ノ商賈一身ノ利ヲハカルガ爲ニ、シバシバ金銀ヲ海外へ洩スコト、疾ムベキノ甚キ也、鳴呼金銀世ノ害ヲナスモノナランヤ、人ノ金銀ヲシテ害ヲナサシムル也、夫良醫ハ烏喙砒石ヲ用テ能病ヲイヤス、況シテ諸貨運輸ノ能舟ヨリモトク車ヨリモ速ナルヲヤ、然レバ則金銀ハ多ハ多キホド猶ヨカルベシ、是ヲ以衡ヲ持スル人、權柄ヲ得ザル時ハ、多ケレバ多キニ傾キテ、少ケレバ少キニ傾キ、同ジク人ヲ苦シマシム、モシ權柄ヲ得ル時ハ、多少共ニ平ヲ得ル也、其故ハ六府ノ用ニ達シ、並井偏重ノ煩無レバ也、コレニ就テ世ノ費用ヲ考フルニ、古ハ無クテスミシ物ノ今ハ去リ難キ者其數ヲ知ラズ、浮屠家ノ教ハ最久シ、裳瘡ナドモ昔ハナカリシトカヤ、有益無益ニツキアラ〳〵コレヲ數フルニ、天文地理ノ學西洋ヲ精トス、黴瘡金瘡ノ治又相亞グ、木綿火器、望遠鏡、自鳴鐘ノ類最重寳ヲナス、天教黴瘡直疾ムベシ、然シテ天教ハ已ニ根ヲ絶ツ、黴瘡ハ世ニ蔓衍ス、蔫（タバコ）ハ二百年ノ物茶ハ千

年ノ物、人家日用ノ具トナル、髮膏（ビンツケ）又古ニ見エズ、然シテ今ヤ太平五六十年、酒食技巧淫靡ノ風古ニアラズ、妓樂博奕人ヲ誤ルモノ數ヲ知ラズ、モシ上古質朴ノ世ニ比セバ、民生日用ノ費ト半セントス、豈畏ザルベケン哉

天文地理ノ學、梵最粗也、漢ハ稍精シ、然レドモ思量模索ニ出デヽ實測ニウトシ、西洋ハ器ヲ制シ舟ニ駕シ、足跡至ラザルノ地ナシ、コヽニ於テ天地ヲ見ルコト掌菓ノ如シ、實ニ千載ノ大愉快也、西洋ノ醫治內ヲ略シテ外ニ詳也、大ニ漢人藩園ノ外ニ出ヅ、漢人ノ治ハ昔ノ五運六氣五臟六腑ナド云事ヲ云始メシヨリ、終ニコレニ誤ラレテ實測ニ暇アラズ、西人ハ意ヲ實測ニ用ユ、故ニ人ノ臟腑筋骨ノ如キモ數剝シ眞ニ試ム、故ニ最精詳ヲ盡ス、盖天地ニ條理アリ、未條理ヲ得ザレバ、實測有トイヘドモ、是ヲ彷彿ニ得テ其眞ニ遠シ、故ニ造化ヲ說ニ至テハ、漢ニ木火土金水ト云、梵ニ地水火風ト云、西洋ニ火水土氣ト云、共ニ伯仲ノ說也、木綿ハ桓武天皇ノ頃、崑崙國ノ人持來リシカド殖セズ、文祿年中ヨリ廣リテ、民生ニ益アル事五穀ニツギ、桑麻ノ上ニ出ヅ、鐵砲ハ後奈良帝天文癸卯八月薩州種子ガ島ノ主時堯コレヲ蠻人武良叔舍（ムラシユクシヤ）幷ニ喜利支多陀孟太（キリシタダマウダ）ト云二人ヨリ傳ヘ、泉州堺橘屋又三郎ト云者鍛錬ノ法ヲ委ク傳ヘ今ニタエズ、豐後ニハコレニ先達コト二年、辛丑ニ當テフランスクスサベイト云者來リタリ、是ハ西洋波羅多伽兒（トルトガル）ト云國ノ者ニテ、後天竺ニテ死シタリ、唐ノ書ニハ佛來釋古者（フランスク）トイヘリ、石火矢モコレガ豐後ニ傳ヘタリ、始テウチシ時衆皆潰エ、ナダレテ

肝ヲケシケリ、因テ國崩シト名ヅケタリ、武良叔舍佛來釋古舍ハ皆一人ニテ、フランスクスノ轉音ナルヨシ、白石先生ノ說也、尤據トスベシ、サテ人是ヲ大友亡國ノ兆トイヘリ、昔ヨリ銀漢ナドハ、水精ナド、云テ唯氣ノ樣ニ思タリ、近ゴロ望遠鏡渡リテ、皆星ナルコトヲ知レリ、蓋混地ノ體圓ニシテ海水コレニ湛フ、其内大壤二ツアリ、一ハ北ニ在テ東西ニ長シ、一ハ中ニ當ツテ南北ニ長シ、北ニアル壤ヲ三大洲トス、西ヲ歐邏巴、和人エロツパトモ云、卽西洋也 喎蘭陀ナドモ其中也、東ヲ亞細亞、唐、日本、天竺ナド其內也、東西之中間ナルヲ漢人利未亞ト云、西洋ノ人ハアフリカト云、中ニ當ル壤ヲ二大洲トス、南ヲ南亞墨利加洲ト云、北ヲ北亞墨利加洲トス、又南大海ノ中墨瓦臘尼加ト云地アリ、昔西洋ノ人見ツケテ、コレヲ加テ六大洲ト云シガ、追々尋見シ所殊ノ外ノ小島トモイヘリ、因テ大洲五トス、亞墨利加ノ地者大ガイ此國ノ下ニアタレリ、北亞墨利加ノ内新伊斯把儞亞ト云國アリ、コレハ西洋ノ伊斯把儞亞トリテ此ノ名ヲ加ヘタルナリ、慶長十五年ノ秋、コノ新伊斯把儞亞ノ商舶風ニ放レテ我國ニ漂ヒ著タリ、官ヨリ其船ヲ修理シ、資糧ヲ具シ放チカヘサシメ給ヒシガ、同十七年ノ夏、其國ヨリ使船ヲ遣シテ恩ヲ謝シタリ、其時ノ禮物トシテ自鳴鐘ヲ獻ジタリ、コレ自鳴鐘ノ始也、コレ等ノ類ハツタヘテ重寶トスル處也、天主教、西洋ノ人ハキリステアント云、和人ハ切支丹ト云、漢ニハ明ノ隆慶萬曆ノ頃、泰西ノ利瑪竇ト云者明ニワタリ、浙江府ノ内ニテ荒地ノアリケルニ、一字ヲ作リ學文シ、書ナドヲ著シ人ヲ誑シケルニ、追々龐廸我ト云者又來

リ、金銀ナド授ケテス丶メケル故、次第ニ其道廣マレリ、此方ニテハ佛來釋古者等豐後ニテ其道ヲス丶メシヨリ起リテ、其流ヲ汲ム如漏法印、因果居士、無遍ナド丶云者、專ラ此道ヲ以テ大友義鎭ヲ誑カス、大友深ク是ヲ信ジテ筑紫ノ神祠佛院コノ時多ク毀廢ニ及ブ、此事大樹光源院義輝ニ聞エ、如漏法印ヲ召シ、織田信長ヲシテ其法義ヲ糺サシム、信長淀ノ屋鋪ニ於テ廐ノ口ニテ其狀ヲキ丶、直ニ樫ノ棒ニテ擊殺シ、其首ヲ梟セラル、義鎭大ニ怖レ大德寺ヨリ眞齋和尚ヲ招、祝髮シテ休庵宗鱗ト號シタリ、サレドモ其流波タエズ、秀吉其民ヲ惑スヲ怒リ文祿ノ頃伴天連六人伴類二十餘人ヲ召捕リ、肥前長崎ニ於テコレヲ磔ニス、因テ海外ノ市舶ヲ停メント有ケレドモ、長崎ノ民歎キ請フニ因テ其事ヤミニキ、サレド其道ヲ誘フ者タエズ、寛永十四年凶徒肥前島原ニ聚リテ官命ヲ拒ム、翌十五年春凶徒ヲ誅ニ服シ、又其後天教ヲ奉ズル諸國ノ市舶通ズルコトヲ許サズ、禁ヲ冐シテ戮ニ陷ル者前後ニ通ジテ二十八萬人其法卒ニ絕タリ

徽瘡相思(タバコ)同ジク西洋ヨリ入テ今ニ絕エズ、カルタナドモ其國ノモノ也、蓋烟草ノ初ハ南亞墨利加ノ內亞(ア)勒利加那(ルリカナ)ト云地アリ、其海中ニ十八ノ島アリ、總ジテコレヲマリカランタト云、其內ノ一島セントヘレセントト云、コノ島ヨリ初テ作リ出セル草也、我國ニハ天正ノ初ノ頃トモ、又慶長ノ十年ニ渡リシトモ云リ、ウヱ始メタルコトハ、肥ノ長崎櫻馬場ニ作リソメシヨリ廣ル由、西川子ハイヘリ、酒色ノ二ツハ古人ノ訓戒ソナハレバ、今サラ更メテ云ニ及バズ、烟草ハ酒ナドノ樣ニ人ノ心ヲ蕩カス者ニハ有

ラザレドモ、其味辛ク其氣臭ク、コレヲ服スル者ハ口氣甚惡シ丶、一能ヲ見ズ、男女淫奔ノ媒ヲナシ、動モスレバ火ヲ失シテ、大ナル者ハ數千家ニ至ル、然シテ今ノ失火半ハ烟火ニ屬ス、土地ヲ費シ糞壤ヲ食ミ、金帛技巧費用甚ヒロシ、國家其失ヲ監ミ給ヒ、慶長十三年令ヲ下シテ禁ジ給ヒシカドモヤマズ、元和二年ニハ烟草畠ニツクルコトヲ許サズ禁ヲ犯ス者ハ牢舍其所ノ代官過料五貫文、其村中ノ百姓一人ニツキ過料百文宛ト令ゼラレシカドモヤマズ、終ニハ高貴ノ玩トモナリヌ、黴瘡烟草誠ニ天主ノ遺毒、最ニクムベキ者也、茶ハ烟草ニ比スレバ雅物ナリ、害モマタ淺キニ似タリ、茶ハ嵯峨天皇弘仁六年、畿內及丹波播磨等ニ頒チ植シメ玉ヒシヨシナレドモ、僧榮西歸朝ノ節種子ヲ携ヘテ、栂尾ノ明慧上人ニ贈ラレシヨリ、幽人淸賞ノ具トナリヌ、足利ノ公方慈照院義政ハ天下ノ政事ニ倦ミ、職ヲ其子義尙ニ讓リ、東山東求堂ニ閑居シ、銀閣ヲツクリテ、鹿苑公ノ金閣ニ比シ、猿樂ヲ修シ茶禮ヲ玩バレシヨリ、其道次第ニ世ニ廣マリ其道ノ名人輩出セリ、中ニモ太閤秀吉ノ頃堺千利休其譽レアリ、古器ノ價ナド定メシニ、後ニハ私慾デキテ、己ト親疎好惡ニヨリ、新シキヲ舊シトシ、贋ヲモ眞トナシ心ノマヽニ振舞シカバ、太閤怒ラセ給ヒ、カラメテ之ヲ誅セラレヌ、其道ニトリテハ希代ノ人ト稱スレドモ、名敎中ヨリコレヲミレバ、大ニ間然スベキ人也、此時二條院ノ御陵洛北舟岡山ニアリケリ、然ヲ利休其御塔石ヲトリヨセテ茶亭ノカザリトシ、餘レル石ヲ以テ手水鉢ナドニ用ヒシガ、如何思ヒシニヤ踏石ニマデハセザリシ由也、昔周室衰ヘタリシ時、楚子鼎ノ輕重ヲ問シダニ淸議コレヲ

不レ許、イカニ朝家ノ權武家ニ歸シタリトテ、天ツ日嗣ハ未地ニ墜ズ、宗易ガ茶天下ノ觀ヲ極ムトモ、伯夷ハ酌マジト覺エ侍ル、文王ハ土中ノ枯骨ヲ得給ヒテモ、深クコレヲ埋メ給ヒキ、王者ノ政ハ孟春ノ月ニハ掩骼埋胔事、恩枯骨ニ及ブ也、加藤淸正ハ身武人タリトイヘドモ、南面シテ孤ト稱ス、人ノ仰ギミテ法ヲトル處也、シカルニ山科元慶寺ニ有シ僧正遍照ノ塔ヲ本國寺勸持院ニ引而燈籠トナシ、喫茶ノ興ヲ助シトゾ、悖逆ヲ論ズレバ利休ノ下ニックトイヘドモ、其任ヲ論ズレバ其身君師ノ責アリ、國祚ナガヽラザルモ故アル事ニヤト思ハル、茶義政ニ成リテ利休ニ至ル、其人ヲ見テ其道ヲ思フベシ、高貴ノ茶ヲ賞シテヨリ終ニ天下日用ノ具トナル、精麤品ヲ同フセズトイヘドモ、終ニ一日モスツベカラザル者トナル、近來髮ニ膏ヲ用ルト、神祠ニ燈籠ヲ點ズルトハ、同ジク廢シガタキ品トナル、サル樂ハ昔ハ只アヤシクヲカシキ事ナリシヲ、義政修シテ觀世觀阿彌作リ出シ、能ト云者ニナリヌ、武家古樂ヲ廢セシカバ、今ハ武家ノ樂トナリヌ、然レバ當時小笠原ノ禮ト聊カ禮樂ニ備フベシ、サテ三絃ハ元ノ小山ノ詞ニ、「三絃玉指雙鉤手、小字題贈ニ玉娥兒ニ」トアレバ、元ノ頃ヨリアルヨシ貝原イヘリ、サレドワガ豐中ニ傳ル所ハ、永祿六年大友氏ヨリ石松檢校ヲ朝鮮ニ使セシニ、洋中風ニアヒ漂流シテ琉球ニ至レリ、其俗蛇ヲ避ルトテ常ニ鼓弓ヲ人ゴトニ彈ズ、石松コレヲ習ヒ豐後ニ歸リ、此器ヲ制シ組ナド云手ヲツケテ玩ビケルニ廣マレリトモイヘリ、淨璃瑠ハ小野ノ於通、太閤ヨリ昔紫式部淸少納言各文ヲ著セリ、ナンヂモコレニ習ヒ一書奉ルベキヨシ承リ、退イテ思フニハ、何レ古人ノ筆

ニハ傳ブベカラズトテ、義經東下リ矢矧ガ宿ノ淨瑠璃御前ト云女ニ懸想シテ通ヒケルコトヲ面白ウ作リナシテ秀吉ニ奉リシカバ御感ニ入、殊ニ時ノ人モヽテハヤシケルヨリ、後ニハ節ナドツケ色々ニ昔ノ事ヲ作リ出シ、西ノ宮傀儡師ト一ツニナリ、繰（アヤツリ）ト云者ニナリ、又俳優コレト並ビオコリテ偶ヲナセリ、俳優コヽニ歌舞妓ト云、妓ハ女ノ稱ニシテ今歌舞妓ハ男子ナリ、慶長以前人僧衣ヲ著テ鉦ヲタヽキ、佛號ヲ唱テ念佛踊ト云者アリシニ、同十九年ノ頃名名古屋山三郎ト云者出雲ノ巫女國ト云者ニ密通シテ、國ニ刀サヽセ、頭ヲツヽンデ早歌ヲ敎テ舞セケルニ傚ヒテ、ツヒニ男子女ノ裝ヲナシ、且舞且婬ヲ賣事ニナリヌ、寛永ノ頃遊妓ノ禁有シヨリ殊ニ盛ニシテ、往々女子ニ混ジテ事ヲ過ツニヨツテ、官頂髮ヲ去シム、因テ紫華巾ヲ製シテ首飾トス、亦宛然トシテ婦人也、今復稍ク頂髮ヲ長シテ昔ニ復シヌ、躍歌舞妓名ハ昔ニシテ、物ハ昔ニアラズ、ケ樣ノ物ハ其大ナル物ニシテ、其小ナル者ハ擧テ數フベキニアラズ、サリトテ人情ノ赴ク所ヤムベキニハアラザレドモ上一人ヨリ下億兆ニ至ルマデ、天ヲ敬シ天ニ事ル事ワスルベカラズ、上施ス所ノ者ハヒロウシテ、下ノ施ス處ノ者ハ狹シ、廣狹施異ナリトイヘドモ、分ニ從テ天ニ事ルニ於テハ異ナルナシ、天地ノ大德ヲ生トイヘバ、生ニ悖ルヲ不德トス、故ニ天地ニ生々スル物ヲ戕賊スル事、最大ニ畏ザルベケンヤ、書ニ無益ヲナシテ有益ヲ害スルコト勿レト聖人モ警メ玉ヘリ、今ノ人ノ弄ビ半ハ無益ニシテ有益ヲ害ス、天地生々ノ德ニ悖ル事ナリ最國初ニ比スレバ、田野闢ケタルモ多カルベケレドモ、ソレハ又人モ增タリ、今ノ世ニ居テ古ヲ思ヘ

バ、今節儉ヲ盡ストモ、猶古ノ侈レルニ齊シカルベシ、然ヲマシテ游惰ニシテ奢侈ナルヲヤ、畏テモ猶畏ルベキ事也、然レバ今日庶人ノ厚生ヲ謀ラントナラバ、唯儉勤廉恥ノ風ナルベシ、儉勤廉恥ノ風興ラザルハ制度ノ立ザルヨリ也、制度ハ則禮樂ノ制度也、制度立ザレバ禮樂モ施ス處ナシ、後世ノ風俗ニ染ミ只利ノミ是ニ慣ヒタル人ハ、禮樂ノ道ヲトケバ迂濶也トテ笑也、サレドモ國家長久永世平安ノ道、禮樂制度ニアラザレバ立事能ハズ、サレバ漢ノ高祖身匹夫ヨリ興リ、秦ヲ亡シ楚ヲ斃シ、一時ノ豪傑ヲ役使スル事、嬰兒ヲ掌上ニ弄スルガ如クナリシカドモ、禮制立ザリシカバ、宴ヲ賜フ折節ナドハ群臣功ヲ爭ヒ、劍ヲ拔キ柱ヲ擊チ、狼藉如何トモスベカラズ、叔孫通コレガ爲ニ弟子ト禮ヲ肄ハシ、終ニ朝儀ヲ引シカバ一朝肅然トシ震恐シ、大ニ敬ヒ謹メリ、高祖大ニ說ンデ、吾廼今日皇帝ノ貴トスルヲシルトアリシ也、高祖ハ昔ノ高祖也、秦楚ヲ挫キシ勢ニモ及バヌ所ヲ治ルハ、斯文ノ德也、禮教ハ人ヲ未然ニ治ル者ニシテ、政刑ハ罪ヲ已然ニ戒ムル者也、已ニ然ルヲ戒ムレバ、民免レテ恥ルコトナシ、未然ヲ治レバ、恥有テ且格ル、廉恥禮讓ノ風興ラザレバイカデカ利用厚生ノ道行レン、噫孔子ノ聖ヲ以テダニ行レザリシ事ナレバ、トカク人請合ヌモ尤也、周公ハ禮樂ヲ制作シテ、周家八百年ノ基業ヲ開キ、王莽ハ禮樂ヲ制修シテ其身ヲダニ保ザリケリ、禮ハ其人ヲ待テ行ルル物ニシテ、其人ニアラザレバ事ヲ擾ルモシルベカラズ、縱事ヲ擾ルトモ、擾ルハ其人ノ罪ニシテ、禮教ノ罪ニアラズ、詩ニモ「飲レ之食レ之、敎レ之誨レ之」ト云、論語ニモ既ニ富ム、コレヲ敎ヘント云、孟子ニモ「有ニ恒産一者、必

有恒心、無恒産者、必無恒心」トモイヘリ、誠ニ見ハ饑タルニナキ、妻ハ凍タルニ號バヽ、人夷齊ニアラザルヨリハ、孰カ廉恥ノ操ヲ保タン、晋嘗テ正シク聞キス、去ヌル荒年ニ民ウエルモノドモ多カリシ中ニ、某ノ處ノ一民饑ヲ忍ビ難クテヤ有ケン、人ノ圃ナル蕪抜ケルヲ、其主見咎ケレバ最恥カシク思ヒ、衣打カヅキ臥ヌルガ、終ニ食ヲ絶テ死シケルトゾ、カバカリ狷介ノ人ニテモ、饑寒ニハ操ヲ過ツ也、此所ヲヨク〳〵考レバ、罪ハ人々己ガ造ル様ナレドモ、民ニ上タル人ノ德ヨリ起ル事ナリ、然レバ人主ヲ始トシテ、コレニ羽翼タル輩自身ヲ責ザルコトヲ得ンヤ、此故ニ政ハ生ヲ厚フスルニアリ、生ヲ厚フスルガ爲ニ用ヲ利ス、生薄ケレハ貪ラザル事ヲ得ズ、生厚ケレバ貪ル心ウスログ、タトヘバ溺ヲスクフガ如シ、自水ニ溺ル、時ハ、子溺ルトイヘドモカヘリミズ、自舟中ニ安ズレバ猫犬ノ溺ヲ見テ打過ル人ハナシ、只勢ノ足ルト足ザルトノ間ナリ、故ニ民生厚フシテ然シテ後禮讓廉恥ノ風唱ベシ、民生厚シトイヘドモ、禮讓廉恥ノ風興ラザレバ、華奢放恣ニ赴ク、華奢放恣ナレバ用タラズ、用タラザレバ又貪ル、故ニ賄賂爭奪オコル也、夫君ハ臣ノ表也、臣ハ君ノ影ナリ、表正ケレバ影直シ、表傾ケバ影斜也、君ニシテ身正カラザレバ、令ストイヘドモ行レズ、サルホドニ國家ニ長トシテ社稷ヲ守ノ人ハ、國家ハ祖宗ノ國家ニシテ社稷ハ民生ノ社稷、其一身ヲ奉ズルガ爲ニ非ザルヲ知ルベシ、天地ノ大德ヲ生ト云、生ノ德ヲ害スル者、乃天地ニ悖ルモノ也、此故ニ漢書ニ、「背本而趨末、食者甚衆、是天下之大殘也、淫侈之俗日々以長、是天下之大賊也」トアリ、人貴賤ノ隔アレドモ、齊シク天

地ノ子ナレバ、大人モ小人モ天ニ敬シミ事ルニハ隔ナシ、天地ノ大徳ヲ害スルハ最恐ベキコト也、然レバ、各其分ニ應ジ、殘ヲフセギ賊ヲ戒シムベキ事也、其事ハ乃經濟也、迺利用厚生正德也、サレバ利用厚生何程ヨキ道ヲ得テモ、己ガ德ヲ正サヾレバ、令スル所好ム所ニ反スレバ、民從ハザル習ニテ、禮讓廉恥ノ風オコラズ、イカナル良圖善謀アリテモ、コレヲ起スニ從ヒテ、下吏諸有司金設ケノ趣向トナリ、コレヲ餌トシテ惡徒財ヲツリ人ヲシヘタゲ、今マデアラヌ害ナド引出シ、功ナラザルノミカ、世ノ笑トハナリ侍ル、此故ニ三事利用ヲ初トシ、厚生ヲ本トシ正德ヲ主トス、德正シキ時ハ人感化ス、其指揮水ノ埿ニオモムクガ如シ、何ノ事カナラザラン、君則陶冶也、下ハ則土鐵ナリ、其器ヲナシ用ヲナサン事ハ全ク陶冶之手中ニアリ

價原　終

予此書成テ後、桂秋齋ノ間語ヲ得テ讀ニ、足利ノ比ノ物價載セタリ、曰

室町殿日記に云、一中間衆の木綿三十五匹買取御役船彥三に上せ申候可ㇾ有ㇾ御受取ㇾ候、こつまもめんは、今程壹匹に付壹匁六分七厘の賣買にて候、是もこつまにをとらぬ木めんにて候、壹匁三分ヅツにて候間、其御心得可ㇾ有ㇾ之候、

一御局衆はした衆切米拾貳石うり拂可ㇾ申由被ㇾ仰越ㇾ候、此頃兵庫の賣買壹石に付六匁三分五りんの

由、すいたや新左衛門申、其御心得可レ有レ之候

十二月二日　　　　林甚五郎

岡村忠右衛門殿

佐野權助殿

飯尾五右衛門殿

又壺寶錄引ニ武備志日本考一、曰、銀一兩換ニ三百三十三文一、零用三文抵ニ一分一、毎ニ米一石一常價一兩茅之儀明萬曆間人恐是文祿前後之事、室町日記ニ比スレバ又其價減ズ、亦我ガ言ノ妄ナラザルヲ徵スルニ足レリ、故ニコレヲ擧ゲテ、見ン人ノ考證ニ供ス

弦菴先生云、此書論ニ六府金銀輕重的不レ可レ易、不レ可レ不レ使ニ人君知ニ此意一、當下與ニ藤田幽谷勸農或問一並傳上也

價原終

春秋社日醮儀

大江匡弼著

春秋社日醮儀叙

蓋聞、我神聖之國、古立靈畤於鳥視山中、天富命陳幣、祝詞禱祀皇天、徧秩群望、以答神祇之恩焉、至于磯城瑞垣朝、亦祭八拾萬群神、定天社國社、洎于呂泰統御時、所載祀典大小之神祇、竝預祈年月次、新嘗國幣等之醮者、惣三千一百三拾二座、祭祀之、於春於秋、或於臨時、則禮奠之盛至矣、盡矣、然猶於此篇也、玆有所感、欲使天下之諸民、普識我神祇之有功於稼穡、而有其祈報之儀、諭之以漢土之社稷、教之以本朝之醮儀、而述其大意、僭之名號神仙靈章春秋社日醮儀、是竊欲使準之於漢社祭、以祈報於我神祇、而彌期五穀豐饒、國家泰平之無疆而已

天明元年辛丑仲秋上句　　菊丘臥山人文坡江匡弼書之

神仙靈章春秋社日醮儀惣目次

一　五穀御祖神土御祖神飯生大明神の來由
一　山州紀伊郡深艸稻荷神社祭式古禮覓
一　農業の人土御祖神五穀祖神を祭祀すべき事
一　農業の人常に會得べき一大事幷に饑饉の說
一　漢土報田の祭蜡の祭の式百神の祭祀の事
一　本朝神代大地主神咒にて蝗虫の害を除く事
一　本朝祈年祭幷に祈年穀奉幣廿二社へ勅使事
一　春秋の社日幷に社祭の故實楊鳳閣が辨論
一　社を祭る故實中霤を祭る義天地を尊親解
一　神仙春秋社の祭社壇の式幷本朝にて祭る社圖
一　本朝の社式五方の土を以て爲の疑問幷に答釋
一　漢土春秋の社の祭社主社樹幷びに粢盛の事
一　王者四方の諸侯に封ず社の義幷に授茅土の事
一　月令廣義卷の六、二月の令政敎節令の拔萃
一　同じく卷の十五、八月の令政敎節令物候の拔萃

神仙靈章春秋社日醮儀

皇京　菊丘臥山人江匡弼文坡著

本朝漢土農業の始り幷に保食神の來由

後魏の高陽太守賈思勰が齊民要術の序曰、蓋し神農耒耜を爲り以て天下を利し、堯四子に命じて敬むて民の時を授け、舜后稷に命じて食を政の首とし禹土田を制して萬國に作り、又殷周の盛なる詩書に述る所、要民を安ずるに在と、又管子曰、一農耕さゞれば民に饑る者ありと、宜なる哉、夫農業の術は萬民を養ふの本なり、農術精しからざれば、五穀を得る事少く、萬民生養をとぐる事難し、故に漢土

の炎帝神農氏といへる聖王、はじめて耒耜を爲りて民に耕す事を敎たまふ、故に此帝を神農氏と號しぬ、博物志に曰、神農五穀を造ると、又和劑方の序云、神農百草の味を嘗て、以て萬民の疾を救ふと又賈誼新書云、神農百草の實を嘗て鹹苦の味を察し、民をして穀を食はしむと、其後唐帝堯の時に、民に農業の時節を授敎へたまふ、虞帝舜の時に、后稷を以て農業を敎へたまふ、是を以て堯舜の政は、天下萬世帝王の明鑑たり、其後歷代の聖王賢君天下國家を治るに、必ず農業をすゝめ稼穡を敎るを以て先務としたまふ、夫我大日本國に於て農業の始を考ふるに、日本書紀神代卷に云、天照大神天上に在して曰、葦原中國に（今の豐前の國の中津をいふなり）保食神といふ神あり、宜しく爾月夜見尊行て見よとのたまふ、其時月夜見尊敕を受て葦原中國に降りて、已に保食神の許に到りたまふ、此時保食神すなはち首を廻して國に嚮しかば、口より飯出たり、又海に嚮しかば、鰭の廣鰭の狹もの（鰭の廣鰭の狹ものとは、大魚小魚をいふ、鰭は和名はだ、俗にひれといふ）又山に嚮しかば、毛の麤毛の柔（毛のあらもの毛の柔とは、けだものをいふ）亦口より出、その品物を悉く備て、是を百几に（百の机なり、只數の多きをいふなり）貯て饗たてまつる、（饗は、俗にいふ御馳走もふす也）是時に月夜見尊忿然て曰、穢はしき哉、鄙かな、汝が口より吐る物を以て我に食しむやと、廼劒を拔保食神を擊殺したまふ、天照大神この事を聽し召て、怒たまふ事甚だしふして曰、月夜見命汝は是惡神なりと、一日一夜を隔て離て住たまふ、其後天照大神復天熊人を遣して往て看せしめたまふ、是時に保食神實に已に死たり、然るに其保食神の頂に牛馬化爲り、（化爲とは、頂に忽に牛馬あらはれ出るなり）顱の上に粟生じ、眉の上に蠶生じ、眼の中に稗生

じ、腹の中に稲生じ、陰に（陰とは、男根女陰をいふなり）麥および大豆小豆生ず、依て天熊人悉く取持去て、天照大神に奉進る時に於て、天照大神喜て曰、是物はすなはち顯見蒼生の（顯見とは、纂疏曰、顯見とは現在といふ事なり、蒼生とは、黔首なりと、黔首は萬民をいふなり）食て活べきもの也とのたまふて、粟稗麥豆を以て陸田種子と爲し、稲を以て水田種子と爲したまふて、又因て天邑君をさだめてその稲種を以て、始て天狹田および長田に植しめたまふに、其秋の垂穎八握に莫々然（八握に莫々然とは、稲長くふつさりとして、しなひよく實のりて垂たる形をいふなり）甚だ快し、又口裏に蠶を含て、すなはち絲を抽ことを得たり、此より始て養蠶の道ありと神代卷に詳なり

五穀御祖神土御祖神飯生大明神の來由

夫本朝の農業と養蠶の道は、天照大神の御代に始る事は神代卷の説の如し、抑保食神とは、日本書紀纂疏上之三曰、保食とは食物を保護るをいふ也と、神代卷一書曰、伊弉諾尊伊弉冊尊飢かつし時生る兒を倉稲魂命と號す、及び土神を埴安神と號く、然ふして後悉く萬物を生たまふと、講述抄云、倉稲魂をうけのみたまと訓ずべし、豐受ともふすも、豐受といふの辭なり、保食神などいふも皆五穀の神名なるべし、順の和名鈔に、稲魂和名は宇介美太萬、俗には宇加乃美太萬といふとあれど、古事記には宇迦之御魂とあれば、何れか是なる知らず、日本紀纂疏に曰、倉稲魂は五穀神の名なり、倉とは五穀を積の處なり、稲とは五穀の長なり、魂は神の義なり、今大和國廣瀬社是なり、神祇令曰大忌祭は

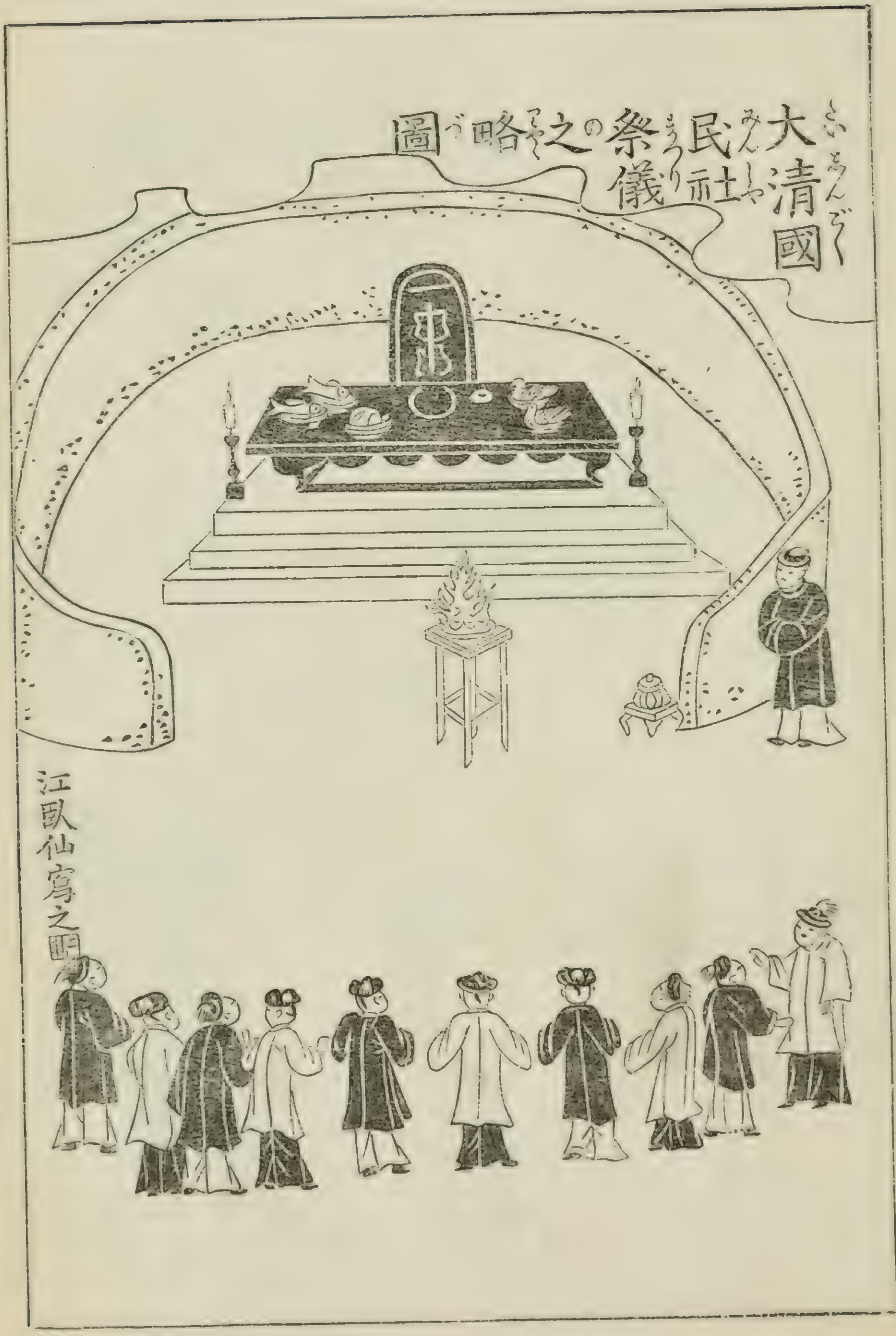
廣瀬龍田の祭をいふなり、沴風をして吹ざらしめ、稼穡滋く登しめんが爲に此祭ありと、又神代卷講述鈔に、保食神とは、保は五穀の名なりと、今山城國紀伊郡深草の稻荷大明神は、神傳に云、稻荷はすなはち土祖神、大山祇、倉稻魂の三社にして、深草山の上に飯を盛たる如き三の峰あれば、飯生の山とも飯生の森とも號たり、人王四十三代元明天皇和銅元戊申年、石田臣深草の縣主內舍人押の使として奧州に趣き蝦夷の亂賊を征伐に下る時、此飯生の社に祈願して、遂に蝦夷を平治ぬ、和銅二己酉年に御倉上社荷田社田中社をば飯生山の麓に祭る、同四年辛亥年に飯生山に倉稻魂の祭りを始むと、今は飯生を稻荷と書なり、諸神記云、和銅四年二月九日倉稻魂神始て伊奈利山に現ず、地主神は荷田明神なり、其地に是を祀る、故に稻荷大明神と號すと、又公事根源集釋には、和銅五年二月十一日戊午に始て現ずと、又豐葦原卜定記云、辰巳の方に當りて倉稻魂の垂跡あり、夫此神は百穀を播したまふ故に號け奉る、神代の昔より此峰に向ひ玉ふも知らず、只此峰に顯れ玉ふは、人王四十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日に垂跡す誠に諸人を哀憐の御心深く、蒼生作らん物は、草の片葉までも、萬の災を禳ひ玉ふとあれは、農家たる者尊び信ずべき神なり、神祇拾遺にも、稻荷は地主を荷田神と號す、此所に倉稻魂を祀る故にしかいふと、諸神記の說と同じ、又云、宇賀御魂中伊弉諾尊上伊弉冊尊下專女三狐の由緣に依て木狐を安置すといへり、匡弼按るに專女は白澤靈黃專女紅百目の三狐の神をいふなり、類聚神祇本源云、專女三狐神と、又新猿樂記云、伊賀專女と、河海抄云、伊賀伊勢にては白狐を

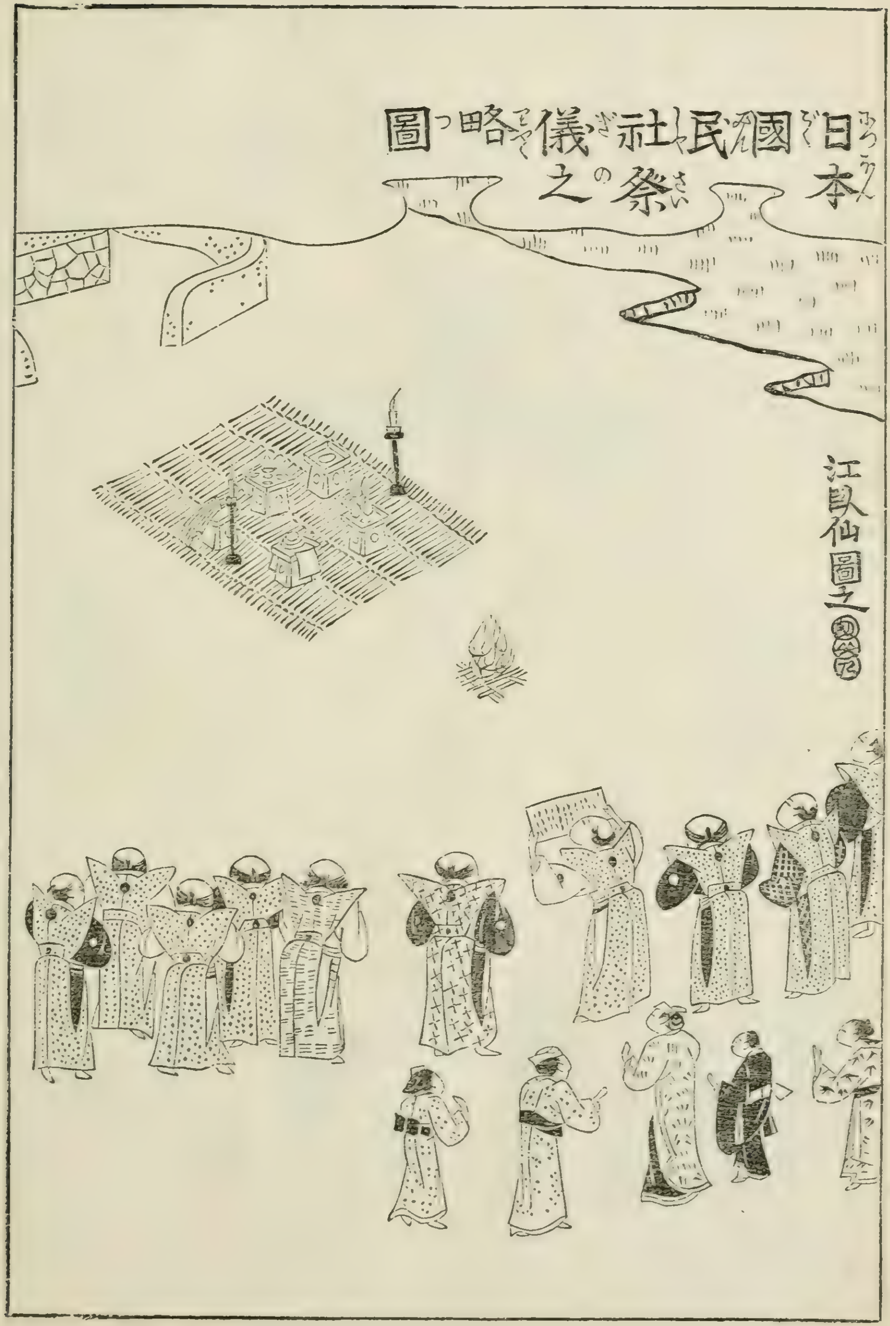
專女御前といふ、今神前に白狐を置は此縁なりと、鎭座傳記云、宇賀美多麻神三狐神同座の神なりと、又云、宇賀美多麻神是伊弉諾伊弉册二神の生所といへり、又素戔嗚尊の女に宇賀魂稻女あり、別神なり、混ずべからず、神名略記云、屋船豐宇氣姫命は是稻靈なり、俗に宇賀美多麻神といふと、又廿二社註式云、稻倉魂神、一名は豐宇氣姫命と、諸説是の如し、何れも五穀の神と爲す、又雍州府志云、稻荷の出現は和銅四（一作レ五）年二月九日（一作二十一一）なりと、長暦を以て是を推ば、九日は初午日に當る、是を以て今諸人初午日に參詣すと見えたり、新撰六帖に光俊朝臣の歌に、「二月やけふ初午のしるしとて、稻荷の杉のもとつ枝もなし、」と此歌の杉の故實は、遂て一書を著し稻荷の神德を述ん、其節辨ずべければ、今は是を略す

山州紀伊郡深草稻荷神社祭式古今禮奠の式

右の神傳國史等に載るを看れば、誠に稻荷大明神は我朝五穀の祖神にして、豐葦原卜定記に說くが如く、此神は諸人を哀憐たまふ神慮深くまし〳〵て、農家の田畠に作る所の一切の物は、草の片葉までも萬の災を穰ひたまふとあれば、農家は別して此神德を仰ぎ信ずべき事なり、されば稻荷の祭式は上古は甚だ大壯なる事にて、善盡し美盡せりと見ゆ、文章博士藤原明衡が著す明衡往來に云、稻荷祭の事神輿渡り給ふ間、禮奠の嚴しき（註云、禮奠は、祭の威儀なりと）誠に如在の儀を存せり、最も恭敬すべし、供奉雜人幾

千萬といふ事を知らずと云云、此全文を見るに、公卿百官皆祭式拜見の爲に車を街に列しと見ゆ、此藤原明衡は後冷泉院の（人王七十代）御世の人なり、（安永十辛丑年凡七百十有九年になる）是を以て考ふれば、往古の祭禮の式は是嚴重に美々舗かりしに、中世亂世に及びて祭禮の式次第に衰微し、近世に到りては禰宜等若干神輿を供奉し、只氏地を渡御なし奉るのみなりしに、去安永三甲午年、勅裁の御綸旨をなし下され、數百年來退轉衰微せし祭祀の儀式を御再興あらせられ舊の如く祭儀嚴重に、行粧の華麗、善盡し美盡せり、是に於て稻荷五社の靈神怡悅感納まし〳〵て、年増に五穀豐饒に、萬の穀まで彌益に盛熟し、天下泰平國家安寧にして、萬民こと〴〵く肆に歌ひ、野に抃て安く樂めり、是まつたく此聖代に當りて、かしこくも五穀の祖神倉稻魂の神靈を如在に祭祀せたまふの致す所、照然として萬民こと〴〵く是福澤を蒙る者なり、夫士農工商の四民及び餘の民に至るまでそれ〴〵の家業あり、家業あれば其家業の祖神あり、その祖神といふは、武家にては其武の道を敎始めたまふ神、武の道を守護神（まもりのかみ）あり、又農家には其農を始め敎し神、農の道を守護神あり、工家には始て工の道を敎し神、工の道を守護の神あり、商家には商の道を始し神、商の道を守護の神あり、其餘の家業的にも又それ〴〵の神あり、是をすべて祖神と稱し、守護神といふなり、然れば其家業それ〴〵の祖神守護神を恭ひ敬み、祭祀（まつり）て其神恩を報ずべき事なるに、其神恩を報ずる事はかつて致さず、只佛のみ信じ恭敬して、其佛恩を報ずるなど丶種種の佛事は致せども、其家業にて己が身命を保ち、父母養子を養ひながら、其神恩を報ずる事を識ざ


大清國民社祭儀之略圖
たいしんこくみんしやまつりのあらましのづ
江臥仙寫之


日本國民社儀之祭略圖
江 臥仙圖之

る者は譬ば山城の伏見街道に住居する諸の商家、年毎の二月初午に稲荷大明神の御恵にて、年中の貯を致すほど商ひを致し、金銀をもふけながら其神恩を識ず、藤森の氏子なりと稲荷の祭祀を致さゞるが如し、若人其家業の祖神守護神の神恩を深く思ふて、其祖神守護神を平常に恭敬ひ、祭祀て其神恩を報ぜば、其人家業繁昌、子孫連綿、息災無病、延命長壽、金銀米錢充滿し、吉祥如意なる事何の疑ふ所かあらん

農業の人土御祖神五穀の祖神を祭祀べき事

夫士農工商の四民は、世界に於て一も是を闕ぐべからず、然りと雖ども農は此中に於て一日も又缺ぐべからず、其故は聖人の政は敎養の二にあり、しかうして其序を論ずれば、養ふを先と爲し、敎を後とす、是富しめて後に是に敎ふるなり、何となれば、食は惟萬民の天なり、農は政の本とす、民の道たる、恒の產なき者は恒の心なしといふて、夫人はそれ〳〵の家業なければ、心常に轉動奔走して、散亂する故に常の心なし、常の心なき則は自然と惡心起りて、遂に其身命を亡すなり、恒の家業ある者は、其家業を出精さへすれば、自然と金銀米錢集り、衣食滿足て、自然と禮義興るべく、敎化も行はるべし、古語曰、禮義は富貴より生じ、盜賊は貧窮より起るといへり、此故に古の明君は民の家業を制するを以て先務と爲たまふ、其民の家業を制する道は稼穡を（稼はうゆる事、穡はかつてこたす事をいふ、只農業をいふ也）敎るを以て

先とす、故に舜王は棄といふ人を以て后稷と爲し、民に稼穡を敎へ、五穀を樹藝す、五穀熟して萬民養育す、是に於て契といふ人を以て司徒と爲て、敬むで五敎を敷く、五敎行はれて人倫の道明なり、是聖人の政をしたまふ次第なり、然る故に人民の養ひ豐にして人倫の道も明になりしなり、是を以て漢土の堯王舜帝の政は、天下萬世の帝王の龜鑑たり、其より後代々の聖王賢君天下國家を治めたまふに、必ず農業をすゝめ、稼穡を敎ふる事を先とし、人倫の道を正すを以て本としたまはざるはなし、然れば農民の家業耕作の道ほど、世に大切なる道はなし、漢土本朝ともに農業の道始りてより、今の世に到り、何國の農民としてか其農術に疎き者はなく、皆こと〴〵く其道を得たりと云べし、然れば此上に何をか說む、且漢土に於ては農政全書齊民要術等の農書少なからず、我朝に於ては近世農業全書といへる、國字にて幼童婦人にても讀易きに於ては、猶以て何をか言む、然るに此書を撰びし愚意は前にも說が如く、猶この上に其農業の祖神と、其守護神とを祭祀り敬み祈らば、益以て風雨和順に、十日の風枝を鳴さず、五日の雨塊を穿たず、五穀能盛熟し、萬穀よく豐饒にして、天下泰平、國家安寧、萬民をして安樂ならしめん、是農民の勳功といふべし、豈古語にいはずや、五穀熟して萬民安しと、故に今士工商の事をさし置て、先農業の事を說、その農業の祖神と守護神、及び農家の故實を一二擧て、其神恩の深き事を示し、且祭祀の式法を略說す

農業の人常に意得べき一大事幷に饑饉の説

夫農業の術は人を養ふの本なり、農術純粋からざれば五穀熟する事なく、萬民を生育する事能はず、されば五穀登熟ざる年を凶年といひ、又は歳悪とも饑饉年ともいふなり、月令廣義曰、五穀熟せざるを饑といひ、野菜の熟せざるを饉といふと、又五穀皆熟る年を大有年といふ、又は有年とも、又は稔歳ともいふ、註に稔は年なり、五穀熟するを稔といふ、即豊年をいふ也、又は樂歳ともいふ、夫凶年にして饑饉なれば、大地より生ずる一切萬物こと〴〵く生ぜず、依て萬民食盡て皆餓死するに至れば、子は親の餓死るを如何ともすべき様なく、親は子の餓死るを救ふ事能はず、夫飢死すれども、妻是を如何ともすべきなく、街に倒れ道路に躓れ、溝洫に斃れ、家裏野外に斃て、横死する者算を散すが如く、哭叫ぶ聲阡陌に滿、是を見彼を聞ときは、誰か是を悲まざらん、誰か是を哀憐ざらんや、嗟、是を思へば萬民常に願ふべきは、天下泰平、國家安寧、五穀成就、萬穀豊饒と朝夕に神明に向ひ、神仙を仰で此一大事を祈禱べきもの也、夫農業の人は此一大事を一心に忘れず、常に思ふべきは、世界の萬民の身命は農業の者、我等が預り物なり、其故は萬民は皆五穀を食ふて身命を保養ふものなれば、五穀成熟せざれば其身命を保養ふ事能はず、然れば農業の人常に天地の神祇に祈りて、五穀及び萬の穀成熟なさしめ玉へと丹誠を抽でなば、たとへ年の運凶しく萬穀成熟ざるに遇ふとも、其

丹誠をこらし成熟を祈る者の田畠は、萬穀よく成熟豐饒なるべき事、何の疑ふ所かあらん、若凶年に遇て、其人の田畠のみ五穀成熟し、萬穀豐饒ならば、其人は古今希有の人にて、天下萬民の爲には神仙とも稱すべし、管子曰、一農耕ざれば民に饑る者あり、一女織ざれば民に寒者あり、倉廩實して禮節を知り、衣食足て榮辱を知ると、又曰、人生勤あり、勤る則は匱しからずといへり、農家の人の勤は耕作にあり、勤則は五穀匱しからざる事昭然なれば、農家の人は耕作を一大事と觀念し、神仙に祈願して、五穀及び萬の穀成熟を希ふべき事專一にすべし、今是を神仙に祈願してといふに附て、或人予に問て曰、夫五穀成熟を祈らば、天地の神祇に祈てとこそいふべきに、神仙に祈るべしとは、師常に仙敎を信ずるを以ていふか、五穀成熟を祈るに、何ぞ神仙を祈る事を用ひんと、予答曰、善哉、汝が問ふことや、夫仙とは凡夫を去て聖人神明佛陀に遷るの義なり、遷は仙なり、仙は遷なり 其事予が著述す日本列仙全傳に略これを辨ずるが如し、夫我朝の諸神は皆仙なり、其故は我朝の上古の人は皆心正直質素にして、虛靜恬淡無爲なれば、自然と眞一の靈旨に契ふて、神靈照然として一面の明鏡の如く、陰陽不測虛靈不昧、淸淨明々妙靈なり、依て天下を統御す國王を日輪に比べて、天照大神と號し奉る、祭る所を日滿といふ、故に神語類曰、日の四海に滿るを神といふとあり、動く所を日止といふ、其訓一にして直に體なる則は日とよび、用なる則は日と讀む、隨つて人と神との訓を分たり、天照太神は聖政私なく、日輪の四海を照すが如しといふの尊號なり、上古の君臣ことごとく正直質素、無爲淸淨なり

しかば都て神と稱し、其代を神代と號す、故に神は仙なり、仙は神なり、又佛をも仙といふ、故に佛說本行經曰、忍辱修行三千二百劫にして始て金仙を證す、號して淸淨自然覺王如來といふと、又華嚴經の音義曰、佛は是大仙なり、身は眞金色、故に此に佛を金色仙といふと、又般若燈論十曰、二乘菩薩も亦仙と名づく、佛は其中に於て最尊上の故に大仙と名づくと、又祖庭事苑二曰、漢の明帝摩騰に問て曰、佛道の中にも仙の號ありやと、摩騰答曰、機に隨ひ應に顯る故に仙の號ありと、是を以て見るべし、本朝の諸神人の信力に隨ひ、神形を顯し人を守護り、或は災難を除き、危難を救ひ玉ふ事を聖人を仙といふも皆此理にて、一心眞一の靈旨に契ふを以て、予は皆是を神仙と稱し尊び敬ふなり、又漢土我朝に於て、仙人といふ者數多あれども、此眞一の靈旨に契はず、眞一を大悟せざる仙人は、神仙眞人とはいふべからず、皆術士方士といふ者にて僞仙なり、誠の仙人にはあらず、皆幻術魔法なり、此部分は太平廣記の卷の一などに見えたり

漢土報田の祭蜡の祭百神の祭祀の事

夫農業耕作の事は、本朝にては神代に始まりし事は、前に神代卷を引て詳かに說が如し、又神代卷曰、天照大神天狹田長田を以て御田としたまふ時、素戔嗚尊春は重播種子し、且其畔を（春は重播種子すとは、二度蒔なり、また畔を毀とは、田の畔をきり放つ事なり、畔は田の界なり）毀ち、秋は天の斑駒を放て田の中に伏しむと、然れば我朝に於て上君臣よ

り下萬民に至るまで、五穀を食ふて身命を保ち、安樂に世を渡る者は天照大神の神恩を深く思ひ、其神恩を報ずべき事なり、漢土にて農業を始めたまふは炎帝神農なり、故に漢土に於ては報田の祭といふ事あり、報田の祭とは月令廣義卷の二十九張曰、報田の祭、註に杜氏通典を引て曰、伊耆の代始て蜡の禮あり、古の君子是をして必ず報ず、是を報田祭といふ、其神を先嗇といふ、即神農なり、初て田の事を爲す、故に以て報ず、蜡の禮とは、蜡は禮運の註疏に曰、百神を祭るを蜡といふ、陸田云、蜡は讀て乍といふと、又玉燭寶典曰、蜡は百神に報ずるをいふと、玉篇に、蜡は子亦切、虫の名、又䄍も同じ、祭の名とあり、何れ蜡とは祭の事にて、炎帝神農は農業を始め玉ふ帝なれば、田畠の祖神と爲して祭禮を行ふとなり、月令廣義に、蜡の祭には黄衣を被て黄冠を着し祭るとあり、又唐書には、冬至日前の寅日に百神を南郊に蜡すとあり、夫蜡の禮は詳に禮記の郊特牲篇に見えたり、郊特牲曰、天子は大蜡八、伊耆氏始て蜡を爲す、蜡は索なり、歳の十二月に萬物を合せ聚て是を索饗す、註に曰、蜡は八神を祭る、先嗇一ッ司嗇二ッ農三ッ稅表畷四ッ猫虎五ッ坊六ッ水庸七ッ昆蟲八ッなり、伊耆氏とは堯帝をいふなり、其後の聖人其農業に功ある者に報ぜんと欲して、十二月に萬物を求索て享祭たまふを、是を索饗すといふ也、蜡の祭は先嗇神農を主として、次に司嗇を祭る、司嗇とは上古の后稷の官をいふ、百穀の種を司る神とを祭りて嗇に報ず、嗇に報ずとは、其民に樹藝を敎るの功を報ずる事をいふなり、扨農は古の田畯にて、民に功ある者なり、又郵表畷とは、郵は郵亭の舍なり、田畔畷を相連ぬる處を

標表して郵舍を造爲て、田畯（農業を主る官なり）是に居て以て耕者を督す、故に是を郵表畷といふなり、猫虎とは田畠に猫を迎へて其田鼠を食はし、虎を迎へては田豕を食はしめんが爲に、猫と虎を養ふて使は必ず祭るなり、蘇東坡曰、猫虎を迎ふるとは、猫の尸と虎の尸とを爲りて是を祭る也、實の猫虎には非ず、扨又坊とは堤なり、以て水を蓄へ、亦以て水を障ふ所なり、水庸とは溝なり、以て水を受て以て水を洩す所にて、是田畠へ水をやる溝をいふなり、是等皆農業の備なり、已上この八の物は、耕作に要用の物なれば、是を祭りたまふものなり、其祭る時に祝辭（のつと）あり、祝辭（のつと）に曰く

土反ニ其宅（とたく）一、水歸ニ其壑（あな）一、昆蟲毋レ作、草木歸ニ其澤一

此祝辭の意を解していはゞ、先土は其宅に反とは、宅は猶安といふが如し、土安（つちやす）ときは崩れ圮るゝ事なく、水は其壑に歸るときは泛溢ことなし、昆蟲は螟蝗の屬にて、稼を害する者をいふ、作ること毋とは、作は起なり、稼を害する蟲は生ずる事なかれといふ義なり、草木は其澤に歸れとは、草木各根を藪澤に歸して、田畠に生ずる事なかれといふの祝辭の意なり、又郊特牲曰、蜡の祭は仁の至り義の盡せるなり、又周禮籥章云、國に蜡を祭る則（とき）は豳頌を歙き、土鼓を撃以て老物を息ふと、又郊特牲曰、黄衣黄冠して祭るは、田夫を息ふといへり、野夫黄冠す、黄冠とは草服なり、註に、月令に先祖五祀に臘す、農を勞ふを以て是を休足す、此祭是なりと、草冠は草野の服といへり、猶詳なる事は其書に往て見るべし

本朝神代大地主神神咒にて蝗虫苗の害を退く事

右に載る蜡の昆蟲は、螟蝗の屬にて、稻を害するといふ義に附て、昆蟲の神咒あり、古語拾遺云、昔神代に大地主神田を營る日、牛の完を以て田人に食はしむ時に於て、御歳神の子其田に至り、饗を唾吐て還りて御歳神にこの事を告るに、御歳神怒りて、蝗を以て其田に放つに、その苗葉忽に枯損て篠竹に似たり、是に於て大地主神片巫（志止止鳥）肬巫（今俗の竈の輪及び米占なり）をして其由を占求むるに巫告て曰、御歳神祟りをなす、宜しく白猪白馬白鷄を獻りて以て其怨を解べしと敎へければ、其敎の如く爲すに、御歳神答て曰、實に吾所爲なり、麻の柄を以て挊に作り、是を挊て其葉を以て是を掃ひ、天押草を以て是を以て是を押せ、烏扇を以て是を扇げ、若皆如くして出去らずば、宜しく牛完を以て溝口に置て、男巫形を作りて以て是に加へよ（是其心を厭ふゆゑんなり）薏子蜀椒呉桃の葉及び鹽を以て其畔に斑置と、仍て其敎の如くせしかば苗葉復茂り、年穀豐稔りぬ、是今神祇官に白猪白馬白鷄を以て御歳神を祭るの緣なり、

匡弼 按に、男巫形或書に男莖形、又は男茎形とするなり、我朝は神仙の國にて、神代よりかゝる神咒あり

本朝祈年祭幷に祈年穀奉幣廿二社へ勅使の事

夫農業は天下の政の本なるが故に、漢土の天子は大蜡の祭を行ひて八神を祭祀たまふ、其餘の祭數多ある、皆五穀成熟の祈禱に非ずといふ事なし、我朝は猶更神國なれば、五穀成熟、萬穀豐饒の祈禱、其諸神を祭て其神恩に報ずる神事枚擧すべからず、延喜式卷の第一より第八の卷に至りて其神事を載せ、同卷の第二十二、民部省上第二十三、民部省下第二十六、主稅寮上第二十七、主稅寮下等に見ゆ、又年中行事に二月四日祈年祭ありて、案上案下三千餘座の神を祭る、其所々たしかならざるもあり、國司に各つかはす、諸國にも祈年祭を行ふ、其日南殿にて御拜あり、辰巳の間巽にむけて御座を敷き、莚二枚半帖れいの御禊に同じ、伊勢太神宮を拜したまふ、又祈年穀奉幣といふ事あり、二月の中吉日して奉らる、廿二社なり、上卿陳の座にて使を定む、八幡の使は中納言、加茂、平野、松尾、春日は宰相、其外は四位五位の使幷に公卿、使には次官あり、外記これを催す、廿二社の宣命は、伊勢は縹色の紙、加茂は紅梅色其外は黃色紙なり、又七月に祈年穀奉幣の日のついでを撰ぶ二月に同じと、此事年中行事に詳なり、今是を略す、然れば本朝漢土はいふに及ばず、南蠻北狄其餘の外夷の國といへども、五穀成熟、萬穀豐饒を祈る事はなくてやは有べき、元より農業をなすの人はいふに及ばず、今日五穀を食ふて身命を保養もの、五穀の祖神守護神、土の祖神の神恩は片時も忘るべからず、然りといへども今日其家業世務の事繁き、其神恩を深く思ひ報ぜんと欲ふとも心に任すべからず、然りとて其神恩を深く蒙り、各その身命を保養ひながら、其神恩を報ずる事を欲はず成ざるは禽獸とや

いはん、父母主君の恩を知らざるより淺ましき事なり、仍て意あらん人に教へ諭し奉る、今より五穀を食ふて身命を保養ふ人々は、一年に二度何とぞ五穀の祖神守護神、土の祖神の神恩を報ずる爲めに祭祀をなすべし、其祭祀をなす日は、毎年の春二月の社日と、秋八月の社日とたゞ年に二度なれば、甚だ心易き事なり、春の二月秋の八月兩度の社日は暦に記しあれば、毎年暦を見て考へ知るべし、此社日に右の祭をすれば、五穀成熟、萬穀豐饒にして、天下泰平、國家安寧、家内繁昌、夫婦和合し、子孫長久、金銀米錢倉廩に充滿し、無病息災、壽命永長なるべし、故に人々に勸め奉つる、今より必ず大願を發して、春秋の社日に於て五穀の祖神守護神、土の祖神の祭祀を身の分限に應じてなし玉へ、其祭の式法幷に漢土本朝に於て、社日の故事等詳に左に記して、厚志あつて神恩を報ずる人に諭す者也

春秋の社日幷びに社の祭の故實楊鳳閣が辨論

夫春秋の社日といふは年毎の暦に記すが如し、當天明元辛丑の二月の社日は、二月廿五日戊辰の日なり、秋八月は八日戊寅日なり、運氣暦說曰、春の社日は二月の節に入て、二度目の戊の日を社日といふ、農家に祝する日なり、又秋の社日は八月の節に入て、二度目の戊の日を秋の社日といふ、農家に是を祝すあれど、匡弼按に、年に依てたがふ事あり、暦を見て其年の社日を考へ知るべし、暦林問

答曰、或人問て曰、社日といふは何ゆゑぞ、答て曰、尚書曆曰、社日とは歲毎の春秋祀るべきの社事土地の主なり、稷は五穀の長なり、二月八月は陰陽の中氣なり、二月を春社とし、八月を秋社とす、其百穀實て稼穡成るゆゑ、德に報じて祀る、故に春社は春分に近き戊日、秋社は秋分に近き戊日なり、各民に命じて土地を祭りて惡氣を攘はしむ、夫戊は土なり、故に其戊日を取て是を祭ると、若社日に祭祀を行はんと欲はゞ、其年の曆にて考へ見るべし、夫社日といふは、漢土にて農業の民に社を祭しむるの日なる故、社日といふなり、社といふは是土の神をいふ也、禮記の郊特牲の篇に云、社は土を祭りて陰氣を主とす、君北牖の下に南鄉する事は陰に答るの義なり、日に甲を用る事は日の始を用るとなりと、註に地陰を乘則は社は乃陰氣の主なり、社の主をば壇上に設けて北面す、君北墻の下に來て南に向ふて是を祭るなり、蓋し社は屋せず、惟壇壝を立て、環すに墻を以てす、既に地道は陰を主とす、故に其主を北に向て、君南に向ふて是に對ふ也、日に甲を用るとは、甲は十干の首なり、禮記說義纂訂卷の十に曰、(陽風閣著)社祭レ土而主レ陰、七節　此社禮の義を詳にする也、首の二句は社を立るの義、下の四句は社を祭の義なり、夫社は五土の神を祭る所以なり、地陰を乘とは、是主とする所の者陰氣なり、蓋し土は體ありて氣は形なし、陰氣土に非ざる則は附麗所なし、土は氣に非ざる則は塊にして神ならず、故に是を祭りて是を主とする事此の如きなり、主を壇上の北面に設るは陰の位なり、君北墉の下に來りて南に向て是を祭るは、其陰に對越て其來享を冀ふ所以なり、祭るに甲日を用る

は、陽は甲に始りて物を生ず、甲を日干の首と爲す、日を用るの始なり、按に、（楊鳳閣が按ずるなり）社は五土の神を祭る、稷は土に非ざれば以て生ずる事なく、土は稷に非ざれば以て生々の效を見る事なし、社を祭るに必ず稷に及ぶは、其功を同うし利を均うして人を養ふを以て也、王社、侯社、國中の土神のみ農事を與にする事なし、故に稷を置ず、大社、國社、農の祈報在焉、故にみな稷あり、前南面を以て陽を答ふと爲す、（答は對なり）向ふ所の南方を指て陽と爲すなり、此陰に答ふるとは彼陰にむかふ、卽是陰の位なり、然るに前の陽の字一歩を推開の說、此陰の字は主地に就の說なり、五土の神とは、山林、川澤、丘陵、墳衍、原隰なり、社は是土神なり、社をいふて稷をいはざるは、社は五土神を總て祭る也、稷は原隰に止るのみ、社をいふて以て稷を兼べき也、北墉とは社內の北の牆なり、陽は甲に始りて物生じ、陰は辛に極て物成なり、地は陰を以て物を成と雖ども、然れども地の事を始るは陽に存す、故に社は甲を用て以て其始めを原む、天は陽を以て物を生ずと雖も、然れども天功を終る者は陰に存す、故に郊は辛を以て其終を要す、獨陽は生ぜず、獨陽は成らず、天地相須の義なりと、已上楊鳳閣が說なり

漢土にて社を祭る故實中霤を祭る義天地を尊親む解

禮記の郊特性に云、社は地の道を神にする所以なり、地は萬物を載す、天は象を垂る、財を地に取り法を

天に取る、是を以て天を尊て地を親ふす、故に民に土の神に報ずる事を善美し教へたまふ事なり、家に於ては中霤を主とし、國に於ては社を主とするは、本を示すと也、註に、聖人地道の大なる事を知る、故に社を立て以て祭る、神にして是を明する所以なり、上古は穴に居れり、故に中霤の名あり、中霤と社とは皆土神なり、卿大夫の家には、主として土の神と中霤の霤に祭る、天子諸侯の國は、主として土神を社に於て祭る、此皆以て其物を載せ財を生ずるの本を示す也と、然れば上天子より下庶人に至るまで、天と地とは常に尊敬し祭祀すべき事なれども、天子に非ざれば天を祭る事ならず、惟地を祭る事は萬民も祭るべし、故に禮記說義纂訂曰、天子に非ざれば天を祭らず、天子より以て庶人に至るまで、皆社を祭る事を得るは、亦父を尊み母を親しむの義なりとあり、是天を父とし地を母とするの義なれば、一切萬民と〴〵く地の恩を知て其恩を報ゆべき事なり、殊に農民は常に大地を耕して樹藝する者なれば、別して地の神恩を深くおもふて、其神恩報じざるは、誠に恩知らずといふべし、又農家のみに限らず、今日五穀を食ふて身命を保養ふ者、五穀萬穀一切の物の出生する大地の神恩を知らざるは禽獸に劣れり、更に人とはいふべからず、依て 匡弼 謹て世界の諸君子、及び農業の人に告示す、其地の神恩廣大なる事を知りて、其神恩に報ぜんと祭祀を行はんと欲する厚志の人は、春の社日秋の社日に祭祀を行ひ、土の神五穀の神、及び守護神の神恩を報じ奉るべき者なり、此祭祀の式法は、儒教に出て、禮記等に詳なり、然りと雖ども其式法甚だむつかしきを以て、儒の式法は爰に略す、儒

者に尋ね聞べし、又我大日本國の神道に於ては、匡弼其祭の式法詳なる事を知らず故に我仙教と神教とを混へ合せて以て、略社の祭に擬へ、以て土の神五穀の神守護神を祭祀りて、其五穀成熟、萬穀豐饒にして旱損水損なく、蝗蟲一切の災害なく、蝗は本草綱目云、蝗亦螽類、大而方、首有二王字一、沴氣所レ生、蔽天飛性畏二金聲一、一生二八十一子一、其子未レ有レ翅者名二蝗蝻一、一名蝝、音延不レ因二牝牡一、腹中陶治而自生、故曰二蝗蝻一、爾雅集注曰、蝗總名也、食二苗心一曰レ螟、食レ葉曰レ螣（當下作二蟘字同）蟘虱並食レ節曰レ蠈食レ根曰レ蟊、（當レ作レ蟊亦同）三才圖會及び唐書、五雜俎等に蝗の事を載す天下泰平國家安寧にして、萬民安全農業繁昌ならしめん事を、若厚志ある人此祭祀を行はんと欲はゞ左に記す所の祭祀の式法に依て祭るべし、若又無智の人無學の人あつて此書を讀むと能はずんば、學文ある人に讀てもらひ聞べし、若又厚志あつて農業の人に此土の神五穀の祖神守護神等を祭祀るべき旨を敎へ諭さんと欲ひ給はゞ、此神仙靈章春秋社日醮儀を讀聞せて、勸めて萬民に此祭儀を行はしめ給はば、五穀の祖神守護神土の祖神感應ある事疑ひなく、此祭祀の式法海內に普く弘まりて、天下の萬民とく〳〵春秋の社日每に普く行はゞ、天下泰平、國家安寧、五穀成熟、萬穀豐饒、家門繁昌、子孫長久、無病息災、金銀米錢、珍貨奇寶充滿せん事掌をかへすより易からん

神仙春秋社の祭社壇の式幷に本朝にて祭る社の圖

夫社を立て祭を行はんと欲はゞ、先其國所の村里に於て、田畔又は路傍の淸淨なる土地を撰びて、石或は土を用て壇壝を立て、壇壝とは即壇をいふ、尤も壇は玉篇に、壇は土を封じて祭祀ところ、壇は猶坦

の如し、明坦貌なりと、壇は タイラカ、トコロ、サカイ、ハラフ、ミギリ、アキラカ など讀字なり、又壝の字は壇(ついぢ)と讀み、又ツイヂ、マセガキ、トコロ、ニハ、マガキ など〻も讀なれども、惟つねの壇の事なり、扨壇は高さ三尺五寸、其周囘は或は其高さに順ふべし、扨環すに墻を以てすといふて、周廻(めぐり)と墻をして内に人の出入せざる樣に致すべし、右の壇の上に五方の土を取聚めて最中に置て、扨其上に石を以て主を立るなり、先五方の土を取聚るとは、其國所又は村里を眞中中央として、其中央より先北の方の土を取來りて此壇の上に置べし、（土は其壇の大小によりて見はからひ取）次に東の方の土を取來りて、又同じく壇の上に置き、扨南の方の土を取來り、又壇の上に置、扨西の方の土を取來り壇の上に置べし、右何れも取來る方角は、或は一町又は一里にても其國所の一村のはづれ境目の土を取來るべし、但し國ならば國境、郡ならば郡境村は村境より取來るべし、尤も東方は青色の土を取來り、南方は赤土、西方は白土、北方は黒土を取來り用ゆるを仙法とすれども、是なき則(とき)は常の土を取て用ゆべし、扨四方の土を取來り畢て後。其壇上の前の土を取て是を中央の土とし、是を四方の土の最中に置べし、尤も中央の土として置には黄土を用てすべきなり、若是なくば常の土を用ゆべし、扨五方の土を置し上に、乘て石を五角に切て碑の如くし、此石に即五神の神名を記し、彫附て是を立置べし、其五神の神名とは、本朝の土の祖神五穀の祖神守護神等の神號なり、委しく奥に神名を載す、扨この社の壇には屋根を用ひず、是禮記の郊特牲篇に、天子の大社は必ず霜露風雨を受て、以て天地の氣を達すといふに法とる、今此社壇は天子の大社には非ざれども、其霜露風雨を受

て以て天地の氣を達せしめんと、今屋根を用ひざる也、猶圖にて考ふべし

本朝の社式五方の土を以て爲すの疑問幷に答釋

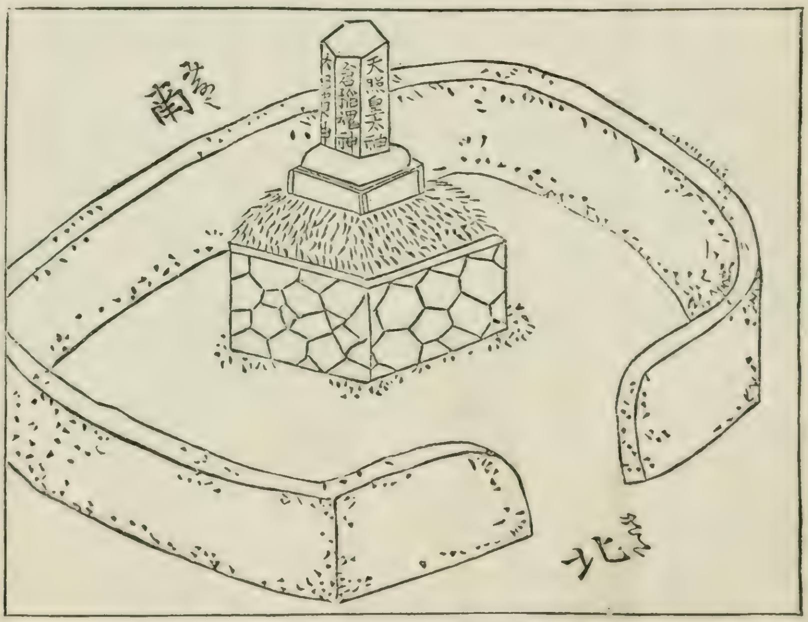
禮記の郊特牲集註曰、地陰に乘る則は、社はすなはち陰氣の主なり、社の主を壇上に設て北面にす、君北墻の下に來りて、南に向てこれを祭る、蓋社は屋せず、惟壇壝を立て、是に環すに墻を以てす、既に地道陰を主る、故に其主を北に向て、君は南に向ふて是に對すといへり

四書翼經圖解云、其式なる則は屋せず、其表すに其土の宜しき所の木を以て樹て、遂に以て其社に名く、其壇方五丈、諸侯これを主とす、唐朝以來其主を石にて是を爲るといへり、扨前に本朝に於て社を立る式を記して、五方の土を取て以て爲る事を、或人の曰、漢書に、天子の大社は五色の土を以て壇と爲すといへり、然るに今本朝の社を立るに、五方の土を以て爲るは僭に非ずや、答て曰、漢土の社は寔に然り、天子は五色の土を以てし、諸侯は方面の土を以てす、然れども今本朝の社に五方五色の土を用て爲こと甚だ深意あり、故に顯に說かず、唯漢土の天子の大社の式に似て、其意趣大に異なりとおもふべし、然れども此社の式本朝に始る、義に非ざれば今漢土の社式故實を參へ考て其社式を、略述るのみ、他日 匡弼が愚意を相續君子あらば、宜しく改正したまへかし

本朝社之略圖

禮記郊特牲集註曰、社祭レ陰、則乃社陰氣之主、設ニ於壇上ニ北面君來ニ北墻下ニ南向祭レ之、蓋社不レ屋、惟立ニ之壇壝ニ而環レ之以レ墻、既地道主レ陰、故其主北向、而君南向對レ之

四書製經圖解云、其式則不レ屋、其表則樹ニ其土之所レ宜木ニ、遂以名ニ其社ニ、其壇方五丈、諸侯主レ之、唐以來其主則石爲レ之



君南ニ鄕於北墉下ニ答レ陰之義也　北墉者禮記說義曰、北墉、社內北牆也

社の主は五角の石に各々神號を記して主とす、周廻(めぐり)に土手をつきて墻とす、高さと周廻と、又社の主と壇との大さ高さは、其宜しきに隨ひいか樣にも作るべきなり

漢土春秋の社の祭社主社樹丼に粢盛の事

右に圖する所は漢土の社に法りて今是を省略し、我朝にて社を立る法を制す、漢土にては昔は社に樹を植て主とせし故、論語卷の二八佾篇に、哀公社に植る樹の事を宰我に問ことあり、宰我答て曰、夏后氏は松を以てし、殷人は栢を以てし、周人は栗を以てすと、是周の代中世より天下禮廢れて、社に樹る所の木何の木を用ゆる事を知らず、侯國社樹の實を失ふ、故に魯の哀公孔子の弟子の宰我に、先王用る所の社樹を問れし也、然れば昔は社に樹を植て主とせしと見えたれども、唐朝より石を以て社の主と爲し事は、唐書の張齊賢が傳に詳に見えたり、今石を五角に切りて、神名を彫て以て社の主と爲すは、匡弼唐朝の例に法とり以て右に圖す、漢土の社の壇法は右の圖の如くす、然れども厚志あらん人は漢土の社を法りて祭るも又宜し、扨右の社の圖の周廻の土墻は、土を以て封疆をつきて、土墻として其形圖の如くすべし、扨社樹の事は宰我が答、孔子の語につきて、和漢の儒者辨論ありと雖ども、今社樹を用ひざれば玆に略す、夫社は漢土の生王國を建社を立て以て后土を祀りて、民をして其土祖神の神恩を祈り報ぜしむる義にて、其君みづから社に到りて、社の前の北墻の下に來りて、南に向ひて是を祭りたまふ、此時一村の農民こと〲く社に來り聚りて、供物をおの〱献じて共に祭るなり、

故に郊特性云、唯社事の爲には單く里より出と、集註云、社事は社を祭るの事なり、二十五家を里といふ、單は盡なり、言意は社を祭る時に當ては、一里の人こと〴〵く出て其事に供給する也、蓋し家毎に一人ヅヽ出づる也、又曰、唯社の爲に田する則は國人こと〴〵く作と、集註云、社を祭る爲に田獵をなす則は、圖中の人皆行て一人も家に留る者なきをいふ也と、又曰、唯社には丘乘粢盛を供す、本を報い始に反る所以なりと、集註云、社を祭る則は必ず粢盛あり、稷を明粢といふ、器にあるを盛といふ、此粢盛は丘乘をして是を供ぜしむ、丘乘とは井田の制に九夫を井と爲し、四井を邑と爲し、四邑を丘と爲し、四丘を乘と爲す也と、是は必究一郡の人或は一國の人、皆出て祭祀を爲をいふ也、蓋財は土に非ざれば生ぜず、人は財に非ざれば養れず、故に一人も養育の中に在ざる者なし、然れば皆出て社を祭りて神恩を報ぜざる事を得ざらんや、故に一國は一國ながら出て祭り、一里は一里ながら、一村は一村ながら、出て祭るべき事なれば、豈農民のみ此祭を行ふべき、士商工業の民といふとも、財は土に非ざれば生せずといふ事を知り、人は財に非ざれば養はれずといふ事を深くおもふ則は、武士商人職人たりといふとも、皆社の祭は行ふべきなり

王者四方の諸侯に封ず社の義并に授茅土の事

夫社といふは月令廣義巻の十二に曰、王者五色の土を以て四方の諸侯に封ず、諸侯各其方の色の土

を以て、歸て以て社の主とすと、漢舊儀云、天子の大社は五色の土を以て壇を爲りて封ず、諸侯は方面の土を取て苴に（苴は裹むなり）白茅を以て是を授く、是を授茅土といふ也、禮記月令曰、中央は土、其日は戊己（土寄二旺于四季一、月各十八日、季夏居二一歲之中一、又當二火金子母之際一、故揭二土令于季夏之後一、以成二五行之序一）其帝は黃帝、（軒轅氏、黃精之君）其神は后土、（句龍初爲二后土一、後祀以爲レ社、后土官闕則祝融以二火官一兼レ之、此土官之臣也）其蟲は倮、（倮露見不二隱藏一也、人受二土中和之氣一以レ生、故爲二倮類一、倮蟲三百六十、而人爲二之長一）其數は五、（五者土之生數也、四時皆擧二其成數一、此獨擧二生數一）其味は甘、（土成レ形、可二以稼一穡一、稼穡作レ甘）其祀は中霤、（古有二宮室一、故陶複陶穴、皆開二其上一、以漏二光明一、而雨露之後、因名二室中一爲二中霤一、上居二五行之中央一、故其神亦在二室之中央一、季夏土氣盛故祀レ之）

月令廣義卷の十二の事文に曰、季夏の令を引て曰、神農は土神、季夏中央の土に屬す、土王に事を用るは、農功を成す事を主ると、太常記云、土王は戊日、函史云、古陶複火、因以爲二室中神一、戊日祀二中霤一　土星は鎭星篇に曰、鎭星は夏の季を主どる、其星春は色靑く、夏は色赤く、秋は色白く、冬は色黑し、皆女主の爲に喜びあり、此に反すれば憂ひを主る、○白に變ずれば水澇不熟と、宋史曰、季夏に秋令を行ふ則（とき）は鎭星白に變ず、兵凶水澇女災を主どる、○靑に變ずれば國に風雨多く、穀を主る貴人遷徙し、颶風多し、○色黑きは風寒ならずと爲す、財を召ば星色を變ず、○色黃なるは滲暑、位に當て吉なりと、玉曆璇璣云、鎭星は德を主る、占ひ夏の季と爲す、亦外に陳（つらな）りて、兆中に發す、註云四方の中に居て、戊己の位に在り、萬物これに因て以て生じ、四時これに據て列ぬ、故に星を名けて鎭星といふ、德厚安危存亡の機を主どり、以て其土の行に屬して動靜吉凶を季夏に占ふと、土星はすなはち鎭星なり、二十八日に一度を移して、二十八年に一周天すと、凡社の故實は禮記の月令、及び郊特

牲、月令廣義、風俗通、孝經緯、稽含の社の賦、國語、左傳、漢書、蔡邕獨斷、史記、白虎通等其餘の書に散載す、詳なる事は往て見るべし、今匡猶我朝の諸君子に謹て勸め奉る社の祭の式法は、本漢土の社の祭儀に法とりて、强て又漢土の祭儀に依らず、此方別に此祭儀を立るに似たれども、惟願ふ所は祭式を簡易にして、何國何地にても祭儀の容易行はるゝ樣を專一と爲す、謹て願は仁惠の諸君子、匡猶が愚意を賢察したまふて、此祭儀ある事を一村の農業の人に告識しめ玉はゞ一村の人これを祭らん、一村の人祭らば、一郡の人是を傳へ祭らん、一郡祭ば遂に一國に於て祭む、一國祭りて列國祭ば次第に六十餘州に於て普此祭儀を行はゞ、我神明の國の五穀の祖神守護神、土の祖神等感應納受ましまして天下泰平國家繁昌五穀成熟萬穀豐饒萬民安樂ならん者也

月令廣義卷之六

盱眙　馮應京　纂輯　新安　戴任　增釋　秣陵　李登　參訂

二月令　政敎　政敎 飭令

禮月令 仲春之月 中略 其日は甲乙、其帝は大皥、其神は句芒、甲乙は東方の木干なり、大皥とは伏羲氏をいふ、木德の君なり、句芒は少皥氏の子重、木官の神生れて民に功德あり、故に後の王時を以て是を祀るなり 元日民に命じて社せしむ、元日とは善日をいふなり、郊特牲云、社を祀るに甲日を用ゆ、召誥に戊日を用ゆ、民に命じて社の祭をなさしむるは、民に屬して祈禱せしむる

所以なり

是月は耕す者少く舍む　少舍むは暫く休むといふ義なり

節令

春社　立春の後第五の戊日を春社とす、【稽含社賦序】有漢は日を丙午にトし、魏氏に丁未を擇び用ゆ、晉は社は孟月、日は酉日、各その行運に因る、三代因に同じからざる事あり、今禮記を按に、仲春元日を撰びて、民に命じて社せしむ、【註】春分前後に近き戊日なり、元日とは上旬吉日なり、

社樹　古は社を立て、各樹木を壇前にうゑて以て主とす、故に後世の社おほく木を以て名づく、〇哀公社をとふ、宰我戰栗の說を以てあやまりのぶる故に、孔子これを非とす

封レ土爲レ社　【孝經緯】社は土地の神、土地ひろふしてことごとくまつるとならず、故に土を封じて社とす、以て功を報ずる也

社稷神　【風俗通】共工の子修好といふ、とほく遊ぶに、舟車のいたる所、足跡の達する所、窮め覽ずといふ事なし、故にこれを祀りて以て社神とす、【左傳】共工氏子あり、句龍といふ、水土を平ぐ、故に祀りて以て社とす、一說に、共工氏后土とあり、一說に、厲山氏の子柱よく五穀を植ゆ、故に祀りて以て稷とす、稷は百穀の長なるを以て、因て名くるに其神を以てす、厲を一に烈に作る、【禮郊特牲】是故に厲山氏の天下を有や其子を農といふ、能百穀を植ゆ、夏の衰ふるや、周の棄これに繼ぐ、故に祀りて以て稷とす、共工氏九州に覇たり、其子を后土といふ、能九州を平ぐ、故に祀りて以て社とす、【蔡邕獨斷】棄百穀を播殖す、稷を以て百穀の長とす、故に稷を以て其神に名づくと

勾龍柱棄　【國語】共工氏の子を勾龍といふ、后土の宮となす、能水土を平ぐ、故に祀りて以て社とす、烈山氏の子柱といふ、能五穀を植る、夏より土を以て祀りて以て稷とす、殷にいたりて柱を以て久しく遠じて、堯の時棄を后稷とす、亦能五穀を植ゆる故に、柱を廢して棄を祀りて稷とす

祭社文　【曹植】於惟大社官名、后土是曰二句龍一、功著、上古德皇帝實爲二靈主一、克明播植、農政日擧、尊以作レ稷、豐年是與レ義與レ社同方神此宇

上祭社　【會典】上戊日祭二先農五稷一

祭二社稷一樂舞　【樂律志】洪武元年二月、上みづから大社大稷を祭りたまふに、神を迎るに廣和の曲を奏して、玉帛を奠ずるに肅和の曲を奏し、初獻に肅和の曲武功の舞を奏し、亞獻に豫和の曲文德の舞を奏し、終獻に凞和の曲文德の舞を奏し、徹豆に雍和の曲を奏し、神を送るに安和の曲を奏し、燎を望むに時和の曲を奏すと

苴レ土（つゝむつちを）　【漢書】天子の大社は五色の土を以て壇と爲し、諸侯を封ずるには、方面の土を取て苴に白茆を以て是を授く、各其方の色を以て社を其國に於て立る故に、これを苴土を授くといふ、【韻書】苴は裹なり

祠レ社以二伏日一　【秦紀】

立社　【禮記】王、群姓の爲に社を立るを大社といふ、王自の爲に社を立るを王社といふ、諸侯百姓の爲に社を立るを國社といふ、みづから社を立るを侯社といふ、大夫已下社を立るを置社といふ

求レ福　王者諸侯の社、稷を立る所以は萬人の爲に福を求め功を報ずるなり

春求秋報　人は土に非ざれば生ぜず、穀に非ざれば食せず、故に社稷を立て以て主とし祀る、古の先聖王法を人に施す則は、これを祀る、故に勾龍を以て社主とし、周の棄を稷の主として配す、春は求て秋は報ず

親レ地報レ本　【史記】社は必ず、霜露風雨を受く、以て天地の氣に達す、社は地に親む所以なり、菜盛を供して本を報い始に返る所以なり

獲レ禾報祭　【白虎通】援神契曰、

仲春禾を獲て社に報い、稷に祭るに三牲を以てす、重功にむかふ故なり、尙書曰、社を新邑に及ぼす、羊一牛一豕一、按に中春には禾の獲べきなし、又稷を報ずるに當に秋にあるべし、故に又八月の社に見ゆ　**社主ㇾ陰**　〔書〕命を用ひざれば社に於て戮す、〔注〕社は陰を主とる陰は殺を主とる　**社屋**　諸祀は廟を以てす、社は土を封じ壇祭す、故に曰、祀ニ已屋ー者其祀ㇾ斬也　**青社**　王者五色の土を以て四方の諸侯を封ず、諸侯各その方色の土を以て、歸て以て社の主とす　**祈ニ清道神ー事**　〔說文〕清道の神に祈る是を社といふ道に有もの吉凶借に名づく　**祀ㇾ社以ニ羊㹠ー**　〔獨斷〕漢の高祖州縣に令して、春二月及び臘を以て神稷を祀る小羊㹠を以てすと　**祭ニ五穀神ー**　〔神隱〕社日五穀の神をまつる

社粽　百家共立者を社粽といふ　**四隣會**　〔歲時記〕社日四隣、並に宗をむすび社に會す　**粉楡**　邑名なり、漢の高祖はじめて起る時粉楡社にびのる、既に天下を定て、御史に詔して粉楡の社を治せしむ　**社日輟ㇾ業**　〔呂公忌〕社日男女をして一日家業を廢しむ、廢さる者は人をして惣ならしめずといへり　**停ニ針線ー**　〔墨莊錄〕唐宋の世には、社日に婦人縫物をせず、是を忌作といふ　**治聾酒**　〔七籤〕社日の酒を飲ば、つむぼを治すといへり

社飯　春社に猪肉を以て雜へ調和し、飯の上にしきて饋送るを社飯といふ　**社羹**　吳越の俗社を祀るに羹を以てす、是を社羹といふ　**速ニ小兒語ー**　社を祭る酒を小兒に飲すれば、能く速にものいふ　**治ニ菓木ー**　社日に羹を以て菓木に注すれば、子を生ずる事多し、又百果樹下に春くときは、實をむすびて落ずといへり　**種ニ絲瓜ー**　〔山居四要〕社日に宜しく絲瓜山藥をうゆべし　**社雨**　社日に雨降ば、穀重くして菓はまれなり　**大明會典、社鄉約**　洪武五年定ニ民間里社、百家一會、〇一里社、毎歲春秋社祭、會畢行ニ鄉飲酒禮ー

物候

社燕　〔廣雅〕燕は春の社日に來て、秋の社日に去る故に社燕といふ、三種あり、紫胸輕小ものに越燕といふ會斑黑聲大なる者は胡燕といふ、社候とす・燕巢戶北に向ひ、及び尾偏して色白く胡搭ある者は是數百歲の燕なり　**己日時君**　〔抱朴子〕社中己日時君と稱する者は龜なり　**社前茶**　〔東林新編〕茶の佳ものは造るに社前にあり、其次は火前、其下は雨前なり、火前とは寒食前の雨をいふ、雨前は穀雨前をいふ　**社日占**　雨降は五穀吉、小晴は六畜吉

董龍の社樹

董龍は盩厔の人なり、家貧し里人と共に社を祀る、里人牲を買て牢す、董龍文を撰して以て祭る、

祭り畢て胙を分るに、里人平ならず、あまつさへ董龍を逐出す、董龍泥飯を造りて以て祭り、畢て樹下に於て將に祭文を焚むとするに、白鼠ありて祭文を啣み地穴に入たり、是を掘て白金一叶を獲たり、董龍みづから私に取らず、里人を率ひて官に訟ふ、縣令これを賢なりとして奏聞す、依て勅して其閭を旌表して義夫里といふて、遂に是を以て其里の名とせり　盩厔は所の名なり、音は周至

郈原の社樹

郈原といふ人居を遼東といふ所に遷して、嘗て行て遺錢拾文を得たり、以て此錢を樹の枝に繫ぐ、既に取者なうして猶錢を繫ぐ者多し、郈原其故を問ば答て曰、これを神樹といふ、郈原己が錢を繫ぎ始しに由て、淫祠となる事を悲しみ、遂に此事を辨じ曉す、依て里人其錢を斂て以て社を祭る、供物の錢とす

匡弼謹て諸人に告、今我朝にて社の祭を行はんと欲ふ人は、譬ば一郡一村にても、其郡中又は村中の人々、常に月每に掛錢をして、春秋の社の祭を行ふ則は容易に行はれ、又其祭も永久に勤るべし

月令廣義卷之十五　八月令

政教

[禮月令] 仲秋之月 中略其日庚辛、其帝は少皥、金天氏白精君 其神は蓐收、少皥氏の子該、金官の臣なり 其蟲は毛、白虎の宿、其類を毛とす、故に其蟲を毛といふ

節令

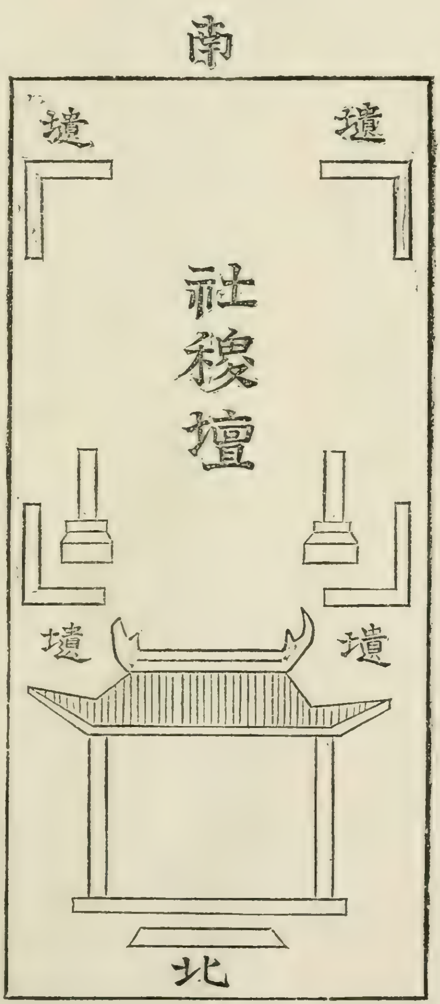
秋社 [曆書] 立秋の後、第五の戊日を秋社とす、大抵は春社の如し 秋報 春祈て秋報す、[杜詩] 九農成德業、百祀發光輝、報レ郊神如レ在、馨香舊不レ違 報レ社祭レ稷 [白虎通] 仲秋禾を獲て社を報す、稷を祭る三牲を以てす、何すれぞ功を重ずる 卜レ稼 [周禮] 社日迨で來歲の稼を卜す 立レ壇 先王社を建るの制枡を建檀を立 設レ壝 [周禮] 封人掌下設二王之社壝一爲二畿封一而樹上レ之 飲福 社を祭りて福を求め、祭畢て宴す、これを飲福といふ 薫饈 社饈は重陽に詳なり 社饈 [夢華錄] 秋社社饈、社酒を以て饋り遺る 社飯 江南は社稷を祀る事を尙ぶ、祭るに必ず美飯を以てす、江北の俗は社を祭らず、たゞ山東には穀を献ずる典あり、秋社におの〳〵里の上本鄕に就て稷米にて飯を造り、里毎に一盆飯を持て縣に詣り、官に伺ふて社を祭り、幷にこれを嘗し、祭り畢ておの〳〵里の飯を倂せて養濟院に施す 秋社雨 來歲豐なり 避レ祟 小兒早く起て以て社公を避け、又針線を停め、小兒の語を遠にする等の事は春社の如し 天灸 [田家五行] 社日の朝磁器を用ひて、百草頭の露を收りて濃墨を磨し百病を治す、頭痛するには太陽の穴を點じ、癆瘵は膏肓の穴に點するの類なり、名づけて天灸といふなり 洽レ觀 唐の高祖里門に詔して社を立て、用て鄕黨の觀を洽うす

漢土の社稷壇の圖幷に社考の和解

四書翼經圖解の論語卷の二八佾第三に、社稷壇の圖を載す、左に是圖を載て後學の備覽に便りす、猶善圖あるべきなれども未だ見ず、志あらん人は求て見るべし、匡弼此社の祭の事を撰すといへども、強て漢土の祭式に依らず、只漢土の祭式社式は其故實を識るべき爲なり、厚志あらむ人は 匡弼が愚意

を察し、其祭式社式本朝の故實に叶ふべき要を增補し、是より年々春秋の社祭を諸人に行はしめば、誠に神忠ならん

翼經圖解載レ之



社考　王自爲立レ社曰二王社一、諸侯爲二百姓一立レ社曰二國社一、自爲立レ社曰二侯社一、七大夫以下成レ群立レ社曰二置社一、王之大社則土五色、而冐以レ黃、諸侯之國社、則受二其方色之土於天子一、而苴以レ第、其位則中門之在、其壝則北面、其式則不レ屋、其表則樹二其土之所レ宜木一、遂以名二其社一、其壇方五丈、諸侯主レ之、唐以來其主則石爲レ之、其祭天子太牢、諸侯用二少牢一、其日用レ甲

右の社考は翼經圖解に見たり、今是を國字を以て解する事左の如し

國王みづから爲に社を立るを王社といふ、諸侯百姓の爲に社を立るを國社といふ、自爲に社を立るを

侯社といふ、七の大夫以下群を成て社を立るを置社といふ、王の大社なる則は土五色にして、冒に黄を以てし、諸侯の國社は其方色の土を天子に受て、苴むに茅を以てす、其位は中門にこれ在、其壝は北面、其式は屋を作らず、其表すに其土に宜しき所の木を樹て、遂に以て其社に名づく、其壝は方五丈なり、唐の世より後は其社の主を石にて爲る、其祭は天子は太牢を以て祭り、諸侯は少牢を以て祭る、祭る日は甲日を以てすと、○委しき事は前に諸書を引て辨ずれば是を略す、臣胤謹て諸の農業の人に告、右漢土の社の祭式故實を大略擧て其要を詳にすると雖ども、今本朝に於て五穀成熟、萬穀豐饒の祈醮の爲に、春秋の社日に於て土御祖神五穀祖神五穀守護神を祭祀て及び神恩を報奉らんと欲ふ人は強て漢土の社式祭式にかゝはるべからず、惟その厚き志あらば、左に記する祭式を用て祭るべし

本朝にて春秋の社日土御祖神等を祭祀するの略式

夫土御祖神五穀祖神五穀守護神を、春二月の社日と秋八月の社日に於いて祭祀と欲ふ人は、先前日より自身はいふに及ばず、妻子奴婢等に到るまで皆沐浴し、新衣を着て心身ともに清淨ならしめ、一切の惡穢、不淨、産穢、死穢等に觸近づくべからず、尤も供物御酒燈明等は勿論、庭燎に用ゆる松柏等の割木に到るまで、前日より用意すべし。其祭祀の時刻は晝九時より七時まで、或は夜行ふても可な

り、其所に土御御祖神五穀祖神守護神を勸請の社あらば、其社の前にて祭るべし、若社なくば田畠の邊に於て祭祀べし、此祭祀は漢土にては、一村一里の者皆こと〲く出て勤むなれども、今本朝にて是を行ふには自身一家ばかりにても、又は他人親類と相組てなりとも、又は其所に社ありて、漢土の如く其一村一里こと〲く出て相勤るにさはりなくば、一里こと〲く出て相勤れば猶宜し、依て本朝にて社の祭を行ふ略式を左に記す

○奠供略式　俗に御膳といふ、是は春の社日に用ゆ

飯　小豆飯、又は何飯にても　汁　魚類蛤赤貝何にても見合せ　鱠　魚るゐ、何にても見合せて　小鯛　是も時の見合て　煮物　大根、里芋、くはゐ、胡蘿蔔、魚るゐ　右は土器又は茶碗にても高盛たるべし

○御　酒

御酒　錫瓶子一對三方に載て土器二枚　御肴　魚るゐ、打鮑、昆布、右見合たるべし

○菓　子　三方に載べし

菓子　團子、昆布、胡桃、榧、ころ柿　粢餅（おかゞみ）　十二重　但し閏月あれば十三重

○奠供略式 秋八月の社日に用レ之

飯 小豆飯又は何飯にても 汁 魚るゐ 鱠、魚るゐ 小鯛 但し何魚にても 煮物 見合せ魚るゐ

○御酒

御酒 錫瓶子一對、土器二枚 御肴 魚るゐ春の社日と同じ

○初穂

稻 大麥 小麥 大豆 小豆 何れも一品ヅヽ土器に盛、三方に載

右の五穀は月令廣義に周禮を引て曰、五穀は麻、黍、稷、麥、豆と、又穀梁傳には、註に、禾、麻、粟、麥、豆とあり、又六穀といふは、周禮の註に、稌、粱、麥、苽、彫、胡、稌を一に稻に作す、又九穀といふは、周禮に、三農九穀を主どる註に、黍、稷、秫、稻、麻、大小豆、大小麥、又炙轂子に、九穀は禾、稷、麻、麥、稻粱、苽、大小豆と、又酉陽雜俎には、九穀は黍、稷、粱、三豆、二麥とあり

右何にても初穂として三方にて供す

○粢餅

粢餅 是禮記郊特牲に、唯社には丘乘粢盛を供ずといふの粢にて、玉篇に稻餅とし、又祭米とす、匡謬

按に、粢は即稷なり、粢餅とは祭餅にて今の稷團子(ひえだんご)の類なり、古は祭に多く黍稷を用ゆ、今は糯粢

を以てす、俗に是を御鏡といふなり

○粿米

粿米　是淨米なり、精米を以て洗ひ、未だ乾ざる者を土器に盛なり

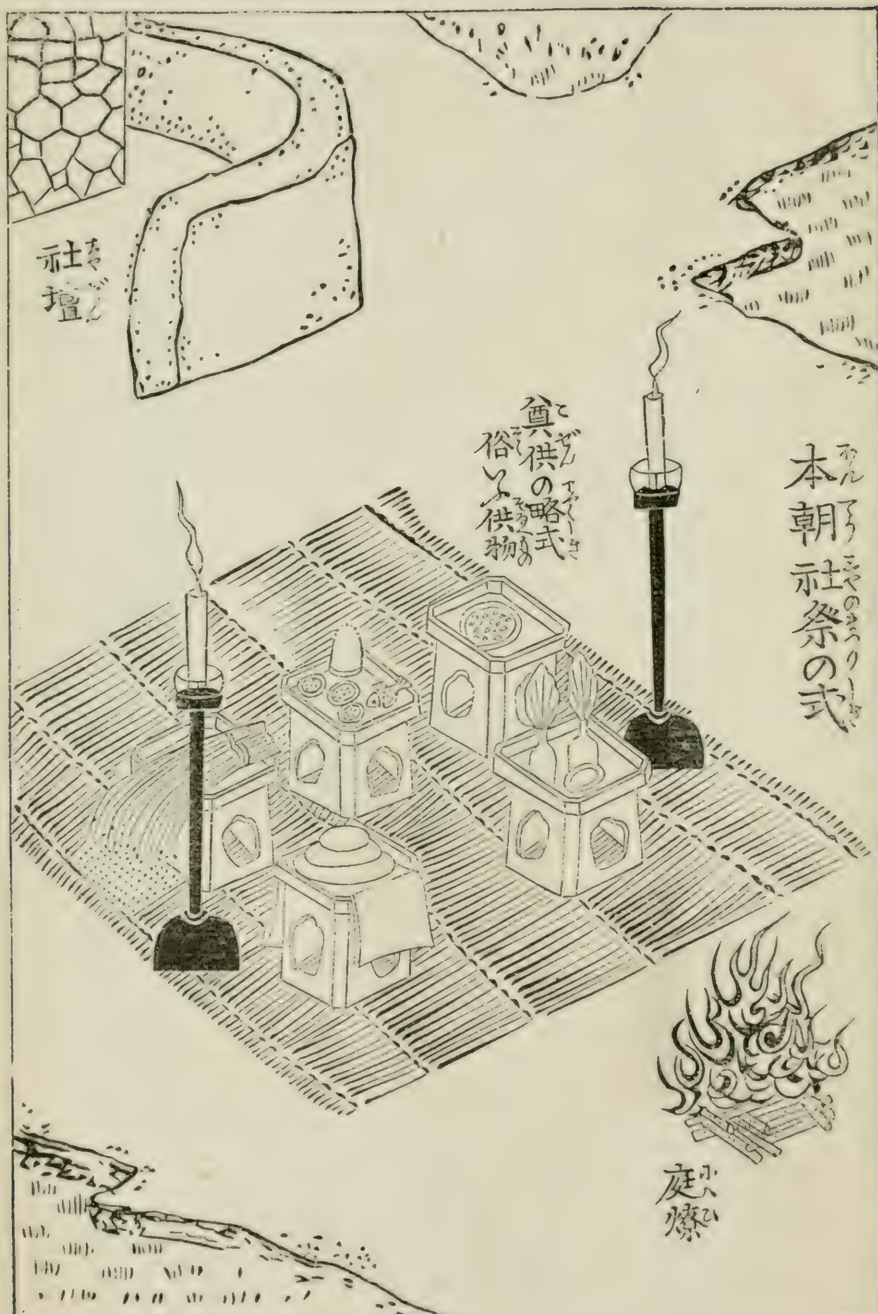
○庭燎

庭燎　是は松にても雜木にても、割たる木を社の前、又は田畠の邊に積て火をつけ燒なり、今俗にいふ御火燒と同じ義なり

左の圖の如く供物を薦席の上にならべ、兩方に燭臺一對、（但燈明にても）薦席の前に庭燎を燒なり、扨祭主は上下を着す、妻子等も新しき衣裳を被るべし、若し一村若一里出て祭る則は。皆上下或は袴羽織、又は四五人にても同じ、祭主一人を定めて、此祭主拜兩度して祭文を讀べし

○祭文　（祝詞此祭文は春二月の社日に用ゆ）

謹美謹美惶禮惶禮美申寸古倍豐葦原千五百秋瑞穗國乃萬民耕藝留事乎知良寸時尓天照大神顯見蒼生乃食宇天活倍幾物止思志食天五穀乃種子乎天邑君乎定天天狹田及比長田尓植志目給比天其秋


社壇
奠供の略式
俗に云供物
本朝社祭の式
庭燎

乃垂穎八握尓莫莫然今尓至留麻天五穀世毎尓繁久榮天萬民安久寧古止乎得多利猶今歳毛水災旱損猛風乃灾蝗虫乃災乎攘比厭天國土安久平賀尓五穀豐熟萬穀豐饒天萬民安樂古止毛掛毛畏幾大土御祖神埴安姫神倉稲魂神大己貴神少名彦神乃宇豆乃廣前尓恐美惶毛啓寸

○祭文

祝詞　此祭文は秋八月の社日に用ゆ

謹美謹美惶禮惶禮美毛申此春二月社日仁掛畏支大土御祖神埴安姫神倉稲魂神大己貴神少名彦神乃宇豆乃廣前仁國土安久平賀仁五穀豐熟萬穀豐饒萬民安樂古止乎祈禱奉幾故仁水災旱損猛風乃灾蝗虫乃災毛無天五穀豐熟萬穀豐饒天萬民安樂天下泰平利是某等賀祈禱申寸古止乎平聞食天護賜比矜賜仁依天奈利故仁獲取止古呂乃五穀萬穀乃諸品止粢盛玄酒乎献利天神明乃仁恩仁報比奉留豐供乃儀乎能世寸止雖止茂神慈賜比平久聞食天社福賜倍止謹美惶美申寸

右春秋の社日ともに此祭文を讀畢て、前に積所の木に火をかけて、祭主其餘の人皆一同に起て再拝して退くべし

本朝土祖神五穀祖神五穀守護神の神名

土御祖神　埴安媛命

五穀祖神　倉稲魂命

農業祖神　天照大神

五穀護神　大己貴命

五穀護神　少彦名命

○亦は埴山姫命ともいふ、神代巻に伊奘諾尊、伊奘册尊、土神埴安神を生たまふて萬物生ず

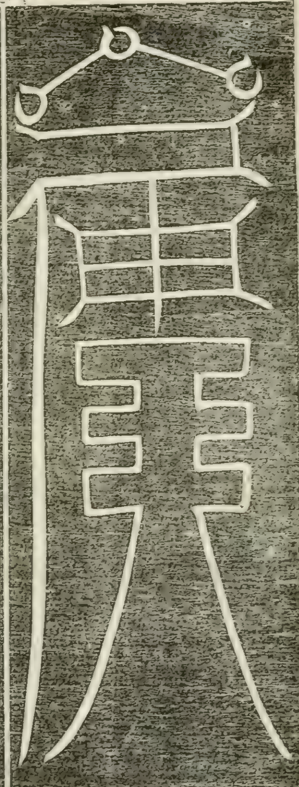
○伊奘諾尊飢たまふ時、生る兒を倉稲魂といふ、山州紀伊郡に鎮坐す、稲荷大明神是なり

○神代に粟稗麥豆を陸田種子とし、稲を以て水田種子としたまふて、始て農業の事を始たまふ

○少彦名命と力を戮せ、心を一ッにして天下を經營、また萬民及び畜産の爲に病を療るの方を定め、鳥獸昆蟲の災を攘むか爲に禁厭の法を定めたまふ

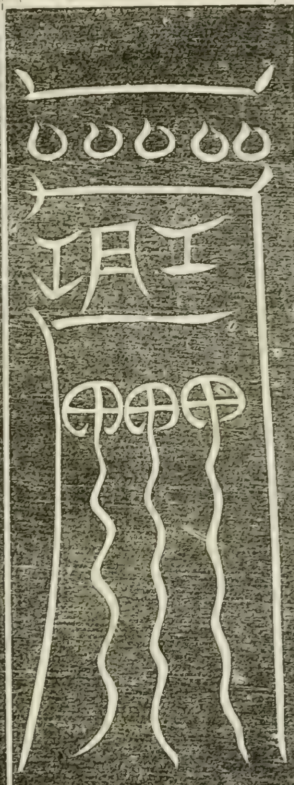
本朝土祖神五穀祖神五穀守護神の靈符

埴安姫命之鎮土靈符



此靈符ハ田畠一功の草木五穀ニ虫付さる時書て立置ハ其虫を除く

大已貴命之守護靈符



此靈符ハ田畠山林籔等ニ書て立置ハ一切の災を除き

農業祖五穀守護百穀豐靈符



此靈符ハ田畠山林籔等を求る時書て立置ハ其主の長久を守る也

農業耕作鍬入種滋種蒔田耕麥稲蒔の吉日

鍬入吉日	甲寅	甲辰	甲午	乙卯	乙酉	乙巳	乙未	戊辰	戊戌	戊巳未
種滋吉日	甲辰	甲午	乙丑酉	乙亥	庚子	庚寅午	辛丑	辛卯	壬子午	癸卯
種蒔吉日	甲子	乙未	戊子辰	戊寅申	己巳酉	庚辰	庚午	辛巳	壬子	癸丑
田耕吉日	甲子寅	甲辰	丙寅辰	丙午	己巳	己酉	辛卯	辛未	壬子	壬寅卯
田殖吉日	甲寅	乙卯亥	戊午	己亥	庚寅	辛亥	壬申	癸卯	癸亥	
麥蒔吉日	甲寅	乙卯亥	戊午	己亥	庚寅	辛亥	壬寅	壬申	癸卯	癸亥
粟蒔吉日	乙卯	乙未	丙寅	丁卯	戊寅	己亥	庚子	辛卯	壬辛	癸酉
麥穗懸吉日	甲寅	甲午辰	乙酉	戊子	戊戌	庚子	辛卯	壬子	壬午	癸卯
稲穗懸吉日	甲戌	乙卯	戊戌	己亥	庚午	辛卯	辛巳	辛未	壬申戌	癸丑巳

神仙靈章春秋社日醮儀 終

天明元年丑年秋七月

大阪心齋橋筋南久寶寺町
河内屋八兵衛

京都寺町通押小路下ル町
圓屋清兵衛梓

經濟問答

經濟問答卷一

問

一　當世浮花風流にして、諸侯政事に心を用る事なく、驕奢日に長じ、士風亂れ農民窮し、只商家のみ富をなす、是をして漸にあらため、各其職に就かしむる事如何

答

一　世態を論ずるに、其不可なるをあげて、經に從て是を救ふの術を述る事、古より宿儒有識の者の著はす所居多なりといへども、多くは議論可ㇾ聞して、行るゝ所を見る事なし、いかむとなれば、時代につれて人情の安きになれ、或は臨時を主として不朽に心なし、積累して後世救ふべからざる物に似たり、然を經を立て是を撓んとす、如何ぞ能行れんや、實に國家に心ある人の論にはあらず、始に時世の移るに從ひ物所を失ふ、連年にして然る次第を辨じて、當時にして如ㇾ斯なるは、かゝるゆゑんといふ事を見てなす時は、其善治にかへるの術論、またずして見つべし、如ㇾ此論辨するの書世に多かるべし、某いまだみるに及ず、近來荻生氏の著すと云政談といふ書を見たり、誠に世の姿の移り來

る所以を說し事、掌上にして四海の人情見るが如し、天下の豪傑と稱するよしなすとも、某此書によつて始て其人の智量を信ず、國家を談ぜば正に如レ此なるべし

一　浮花風流の姿、至治百餘年にして如レ斯に至、自然の理なり、あやしむにたらず、往昔應仁より天正に至て、天下土崩壞亂極りて、士類日夜矢石の間に立て、數百萬人死所を得る者ほとんど稀なり、三民塗炭に落て、須更も心情を安むずる事あたはず、百數十年の四海の姿如レ此のみ、我太祖の神武なる、海內の干戈を拂つて天下統一し、萬國弟兄の思ひをなす、然れども、諸侯百官皆亂世の國家に馴て、太平の國家を始てしる、只安平なるに歡喜して、法を不朽にたれて國家を維持するの道を辨へず、才明賢能の人も亂世の法度を以て國初の制度とし、僅に一二の治要を令するのみ、人心亂のみを知て治を辨ぜず、治るといへども、咫尺に亂のあらん事をおもふのみ、故にすべて易簡にして勇武を尊ぶ、これ治要は不足あるに似たれども、我日本の國體に應じて、至治是よりなる、人情の安逸になれて辛苦を忘るゝ事流水のごとし、たとへば寒天に裸體の人一衣を得る時は、踊躍して喜ぶ事、饑渴に水食を得るがごとし、諸人一統に一衣を着する時は、一衣寒威を避るにたへず、故に一人襲衣を用る時は、萬人是にならひ、襲衣を薄しとして三衣をかさぬ、これ始の裸體を忘るものなり、然れ共襲衣三衣の時にして、始の一衣に復せむとす、共理あるに似たり、必しも行るべからず、重衣三衣の人を裸體の人とおなじくせむとす、時代を辨ぜざる時はしかり、食類、居所、贈答、諸事皆此意にして、

浮花風流に走る人心に浹洽して、人々浮花風流なる事をしらず、故に少しく道に志すもの、驕奢を惜むの論常語にして聞にたへず、其人却而其身驕奢に居る事をしらず、心是を惜みて身是に從ふ、況や滔々たる流俗をや、宜なり日々に驕奢に走る事、何ぞあやしむにたらん

一 諸事政事に心を用る事なきは、今や心を用るとも何をかなさむ、從來諸侯の家戰國にして、資用常にたらず、故に衣食住の美をなさず、只兵用を主とす、然れども日夜の戰伐費失甚多し、平治となつて軍用なき日に至て、おのづから國富糧多し、戰伐をまぬかれて資用たる人民、艱苦を出て業にやすんず、彼治世不朽の法をたるゝの意誰か爰に及む、何ぞ後世の儒者至治の蔽あるをみて、祖先の治法なきを誹るの如くならむや、法なくして國家をさまり、人情安し、手を拱して泰平の澤に溶す、例の戰伐の辛苦を忘れて溫暖の氣になる、耳目の歡を極め、衣食住の美を爭ふの外何かあらん、驕奢なる事ならんと欲すとも得んや、亂世の諸侯は鞍馬に馴れ、寒暑に痛てあたる事あればなり、事なき時は蔭重く官高く、帳内にふかくかくれて、婦人諂佞の臣を友とす、みづから雲上の思ひをなして、幼より身に切なる苦難をしらず、たとへ生得の才明慈憐ありといへども、何に依てか守立なす事あらん、何ぞ政事に心を用ゆべけんや、百數十年のうち、衆諸侯のうち、國家に心を用る人大小四五家に出で、時世の然らしむるなり、あやしむにたらざる所なり

一 政事の事天下期せずして泰平となる、諸侯の家不期にして能治る、國初何をかなさん、亂世の法

に依て、僅に治法を受るのみ、始にもいふごとく、戰國の氣不ㇾ除によつて亂に應ずるの法のみ有て、治を全くするに心なし、然に年月をへて彌治り益安し、爰において戰國の氣消して、治國の姿を常とし、必や亂はあらざる事とす、猶戰國に治世といふを怪にひとし、亂を忘るゝ時は、政事只目前の便利をおもふ、便利日用に急なればなり、便利を好時は、一條の法必害あり、いかんとなれば、前を前とし、後を後とし、左を左とし、右を右とす、一條の法なり、たとへ前に不足ありとも、後の全をして前をかへりみず、前にして前の不足を補ふ、左右しかり、此時は相補ふ事なきに似たれども、必や事を失はず、物おのづから正し、不朽にたるゝの意也、便利を欲する時は然らず、前に不足あれば、後を以て是に應じ、左に事あれば、右を以て應ず、縱横自在目前利あるに似たり、前後左右自然と皆不足となる、日弊不ㇾ見して月弊あり、月弊なきが如にして歳弊あり、爰を以て數十年を經る時は、前後左右を繕ふの外なし、事は多端にして萬不足をなす、貧ならざらむと欲すとも得んや、國內の資用を盡して目前の事を繕ふ、於ㇾ是人主諸官人一日を繕て功とし、一月を全して其智にほこり、一歳を越して政事全しとおもへり、三民をしゐたげ、家士を苦しましむるに至る、おのづからの姿なり、かくなり來る事をしらず、僅に書をよみ、道を聞て、俄に政をとらむと欲す、國事茫乎としてしるべからず、官人にとへば、是又古來よりの仕癖の儘にて、一時〳〵を可なりに取繕ふを善として、事物混雜して、今にして分ち難き事多し、無二是非一古格を尋れば、祖先戰國の風にて、無造作に仕法を付たる

のみ、是に從はむとすれば、當時の人驚視て外國の法のごとし、必ゃ時世に行るべからず、此時に至て手を置て初志を折り、當時の風に從ひ、便利を急にして國家日夜に費耗す、然も猶他家の政事を聞て、我と等しきを以て、心可〻然として是を安んず、國家の貧窶何れの時か免ん、便利の風國内にわたる、士人皆表便利を事として、其日〳〵の事濟を手柄とす、何ぞ道につきて藝をなすにいとまあらんや、百姓聚斂に苦みて、地を去つて都門に走て生をなす、耕作の營をまぬかれて口給たる、年々人去て諸侯の領知荒田生るに至る、悉く便利の取揃に依て物其所を失ふ、至治の姿益あらはる

一　商家百數十年戰國の中に苦辛して、財あれば奪れ、罪なくして首領を失ふ、太平の時に至て、始て安心して肆をひらく、國初諸侯の家富で、剛氣を以て立、商家利にさとくして、能從て財利を得、爭を追て富をなす、諸侯財乏しく商家と利をあらそふ、何ぞ敵する事を得むや、其勢羊を驅て猛虎を攻るに等し、朝に一ッを得て、夕に二ッを失す、年月を送て諸家商賈の恩惠を受る事、其家三歳の食祿に增る、上にして下の恩を荷ひ、下として上に恩惠を施す、正に冠履所を異にすと云べし

右國初よりの風俗轉移する所、あらましかくの如し、其細密の事は言論を以て辯ずべし、依て來る所を辨解して其國家に立時は、手を下す所おのづから其要をしむべし、みだりに治方を述るとも空談となつて行はるゝ所しるべからず、故に其仕方を略す、其來る處を辨知する事治道の基本なり

經濟問答卷一終

經濟問答卷二

問

一 諸侯政事に心を用る事なき、時世のしからしむる所なり、然ども今縣官より制度の立様によつて、諸侯升平に酩酊するの耳目をかへ、逸樂をつゝしみ、政務に心を用る様になさしめん事いかむ

答

一 諸侯浮花に融化する事前答に委し、今や縣官より制度を立て其耳目を改め、政務に心を用ひしめむ事掌をさすよりも安し、如何となれば、朝廷の威諸國に徹し、諸侯皆其指揮に從ふ事、水の下れるにつくが如し、何ぞ施としてか行れざる事あらん、只をしむらくは縣官の心とする所朝士の外に出てず、海內を以て我有とするの量薄し、故に諸侯の風を撓るの制なし、且諸侯は自ら國家あり、人民あり、朝廷の制によつて政務に心を用ると、不レ用とのわかちある事なく、問の發する所を考るに、諸侯志ありといへども、當時の風俗に從て自然と無用の産を費し、國家貧窶に至る、みづから戒て其用を省むとすれば、同列ひとしからず、事に前格ありて、これに馳る事あたはざる物に似たり、爰におい

て課役年を追て重くなり、贈答日に從て多事なり、税歛極りありて、費用年々增加す、手を拱て國の衰廢を待つに似たり、これを救む事只朝廷ありて、諸侯の課役を減じ、賄賂を不ㇾ用、贈答古朴に歸して、其國家の有餘をなさむ事を欲す、これによりて縣官の制度をまつて、亦自ら手を懷にして富國をなさんと欲す、問の發る所爰に過ざるのみ、縣官の制度は下よりして論ずべからず、おもふに十五の憲法ありて、諸侯の格おのづから正し、加るに世々儉を用ひ、驕を禁ずる事居多なり、令する所は縣官なり、用る事あたはざるは諸侯自らなすのみ、政務に心を不ㇾ用は命をしらず、道を信ぜざるによつて也、昇平に酩酊するは天下泰平にして不ㇾ忘ㇾ亂の戒をうしなへばなり、自ら驕奢を是として、質朴をいやしむ、道を以て人に勝ん事を忘れて、事以て萬諸侯に秀むと、虛照をたゝかはしめむ事を不ㇾ欲とも得んや、他なし、天下の律をみづから省て、下よりして別に世俗の律を立て、相ともに是に馳ざらむ事を思ふ、朝廷の諸司令嚴然として其職を示し、國典にくはしからずして、專ら世俗の律をはり、前格後格と訇るのみ、よく案るに、一諸侯憤を發して道を心とし、天下の大典によつて世俗の律を捨て、賦歛を正して國にあたらば、富國の業目を拭て待べし、權門家よく暴をなすといへども、諸侯一代にして再三の課役を命ずるに事なく、且過當の課役ある事なく、其役を勤る時に當て、當所を正しく蹈に心なく、唯前面の飾を主として、みだりに無用の賄賂をなす、故に小吏其圖に乘て、種々の工夫をなして財を貪る、一人其謀にまかせて其役を終れば、後役の例となり、積て莫大の費用とな

り、過當の役に似たり、是縣官の制度正しからざるにあらず、諸侯自ら此愁をとるのみ、國事を執るは不朽を目當とす、臨時の多不足必しも心とする所にあらず、たとへば三千貫諸侯一代にして課役あり、費用五千金にあたる時世の風なり、過當なりといへども、一役終る時は、終身如レ此役ある事なし、常に費用すくなく、入を謀て出る事をなす時は、三四年にして其耗償ふべし、償終る時は、おのづから有餘あらむ、世々如レ此なる時は、今よりして一層費用多なりとも愁る所なし、然らば縣官の制度を待て國用を足さむと欲するは、實に國家に心なく、道を目當とせざればなり、吝嗇儉約の分る所を會得して、みづから國律を立て、同列の諸侯へも此志を通じ、易簡にして禮を失はず、三四年をふる時は、藩中おのづから法則をたがへず、世間其家風として誹る事なく、縣官亦其家格と定て是を咎る事なし、當時の風しかりとなす、然ば仰で縣官の制度をまたむより、俯して吾藩の律を正して、常を定め變に應じて課役を辨じて、國家に不朽の備を設る時は、何をか愁へ、何をかくるしまん、爰に眼をひらく時は、問の疑おのづからひらけて、縣官制度の立處も不レ期して見得せむ

問

一 日本世官世祿を尊ぶ、故に下に賢哲の士あれども、重任の職にする事なし、如レ此なる時用様如何、又問、世祿世官の人にして宰職となすの見立やう、任じてつかひやう如何

答

一　世官世祿の家にて、下に賢者ありても、直に取上て大職に任じ難しと、一時の利害によつて也、世官の人といへども、祖先の賤しきはあげてかぞへがたし、近くは近代小祿の人、恩寵によつて諸侯となる多し、其時大官の令是をあなづる人稀にして、多くは媚諂て其下風に立て、我職を全うせんとす、諸家においても、寵童成立して大夫と成もの多是あり、佞幸の臣官位高くなれども、人情離叛する事なし、況や賢なる者を擧て國事を命ず、何の難き事か是あらん、然ども諸説あり、佞幸の臣寵任せらるゝは、人々其人を憎むのみにして、君を恨る事薄し、如何となれば、大職の人其人に隨伏すれば、己が私を掩ひ、不任の量是に仍て隱る、身非を保つに利あり、上道を好て賢者を用る時は、當世大官の人其官其官に立の不正現然として明らかなり、己が非を掩ふ事あたはずして其職を保ちがたし、故に姦人心を合せて是を譏し、行るべきを堰き、達すべきを折く、衆口金を鑠し、賢者其位を久しうする事あたはず、藤左府の管右公におけるごとし、爰を以て下の賢者用ひ難しといふ説、初て謂あるに似たり、若上明にして心國家にあり、國家の爲に賢を尊ぶ、何のおそるゝ所かこれあらん、上實に賢を好み、國家に心ある時は、一時大職の者おのづから國家を任とし賢を稱す、如レ此なる時は上に求めずといへども、下より賢をすゝむるに從ひて是を用ひ、國家に試て然して後大官に任ず、君信

じ大夫服するの人、國內信用せずといふことなし、今の人主心實に賢を求ることなく、大夫心國家にあらずして、只私用是を思ふ、賢者目前にありとも、何ぞ辨ずべけむや、況や下にある賢能をや、國家の爲に賢を用るの心あらば、賢才不ㇾ期して會集せむ、必しも疑ふべからず

一　世祿の人をして大職に任じて、其用をなさしむるも又然り、數年情欲に馳て、心國家になき者をして、直に國用なさしめんとす、明將の德といへども、なんぞしかく速ならん、上國家來に心あらば、從容の間政事を談じ、或は問を發し、或は常を托し、おのづから彼が心をして國家にあらしむる時は、不ㇾ期して道による、道による時は、おのれが短所をわきまへ、不ㇾ及の事現然たり、何人か慙を生ぜざるべき、慚愧一度生る時は、其人正に用ゆべし、必功をなす事あり、世祿の人別に愚なるべきの謂れなし、只幼より深窓に人となりて、辛苦をなむる事なければ、おのづから道に遠ざかる、事も疎し、道によらむとし、事にも委しからむと志を起さしめば、數人みな國用をなさむ、人主爰を知て數年をかりて是を化導する時は、必や其證顯るべし、其人道に心ある時は、其子を敎る事おのづから正し、然る時は一代國用をなさずとも、子孫世々皆國用にみてしむべし、人主人を得るの大機權なり、察せずんばあるべからず

經濟問答卷二終

經濟問答卷三

問

一　今天下の諸士風俗自然と安きに流れて、道により藝につくものゝなし、人主たま〳〵心を用ゆる事ありといへども、久しく道にたつ事あたはず、此時に當て諸士をして道により藝につかしむる事如何

答

一　當時海內の風俗誠に如ㇾ此にして、道に心あるもの、一大息なす所なり、都會にあつて家士をして、道につけ藝によらしめむとせば、心勞して其功をみる事なけむ、都會の人道によることあたはざるといふにはあらず、百年餘の治平に生れて、亂を忘れて安逸に醉ふ、朝廷の諸士無爲の官廳に有て、國家に心を用ゆる事をしらず、事變にくらく、押形によりて國事を斷じ、賄賂公行して、只多事なるを政を執と思へり、下役人立べきの功なければ、先官の非を顯はして己を飾り、下民をしひたげて己が功とし、其人切りに事をとる、是に仍て制度朝に出て夕に替り、國家年を追て多事となり、瑣

細の事に人を勞せしめ、國の大事おのづから疎なり、天下の諸侯都門に在て、縣官をうけて政事をなす、其風自ら移りて諸家皆多事なり、其事とする所皆國益ある事なく、細事密にして無益の財を費し、縣官を敬するを名として、權門にしば〳〵走りて謟を盡し、儉節を名として下を苦しむ、於レ是諸家面々として公務に暇なく、日用の官務を以て我道とし我藝とす、是を以て國恩に報ずると思へり、宜なり、無爲の世に居て、外に國功をなす事なし、日用の雜事を以て道となす事を、滔々たる諸家皆しかり、偶心ある諸侯といへども、手を下す事能はず、强て是を治むとすれば、日用の諸務皆滯り、直に縣官の譴責至るに近し、故に初ある者も終りを全する事あたはず、士風廢弛して遊逸に走る事、人情を以て日用瑣細の難事多し、いかむぞ夫をして道につけ藝によらしめむ、只人主の耳目をして都會の非なることをしらしむるにしかじ、諸侯の家、領國を本として都門を末となす時は、おのづから人々道により藝に附べき事疑なし、人情かれに在て是をうらやむといへども、亦是によつて彼をそしるに至る、領國にして驕を禁じ、餘暇あつて群集なす時は、情欲の馳すべきなく、他に抗衡するの奢思すくなし、偶然として祿をはみ妻子を撫育す、爰に於て道を唱ふる時は、人々むかふ所を知り、藝を練する時は、人々其術の人に超ん事を欲す、此時善を勸て惡を懲す、直に道の眞なるを會し、術のすぐるゝを稱して、手を空しうする者を勵す時は、自然に藝によらざるはなし、たとへば遊逸にまみれて、老年に至るありといへども、一度慙を抱く時は、其子弟を勵まして道を修し藝につかしむ、况や壯年の者

飜然として前態をして捨て修力(マヽ)を通ず、都門は交代して久しくをらしめず、唯都門に居る時は、日夜に公役に勞して頻に鄕國を慕、此時に當て諸士領國の風其化(マヽ)して、都門にあつても遂に修し藝によらざる事あたはず、自然と家格となつて、諸家にも是を唱ふ時は、朴素鄙野の風却而賞せられ、自ら得たりとす、これ他なし、當時都會の風領國に移れり、都門の住居をすくなくして、領國の諸士多き時は、領國の風自然と都門に移る、おのづからの姿なり、因ゝ茲當時都門の風を撓て、道により藝につかしむとするは、盜賊に珠玉を守らしむるに近かるべし

問

一　今世農民おのづから其業にうとく、婬逸にはしる故に、國家自然に不辨に至る、是國律の立ざるに似たりといへども、天下流風のしからしむる處、如何ともなし難し、業を疎じ都會に走て、生をなすに安し、此故に農業おのづから力たらず、荒田閒地年を追て多し、これをして其業をすゝめ、領國人を滿し、田畑の荒蕪を起さしむる仕方いかん

答

一　善哉問ふ事、是國家經濟の基本、諸侯の家爰をしむるに心なきによつて、領國おのづから貧な

り、四海自然に驕奢に馳て、本業にうとき當時の風なり、然れども人々求めて本業を疎むずるにあらず、農に力を盡すを勞として都門に出て、手を拱して生をなすといふこと亦一端のみ、人情馴ざるに安んじ、なれたるに勞す、何ぞ本業を捨て、なれざるに走らん、從來諸侯の家其不足を補ふに、其補ふ所利倍ます〳〵多くして、大商の爲に雌伏せられ、少の有餘をなさんと欲する時は、百姓を攻て聚斂課役年々に重くなる、百姓力を盡して業をなすといへども、一歳を安んじ妻子を育むにたらず、常に匆々として饑渇にまぬかれむ事を欲す、本業に力を盡して有餘を得ざる時は、誰か我業を主とせん、自然と業を廢し都門に走て、商家の奴となつて快とし、能生をやしなふ、宜なり人情のこれに走る事、これ他なし、領主都門目前の急迫に苦むで、遠く百姓をしゐたぐるによつてなり、人主百姓を見る事子の如くして業を勵す時は、おのづから有餘あり、業を廢すればおのづから勞多からしむる時は、令すといふとも百姓其地をさらず、業を疎んずる事あるべからず、其仕方萬般今やあてゝいふべからずといふといへども、國内の人別を改て外國へ走らしむる事なく、たとへ去難く他國なすとも、年限を究て永く外國に住居なさしむべからず、而後に手を組で、一村〳〵に力を同うして農業を勵さしめ、力を盡す者に有餘あらしむる時は、誰か强く外を求むや、國内山野河海によつて、地力を盡して國に益あり、人に益ある事は、始に財を費して是を興し、其功を賞して永く國用にみてしむる時は、萬民其地に居て生をなすに安く、凶歲に饑渇に及ばざれば、辯者をして都門風流の俗を語り、手

に唾して千金を得ると勸るとも、誰か一人是を欲んや、人の馴て其居を安んず、古今其情替る事なし、今の人主爰に眼を付て領國より事を正し、人情をむかへて法律を立る時は、富國の基本目を拭てこれをみむ、なほ其仕方の如きは其國に□は、立處に手を下すべし

經濟問答卷三終

經濟問答卷四

問

一 國家の人をして各其當所に立しむるは、律によつてなり、國律立て下民これを知て、あらかじめ罪科の輕重を悟て、知て律を犯すに至る、律の立所正しからざるによるか、國律を立るの仕方如何

答

一 國家に律よく立にあらずんば、賞罰當る所をうしなふ、故に名將律を立るを經濟の本とす、抑國土の萬人各心あつて、趣を異にして一様なる事なし、故に是を速なさしむるは國律の立にあり、律をこえず能當る所を守て、國家に益あるをば賞して是を執る、律を守らず當る所を失つて、國家に害あるをば罰して是をこらさしむ、法を不朽にたるゝ事これによつてなり、律は一代にして立、古人の律を以て今世に行ふべからず、古人律を立て國を治め、人を治むるの所を以て□□して、條は時に應じて立べし、萬民律を知てこれに違へば、身を措て所なきを會して、始て一連して國功をなす、律を民にしらしめざるは陷穽を作て民を驅るに等かるべし、皆滑才の腐儒一時の害を見て此説を立るのみ、國家

上に眼をひらかざるの言なり、志士なんぞこれをとらん、下律を知てあらかじめ其罰を考て、知て是を犯す事あるは、元來律の正しからざるによれり、いかんとなれば、國政は火のごとし、人恐るゝによつて却て惡事に遠ざかる、若水の如くならば、人恐るゝ所をしらず、投溺の愁ひ擧てかぞへがたし、たとへば一犯罪人過料を以て其罪を贖ふ、下民其過料の數を計て是を犯し、顯はれざる內を利として、顯はれて過料を以て之れを贖ふ、是に依て犯科の者たゝずといへり、是大都會の姿を以ていへり、律は正に惡しきにあらず、つり合を辨へざるによつて此弊あり、如何となれば、律を立て人をして當所に立しめむとならば、先諸人の當所をよく定め、人別を改め、組合を定め、各業に立所へ及す時は、一人犯さむとなすとも組合是を制して、一組一同に犯さむとすれば相組是を制す、制してやまざる時は官府へ訴ふ、官府より命じて是を逐はしむ、逐はれて行れ訴人が犯人を組とせんや、其人の行事を改るを見て組を定めず、爰に於て亦犯さんとしても果す事を得ず、自然と律を守るべし、一端をもつて見る時は各如ㇾ是、これ律條のあしきにあらず、根本を疎にして末を以て是を治めむとす、良法行れず、下皆是を違犯す、爰を以て其法を惡敷とする時は、實に心國家なきによる、願はくば本に依て律の立所以を辨ぜん事を、亦古來の律を以てみだりに今に行ん事とする時は、風俗人情に不ㇾ應して、立て却て害ある事なり、是等は時勢をしらざる人のなす所にして、論ずるにたるべからず

問

一　時變によつて領國の民を救ふに、一統に惠を蒙らしめむを、亦窮民を撰らむて是を救んに、一統なる時は富民を附益す、窮民のみを惠まば、亦偏頗あるに似たり、此境いかむか決すべき

答

一　凶年饑歳に民を救ふて、野に餓莩なからしむ、賢君の政事なり、一統に救ふ事あり貧民をえらんて是を救ふ事あり、皆時變によつてあらかじめ如ㇾ此と論定すべからず、民に課役多し、田畑年々費耗し、民力一統につかるゝの時に當ては、貧富をわかつことなく德政あるべき事なり、洪水暴に至り、或は旱天苗を燋に至て、貧民一時に困厄して草根を掘り、木葉を食としてまのあたり餓死になん〳〵とす、此時豈富民食ある者とひとしく是を救んや、只其死を救ふ事急務なり、民情是が爲にいかんぞ□□恨を生ぜんや、これその大段也、抑問の意貧民をえらんて是を救んとならば、平民皆これを恨るの情あらんことを恐る、故にこれをならして惠を施んとす、人情の常に安きになれ、恩惠を貪る事自然なり、法常に正しき時は、豪民は各みづから力を盡して貧民を救ひ、平民は我餓死に及ばされば、みづから求むるに心なく、貧民を書記して上へ訴へず、救恩を請ふべし、是民情一和の風なり、如ㇾ此

時は貧民を救ふに食を以てするとも誰かうらみん、皆踊躍して其仁を慕ふべし、すべて民に臨に上に僞の情あつて、强て是を伏せしめんとする時は、下民おのづから恵を貪るの情多し、外面上下和通の如くにして、内面心に相にくむ、是道をかりて人をして服從なさしめむとなす時、かならず此弊あり、政を執るものゝやゝもすれば爰に失する多し、下民は愚にして曲れり、上自然の筋目をあらはして定規を立ざれば、民情直なることあるべからず、然れば臨時の捌は時變に應じて其賞を行ふべし、只常に正路を以て敎導し、刑罰を以て威を示めし、死生存亡の時に至て、倉廩を開きて汎くこれをすくひなば、民情の服從する事、何ぞ水の東流するが如くのみならんや、能地力を盡して國を富ましめ、國勢を保て、治亂の備これより全からん、熟察せずんばあるべからず

經濟問答卷四終

經濟問答卷五

問

一　今世諸侯宰職を撰む仕方いかん

答

一　國家に權威を撰み得る事大事なり、權威は國の柱礎なり、成敗此人の賢愚により、凡人間の智量我智の限りに應じて人の量を知る、賢は賢を知り、愚は愚を親む、自然の姿なり、然れども我智其人に不ㇾ及といへども、大智を得て臣とするあり、齊の桓公の夷吾を臣とし、蜀の劉備の孔明を得るの類なり、萬人桓公玄德の管仲諸葛亮に智分のおとれるを知るといへども、兩賢を臣として是をして其智量を盡さしむるの德あるを辨ぜず、其人賢明といへども、人主に其器なき時は、何ぞ其量をあらはさしめむ、我國にして鄙賤よりして用て權威に任ずる事尤なし難し、姓氏を尊ぶ風として、殊更世官の制あれば、今にして賢相を得る事甚稀なり、唯制式正して、家士をして能武道を學び、文藝に馴致せしむる時は、往々世官の中にして、國柄を執るべき人生ずべし、上道を失、下道を學び、衣冠凡庸多し

て、布衣賢明あるは昇平の姿然とす、如何となれば官を世々にして、生れて衣食住に富、形體の辛苦をしらず、帳中に人となれば、賢哲の質も事物にくらく、況や庸愚の性に於をや、官府に賢明なき所以なり、貧賤の士は生れて常に饑渇にくるしみ、形體辛苦して、不ㇾ期して藝により道を修す、賢明の性彌傑に、愚魯の質も修してよく善惡を分つ、賤士に賢者多き所以なり、是によつて有志の諸侯左右世官の國に益なきを憤り、處士浪客に敷治制亂の智量あるをしつて長を用むと欲す、しかれども是を延て俄に權職に任ずる時は諸官府輕視して是に不ㇾ從、一藩不平を抱て四民其指揮に屬く者なく、自然の風俗如何ともなすべからず、然らば實に道を好むの諸侯賢士を察知せば、決て是を師席にすゝめ、自ら敬して其說をきく、諸士を勵して同く道に附しむる時は、從容の間自然に道に化して、諸官府慙を抱き道を修る時は、善人おのづから多く、惡者おのづから退く、而後に其人實に國家に益あるを知時は、諸司と談じて諸官府皆此人を權職にせば、誰か其指揮に洩るべきと、志信あらはるゝ時にして、重祿をあたへて、君臣の約をなし、任じて其量を盡さしむる時は、國家の治平不ㇾ久して其證あらん、然れども道を談ずる者、論辨人を伏せしむるにたへたりとも、身體國家に當て其功を顯すに不ㇾ達あり、論辨人を伏せしむるに不ㇾ及とも、一身事に當てよくふむあり、是君上の心を道によせて智覺する所なり、これ賤士の賢なるを擧て權威にするの手筋なり、其本になり、是よりして世間に賢を得て用る事あり、是よりして諸司賢を知て勸むるあり、共に君上道を好むの實にあらざれば、賢を得る事あたは

ず、あらはに道を信じて密に情に馳する人の断じて不レ及事なり

經濟問答卷五終

利權論

遠山景賢著

利權論

遠山景賢著

難哉政事の論、天下國家を治るには、「壹是皆以レ脩レ身爲レ本」は、是れ大學の教にして、聖人の至教なり、然はあれど若政に從には、誠意誠心而已を務て、先王經世の事實を考窮せざる時は、譬ば大川を渡る志而已を務て、舟楫無きが如し、孟子も「徒善不レ足ニ以爲一レ政」と云ひ、又「民不レ被ニ其澤一、不レ行ニ先王之道一也」と云ひ、又「爲レ高レ心同ニ丘陵一」と云ひ「聖人既竭ニ目力一」と云ふの類、皆先王事實の上を云へるなり、又下に臨む時、己誠意正心し、德を以て表となり、禮を以て教をなし、訟なからしむる事は、本なる事は本なれど、民の感化一ならず、化する後は善なれど、化せざる前は治らず、故に政刑二ツの者、又德は禮にそゆるなり、皆偏廢すべからずと朱子も是をいへるなり、德教は仁義を導き、政刑は富利をあたへて、乃民を化するなり、富利をあたゆる事なくて、唯教而已施せば、民情上に趣かず、民情上に趣かねば、上教下にも入難し、故に孔子も先づ富まして而後に教と云ひ、又周易を傳して「何以守レ位、曰仁、何以聚レ人、曰財、理レ財正レ辭、禁ニ民爲一レ非、曰義」と明らかに説れたり、是を以て觀る時は、大夫士庶人を導は、先づ是を富さねば、教を立ると云ふとても、其驗あるべからず、故に愚意を述るなり、先大夫士庶人丘民を富さんと欲せば、金銀の權を商賈に執らるべからざるなり、商賈

に權を執られざるは、名實を正しくするに若くはなし、商賈の名ある者は、賣買をせば足るべし、是名と實と當るなり「孔子曰、名不レ正、則言不レ順、言不レ順、則事不レ成」と、若商賈賣買を次にして、大夫士に金銀を貸し息を執て、金銀をふやせば、是名は商賈にして、實は商賈にあらず、即九府圜法の權を執り其富諸侯の如くなり、ヶ様の游民ある故に、君上大夫士丘民まで皆貧乏に至るなり、然らば即金銀を貸事を止んか、若し金銀の貸借の通を止めば、愈遽造次の用皆辨せず、是本より止る事能はず、又商賈に金銀の權を執らるべからず、如何して富有を致んや、若愚を以て按れば、四方道里の均き所に官府を建吏を置き縣官の金を以て大夫士に貸し、少許の息を出さしめ、是を官府に納めなば、大夫士息を出す事、商賈に借るの息より少く、商賈に媚の弊を止む、是二利なり、君上始めに施の惠有て、後に漸く大惠を施さるゝの二利なり、又其金漸く盈れば後には息なしともすむべし、是豪富の商を抑、金銀の權を上に執の理なり、然れども此事速になすべからず、若始めより諸侯大夫士に貸さんとすれば、官府遽に事多く、商賈遽に利を失、或は金銀の通を塞、騷動謀べからざるなり、若此術をなさんとせば、先づ試に下士に貸し、始末の義理を能く察し、彌事の宜を見なば中士に貸し、又始めの如くに察し、彌事の宜を見なば上士に貸し、さて諸大夫卿諸侯皆縣官の金を貸し、少許の息を出さしめ、官府有餘の度を察して、後に商賈の金を貸すを禁べし、「孔子曰、欲レ速則不レ達」と「老子亦曰、若レ烹二小鮮一」と、皆しづかになす事なり、此事民と利を爭の弊あるごとし、然れども本君上の利を欲するにあ

らず、諸侯大夫士の富を欲するなり、如何となれば、商賈に貸るの息は多、官府に納るの息は少ければなり、又官府に息を納むるは本君臣の分內にして、商賈に貸るの弊にまされり、是周禮泉府の國服爲」息の類にして、聖人理財の本意なるべし、但桑弘羊王安石の類此理を惡しく用ゆる故、民と利を爭ふ樣になり、譬へば兵器は國を守物なれ共、又國を亂す具にもなるなり、用ひ樣さへ能き時は、則國體を失の弊なく、諸民を富ますの理あり、農工及貧商は諸侯大夫士を待て生業をなす者なれば、諸侯大夫士の富るは、皆農工及貧商の利なり、是を以てこれを察すれば、何の利を爭ふ事か是あらん、萬物の征を賦するにまされり、萬物の征を賦するは、工商の利を上に分るの理なれば、是民と利を爭ふの事なり、工商は少許の征を出して貨物の價を貴くし、且權を執て鄉里に驕る是少からざるなり、若此術を用ずして商賈大夫士に金を貸し、息を納ること多ければ、商賈は益々日々に富、大夫士空乏に至るべし、若し金銀の權を失ふべし、若しかくの如くならば、敎何に由てか施さん、軍用何れにか執ん、「左傳云、皮之不」存、毛將安傅」と、又此弊を惡み富商を減んとて、青樓遊所を鄉里に建、富商の金を散さんとすることあり、其の金誰が手に落るや、皆游民の手に入るなり、是れ游里日々に繁華にして、不耕不織佪食暖衣するもの多き故、上下皆窮するに至るなり、且は風儀の害となり、游冶風を變すべし哀哉夏畦に病める民に賦し、士大夫是れを商に運び、商是れを游里に運ぶ、是本末顚倒して、丘民日日に減損するの甚なれば、此弊小事にあらざるなり、「大學云、生」之者衆、食」之者寡、則財恆足矣」

と、若此術を能用ひ、商賈の金を貸すを禁じ、上に利權を執の後名實正しくなるならば、游里の繁華消亡し、游冶の風俗日々に止、諸侯大夫士皆富て、若亦金の柄を執、田租の半をも給らば、民驕らずして農に走り、本を務る者多、地力十分に盡す時は、收納日々に增なるべし、又游民は日々に減じ、各其所を得し時に教を施す事あらば、何を以てか從はざらんや、是經濟の要ならん、秦漢より以來儒學者流は徒に施事を知れ共金銀の權を執を知らず、有司者流は徒に金銀を集むれ共施事を知らず、是其說相背て、二ッながら行はれざるゆゑんなり、故に金銀の權柄を上に執て施事をなせば、是相從ふ道理なり、且枝葉の儉はなすべからざるなり、若し物每に儉約せば、人氣自ら從はず、若し上の恩惠を忘却し、上を怨る事あるべし、然れ共又時の勢に寄なれど、先は枝葉の儉を止、彼縣官の金を貸し息を納るを基本とし、官府有餘の度を察し、施事をなすならば、若し金銀の權を執り、大夫士庶民に至る迄相從ふの理なるべし、「孔子曰、無レ見ニ小利一、見ニ小利一大事不レ成」と

一　凡農は本を務る者なれば、是忽にすべからざるの事一なるものなり、農貧になれば地力を盡す事不レ能、見たる荒田はなけれ共、作り樣十分になき故に收納自ら減損す、魏の李悝曰、農民勤めざれば畝ごとに三斗を減ず、善勤れば三斗を益と、故に農を富すに若くはなし、其農を富すのも、富農を富すにてはなし、貧農を富すなり、若し貧農を富さんとせば、是亦鄉里の官府を建、貧民に縣官の金を貸し、縣令是を司り、少許の息を出さしめ、金を富民に借る事を禁ずべし、是れ亦速になすべから

ず、皆前後の法のごとし、若し縣官の金を貸さず、貧民富民に借るならば、富民は彌日々に富、貧民は日々に乏して、土田富民に奪れて、終には傭耕だもなす事能はず、耕作を止或は奴僕となり、或は商賈となる是農日々に減損し、商賈日々に增長し、物價貴くなるの基なり、故に縣官の金を農に貸し、少許の息を出さしめ、金銀の權を上に執り、旱魃水損の備とせば、農其所を安ずべし、然れ其農に大夫士に貸し、官府有餘の後なるべし

一　郷里に倉廩を建、年の豐なるを待、穀を圍ふは、本より凶年の備にして、必ずなくて叶ふべからず、穀を用ふるは、專ら麥をよしとす、麥を四分の三米を四分の一籾にて圍ひ、年々新穀と入替ふべし、如何となれば、本より農民は麥を食し、米を賣るものなれば、其食ふ麥は貴く、其賣る米は不作の上又賤しくならば、何ぞ善るべきや、又商とても凶年には麥を食ふてよかるべし、故に唐の義倉の類は皆美粱而已を圍はず

一　升平久しく續く時は、游民都下に多き事古に倍すなり、是を農民に歸せんとするに、都下の惰游に習たる民、一日耕さば十日病べし、故に誰も農を願ふ者なし、又是を願ふ程に游民を困にせば、上を怨て事を起すべし、又其中の四窮に哀なる事もあるべし、唯都下民戸の額を定め、ふやさぬ様に手當して減ぜば減じ、次第にせば漸々減ずべし、又農民國を出でざる樣になすも、一概に禁ぜば甚だ窮する者あるべし、只其歲の限りを立其所をなし、其家を成す樣に所の有司世話すべし、是亦上に利權

を執し上の事なり

一　君の衣食の類、及臣下に賜らする物を、都下の商より買ふ事を禁じ、郡主縣令に司らしめ、各其所の土產を貢せしめ、是を用る時は萬物其本より買ふの理なれば、價賤して品物能、農は利を得、商は利權を奪ふ事能はず、且國體もよかるべし、此法既禹貢に備れり、若此貢法を止め、萬品商賈より買ふ時は、本を務者祁寒暑雨に苦みて耕作織紝し、其物を纔の利を得て商に賣、商は病ずして利を執て、是を國主に賣るなれば、君と民との中に居て徒に利を得る而已にして、物の價は貴くなり、且其實は游民の類にして、利權を奪ふ而已なるべし

寛政五癸丑年春三月　　納府吏　遠山景賢謹書

利權論　終

貨殖論

畑中太冲著

貨殖論

畑中大冲著

初足下ハ貨殖ノ事功者ニテ、其ノ名ヲ稱シ申シ候、私ハ兼テ貧困ニテ、足下トハ道ヲ異ニセル様ニ候得共、左ニハ無㆑之候、夫故ニ聖人ノ道ニ貨ト云者ヲバ深重シテ、是非ナフテハ一日モ生民ヲ安ジ難キニ由テ也、私事ハ乍㆑不㆑及學問ノ沙汰致シ、國家ヲ齊ルノ義モ少々伺中候故、貨殖ノ術モ疎カニハ不㆑存候、但シ其時ノ命トテ、得ザレバ叶ヘ難キ故、當時此術ニ不㆑及候、足下ハ能々時ト命トニ乘ジテ、其上ニ心力ヲ用ラレ、知功モ人ニ勝レ候故、思フ様ニ程能調ヘ候事ニテ、實ニ道ノ上ニモ賞翫申事ニテ候、而ルニ貨殖ノ筋、學問ノ人ノ沙汰イカ様ニ候ヤ御不審候テ、私心付モ候ハヾ、書進可㆑申由御望モ候ハ深キ御志ニ候、世ノ常ノ人ニ候得バ、自ラノ寶ニホコリテ、道ノ上ノ沙汰ナドニハ不㆑及事ニ候ヲ、如㆑此御吟味ナサレ候儀古人ニ不㆑恥候、扨申達候儀ハ、自見ニハ無㆑之、皆々經書ヨリ以下、史子ノ昔ヨリ貨ヲ以テ世ヲ治メ、身ヲモ整ノヘ申候タメシニテ候、サレ共私儀貨ニ働キ疎キ事アルベク候間、好ヲバ取、惡ヲバ去候事當然ニ候、且老子ニモ、言者ハ知ラズ、知者ハ言ズトテ、誠ニ不㆑知シテ言タトヒニ近候、此内古代ノ貨殖ト、當世ノ扱ヘ有ベク候、夫ヲ斟酌シテ御了簡ナサルベ

ク候、自得ノ上ハ益修錬ノ術相增、永ク家ヲモ保チ、譽レモ高カルベク候、珍重不ㇾ過ㇾ之候、次ニアラアラ貨殖ト申事ノ大綱ト術トヲ申入候、

大禹謨ノ中ニ六府ト云事アリ、水、火、木、金、土、穀ニテ此六ヲ能調テ國家ヲ養フ事ニ候、必ズ金穀バカリ貨ニテ無ㇾ之候、是貨殖ノ本體ニテ、喩ヒ金穀アリテモ、外ノ四ノ物不和ニテ候得バ、民ハ生育ナリ兼申候、貨ト申物ハ孔安國ガ洪範ノ注ニモ布泉魚鹽ト申、日用ノ物ヲ申候、是六府ノ心ニテ候、又前漢書ノ食貨志ニハ米ト錢トヲ論ジ候、兩論何レモ通候、サテ貨ト云物ハ、人ヲ養故ニ何事モ是ニテ詳ニ候也、六府ノ委キ沙汰モ候ハバ別ニ可ㇾ申、マヅ貨殖ノ基ニ候故、アラ〱申入候

易ノ繫辭ニモ「何以聚ㇾ人曰ㇾ財」ト申シテ、此ノ貨殖ナケレバ、人ヲ集財ヲ以テ世ヲ治メ可ㇾ申樣ナキニ由テ、洪範ニモ八政ト申テ、第一ニ食ヲ置、二ニ貨ヲ置、此二ツヲ以聖人ノ天下ヲ治ル干要トナサン候、貨財ハ至テ重キ事ニ候

昔ハ金銀通用少ナク、貝ヲスリテ貨ニ用ヿ、財ト云ヿ、貨ノ字モ亦貝ニ从ブ、其節ハ錢ツカヒノミニテ金銀ハ大方器用ニバカリ爲テ、當世用ニハツカハズ、サテ其錢ト云者ハ、今ノ樣ニ麁末ニ拵ヘ申物ニハ無ㇾ之候、夫レ故錢ノ位高ク、今ニ殘候布錢貨錢ナド云錢ハ、漢ノ世ノ物ニテ、二千年ニ近ク候ヘ共少シモ損セズ、結構ナル者ニテ、昔ハ錢ヲ泉ト申テ、錢トハ云ハズ、其故貨ト云テ人ゴトニシマヒ置候ヘバ、世ノ通用滯候故、泉ノ流レテ滯ラザルノ趣意ニテ、サテ流レテ人ノ用ヲナス事泉ノ如ク

也トテ泉ト名ケ、代々錢ヲ鑄ルハ天子ノ權ニテ、其時ノ王者時ヲ見テ、世ノ中ノ高下ニヨッテ諸物人ノ迷惑ヲスレバ、錢ヲ輕クモ重クモ錢ヲ鑄直シテ時ヲ救ヒ候故時々カハリ候、世ノ中滯ラズ民安ク候、是ヲ齊ノ管仲ニ至テ書シテ輕重ト申テ天下ヲ平ゲ國家ヲ治メ、富ヲ爲候權柄ニ致候

錢少ク天子ノ權ニテ、タマ〳〵大名衆モ錢座ヲ御免ナサレ候ヘバ、其ノ國殊ノ外、富申候事勿論ニテ、齊ノ國ヤ又淮南王ナド爐ヲ自ラ始メテ錢ヲ作シ故、富ハ天子ト同キ由、此錢ヲ取扱フ作法ハ、周公旦ノ始ラレテ泉ノ九府ト云モノヲ造リ、是周經ト云書ニ委ク、當世ニサノミ用無レ之候、其後唐モ代々時ヲ見テ是ヲ鑄直シ、當時清ノ世マデ度々ニテ、皆歷史ニ詳カニテ候、其損益アル事ニテ候、而レ其當世ハ大名ノ國ニテ錢ヲ鑄ル事指支候故、其故無用ニテ、モシ此末爐ヲ免サレナバ、其時沙汰ニ及ベク先錢ト云事大概如レ此

周ノ世ハ前漢ヨリ盛ニ錢金ヲツカヒ申シ候、孟子ナドニモ、金ヲ費候事見得候、史記戰國ノ代ニモ、ヤヽモスレバ、黄金ヲ與ル由ニ候、漢ニ成テ金銀ノ沙汰委ク、流行當世ト同ジ體ニテ候、漢ノ世ハ大司農トテ出入司ノ役人、天下ノ穀ト金銀ヲ司リノ役、別シテ折入巧ナル者ニテ、先高祖ノ代ヨリ文帝二代ハ倹約ヲ專ニセラレ候故、自ラ金穀アマリ、米ハ陳紅トテ古クナリテ食レズナリスホド餘計有シ由ノコリアリ、藏ノ中ニテ緡(ゼニナハ)トモニ朽候由史記ニ見エ豐カナルコトニ候、サレ其物盛ンナレバ衰ル習ニテ、其次ノ武帝ノ世ハ四方多事ニテ物入多ク、金穀大分ニ減候テ、御用向凡テ手詰リニナリ、民ヨリ

金穀ヲ取上テ、位ヲ給スル法令ヲ仰出サレ、實ニ中華ハ大國ニテ、穀ナドハ數シレズ出候故、舊史ニハ其數ヲ記サズ、金ハ武帝ノ時微カニ一度ノ法令ヲ出サレ候處ニ、五百萬兩出金有レ之由史記ニ見エ申候、其外ニハ如何程出候ヤシレ不レ申候、左ニ候故國用足リテ、其上ニ桑弘羊ナド申勘定方ノ役人名高キ者ニテ、天下ノ商賈ノ諸役迄、取立候ニ委ク、是ニテモ亦出金夥ク、サレ共民モサノミ痛不レ申、是貨財ヲ生ズルノ巧ナル故ニ候、能貨殖ヲ心得候人ヲ用ヒ候ヘバ、國用自ラ足リ申候、扨貨殖ノ法ノ國用ト申ハ、誰人ノ致シテモ、一萬金ヲ二萬金ニ忽チ一倍シテ遣ヒ候者ニテ無レ之、只用ヒテノ其才アレバ、繰合ニ前後ト申事有テ、一萬ヲ二萬ニナス勢ヒ是有候、是漢ノ桑弘羊唐ノ劉晏ナドガ術ニテ夫ヲシラザル人ノ行ヒ候ヘバ、有合ノ一萬金ヲ却テ減ジ用ヒ候故、何程民ヨリ取リテモ、國用足不レ申候、道ヲ不レ知故ニテ、莊子ノ語ニモ、朝四暮三ト云義ハ此事ニ候、返々モ前後ト申事、貨殖ノ大事ニ候

大學ニ、「生レ財有ニ大道ニ」ト申シ候、實ニ右申シ候通、財ハ聖人ノ民ヲ養第一ノ物ナル故、是ヲ生ゼザレバ不レ叶候、扨惡シク生ズレバ人ヲモ害ヒ、自分モ夫ニ由テ身ヲ害ヒ、其生ジサセ様ノ手段アル事直ニ聖人ノ道ナド、沙汰スル人ハ、金穀ナドニハ悉ク純ナル様存候ヘ共、左ニ非ズ、是非金財ヲ貯ヘ申、又夫ヲフヤシ候道ヲシラザレバ叶ヒ難シ、隨分貨ノ沙汰モ仕候、サレバ貨ト申物、トカク利ヲ貪ルニ近ク道ヲ損ズルニ至リテハ、又學者ノ惡ム所ニ候、扨聖人モ富ヲ惡ムニハ無レ之候、因テ論語ニ

モ富ト貴トハ人ノ欲スル所也、道ヲ以テセザルハヲラズト申、而ルニ學問ノ方ノ第一ニ師ニ致候孔子モ困窮ニテ、其上亞聖トテ門人第一ノ顏回モ、簞ノ食一瓢ノ飲ニテ、ヤフ〳〵露命ヲ凌ギ、同門ノ原憲モ困究ニシテ候、カヤウニ貧ナル者學士ニ衆ク候故、後世ノ學士手前ハ疎懶ニテ、貨ノ生ズル道ヲ不ㇾ知、剰ヘ金持ナルヲ短ク、金錢ハ賤キ物也、利ヲトル事ハ君子ノセザル所也、貨ハ固ヨリ好ム所也抔ト申ハ、片腹痛キ義ニテ候、是ハ俗ニ申スナラズハヒガメト申義ニテ、貧究ハ人ノ賤ム所ニ候故、洪範ノ五福ト申箇條ニモ、富ヲ第二ニ置候テ、六極トテ不仕合ナル事六ツアル中ニ貧ヲオカレ候、又論語ニモ周公ノ富共申、又易ニモ崇高ハ富貴ヨリ大ナルハナシトアレバ、聖人ノ心貧ヲ惡ンデ富ヲ貴ムニ相違コレナク、而レ共前ニ申通、道ニアタラデ貪リ取候富ヲ惡ム、由テ論語ニモ不義ニシテ富且貴トキハ、ワレニ于テ浮雲ノ如シト申候、カヘス〴〵モ富ト云事結構ナル事ニテ、人ヲ養ヒ世ヲ治ムル第一ノ道具ニテ候

利ト云フ事孟子悉ク惡デ候、是レハ無理ニテ、聖人ノ作ラレタル易ノ乾ノ德ヲノベ候詞ニモ、元亨利貞ト是有候、夫ヲ孔子ノ注ニ、利ハ義ノ和也ト云テ、利ト云ハ、人ノ義ニ當テ能ク和シテ得ル所ヲ申事ニテ候、由テ利ヲナスハ第一ノ事ニ候、後世利ヲ取事ヲ賤メ候ハ、孟子ノ僻見ヨリ始リ、イカニモ手段ヨク、ズラ〳〵ト金銀ノ利廻リヲ出シ候テ、其餘分ヲ以テ人ヲ養フ事、願クハホシキ事ニ候、但シ易ニ申利ト、聖人ノ利用厚生ト申事ハ、當世ノ利足ヲ取ル事ニハ之ナク、人ノ勝手ヲヨクシテ世ヲ直

ス許リナリ、夫ヨリ轉ジテ利足ヲ取テ人ヲ養フモ、大聖人ノ周公旦ノ泉府ヲ立テ、民ニ錢ヲ貸シテ利ヲ取シニ始リ申候、ヤハリ聖人ノ法ニテ候、中華ハ利分殊ノ外高ク、什一トテ十文ニ一文ヅヽノ利ヲ取申候、當世ナドニハ殊ノ外安ク、聖人ニ勝リタル仁術ニテ、尤モ金ヲ貸テ利ヲ取ル事、唐ニテハ士商ハ不レ及レ申大名ニテモ常ノ習ニ候事、右申通ニ候、周公ハ天子ニ代リテ周ノ政ヲセシ時、泉府ニテ利ヲ取、又戰國ノ孟嘗君ハ薛ト云知行ニテ、金貸ヲシテ利ヲ取候事見エ候、是ノミナラズ、後世ハ常ノ事ニテ候、士君子ノ利ヲ取事ハ快ク存ゼズ候ハ、古ニ暗キ存入ニテ候、是ニ差別有事ニテ、士君子トテ士以上ハ利ヲ取樣商人トハ替リ候、其故ハ商人ハ錙銖ノ利トテ一分一厘ノ利ヲ爭ヒ取事、古今ノ大法ニテ候、コレ一身ノ利トシテ家ヲ保ツ許リノ事ニ候、士君子以上ハ國家ヲ治メテ政ニモ預リ、世ヲ養フ爲ニ取候故、其取樣易簡トテ大マカニ取事也、其大マカニ取利ハ錙銖ニ爭候利ヨリハ、殊ノ外多クトレ候者ニテ候、易ニ天地ノ道ハ易簡ト有レ之候、其利ヲ錙銖ニトラントスレバ物ゴトハカユキ、其上細ナル物ニハ必ズ姦モアリ、損モアリ、易ノ大マカナルモノニハ姦コレナク、其上間違モナク、損亡モナキ者也、由テ大マカニ利ヲ取口ヲアマタ拵置テ、スラ〳〵ト利ルガ君子ノ利ニテ、中々君子ノ利ニハ、商人ナドイカ程働キ候テモ及難ク、返ス〳〵モ大マカナル利ヲ澤山ニ取樣ニ工夫スル事也

利ヲ爲ス者、金銀ヲ鑄ヨリ大ナルハナシ、去レ共此ノ二ツハ天子ノ權ニテ、大名幷ニ士庶人ノ預ル所ニ

非ズ、其元ノ爲ニ論ジテモ益ニ立不レ申、當世ハ有合ノ世ノ中ノ金銀能取廻シテ、利ヲ得テ人ヲ養フ之術ヲ專ト致シ、扨當時奥州ナドニテハ、大イニ利ヲ得ル事外ニ無レ之候、左候ハヾ米鹽鐵魚ノ四ツニテ、是ヨリ外ニ利ヲエテモ少シナル者ニテ、目ニカクルニ足ラズ、大方商人ノ手ニ落テ、君子ノ世ヲ治ルノ利ニ非ズ、返々モ此四ツニテ大ナル利有モノ也、是ヲヨク〳〵捌ノ手段第一ニテ、其内國ニヨリ布泉材木漆蠟ナドノ夥シク出ル國ハ、又是ニテ利ヲナシ、天下ト權ヲ爭者ニテ候故ニ吟味スル事也、由テ其國ノ體ト、其物ヲ出シテ捌ク地ト、鹽梅ヲ知テ取扱事也、中華ナドニハ魚ヲ海中ニ作リテ買法モ有、當地ナドニハ心得ザル事也、唐書ニモ山海有國ホド富候ハナシ、當國ナドニテ少シ心得アル衆ノ利ヲ能取廻シ、米鹽鐵魚ノ四ヲ安ク買テ他國ニ出シ、高ク賣金銀ヲ得ル事掌ノ中ニテ候、只是ヲ取廻シ候時ト命ト候テハ、時後レテ利取ラレ不レ申候、次ニ時ト命トノ沙汰アラ〳〵記シ申候

時ト申スハ、其ノ物ノ賣申時節ヲ待、何程安ク買ヒ集メテモ、下直ヲウケテウレザル時ハ大ニ損ヲナス、由テ聖知ノ人ハ其ウレ申時ヲ察シテ買集メ置申候、之ヲ時ト申、其術史記ニ見得候、荒增左ニ申入候、昔越王ノ臣ニ計然ト申智士アリ、此人深ク貨殖ノ道ニ達シ、是ガ詞ニ、其年金ニ當リ候得バ作モ宜ク、水ニアタレバ不作ヲナス、木ニ當レバ大ニ飢饉シテ、火ニ方レバ旱魃、日デリノ年ニ船ヲ造リ候ハ、必ズ究マレバ變ズル者ニ候間、ヒデリノ次ニハ水サカリニ成ベク候、由テ其時ハ船入用ニ成ベク候、水ノ年ニハ車ヲ支度致候、其次ニハ必ズ日デリニテ、路ヨク乾クマヽ車ウレ可レ申ト合點申

候、萬事必此通ニハナク候ヘ共、其心エヲ以テ事ヲナシ候ヲ時ヲ知ト申候、サヤウナレバ廻リヨク成申候、又ホンノ金ヲ溜申候ニ理ヲトキ候ニ、物ヲ歪フスル事ヲ勤メ、弊ヲ止ル事ナシト雖、此心ハ何也共相應ナル物ヲ買置シテ、金銀ヲ假ソメニモ箱ノ中ニ止メ置候事惡キト申候、此故ハ前ニ申候通リ、金錢ハ泉ノ如クニテ通用ヲ貴ブ、最モ金錢ハ仕舞置テハ世モ滯リ、又利モ付ズ、物ヲ安ク買置テ、時ヲ見テ高ク賣ガヨシト云心也、又貨勿留ト申候テ、又上極則反賤、賤下極則反貴、貴上如ニ糞土ニ賤如(マヽ)取如ニ珠玉ニト申候、是貨殖ノ大妙法ニテ候、其故ハ萬物ノ至極高直ニナリ候ハ、安クナラン前表也、亦至極安クナルハ高クナラン前表ニテ候、由テ物ノ高クナリ候節ハ買置致候事、物ヲモソツト高直ニナラント思フ心ヲ留メテ、ソツタト出シテ賣拂ガヨシ、少シモ不レ惜塵芥ノ如ク早ク賣拂ヒ申事ニテ、又物ノ下直ニナリシ節ハ、金錢ヲ不レ惜シテメツタニ買集メ候ガヨク候、珠玉ノ結構ナル品ヲ買如クニテ候、少シモ油斷ヲセズシテ買置、上リヲ待テ賣拂ベシ、カヨウノ策七ケ條申出候、内五ケ條ヲ以越ノ國ヲ治メ申候由記シ申候、此紙面ニ載セシ語ハ、萬世金ヲ儲ケ候大妙方ニテ候事ハ相違有マジク候、定メテ足下モ平日此術ヲ用ラレ候半ト存候、是時ヲ知ノ譬ニ候、又天地ノ時ヲ盜ト申ス術列子ニ御坐候、是モ同ジ理ニテ右ニ申候、金水火木ノ年ニ方リ、舟車ヲ造ルノ喩ニテ候、其噺ニ、昔大ニ富ル者アリ、其近所ノ貧キ者是ヲ美ミテ、行テ弟子ニナリテ其術ヲ尋シニ、富人ノ云ク、殊ナル術ナシ、盜ヲナセバ身ノ上ヨクナリ候ト申セシカバ、サモヤト心得テ頓テ市ニ行テ物ヲ盜シニ、搦メ

トラレテ僉議有シニ、有ノ儘白狀セシカバ、彼富人ヲ召テ問ハレシニ、富人笑テ云ク、盜ヲ教シニ相違ナシ、但我盜メルハ天ノ時地ノ理也、渠ガ盜メルハ人ノ物也、由テ惡ク候、其故ハ天ノ時ヲ盜ト云ハ、天ニ寒暑水旱ノ時有、夫ヲ預メ能程ヲ見計ラヘテ貨殖ヲナセバ、利有ラザル事ナシ、是天ノ寒暑水旱ノ時ヲ盜メル也、又地ニ高下燥濕ノ地アリ、夫ヲ程能見計ラヘテ農作ヲナセバ、米ヲ得ル事夥シ、是地ノ利ヲ盜メルニ非ザルヤト云、是能喩ニテ候、天地ノ時ヲ知ニ非レバ、物ノ利得難ク候

命ト云フ者アリ、是レハ天ヨリ配分セラレタル物ニテ、イカ程ノ賢聖ノ人、イカ樣金繰合ノ上手ニテモ、爲事皆々行違テ、段々手前アシクナル事ニ候、是ニ智慧ト功者ト入申候、是金錢計リニモ無レ之、天下國家ノ治方モ同ジ事也、初心ナル衆ハ左樣ノ節、是ニテハ惡キ〳〵ト、サマ〳〵ニ手ヲ引キ替ヘ仕候程惡クナル者ニ候、功者ナレバ手前ノ潰ヌ樣ニシバラク押ヘテ、命ノヨクナル節ニ働ク事也、是ヲ命ヲ知ト云事也、論語ニ「賜也、不レ受レ命而貨殖、億則屢中」ト申候ハ此事也、此心ハ孔子ノ弟子ニ端木賜子貢ト云衆アリ、學問ノ功者ノ上ニ大ナル金銀持ニテ、利ノ取樣上手ニテ候、扨天命ヲ待ハモドカシキ事也トテ、手前ノ器量ヲ以テ働クニテ候、サヤウニスレバ常人ハ惡キコトモ有モノナレ共、前ニ申通功者ナル故、了簡悉ク世ニ相應シテ爲ントスル事皆中リ候ヲ、孔子ノ譽玉フ語也、扨是ニ又一ツノ手段有リ、此通リオモンバカツテ、シバ〳〵中レバ申ニ不レ及能候得共、慮テモ中ラズ、又手前ノ潰ヘヌ樣ニモナラズ、至極難澁ニナリテ、十死一生ノ合戰同樣ノ場ニナル事必ズ有者也、左樣ノ時ハ又

轉ㇾ禍爲ㇾ福ト申事家語ニ有テ、聖人祕傳ノ事ニテ候、其故ハ至極難澁ニナリ候得バ大ニ困リ入、外ニ手段モナク、終ニ家モ潰レ貨モ失ヒ申候、而ルニ功者ナレバ其禍ノ來ルヲ福ヒトシテ、其勢ヒニノリテ忽チニ禍ヲ福ヒニ變ジ替申候、大損ヲナサン時却テ大利ヲ得ル法有、申サバ今迄ハ前後ヲカヘリ見、手前ノ勝手ヲ繕ヒ候故、大難澁ニナリテハ何事モ打捨テ、其一途ノ場ヲツトムル故、命ニモ人情ニモ叶ヒテ、必ズ福ヒヲ得ル事有ㇾ之、博奕家ナドニテ孤注ト申テ、サヨウノ人ハ必ズ大勝ヲスル定法ニテ候、カヤウノ人ニ遇テハ計ルベカラザル由、兼好ガツレ〳〵草ニモ申候、又其事ヲ宋史ノ寇準ガ傳ニテモ載申候、此外ニ此傳法ノ委キ事ハ戰國策ニモ見エ候、筆談ノ崩ス所ニ在、荒増此分ニヨリ老子モ禍兮福ノ倚ル所ト申モ此理ニテ候、貨殖家ノ沙汰ニテ是命ヲ造ルノ理也

老子ニ、奪バントスル者ハ先ヅ之ヲ與フト申事、是貨殖家ノ妙訣ニテ候、其品ハ貨殖ハ利ヲ得ル事ニアラザレバ功ヲナシ難ク、由テ平日手前ニテ人ノ物ヲ奪ヒテ、利ヲ得ント勤ムルニテ候、是拙キ事ニ候、左樣ニテハ一向ニ利ナキモノニテ、先ヅ人ノ利分ノ有事ヲナシ申候、扨其跡ニテ大ナル利分有、手前ヘ引取候樣ニ扱ヒ申候事老子ノ傳ニテ候、喩ヘテ申サバ、鵰ノ兎ヤ狐ヲ取候ニ始ヨリ羽ヲ弘ゲテ勢ヲナシ候ヘバ、物ノヨリツキ少ク、由テ始ニハ潜ンデ鳥獸ノ馴候ヲリ、急ニ討取事ニテ候、又孫子ト申兵法ノ書ニモ軍ト申者ハ、始ハ處女(ムスメ)ノ如クシホラシク見得候故、人々ナレテ戶ヲ開キテ油斷スルヲリカラ、虎ノ如ク急ニ取カヽリテ候故、人禦グ事不ㇾ能ト申候、利分ヲ勤ル家法モ此ノ如クニテ、孫子

ガ語モ老子ヨリ出ル、マヅ人ニ利ヲ與ヘ候ガ利ヲ取妙方ニテ候

范蠡ト申ス衆名高キ富人ニテ候、其ノ術ニ不レ責ニ於人ニト申傳受アリ、是ハ先ヅ金ヲ貸候ニ、撰ンデ貸事ニテ候、左ヤウナレバ必ズ返濟ノ節ナヤミナク候、ナヤマザレバ責ルニイタラズ候、夫ヲ引替メッタニ貸チラシ、其末人ヲ責リ、貸候德ハ失セテ、却テ人ヲ責リテ禮儀ヲ亂リ、爭ヲ生ジ惡名付テ大ニ害ヲナシ候テ、富人權柄失セテ候故ニ人ヲ責ラズト申、尤モ撰ンデ、貸テモ返濟ノ障リハ有モノ也、去ルニ由テ時宜ヲ見テ金ヲ捐ツル事、范蠡ガ意ニ適ヘ候、捐テヽ反テ利アル事ニテ候、返々モ人ヲ責ルハ不德ニテ候、責リテ金ハ出ザル者ナリ、亦同人ノ語ニ、「善治レ生者、能擇レ人而任レ時」ト申テ、時ヲ見テ事ヲナシ、責ルモ捐ルモ時ニ隨ヒ候

白圭ト云ヘル富人ノ傳受ニ樂ンデ時ノ變ヲ見ル故ニ、人捐レバ我把リ、トレバ我與フト申シ候、是ハ前ニ申候通リ、金ノ殖エ候ハ時ヲ見ルニテ候、其時モサマ〴〵變アリ、イツモ此手ニテヨカリシト同ジ術ニ計リ候ヘバ、時ノ變ニ叶ヘ不レ申故、變ヲ僉議致シ、其時ニヨリテ、前ニ高直シテ貴ビシ米モ、夫ヨリ安キ時有者也、其時ハ人々安ク捐ル樣ニ賣拂ヘ共、夫ニテモ買人ナクウレヌ者ナリ、干要ノ時ハ萬事ヲ打ステヽ、手前ニテ夫ヲ買取事也、又今迄安カリシ物ヲ俄ニ高クナリテ人ノ爭ヒ取時ハ、今少シ上リヲ見テ與ンナド云、賤キ事ヲイハデ、メッタニ取出シテ賣與ル也、是變ヲ知ノ術也、扨中華ハ大國ニテ、其上昔ハ法モ弛ク、金サヘアレバ萬物買置ト申者自由ニテ、何程ニテモ構ヒナク、後世ハ

唐モ嚴シクナリ、買置禁制ニテ日本ハ固ヨリ買置停止ニテ、何モ貯ラレ不ㇾ申故、時ノ變ヲ見テ賣拂フベキ様モナク、由テ大利ヲ得難ク、去レ共身代柄ノ者ハ、米穀ヨリ始メ糸綿ノ類迄モ其家中ニテ用ル程ノ餘計ハ制外ナル者ニテ、法ニ合程ノ者ハイカ程モ買置苦シカラズ、扨年ノ熟シテ米ノ下直ナル時ハ、米ヲ取テ貯タル絹綿ヲ易候トカ致シ、又絹綿安キ年ハ、夫ヲ取テ米ニ易候トカ致スヤウニ、此法白圭ガ傳ニテ、當世ハ絹綿米ニ物ヲ易候事ニナク、皆金錢ニテ買トリ、其物ノ上リヲウクルノミニテ、是モ時ノ變ト申者ニテ候、又白圭ガ術ハ時ニ走ル事猛獸鷙鳥ノ發スルガ如シト申テ、其利分有時ヲ見ルニ油斷ナキ敎也、又曰、假初ニスルニ非ズト申候、都テ貨殖ノ術假初ニ行候事ニ非ズ、一寸シタル事モ、後迄シカトシタル事ニ成様ニ行候物ヲ、假初〱ト仕候得バ、貨殖ノ術弊申候

貨殖ノ傳受ニ、「少者鬪智者旣饒爭時」ト候、是レ貨殖ノ大法ニテ、チト許リノ金持ハ何ゾ利分ヲ苦シメ增サラン智慧ヲ出シ磨候、是ハ金持ノ小家ト申テレ大家ハサヨウニハナク、有來リノ貯ヒ澤山ニ候故、人ニ增ラン抔ノ工夫ハ入不ㇾ申、天ノ時變ヲ爭ヒテ、ヨキ節ヲ見計ヒテ、手前有者ヲ捌事也、サバキ様時ニ違ヒ不ㇾ申故、利分ハ思フ儘ニ出申候、是米穀萬物ニ限ラズ、金銀モ同ジ事ニテ、貸可ㇾ申時宜ヲ見テ、返濟滯リナク利自ラ生候時ヲ知人ノ金銀ハ孫吳申名大將ノ士卒ヲ遣フ如ニテ、其金銀自ラ脚有テ往來スル事滯リナク、細カナル智慧ヲ人ト戰ハスニ不ㇾ及、返ス〲モ時ヲ見ル事大切ニテ候、時ト云者ハ呼吸ノ息ツク中ニ有ㇾ之候、油斷ナラヌ者ニテ候

富ニ本富、末富、姦富ト申シテ三條アリ、富ハ云ヘバ、天子ハ四海ノ富トテ、富タル時ヲ以天下ノ人ヲ育レ候故、申ニ不レ及元富ニテ候、夫ヨリ下ツカタ范蠡計、然カ富道ヲ知リ申候故本富ニテ候、末富ト申ハ末ノ字ハ商買ノ事也、而レバ利ヲ爭フテ、其得益ヲ以身上ヲ弘メ、人ヲモ養候事人ニサワリナク、世ノ助ニモナリ候得共、本富ヲ知レルニハ非ズ、其次ニ置申候、姦富ト申候ハ、サマ〲イタヅラノ計ヲモナシ世ノ掟ニ背キ、人ヲ養ヒ候事モナク、自ノ榮花ニノミ誇リ候故、之ヲ下ニ致シ候、由テ富ニモサマ〲心得有事ニテ、今ノ世ニテハ末富ヲ行候外ナク、是ヨリ段々ト才徳長ジテ、後ニハ本富ヲモ伺フベク候

富ト云者兎角只ハナラヌ者ニテ、大方ハ田地ヲ多ク持チテ力作ヲ爲シ候カ、又ハ物ノ商ヲ廣クナシテ其餘リヲ取候カニ非レバ、大ニ富不レ申候、而ルニ昔夏殷周ノ世ナドニシ、天子大名ノ富ト申ハ、後世トハ別ニテ候、其故ハ天下ヨリ貢物ト云、公田ノ穀ヲ捧テ其用ヲ達申候、上ヨリ手當ヨク、民モ殊ノ外富候故、其貢モノト穀ト年々納リ多ク候上、倹約ニテ物入ナク、金穀共ニ年々莫大餘リ申候、是ヲ天子大名ノ富トハ申候、後世ハ左ニ非ズ、天子モ大名モ物入多ク、有來ノ知行ニテハ不足、其上百萬石ノ物入ト家中有故ニ、イカ様ニモ餘計有ベキ様ナシ、由テ民ニハ米ヲ増テ責タリ取ル歟、又ハ鹽鐵ノ類ニテモ、利ヲシメテ商ヲナスカ、又ハ藏入ノ金ヲ民ニ貸テ利ヲ取ルカニアラザレバ、國用ノ金錢ノ増ベキ様ナシ、由テ唐モ日本モ、後世ハ天子大名ヨリ末マデ金銀ヲ貯ルニハ、商買ノ術ヲ兼ザレバ

ナラヌ事ニナリ申候、今ニテモ將軍樣ハ大名ニ金ヲ貸シテ利ヲ取、紀州殿ハ檜山ヲ商テ金ヲ貯ヒラレ候類此理ニテ、扨又當世ニ仁德天皇ノ樣ニ、天子ニテモ萱ブキノ小家ニ居リ、布ヲ着テ庶人同前ニオハシマシ候バ、利ヲ不レ取共自ラ米金餘リ可レ申候得共、カヤウニ花侈ニナリタル世ノ中、急ニハ取締ハナラズ、所詮大名モ利ヲ取テ國用ヲナス類、目ノアタリニ候、是ハ周公ノ泉府ヲ手本ニスル也、又商ヲカ子タルハ交易トテ、有ヲ無ニ易フ術ニテ、周易ノ噬嗑ト云卦ニ出申候故、サスガニ商人ハオチ不レ申道ノ本富ヲ堅ニシタル者也、由テ士モ此旨ヲ得テ、利ヲ取テ金銀ヲ貯ヘ、小家ノ急ヲ助ケ、民ノ衰ヲ救ヒ申事ハ道ニ叶候、中ニモ田地ヲ多ク持テ力作ヲナシ候事、第一宜キ事ニテ候、故ニ和漢共ニ豪富ハ農ニ多ク候、田地ト云者ハ金銀ノ本ニシテ、外ノ繰合ハツキ申時アリ、田地ト申者ハ失ザル者ニテ候故、中華ニテモ大豪富ニナラントシテハ力作ヨリ始メ申候、當世ハ三都共ニ田地ヲステヽ、金銀ヲ以テ手段ヲ始申候、是又時ノ變ニテ候、由テ當世ニ叶候得バ、金銀ヨリ手段ヲ始タル富ニ候得バ、兎角買ノ道ニ近ク候故、廉賈貪賈ハ術少々申述候、史記ニ「貪賈三レ之、廉賈五レ之」トアリ、此心ハ貪賈トテ悋ミムサボリ候商人ハ利分太ダ少ク、十ノ内漸々三分ナラデハ無レ之候、又廉賈トテ恥ヲモ知リ、氣持大擾ニテセワシカラヌ商人ハ、十分ノ内五分ノ利アリ、イカニト云ニ、貪賈ハセワシク賤キ者故、天ノ時ヲ見ズシテ、又買置ヲ致スマジキ節ニモ買置ヲシ、賣マジキ節ニモセワシク賣テ、早ク利ヲ得ント貪ル故、反テ利ヲ取事少ク、其上安キ者ヲ高ク賣ント思故買人少ク候、由テ一ツノ物ノ上ニテ

モ大利有様ナレ共、物多クウレザル故、大分ノ上ニテハ一向ニ利ナシ、麁買ハサヤウニハ無レ之、買ベキ節賣ベキ節ヲ見計ラヘテ賣候故、存分ニ利ヲ得申候、是貪リセワシキ心ナク、只天ノ時ヲ見テ商ト申者ノ本法ヲ修行ナス故ニテ、其上一色ノ物ヲ賣ニモ、アタリノ者ヨリハ下直ニ賣候故、一物ノ前ニテハ得少ク候得共、人々競フテ買候故、存ノ外大分ニ賣申テ、多キ物ノ前ニテハ、殊ノ外ノ利出申、是故ニ十分ニ五ツノ利ヲ得申候、莊子ニ月ニカゾヘテハタラズ、年ニカゾフレバ餘リ有ト云モ此事ニ候、凡テ利分ト申者ハ、月切ニ見申候テハ餘リニ得ノ少ク、一年ニ成テ見候得バ、大ニ利徳有様ニナル事本法ニテ候、夫ヲ小家ナル者ハ心セワシク、一日一月ト利分ヲ早ク貪ル故大利少ク候

貨殖家大方質素ナル者ニテ、曹邴子ガ法ニ「俛有レ拾、仰有レ取」トテ、寢テモ起キテモ拾取事ヲ沙汰スルヨリ外無レ之候事定法ニテ候、尤此法ヲ破リ候得バ、大方家亡ビ申候、其内宛孔氏ガ法ニハ、波池トテ庭ニ大ナル池ヲ掘リ車騎トテ車ヤ馬ヲ走ラシ、諸大名交合ヲナシ、游閑公子トテ、ヒマナル大名ノムスコ方ヲ振廻テ、大モノブリヲシテモ、恪キ者ヨリハ結句其利ヲ取事倍々ナル工夫ニ候、是ハ矢張老子ノ術ニテ、當世ナド三都ハ大方此風ニテ候、サレ共邊土ニテハ學ビ難ク候、其人ト其時トヲ得テ行ヒ候、是ハ貨殖家ノ變法ニテ、邴子ガ教正脈ニテ候、サレ共此宛孔氏ガ心得ナケレバ、人ノ思付ナク候、而ラザレバ金持ノ大家ヲナシ難ク候故、巧ミニ是ヲ用ベク候

富無二經業一、則無二常主一、能者輻湊、不肖者瓦解」ト太史公モ申候テ、富ト申者ハ常ニシテ、代々家業ノ

樣ニ續ク者ハ無レ之候、勤ムレバ富、勤ザレバ貧ク成申候、又金錢ト云者ハ誰ニ與ヘ置ト云トテ、天道ヨリ定メタル主ハナク候、勤ル人ハ是ヲ得、勤メザレバ得難ク、扨ヨク其業ヲ勤ムル人ノモトヘハ、此寶モノ集リ申候、又不得手ナレバ、喩ヒ寶物今迄在リテモ瓦ノ打碎ケタル如ク皆々散失テ候、而レバ勤ルト不レ勤トニ在リ、寶ハ定主ナケレバ、諺ニモ長者二代ナシトハ申候、是ニ其品サマ〴〵有、其故ハ長者ト呼ルヽ者ハ、大方其身儉約ヲナシ、千萬ノ艱難ヲヘテ富ル故、金錢ノ貴キ事ヲ能覺申候、元ヨリ身ノ保養ナドハ打捨テ飮食ヲモ麁末ニシテ嗜好ヲモ退ケ、衣服モアラ〳〵シク、下人ト苦勞ヲ同クシテ、晝夜不レ怠勤メ申候テ、自身ハ苦共何共不レ存候得共、脇方ヨリ見レバ難キニ思者也、扨カヤウニ勤ムル人ハ道バノ本體ニ候、天ニモ叶ヒ、人情世態ニモ達シ候マヽ、爲事皆順路ニテ、自ヅカラ貨殖心ノ儘ニテ、其子孫ハ大方其豐饒ナル時ニ生レ合セ候故、父祖艱難ハ夢ニモ不レ知、元ヨリ花奢風流ニノミ育チ、自然ト奢ノ心生ジ易ク、其上父祖ノ人ニ尊敬セラルヽヲ見テ、我モ而ント人ヲサミシ下シ候故、天ニモ背キ、人望ニモ離レ、ヨシナキ事ニ錢ヲ遣ヒステ候儘、忽チニ寒貧ニ成テ人ニ背キ申候テ、不德計リ止リ候、是富ノツヾカヌ一ニテ候。又其貨殖ヲナシ候父祖ハ、前々申候通リ、節儉ヲ事ト致シ候儘、萬事手詰リナル事ニテ、或ハ守錢虜トテ金錢アレ共遣ハザレバ、錢ヲ守ル拏ノ如ク、又天竺ノ廬至長者ノ一ノ鷲ノ炙物ト、一双釋天ノ八珍ノ味モ、是ニ及ジト云ル體ナル故、其子孫ナル人ハ是ニアキハテヽ、サヤウニテハ生レタル甲斐ナシト思フテ、家ヲモ遜ラレ、金錢ヲモ與ヘラレテ候得バ、アシ

ナヒタル者ノ俄ニ立上リ、目シヒタル者ノ俄ニ明カニナル如ニテ、思フサマ其實ヲ遣ヒステヽ、氣ヲハラシ退屈ヲ忘レ候故、忽チ寶亡ビ申候、是富ノ續カヌニテ候、又富ヲナス家ノ父祖タル人ハ、固ヨリ豪傑ニテ見識高ク俗人ノ伺フベカラザル者ニテ、且富ヲナス人ハ大方ハ嗜欲少ク、藝能ナド好ヌ者也、是藝能ヲ惡ムニハ非レ共、其心地散レバ專一ノ富ヲナス業踈カニ成故ニテ候、是見識ノ貴キ處也、其心ヲ不レ知子孫ハ是ニ反シテ、文武百技ノ藝悉ク習テ、人ニ勝ラン事ヲ願フニテ候、是太ダヨキ事ニ候得共、而シ富ハ術ニハ妨ゲニテ候、其故ハ金錢ヲ賤メテ、其勢ニ乘ジテ物ヲ習ヘバ、何事モ成就致スニハ候得共、サヤウニ他ヘ心地フレテハ、專一ノ富ヲナス事埒明難ク候、夫故和漢共ニ藝能ニ名有人ニ、富タルハ一人モナキ者ニテ候、去トテ文武道ノ藝ハナクテ不レ叶候ヘバ、實ヲ盡シテ學ビ可レ申事ニテ候、其外ノハシ〴〵ノ先用ノ藝ハ止メ申事ヨク候、此境辨別セズシテ、其子孫ナル人ハ、父祖ノ本質素ニテ田舍翁ノ風ナルヲ和漢共ニアザケリテ、我ハ金持ノ子ナレバ、風流ナラデハ有ベカラズトテ、入用モナキ、蹴鞠、茶ノ湯、香ノ會、弓基ヤ、將棊、俳諧ナド云者ヲ習テ、花車ヲ盡シテ實ヲ失フ者多ク候、是富ノツヅカヌ三ツニテ候、此三ツノ疾必ズ富家ノ子孫ニハ有事ニテ候、扨是ヲ止ル事和漢共ニ難ク候故、大方瓦解致候、夫ヲ止ルニハ道ト云事ヲ知ルガヨク候、サヤウニ道ニテ扱候得バ、子孫モヒガミ心ナク、手前モセハナシニ、代々富ヲ重ネ候、近世ニモ明ノ沈万三ナド云ルハ唐第一ノ金持ニテ數百萬ヲ重ネ候由史ニ見得候、此道ヲ少ク心得候故ニテ候

富ヲナスニ土地ノ風ヲ心得申ス事、專一ニテ候、此ノ理ヲ知ザレバ、金銀ノ廻リヨリ始メ、米穀布錢ニ至迄其利ヲナシ難ク候、中華ニテモ周ノ俗ハシワク、人々利ヲ貴ビ、生ヲ治メ貯ヒヲナシ手ヲアソバシメズ、是當世ノ京都ノ風ニテ候、齊ノ地ハ桓公ノ伯業ヲナシテ天下ノ大名ヲ支配シテ、勢有國ニテ候、其俗氣持クハラリトシテ智慧多ク、能人ノ世話ヲ致シ、尤富貴タル國ニテ、文綵布帛魚鹽ノ利モ多ク、黃金ノ集リ處ニテ、其內ニハ辻切强盜モ多シ、而レ共サヤウナルハ大國ノ風也ト史記ニモ申習ハシ候、此方ノ江戸ノ風ニテ候、又楚國ハ其俗剽悍ト猛ク、男ダテモ好ミ、元ヨリ魚鹽皮革ノ利モ多ク、天下ノ舟付ニテ金銀多ク候、此方ノ大坂ノ風ニテ候、天下ノ國皆々此樣ニ和漢共ニ替リ申候、奧州ナド唐ニテ申セバ、物ノ夥キ事越ノ地ニ似ヨリ申候、太史公ガ語ニモ、楚越ノ地ハ地廣ク候故、稻ヲ飯ニシ、魚ヲ料理ニシ、其上貝類タク山ニテ、商ヒ物ヲナサデモ飯ノ喰ルヽ國也、是地ノ勢ヨク、產物多ク、金銀通用スル故也、由テ餓死ナドスル人無レ之候、夫故人々道樂ニテ、ドノヤウニシテモ生活シテ居ラルヽト心得候、金錢米穀ナドハ貯ヒ候了簡一向ニ無レ之候、又千金ヲ積タル家モナシト申候、實ニ仙臺ノ風土ニ似申候、萬物豐カナル國ニテハ、必ズ大ナル貨殖六カシク候、是此心得ヲ以國々ニ向ヒ申候、手段ヲ盡シテ貨殖ヲナシ候得バ、盤ニ玉ヲ走ス如ニテ候、其國ノ風土ニ逢ヌ事ヲナシテハ、水ニ車ヲアユマセ、陸ニ舟ヲ押ス如クニテ、必ズ金錢ノ廻リウトキ者ニテ候段々ニ基ヲ爲テ富候モ有レ之、又俄カニ富候モ有レ之候、其ノ段々富候者ハ蠶食トテ、カイコノ桑ヲ次第

次第ニ喰如クニシタル事ヲ申候、是ハ大方力ヲ盡シテ、節儉ヨリ殖タル金錢ニテ候、是ヲ本法ト致シ候、此事戰國策ニ見得タリ、カヤウノ金持ハ衰ヒ難ク候、其品ハ其身儉ヲナシ德ヲツミ、一家モ其風ニ化シ、萬事ニ手段モ宜ク候、上世上ノ思ヒ付モ厚キ者也、是一向ニ損ナキ道ニテ候、又俄ニ富ト申ハサモナキ人ノ思ヒヨラヌ金錢ヲ澤山ニ得タル勢ニ乘リテ、今迄金ノ持樣モ知ラヌ者ノ俄ニ分限者トナリタルニテ候、是ハ一向辛苦ヲセズ、儉約モシラズ、金持ノ理ニ達セヌ故、當分ハ勢ニ乘ジテヨク候得共、譬ヘテ申候ヘバ、五六月ノ頃夕立ノ降シ故ニ、山川ノ水ノ增タル如ニテ、程ナク水モ引勢衰ヒ、元ノ貧ヨリモ惡クナル者ニテ候、是ニ亦手段アリ、元ヨリノ蠶食ノ分限ハ論不レ及宜ク候、此出來分限ハ、頓テ衰ル者トテ捨ベキニ非ズ、其品ハ逆ニ取テ順ニ守ルト之事アリ、道ノ上國家ノ上ニテモ、必理窟ニ合タル事計リニテ治ラヌ儀モ有者ニテ候、其節ハタトヒ理ニ合ヌ共、萬人ノ助ニヨキ事アラバ逆ナル事ナガラモ、行ネバナラヌ事アル者ニテ候、扨夫ハ理ハ惡ク共、夫ニテ萬人助シ故、一先息ヲツキ申候、是ヲ逆ニ取トハ申候、又道ノ上ニテモ權ト申候、是聖人ノ行ヒ置候事ニ候、夫切ニテ捨置候得バ誠ニ能ナキ故、取直シテ順ニ守リ候、順ニ守トハ、夫ヨリ權ヲ止テ、道ノ上ニ違ナキ樣ニ守ル事也、夫ヲ金持ノ正理ノ通リニ守候得ヘバ、頓テ蠶食ト同ジ樣ニナル也、是ヲ逆ニ取テ順ニ守ルトハ申候、大切ノ心得ニ候

扨大方ノ金銀ヲ天下國家ニモ敷キホドコシテ、人ヲモ救ヒ、自ヲモ利セントスルニハ、人ヲ得ザレバナ

ラズ候、是ニ付人ヲ得玉フト同ジ理ニテ候、此人ヲ得ル術書經ノ舜典ニ委シク中々ニテハ人ヲ得ル事ナラヌ者ニテ、人ヲ治ルニハ人ヲ知ラザレバナラズ、人ヲ知事專一也、而ルニ書經ニ人ヲ知ハ帝モ夫難シト云ロ、堯程ノ聖人ニテモ、人ヲ知兼玉フトハ申候、人ヲ知ニハ樣々ノ術候得共、夫ハ天下ヲ治ル上ノ事ニテ候、金銀如キノ事ヲ捌ニハ、夫程ノ沙汰ニ不レ及、一方ノ才アル人ニテ足申候、其一方ノ才有人又難シ、下ニアラ〳〵申述候、書經ノ九經人ヲ知術ヲ申候、其語ニ、「遠使レ之而觀ニ其忠一、近使レ之而觀ニ其敬一、煩使レ之而觀ニ其能一、卒然而焉觀ニ其知一、急與レ之期、而觀ニ其信一、委レ之以レ財、而觀ニ其仁一、造レ之以レ危、而觀ニ其節一、醉レ之以レ酒、而觀ニ其則一、雜レ之以レ處、而觀ニ其色一、九徵至、而不肖人得矣」ト御座候、此心ハ手放テ遠ク使候ヘバ、我儘ナル者ニテ、夫ニ主人ノ前ニ有如ク物ヲ大切ニ勤候ハ、忠有人ニテ候、近ク使候ニ、日ヲ追月ヲ重ネ候得バ、主人ニ馴テサノミ敬クモミヘヌ者也、夫ヲイツモ替ラズ愼有ハ、敬ナル人ニテ候、セハ〳〵敷繁多ニ用ヲ申付テ使候得バ、大方シオチ間違有者ニテ候、而ルニサヤウニテモ滯ナク、萬事思樣ナルハ、能有人ニテ候、俄ニ思掛ナキ事ガ、人ノ知ヌ樣ナル儀ナド尋候ニ、早速能答ヲ致ハ、智慧有人ニテ候、急ニ存モヨラヌ所是ヘ廻レト申ニ、指合多キ者ナルニ、夫ニ萬事ヲ打ステヽ能參ルハ、信有人ニテ候、此ニ金錢ヲ打任セテ遣セ候ニ、多クハ身ノ勝手ヲ致シ候、是ハ人ヲ痛メテ不仁ナル事ニテ候、夫ニ引替テ我身ノ物ヨリ大事ニ寶ヲツカヒ候人ハ、仁有人ニテ候、是ニ此方ノ急ニ危キ事抔ヲ賴入候ニ、我身ヨリモ大事ニ思ヒテ、ムツカシキ事ヲ受合テ勤ルハ、節有人ニ

テ候、酒ヲ與ヘテ醉シメ候ヘバ、大方ノ人ハ心安クナリテ、禮義モ亂リ候物ニテ候、然ルニサヤウニテモ急度法則ノ通ニ身持致スハ、則有人ニテ候、飲食男女ハ人ノ大欲ト禮記ニモ候テ、色ニハ人々亂レ安キ者ニテ候、由テ兼テハ武勇モ逞マシキ、文德モ勝レ、亦萬事才幹アルモ、色ノ爲ニトロカサレテ、身ニ持崩ス者共古今ニ多ク候、サレ共人ノ大欲ニ候得バ、少々ハ見宥置候テモ、大事ノ場ニ至リテ色ニトロカサレテ、事ヲ過チ候樣ニ成テハ、政ハ不レ及レ申、金銀共ニ其業指支申候故、是ヲ大切ニ吟味申候、由テ此前ノ八徵ハ殘リナク正キ人ニテモアレ、之ヲ子女共ニ交ヒ置テ、其人ノイヨ〳〵正ク候ヤ、亦解ケ候ヤト心見申候、カヤウニ心安ク打交ヘ候テモ、少シモ亂リガマシキ人ニ無レ之候ハバ、誠ニ正キ人ニテ候、此九ツノ試樣ニテ人ヲ遣ツクシ候、兼テヨカラヌ人ハ表向ツクロヒ候ヘ共、不肖知レ申候、扨其九ツ共ニ兼テ疵ナキ人ハ、元ヨリ賢人ニテ候、サヤウノ人ハ有ベキ樣モナキ者也、此九ツノ内一ツモ行ヒ候者ハ、物ヲアツラヒ遣テ用ヲナシ申候マヽ、其長ゼル所ヲ用ヒテ、短キ處ヲ押ヒ使可レ申、サヤウニシテ利用ヲ任セ候ヘバ、千里ノ遠シト雖身ノ手足ヲ遣フガ如シ、此九徵ハ天下國家ヲ治ル人才ヲ試ル事ニテ、財用ニハ餘リ候得共、人ヲ知ル術ニ付テ書顯シ申候、扨人ニ財ヲ委テ申ニ便チ心得アリ、一度委テ候後ハ、餘リセハシク沙汰セヌ事ニテ候、楚ノ項羽漢ノ高祖ト天下ヲ爭ヒシニ、項羽方ニ范增ト云ル謀臣アリテ、國ツヨク高祖弱リシ故、何トゾ項羽ヲ亡シ天下ヲ取ント計ラレ候、由テ陳平ト云臣下ノ智者ニ、四萬金ノ黃金ヲ渡シテ遣拂ニ被ニ申付一テ反間トテ項羽ガ裏

切ヲサセラレ候、由テ陳平軍慮ヲ廻ラシ、頓テ范増ヲ悪ザマニナシテ退ケ候故、頓テ項羽亡ビテ、天下高祖ノ手ニ入申候、畢竟ハ四萬金ノ黄金ニテ、四百餘州ノ天下ヲ取タル者也、一寸考候得バ、四萬金ハ夥シク候得共天下ニ競候テハ一寸ノ物ニシテ、是高祖ノ人ヲ遣フニ利有事ヲ知レルタメシ也、由テ人ニ財ヲ委ヂテ、其利ヲトラントスルニハ、十分ノ利ノ内三四分ハ、其者ニ知ラヌ顔ニテトラセ置、又三四分ハ其世話ノ雜用ニツカヒステ、手前ハ三分計リ取様ニスル事ニ候、カヤウナレバ私ヲナシテ其基キヲ引ツブス人無レ之候、カヤウニ數多ノ人ニ、數々ノ本入ヲ渡シテ利ヲトラセ候得バ、才カ三分計ノ物ニテ利少キ様ナレ共、數々ノ前ニテハ大利有也、其上一所ニテモ損耗ナケレバ、日ヲ經テ貨殖增申候、是高祖ノ四萬金ヲ捨テ、天下ヲ取シ術ニテ候、夫ヲ小家ノ貨殖ノ者ハ十分ノ利ヲ自ラ得テ、委ヂタル人ニハ約束ノアテガヒ計ニテ、一分モ利ヲトラセズトスル故、日ヲ經テ金錢減ジ、後ニハ貨殖ノ術絶申候、是道ヲ知ラヌ過ニテ候、人ヲ用候ハ返々試テ後ニハ疑ヲ殘サズ、疑心アレバ事ナリ不レ申候、左傳ニ疑ハ事ノ賊也ト申候、此術共ヲヨク考候得バ、大方人ヲ用ル方ツキ申候、又益ニ不レ立トテ、人ノ捨候物ヲツカヒテ大利有事、齊ノテウシト云ル、富人ノ傳受ニ候面白キ事ニテ候

書經ノ洪範ニ、人ノ仕合セヨキ事ヲ五ツアゲテ、是レヲ五福ト申候、一ニ壽、二ニ福、三ニ康寧、四ニ修二好德一、五ニ考二終命一ト申、又六ツノ不仕合ナルヲアゲテ六極ト申候、一ニ凶短折、二ニ疾、三ニ憂、四ニ貧、五ニ惡、六ニ弱、其節六ツカシキ事ニ候得共、畢竟ハ此ケ條福ト禍トノ差別ニテ候儘、外ノ

事ハ指置テ福ト貧トヲ申述候、先ヅ人ノ仕合ト申ハ富也、人ノ不仕合ハ貧也、然ルニ人々福ヲ好候得共、福ハ來ラズシテ、貧ノミ生ジ候ハイカント申ニ、弱ト申テ景體ノ弱ニテ候、必ズ富人ハ景體強ク、體健カニナル者ニテ候、由テ貧人モ景ツヨク體健カニ候ヘバ、身ノ上ヨクナリ申候、此ニ由テ觀ルニ、富人ハ假初ニモ弱ナル行アルマジク、弱ニサヘ無レ之候ヘバ、五福皆來リテ心ノ儘ニサカヒ申候、尙洪範ノ事ハ深キ習ニテ候

虎ニ乘ルノ勢ヒ下ルベカラズト申ス事隋書ニ御座候、此ノ心ハ虎ニノリ候者下リ候得バ、忽チクワレ候儘、イヤナガラ是非ナクノリテ居ラネバナラズ候、金銀ニ豐饒ニナリテ、サマ〳〵六カシキ事耳有テ他ノ用ニカヽリ難キニ及ブ者也、夫ニテ常人ノ金持ハ、大方ハ只今ニテハ金銀ヘリ申候ナドヽ卑下シテ、カクシテ貨殖ヲナシ、表向ハ貧ナルマネヲスル事世ノ習也、是賤シキ志ニテ、本法ノ貨殖家ハカヤウニ無レ之候、喩テイヘバ金銀ハ虎ノ如クニテ候、夫ニノリテ勢ヲ振ヒシ者ノ、一旦夫ヲ下テ候ヘバ、忽チニ喰レ候樣ニナリテ、勢ヒ惡ク評判モ下ルモノ也、左樣ノ節ハ是非ナク候、必々手前ヲ卑下セズ、隨分ト日增ニ金銀多キ體ニモテナシ、利用ヲ勵ム事也、サヤウナレバ彌々德付テ、內證モ宜クナリ、器量モ見ハレ、評判モヨク、イハヾ金銀澤山持テ貨殖家ノ名アルモ、學問ヲ勤メテ道ニ入モ同事ニテ候、扨學問ノ道ナド六カシキトテ、手前ヲ卑下シテ私兼テ學問勤候處、其名見レ面倒ニ候ママ、此間ハ止メ申候ノ、又學問私ハ下リ候ナドヽ申事ハ一向云ヌ者也、日々上リ候樣ニ修行スル也、

其證據ニハ、易ニモ學問ノ徳ヲ富有日新ト申テ、日々澤山ニ富保タル者ノ樣ニ、アタラシク學問上ルト申事ニテ候、金持ノ修行モ此心エニテ候マヽ、返々モ内證不勝手ニ成候ナドヽハ申間敷候、サヤウニ大キク貨殖ノナリ候迄、用捨ヲシテ人ニモ金ヲ貸候得バ、損亡モナキ者也、又其勢ニ乘ジテ出ソフモナキ金モデル也、又思ハヌ得益モ有事ニテ候、是虎ニノリテ其身ハ迷惑ナガラ他人ヨリ見レバ其ノリタル虎ノ恐ロシキ事、百獸ノ伏從フ樣ナル者ニテ、其上カヤウニ勤候得バ天ニモ叶候故、心ノ儘ニ道行レ候、何レニ一度名ヲ發シ候人ハ、其名ヲ下ゲ申事惡ク候、名ヲ下ゲ身ヲ引候ハ、下リテ虎ニ喰レ候樣ニテ、段々身ノ上惡クナル者ニ候

兎三窟ヲ掘リ候ト申ス事戰國策ニ御座候、是金持ノ了簡ニ入用ニテ候、其故ハ兎ガ子テアソコヤコヽニ隱窟ヲ掘候、其意ハモシ狩人ナドニ逢テ逃場ノ六カシキ時ハ、ソコヲステコヽニ遁ルヽ爲也、金持ハ必ズ大損カ、モシ又災ニモ逢者也、今ノ通リ繰合ニテ、イツ迄モヨカルベシト思フハ油斷ニテ候、夫故兼テ六カシキ時ノ逃場ヲアマタ拵置也、由テ平日氣ノ付ヌ内ニ、アソコヤコヽニ窟ヲホリテ置事兎ノ心得ニ異ナラズ、扨其窟ヲ掘樣ノガレ場ノ鹽梅ハ其人ノ器ト進退ノ大小ニ由リ申候、他人ノ知事ニ非ズ

仁義ヲ買フト云フ事御座候、是ハ齊ノ孟嘗君ト云ル一門家老ニテ、殊ノ外ノ大福長者ニテ、其知行所ニテ大分ノ金ヲ貸シ利分ヲ取候故、多クカヽリ出候故取立ノ爲馮驩ト云ヘル智慧アル臣ヲ遣ハシ候、其時

孟嘗君ヘ申ニハ、右ノ取立金ニテ何ヲカ調來ルベキヤノ由申候ヘバ、孟嘗君答ニハ、我家ニナキ物ヲ買來ルベキ由申候マヽ、頓テ知行所ヘ下リ、貸付申候百姓共ヲ數十人呼集メ、右ノカヽリノ手形ヲ山ノ如クナルヲ、目前ニテ火ニ入テ燒捨、扨申ケルハ、其方共ノ主人孟嘗君ノ仰ニハ、何レモ勝手惡ク返濟數年滯リ候故、此度皆々ヘ其金ハ給リ候故、手形ヲ燒棄候由申ケレバ、百姓共不レ淺悦申候、扨夫ヨリ歸リ孟嘗君ヘ參リ候、何ヲ買來候ト問ヘバ、馮驩答ニ、貴殿家ニハ何モ無著ナシ、唯仁義ト云者無レ之候マヽ、此度カヤウ〳〵ニシテ仁義ヲ買來候由申候得バ、孟嘗君大ニフキゲンナガラ、理窟ニツマリテ其儘ニテ指置候所、一兩年過テ其君宣王ヨリ孟嘗君御咎ヲ蒙リテ、御城下拂ニナリ在鄕ヘ引込候處、前方金ノ手形ヲヤカレタリシ百姓共集リ來テ孟嘗君ヲモテナシハヤシテ、城下ニ在シ時ヨリ富榮、其上其名四方ニ高クナリシ故、カヽル賢人ヲ御咎遊バシ候事過リノ由ニ思召テ、頓テ召返サレテ國政ヲ心ノ儘ニ取行ヒ、此時ニ馮驩ガ仁義ヲ買候事ヲ心得申候、是ハ昔ノ事ニテ、後世學ビ難ク候ヘ共、萬事ニ此心ヲ用ル事ニテ、韓非子ニモ長袖善舞多錢善買ト申テ、袖長ケレバ舞ブリヨク、錢多ケレバ買候ニモ宜キト申候、金銀ノ多キ人ハ仁義ヲ行ヒ安ク、貧人ハ志アリテモ物タラズ候ヘバ、施シ惠ム事共モ指支候、由テ富人ハ金銀ノ有合候內、アソコヤコヽニ仁義ノ買置致シ候ヘバ、マサカノ時ニ大利ヲ得申候、其仁義ノ買樣傳受有レ之候、無益ニ金錢ヲステヽハ仁義ニモナリ不レ申、之ヲヨク會得有べキ事也

惠心ト申ス事御座候、是レハ周易ノ益ノ卦ノ九五ニ有、「有レ孚惠レ心、勿レ問元吉」ト有レ之候、此心ハ人ヲ惠ムハ金銀ニモ不レ限、尤金銀有トテモ、メツタニ天下ノ人ニ與ヘテ惠ムベキヤウナシ、由テ人ノ心ヲ惠ムニテ候、其惠ミヤウハ道ニ方リテ、眞ノ心ヲ以テ心ヲ救ヒ助ケ候事カ、又人ヲ引立候カ致ス事ニテ候、扨誰モ〳〵口上ニテ人ヲ惠ム樣ナル事アレバ、夫ヲ人ノ受タマハラヌハ誠ナキ故ニテ候、由テ此卦ニハ誠有トハ申候、サヤウナレバ吉惡ヲ云ズシテ、皆吉ニテ候ト申儀ニテ、是金銀ナクテモ惠ノデキル手段ニテ候、況ヤ金銀ヲ施シ候ニ至テハ、大旱ノ雲霓ヲ待ガ如ニテ候

世ニ名高キ者ト、才有ル者ト、勢ヒ有ルト、是ヲバ必ズ交リテ厚クスベキ事ニテ候、唐ニテモ貨殖ノ大家ノ功者ナル衆ハ、此三ノタグイノ人ヲバ必ズ禮ヲ厚ク致シ候、イカニト申ニ、何ゾ難レ有節ハ必ズカヤウノ人ノ力ヲ得ベク、尤モ平日共ニカヤウノ人ノ評判宜シカラズ候ヘバ、其德スミ難ク候、史記ニモ曹丘生ト云ル富人ノ名高クナリシモ、季布ト云ル名人ノ一言ニヨリ申候、才有人ハ常ニ其用ヲナシ候、又勢有人ハ其手當惡ケレバ、必ズ富人ヲ短リテ其寶ヲ伺フ事、唐ニテハ常法ニテ候、元ヨリ賢ノホマレ有衆ハ、幣ヲスヽメ食ヲ與ヘテ其家ニ養可レ申候、其義易ノ鼎ノ卦ニ候、但シ賢ハ固リ隨ヘ不レ申、其次ノ名高キ者、才有者交リ深キ者ニテ候、勢ヒ有者ハ親ミ安ク、何レモ用捨有ベク候

是レニテ貨殖ノ心得古ヲ今ニ考ヘテ用候得バ益有ルベク候、但シ物殘ル方ナク思儘ニ事濟シト中ハ世間ニ無レ之候、是ニテ身上殘リナク調ヒタリト思フ内ニ、又濟ヌ事出申候、兎角心ノ世話タエ不レ申候、

是天地ノ理ニテ候、由テ易ニモ既濟ト云卦ヲ置テ、次ニ又未濟ト云卦ヲオキ、六十四卦ヲ仕廻候、而レバ周易ノ理ハ兎角スマヌ世ノ中ト申事ニテ候、是ヲ人ニ喩ヒ、貧有迚モ足ルト思テ濟事有マジク候、由テ老子ニ足事ヲ知レバ常ニ足ト申テ、身分相應ニ足ト申事ニ候、之ヲ能合點シテ、生涯ニ足ト申事ニ取シマウ事、喩ヒバ明ノ沈萬三ナドガ數百萬兩ノ家ニモ成難ク候ヘ共、日本ハ狹ク候ヘバ、中々卅萬兩ノ家ニモ成難ク候、是其人ノ才力ノ短キニ非ズ、時ト命トノ然ラシムル故ト合點シテ我足候程ニシタメテ終候ガ老子ノ心得ニ候、夫ガ矢張易ノ未濟ノ理ニテ候、其心ヲ不レ知シテ無體ニ力ノ有ン限リハト勵ミヌレバ、道ニモ合ヌ事ヲナシ申候、喩バ穀ハ地ニ生ズル者迚冬ノ内雪霜ノ有中田地ヘ種ヲ下シ候ヘバ、生ズル事無テ、ケツク其種ヲ損ニ致シ候、由テ時ヲ見テ働キ、足ヲ知ガ貨殖ノ法ニ候

畢竟ヲ論ズルニ、貨殖家ノ本體儉約ニテ候、易ノ「賁丘園束帛戔々、吝終吉也」ト申シ候、此ノ心ハ質素ヲ貴ビテ車馬亭宅ナドハ必ズ丘園在郷邸ナドヲ能支配シ、田地モ夥ク有テ、男ハ耕シ女ハ織テ勤候故、束ネタル緡數々出候ヲ衣トシ、有合ノ耕シタル穀ヲ食シテ居候故、萬事足テ誠ニ仁德天皇ノ民ノ如ニテ是非ナク澤山ニ金錢ノ餘リヲ貯申候、而ルニ後世ノ華ナル人ノ是ヲ見テハ、扨々吝キ事也ト笑誹リ申候、ヤブサシト申事ハ恡キ事也、去ド易ノ字上ニテハ、餘リ宜キ事ナキカト云程ノ義也、而レ共元來道ニ從ヒテシタメタル賁ナレバ、後ニハ人ノ誹リモ止テ、各其人ニ德ニ從ヒ付故、吉ニテ候ト申義

ニテ候、必々夫ニ貪着無用ニ候、易ノ理ヲ覺ルベク候

是ニ一ケ條古今ノ大妙訣御座候、必ズ貨殖家ニ限ルニモ非ズ、政トリテ權勢ヲ振フ者モ同ジ心ニテ候、其故ハ人ト申者一生涯物ノセハヲシテ終ルニ非ズ、宜キ程ニシテ其業ヲ止テ、餘歳ヲ送ル事定法ニ候、去共人々此思殘リアリ、又カノ手段ノカヽリナド、世ニ引レテ身ヲ退ル事叶ヌモ亦定法ニテ候、故ニ秦ノ李斯ト云人ハ、政ヲトツテ天下ヲ我心ノマヽニシテ威ヲ振ヒシ折モ、何トゾ退役シテ身ノ災ヲサケタク存候ヘ共、勢ヒニ引レテ此場ヲ去事ヲ得ズ、老子モ功成名遂、身退ハ天ノ道也ト申候、易ニモ盈虛消息ト申事アリ、其詞ニ云、「日中則昃、月盈則食、天地盈虛、與レ時消息、而況於レ人乎」ト申テ、天地日月サヘ盈バ昃ノ理アリ、況哉人ハヨキ節ヲ見テ其場ヲ退クガ、身ヲ保チ名ヲ全フスルノ義ニテ、又易ノ離ノ卦ニモ、「日昃之離、皷レ缶而不レ歌、則大耋之嗟也凶ナリ」ト御座候、人ノ齡ノホド日西山ニ迫リ候キハニ成テハ、兼テ樂ミ嫌ニテ世話好ナル人モ、是ヲヤメテ缶ノ程ナル物ニテモ打テ樂ム樣ニスルガ道也、夫ヲセザレバ却テ昔ノ名モ衰ヒ、何ノ寶モ威勢モ失候樣ニ成テ、凶ニテ候ト申事ニテ候故、禮記ニモ七十ニ成テハ出仕ヲモ止メ、□ヲモカケテ退申候、是消息盈虛ノ理ニテ、彼此ヲ考候ニ、所詮七八十ノ年ニモ成候ハヾ、目出度金銀財寶ノ手形、幷ニ鍵ヲモ子孫ニ遜リテ、其身ハ山莊抔ヲシツラヘ、兼テ心ニ合候友ヲモ招テ、酒食ヲ調ヘ琴棋ヲモテアソビ、又歌妓ナドヲモ貯ヒテ、東山謝安石ガ風ニモ劣ラズ、面白ク心安ク送リ候事ニテ、尤モ人ノ第一ハ壽命ニテ、此上ハ長生

ノ術ヲ勤メ、攝養トテ身志ヲ養事ヲ沙汰シ又金丹ト云物有レ之候儘、是ヲ調ヘナドスル事ヲ愚ニシテ過申候、其術抱朴子ナド申モノニ委ク候、誠ニ目出度術ニテ候、其營ミハ藥ヲ調ヘテ、頓テ夫ヲ燒候ヘバ眞ノ黄金ニナリ申候、夫ヲ又燒候ヘバ丹ト云物ニ成候ヲ、調合シテ服シ候ヲ金丹ト申也、是不老不死ノ藥ニテ候、サヤウノ物ニテ孫ヤ彦ヲ愛シ、飴ヲ含デ膝ニテモナシ遊候ハヾ、何計目出度事ニテハ無レ之候ヤ、扨壽ハ仙人ノ王子喬ヤ赤松子ニヒトシク、退申場ヲ知レル名ハ世ニ高ク、古ノ賢キ人ノタメシニモ引レ候、是ヲ心得候事大切ニ候、サヤウニ能心得候衆ハ、貨殖ニテモアレ、權門ニテモアレ、道ヲシレル人ト申ニテ候、次ニ道ノ事アラ〳〵申達儀ニテ候

老子ニ「金玉滿レ堂、莫二之能守一」ト申候、金玉ノ樣成物寶物ノ家一盃ニ盈候ハヾ、イカニモ守リ惡シキ者ニ候、是守テ子々孫々持傳ヒ、失ヒ不レ申、其上ニ一人ハ喩ヒ死テモ、其寶物ニ其身モ其德モ亡ズ生タル如クニテ、千年モ命長ク、其人ノ死ナヌ同前ノ術有レ之候、之ヲ道ト申、先其金玉ノ守リ樣ノ傳受ヲ老子ノ申候、「善閉者無二關鍵一而不レ可レ開、善結者無二繩約一而不レ可レ解」ト御座候、此心ハ金銀ヲ箱入ニモ致シ候所、常ノ人ノ仕舞置候ハ、人ニモ盜マレ明ケラレ候所、道ヲ知レル人ノ仕廻置候筥ノ中ハ、鍵モ錠モナク、又繩ニテカラゲ候事モナク候得共、其筥ヲアケ候人モナク、扨々心安キ事ニ候、又死デ不レ亡レ壽トテ、人ハ微カ七十ヲ中壽トシ、百歳ヲ上壽ト致候、頓テ死候ヘバ其肉冷ヘザル内ニ、七珍萬寶悉ク分散ニ及申候テ、子孫零落致候、是ヲ痛思テ、生涯心ヲ用ヒ、世續ノ者ニモサマ

ザマ異見ヲ加ヘ候ヘ共、必心ノ樣ニ無レ之候故、殊ノ外苦勞ニ致候事、古今和漢同斷ニテ候、扨イカ樣ニモ之ヲ防ギ難ク候、而ルニ道ヲ心得候人ハ、一生金ヲ貯ヒ人ヲモ救ヒ、身ヲモ樂マシメテ子孫モ榮エ、其上百年ニテ終リ候テモ、其實其名其德、共ニ幾年過テモ盡キ不レ申、イキタル如クニテ候ヘバ、死シテ不レ亡レ命、永ク榮ヒ申トノ義ニテ候、誠ニ目出度道ニテ候、其道ト申者反テ六カシキ事ニ無レ之候、書物抔讀候ニモ及不レ申、少シ許ノ事ニテ候得共、知ル人ハ知リ、知ラヌ人ハイカホド學問有テモ知レ不レ申候、老子ニモ「上士聞レ道、勤而行レ之、下士聞レ道大笑レ之、不レ笑不レ足二以爲一レ道」ト申テ、見識ノ高キ人ハタマ〳〵道ヲ聞テ、早ク合點シテ反テ之ヲ行フ、又下愚ナル人ハ道ヲ聞テ、扨々マハリ遠イ、ヤクタイナイト申者也ト大笑仕候、是反テ道ノ貴キ場ニテ候、笑ハレ不レ申候テハ、道ト申ニテハ、無レ之候

右ノ條々皆私ノ申事ニテハ無レ之、古ノ聖賢ノ語ニテ候儘、能御了簡御覽可レ然、カ子テ申候通リ、御見識ノ人ニ勝レ、其上力ヲ貨殖ニ深ク用ラレ候得バ、カヤウニ淺事ハ常ニ御心得ト存候得共、仰ニ任セ跡先ナク書記シ候儘、御推覽希申候、此上ニ又々御吟味候ハヾ、今少シ折入可レ申候、穴賢

天明三年四月六日　　畑中太沖

貨殖論　終

正享問答

三輪執齋著

正享問答序

過し正德の初、故拾遺笹山源侯京に尹たる時、僕たま〳〵退て加茂山の邊りに在りて、文成の道を講じ給ふあまり、當時の急務奉行代官の處置まで尋たまひ、仍て藤樹息游の遺書歴覽し、是を抄出して一編をなし、西江一酌三編略類と名付、嗣君にさづけたまふ、十數年之後、志摩守小濱明府、佐渡の國の奉行より京師の任にすませたまひ、同く此道を講じて其職の當務を尋給ふ、二君の民を親し給へる治績、今に至りて世に謳歌す、僕亦是に答へ侍し事を、ともに漣々記し置けるを、此比又時務の當然を問て、其記をみん事を求給へる人數あり、故に其記を再校し、まじゆるに目前の事を以し、合せて一編とす、敢て信の出家の謀をなすにあらず、其任にあられる人の問に答るに、年頃見聞侍し事を以するのみ、然りといへ共、記して書とする僭罪なきにあらず、今の御代覇堯に向せ給へる盛德によりて、其罪をわすれ侍る、若邦君のとり用ひ給へる有て、生民萬一の益有事を得ば、縱罪を受る事ある共、身後の幸に非といはんや

于時享保十六年　　三輪希賢六十三記

正享問答

三輪執齋著

凡人を用ゆるには、造創守成の時を考て、其才を其地へ用ゆれば、其可に當りて人をもそこなはず、事滯なかるべし、夫人聖德に非るよりは、必其當否をまぬかる可らず、造創の才有者は守成に害あり、守成に宜き人は必造創に疎かるべし、人君たる人自先偏倚なきの中をとり給ひ、其民を親しむの良智をいたして、此二人を以て一人とし、各其處に用ひ給ふ時は、聖人の治も今日に行はるべし、凡天下の事皆是によらざるなし、若地方の一事を以ていはゞ、多年風俗あしく田を荒し、吏は安佚に淫し、農は懶惰になりたる時は、造創の才ある者を用ひて、事吏の眠を覺さするにあらずんば、舊弊決て改るべからず、其効を見ていつまでも是を用ひば、又民不レ堪して必躁動に及び、不レ改前よりもおとるべし、二年を經ば又守成の才を用ひて、寬恕に是を治めば、人和し民安堵し、大平實に致すべし、縱病人の外邪食毒にあたる者には、先發散吐瀉の劑を用ひて急に其病を去り、又速に調理して其處を補ふべきがごとし、子路冉求は孔門にて、共に政事の才ある大賢なれど、子路は造創によろしく、冉求は守成に宜しかるべし、二人を其時前に用ひば、孔子全德の政なすべし、然るに二人皆孔門求仁の學を

して、心術をみがける人なれば、後世俗知の才ありと思へる類にはあらざるべし、民の事は治教の二に出る事なし、治は地方の取ヶにて、其詳なる事は末に論ず、孔子も庶有ては治めんとの賜ひ、民の衣食のゆたかなる樣にする事第一也、既に治りては教んとの賜ふ、教なければ、上農は其富を以て華侈の事に用ひ、或る金山鹽濱などの世話に、所謂山仕といふ者に成、先業をも失ふに至る、下農は博奕或は佛事に投じ、一身を失ふのみならず、其風俗多年を經ても改がたし、是以て教といふ事一日も缺べからず、元來治即教にして、教は則治、二ッあるにあらずとは、先治る時節にて、教は後の事なりと言にあらず、然るに後世は教をなすといへば、早小學の法、呂氏の儉約などを持來りて其しるしを急ぎ、息もなしぬ樣に責る類、皆是陋儒固滯のつのる處にて、聖人の趣にあらず、先小學の法ごときは、當時朝廷の歴々も中々及ぶ處にあらず、夫を今迄放埓無慚に生立つる者を急に責る時は、縱をし得たるとても、皆身法なれば、民心鬱して不レ伸、生意なくして枯□に就き、物をそこなひ衰世の氣象となる、故に社守或土產神の祭などに躍相撲などゆるして、鬱をもらさしめ、生を發達せしむべく、鄕人追儺など戯に似たる事を周禮に定置賜ひし事、誠に深心有事也、されど龍神（關東に多く有事なり）又邪神など取はやし、或は狐を稻荷と稱して神明を穢し、レ蛇蝎を明神と拜禮せしむる類けがらはしき事なり、昔龍女の像に衣冠を着せたるを、伊川先生人の衣冠を禽獸に着すべきに非と戒め給へる、誠に難レ有教也、但古より人民に功德有鬼神を祝ひまつり、其神の緣起を計て、其功德をしらしめ、其恩澤を

服せしむべし、此心なき人はたらずといへば、早小學の法を持來て愚民までをせめ、ゆるすとなればば狐蛇をも拜せ、奇怪を信じて迷を生ぜしめ、又は戯場淫坊を盛にして所繁昌と言、故に民鬱を去ば迷ひ、迷ふ者は鬱す、皆是其身の迷深く利欲多き故に、風俗をみだりに民をそこなひ、終に國家を亂る、かなしむべき事ならずや、夫操芝居、人形廻しなど、一二度五七度ヅヽゆるしてせしむるも可也、併し其操に昔物語の忠臣孝子の故事、烈士貞女の事蹟、神用感應の正しき類をば、故事のまゝにして新法をまじへず、是をなして見物せしむべし、世にふるく云傳たる曾我物語、戀塚物語、楠正成の故事など有體の事をなして、好㆑善惡㆑惡の誠の心を興起せしむべし、假初にも今様の流行淨瑠璃などはかたらしむべからず、邊□の土民などは、せめてヶ様の事ならでは、古人の忠臣義士の誠を見聞事はなさず、無實の事おもしろく作りかへて、古に疵を付る事など輕き戯の様して、其重き事古へなれば、造言の刑とて必誅してゆるさゞる處なり、先惣體を此心得にて、其所の古老の實儀にて、農作にくはしき者を撰で、相應に纔の扶持にても與へて、若き者どもに敎て折々奉行所へも呼、善人の行を說きかせ、鄉中の善人善事のことを□□□□尋沙汰を聞ば異見させ、或はしからせなど常に心掛べし、敎とて俄に儒者など呼て講釋などせしむべからず、先手習の師を求、手跡をならはしめ、幷六諭衍義の解、四言敎の解などよみきかせ、少々志の起るを見て、四書などを學しむべし、左様の類あればかなたより進出て、學んと願者出來ぬべし、急にせむる事なかれ、敎る者に訓蒙大意を讀きかせ

て、其趣に子弟を導しめ、料作の事、貢納の重き事を小兒の內より閑熟せしむべし

納稅の事

夫年貢を納の道、惠を先にして獲ることを後にすれば、百姓足て貢納滯らず、縱ば茶園を治るがごとし、芬茶を得んと求むるに、前年の冬寒の中に其根に糞をよくして、其上に覆をし霜雪を防時は、春に至りて其芽を發る事厚く、□束つよく、同くこへたる幾畝の內にて取所倍し、是を煎ずるに及んて、少用でも氣つよく、味濃して他の多きに增る、故に是を賣るに至て必賞し、夏に至りて又其跡より出る葉を摘とるも又同じ、又重て出る葉は摘ずして是を殘し、冬に至りて已と落るに任せ置時は、元來痛事なくして、來年の發生又必盛なり、年々如ㇾ此すれば、利を得る事多くして上園となる、若又當然の費を厭ひて糞と覆とをせざれば、春に至りて發生遲く、其發る芽も疲薄く、同く植たる幾畝の內にて前のすくなきにも及ばず、用ゆるに及て多く煎じても、少にもおとれば、價になせども甚輕し、其跡より發するを摘取も又如ㇾ元なれば、其不足を憂て、夏の末に發する三番とをこと〳〵く摘取、□にすれども猶不ㇾ滿、是を以元來傷かじけて來年の發生又あしく、次第に疲て其園年々荒につく、其時前に養ひの不足して、摘取し事の過たる祟とは不ㇾ思して、園のあしさよ、土地よからざるなどゝ云て、外をのみ咎めて己に省る事なし、夫前年の糞と覆とに錢を不ㇾ吝は前に惡也、葉を不ㇾ盡し

て是は殘すは得る事を後にする也、如レ是なれば地肥樹盛にして、利を得る事多し、能此道に□を善老圃と云、先茶園を作る者は皆知レ之て、己錢乏ければ借來ても、前の養をなさゞる者はなし、是老圃は園を治る職なれば也、郡主代官は民を治る職にして、民命に害なし、郡主代官にして是を不レ知、民を苦め人を損ふ事眼前也、天心夫如何ぞや、夫聖神の學本より二道なし、心を治め身を修るより妻子を御し、臣妾を侍し人才を育し、太平を致に至るまで此外なかるべし、是は只收納の一事にて言のみ、始に先民を肥しめ、糞に力を盡して深耕し收□しむれば、秋實必豐にして升目も多く、味厚く潤多くて、酒□杯に買用る程に、價も必他より其收る時法を定て、餘り有を取盡さず、殘して是を損すれば、又來年の耕作に糞の力を用る事安く、後は民富て國用此內に存す、彼酷吏の目より其民の富るをみて、其代官の支配所は取箇甚ゆるべし、今一寸も二寸も取る處を容め過たり、百姓ひいきやと言、彼三番の茶の葉の大にはびこりて盛るをみて、あの盛なる葉を殘置は大成費也、容め過たりと言が如し、然るに其三番葉は、形は大にして盛にみゆれ共、摘用るに氣薄く、味なくして價にもならず、人手間のみ費て、取たる者の益にはならずして、元來は甚痛が如し、されど上に居人明德くらみて、民の親の仁心なく□心深く、眼前の利のみを見て彼酷吏の訴に迷、尤らしく取なす故、邦君は下へ遠く、內證の曲節はしろしめさねば、先彼一往せしめて見よと命給ふ故、彼酷吏本望の通其職を奪ふ事を得て、跡先の考なく、心一ぱいに□し取、本より下地肥たる百姓ゆゑ、物成の員數不足にても吾物

成を足し、又は蓄置たる衣類道具をも賣、後は妻子をも賣て出せと成程目論見候通一寸も上りぬ、川溝も、前にさゝへ置たれば物入もなく、諸事捨置程に、御取ヶのみ多く納る故、其頭役も是を稱し、邦君も褒し給ふ、此時に至りて始め良吏は、愈油断に成也、然に後の酷吏の多く聚めたるは、酷吏の功にあらず、前に富せ置たる良吏の功なり、故に民の餘有うち二三年はつゞけども、其蓄へ置たる財の盡る時分より漸く衰廢して、定の通年貢とる事もならず、手錠に水牢など苦しむるはむごき事なり、故に田地は逐年荒蕪、溝洫は次第に淺く、少の旱にも痛甚しく、其田が荒につき、民心憂憤て、衰弱者は病を生じ、或は自滅し、傲强成者は盜賊に成、上に敵し法をおかす、依之刑罪を嚴しく罰すれば、一應は治れ共、心より服せぬ事故其惡止ず、孝子も不孝となり、慈父も不慈に成、五倫皆崩て風俗あしくなる、天下に盜賊多く成るは、是其根元なり、然ば彼酷吏は上下を損ずる咎人なれど、一時の功によりて褒美にも預り、下よりも取持故に、家も富家來抔も奢を極て、猶餘りある上の納りの實は却ておとれり、年を經るに從て酷吏の惡も漸く顯はるれ共、元來ほめ立て取持し人は、其事の違るをいやがり、中途にて色々術を廻らし、場所替抔させ、其跡へは物柔なる人を遣す、彼柔なる人實に志ある人にも民財は取からし、風俗は惡敷、盜賊起りたる所なれば、一兩年の力にては中々屆かず、其時酷吏ひいき成る者、今時は物柔にて中々行事にあらず、儒學抔すれば柔に成、益に立ぬなど言て、其咎をふさぐなるなど、柔一ぺんにて政のなるべきにもあらねど、夫は强き計にてならぬも

同じ事なり、故に道は中を尊ぶ、片よれば皆害有、然るに後の治らぬは、柔なる者の咎にあらず、前の荒立置たる酷吏の咎也、儒者はやはらかにて、益に立ぬと言も理なきにあらず、其いへる儒者は書物のみ多讀覺、俗人の知らぬ管子の韓非子のといふ書物を取出し、智にほこり□氣のみ甚うして、性根に守所なき者也、左様の者を儒者なりと心得たるは、聖道に不案内成者なり、眞儒の政は大學の一章にても天下を太平にすべし、今志有て能身をわすれ、君に忠ある御代官に、其法度を敎て是をせしめ給はゞ、二三年は痛に引れて其功見えざる事もあるべし、本より下地さまで仕崩さぬ所ならば、二年目より其効見ゆべし、下地によりて遲速はありとも、三年をへば大概其効なくんばあらじ、何れにても先當然の急を救て民を安んぜしめ、扨郷中を巡見して池をさらへ、水がゝり水吐を順にし、糞の手當をなし、漸々に敎るに孝悌を以し、上々の御仁德をのべ聞せば、土地は下田も上田と成、人は姦民も良民となり、爭訴おこらず、盜賊やみ四ヶ年目より取りも相應によく成、米宜ければ升目も多償も貴く、民の餘計も出來て、太平實に致すべし、されば孔子も「先ニ有司一、赦ニ小過一、擧ニ賢才一」との給ひ、又「無欲迷、無レ見ニ小利一」と敎給ふ、今仁厚の良士を撰、又貞實なる手代に命じ、百姓と□□勵して、民の爲に害を除き利を興し、水路をささへ糞を能し、かせぎ作らしめば、縱ば高百石の地より百五石も出來ぬべし、夫を上へ四分の積りに四拾壹石餘上て、民へ六拾三石餘もたまはらば、常より上へ壹石餘あがる、是民□にして君も之より富給ふ事なり、然るに代官にも手代にも如レ前の敎もなく、惰農に任

せ置時は、百石の地にて九拾五石出來ぬべし、夫を四分六分すれば、上へ三拾八石餘納り、二石餘も少し、民は五拾七石受れば、是も三石計の損有、是民不足して君貧しき也、夫をかの酷吏は上へ納る三拾八石の上の不足を民の五拾七石餘の內より二石も取立るほど四君へ四拾石納ると見れば、民は五拾五石を受れば、定りたる四分六分をだに□はとらず、彼良吏の取箇は上へ四拾貳石納りて、民又六拾三石受、是は日比の教へ能故、猶酷吏の目より民にとらしむること多しといふは、大成ひがめならずや、此上に民は猶あぜに大豆をうゑ、荒地に木を植させて、彌富樣にすべき也、是にて父母妻子を養ふなれば、惡心起るべき樣なし、百石にて五石の作り出しは、拾萬石にて五千石也、是をも四分六分に分て民に三千石與へて、上へも二千石納る、然れば盜賊やみて爭訴起らず、道橋水道まで能成りて、民の善にうつる事目前の事也

或曰　民の身上つまりたるといへども、昔よりは甚侈者有、民肥たらばおごり彌甚しかるべし、惣て百姓は藁にて髮を結、つゞれを着るべき者か、今は江戸元結にて髮をゆひ、伽羅の油までをつけ侍る、かくのごとき侈を止させたらば、只取たりとても上納も無ㇾ滯して、むかしのごとくなるべきは如何

予答曰　奢は民の肥たるによれるにあらず、其地頭代官の奢に出、其取次は地頭代官侈ば、其手代召仕も皆奢、其妻子も華侈にして、其下人までも衣服飲食皆分に過。是皆民を取てする事なれば、愚民は

是を□て日々其風にうつるなり、然ば百姓の富で侈る事もなきにあらず、夫は只今ます計にて、教と禮とのなき故也、教と禮となければ、上農は其財を國家の事、孝悌の用に立る事を不ㇾ知して、茶の會、歌舞、鞠、俳諧の事に費は能分也、あしきは博奕、遊女の遊に費し、慾深き者は大成事に懸りて其財を亡ぼし、後は有來る用地をも賣、屋敷まで失ふ者數をしらず、下農は堂建立、六十六部の納經巡禮など云事に、妻子までも出して乞食の類となし、農事を勤めず、年貢の筋へは一粒を爭ひ、佛の事慾の爲には財ををしまずして、又貧にせまりはてば身刑を受るにいたる者、毎年幾千萬かあらん、是皆富の咎にあらず、禮と教とのなきゆゑなり、此所法度禁制計にてゆく事にあらず、百姓まづしくば奢るまじといふも愚なる論也、天下の士も貧ならば侈止べき事なれども、近世諸士上下共に貧にせまり、人多けれ共侈は近世ほど盛はなきにて見るべし、根本に目の付たる政ならば、飯上の蠅を逐ふたぐひなるべし、百姓は藁にて髮ゆひ、つゞりのみ着たるとのみ、極て少の餘計も上へ取上んといふは不仁至極の論なるべし、惣じて百姓に不ㇾ限、七八十年前は大名も今の平士よりは質素成し事、古老の普く知たる事也、夫を以て當時に準ずべからず、百姓どもゝ同じ人間なれば、禮儀の風には移したきものなれ共、卒になしがたき故、孔子も由ㇾ之しむべし□□しとはのたまひし也、唯能民を富しめて能是を教れば、貢納不ㇾ滯して、其家に於ては父兄に孝悌を心一ぱいに盡し、先祖の祭禮に本を服し、川ざらへ水道を能し、道橋をもつくろひ、餘りにては貧窮を救ひ、往來の路人迄を惠み、爭訟を起すを辱

るほどの風俗には、五七年程には可レ成事也、夫にても今まで納來れる年貢よりも、甚少きには至らざるべし、如何となれば、今の高免は、三年の間にて見れば益あるやうなれ共、五年平均して見れば、必定前の下免よりは少かるべし、今高壹萬石の所成物四千石あるを五分取上れば、五百石多く成たると見ゆれ共、高免になれば、作間を取て渡世する百姓も家内を養ふに足らず、地持たる者も作德少く、ともに不手廻に成、地を賣んといへば下直に成、小百姓も身を賣出る者多ければ作人少く、目には見えねどいつとなく地荒て、上田次第に下田と成、惣じて昔上田成し所多く下田と成は、上田は年貢高故、いつとなく作り下たる故也、本下田成し所多く上田となれるは、年貢輕き故に年々作り上る故也、是又天運の自然と言べし、是によりて毛見取の所は、眼前に不出來なれば取年々に下る、定めの場は一旦受たる故に、否と言事不レ能して納るといへ共、少の風旱水損にも毛見を願、代官往來の費少なからず、何分以上はゆるすなどゝ言法はあれ共、元來困窮したるを見ては、少の事は用捨もせねばならず、又此序にゆたか成所を共目附、世に所謂結構人なれば、諸事代官役人の事に任せて詮も無、夫程の物入のかさみたるまでにて收納の益もなし、又酷□成者なれば己が功を立んと跡の難儀をおもはず、又は賂などを受て結句其害甚し、從來の道筋などにて、權柄を云て路次の飯料をも不レ辨、私して通たるも有、上の費と民の村入用とは倍す、夫共に本途の物成は動されぬ故に、夫食を願ぬ、是をかゝざれば目前飢渇する故に是をかす、三年に上納と定るに、其内又水損など有ば又同じくかる、

かるほどに年々返濟におはれ、彌が上に重りぬれば或人を欺きかりたる物かへさず、質地を入ては無理を言、常道の事にては得る事無故に、三笠付など言博奕の類の事にかゝり、却て少も有來れる物をもはぎとられ果は無宿盜賊の中間へ入、惡心日々に長じて、不儀の所へ妻子を賣、世上に惡人多なるは是その根元也、其元を塞がずして盜賊を縊のみにては、腐より虫の生ずる如く何ほど取捨ても、腐肉の有んかぎりは止る事無るべし、其元を涼しくして是を清めば、是を留るも又甚難儀にあらず、上に有人先も欺を去て朝廷を清んじ、是に次ぎ人に忍ざるの政をなし給はゞ大國は七年小國は五年など遲速は有共、文武の政とるになすべからんや、故に孔子も子無欲ならば□賞レ之不レ盜との給へるは、誠に迂濶の論に非、其外人々欲深くなれるより、堤或は川除普請の類まで夥敷費有も、吏の民との私曲より樣々の物入有也、其品々の費を五六萬石の地にて引拂て勘定せば、必定五六萬の加免は無レ詮事成べし、依レ之是を見れば、後世の代官の高免は名計にて實なし、取りゆるみたるなれば、其役頭の方の首尾あしく、又定れる通取立んとすれば、百姓騒動に及を以、旱水損の所を言立、其外にも樣樣の引路を立てゆすり合する人も有、主人へ對して陰くらきやうなれ共、せめて是にて行るゝ也、近年所々損毛多きは是其一ッ也、然ば今の高免は虛名にて下の痛む所は實也、然ば民の困窮してあとの治めがたく、憂を殘事はかぎりなし、且其高免に成たるといふも、記錄にのせて後世に傳る事仁政の□にあらず、一寸も下て民相和し、爭論おこらず、盜賊やみ、記錄にのせて萬世太平の名をたれ、後

の世の鏡共可レ成は、人君必是がためにをしみ給ふべきにあらず、又民心を損じ、爭論多からしめ、盗賊を盛にし、不仁の名を天下萬世に傳へて、然も國用益費多事を能々かんがみ給はざるべけんや、與レ有二其聚斂臣一寧有二盗臣一の訓をかへりみ、蓄害至らん事を恐れて、早くに人を退け給はゞ、太平不日に致すべく間、今取備を減じて堯舜仁政のまねをせば、萬事悦事明白也、夫は手前のつもりもなく、家中下々に物多くくるゝ風意にて、悦事は明白なれ共、左様にせば無レ程勝手詰りて、後は家中をも扶持する事不レ叶、子弟を養ふ事もならずして、一同の難儀たるべし、殊更今は下地空虚せる上に、目前の入用共多ければ、君たる人民より收するて何方より生ずべけんや、言是一理あるに似て妄論也、堯舜仁政のまねと嘲りて、磔付暴虐の眞似を好給ふは如何成事ぞや、縦藏米賜る士不勝手成上に、其主人より常祿を減じかゝる方當世所々に有レ之、其士難儀成程四ッ物成を五ッになして賜れといはれまじ、只自分の費用を減じ、身上を持直すより外は無事也、下地空虚なればとて、外に求べき道なければ、或は家口をへらし、衣食を儉し、禮儀をも省、妻子自薪水をとらば、外に貪事なく共無レ程勝手直るべし、於二天下一さへ荒政の法有レ之、仁德帝の宮殿の破れを捨置て、民の貢をゆるさせ給ひ、北條泰時築地の崩れを不レ補して民を憐み給しなど、萬世の鏡成を不レ思して、目前の利にふけり、悪人の跡を眞似られん事なげかはしからずや、聖人の政なればとて、考なく取りを減じて民に與へんにはあらず、自定式有レ之、君民ともに宜しき法を定め置給へり、其古法よりも多くとらんとするは□□

が邪政也、又古法より少くとらんとする言は夷狄の偏法也、上たる人華侈に費す時は、十分が二を取ても猶不ㇾ足、古法に從へば十分が一にしても、三年に一年の餘分有事聖人の勘定也、曰、十分が一と言は、唐の古井田の積りと聞ゆ、浮世は唐にてさへ猶不ㇾ足と云へり、今日本の制に叶ひ、儒者の古說のみを見て、實事を勤ざる空論は行るゝことに非ず、曰、是儒の論を聞ず、記誦の徒の說を儒と覺えたる誤り也、今試に是を論ぜん、日本の古へ均田租庸調の法は、上代の事にて我等其詳成事を不ㇾ聞、當代四分の税是唐の十一の税に叶へりと聞、如何となれば、和漢共に上代は士と農と未ㇾ分、人皆農にて、出て仕ふれば士と云、退て歸れば又農と成、輕民は農にて丁役を務め、まりの布、中役の征など品々の事有、其上唐は多くは地廣く民少くして、三年に一年ヅヽ地を休め置程の事也、日本にても上方關東は、地の廣狹民の多少甚替れり、奧州薩州抔も所にはかはるべけれ共、多くは地廣く民甚少、故に十分一の税にても行るべしと云へり、ヶ樣の事共を考て積り見れば、今の四分六分の税に當ると云も故無に非ず、詳成事は井田考と言書に出る、長ければ四分六分の税と言事、何の書に出誰の立たる法なるも不ㇾ知、其旨を聞ん、答曰此說何の書に出誰の立たる法成も不ㇾ知といへども、理を以是を推せば、至極の法也、我會て古老の說に聞り、日本古法六十間四方を一町と言、六尺五寸を一間とす其十分は一を一畝とす、一畝は三百六十坪也豐臣家に至りて三百坪を一反とす、芥法と言共本朝是によれり是一夫の田がやす所也、一坪一升の米にして、是を積りて三石六斗也、一年三百六十日の數にして、一日一升ヅヽに當る、其半を上に納

め、殘る半を民是を受、是一石八斗にて一人五合ヅヽの扶持米也、然に俵繩などはり仕立、運送の物入懸り物を以、一分上より賜はりて、四分を上へ六分下へと割たる也、是上中下を平均して定たる物也、土地あしきは風水等の變あれば、猶其上を免じて減じ給ふによりて、免を給ふと云成べし、是其大略也、上田は一人にて一反を耕せば、下田は一人にて二反も其餘も作り、是は作人の力と地面とによるべし、多く耕し作りても分數をはり無故に、ゆづり合せて平均せるものなり、然に坪刈つひほふして見るに、一升の毛有も有、一升二三合有も有、又七八合にも不ㇾ足もあり、是中分を取て大法としたるもの也、然に一升二合毛の所は、物成四合八勺に取ても□に非ず、若又八合毛有所は四分六分にして、上へ三合二勺下へ四合八勺の積りなれ共、四合八勺にては一人の扶持に不ㇾ足、故に下へ五合給り、上へ三合取、是定法の四分六分より見候ば、二勺ゆるし給るなり、曰、民一人一日に五合として不足の□はゆるし給るなれば、一升二合も有所は、民へ五合あたへて上へ七合取べき事也如何、曰、理屈にていへばさる事なれ共、元來土地は君の土地にて、力は民の力也、故に地の瘦てあしき所は民の咎にあらず、然れば夫程の宥免は可ㇾ有事也、若土地の能所を、惰農の作りさげてあしく仕たるは罰有事也、勸農使は此爲にて、今の代官其役也、或は又薄田を良農能作りなしたるは、庄屋、名主、年寄抔の功なれば、是又賞有べし、夫下田の上田と成は、智惠才覺計にては不ㇾ能、夥に金銀入、人夫多く用ひたる故なれば、元來民の己の力にて、君の地を上田となしたる事也、然ば夫程の褒美可ㇾ有

事成を、出來方宜しとて有限り取は義に非ず、況や物入をして能すれば、出來たる限り上へとらるゝならば、誰かを精力を用ひて作事を爲んや、然ば年々に作り下て、上田次第〳〵に下田と成は必定也、下田と成て、合毛少なきを、多く取れと云は甚□政也、然ば後は皆一同に下田と成て、全國の高にては大方の損失成べし、且亦田地は永々の物なれば、能作て上田としたるは、百姓の上にての大成忠義也、武士ならば加增をも給はるべきを、却て迷惑する事は天道に有ける也、是を以見れば、上田を作り下たるは大成咎にて刑すべき事なれ共、代官の指圖取ヶの事より、水がゝり水吐など能致へ、人も和し力を合する程にしても、作り下たるは農人の科なれば、誠に罪をも負すべし、糞の力不ㇾ給致へも無、外事にのみかゝりて身を打、川除水のかけ落しあしくして損じたるは代官の科也、百姓を刑すべきに非ず、前の段々にて見れば、四分六分の法は何の書に出、誰の作成を不ㇾ知といへ共、至極至當の事也、曰、然ば大和國等其外にても、七八九或はすくみ抔とて十分に取は□政成べきか、曰、是は一概に論じがたし、元來高免と云には段々子細有事也、下免も又如ㇾ此すくみとて十分出しては、百姓は何を可ㇾ食也、然ば只出作の能と言事計には非ず、京都にても東寺九條等と言邊は、京中町々のかい水、魚鳥の洗汁等より雜水の落合等にて、自然と糞に成也、常に能うゆる所の物皆能出來て二毛も取、京中へ一里にも足らぬ程なれば、出る程の物皆錢に成、藁までも廢する事無、然も價能く賣れ、惡水も高瀨川に落れば不ㇾ及二修理一此故に凶年と言ふ事も少し、ヶ樣の所はすくみと言程に取ても

民不レ痛、如何となれば、米にかゝはらずして、民の歸る所を四分六分にして見れば、すくみにても四分の貢に當るべし、同じ一里計にても、京城の北にあたるかたは、養水の落込ことなき故に又おとれり、然ば其地による事なれば、得と見分して地理水道諸物の價等迄を能考合て、取ヶは可レ附事也、煙草、紙、油、木綿、桑、炭、魚獵、野菜などの横物成を本より別にして取る所有、又本途の物成の中に見込て取る有、又或は地廣故に餘分ありて高免成所も有、是は押して免を下、餘分は夫程別にして取事成べけれ共、容易にはすまじき事なれば、夫までは姑く依レ舊て高免なるも□にあらず、何れにても全體の物成を積て、四分六分に割付る時は、八九分にても什一の税にあたるべし、元來税を定るは民の衣食、屋作、先祖祭の物入等迄を□定たるもの也、然ば少し餘分有様にせざれば不レ叶事也、夫を積も無出來限り取上るは、天道にそむきたる事なり、唐の古への法は君の田地にて、民は皆作人成故に、上中下田を毎年入かへ作らしむる也、然らざれば上田の民は甚利を得て、下田民は常に貧し、毎年入かゆれば、三年平均して皆同事に成也、日本も肥前の平戸などは此類とかや、其外大方は民の買受たる田地なる故に、免二三の所も、五六の所も有て不同也、其實を不レ考して法になづむ者は、必なくて行ふ事不レ能べし、己が不レ考過を顧りみずして、日本に行れぬと言は其愚成事也、仁政は國の治るの根元にて、禹王の定め給へるより三代漸々に備り、孟子第一に是を述給ひぬれば、儒者の是業の第一也、不レ考二儒者一と儒者しらぬと云者とは、ともに聖門の罪人ならずや

唐の取箇は三樣也、夏の代の貢法、殷の代の助法、周の代の徹法、皆仕方かはり、收納は大樣十分一也、貢法は今の定也、但田は公儀の田にて、農人一人前五十畝ヅヽ受て、其作德の十分一を貢す、一畝に米二斗出來る物なれば、五十畝にして十石也、年の豐凶を平均して中分を以是を定め、其十分一の一石を上へ貢し、殘る九石を百姓是を受て豐年とても多はとらず、凶年とてもゆるす事なし、上代洪水の砌なれば田地も少く、又民も淳にして僞りも無、禮文もいまだおこらざる故に、衣食家作の好も、珍物遊宴の費も、佛法後生の迷ひもなければ是にて事たり、有餘の財は自然と蓄と成て、凶年の備へ不足なし、縱不足ありても人にかりて可レ用、返濟も不レ滯、若滯ても責はたるにもいたらず、一鄕一家の思ひをなし能治り、役人の勞、村入用の費も無、至極能法也、然に久しきに及ては風俗もかはり、禮文も起るに從ひ、民有餘の財を蓄へ置事も無、有に任せて遣ふ故に、凶年には必飢渇に及者有レ之、人に借しても返す事も如在に成故に、かしたる者も責はたれば爭訟おこりて、貢法弊へ出來ぬ、又土地も廣田地も次第に多成行故に、其法を立かへて井田と云ふ事を定め給へり、是を名附て助法と云ふ、夫世の中文華に成に從ひ、始の五十畝の作德にては民不レ足、故に是を增て七十畝ヅヽを與へて作らしむ、其法六百三十畝（六十三反）の地を四角にとりて、其內竪に二筋、横に二筋、井の字の如く溝を付、是を分てば眞中と四方四隅合せて九區と成、一區ごとに七十畝也、（七反分也）眞中の御田地を公儀の御用地とし、外廻り七十畝ヅヽ八を、八家の農人銘々受て是を私田とし、其廻の八家して力を合せ、先公儀の田地七

十畝を作りたてゝ、貢の外の五百六十畝を相互に助合て作る、銘々受たる七十畝ヅヽ出來る作徳は皆作り取にす、相互に助合て作る、故に助法と言也、但一畝二斗ヅヽ出來る積なれば、七十畝にて十四石也、是を不ㇾ殘一夫として取候、反の九石受たるより五石多し、依ㇾ之八家の百姓むつまじく貧困相救ひ、疾病相扶くる風俗と成、此故に役人の勞も村入用も無能納る、又至極の良法也、然に又久しきに及ては、民人利に走る事甚しく、公田を疎略にし、己が田地を第一にし、面々の內にても、己は佚して人を勞せしむる風俗と成行、公田に雨降て我々に及ぼせと言樣なる目出度風俗も失果、爭訟起る樣に成、是亦時勢の當然也、故に至りて又其法を改て其變を通ぜる、此時に至りては土地も甚多開、世も益分明に成、禮儀も備るに付て、民の物入も多くて、前の七十畝の作德にては猶不ㇾ足、故に又增言て一夫に百畝ヅヽを受しむ、是も亦公儀の田地にて、公田と言を別には立ず、惣高九百畝を八家の農打込に作り、出來たる所の米を九ッにわけて、一分を上へあげ、殘八百畝の物成を八人へ分取、是共の積成故に、其實は十一分の一といふ程にあたる、これに依て公儀を次に、私を第一にする心も自らにかゝり物、引物は是又畝步にて公田の內へかゝる故、私田は全く百畝の稅を受て、公田大方八十畝おこらず、人を勞せしめ自佚するの風俗も止、平等に成て地方取箇の法をこゝに至りて全備せり、是周の二代に監て、能變を通じ給へる時法なり、而民を惠みて子の如くせる所は、三代一意少も替る事なし、如ㇾ此三代色々かはれ共、凡聖人の心は民の利心出來ぬ樣、相樂に心のおこらぬ樣にと言所を

重意して立たる物也、故に人をつかはし毛見等をする事無れ共、僞りも手間もいらず、公事爭訟も起る事なければ、取ヶ少けれ共諸事引物物入なければ、勘定全體の仕上にては自然と公儀の收り全して、その財は□庫に滿ても番人も不ㇾ入、萬民より守て其規にあらざる事なし、是を「不ㇾ以ㇾ利爲ㇾ利、以ㇾ義爲ㇾ利」といふ、後世の收納の仕方は井田に似たる事、社□原價に似たる事有て、大君も民を憐み給へる仁心より起りても、其役人たる者共無學にして、民を惠事をきらひ、己が小人の心にて是を吉と思ひ込、何としたらば一俵も多く收るべきとのみ見て、正しく人のいたみに成べき事は、色々の手立手くろをする故に、小民も其情を知りて、善事をもこばみて受る事なし、又或は同じ民の內にても、正しく己が利の爲に仲間をはづれて、色々の內意を能樣に云かすめ、其役人の□□好賂を以とり入、無利と知ても目の前にては道理ごかしに言廻し、上下をあざむく者あれば、役人も夫にまつけて、又己が利をはかる故に、上下躁動して果は亂國と成、皆本たる明德親民を外にして、外物財利を內にするより。民を爭しめ奪ふ事を□すのみ、是皆以ㇾ利爲ㇾ利の災にあらずや、堯舜の百姓不ㇾ親五品不□を患させ給ひたる旨を以本とし、夏殷周三代の內にて計、今の時に宜を用ひば、懷手にて國家治るべく、國財は山の如く成ても藏の番人もいらず、役人の私曲の世話も無、津々浦々迄用意の米ありても、直はさまて下直ならず、上下一同に閑を受る政成を用給へる人君のおはせぬといかにぞや、夫國家に長たる人君は、財用などを務給ふ賤き御心おはせぬと、彼聚斂の臣共が木に餠のなるやうにいへば、

夫にまよひ給ひて、其臣を用ひ給ふによりて災害幷至るをしろしめさず、後に善者を上給ふ其間にあふまじ、早く心づけて改させ給ふべき事也、實に其聚歛の臣有盜の臣の戒さて〳〵ありがたき事也

問曰　貢法は今の定めといへり、「孟子治ㇾ地莫ㇾ不ㇾ善二於貢一」と、甚あしき法成り、曰、是又一偏なる論也、孟子の說は其時に當りての說也、貢は元來夏の夜の制也、それ程惡き事を禹王の始じめ給ふべきやうなし、其上孟子にも國中は什一にして自德せしめんとの給へり、自德するとは貢法の事也、是定め也、國中は都なれば、民の利を得る事數々なれば、常免にても、凶年にさまて飢寒の憂無事也、都にて民の利を得る事は前に述たり、總じて子丑寅の正月を改るも、古昔三正互に用ゆと言て、其弊有時は必可ㇾ改、一法を以萬世不易と言は固滯の見也、されど改るとても、此三色の外に不ㇾ出、王荊公が祖宗の法不ㇾ足ㇾ用といへる樣に、無法なるは三色の外に出で、聖法の規を離れたる也、今和法□に用る所は、俗に云常免、毛見取、色取、反取、厘取等品々の違有、又諺に手足爪取と云は、能かげんにはれ深(カ)く取ばいたみ、淺ければ、物にかゝりて却て惡儀と云心成べし、是とても少し延過たるは害なくて、深く取ていたむは眼前なり、能々考べし、扱毛見取をするにも品々有り、坪苅□法して米となし計見るに、其一坪と云に一間（六尺五寸四方）四方に棹を入れて其內を苅取、わづか一穗の出入にて、一坪の內にて一合違ば、一反にて三斗違、萬石上にては大分の事也、唯是を平にする第一也、故に棹を入或は繩を引とても、うねの竪横には引ずして筋違て引も有只役人に戒て平を守るべし、民の姦をする

にも下役人の盜し或は賂を求むるも此時に有べし、其品は不レ論、人情時勢を計りみれば、國と所にはよるべけれ共、多くは定め宜しかるべし、されど共仕方有べし、定めといへば、民の物入多分違故に、其物入を積上て年貢の事はかつて免を高くする故に人心も服せず、代官職の者も高免にするを忠義と心得て、民の根の上に歸する事を不レ知、己の當分の首尾の爲に、萬民の苦みをかへりみず、心うき事也、定めにして毛見の時、年々に用る村入用の少きを、民の所得にさせて常免を定め、民安心して豐凶は有共滯も無、年限定免不レ破ば、少々事には毛見も不レ願、夫食も□□□共云まじ、夫にても代官を遣し添檢見をやる等の費少のみならず、上下共に物類にして宜しかるべし、定免に成時は、姦惡成役人は所務無故に、色々の事を百姓に勸るもあり、たとひ嚴刑を加ふ共改る事有べからず、如何となれば、內々の曲節は上位の人のしらぬ事にて、姦術のたくましき事は明智も及ぶ事にあらず、然るに其姦術に欺れまじ、又見出さんと思ふは、是亦姦意まぬかれざる所也、縱千萬の姦術ありとても、一ッの正直を引立れば、其姦皆覆ふ事不レ能して、姦人も後は辱て心服すべし、其正直は無慾の人ならでは知りがたかるべし、我鄙賤に居て吏民の姦邪普く見及たり、何程姦佞成者も、無慾の人に對して其術行ふ事不レ能、是に依て是を思へば、三代の法皆無慾より立て、其時々にして萬民の姦心の生ずべき道をふさぎたるものなり、去ば毛見取は宜しけれ共、姦吏の姦を行ふは毛見の時に有、然ば今は常免宜しかるべし、され共無慾にて民を親しむ所より建立せざれば、吏民よりは先手前に姦心有、

如何ぞ人をして姦心生ぜざらしめん、常免を極るまで何とぞして民の爲にと思へ共、俄に多くも免しがたし、せめてかゝり物等の費をのがれしむる事、少の益にもならんとて、いつもの收納常免の高にすれば、上へ收りは同じことにて、民の爲に甚宜しきを定めにすれば物入無程に、其物入懸り物程收納のかたへ入てとらんと云は、元來君子たる人の心にはあらず、如ㇾ斯にして猶亦せり上んなどゝ、色々の事を仕かけて取納、ヶ樣の聚歛の臣は、盜賊よりは甚惡しきことならずや、如ㇾ前宜敷常免にしても、十年も經ば又弊生ずべし、左樣の時は見計て又毛見取にもすべし、無狀にかまへて、一方に究れば、必其方死法に成て又弊あるべし、今五分も免を下げて常免を極めば、民心落着て上を敬ふ心出來、疑惡心やみ、少の事は快く受て、夫食もからず、堤川除等の事に姦術も不ㇾ致、上々の物入は決定可ㇾ減也、困窮すれば人の物をかりても返事不ㇾ能、後は常に成て、兎角かりたる物返さぬはずの樣に思ふ、今時士民のみならず、歴々の上にもヶ樣の風俗有、甚敷なれば盜と成、爭訟して其村所の物入かかりは彌增に成、姦成役人は其の事に付て必賂をむさぼれば、惡事日々に長ず、一人の惡人を刑するにも上の物入は有事也、ヶ樣の事を積り見れば、五六分等の免の上りよりは費の方却て多ければ、干要に見込たる高免も益無て、民のくるしみ、風俗の破多く、果は天災を致す、可ㇾ歎の甚敷ならずや、君たる人見聞し給はゞ、一寸も免し給ふべき故に、民のいたむと言事を君の前には隱し、民能治りありがたがるなどいひ、たま〳〵困みの沙汰有時は、貧困と言立るは百姓の口くせにて、實は虛也とて

色々の證據を引て、君を欺き民を虐す、いたましき事也、今五分の取ヶを減じて五年見給はゞ、惣高五分の高さにおとる事無して、天の冥び生民の憾み無、盗賊やみ、博奕三笠付等の法度も必行はれて、貢納の實は少もおとるまじ、全國は過分の事なれば、一邦にて試給はゞ、正敷知れぬべき事也、然りといへ共是皆其人を得て行るべし、此方を聞て利害の積にて是を行はゞ、必又行ふべからず、其行れぬ時に此法惡きなどいはんは、猶以愚成事也、故に政をする事人に有、人をとるに以ㇾ身といへり

或問曰　王制にいへる三年耕て一年の物成を餘す事は、今日本にては存もよらぬ事也、何とぞ又行べき仕形有んか、答曰、日本の積りとは替りたれ共、成程唐の積り程は餘ざるべし、王制の法を考れば、十分一の年貢なれば、高萬石にて物成千石也、三年耕して三千石也、一萬石を三年耕して七百五十石を餘す也、高一萬石の所納現米千石成を、四分にして二百五十石を蓄へ置、殘七百五十石を一年の遣用とす、其貯たる二百五十石を、三年積ば又七百五十石と成、是三年耕て一年の貯有とは言物也、日本一萬石の高にて四千石納るなれば、其現米四千石の內にて二年に現米二百五十石を餘して蓄とし、殘三千七百五十石を一年の用脚とする也、是程の事は成まじきにも非ず、然に式と法と無て、金銀だにあれば、小身の面々も能噺子等度々興行する樣に成ぬるが故に、不勝手成人も、知行高同じき人は其眞似をする樣に成、甚敷は妓女の遊等を事とし、是をなさぬ者は其仲間よりはせ出すやうになる、如ㇾ斯にては一萬石すくみに納りても、中々足るべきやうなし、禮式定りて法を守る人あらず、高

一萬石の身上にて現米三千七百五十石にては豐成べし、然ば一萬石にて現米二百五十石餘す事はかたきに非ず、小身の面々は中々餘分の沙汰へは及ぬやうなれ共、此心がけあらば、惣體にて夫程の餘りを存る事かたかるまじ、千石取者現米二十五石、百石取者現米二石五斗程の事甚難しと言べからず、扨此法人作を以て定給へるにあらず、天道の自然也、凡此事に不レ限、聖人の法は皆天道に從たるもの也、書經堯舜典を考べし、夫四時十二月の內、春夏秋の三時は生長收功有レ之、冬の一時は生氣根に歸す、不レ然ば來年の生長收をなす事不レ能、四方も東西南の三方は明にして、北の一方はくらし、不レ然ば三方の明を養ふ事なし、晝夜も卯辰巳午未申酉戌亥の九時は働勤て、子丑寅の三時は休す、此三時不レ休ば、翌日九時の働をなす事不レ能も皆同じ事也、予嘗て軍學好謀と言書を作る、其內に大名十萬石の祿を五ッにわけて、二萬石は主人の藏入とし、八萬石を四分にして、二萬石ヅヽにて一通の軍役の人數を定、一組は參勤の供、平生の勤をなさしめ、一組は其手替とし、一組は非常の備へとし、常に晝夜の廻り番を勤る事、或時は書狀一通にても即時に揃出る用意をし、或は當時勤る者の忌中病氣、又は死する等にて替の入用或時は其內の其位成者を出す事又同じ、殘一組を休息をして、其一年は人馬をも減じ、家作をも繕の外は省略し、祝儀往來の音物をも止、木綿布等を服し、遊興をも停止し、勝手によりて在鄉等へ引込願あらば是をもゆるし、諸事素にして其局は經學武術等專らに勤、智勇を養はしむる類皆此旨を用ゆ、是皆天地の自然に則りて、人作を用ゆるに非ず、諸事天道次第に任ずれ

ば、己勞せずして事治るべし

問曰　常免の宜しかるべきは尤にて毛見の仕やう可ㇾ有事はいかゞ

答曰　ケやうの事は所による事なれば一樣に言がたし、され共先大意をいはゞ、代官檢見の前に名主組頭等惣百姓を引れ立合て、下檢見と言事をして、其所々に合毛を書付て札を立置、其上を代官毛見の時、又改て上中下三段の場所において、各坪刈舂法して合毛を定むる也、其時下檢見の札を引合せて見るに、一升毛も有時は必八合七合毛と札付、兎に角實をしらぬ者□、只今直にあらはるゝ事さへ如ㇾ此、是民僞になれて恥を忌ざる故なり、是民の咎共いへ共、畢竟上より常に僞りを以民を御する故に、夫に習てかくは成事也、故に「孔子民無ㇾ信不ㇾ立」との給ひて、信を以手代をも召使、百姓にかりにも僞を以不ㇾ對して、下毛見の前に號令を出し、惣ての僞りを禁め、此毛見の時も皆々僞の札を立る事常と成て、辱を忘るゝの非を告知せ、當年より僞書をすべからず、上中下得と見分して坪刈舂法する時、下地の札よりも多くては、一村一合ヅヽ皆上て取べし、若下毛見より少くば、一村皆一合ヅヽ引下て取べし、或は坪刈の時稻の穗を盜に、色々の手くろをする者有ㇾ之時は、夫程を皆一時へかけて取べし、坪の棹或は繩を引時、一穗にても役人方無理成仕形あらば、百姓共の間より吟味すべし、隨分平かに正敷して、毛頭僞して民を欺くべからず、十分に米を摺て一ぱいに定め、扨取ケは前々の積りよりは五分もゆるすべし、今極めて前廣に大小の百姓に皆觸聞すべし、此旨に背たる者有て穗を隱し、又

升取等に手くろがましき事あらば、其者一人の手前より科代として夫程の罰をかくべしと言事を定めて、此旨に少しもたがはずば、手代內證の私曲も行はれまじ、如レ此四五ヶ村もなしもて行ば、大に手間もいらずに、手代も少毛見の日數も少かゝるべし、民彌貞に成て後は、下毛見のみにて代官毛見に不レ及程にも可レ成、惣て民の事は彼を愛し親むと、信を敎るの二ッにて全體濟事也、治二土地一代官職の人は、上の撰なれば下より論じがたし、爲二代官一人本〆手代などを撰事の肝要なる事誰もよく知りて、誓紙迄を取て使へ共、必私曲する者多、其撰やう有べき也

答曰　天性潔白成者無に非といへども、萬人に一人也、夫には取當る事難かるべし、然とて手代無ては代官職つとまるまじ、撰事何程念入ても、一旦にしてはしるゝものに非ず、然ば下地は兎もあれ、其代官の心と行とにて、惡者もいつと無善と成、又能者もいつと無惡しく成也、然ば手代の吉惡は、則我心の善惡の顯したる姿也と、是をかんがみ深く自反し、恥を恐れて先我欲を少うし、第一に奢をつゝしみ、手代を惠みて彼等も末々安堵する樣に取計、眞實をふみて機嫌取、へつらひを言ものを近付ずんば、其風に自然と改るべし、凡代官職は其役に依てとは(カ)、人多召仕家廣く住て、大身同前に人にも敬まはれ、元來小身の面々成事はかくれ無れば、其主從の間餘り嚴にては不相應にて不二相和一手前よりへりくだりて同輩の思をなし、打和して內外無二召仕一候はゞ、有無共にかくれ無して、姦邪も自然とやみぬべし、夫代官所の手代をのみ筆算地付の事を學ぶは、皆々其餘計にて子供をも片付、身

も老後の安堵を思ふ故に、精力を出して學び仕へて、毛見等にかゝる時は、夜の內より出て、夜に入迄かけありき、歸ては夜半八ッ過までも勘定にかゝり、又明朝六ッ時より出、日々如ㇾ斯して遠方へ歸、外に是程骨折奉公はなし、如ㇾ此の苦勞をしりて望來るは、利を目がけたる事也、且亦村々にて魚鳥など振舞をも堅く禁じ、飪食のみをあたへて、民よりはいさゝかの物をも受させまじと其號令行はるべけんや、能々人情を考ふべし、是を以法を堅し、誓紙の血判を取置ながら、其代官の心にも內內にては、少々の禮物は受ると言事を知らざるは無れ共、輕き事は見ぬ振をするのみ也、然ば此時已に其誓紙は破れ、法度もくづれたる事を不ㇾ知、夫利を望みて來る者を財利の塲へ引入て、利を貪るなと言事行はるべけんや、其代官と成分上の人にても、誓紙の面を守る人計はあらねばこそ、科を蒙る人間々有にて知るべし、然ば誓紙と言事先無用也、背くを知て是をさせ、少々の時事は見ぬふりをする時は、主人先誓紙を背く、共に神罰まぬかる可らず、酒肉も少は骨折程に惠むべし、村入用にかゝはらず、代官たる人是を與ふべし、賄賂がましき筋を絕すべし、此意思を心得て、其處置は其人に有べし、惣じて元〆其外の手代も號令して言ん、收納取ヶの事は定法あれば、容易に飛すべきに非ず、只百姓を憐み互に心を一致にして、相談づくに得心せしめ、誠を盡して定べし、欺事勿れ、其上に猶能吟味して、少々地先の開べき所あらば是を開、石田は石を捨、荒地の木にても可ㇾ植所は木を仕立、糞の手づかひ等より、都ての害を除利を發し御田地を能こやし、少々にても作り出したらんには、年數の

上にては四分六分の積りに民にも與ふべし、平生心を用ひて子は孝に、弟は悌と成筋を能々示し教へ惰農を戒て耕作に精を出さしめ、水道の埋らぬやうに道橋の損る所は無か抔諸事心を付て導べし、如レ斯にして民も益有によりて、其禮として物くるゝ者有共、相應の事は上へ申上受るも苦しからず、其民に褒禮をも言べし、又或は六十六部の納經、堂建立、奉加事等に妻子を引れ出て農事を怠る者有ば得と異見しとゞめて令レ止べし、官吏役人成とて強毅に民に高ぶるべからず、かく民の爲に費を省利を興して、大に村方を仕なしたる者は、上々へも申上て其功を顯し、我も褒稱して宜敷方へすゝめ上べし、君此命を背て內々にて賂がましき物を請て富をなせる者あらば、其富を得たる由緒吟味し、罰に依ては申立て死罪にも行ふべし、其次は身上を沒し所々奉公をかまひて、惣役人の見せしめとすべしと、此趣を一紙に相認、各姓名を記して連判せしめ、不レ及二血誓一是を判に刻て百姓の家にもはらせ、毎月寄合て讀聞しむべし、凡村々に惰農ありて、夫は却て衣服も綺麗に遊ありき居る者有、多くは所所役人等へ出入て、却て首尾も能傳引も多し、又作にのみかゝりて脇ひら見ずかせぐ百姓は、時宜合もふつゝかに無骨にて人の氣にも不レ入して、代官所へ出ても呵を受るのみなれば、彼惰農をうらやむ風多し、このごろ或代官所の支配の百姓年貢滯れりとて、八十ヶ村計の名主手錠をさされたりと聞く、其邊の名主の語りけるは、此八十ヶ村程の內に皆濟のならぬ者計にてもなし、外を見合當年は手錠をか□れば、皆濟せず共濟べしとて、態々出さぬ者有といへり、是百姓に耻を忘れしむ、いまはし

き虐政にて亂の本也、且亦此流行三笠付と言て、博奕同然の事有て、天下一同に堅き御停止なれど、寺より建立の爲とて願出れば、佛法の事は格別とにや、ゆるして富と言て三笠と同じき事を成立さしむる人も有、是皆民に利心をすゝむる也、如レ斯にして博奕三笠を制したりとて止べきやうなし、只根本に心を付べき事也

夫土地を治るは、其所の人情の好惡を察る事第一也、次に風俗の善惡、次に土地の肥磽、山林、河海の氣の散ずる所の利を可レ考、如何程成がたき事にても、衆人の好事の不レ成はなし、何程成安くしか(カ)も民共の爲に宜敷事にても、其不レ好事のなれるは無物也、されども其好所の惡敷筋ならば其趣を轉じて善方へ向はしむ事肝要也、然るに此所號令法度の及ぶ所に非ず、其好の心一度向ふ時は勞せずして其功速也、實に民を親しむ人にして始て是を行ふべし、如何となれば、人の相親むを嫌ふ者は天下に無レ之、故にこゝに本付て其政を爲す、親レ民心無して親レ民の業をせんとするは無實の覇術也、行るべからず、親レ民の實に有レ之時は、必親レ民の事有レ之、其心無を徒法と言て行れぬ事也、或は又其心有ても其事無ば、徒善とて政にほどこさるゝ事にあらず、故に「先王有二忍レ人之心一、而初有二不レ忍レ人之政一」とはいへり

盗賊幷災異之事

世に盜賊多く、町人百姓難儀するのみならず、大名籏本并家中小身の者迄其憂を免さず、其處置可レ有也、答曰、是其の元を不レ塞して、末において制せんとするは、腐臭の物を不レ去して、生ずる虫蠅を取捨んとするに同じ、去る處は一二に不レ過して生ずる虫は千萬成べければ、去りつくす不レ能、內に必ず手に餘りて、後は大亂にも可レ及、(カ)問曰、其本とは何をかいふ

曰、其元とは上に在る人の欲心を言、故に孔子季康子盜を患へて、問に答給ひて、子が不欲ならば、雖レ賞レ之不レ盜との給へる是也、道しらぬ者の心には、迂濶なる答へなれ、世上盜多き時に手前の欲を去て、其時の間にあふべけんやと言べし、是前の虫の生ずるにて考へ見れば、迂濶の論に非ざる事見るべき也、夫上に有人は生れながらの上﨟(カ)なれば、財利の賤はおはすまじき人也、下に有者は全體財利を事として、父母妻子を育事なれば、其上に有人たとへ早利心無共、下々にて利を貪り爭程の事可レ有事也、夫だに有に、道の言を聞ては恥入て感ずるものなり、然るに上に有人利欲心少もおはせば、下に有者盜をするは必定也、上の人利欲の心あれば必聚斂の臣出來て、自の効を顯也とて、上にはしろしめさぬ無理成利欲の政出來る者也、此源を塞て此根を絕給はゞ、打捨置たり共いつと無可レ止也、されど一日にても盜賊有ては、良民の難儀、其筋の手當は可レ有事成故、聊其趣を論ずる也、必此處置□□□は□く止とても、是をたのみて其元を忘るゝ事勿るべし、過し正德年中に篠山侯京に尹たる時、或御門跡の知行の內に、家數二百軒計の穢多村有、其住居こもはりの類にて乞食にひとし、其

所川の邊成故に新家を立て良民を置時は、甚利得有とて是をすゝむる者有、仍て是に替地を賜り、其方へ引移らしめんとて料として百金を賜りなんと有、穢多共千金を賜ては引移侍らんと言、家司等怒て百二百にても事たりぬべきを、此時を見込て斯欲深き事言は、惡き奴原なりとて人を頼て京兆尹へいはしめ、京尹より□と命じ給れと言、源公是に答て曰、此事唯內々にて家司中幾度も言聞せて、得心せしめられ可レ然、此方よりは命じ難し、其故は今其村に所替命じ給ふは、上に利德有故との事也、凡人間の上位にまします御門主にて、利德の爲に久敷住馴たる者に所替を命じ給ふなれば、人類にあらぬ程の下品の穢多共の利德を願ふは本より其所なり、只いつまで家司中の彼等に得心させらるべしと語り賜ひければ、言を傳へたる人恥らひて歸りけると也、是にて源公の志の一旦をも見るべし、夫盜にも大小のわかち有、小盜は百姓の困窮より起れば、每々凶年に多して、豐年には可レ止、大盜は左無ても、其群山中海上等にも有レ之、民困窮すれば其廉に乘じて盛に成り良民の內よりも其中間へ入る者多し、其盜を止れとならば、前に述たるごとく君心一念の利欲を克己し、政府役人の利心を禁じて民を惠て渡世有樣にし、利心おこらぬ手當をなして、其本をかたくして、大盜の渠魁をつり出し是をとらへ、（渠魁を捕る術、其人無ては不レ能事なれば、爰に筆しがたし、甚難しと言に非、故に其志有者人得る事有て、盜もこれに服せし也）其盜賊の器量をはかり、かりにも僞を以て色々にすかし問事に不レ可レ有、尤いため苦しめて責問べからず、唯折々召出して其言所をためして、力量の有無を考へ見るべし、盜とても感レ心無者は、衆盜不レ伏して其事行れぬものなり、其頭と成て大

勢の盗賊を死地へ引れ行て盗をする程の者は、中々常體の士などの手にあふ者にはあらざるべし、然ば左やうの器量有者を得て、日を重得て說得し、自其禍福をえらばしめ、能々自反せしめ、盗の天道に背きて、人たる者すまじき事は汝が自知所也、去程に汝程の武勇にても、小兒女子にも見付らるゝを恐れて夜中又は無人の所を考へ、鼠の如く逃廻る事恥しからずや、一旦欲心に迷ひてかく淺ましき業をしたり共、向後改て善に歸し良民と成て、人間の中間へ入、只今一命を助け給はる報恩に、何とぞして始同類にて有つる盗共に皆說き聞せ、各改て善に歸し人間に歸りて、刑をまぬかれしむべし、其教に隨ふて改て善に歸したる者有らば、汝證人と成て召れ出て、夫が爲に詫可レ申、然らば其者の罪をゆるし良民にまじへ、歸善の功を稱して、新地等にても相應の場所に賜り農人とするか、品に依て盗賊吟味の役人として、又重て出來る盗賊を改しむべし、若亦終に不レ可レ改盗は汝必不レ可レ動、申立て成敗すべし、此天道への御奉公にて、汝が罪のあがなひ也、さも難レ成者は捨置て、重て捕へたらん時、嚴刑に處して少も許すべからず、縱可レ改と言共君父兄長を殺せし類、其旨を申聞せて死罪遁るべからず、其外の事は元來盗賊せし者なれば、同惡は其所也必責べからず、奉行たる人自反して、元來敎をも不レ施して、人をケやうにそこなひたるを悔、寬恕を以是を處し、且重ねて盗の出來ぬ手立をなすべし、伊勢三郎は盗成しが、改て源義經の功臣と成、野島久留島木海賊たりしと言傳ふれど、其子孫皆國家の干城と成るは、汝も又改て子孫長く國家の干城と可レ成と得心せしめ、納得して其

功有らば、過分に知行を賜りて、盗賊吟味の役人の長として他に歸せしめ、功を褒給ふべし、今迄は盗たる物を運送し、取次たる等の惡黨迄も、是を許して不レ可レ問、先年長崎にて大禁を犯して、抜荷といへる物を買取事を業としける棟梁に、先生金衞門といへる者有捕へ得たる時却て其罪を許給はり、扶持米を被レ下たるより、其類止たるためし近き比の事也、是盗を以盗を止、鐵を（カ）轉して金とするの道也、惣じて天下の事共人間を入替るに非ず、恥を知て惡を入替善心となさしむる理也、惡人變じて善人となれば、一人を不レ刑して盗賊止むべし、惟レ然其德器有人ならでは可レ及に非、故に人を撰事大事也、功利覇術の心有奉行等是を聞ては、必左樣のなまぬるき事にて行事に非ず等とて、ケ樣の役に可レ成人を撰ぶには、剛强に嚴猛成人を尋ね、大成違也、下に付取手の同心等は、成程左樣の者ならでは、時に臨て埒明可らず、少め上だちて物の曲直を糺す人は、中々左樣の事にては其害多かるべし、凡强猛成人は必氣短く人の善惡曲直を得と聞屆る事無、詮も無詞の不禮慮外等を第一に咎、嚴く呵り酷して責痛のゝしる故、其下に有役人皆其風を用て、威勢を振て只嚴敷をよしとす、彼鼠盗の手弱き者共は成程恐れ廻るべし、夫さへ度を失ふに依て、却て當分のがれに實なき事を言もの也、彼頭もする大盗人等は、左樣の事にて中々恐るゝに非ず、縱命をとらるゝ迚も、同類等を指言ものに非ず、責に逢て白狀し、おどしを恐れてうろたゆる事を、命をとらるゝより恥に思ふ情也、夫程の惡人にても、良知は奉行共替る事無れば、得心して不義を恥る道を聞ては、屬服する必速也、所レ謂惡に

強き者は善に強き也、其弱き鼠盜とても、良知は誰にも同じき事なれば、誠を以て糺せば落る時は同落ればとて、責道具を設けて痛め等するは無用の世話也、昔紀伊國に親を殺せし者有て獄にとらはれたる奈波木庵といへる官儒有、業を惺窩藤斂夫に請、此儒者邦君へ申て曰、此極罪の者に孝經を説聞せ見侍らんと願ければ、邦君御免有て、獄に往て孝經を講ずる事三日なりければ、罪人涙を流し只一日も早く至極の刑に處して、我罪を懲し給へと願て、刑に付をたのしみけると也、又過し比小濱明府京都の奉行たる時新助と云ふ儒書の素讀等を教る者有、此者人を殺して其財をうばひ、僧と成て三井寺の邊に隱れ居けるを捕出來たる事あり、儒書等をも人に教ゆる者なれば、人殊更に惡み深かりける程に三條の橋の邊にて三日さらして梟首せらるゝに極りぬ、扨さうされたる次の朝同類申上んと言けり、惣じて罪極ると左樣の事あれば又日を延て聞届る事政府の政事あれば、打捨がたくて其旨を獄吏より小濱明府へ達し侍り、明府も自斷じ給がたくて、京尹佐渡守牧野君へ申されければ、事既に定まりたる上に無用の事なれど折も捨がたければ、そこにてとも角も計ひたまへと仰ければ、其日又奉行所へ彼罪人召出して、明府問給へけるは、汝已に刑せらるゝに當りて、俄に同類を言んと言事、暫時の命を延さんとて血に迷ひけるにやと仰ければ、罪人曰、始我命をしかりし故さまよひけれど、今天罰にてかく捕れ侍れば、遁るべきにあらず、暫時の命延しとて血に迷ふ事にもあらず、同類を隱し侍りけれど、ヶ樣に往還の所にさらされ、諸人に恥見せ侍る上は、同惡をつゝむべき樣も無候故斯申出

も恐給はぬ君は必天の罰をまぬかれずして天下を失ひ給へる驗し、唐日本共に其ためし少からず、或は臣の功有を褒美して、官を進め祿を加へ給ふを喜ばざる者なし、されば人も敬ひ事も滯ぬより、いつしか愼を忘れ功にほこりて、我不ㇾ知おごりぬる人は、君終に怒り賜ひて、却て前の官祿をも合せて失へる人少からず、人君の天の祥瑞有を悅び、人もほめ上れば、我不ㇾ知初の愼を忘賜ひて、果は却て國も失ひ賜ふ類、唐明主日本醍醐帝等是又明證也、夫水火雷風震動の變、天下にあらゆるもの不ㇾ恐事無して、人君殊更御身にとりて修省可ㇾ有二御座一御事也、先天災の至る事徒に來るに非ず、人必是を招く君上の仁惠を察し知て是を下にしくに、吏職其人を不ㇾ得、政事其實を失つて、人を愛するには己が姑息ひゐきを以し、人を刑するには己が怒り惡みを以し、利欲其間に挾む、是を以上下否塞し、君德下に降らず、民の痛上に聞えず、其鬱蒸の氣昇て天の怒りと成、是水火災異の依て至る所也、火は天の怒也、水は天の憂也、萬民怒れば君臣の怒りを動し、萬民憂れば君臣の愁を催す、君臣共に怒らば、天豈いかりなからんや、君民の憂あらば、天豈憂なからんや、天の怒りは、大火と成て、消□者の手にも及べからず、天の憂は大水と成て、堤の堅も不ㇾ可ㇾ止、夫人君として天の憂と怒とを愼み賜はずば、臣下又誰か君の怒と憂とを恐れ愼んや、臣たる者君の怒と憂とを恐れ愼事無に至らば、滅亡將に至らんとす、故に古しへ堯舜の御時より天文の役人を立、天を恐れ愼賜へる餘り、猶更此官を命じて天心の機嫌を伺ひ賜へる也、如ㇾ斯天心の機嫌をうかゞひて、陰陽を爕理するは大臣の職也、

是武夫俗吏腐儒曲學の徒の知る所に非ず、されば水火非常の變は、天此君を愛して戒をたれ賜ふ事なれば、人君こゝにおいて自ら御本心の天に窺せ賜ひ、天に繼の仁政をほどこし賜はゞ、萬民の怨止て火災おこらず、萬民の憂止て然る後君の御憂も止なば、天の御愁も止て洪水おこらず、姦邪吏去て盜賊消すべし、不ㇾ然ば末々の愁へ盡る事無るべし、其大盜、鼠盜、人殺、追剝、放火は人害也、大盜は元より其徒諸國の山中抔に有て、困不困に誰不ㇾ依、民心の騷動によりて、勢を得て徘徊多き事有、勢を得れば年々に多く成てあつかふべし、之を驅事前に述たり、小盜は全く困窮によれり、又民窮すれば良民も盜人と成、饒かなれば賊も良民に歸る人數は盜にも有、意趣も有、色欲も有、俠も有、共に人心の浮動、風俗の衰によりて起る、火付は盜第一にして、或は意趣又は色欲も有、追剝は全く盜の爲にして困窮の第一也、却て之をいはゞ、困窮と女色に依て盛ん也、色は亦困窮の媒と成、凡人を鼓舞して浮動せしめ、財を破り家を亡すの媒をなすは、遊女の多きによれり、遊女町は惡黨の巢穴、狡夫の淵藪也、富人を貧人にし、善人を惡人に化し、人の子を損じ、市井の手代の主人の物掠るの根本也、然ば有來れるも止度事なれ共、急に之を去ば飢寒の者の出來ぬべきも不便なれば、不ㇾ得ㇾ已して漸を以處置可ㇾ有に任ずべし、後世は所繁昌とて、奉行たる人之を許して、町々迄も盛ならしむるは何事ぞや、お江戶音羽町といへる淫坊を、近き比皆停止させ給ひぬれば、上々の御心は難ㇾ有事隱れ無事也、縱少々益有事成共、遊女屋は禽獸よりもおとれる者成に、其者の爲に人の身上を破滅する場所を所々

るに設事は、誠に禽獸を卒て人を食しむるの甚しきならずや、近き比諸士の罪を犯して、家を亡したる幾人と言數もしらず、眼前如斯の害有に心付人の少きは可歎の甚敷也、あゝ夫人君政事の當否は、天より降す所の災祥によらずして、何に依て之をかんがみんや、指當つて能やうに見ゆる事も、道に背ける事は天必之を惡みて、爲に災をくだし給ふ、又當代急にしるし無事も、道に當れる事は天必好し給ひて爲に祥をくだし賜ふ、人言の是非を用ゐて定るは、皆自然の道にあらず、萬世此かねにはづるゝ事なし、唐日本世々の歷史に考へて其證を取べし

正享問答 終

宮崎幸麿
小西武治
校

大正四年四月十六日印刷
大正四年四月十九日發行

日本經濟叢書 卷十一 非賣品

編者 瀧本誠一

發行者 佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者 中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
電話本局三一八五・振替口座東京二六八一〇
日本經濟叢書刊行會

理事 高木龍之丞
鹽谷清作
佐藤卯兵衛

13. **RIKEN RON,** *or evils of Daimyos borrowing money from merchants demonstrated and remedies suggested with a proposal of general governmental loan fund system* 1793

by **TŌYAMA KAGEKATA**

14. **KWASHOKU RON,** *or an essay on the accumulation of wealth, in the form of answers to questions given by a rich gentleman*

by **HATANAKA TACHŪ**
(1734-1797)

15. **SEIKYŌ MONDŌ,** *or answers given to questions on agronomical subjects, on taxation, on civil administration, etc.*

Written about 1731

by **MIWA KIKEN**
(1669-1744)

8. **SHASŌ KŌ,** *or an investigation on the corn granary system* 1772

by **USAMI SHINSUI** (1710-1776)

9. **JIMU DAN,** *or talks on affairs of state written between the years* 1751-1771

by **USAMI SHINSUI** (1710-1776)

10. **KA-GEN,** *or investigations into the nature and source of value and price* 1775

by **MIURA BAIYEN** (1723-1789)

11. **SHUNJŪ SHANICHI SHŌGI,** *or considerations on the origin of agriculture and kindred subjects* Written about 1781

by **ŌYE TADASUKE** (1728-1795)

12. **KEIZAI MONDŌ,** *or politico-economical dialogues, chiefly on luxury, destitution of agricultural population, rural depopulation, relief of the poor, etc.* Written about 1722

by **AN ANONYMOUS** (erroneously attributed to **KUMAZAWA RYŌKAI,** more probably to **ŌDATE UJIHARU**)

4. **SHŌ-KENSATSUYŌ,** *or a summary view of the ways of private economy*
First printed 1770 Reprinted 1787
by **TODA YŌTEN**

5. **SANKA WAKUMON,** *or answers given by a mathematician to questions on money and kindred subjects*
by **AIDA ANMEI**
(1747-1817)

6. **SŪDO SHŌDAN,** *or night talks of a mathematician on money, weight, measure and agronomical institutions*
First printed 1761 Reprinted 1778
by **NISHIMURA YENRI**
(†about 1780)

7. **FU-JIN-GEN,** *or gossips on sundry subjects, with psychological gleanings on human wants, rhythmical elements in economic activities etc.*
by **HORI KEIZAN**
(† 1757)

CONTENTS

of the eleventh volume

BIBLIOTHECA JAPONICA ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XI

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO KANKŌKWAI
1915.